

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 18

東京大学本郷構内の遺跡

経済学研究科棟地点

2023

東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 18

東京大学本郷構内の遺跡

経済学研究科棟地点

2023

東京大学埋蔵文化財調査室



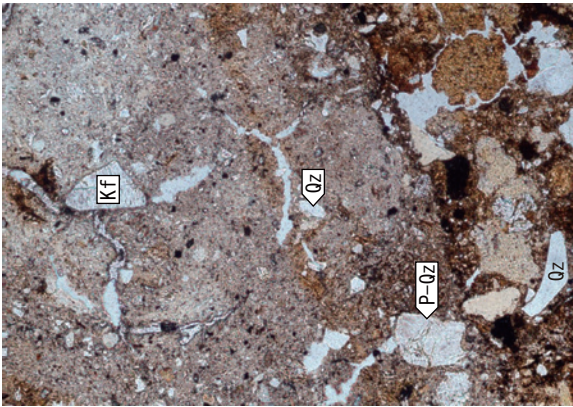
SU107



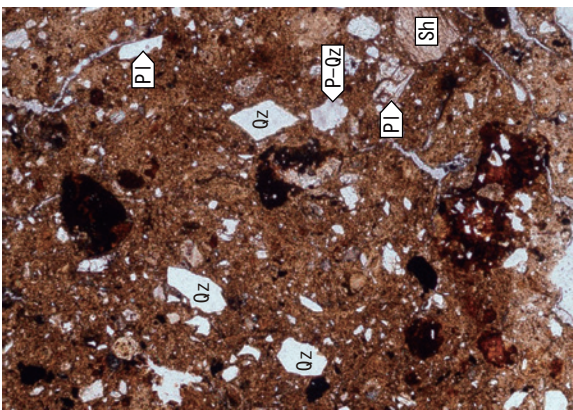
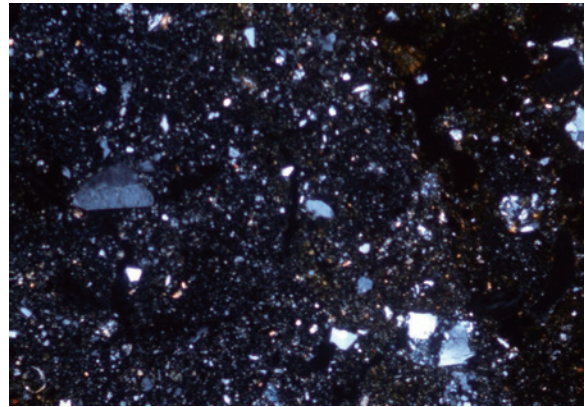
溶姫御殿関連資料 (左)、SB1 根石朱書「下石四百四十」(右)



SK505 出土鬼瓦 (下)、SK505 出土鬼瓦出土状況 (上)



SK509 9層 白色土



SK509 10・11層 白色土層内側

(Qz:石英.Kf:カリ長石.Pl:斜長石.Sh:頁岩.P-Qz:多結晶石英.写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下)

0.5mm

土壤剥片観察

例 言

1. 本報告は、東京大学本郷構内、経済学研究科棟新設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本地点は、これまで東京大学構内遺跡調査研究年報や報告書などで「本 54 総合研究棟（文・経・教・社研）」と記載したものである。地点の略称は、「HES99」とした。出土遺物の注記も略称である「HES99」と記した。
3. 本地点は、東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学本郷構内（東経 139 度 45 分 41 秒、北緯 35 度 42 分 37 秒、世界測地系 9 系 X 座標 -32150.075 ～ -32117.007、Y 座標 -6481.921 ～ -6531.660）に所在している。
4. 本地点は、東京都遺跡地図「文京区 No.47 本郷台遺跡群（本郷七丁目・弥生二丁目、台地、集落・貝塚・大名屋敷、[平]住居・[近]礎石・土坑・地下式土坑・庭園・井戸・溝・杭・石垣 [旧]縄 [弥]古 [平] [近]）」内に位置している。
5. 本地点の調査面積は、1,026㎡である。
6. 調査期間は以下の通りである。
試掘調査 1999 年 1 月 6 ～ 8 日
事前調査 1999 年 5 月 24 日～ 11 月 2 日
7. 本地点の試掘調査・事前調査は、東京大学埋蔵文化財調査室が行い、試掘調査は、堀内秀樹、事前調査は、堀内秀樹、追川吉生が担当した。
8. 本報告の編集は、堀内秀樹、追川吉生、小林照子が行った。
9. 執筆分担は以下の通りである
報告編
第 I 章 堀内秀樹
第 II 章 堀内秀樹
第 III 章 堀内秀樹、追川吉生
第 IV 章 大貫浩子（瓦以外）、石井龍太（瓦）
研究編
追川吉生、堀内秀樹、阿部常樹・江田真毅、石井龍太、パリノサーヴェイ株式会社
10. 発掘調査に伴う図面、写真、出土遺物は、東京大学埋蔵文化財調査室が、駒場Ⅱリサーチキャンパス、茨城県石岡市八郷町柿岡 414 東京大学工学部・工学系研究科柿岡教育研究施設内において、運用、保存、管理している。
11. 遺構の全体図、実測図の作成は、東京大学埋蔵文化財調査室で行った。
12. 遺物の実測は、今井雅子、杉浦あかね、遺物の写真撮影は、青山正昭、デジタルトレース、写真合成、図版作成は、加藤理香、相川美香子が行った。
13. 本書 (PDF 形式) および本書に関わる本文には掲載されていない遺構一覧表 (詳細版)、遺物観察表 (以上、xlsx 形式)、遺構写真、遺物写真 (以上、jpeg 形式) は東京大学埋蔵文化財調査室公式サイト (<http://www.aru.u-tokyo.ac.jp/index.htm>) に収録した。

14. 発掘調査および報告書の作成にあたり、下記の方々からご教示を得た。記して感謝を表したい。(敬称略、五十音順)

安芸毬子、阿部常樹、成田涼子、宮崎勝美

東京大学人文社会系研究科考古学研究室、東京大学経済学部、東京大学施設部、加藤建設株式会社、
パリノサーヴェイ株式会社、文京区教育委員会

15. 発掘調査・整理作業参加者

発掘調査(所属は発掘調査時)

阿部雅史、石丸敦史、飯塚隆、門脇誠二、木内智康、笹田朋孝、長谷部美奈子、森本幹彦(東京大学)、萩野谷正宏(法
政大学)

加藤建設株式会社

整理作業

青山正昭、安芸毬子、阿部常樹、石井龍太、今井雅子、大貫浩子、加藤理香、香取祐一、小林照子、坂野貞子、渡辺
法彦(埋蔵文化財調査室)

凡 例

1. 本文中に記載した遺構の略号は、以下の通りである。

SA：堀跡 SB：基礎列 SD：溝 SE：井戸 SF：炉跡 SK：土坑 SP：ピット SU：地下室
SX：性格不明の遺構

2. 本報告の実測図の縮尺は、それぞれの図版に記した。遺物図版の縮尺は基本的に陶磁器類が1/3、瓦が1/6であるが、これと異なる縮尺の場合のみ倍率表記を行った。

3. 出土遺物の写真は、基本的に実測図にはめ込み合成を行った。全体の写真は東京大学埋蔵文化財調査室公式サイトに掲載している (<http://www.aru.u-tokyo.ac.jp/index.htm>)。

4. 本文、挿図、観察表、写真で使用した遺物番号は、共通の番号を使用した。

5. 遺物図版に使用している記号は、以下のことを示している。

- ・▲は、高台、見込みなどの釉際を表している。
- ・\—／は、口唇部の口錆を表している。
- ・遺物中心線上下の破線は、それぞれ推定口径、推定底径を表している。
- ・—は、断面を表している。
- ・挿鉢の↓—↓は、体部挿目の範囲を表している。
- ・口唇部の\←→／は、敲打痕を表している。

6. 本文中に記載した陶磁器・土器類は、「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類」（いわゆる東大分類）の最新バージョンである『医学部附属病院入院棟 A 地点』で示した分類（東京大学埋蔵文化財調査室 2016）、および「東京大学構内遺跡出土土人形・玩具の分類」（安芸毬子・小林照子・堀内秀樹 2012）に準拠している。

本地点からは、コンテナ箱にして 186 箱の遺物を取り上げた。これは調査時に必要と判断された出土状況などの記録以外に、遺物の取り上げは行わなかった瓦の細片、礎石や組石などに使用された石やその後込めに使用された割石、壁土、漆喰、炭化物、火山灰あるいは取り上げる際に崩壊するような一部の遺物を除外した出土遺物の総量である。この中には、胎質別に陶磁器・土器類、人形・玩具類、瓦、金属製品、石製品、木製品、骨角製品、ガラス製品、自然遺物等が含まれる。本報告では自然遺物については人工遺物と分けて記述を行った。人工遺物については遺構別に遺構番号降順に記載した。

遺物実測図は、出土遺物全てを行うことは量的に不可能であり、本報告では出土遺構ごとにその年代や性格などを代表すると判断される遺物を中心に、完形率、希少性などを含めて図化選択を行った。

7. 本地点の調査では、近隣の調査区である医学部教育研究棟地点（東京大学埋蔵文化財調査室 2019、同 2020）と合わせた任意のグリッドを設定して行ったが、本書では、その後に作成した東京大学構内遺跡グリッド（東京大学埋蔵文化財調査室 2017）を用いて表記した。

○胎質

J (磁器) T (陶器) D (土器)

○生産地

A - 輸入陶磁器

- A1 景德鎮窯系
- A2 漳州窯系
- A3 德化窯系
- A4 龍泉窯系
- A5 宜興窯系
- A6 朝鮮
- A7 ベトナム
- A8 ヨーロッパ
- A9 福建・広東系
- A10 西アジア

B - 肥前系

C - 瀬戸・美濃系

D - 京都・信楽系

E - 備前系

F - 志戸呂系

G - 常滑系

H - 萩系

I - 万古系

J - 大堀・相馬系

K - 丹波系

L - 堺系

M - 益子・笠間系

N - 九谷系

O - 壺屋系

P - 淡路系

Q - 江戸在在地系*

R - 三田系

S - 飯能系

T - 薩摩系

Z - 不明

○器種

- | | | | | |
|-----------|----------|-----------|-----------|----------|
| 1. 碗 | 2. 皿・平鉢 | 3. 大皿・大皿鉢 | 4. 爛徳利 | 5. 鉢 |
| 6. 坏 | 7. 猪口 | 8. 仏飯器 | 9. 香炉・火入れ | 10. 瓶 |
| 11. 御神酒徳利 | 12. 油壺 | 13. 蓋物 | 14. 筆立て | 15. 壺・甕 |
| 16. 急須 | 17. 爛鍋 | 18. 合子 | 19. 水滴 | 20. 蓮華 |
| 21. 植木鉢 | 22. 花生 | 23. 片口鉢 | 24. 灰落し | 25. 鬢水入れ |
| 26. 茶入れ | 27. 水注 | 28. 漚瓶 | 29. 搦鉢 | 30. 餌入れ |
| 31. 火鉢 | 32. 柄杓 | 33. 鍋 | 34. 土瓶 | 35. 戸車 |
| 36. ちろり | 37. 薬研 | 38. 手焙り | 39. おろし皿 | 40. 油受け皿 |
| 41. 油徳利 | 42. 行平鍋 | 43. 十能 | 44. ひょうそく | 45. 瓦燈 |
| 46. カンテラ | 47. ほうろく | 48. 七輪 | 49. 涼炉 | 50. 五徳 |
| 51. 塩壺 | 52. 燭台 | 53. 蒸し器 | 54. 懐炉 | |
| 63. あんか | 64. 煙硝搦鉢 | 65. 乳棒 | 66. 硯屏 | 67. 釜 |

* 本報告では人形・玩具のみで使用

東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器分類 Ver.4.1 (■は新規、▲は Ver.4 で修正を加えたもの。各分類の詳細は年報 10 参照)

- ◎ J A 1 - - 景德鎮窯系
- ◎ J A 2 - - 漳州窯系
- ◎ J A 3 - - 徳化窯系
- ◎ J A 4 - - 龍泉窯系
- ◎ J A 6 - - 朝鮮
- ◎ J A 8 - - ヨーロッパ
- ◎ J A 9 - - 福建・広東系

- ◎ J B 群 - - 肥前系磁器
 - 1 - - 碗
 - ・ J B - 1 - a (高台断面が幅広「U」字状、いわゆる初期伊万里)
 - ・ 〃 b (底部無軸)
 - ・ 〃 c (高台断面三角の製品、長吉谷窯指標)
 - ・ 〃 d (高台断面シャープな「U」字状で高台高が高い、蓋付有、高尾窯Ⅳ～Ⅵ層指標)
 - ・ 〃 e (高台断面シャープな「U」字状で高台高が低い、蓋付有)
 - ・ 〃 f (高台径が小さい半球形の薄手碗)
 - ・ 〃 g (絵付・作りの粗雑な碗)
 - ・ 〃 i (高台高が高、慣用名：小広東碗)
 - ・ 〃 j (高台径が小さい腰の張る碗、慣用名：小丸碗)
 - ・ 〃 k (大振りの筒形碗、いわゆる初期伊万里)
 - ・ 〃 l (筒形碗)
 - ・ 〃 m (慣用名：広東碗、蓋付有)
 - ・ 〃 n (端反形碗、蓋付有)
 - ・ 〃 o (腰が張り、体部が直立する小振りの碗、慣用名：湯呑碗)
 - ・ 〃 p (高台から直線的に開く薄手の碗、蓋付有)
 - ・ 〃 q (高台が「ハ」の字状に開く碗、大振りで腰が張る、蓋付有)
 - ・ 〃 r (朝顔形、蓋付有)
 - ▲ ・ 〃 s (丸碗形、幅広高台)
 - ・ 〃 t (体部が直線的に開く大振りの碗、内側に主文様、慣用名：うがい茶碗)
 - ・ 〃 u (JB- 1 - d のやや小振りの碗形、コンニャク判が多い)
 - ・ 〃 v (梅樹文が描かれた粗製の碗)
 - ・ 〃 w (高台径が大きく腰の張る碗、コンニャク判が多い)
 - ・ 〃 x (見込み蛇ノ目釉剥ぎ、粗製)
 - ▲ ○ 2 - - 皿・平鉢
 - ・ J B - 2 - a (高台断面が幅広「U」字状、いわゆる初期伊万里)
 - ・ 〃 b (高台断面三角で高台径が小さい、ダンバギリ窯指標)
 - ・ 〃 c (高台断面三角で高台径が大き、柿右衛門B窯など指標)
 - ・ 〃 d (高台断面がシャープな「U」字状で上質の製品、南川原窯ノ辻窯指標)
 - ・ 〃 e (高台断面がシャープな「U」字状)
 - ・ 〃 f (やや深く、腰が張る、多くは輪花に成形)
 - ・ 〃 g (絵付・作りが粗雑な皿、扇面文様が多い)
 - ・ 〃 h (蛇ノ目高台、いわゆる初期伊万里)
 - ・ 〃 i (蛇ノ目凹形高台で高台高が高い)
 - ・ 〃 j (蛇ノ目凹形高台で高台高が低い)
 - ・ 〃 k (見込み蛇ノ目釉剥ぎで底部無軸)
 - ▲ ・ 〃 l (見込み蛇ノ目釉剥ぎで高台径が小)
 - ▲ ・ 〃 m (見込み蛇ノ目釉剥ぎで高台径が大)
 - ・ 〃 n (鍋島)
 - ・ 〃 o (器高が低く腰が張る皿)
 - ・ 〃 p (浅手で口縁部外反、輪花、墨弾き雲形文が多い、志田窯指標)
 - ・ 〃 q (高台断面が「U」字状、輪花に成形、見込み全面に一枚絵)
 - ・ 〃 r (糸切細工の貼付高台)
 - ・ 〃 s (初期伊万里の系統で内山の影響を受けた外山で作られた粗製品、広瀬向窯など指標)
 - ・ 〃 t (高台内蛇ノ目釉剥ぎ)
 - ▲ ○ 3 - - 大皿・大平鉢
 - ▲ ・ J B - 3 - a (いわゆる初期伊万里)
 - ▲ ・ 〃 b (「U」字状の高台)
 - ・ 〃 c (高台内蛇ノ目釉剥ぎ)
 - ・ 〃 d (蛇ノ目凹形高台)
 - ・ 〃 e (浅手で口縁部外反、輪花、墨弾き雲形文が多い、志田窯指標)
 - ・ 〃 f (高台断面が三角形や逆台形)
 - 4 - - 燗徳利
 - ▲ ○ 5 - - 鉢
 - ・ J B - 5 - a (高台断面が幅広「U」字状、いわゆる初期伊万里)
 - ・ 〃 b (高台断面がシャープな「U」字状)
 - ・ 〃 c (高台内蛇ノ目釉剥ぎ、青磁に多い)
 - ・ 〃 d (蛇ノ目凹形高台)
 - ・ 〃 e (慣用名：八角鉢)
 - ・ 〃 f (高台断面三角形)
 - ・ 〃 g (鍋島)
 - ・ 〃 h (見込み蛇ノ目釉剥ぎ)
 - 6 - - 坏
 - ・ J B - 6 - a (丸形)
 - ・ 〃 b (端反形)
 - ・ 〃 c (極めて薄手)
 - ・ 〃 d (腰折れ直立形)
 - ・ 〃 e (型作り、慣用名：紅皿)
 - ・ 〃 f (高台径が小さい半球形の薄手坏)
 - 7 - - 猪口
 - ・ J B - 7 - a (底部蛇ノ目凹形高台状)
 - ・ 〃 b (底部輪高台状)
 - 8 - - 仏飯器
 - ・ J B - 8 - a (脚部のえぐりが深い)
 - ・ 〃 b (脚部のえぐりが浅い)
 - ・ 〃 c (脚部のえぐりが浅く、壘付外周面取り)
 - 9 - - 香炉・火入れ
 - ・ J B - 9 - a (底裏に円盤状の露胎部)
 - ・ 〃 b (底部蛇ノ目釉剥ぎ)
 - ・ 〃 c (高台状の露胎部)
 - ・ 〃 d (べた底)
 - ・ 〃 e (蛇ノ目凹形高台)
 - ・ 〃 f (蛇ノ目高台)
 - ・ 〃 g (底部・高台内無軸)
 - 10 - - 瓶
 - ・ J B - 10 - a (大型長頸瓶)
 - ・ 〃 e (いわゆる初期伊万里、口縁部が朝顔形に開く)
 - 11 - - 御神酒徳利
 - ・ J B - 11 - a (瓶子形)
 - ・ 〃 b (鶴首形)
 - ・ 〃 c (筒形)
 - 12 - - 油壺
 - 13 - - 蓋物
 - ・ J B - 13 - a (丸形)
 - ・ 〃 b (筒形)

- ・ ♪ c (段重)
- ・ ♪ d (型作)

- 15 -- 壺・甕
- 16 -- 急須
- 18 -- 合子

- ・ J B - 18 - a (扁平な球形)
- ・ ♪ b (筒形)

- 19 -- 水滴
- 20 -- 蓮華
- 21 -- 植木鉢
- 22 -- 花生

- ○ 23 -- 片口鉢
- 24 -- 灰落し
- 27 -- 水注

- ・ J B - 27 - a (銚子形、釣手)
- 29 -- 播鉢

- ○ 30 -- 餌入れ
- 35 -- 戸車
- ○ 52 -- 燗台

◎ J C 群 -- 瀬戸・美濃系磁器

- 1 -- 碗

- ・ J C - 1 - a (丸碗、蓋付有)
- ・ ♪ b (筒形碗)
- ・ ♪ c (蓋付有、慣用名：広東碗)
- ・ ♪ d (端反形碗、蓋付有)
- ・ ♪ e (腰が張り、体部が直立する小振りの碗、慣用名：湯呑碗)
- ・ ♪ f (高台から直線的に開く薄手の碗、蓋付有)

- ・ ♪ g (慣用名：小丸碗)

- ▲ ○ 2 -- 皿・平鉢

- ・ J C - 2 - a (蛇ノ目凹形高台)
- ・ ♪ b (輪高台)
- ・ ♪ c (蛇ノ目高台)
- ・ ♪ d (そり皿、木型打込など)
- ・ ♪ e (陽刻)
- ・ ♪ f (陰刻)

- 4 -- 欄徳利

- ▲ ○ 5 -- 鉢

- 6 -- 坏

- ・ J C - 6 - a (丸形)
- ・ ♪ b (端反形)
- ・ ♪ c (筒形)
- ・ ♪ d (極めて薄手)
- ・ ♪ e (寿文坏)
- ・ ♪ f (体部が直線的に開く)
- ・ ♪ g (型作り、慣用名：紅皿)

- 7 -- 猪口

- 8 -- 仏飯器

- 9 -- 香炉・火入れ

- 10 -- 瓶

- 11 -- 御神酒徳利

- ・ J C - 11 - a (瓶子形)
- ・ ♪ b (鶴首形)

- 12 -- 油壺

- 13 -- 蓋物

- 15 -- 壺・甕

- 16 -- 急須

- 18 -- 合子

- 19 -- 水滴

- 20 -- 蓮華

- 21 -- 植木鉢

- 22 -- 花生

- 34 -- 土瓶

- ○ 36 -- ちろり

◎ J N 群 -- 九谷系磁器

- 1 -- 碗

- ▲ ○ 2 -- 皿・平鉢

- 6 -- 坏

■ ◎ J R -- 三田系磁器

- ○ 2 -- 皿・平鉢

- ○ 5 -- 鉢

- ○ 13 -- 蓋物

■ ◎ J Z 群 -- 生産地不明

- 1 -- 碗

- 2 -- 皿・平鉢

- 6 -- 坏

陶器分類

- ◎ T A 5 -- 宜興窯系

- ◎ T A 6 -- 朝鮮

- ◎ T A 7 -- ベトナム

- ◎ T A 8 -- ヨーロッパ

- ◎ T A 9 -- 福建・広東系

- ◎ T A 10 -- 西アジア

◎ T B 群 -- 肥前系陶器

- 1 -- 碗

- ・ T B - 1 - a (大振りの丸碗、慣用名：呉器手)

- ・ ♪ b (外面主文様、慣用名：京焼風陶器)

- ・ ♪ c (内面主文様、慣用名：京焼風陶器)

- ・ ♪ d (刷毛目丸碗、渦巻状の刷毛目)

- ・ ♪ f (陶胎染付)

- ・ ♪ g (刷毛目丸碗、打・波状・鋸歯状の刷毛目)

- ・ ♪ h (刷毛目端反形碗)

- ▲ ・ ♪ i (青緑・灰釉、丸形碗、内野山窯指標)

- ・ ♪ j (卵手)

- ・ ♪ k (象嵌の施された碗、慣用名：三鳥手)

- ▲ ○ 2 -- 皿・平鉢

- ▲ ・ T B - 2 - a (青緑・灰釉、輪剥、内野山窯指標)

- ▲ ・ ♪ b (灰・青緑釉砂目)

- ・ ♪ c (慣用名：京焼風陶器)

- ・ ♪ d (透明釉砂目、内野山窯指標)

- ・ ♪ e (胎土目)

- ・ ♪ f (陶体染付)

- ・ ♪ g (刷毛目)

- ・ ♪ h (白土・鉄などで象嵌の施された皿・平鉢、慣用名：三鳥手)

- ・ ♪ i (いわゆる呉器手碗のような胎土、釉調を有す)

- ○3 -- 大皿・大平鉢
 - ・ T B - 3 - a (刷毛目)
 - ・ 〃 b (白土・鉄などで象嵌の施された大皿・大平鉢、慣用名:三鳥手)
 - ・ 〃 c (慣用名:京焼風陶器)
 - ・ 〃 d (内野山窯指標)
- ▲ ○5 -- 鉢
 - ・ T B - 5 - a (刷毛目鉢)
 - ・ 〃 b (白土・鉄などで象嵌の施された鉢、慣用名:三鳥手)
 - ・ 〃 c (慣用名:京焼風陶器)
 - ▲ ・ 〃 d (青緑・灰釉、内野山窯指標)
 - ・ 〃 e (いわゆる呉器手碗のような胎土、釉調を有す)
- 6 -- 坏
- ○8 -- 仏飯器
- 9 -- 香炉・火入れ
 - ・ T B - 9 - a (陶胎染付)
 - ・ 〃 b (慣用名:京焼風陶器)
 - ・ 〃 c (刷毛目)
 - ・ 〃 d (青緑釉)
- 10 -- 瓶
- 13 -- 蓋物
 - ・ T B - 13 - a (陶胎染付)
 - ・ 〃 b (刷毛目)
 - ・ 〃 c (慣用名:京焼風陶器)
- 15 -- 壺・甕
 - ・ T B - 15 - a (ロクロ成形)
 - ・ 〃 b (タタキ成形)
- ○22 -- 花生
- 23 -- 片口鉢
 - ・ T B - 23 - a (深いタイプ、刷毛目、底部鉄釉)
 - ・ 〃 b (浅いタイプ、刷毛目、蛇ノ目剥き)
- ○27 -- 水注
- 29 -- 播鉢
 - ・ T B - 29 - a (内外面全釉)
 - ・ 〃 b (口縁部のみ施釉)
- ○31 -- 火鉢
- ◎ T C 群 -- 瀬戸・美濃系陶器
 - 1 -- 碗
 - ・ T C - 1 - a (天目碗)
 - ・ 〃 b (白天目)
 - ・ 〃 c (灰釉薄掛け丸碗)
 - ・ 〃 d (灰釉に簡略な山水の呉須絵、慣用名:御室碗)
 - ・ 〃 f (腰が張る二段の段を有する碗、渦巻高台、灰釉鉄釉流し)
 - ・ 〃 g (灰釉、「ハ」の字状に開く、柳文の鉄絵が多い)
 - ・ 〃 h (丸碗、慣用名:太白手)
 - ・ 〃 i (筒形碗、慣用名:太白手)
 - ・ 〃 j (慣用名:広東碗、太白手)
 - ・ 〃 k (体部中位に大きな凹み有、灰釉)
 - ・ 〃 l (半筒形碗、慣用名:せんじ)
 - ・ 〃 m (半球形の小振りの碗、笹文など多い、京焼風)
 - ・ 〃 n (平碗、見込みに文様、京焼風)
 - ・ 〃 o (慣用名:尾呂茶碗)
 - ・ 〃 p (漆黒釉に長石釉散らし、慣用名:拳骨茶碗)
 - ・ 〃 q (錆釉斑状、横位や波状の沈線が多い)
 - ・ 〃 r (トビガンナ状の押形文、掛分け、慣用名:鑑茶碗)
 - ・ 〃 s (刷毛目)
 - ・ 〃 u (内面・外面上半灰釉、外面下半錆釉、慣用名:腰錆碗)
 - ・ 〃 v (半筒形碗、灰釉柿釉掛分け)
 - ・ 〃 w (杉形碗、若松文、慣用名:小杉茶碗)
 - ・ 〃 x (緑釉丸碗)
 - ・ 〃 y (口縁部端反、蓋付有、白化粧に鉄絵など、慣用名:奈良茶碗)
 - ▲ ・ 〃 z (端反形碗、内面白化粧、外面に白土鉄絵)
 - ・ 〃 aa (灰釉丸碗)
 - ・ 〃 ab (慣用名:小丸碗、太白手)
 - ・ 〃 ac (灰釉錆釉掛分け、長石釉散らし、体部に凹み有)
 - ・ 〃 ad (筒形碗、漆黒釉錆釉掛分け)
 - ・ 〃 ae (体部灰釉、口縁部緑釉・瑠璃釉などの掛分け)
 - ▲ ・ 〃 af (慣用名:広東碗、内面白化粧、外面に白土鉄絵)
 - ・ 〃 ag (鉄釉丸碗)
 - ・ 〃 ah (鉄釉平碗)
 - ・ 〃 ai (鉄釉筒形碗)
 - ・ 〃 aj (長石釉丸碗)
 - ・ 〃 ak (長石釉平碗)
 - ・ 〃 al (長石釉筒形碗)
 - ・ 〃 am (高台高が高、高台断面は台形を呈す、窯ヶ根窯など指標)
 - ・ 〃 an (杏茶碗)
- ▲ ○2 -- 皿・平鉢
 - ・ T C - 2 - a (灰釉丸皿、ピン痕有)
 - ・ 〃 b (灰釉丸皿、輪状直重ね痕有)
 - ・ 〃 c (長石釉丸皿)
 - ・ 〃 e (灰釉摺絵皿、鉄絵、白泥による施文、慣用名:御深井)
 - ・ 〃 f (幅広高台、鉄・呉須による絵付多、慣用名:石皿)
 - ・ 〃 g (内側面鉄絵扁平渦巻き文、慣用名:馬ノ目皿)
 - ・ 〃 h (染付皿、輪高台、慣用名:太白手)
 - ・ 〃 i (型皿、高台有)
 - ▲ ・ 〃 j (鉄絵皿、ピン痕多)
 - ・ 〃 k (菊皿、外面しのぎ有、黄瀬戸釉緑釉流し)
 - ・ 〃 l (菊皿、外面しのぎ無、黄瀬戸釉緑釉流し)
 - ▲ ・ 〃 m (輪禿皿)
 - ▲ ・ 〃 n (口縁部または体部をひだ状成形、ヒダ皿)
 - ▲ ・ 〃 o (油皿、直重ね)
 - ・ 〃 p (把手付油皿、口縁部内側把手貼付)
 - ・ 〃 q (灰釉丸皿、高台無)
 - ・ 〃 r (見込み沈線・圏線文様、緑釉沈線文皿、ピン痕、慣用名:総織部)
 - ・ 〃 s (鈔緑、口縁部施釉、鉄絵文様、直重ね、慣用名:志野織部)
 - ・ 〃 t (染付皿、蛇ノ目凹形高台、慣用名:太白手)
 - ・ 〃 u (輪禿平鉢、口縁部折線状多)
 - ・ 〃 v (鉄絵、緑釉流し、口縁部外反、慣用名:笠原鉢)
 - ・ 〃 w (灰釉緑釉流し、中央印花、内側側面波状櫛描文、慣用名:黄瀬戸鉢)
 - ・ 〃 x (型皿、脚付)
 - ・ 〃 y (端反皿、ピン痕多)
 - ・ 〃 z (鉄釉丸皿、ピン痕多)
- ○3 -- 大皿・大平鉢
 - ・ T C - 3 - a (鉄絵、緑釉流し、口縁部外反、慣用名:笠原鉢)
 - ・ 〃 b (灰釉緑釉流し、中央印花、内側側面波状櫛描文、慣用名:黄瀬戸鉢)
 - ・ 〃 c (幅広高台、鉄・呉須による絵付多、慣用名:石皿)
 - ・ 〃 d (内側面鉄絵扁平渦巻き文、慣用名:馬ノ目皿)
- 4 -- 欄徳利

▲ ○5 -- 鉢

- ▲ ・ ♪ f (水盥、灰釉、口縁部一箇所凹み)
- ・ ♪ h (手鉢)
- ・ ♪ j (長石釉)
- ・ ♪ k (緑釉、鉄絵、元屋敷窯、窯ヶ根窯など指標)
- ・ ♪ l (こね鉢)

- ・ ♪ m (刷毛目)

○6 -- 坏

○8 -- 仏飯器

○9 -- 香炉・火入れ

- ・ TC-9-a (灰釉)
- ・ ♪ b (鉄釉)
- ・ ♪ c (灰釉、摺絵、慣用名：御深井)
- ・ ♪ d (褐釉、半菊状のしのぎ)
- ・ ♪ e (鉄釉灰釉掛分け、横位の沈線に縦位のしのぎ)

- ▲ ・ ♪ f (袴腰)
- ・ ♪ g (筒形)

○10 -- 瓶

- ・ TC-10-a (二合半灰釉徳利、底部釉拭取り)
- ・ ♪ c (二合半灰釉徳利、つけ掛け)
- ・ ♪ d (五合徳利)
- ・ ♪ e (一升徳利)
- ・ ♪ f (舟徳利、漆黒釉または柿釉)
- ・ ♪ g (柿釉徳利、献上備前写し)
- ・ ♪ h (らっきょう形)
- ・ ♪ k (織部徳利)

○12 -- 油壺

○13 -- 蓋物

○15 -- 壺・甕

- ・ TC-15-a (柿釉、底部及び器面下端露胎、平緑、慣用名：赤津半胴・銭甕)
- ・ ♪ b (柿釉灰釉流し、底部及び器面下端露胎、口縁部外反)
- ・ ♪ c (水甕、灰釉に鉄釉や緑釉を流す、流水状の文様、斑状の刺突)
- ・ ♪ d (緑釉、貼付文)
- ・ ♪ e (ベタ底)

- ・ ♪ f (高台有、肩衝、有耳多し)

○18 -- 合子

○19 -- 水滴

○21 -- 植木鉢

○22 -- 花生

- ・ TC-22-a (盤口形)
- ・ ♪ b (朝顔形)

○23 -- 片口鉢

- ・ TC-23-a (筒形)
- ・ ♪ b (丸碗形)
- ・ ♪ c (「ハ」の字状に開く)

○24 -- 灰落し

- ・ TC-24-a (鉄釉灰釉掛分け、横位の沈線に縦位のしのぎ)
- ・ ♪ b (長筒形)

○25 -- 鬚水入れ

○26 -- 茶入れ

○27 -- 水注

- ・ TC-27-a (褐釉、底部露胎、らっきょう形、橋状把手)
- ・ ♪ b (円筒形の体部に注口、取手、蓋付、慣用名：汁次)
- ・ ♪ c (灰釉、摺絵、慣用名：御深井)
- ・ ♪ d (灰釉、らっきょう形、橋状把手)

○28 -- 漫瓶

○29 -- 播鉢

○30 -- 餌入れ

○31 -- 火鉢

- ・ TC-31-a (瓶掛)
- ・ ♪ b (風炉)

○34 -- 土瓶

○38 -- 手焙り

○39 -- おろし皿

○40 -- 油受け皿

- ▲ ・ TC-40-b (脚付)
- ・ ♪ c (脚無、錆釉)
- ・ ♪ d (脚無、灰釉)
- ・ ♪ e (高い受付)

○41 -- 油徳利

○44 -- ひょうそく

- ・ TC-44-a (脚付)

■ ○64 -- 煙硝播

■ ○67 -- 釜

◎TD群 -- 京都・信楽系陶器

○1 -- 碗

- ・ TD-1-b (高台径が小さい半球形の碗、薄手)

- ▲ ・ ♪ c (丸碗)

- ・ ♪ d (杉形碗、鉄または呉須で若杉文、慣用名：小杉茶碗)

- ・ ♪ e (端反形、口縁部緑釉体部灰釉の掛分け)

- ・ ♪ g (端反形、小振りで器面には細かい貫入)

- ・ ♪ h (平碗、多くは見込みに銕絵染付)

- ▲ ・ ♪ i (半筒形)

- ・ ♪ j (筒形、多くは鉄絵で文様)

- ・ ♪ k (体部中位に大きな凹み有、灰釉)

- ・ ♪ l (軟質施釉)

- ・ ♪ n (胴締め、慣用名：大福)

- ・ ♪ o (慣用名：小福)

- ・ ♪ p (天目形)

▲ ○2 -- 皿・平鉢

- ・ TD-2-a (見込み櫛目有、灯明皿、多くは三箇所ピン痕)

- ・ ♪ b (見込み櫛目無、灯明皿、多くは三箇所ピン痕)

- ・ ♪ c (輪高台)

○4 -- 調徳利

▲ ○5 -- 鉢

○6 -- 坏

○9 -- 香炉・火入れ

- ・ TD-9-a (型作り)

- ・ ♪ b (蛇ノ目高台、灰釉、体部に強いロクロ目、口縁部内折)

- ・ ♪ c (筒形)

○10 -- 瓶

○13 -- 蓋物

- ・ TD-13-a (丸碗形の身)

- ・ ♪ b (段重)

- ・ ♪ c (半筒形の身)

- ・ ♪ d (格子状のしのぎ、梅花文)

○14 -- 筆立

○15 -- 壺・甕

- ・ TD-15-a (慣用名：腰白茶壺、三耳壺、鉄釉灰釉掛分け)

- 18 -- 合子
 - ・TD-18-a (扁平な球形)
 - ・ b (筒形)

○19 -- 水滴

○22 -- 花生

■ ○23 -- 片口鉢

○24 -- 灰落し

○25 -- 鬢水入れ

■ ○26 -- 茶入れ

○27 -- 水注

・TD-27-a (銚子形、釣手)

・ d (筒形)

○32 -- 柄杓

▲ ○34 -- 土瓶

・TD-34-a (鉄砲口)

■ b (S字状注口)

○36 -- ちろり

・TD-36-a (長筒形、横手)

・ b (段筒形、横手)

○40 -- 油受け皿

・TD-40-a (脚付、灰釉)

・ b (脚無、灰釉)

○46 -- カンテラ

◎TE群 -- 備前系陶器

■ ○1 -- 碗

▲ ○2 -- 皿・平鉢

・TE-2-a (ロクロ成形)

■ b (型皿)

▲ ○5 -- 鉢

○10 -- 瓶

▲ a (かま形、薄作、鶴首)

■ b (底部付近に最大径を有す、体部三角形)

○12 -- 油壺

○15 -- 壺・甕

○22 -- 花生

○29 -- 搦鉢

○37 -- 薬研

○40 -- 油受け皿

○41 -- 油德利

■ ○65 -- 乳棒

◎TF群 -- 志戸呂系陶器

○1 -- 碗

▲ ○2 -- 皿・平鉢

■ ○9 -- 香炉・火入れ

○10 -- 瓶

○13 -- 蓋物

○15 -- 壺・甕

○29 -- 搦鉢

○40 -- 油受け皿

◎TG群 -- 常滑系陶器

○15 -- 壺・甕

◎TH群 -- 萩系陶器

○1 -- 碗

・TH-1-a (薬灰釉開口碗、渦巻高台)

・ b (ピラ掛け、渦巻高台)

◎TI群 -- 万古系陶器

○1 -- 碗

○16 -- 急須

○34 -- 土瓶

◎TJ群 -- 大堀・相馬系陶器

○1 -- 碗

○6 -- 坏

◎TK群 -- 丹波系陶器

■ ○5 -- 鉢

○15 -- 壺・甕

○29 -- 搦鉢

◎TL群 -- 堺系陶器

○29 -- 搦鉢

◎TM群 -- 笠間・益子系陶器

○29 -- 搦鉢

■◎TN群 -- 九谷系陶器

○2 -- 皿・平鉢

◎TO群 -- 壺屋系陶器

○10 -- 瓶

○15 -- 壺・甕

■◎TP群 -- 淡路系陶器

○2 -- 皿・平鉢

○6 -- 坏

○20 -- 蓮華

■◎TS群 -- 飯能系陶器

○42 -- 行平鍋

■◎TT群 -- 薩摩系陶器

○1 -- 碗

○34 -- 土瓶

◎TZ群 -- 生産地不明

○1 -- 碗

▲ ○2 -- 皿・平鉢

■ ○4 -- 爛德利

▲ ○5 -- 鉢

○6 -- 坏

○9 -- 香炉・火入れ

■ ○10 -- 瓶

■ ○15 -- 壺・甕

○16 -- 急須

○17 -- 爛鍋

○20 -- 蓮華

- 21 -- 植木鉢
- ・ T Z - 21 - a (軟質施釉)
- ○ 22 -- 花生
- ○ 25 -- 鬢水入れ
- ○ 27 -- 水注
- ○ 31 -- 火鉢
- 29 -- 播鉢
- 33 -- 鍋
- ・ T Z - 33 - a (紐状把手貼付、柿釉)
- ・ ♪ b (軟質施釉)
- 34 -- 土瓶
- ・ T Z - 34 - a (青緑釉)
- ・ ♪ b (白土染付)
- ・ ♪ c (三彩)
- ・ ♪ d (糸目)
- ・ ♪ e (鉄釉)
- ・ ♪ f (鮫釉)
- ・ ♪ g (灰釉)
- ・ ♪ i (イッチン)
- ・ ♪ k (うのふ釉、やや紫色に発色する)
- ・ ♪ l (しのぎ、鉄釉)
- ・ ♪ n (軟質施釉)
- 42 -- 行平鍋
- ・ T Z - 42 - a (灰釉)
- ・ ♪ c (トビガンナ)
- ・ ♪ d (軟質施釉)
- 53 -- 蒸し器

土器分類

■◎DD群 -- 京都・信楽系土器

- 16 -- 急須
- 49 -- 涼炉
- 50 -- 五徳

◎DZ群 -- 生産地不明

- ▲ ○ 2 -- 皿・平鉢
- ▲ ・ D Z - 2 - a (小林C類・E類、梶原II b群)
- ▲ ・ ♪ b (小林F類、梶原II c群)
- ・ ♪ c (磨きかわらけ、底部に渦巻状の沈線)
- ・ ♪ d (磨きかわらけ、底部平滑)
- ・ ♪ e (耳かわらけ)
- ・ ♪ f (へそかわらけ)
- ・ ♪ g (手づくね)
- ・ ♪ h (透明釉)
- ・ ♪ i (底部穿孔)
- ▲ ・ ♪ j (見込みに浮文)
- ・ ♪ k (底径大、器壁厚、小林B類、梶原II a群を含む)
- ▲ ○ 5 -- 鉢
- ・ D Z - 5 - a (土師質、端反)
- ・ ♪ d (えぐり)
- 9 -- 香炉・火入れ
- 15 -- 壺・甕
- ・ D Z - 15 - a (硬質瓦質蓋付壺)
- 21 -- 植木鉢

- ・ D Z - 21 - a (土師質)
- ・ ♪ b (瓦質)
- ○ 24 -- 灰落し
- 31 -- 火鉢
- ・ D Z - 31 - a (土師質丸火鉢)
- ・ ♪ b (軟質瓦質丸火鉢)
- ・ ♪ c (鑄付角火鉢、掘炬燵)
- ・ ♪ d (硬質瓦質丸火鉢)
- ・ ♪ e (土師質角火鉢)
- ・ ♪ f (軟質瓦質角火鉢)
- ・ ♪ g (硬質瓦質角火鉢)
- ・ ♪ h (風炉)
- ・ ♪ i (火消壺)
- ・ ♪ j (硬質瓦質筒形火鉢)
- ・ ♪ k (カマド)
- ・ ♪ l (土師質筒形火鉢)
- 38 -- 手焙り
- 40 -- 油受け皿
- ・ D Z - 40 - a (透明釉、脚付)
- ・ ♪ b (透明釉、脚無)
- ・ ♪ c (無釉、脚付)
- ・ ♪ d (無釉、脚無)
- ・ ♪ e (透明釉、長脚付)
- 43 -- 十能
- 44 -- ひょうそく
- ・ D Z - 44 - a (無釉、脚付)
- ・ ♪ b (透明釉、脚無)
- ・ ♪ c (無釉、脚無)
- ・ ♪ d (ろうそく状)
- ・ ♪ e (透明釉、そろばん玉形)
- ・ ♪ f (施釉、脚付)
- ・ ♪ g (鉢形、蓋付、舌付。把手付もあり)
- 45 -- 瓦燈
- 46 -- カンテラ
- ▲ ○ 47 -- ほうろく
- ・ D Z - 47 - a (丸底)
- ・ ♪ b (平底)
- 48 -- 七輪
- ▲ ・ D Z - 48 - a (内部施設を持たない七輪)
- ▲ ・ ♪ b (内部施設を持つ七輪)
- ・ ♪ e (内底部に壁状凸帯を有す。コンロ)
- 49 -- 涼炉
- 51 -- 塩壺
- ・ D Z - 51 - a (輪積成形、ミなど藤左衛門)
- ・ ♪ b (♪ 、一重椀天下一堺ミなど藤左衛門)
- ・ ♪ c (♪ 、二重椀天下一堺ミなど藤左衛門)
- ・ ♪ d (♪ 、天下一御壺塩師堺見など伊織)
- ・ ♪ e (♪ 、御壺塩師堺湊伊織)
- ・ ♪ f (板作成形、御壺塩師堺湊伊織)
- ・ ♪ g (♪ 、泉州伊織)
- ・ ♪ h (♪ 、小椀 泉州麻生)
- ・ ♪ i (♪ 、大椀 ♪)
- ・ ♪ j (♪ 、泉州磨生)
- ・ ♪ k (♪ 、サカイ 泉州磨生 御塩所)
- ・ ♪ l (♪ 、泉州麻玉)

- ・ ♪ m (♪ 、泉川麻玉)
- ・ ♪ n (♪ 、御壺塩師難波浄因)
- ・ ♪ o (♪ 、難波浄因)
- ・ ♪ p (♪ 、摂州大坂)
- ・ ♪ q (♪ 、伊津ミ つた 花塩屋)
- ・ ♪ r (ロクロ成形、御壺塩)
- ・ ♪ s (板作成形、大上々)
- ・ ♪ t (ロクロ成形、三など久左衛門)
- ・ ♪ u (♪ 、播磨大極上)
- ・ ♪ v (♪ 、大極上壺塩)
- ・ ♪ w (♪ 、筒形、無印)
- ・ ♪ x (鉢形、内湾)
- ・ ♪ y (♪ 、直立)
- ・ ♪ z (♪ 、碁笥底)
- ・ ♪ aa (輪積成形、無印)
- ・ ♪ ab (板作成形、無印)
- ・ ♪ ac (ロクロ成形、壺形、無印)
- ・ ♪ ad (板作成形、いつミヤ 宗左衛門)
- ・ ♪ ae (♪ 、堺本湊吉右衛門)
- ・ ♪ af (♪ 、堺湊塩濱長佐衛門)
- ・ ♪ ag (♪ 、泉川麻生)
- ・ ♪ ah (輪積成形、袋状)
- ・ ♪ ai (ロクロ成形、三など作左衛門)

○52 -- 燭台

- ・ D Z - 52 - a (筒形)
- ・ ♪ b (薄形、扁平)

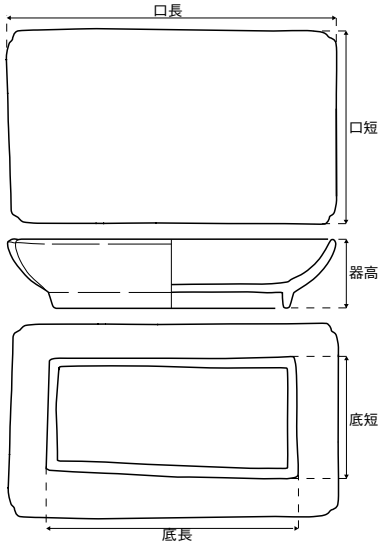
○54 -- 懐炉

■ ○63 -- あんか

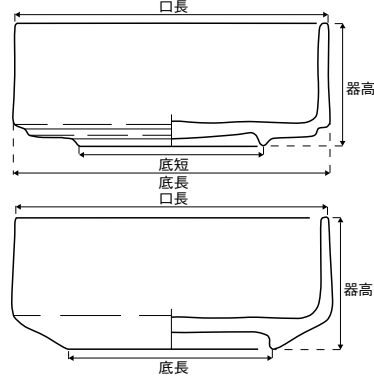
▲ ○00 -- 蓋

- ・ D Z - 00 - a (ドーム形、無印)
- ・ ♪ b (凹形、御壺塩師難波浄因)
- ・ ♪ c (♪ 、無印)
- ・ ♪ d (断面逆台形、無印)
- ・ ♪ e (断面長方形、イツミ 花焼塩 ツタ)
- ・ ♪ f (♪ 、深草砂川権兵衛)
- ・ ♪ g (断面長方形、無印)
- ・ ♪ j (ドーム形、いつミヤ 宗左衛門)
- ・ ♪ k (凸形、無印)
- ・ ♪ l (凸形、なんばん七度 本やき志本)

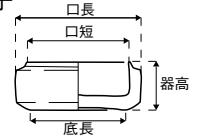
変形皿



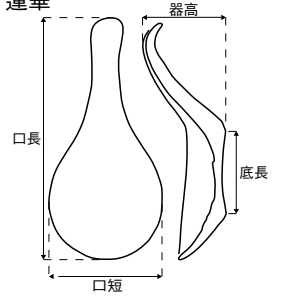
段重



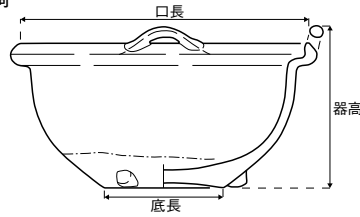
合子



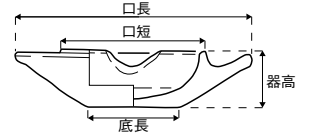
蓮華



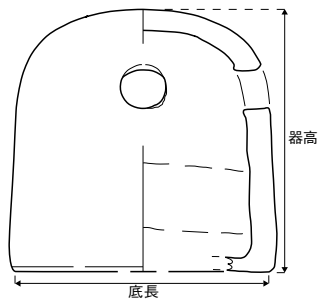
鍋



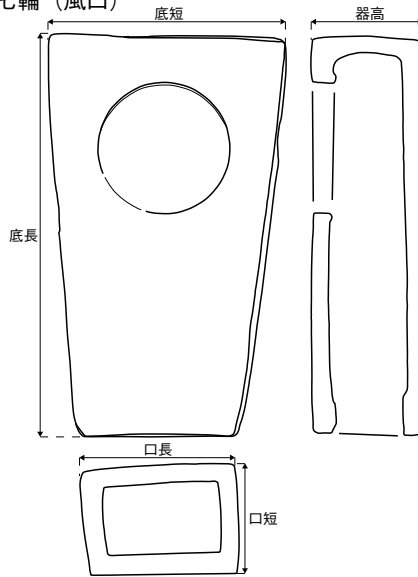
油受け皿



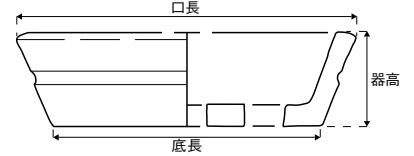
手焙り



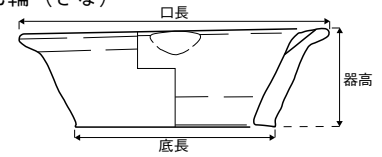
七輪 (風口)



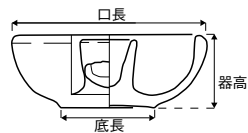
七輪 (目皿)



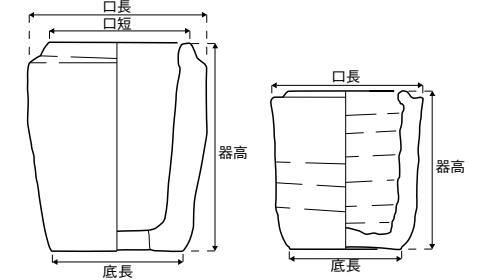
七輪 (さな)



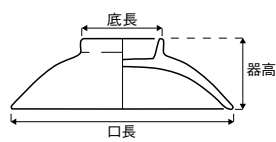
ひょうそく



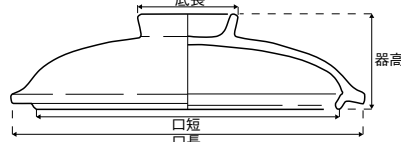
塩壺



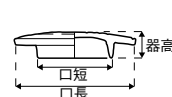
碗 (蓋)



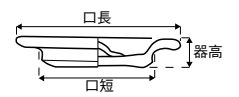
蓋物 (蓋)



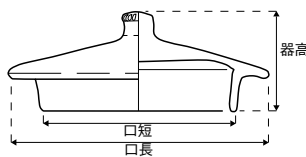
壺・甕 (蓋) 1



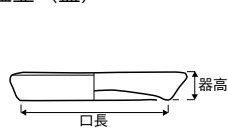
壺・甕 (蓋) 2



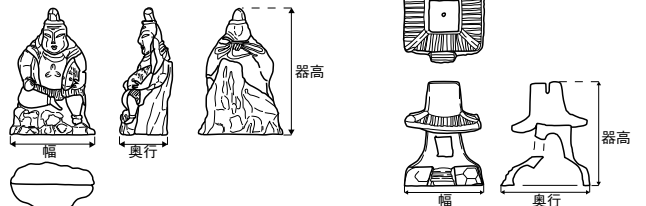
土瓶 (蓋)

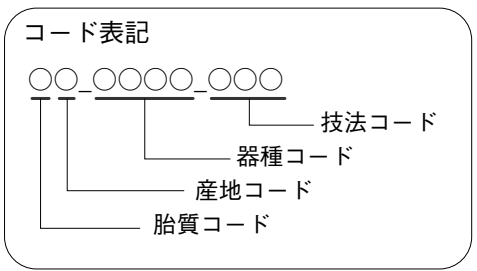


塩壺 (蓋)



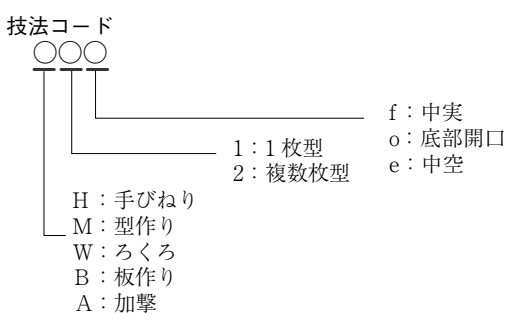
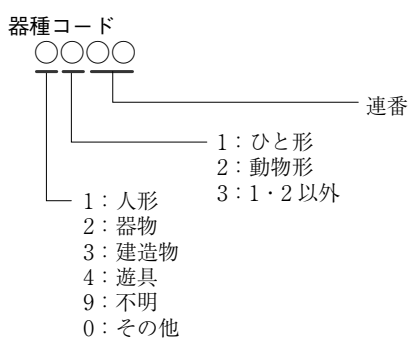
人形・玩具





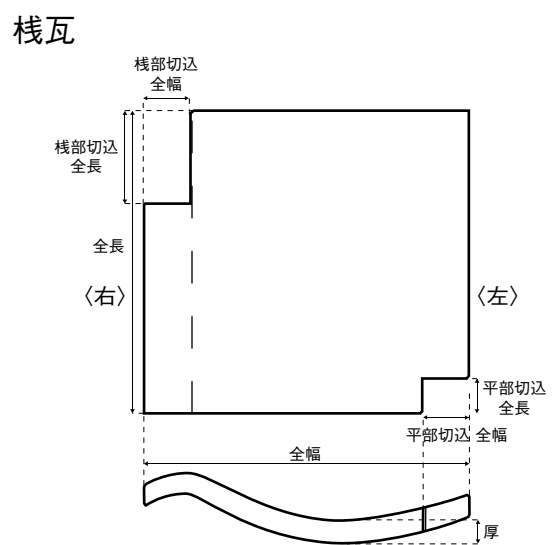
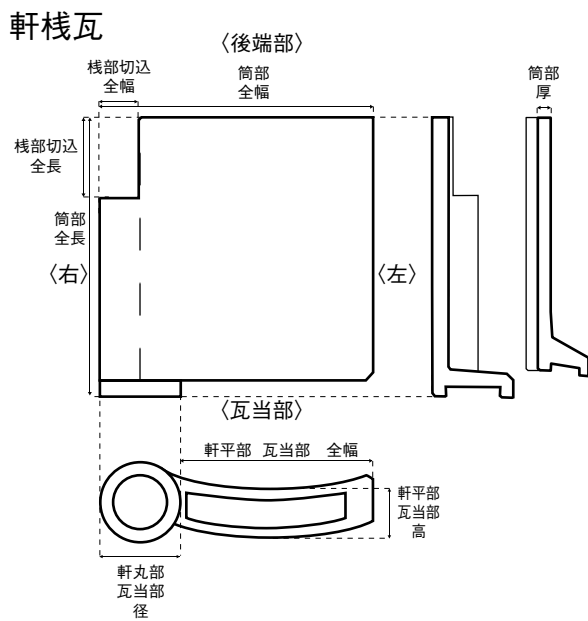
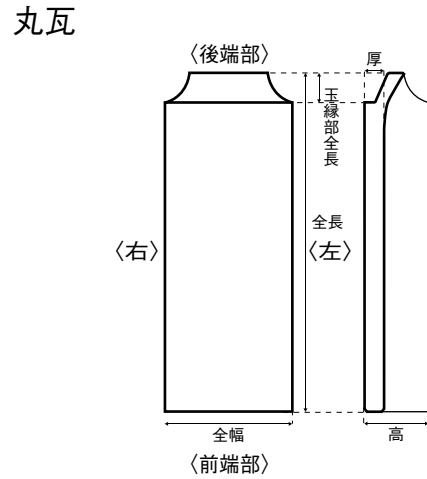
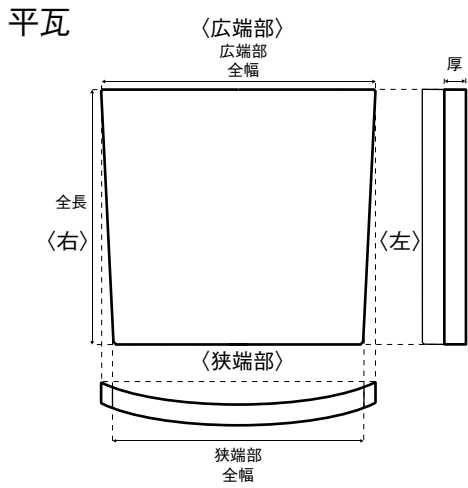
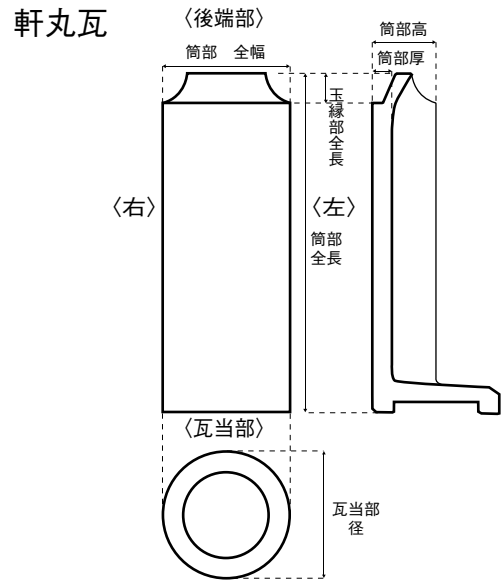
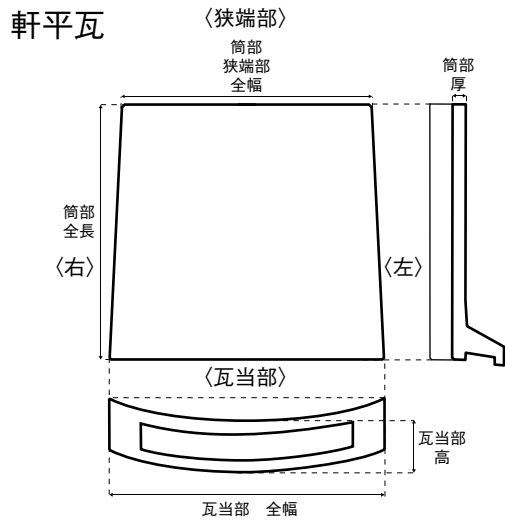
- 胎質コード**
- J: 磁器 (磁質)
 - T: 陶器 (陶質)
 - D: 土器 (土師質)
 - R: 瓦 (瓦質)

- 産地コード**
- A: 輸入陶磁
 - B: 肥前系
 - C: 瀬戸・美濃系
 - D: 京都・信楽系
 - E: 備前系
 - Q: 江戸在地区
 - Z: 不明



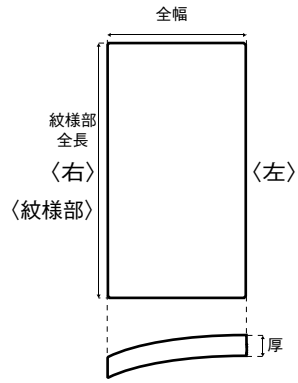
器種コード (詳細)					
1000 人形					
1100 ひと形					
1101 天神	1102 恵比寿	1103 大黒	1104 福祿寿・寿老人	1105 布袋	
1106 不動明王	1107 地藏菩薩	1108 狸々	1109 西行	1110 袴人形	
1111 力士	1112 朝鮮通信使	1113 蹴鞠人形	1114 坊主人形	1115 虚無僧	
1116 狐師	1117 猿曳き	1118 福助	1119 笛吹き	1120 若衆	
1121 姉様	1122 太夫 (花魁)	1123 お多福	1124 三味線弾き	1125 裸婦	
1126 おぼこ・禿	1127 唐子	1128 ぶら人形	1129 這子	1130 狎抱き童子	
1131 亀乗り童子	1132 狎乗り童子	1133 面持ち童子	1134 金太郎	1135 桃持ち童子	
1136 獅子舞	1137 鯛抱き童子				
1200 動物形					
1201 狛犬	1202 獅子	1203 猿	1204 犬	1205 馬	
1206 狐	1207 牛	1208 猫	1209 兎	1210 鼠	
1211 狸	1212 虎	1213 象	1214 鳩	1215 鶏	
1216 鴛鴦	1217 木菟	1218 亀	1219 蛙	1220 鯉	
1221 鯛・鯛車	1222 金魚	1223 蟬			
1300 その他 (1100・1200以外)					
1301 達磨	1302 首人形	1303 獅子頭	1304 面	1305 陽物	
2000 器物					
2001 碗	2002 皿	2003 鉢	2004 銚子	2005 瓶	
2006 壺	2007 片口鉢	2008 急須	2009 土瓶	2010 鍋	
2011 釜・茶釜	2012 播鉢	2013 蓋	2014 七厘・焜炉	2015 石臼	
2016 竈	2017 器台	2018 硯	2019 水滴	2020 銭貨	
2021 五銚鈴	2022 袖でんぼ	2023 香炉・風炉			
3000 建造物					
3001 祠	3002 塔	3003 城郭	3004 橋	3005 堀・袖垣・石段	
3006 民家・庵	3007 灯籠	3008 鳥居	3009 御輿	3010 舟	
3011 庭園・背景	3012 仕切り盤				
4000 遊具					
4001 土鈴	4002 独楽	4003 笛	4004 基石状製品	4005 面模	
4006 泥面子・芥子面	4007 土玉	4008 円盤状製品	4009 車輪状製品		
9000 不明					
0000 その他					

人形・玩具分類コード

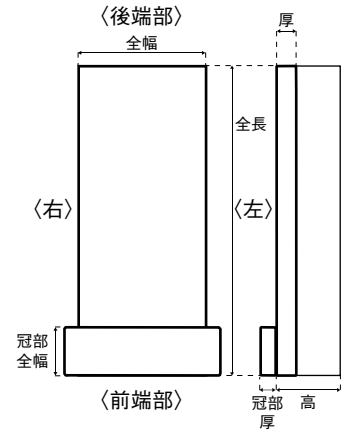


瓦凡例(1) 軒平瓦、平瓦、軒丸瓦、丸瓦、軒棧瓦、棧瓦

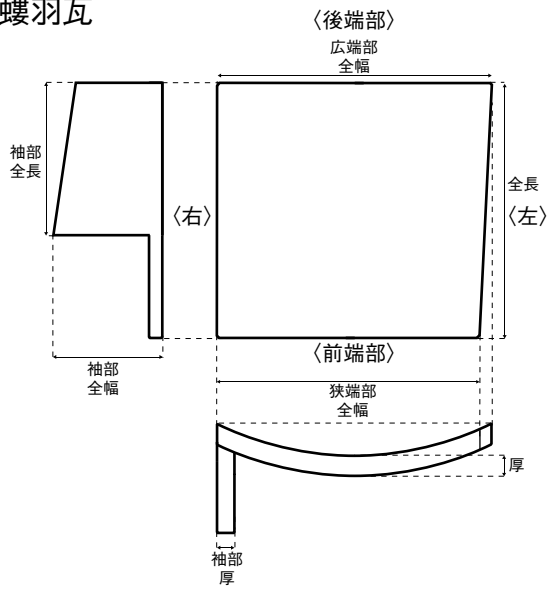
熨斗瓦



冠瓦



螻羽瓦



瓦凡例(2) 熨斗瓦、冠瓦、螻羽(けらば)瓦

東京大学本郷構内の遺跡
経済学研究科棟地点発掘調査報告書

目 次

巻頭図版
例 言
凡 例
目 次

報告編

第 I 章 遺跡の位置と環境

第 1 節 遺跡の位置	3
第 2 節 遺跡の地理的・歴史的環境	3

第 II 章 調査の経緯と概要

第 1 節 調査に至る経緯	9
第 2 節 調査の方法と経過	9
第 3 節 調査の概要	9
第 4 節 基本層序	23

第 III 章 遺 構..... 24

第 IV 章 遺 物..... 108

引用・参考文献

研究編

研究1	経済学研究科棟地点B面の遺構分布からみた空間利用	追川吉生	179
研究2	溶姫御殿期以降の状況と建物基礎遺構	堀内秀樹	190
研究3	経済学研究科棟地点出土瓦の考察	石井龍太	209
研究4	植栽痕の分析	パリノ・サーヴェイ株式会社	220
研究5	経済学研究科棟地点出土の動物遺体	阿部常樹・江田真毅	225

抄録

報 告 編

第 I 章 遺跡の位置と環境

第 1 節 遺跡の位置

調査地点は、東京都文京区本郷 7-3-1、東京大学本郷キャンパス南側にある経済学部赤門研究棟南側に隣接し、医学部 1 号館と理学部 2 号館北側に位置している。

東京大学本郷構内は、全域を「文京区 No.47 本郷台遺跡群」、一部を「文京区 No.28 弥生町遺跡群」として周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている。埋蔵文化財調査室では 1983 年以降、事前調査、試掘調査、立会調査などを含め、継続的に埋蔵文化財調査を行っている。本地点が位置する本郷キャンパス南側周辺では、15 薬学部南館・28 薬学部資料館（東京大学埋蔵文化財調査室 2021）、20 総合研究博物館新館（同 2012b）、22 山上会館龍岡門別館（同 2004）、24 医学部教育研究棟（同 2019、同 2020）、66 薬学系総合研究棟（同 2004、同 2006）、68 インキュベーション施設（同 2004）、76 ベンチャープラザ（同 2008）、81 経済学研究科学術交流棟（同 2011）、93 伊藤国際学術交流センター（同 2012a）、103 春日門横教育研究棟（同 2012）、169 文系総合研究棟（同 2017）などの調査が行われ、江戸時代加賀藩本郷邸、本郷六丁目町屋などの状況が次第に明らかになっている（I -1 図）。これらについての詳細は上記の報告書、年報を参考にされたい（I -1 表）。

調査区は、世界測地系 9 系に準拠して設定した東京大学本郷構内全域を対象としたグリッド（以降、「東大グリッド」と記す）（東京大学埋蔵文化財調査室 2017）の東西 Cn ~ Dd 区、南北 204 ~ 211 区内（Cn206 ~ 208 区、Co206 ~ 209 区、Cp205 ~ 211 区、Cq205 ~ 210 区、Cr205 ~ 210 区、Cs205 ~ 210 区、Ct204 ~ 210 区、Da204 ~ 209 区、Db204 ~ 209 区、Dc204 ~ 209 区、Dd206 ~ 209 区）に位置している（I -2 図）。

第 2 節 遺跡の地理的・歴史的環境

（1）地理的環境

本郷キャンパスの地理的様相については、これまで理学部 7 号館地点の報告（鈴木 1989）、浅野地区 I の報告（橋本 2009）などに触れられており、詳細は参照されたい。これらと江戸期における改変を略述すると本郷キャンパス内は武蔵野台地の東端、南北に延びる本郷台地（神田台）上の M2 面上に存在する。このうち標高約 20 ~ 22 m の上位面と 15 ~ 17 m の下位面とが存在するが、このうち本地点は上位面に位置する。本郷台地の東は上野台

地を挟んで、滝野川、千駄木、根津、湯島と南流する旧石神井川によって開折された谷が存在する。旧石神井川は、従来不忍池からさらに南流して江戸湾に注ぐものであったが、江戸幕府の水利政策により加賀藩下屋敷のある滝野川付近より人為的に東流させ、隅田川に流入するように改変されている。また、台地東斜面は小河川による谷が複雑に入り込んでおり、この状況は、東京大学本郷構内の発掘調査によっても確認されている（東京大学遺跡調査室 1990b、同 2005a、同 2016 など）。

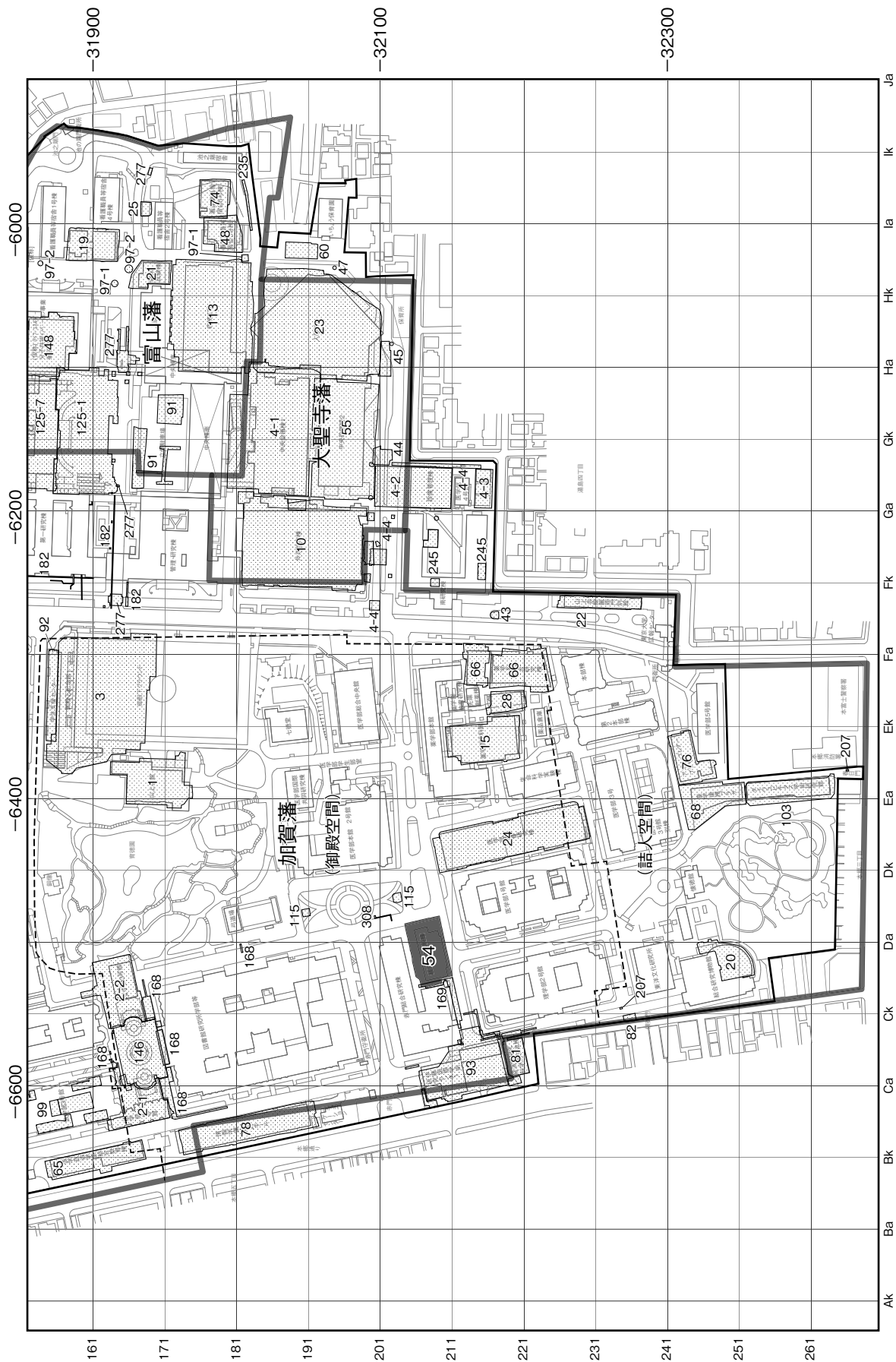
調査区付近は、本郷台地のほぼ中央に位置しており、調査地点内の立川ローム層上面はわずかに東に向かって傾斜している。しかし、近隣の地形を俯瞰すると本郷通りは、82 懐徳門地点、20 総合研究博物館地点より南側、現在の菊坂上付近が最も標高が低い。明治 16 年陸軍参謀本部による「東京府武蔵國本郷區本郷本富士町近傍」では、本郷四丁目（西側町）裏は現在の菊坂に沿って西流する小河川が存在し、等高線も本郷四丁目町屋付近が最も低くなっていることが判る（堀内 2020）。

（2）歴史的環境

発掘調査で出土した遺構、遺物は、全て江戸時代から近代にかけて構築、使用、廃棄されたものであったため、当該期における本地点の歴史的環境について略説したい。

江戸時代

「東邸沿革図譜」によると、加賀藩の本郷邸拝領は、元和 2 ~ 3（1616 ~ 17）年頃、加賀藩前田家が拝領すると記されており、それ以前は、大久保忠隣の家敷地であったとされる。大久保忠隣は慶長 19（1614）年に改易されるが、これまでの発掘調査の成果では、大久保氏関連と思われる遺構や遺物は出土していない。藩邸として拝領後は、下屋敷として利用をする事になるが、藩邸の開発は、「寛永三年丙寅、始て四界に木墻を環らし」（「東邸沿革図譜」）とやや遅れた寛永 3（1626）年のこととされる（石川県図書館協会 1938）。拝領当初は、藩邸最南域（約 2 万坪）は、後述する近藤登之助、大森半七、高木筑後組下の同心屋敷であったが、元和年間に遡る遺構や遺物はこのエリアのみから確認されている。本地点は、加賀藩の当初拝領域であったが、寛永前半に遡る生活遺構は、本地点の東側の 15 薬学部南地点、24 医学部教育研究棟地点、66 薬学系総合研究棟地点など三四郎池南側から確認されており、藩邸当初の居住空間がこの周辺であったことが窺える。



世界測地系

I-1 図 本郷地区南側調査地点

I-1表 本郷地区南側調査地点一覧

番号	年度	略称	調査名	調査期間	面積 (㎡)
15	1992	YS	薬学部南館	1992.10.21~12.18	1300
20	1993	TUM	総合研究博物館新館	1994.2.14~4.8	600
22	1994	HF	山上会館龍岡門別館	1994.8.17~10.17	593
24	1994	HIKN	医学部教育研究棟	1次 1994.11.17~1995.4.28 2次 1997.3.10~4.25 3次 1998.11.2~12.25 4次 2002.9.3~12.25	2901
28	1995	FPS	薬学部資料館	1995.7.24~9.1	540
54	1999	HES99	経済学研究科棟	1999.5.24~11.2	1026
66	2002 2004	YGS	薬学系総合研究棟	2002.8.1~2003.2.28 2004.7.26~8.4 2004.11.17~2005.2.4	1260 540
68	2002	INC	インキュベーション施設	2003.3.6~6.7	1051
76	2005	HVP06	ベンチャープラザ	2006.3.6~5.16	760
81	2007	HEA07	経済学研究科学術交流棟	2008.3.17~7.11, 9.11~24 2009.2.2~10	451
93	2009	H7I09	伊藤国際学術研究センター	2009.7.30~2010.2.12, 5.17~5.31 2011.7.21~26, 9.16~10.28	1710
103	2011	HKK11	春日門横教育研究棟	2011.12.1~2012.7.20	949
169	2014	HEK14	文系総合研究棟	2014.10.14~11.5	180



I-2図 調査地点の位置

文献では、寛永6(1629)年に將軍徳川家光と大御所徳川秀忠の本郷邸への御成が行われている。発掘調査で多く確認されている金箔瓦はこの時期の御殿に関連したものと推定しており、本地点からも多く出土している。寛永16(1639)年には、3代当主利常が本郷邸に隠居し、次いで慶安3(1650)年には本郷邸全焼している記事が認められる。ただし、これを裏づける発掘調査事例はこれまでのところ確認されていない。明暦3(1657)年に起きた明暦の大火を契機に藩邸南側の幕臣地2万坪が本郷邸に組み入れられる。また、同火災では、上屋敷(辰口邸)も全焼し、5代藩主綱紀が本郷邸に避難し、以降、ここに居住したことで、本郷邸は事実上の上屋敷として機能したと推定できる。それを反映するように、17世紀後半以降になると遺構、遺物の出土量が格段に増加する。

当該地域を描いた最も早い絵図は、寛永19～20(1642～43)年に描かれた「(江戸全図)」(白杵市教育委員会蔵)(I-3図)、正保元(1644)年に描かれた『正保江戸図』などである。藩邸南域2万坪が幕臣地であった時代の南境付近の様子が知られる。寛永図によると、中山道(現在の本郷通り)より東で、現在の春日通りより北側にあたる場所には、中山道沿いに「町」(本郷四丁目、五丁目町屋)、それ以东は「近藤登之助同心」、「大森半七同心」と書かれた屋敷地が確認できる。これら同心地は、明暦3(1657)年の振袖火事を契機に、第4代藩主前田光高の正室清泰院の死後、替地として、居住していた牛込邸と駒込邸およびこの本郷邸南側同心地2万坪を拝領した部分にあたる。

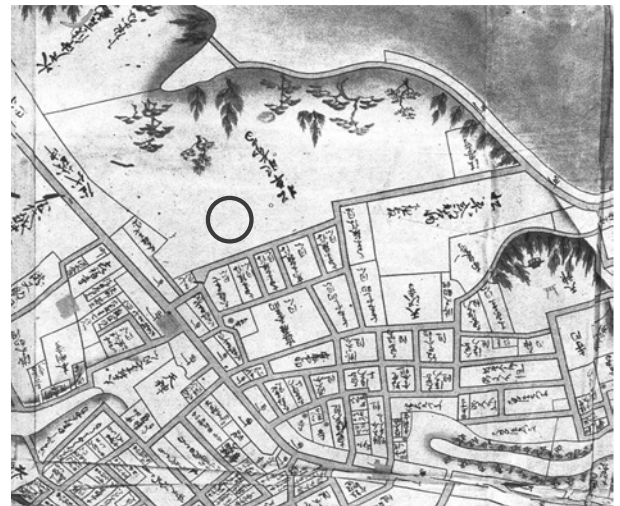
17世紀末から18世紀前葉は、絵図面が遺存していると共に災害やイベントなどで御殿空間が改変される。天和2(1682)年には、藩邸全域が火災によって焼失する。その後の本郷邸を描いた絵図が「武州本郷第図」、「御上屋敷殿閣図」(I-4図)である。調査区(54)は、「富士山」と称された築山を含む部分にあるが、築山周りには建物は描かれておらず、調査区が該当する築山南東側には、「大門」(表御門)から続く塀と「御成門」と書かれた門が描かれている。元禄16(1703)年に再び屋敷が全焼する火災があり、御殿は建物主軸が、中山道(現在の本郷通り)に沿った軸になり、建物配置も大きく変更された。宝永5(1708)年5代將軍徳川綱吉の養女松姫(光現院)が、6代藩主吉徳の正室として本郷邸入輿の際に調査区周辺は、表御殿と松姫御守殿の境付近に位置することになるが、ほどない享保6(1721)年松姫死去に伴って解体されている。その後、文政10(1827)年に11代將軍徳川家斉の21女溶姫(景德院)が、12代藩主斉泰正室として本郷邸への引き移りの際に造営された御住居

の南西隅にあたり、調査区(54)は、「御膳所」や溶姫御殿から表御殿への「御表渡り廊下」の一部にあっている(I-5図)。溶姫御殿は、慶応4(1868)年に本郷邸がほぼ全焼した火災によって罹災し、再建されないまま近代を迎える。

近代

加賀藩本郷邸は、明治4(1871)年に明治政府に収公されるが、藩邸の西南隅の15,078坪は前田家の私邸として継続して利用することになる。明治期の当該地付近は、東京帝国大学と前田侯爵邸との境を含む位置に所在し、この境と考えられるSA103が今回の調査で確認されている(I-6図)。この時期の前田侯爵邸の利用は、明治16年陸軍参謀本部による「東京府武蔵國本郷區本郷本富士町近傍」、「本郷御邸惣絵図」(前田育徳会蔵)、「本郷惣絵図」(前田育徳会蔵)などから知られる。I-6図をみると、調査区西側に「椿」と書かれた山と文字が確認でき、富士山が遺存していることが看取される。

大正15(1926)年、関東大震災後の東京帝国大学本郷キャンパス拡充のため、その要請に応えた前田家は、当該地と駒場にあった農学部および代々木演習林を交換することとなった。昭和3(1928)年に移転が完了し、以降、調査区全域が大学用地として現在まで利用されている。

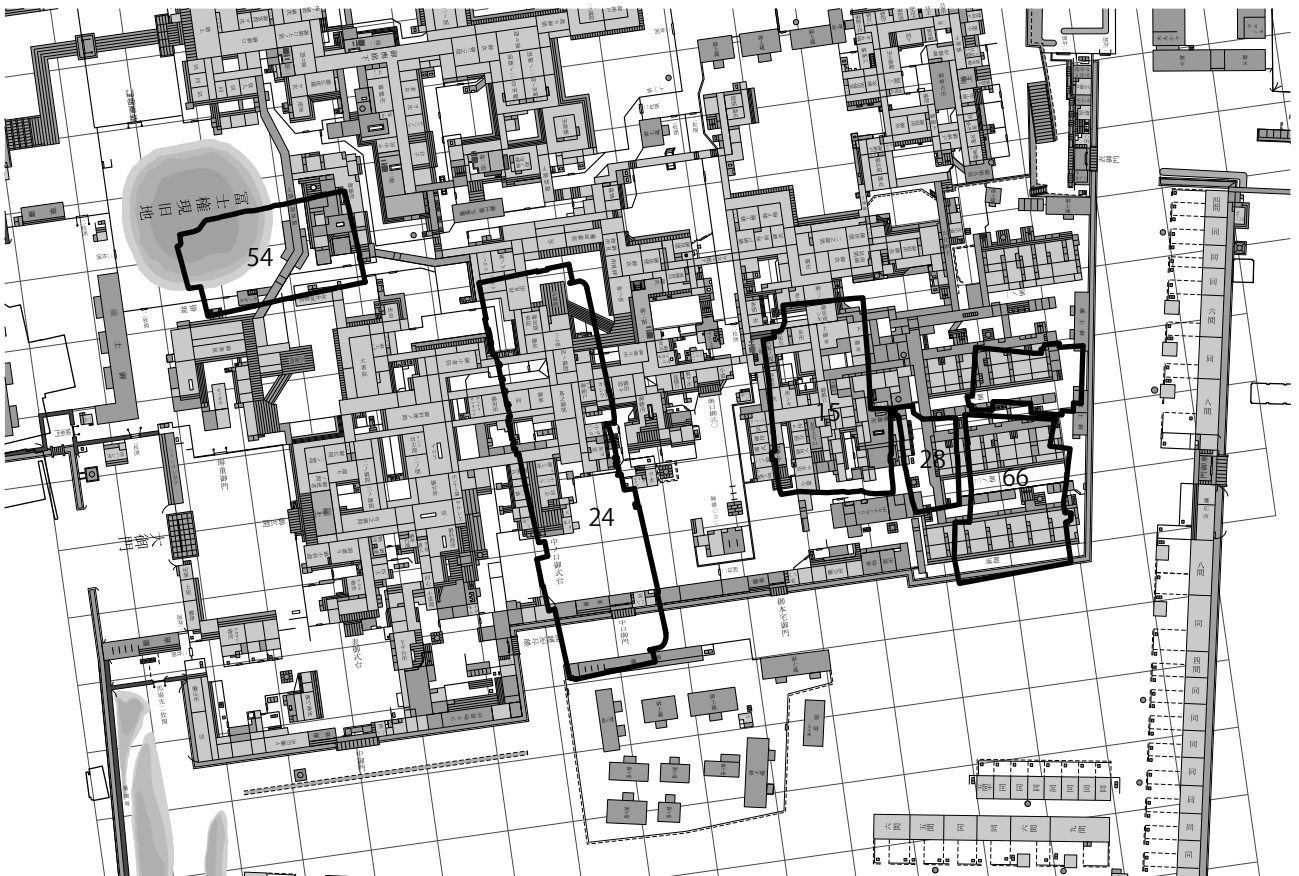


「(江戸全図)」(白杵市教育委員会蔵)部分に加筆

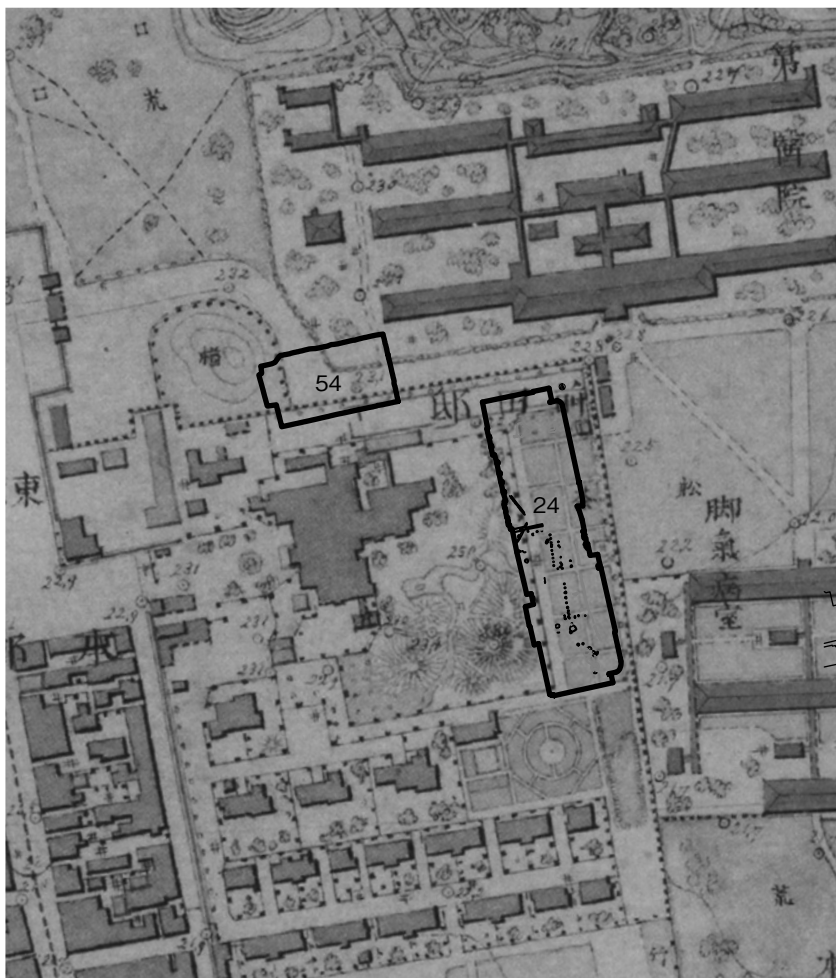
I-3図 江戸時代初期の調査地点



前田育徳会蔵「御上屋敷閣図」をトレースに加筆
I-4図 調査地点と元禄絵図面 (S=1/2000)



金沢市立玉川図書館蔵「江戸屋敷総図」をトレースに加筆
I-5図 調査地点と19世紀絵図面 (S=1/2000)



「東京府武蔵國本郷區本郷元富士町近傍」(明治16(1883)年参謀本部測量局)部分に加筆

I-6図 明治期の調査地点

第Ⅱ章 調査の経緯と概要

第1節 調査に至る経緯

平成10(1998)年秋に東京大学施設部から同埋蔵文化財調査室に、本郷構内南域に予定した文学部、経済学部、教育学部、社会科学研究所が利用する総合研究棟新営に伴う埋蔵文化財の調査に関する照会があった。増築予定地は東京都遺跡地図によると文京区No.47本郷台遺跡群(本郷七丁目・弥生二丁目、台地、集落・貝塚・大名屋敷、[平]住居・[近]礎石・土坑・地下式土坑・庭園・井戸・溝・杭・石垣[旧][縄][弥][古][平][近])内に位置しており、周知の埋蔵文化財包蔵地として認知されている。当該地区においても遺跡の遺存状態に応じた埋蔵文化財発掘調査を行う必要があった。

文京区教育委員会と協議の上、埋蔵文化財の遺存状況を確認するための試掘調査を行うこととなった。翌1999年1月6～8日にかけて試掘トレンチ6箇所、合計28㎡を設定し、バックホーによって表土掘削を行った後、遺存状況の調査を行った。その結果、2枚の遺構面と面に伴う多くの遺構および遺物が確認され、開発予定地全体にわたって江戸時代の加賀藩邸が重層的にかつ良好な状態で遺存していることが明らかになった。以上の結果により、建築予定地域内全域を対象に埋蔵文化財発掘調査を行うことが確認された。

第2節 調査の方法と経過

(1) 調査の方法 (I-2図)

発掘調査は、建物新営工事に伴って根切りを行う範囲を対象にした。調査対象面積は1,026㎡である。調査は、グリッド法を用いて行い、調査区全域を御殿空間内で近接する医学部教育研究棟地点と合わせて10×10mでグリッドを設定して行ったが、本報告は、その後に設定した東大グリッドで表記に変更した(東京大学埋蔵文化財調査室2017)。

(2) 調査の経過

発掘調査は、平成11(1999)年5月24日から開始した。残土処理の関係で、調査区を東西二つの調査区に分け、東区より調査対象レベルまでの機械掘削を開始し、その後人力による発掘調査を行った。東区の重機による機械掘削は東側より開始し、6月3日に東区全域の表土掘削が終了した。

人力掘削は、現表下50～70cm下の江戸時代後期から近代の遺構確認面(A面と命名した)から開始した。

A面上には、溶姫御殿の基礎に伴うと推定された人頭大程度の自然石、加工石が多く検出した。同時に後に前田侯爵邸との境施設の基礎と想定されたSA103が確認されたが、両者とも遺構上部まで遺存していた状況ではなく、A面は江戸時代後期や明治・大正期の生活面で、現代までの間に、削平を受けていると判断された。面は、東区西側で一部硬化した部分が確認されたが、それ以外では攪乱によって凹凸があり、近代以降の攪乱を確認しながらの調査となった。6月17日より「御膳所」関連の貯蔵庫であるSK107の調査を開始、慶応4(1868)年の御守殿焼失に関わる多量の焼土と焼瓦が出土した。7月後半からA面が終わったエリアから面を下げ、関東ローム上面(武蔵野標準層位Ⅲ層上面、B面)の調査を開始する。B面からは植栽痕が多く確認され、殿舎が構築された隣接する医学部教育研究棟地点やA面とは異なった土地利用が想定された。9月1日から西区の調査を開始した。東区と同様に重機による表土掘削後(9月7日)にA面から調査を開始した。9月28日からA面の遺構の調査が終了したエリアから、B面への面下げおよび遺構確認・調査を開始した。SK505をはじめB面の遺構からは金箔瓦が多く確認され、寛永6(1629)年の御成御殿が付近に存在したことを想定された。また、絵図面との照合で調査区北西隅に想定された富士山は、調査区内では顕著な痕跡は確認されず、寛永通宝、金箔瓦、領国産の白色系かわらけ等を含む遺構(SK640、SK641・642・643)が確認された。

6月下旬から7月上旬、9月中旬は降雨によって調査の進行が遅れたが、調査期間全体では、比較的天候にも恵まれ、10月29日には全体写真の撮影行い、全ての野外調査は11月2日をもって終了した。

第3節 調査の概要 (II-1～2図、II-1表)

本調査では、江戸時代加賀藩本郷邸、近代前田侯爵邸に伴うと考えられる遺構・遺物が確認できた。確認された遺構数は、江戸時代初期から近代まで453基、出土遺物は164基の遺構からコンテナ箱にして186箱を取り上げた。遺跡は全体の遺存度は、比較的良好であったものの、A面上位が近代に行われた切り土によって大きく削平されていたことが確認された。

江戸時代の加賀藩本郷邸、前田侯爵邸に伴うと推定される遺構群は、調査区全域から確認された。遺構群は、B面から南通町軸(現在の春日通軸、N-0°-E)とN-9°

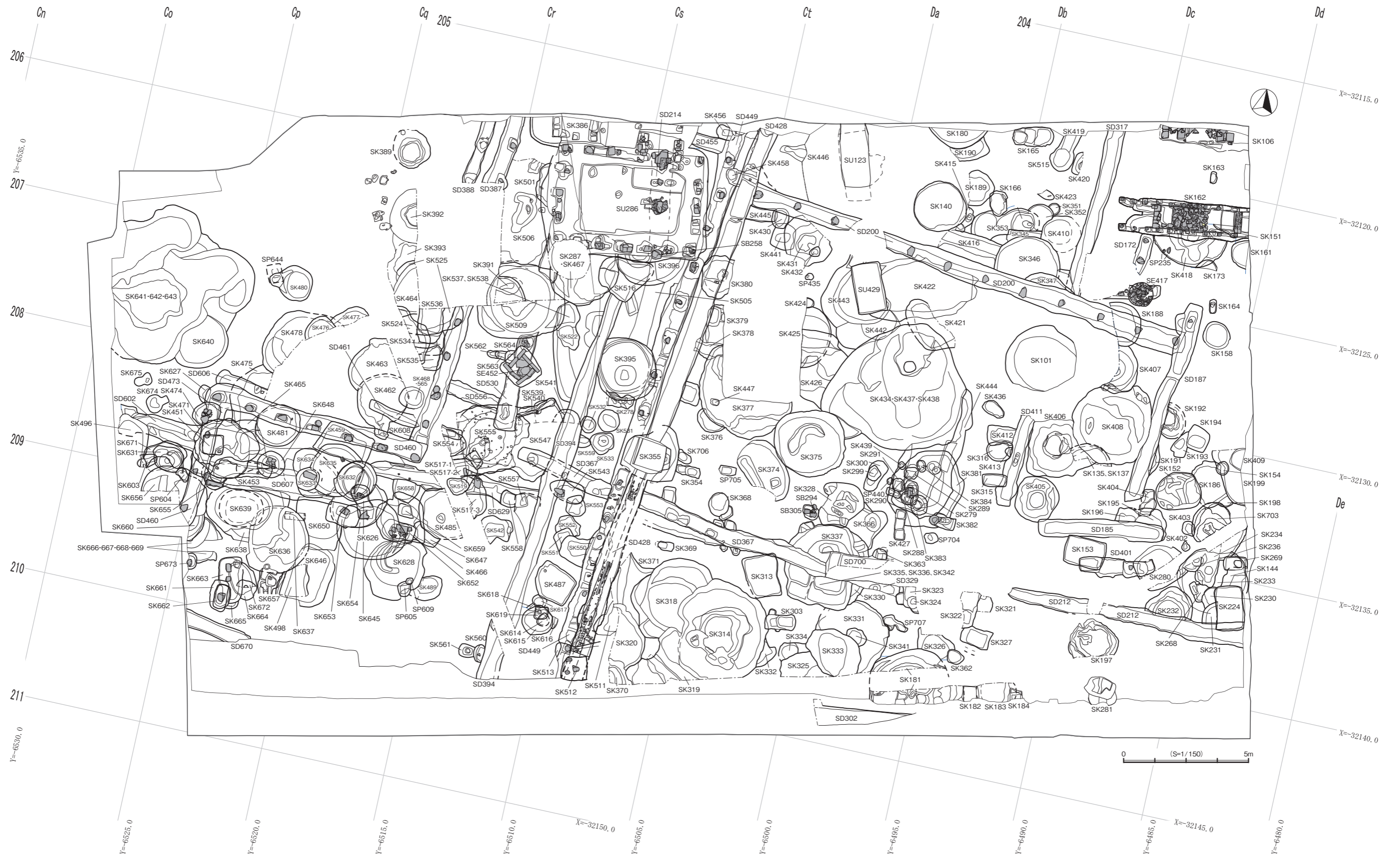
-Eの二つの主軸を有する遺構が確認され、南通町軸の遺構群が新しい。古い軸は、底に石が配される溝状遺構で、こうした遺構は医学部教育研究棟地点では、F面（フェイズ3）からE面（フェイズ4）にかけて確認されている。B面の遺構の多くは、植栽痕で当該地周辺が樹木が多いエリアと判断された。A面の遺構は、その多くが中山道軸（現在の本郷通軸）を持つ、大型石を用いた基礎遺構、便所、地下通路など御殿の建築物に関わると推定される遺構であった。こうした点と絵図面や史料との対比から、A面の遺構は、近代から溶姫御殿に伴う時期、B面の遺構は、藩邸初期から溶姫御殿建設以前と考えられた。

被災した瓦を除くと人工遺物の出土量は少ない。御殿空間内にゴミを廃棄していない証左であろう。溶姫御殿の御膳所に関連する「御膳所」、「御末」などと墨書された陶磁器、瓦類の中に三葉葵の軒丸瓦が出土している。これらはいずれも二次的な被熱を受け、溶姫御殿が類焼した慶応4（1868）年の火災による廃棄資料と思われる。また、御膳所付近で確認された遺構に含まれる食物残渣は、徳川家の食伝統が看取された重要な資料である。藩邸初期に関わる遺物に、金箔瓦、かわらけ、食物残渣などがある。

近代は、前田侯爵邸の懐徳館洋館に伴う、塀基礎、配管などと屋敷縁辺に廃棄された侯爵邸で使われた生活用品が出土した。



II-1図 総合研究棟A面全体図(1/150)



II-2図 経済学研究科棟地点B面全体図(1/150)

第Ⅱ章 調査の経緯と概要

遺構種別	遺構番号	面	東大グリッド	遺構図 (Ⅲ-a)	遺物図 (Ⅳ-a)	年代	切合
SB	1	A	Cs-Dc205-207	1~3	1		
SK	101	B	Db206				101>406,407,408,411
SK	102	A	Da-Db206				
SA	103	A	Co-Cs209,Cs-Db208	5~9	1	17後	103>224,454,484,488,492,626,646,708
SP	104	A	Dc204			?	
SK	105	A	Db-Dc204				
SK	106	B	Db-Dc204				
SU	107	A	Cs205-Ct207	10~12	1~11	?	109>107>425
SK	108	A	Da206	4			
SK	109	A	Ct207			19?	109>107
SK	110	A	Ct208	4	12~14	19中	110>702
SK	111	A	Dc207				141>111>403
SK	112	A	Dc207				
SK	113	A	Dc-Dd207				
SK	114	A	Dd207				
SK	115	A	Dc206			17後	115>157
SK	116	A	Dc204				
SK	118	A	Dc205				
SK	119	A	Dc207	13		17後-18前?	119>141
SK	120	A	Dc207	13		17後-18前?	
SK	121	A	Dc207	13			
SK	122	A	Da-Db207	13		19中	122>168
SU	123	B	Ct205	13	15	17後葉	123>144
SK	125	A	Dc208-209				
SK	130	A	Dc209				
SK	131	A	Dc204-205				
SK	132	A	Dc207			?	132>141,185
SX	133	A	DC207	14		?	
SK	134	A	Dc208	14	15	19-近代	134>138,159
SK	137	A	Db-Dc207				
SD	138	A	Dc-Dd208-209			19	134>138
SK	139	A	Dd208			17?	
SK	140	B	Da205	14	15	?	
SD	141	A	Dc207	14	15	?	119,132>141>111
SD	143	A	Dc207				
SK	144	B	Ct205-206				123>144
SK	145	A	Dd208				
SP	146	A	Da-Db208	14		17後葉	
SK	147	A	Dc207	15	15	?	147>185
SK	148	A	Dd208-209			17?	
SK	151	B	Dc205				
SK	152	B	Dc207				
SK	153	B	Db-Dc207-208	15	15	17後葉	153>401,185
SP	154	B	Dc207				
SK	156	A	Db207	15	15	19中	156>169,405,411
SK	157	A	Dc206				115>157>158
SK	158	B	Dc206	15			115>157>158
SK	159	A	Dc208-209			17,19	134>159
SK	161	B	Dc205				
SK	162	B	Db204-205	16~18	15	17末	162>418
SK	163	B	Dc204				
SK	164	B	Dc205			?	
SK	165	B	Da-Db204-205				
SK	166	B	Da205				
SK	167	A	Dc207-208				
SK	168	A	Da-Db207				169,174>179>168
SK	169	A	Db207			17後	156>169>179>168

報告編

遺構種別	遺構番号	面	東大グリッド	遺構図 (Ⅲ-a)	遺物図 (Ⅳ-a)	年代	切合
SK	170	A	Dc206				
SD	172	B	Db205				
SK	173	B	Dc205				
SP	174	A	Db207	15	19		174>168
SP	176	A	Db205	19			
SK	177	A	Dc206				
SP	178	A	Db208			19?	178>179
SK	179	A	Db207-208	19	15	17後葉、19前葉	169、178>179>168
SK	180	B	Da204-205			17?	
SK	181	B	Dz-Db209	19	16	17?	181>182
SK	182	B	Db209	19	16	?	181、183>182
SK	183	B	Db209			17?	183>182
SK	184	B	Db209				
SD	185	B	Db-Dc207	20	16	17?	132、147、153>185>195、196、405
SK	186	B	Dc-Dd207				
SD	187	B	Dc205-206	20			408>187>191、192、200
SK	188	B	Db-Dc206				
SK	189	B	Da205				
SK	190	B	Da204-205				
SK	191	B	Dc207				187>191
SK	192	B	Dc206				187>192
SK	193	B	Dc206-207				
SK	194	B	Dc206-207				
SK	195	B	Dc207				185>195
SK	196	B	Dc207				185>196
SK	197	B	Dc208	20	16	17?	
SK	198	B	Dc-Dd207				
SK	199	B	Dc-Dd207				
SD	200	B	Cs-Dc205-206	22			144、187、188、205、346、428、446>200>317、416、422
SK	201	A	Cs207	20	16	17後葉	
SP	202	A	Cs206				
SK	203	A	Cs206	21	16	17-19	
SX	205	A	Cs205-206				
SP	206	A	Cs205				
SD	208	A	Cr205-206				701>208
SP	209	A	Da207				
SK	210	A	Cr205	21		19?	210>213
SD	212	B	Db-Dc208	21	16	17後?	212>224
SX	213	A	Cr205	23	17	19前-中	210、214、222、253、258、701>213
SD	214	B	Cr-Cs205-206	23		17後、19	214、258>213
SX	216-218-219	A	Cs206-207			18後-19前	
SK	217	A	Cs206-207				
SP	220	A	Cs207				
SD	222	A	Cr205				222>213
SD	223	A	Cs207				
SU	224	B	Dd208	23	17	17後?	103、212>224>230、231、233、234
SE	225	A	Cr205-206			17後、19前	
SP	226	A	Dc206				
SK	227	A	Cs206-207			?	
SK	228	A	Cr-Cs206-207			17?	228>384
SP	229	A	Cs206				
SK	230	B	Dd208				224>230
SK	231	B	Dd231				224>231
SK	232	B	Dc208	24			
SK	233	B	Dd207-208				224>233>269
SK	234	B	Dc-Dd207-208			19?	224、269>234
SP	235	B	Dc205			?	

第Ⅱ章 調査の経緯と概要

遺構種別	遺構番号	面	東大グリッド	遺構図 (Ⅲ-a)	遺物図 (Ⅳ-a)	年代	切合
SK	236	B	Dc207				
SF	247	A	Cs206				
SP	248	A	Da208			17後、近代	
SP	249	A	Da206				
SP	251	A	Da206	24		17後	
SP	252	A	Cs208				
SX	253	A	Cs206	24	17	18前	
SK	254	A	Cs208				
SP	255	A	Cs207-208				
SP	256	A	Cs207-208				
SP	257	A	Ct208				
SP	258	B	Cs206	23			258>213
SP	265	A	Db207			?	
SK	266	A	Dc209				
SK	267	A	Dc-Dd209				
SK	268	B	Dc-Dd208	24	18	17後?	
SK	269	B	Dd207	24	18	?	233>269>234
SK	270	A	Dc-Dd208-209				
SP	272	A	Cr205				
SP	273	A	Cs207				
SP	274	A	Cs206				
SP	275	A	Cr206				
SP	276	A	Cr206	24	18	?	
SP	277	A	Cr206				
SK	278	B	Cr-Cs207	25	18	17?	
SK	279	B	Da207	25		?	279>288,381
SK	280	B	Dc207-208				
SK	281	B	Dc209				
SK	282	A	Dc209				283>282
SK	283	A	Db-Dc209	25	18	?	283>282,284
SK	284	A	Db209				283>284
SU	286	B	Cr-Cs205-206	26~27	19	18後	286>287・467,381,386,396,445,449,501,506
SU	287・467	B	Cr206	25	19		286,509>287・467
SP	288	B	Da207				279>288>381
SK	289	B	Da207				289>381
SK	290	B	Da207				290>381
SK	291	B	Da207				291>381
SP	294	B	Ct208	28	20	?	
SK	299	B	Ct-Da207-208				
SK	300	B	Da207				
SD	302	B	Da209			18?	
SK	303	B	Ct209			?	
SB	305	B	Ct208				
SK	313	B	Ct208				
SK	314	B	Cs-Ct209	28	20	17後	314>318,332
SK	315	B	Db206			?	315>411
SK	316	B	Db206			17前?	411>316
SD	317	B	Db204-206	28			317>416
SK	318	B	Cs-Ct208-209				
SK	319	B	Cs209				
SK	320	B	Cs209				
SK	321	B	Db208				
SK	322	B	Db208				322>327
SK	323	B	Da208				
SK	324	B	Da208				
SK	325	B	Ct-Da209				
SK	326	B	Da-Db208-209	29		17後葉	

報告編

遺構種別	遺構番号	面	東大グリッド	遺構図 (Ⅲ-a)	遺物図 (Ⅳ-a)	年代	切合
SK	327	B	Db208	29		17後?	322>327
SK	328	B	Ct-Da207-208			?	
SD	329	B	Da208				
SK	330	B	Da208			18前?	
SK	331	B	Da208-209				333>331
SK	332	B	Ct209				
SK	333	B	Ct-Da209	29	20	17前?	333>331
SK	334	B	Ct209				
SK	335	B	Ct-Da208				
SK	336	B	Ct208			?	
SK	337	B	Ct-Da208	29	20	18?	
SK	341	B	Da209				
SK	342	B	Ct208				
SK	345	B	Da-Db205				
SK	346	B	Da-Db205				
SK	347	B	Db205-206				
SK	351	B	Db205				
SK	352	B	Da-Db205				
SK	353	B	Da-Db205				
SK	354	B	Cs208				
SK	355	B	Cs207-208	30~32	20~21	17後	355>449
SP	357	A	Cs206				
SP	358	A	Cs207				
SP	359	A	Cs207				
SP	360	A	Ct207				
SK	362	B	Db209				
SK	363	B	Da208				
SP	364	A	Cs207				
SK	366	B	Da208				
SD	367	B	Cr-Ct208			18?	367>394, 449
SK	368	B	Cs-Ct208				
SK	369	B	Cs208				
SK	370	B	Cs209				
SK	371	B	Cs208-209				
SK	374	B	Ct207-208			17後-18前?	375>374
SK	375	B	Ct207	33			375>374, 376, 377, 434-437-438
SK	376	B	Cs207	33		17後?	375, 376>377
SK	377	B	Cs-Ct207	33	21	17後?	375>377
SK	378	B	Cs206-207				
SK	379	B	Cs206				
SK	380	B	Cs206				380>449
SK	381	B	Da207-208	33	21	17後葉	279, 288, 289, 290, 291, 382>381>440, 449
SK	382	B	Da207-208	34		17後	382>381
SK	383	B	Da207-208				
SK	384	B	Da207				
SK	386	B	Cq-Cr205	34	21~22	17後葉	286>386
SD	387	B	Cq205-206	35		?	398, 460, 525, 534>387
SD	388	B	Cq205-206	35			
SK	389	B	Cp-Cq205-206				
SD	390	A	Cq205-206	34			
SK	391	B	Cq-Cr206-207				
SK	392	B	Cp-Cq206				
SK	393	B	Cq206-207			17?	464>393, 524
SD	394	B	Cr206-210	36	22	19前-中?	367, 454, 522>394>395, 484, 516, 532, 541, 544, 545, 557, 560, 611, 612, 708(537), 543, 549
SK	395	B	Cr-Cs207				394>395>449
SK	396	B	Cr-Cs206	37			286>396>449

第Ⅱ章 調査の経緯と概要

遺構種別	遺構番号	面	東大グリッド	遺構図 (Ⅲ-a)	遺物図 (Ⅳ-a)	年代	切合
SK	398	A	Cq207	37	22~23	17後葉	398>387
SD	401	B	Db208, Dc207-208				153>401
SK	402	B	Dc207				
SK	403	B	Dc207				111>403
SK	404	B	Dc207				
SK	405	B	Db207				156, 185>405
SK	406	B	Db207	37		17後-18初	101, 408>406
SK	407	B	Db-Dc206				101, 407>408>406
SK	408	B	Db-Dc206-207	38		17後葉	101, 407>408>187, 406
SK	409	B	Dc-Dd206-207				
SK	410	B	Db205				
SD	411	B	Db207	38			101, 156, 315>411>316, 412, 413
SK	412	B	Db207				316, 411>412
SP	413	B	Db207	38			316, 411>413
SK	415	B	Da205				
SK	416	B	Da-Db205				317>416
SE	417	B	Db-Dc205	39			
SK	418	B	Dc205	39		17後?	162>418
SK	419	B	Db204				
SK	420	B	Db204-205				
SK	421	B	Da206				421>434-437-438
SK	422	B	Ct-Da206			17後?	422>429
SK	423	B	Db205				
SK	424	B	Ct206				424>425
SK	425	B	Ct206-207	39		17?	107, 424>425>426
SK	426	B	Ct206-207			?	425, 434-437-438>426
SP	427	B	Da208				
SD	428	B	Cs205-209	30~32	23~24	17後-18初、近代	454>428>449
SK	429	B	Ct-Da206	40	24	17後-18初	422>429>442, 443
SK	430	B	Cs-Ct205-206				
SK	431	B	Ct205-206				
SK	432	B	Ct206				
SP	435	B	Ct206				
SK	436	B	Dz-Db207				
SK	434-437-438	B	Ct-Da206-207	40	24	?	375, 421, 442>434-437-438>426
SK	439	B	Da207				
SP	440	B	Da207				381>440
SK	441	B	Ct205-206				
SK	442	B	Ct-Da206				429>442>434-437-438, 443
SK	443	B	Ct206				429>442>443
SK	444	B	Da206-208			17後?	
SK	445	B	Cs205-206, Ct205			?	286>445
SK	446	B	Cs-Ct205			17中	
SK	447	B	Cs207				
SD	449	B	Cs205-210	43		?	286, 355, 367, 380, 381, 395, 396, 428, 458, 513>449>455, 456, 500, 550
SK	451	B	Co-Cp208				451>465
SE	452	B	Cr207				
SK	453	B	Cp208			17?	
SK	454	A	Cr-Cs208-209	41	25	17、近代	103, 523>454>394, 428, 487, 544, 548
SD	455	B	Cs205				449>455
SK	456	B	Cs205				449>456
SP	457	A	Cq-Cr208				
SD	458	B	Cs205				458>449
SK	459	B	Cp-Cq208	41	25		459>460, 479, 632, 633, 635
SD	460	B	Co208-209, Cq208	44			459, 462, 465, 471, 474, 475, 481>460>387, 602, 606, 607, 608, 627, 632, 633, 635, 655, 660
SD	461	B	Cq208			?	

報告編

遺構種別	遺構番号	面	東大グリッド	遺構図 (Ⅲ-a)	遺物図 (Ⅳ-a)	年代	切合
SK	462	B	Cq207-208			17中	462,465>460
SK	463	B	Cp207,Cq207-208	42	25	17?	462>460,463
SK	464	B	Cq206-207	42	25	?	465>464>393,524
SK	465	B	Co-Cp208	42	25	17後	451>465>464,460,471,473,474,602,607,648
SD	466	B	Cq208-209			18後	479>466>621,626,659
SK	468-565	B	Cq207-208				
SK	469	A	Cp209-210	45	26~27	19-近代	469>470,472,495,498,499,500,622,646,657,663,664
SU	470	A	Cp209-210	45	27	19前-中	469>470>472,499,500,622,670
SK	471	B	Co-Cp208-209				465>471>460,602,607
SP	472	A	Cp209-210	45			469,470>472>500
SD	473	B	Cp208				465>473
SK	474	B	Co208				465>474>460
SK	475	B	Cp208				475>460
SK	476	B	Cp207			?	476>477,478
SK	477	B	Cp207			?	476>477,478
SK	478	B	Cp207-208			17?	476>477,478
SK	479	A	Cq208				459>479>466,621,630
SK	480	B	Cp207				
SK	481	B	Cp208				481>460
SK	482	A	Cp210			近代	482>499
SP	483	A	Cq208				483>485
SK	484	A	Cq209,Cr208-209				103,484,488>484>647
SK	485	B	Cq-Cr208-209			17?	483,466>485>484,621,647,659
SK	486	A	Cq208				
SK	487	B	Cr-Cs209				103>454>487>621
SK	488	A	Cq-Cr209			?	103>488>484
SK	489	B	Cq-Cr209			17、近代	
SK	490	A	Cq209			19中?	490>492-2
SK	491	A	Cq-Cr209				
SP	492	A	Cq209				103>492-1,492-2>605
SK	493	A	Cq209			?	493>495
SK	494	A	Cq209				
SK	495	A	Cq209				493,469>495
SK	496	B	Co208-209				496>602
SK	497	A	Cr-Cq209				497>646
SK	498	B	Cp209				469>498>646
SK	499	A	Cp209-210	46	28~29	19中	469,470,500>499>670
SK	500	A	Cp209-210	45	29	近代	449,469,470,472>500>499,670
SK	501	B	Cr205-206				286>501
SB	502	A	Cs209				
SP	504	B	Cq206	35			
SK	505	B	Cr-Cs206-207	46	29~30	17?	
SK	506	B	Cq-Cr206	46	30	19?	286>506>509
SP	508	A	Cr207				
SK	509	B	Cq-Cr206-207	47	30		506>509>287,467,537
SK	511	B	Cs209				
SK	512	B	Cs209				
SK	513	B	Cs209			17?	513>449
SK	515	B	Db204-205				
SK	516	B	Cr-Cs206				394>516
SK	517	B	Cr208			?	517>394
SK	519	B	Cq-Cr208			?	519>545
SK	520	A	Cr207				
SB	521	A	Cq-Cr207				
SK	522	B	Cr207	47	31	17前	522>394
SK	523	A	Cr208	48		18?	523>454,544
SK	524	B	Cq207			?	464>524>525,534

第Ⅱ章 調査の経緯と概要

遺構種別	遺構番号	面	東大グリッド	遺構図 (Ⅲ-a)	遺物図 (Ⅳ-a)	年代	切合
SK	525	B	Cq207			17前	524>525>387
SD	530	B	Cr207-208	48	31	近代?	530>555
SK	531	B	Cr-Cs207				
SK	532	B	Cr207				394>532
SK	533	B	Cr-Cs207-208				
SK	534	B	Cq207				534>387,536
SK	535	B	Cq207	49	31		
SK	536	B	Cq207	49	31		534>536
SK	537	B	Cr206-207				509>537
SK	538	B	Cr207				
SK	539	B	Cr207				
SK	540	B	Cr207				
SK	541	B	Cr207				394>541
SK	542	B	Cr208-209			?	
SK	543	B	Cr208				394>543
SK	544	A	Cr208				394,523,454>544>548
SK	545	A	Cq208			18?	394,519>545>554
SP	546	A	Cq208			17後?	
SK	547	B	Cq-Cr207-208			17前	547>555
SK	548	A	Cr208				454,544>548
SK	549	A	Cr208			17?	394>549
SK	550	B	Cr-Cs208-209				449>550
SK	551	B	Cr208				
SK	552	B	Cr-Cs208-209				
SK	553	B	Cr-Cs208-209				
SK	554	B	Cq-Cr208				545>554
SK	555	B	Cq-Cr207-208	49		17末-18初	530,547>555
SD	556	B	Cq-Cr207				
SK	557	B	Cr208				394>557
SK	558	B	Cr208				
SK	559	B	Cr207-208				
SK	560	B	Cr209				394>560
SK	561	B	Cr209				
SK	562	B	Cq-Cr207				
SK	563	B	Cr207				
SK	564	B	Cr207				
SD	602	B	Co208	50	31	18前	471,465,496>602>671
SP	603	B	Co208				
SP	604	B	Co208-209	50		17中?	604>460,660
SP	605	B	Cq209	50	31		492,609>605>628
SD	606	B	Co207-208	50		?	460,475>606
SD	607	B	Co-Cp208-209	51	31	18前	460,465,471,632,634,635>607>626,633,634,638,648,654,655
SD	608	B	Cq208				460>608
SP	609	B	Cq209				609>605
SK	611	A	Cr209-210				394>611
SK	612	A	Cr209-210				394>612
SK	613	A	Cr-Cs209				
SK	614	B	Cr209				
SK	615	B	Cr209				
SK	616	B	Cr209				
SK	617	B	Cr209				
SK	618	B	Cr209				
SK	619	B	Cr209				
SK	621	A	Cq208	51		近代	466,479,485,487,623>621>629,659
SK	622	A	Cp-Cq209-210	52	31~34	近代	469,470>622>624
SP	623	A	Cq208			?	623>621
SK	624	A	Cq-Cr209-210	52	34~37	近代(~M10s)	622>624>625,649

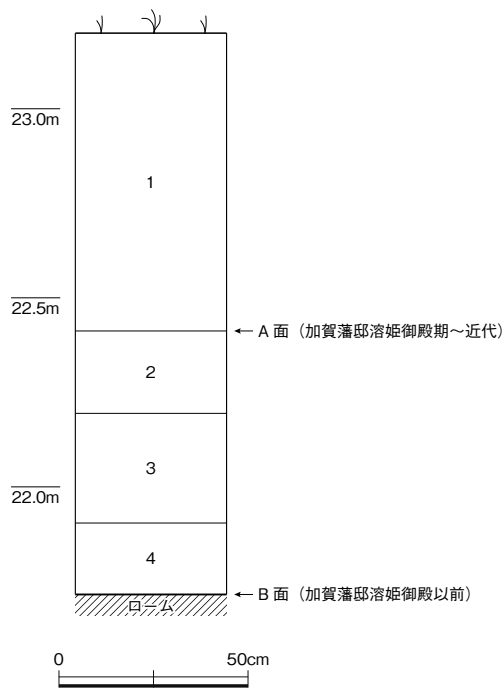
報告編

遺構種別	遺構番号	面	東大グリッド	遺構図 (Ⅲ-a)	遺物図 (Ⅳ-a)	年代	切合
SK	625	A	Cq209	52	37~38	近代	607,624>625
SK	626	B	Cq208-209	51	39	17後	103,466>626>628,645,650,652,653,654
SK	627	B	Co208				460>627
SK	628	B	Cq209				466>605,626>628
SD	629	B	Cq-Cr208			17中?	621,632>629
SP	630	A	Cq208				486,479>630
SK	631	B	Co208				
SK	632	B	Cq208	53	39	17	459,460>632>607,629,634,635,645,646,654
SK	633	B	Cp208	53		?	459,460,607>633>634,635
SK	634	B	Cp-Cq208	53	39		459,632,633>634>607,635
SK	635	B	Cp-Cq208	53	39	17前	459,460,632,633,634>635>607
SK	636	B	Cp209	54		?	637,639>636>638,646,647,650,657
SK	637	B	Cp209				
SK	638	B	Cp208-209			17後	
SK	639	B	Cp209			17後?	
SK	640	B	Co207-208	55		17前	641・642・643>640
SK	641-642-643	B	Co206-208,Cp207	55	39~43	17前	641・642・643>640
SP	644	B	Cp207				
SK	645	B	Cq208-209				626,632>645>653
SK	646	B	Cp-Cq209	54	43	17後	103,469,497,498,632,636,650>646
SK	647	B	Cq208-209	54			484,485,652>647
SK	648	B	Cp208	56		?	465,607>648
SP	649	A	Cq210				624>649
SK	650	B	Cp-Cq208-209			17前?	626>650>646
SK	652	B	Cq208-209			17	626>652
SK	653	B	Cq208-209	56		17	626,645,654>653>650
SK	654	B	Cq208-209				626,632>654>653
SK	655	B	Co208,Cp208-209				660>655
SK	656	B	Co208-209				
SK	657	B	Cp209				469>657
SK	658	B	Cq208				
SK	659	B	Cq208	56	43	17?	466,485,621>659
SK	660	B	Co208-209,Cp209			17後	660>655
SK	661	B	Cp209			?	
SK	662	B	Cp209	56		17前?	661>662>663,665
SK	663	B	Cp209			?	469>663
SK	664	B	Cp209				469>664
SK	665	B	Cp209				
SK	666-667 668-669	B	Co-Cp209			?	
SD	670	B	Cp210				470,499,500>670
SK	671	B	Co208				602>671
SK	672	B	Cp209				672>469>472>500
SP	673	B	Co-Cp209				
SK	674	B	Co208				
SK	675	B	Co208				
SD	700	B	Da208				
SD	701	A	Cr205-206,Cs206-207				701>208,213
SK	702	A	Ct207-208				110>702
SK	703	B	Dc-Dd207				
SP	704	B	Da208				
SP	705	B	Ct207-208				
SK	706	B	Cs207-208				
SP	707	B	Da208				
SK	708	A	Cr209				103>708>394,484
SP	709	A	Dc206-207				
SP	710	A	Da-Db207				

第4節 基本層序 (Ⅱ-3図)

調査前の調査区は、植え込み(緑地帯)であり、表土は、しまりの弱い暗茶褐色土(腐葉土)が覆っていた。この植え込みは昭和41(1966)年に経済学部研究棟(現在の赤門総合研究棟)の建築の際に壊された椿山(旧富士山)周辺の緑地帯が残ったものである。明治10年代には、現在の赤門から龍岡門の間には大学病院が占有していたが、明治20年代くらいから現在ある東側に医学部や病院機能を移している。大学病院を建設した大学最初期に、椿山周辺には赤門から病院までの道ができていたことから、この段階で当該地周辺の造成が行われ、調査区の表土が形成されたと推定される。表土は、標高23.1~23.3mから50~70cm程度の厚さで調査区全域から確認されている。この表土を剥いた遺構検出面が、おおむね標高22.4~22.6mで確認されたA面であるが、これは以上の経緯から生活面ではない。A面からは江戸時代後期の遺構を中心に確認されている。一方、南東側に位置する御殿空間の医学部教育研究棟地点における上

屋敷時代の面(C面)のレベルは、おおよそ22.6mである。本地点A面から確認された溶姫御殿に伴う基礎がおおむね削平を受けて根石のみの遺存状況であることを勘案すると、溶姫御殿期の生活面は、数十cm程度は高かったと思われる。その下面のローム面までは、盛土と植栽を中心とした多くの遺構によって凹凸が激しいが、最も高いレベルで確認された関東ローム層上面(B面)は、標高22.2m付近であった。この間の盛土の堆積状況は、短期間の地業による嵩上げと判断できないほど不規則なものであった。藩邸期に植樹帯として利用していた当該地域は、多くの土の搬入や樹木の植え替えによって長期間の中で徐々に嵩上げが進行したかにも見える。B面からは、藩邸時代最初期に遡る遺構や遺物が出土しており、当該地域が加賀藩拝領初期に開発された地域に近接した場所と推定される。また、武蔵野標準層位Ⅲ層以上の自然堆積層は認められなかったことから、江戸時代初期に土地の大きな削平、造成を行っている可能性が高い。



- 1 暗茶褐色土 (近代~現代の盛土、粘性・しまり弱)
- 2 暗褐色土 (粘性・しまりなし)
- 3 暗褐色土 (φ10mmの黄褐色ロームB・炭化物B多含、φ10mmの石少含、粘性なし)
- 4 黄褐色土 (粘性・しまりなし)

Ⅱ-3図 基本層序 (模式図)

第三章 遺構

本地点は、近代初頭に行われた帝国大学構内整備による地ならし造成やその後に埋設された配管とそれに伴うハンドホール等によって江戸時代の遺構や層は少なからず削平を受けていた。第Ⅱ章でも触れたが、本地点の土地利用－遺構の状況－は、藩邸初期（寛永期）から確認され、文政10（1827）年に造られた溶姫御殿（御住居、御守殿）に伴うA面の造成を契機に大きな変化が窺えた。土地利用の詳細は、第Ⅰ章第2節遺跡の地理的・歴史的環境、第Ⅱ章第3節遺構の概要、研究編を参照されたい。

遺構の内訳は、建物基礎1群、塀列1基、地下室6基、溝状遺構40基、井戸3基、炉跡1基、土坑・ピット393基、性格不明遺構5基の453基であった。

SB1（遺構Ⅲ-1～3図、遺物Ⅳ-1図）

調査区東側A面に広がる建物基礎群である。重機によって近代盛土を除去した面に大小の自然石、加工された石が多く確認された。このうち、配列から原位置を保持している可能性が高い38基をSB1の個別図として図化した。その他の石ももともとは建物基礎に利用されていたと推定している。石はN-9°-Wの中山道軸を主軸とし、1間（江戸間）間隔で配されていた。石の大きさは、おおむね径20～70cmであり、一見、等間隔で配石された状況にはなかった。また、石周囲の精査を行ったが、掘り込みが確認できたものは、配石8～9および14～16のみで、根石を伴う各建物基礎の堀方坑底付近まで削平を受けたと判断された。遺存していた配石8、9は、比較的小型の加工礫を用いて搗き固めた状況であったのに対して、配石14、15は大型の自然石を坑底中央に設置し、その上に複数段積み上げる方法で、構築工法が大きく異なっていた。また、配石26に「四百四十」、表土中から「下石四百九」、「△」など配石のいくつかには朱書きで文字が書かれているものが確認され、これらの石は段数は不明であるが上下に置くことを想定したものと判断された。医学部教育研究棟地点でも多く検出された前者の工法では、石周囲を含めて搗き固められた硬化域が広がるが、こうした状況ではなかったことから、表御殿より簡易な構造物に用いたと推定される。また、御殿下記念館地点（梅之御殿）でも多く検出された後者の工法は、藩邸内で江戸時代後期に用いられたと考えられる。配石8、9は円形の堀方を持ち、規

模は共に径70cm、深さは最大20cmを計測する。凝灰岩が破碎された状況で充填されており、搗き固めたことが窺える。最も良好に堀方が遺存していた配石14、15は、調査の過程で入れたサブトレンチによって平面形が復元できなかったが、方形あるいは隅丸方形を呈し、やや扁平な自然石を二段重ねた状態で検出された。下段の石は堀方の坑底に置かれ、顕著な搗き固めは確認されなかった。配石14の規模は東西60cm、南北90cm、深さは最大60cm、配石15の規模は東西70cm、南北110cm、深さは最大60cmを計測する。覆土は14は2層、15は単層である。

遺物は、陶磁器・土器、瓦が少量出土している。図化した瓦は、1、2が配石14、3が配石12から出土している。

SA103（遺構Ⅲ-5～9図、遺物Ⅳ-1図）

調査区南Co-Cs209、Cs-Db208区、A面で確認された東西に横断する石積みの遺構である。遺構の主軸はN-82°-Eで、おおむね中山道軸である。帝国大学時代の削平によって5箇所切断されており、遺構の遺存はやや不良である。SK454、SK492、SK484、SK708等を切って構築されている。便宜的に東側からSA103-1～6の番号を付与した。規模は、長さ42.7m、幅は最大1m、深さは最大110cmを計測する。溝には拳から人頭大の自然石や角礫が密に上下二段に配され、上段の石はおおむね標高22.9mで面を作り出していた。下段は幅50cmで大型石が多く、上段は所々最大1m幅で遺存していた。溝の断面形は箱形を呈し、フラットな溝底より壁はやや開きながら立ち上がっている。覆土は3層に分層される。遺構の位置と構造、絵図面との対比から、近代前田侯爵邸の境溝と推定される。

遺物は、17世紀後半の陶磁器、瓦、釘などが出土しているが、周囲の遺構からの混入であろう。

SU107（遺構Ⅲ-10～12図、遺物Ⅳ-1～11図）

調査区ほぼ中央Cs205-Ct207区、A面で確認された長方形を呈する石積みの地下室で、遺構の主軸はN-11°-Wである。遺構南側でSK109と重複し、本遺構が旧である。遺構は、北西隅に北方へ上がる階段部と、室になる主体部からなる。遺構の規模は、階段部を含めた長さ750cm、幅最大390cm、深さは室床面までが210cm、床下施設下面までが380cmを計測する。室四方の側壁は、一辺約30cm、奥行き30～50cmの間知石を用いていわ

ゆる切込剥ぎで積まれているが、遺存していたのは床面から5段のみであった。それより上位は、堀方壁面の間知石の裏込石が遺構検出面まで遺存していたことから、廃棄直前に抜き取られたと想定された。土層の堆積状態からは、間知石が遺存していた30層以降は土層がフラットに堆積し、かつ30層には裏込石が多く確認されていることから、30層までは建物倒壊時の堆積、30層が間知石抜き取り時の堆積、7層以上が火災瓦礫の廃棄に伴う堆積と判断された。間知石で構築された室の規模は、長辺430cm、短辺280cmで、北西隅に幅110cmの石段が5段分確認された。ステップは、丁寧に加工された一辺25cm、長さ85cm程度と一辺25cm、長さ30cm程度の直方体の安山岩の石を用いて、組み合わせて造られていた。5段目ステップの高さは、室部床から約130cmで、それより上段は段が設けられた堀方のみ確認されたことから、廃棄時には石段石も抜き取られたものと推定された。室部南側中央には、外寸100cm、内寸80cm、深さ130cm程度の方形に石囲いされた床下施設が設けられていた。この施設の石は長さ75cm、幅20cm強、厚さ10cm程度の板状の凝灰岩で、これを方形に5段積みでいた。積み方は、内側から見て石の左側がわずかに垂直方向の石面にかかるようにしており、各段に生じた隙間には瓦を挟んで調整を行っていた。また、最上段の石上端部には、3cm程度の受け状の切り込みが確認され、施設には蓋が取り付けられていたと推定された。床下施設の坑底は、最下段の石中位あたりにフラットに造られ、その内側には50cmの間隔で4箇所の方小ピットが確認された。機能は不明である。室部の床面は、荒掘り後に薄くローム土でフラットに固め、その上面には炭化した筵状の炭化物が検出したことから、筵を床に敷き詰めていたと判断された。

覆土は、55層に分層された。間知石室内には焼土、二次的に被熱した破碎瓦、漆喰、炭化物を多量に含む土を中心に、遺構上半が南から北へ流し込んで埋められたように堆積していた(Ⅲ-11図上部土層堆積図参照)。裏込石が多く廃棄されていた間層(30層)を挟んで、室内下半はそのような状況は看取できなかった。40層以下は、焼土が検出されていないことから、石を固定する堀方との間層であろう。

遺物は、焼瓦と瓦を止めた鉄釘が多量に出土している他、二次的に被熱した陶磁器・土器類、砥石、金属製品が少量出土している。陶磁器に書かれた「御膳所」の墨書、「御末」の刻書などは、場を示す資料として重要である。遺構の覆土の状況、遺物の状況より、本遺構は、火災による廃棄と考えられるが、出土遺物の年代から慶

応4(1868)年間4月17日に起きた本郷邸が全焼した火災と判断された。

SK108 (遺構Ⅲ-4図)

調査区中央やや東Da206区、A面で確認されたややいびつな方形の土坑である。遺構の規模は、東西90cm、南北90cm、深さは最大50cmを計測する。坑底中央には、径50cm、深さは30cmの円形のピットとその周囲に4基の径10cm弱の小ピットを持つ。坑底や壁は凹凸があり、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は、3層に分層され、上層には炭火物を含む灰が確認された。

遺物は、出土していない。

SK110 (遺構Ⅲ-4図、遺物Ⅳ-12～14図)

調査区ほぼ中央Ct208区、A面で確認された隅丸方形の土坑である。遺構の東側でSK702を切って構築されている。遺構の主軸はN-7°-Wである。遺構の規模は、東西160cm、南北130cm、深さ130cmを計測する。坑底や壁は、やや凹凸を有し、壁は坑底からやや開きながら立ち上がっている。覆土は7層に分層される。全体的に人工遺物、動物遺体が出土しているが、特に3～5層から多く確認されている。

遺物は、19世紀前半の陶磁器・土器類3箱、瓦1箱、砥石、釘、針金などの人工遺物、動物遺体が多く出土している。

SK119 (遺構Ⅲ-13図)

調査区東Dc207区、A面で確認された方形土坑である。SD141を切って構築されている。遺構の主軸は、N-10°-Wである。本遺構の西側にあるSK121、SK120と約半間間隔で並び、同時期に機能したものと推定される。遺構の規模は、一辺55cm、深さは浅く5cmを計測する。遺構の壁際には、僅かではあるが、木部が遺存しており、木組みであったと思われる。覆土は、暗灰褐色土単層である。規模、覆土の状況から、SK119、SK120、SK121の3基で並ぶ便所遺構の可能性が高い。

遺物は、陶磁器類、釘が少量出土している。

SK120 (遺構Ⅲ-13図)

調査区東Dc207区、A面で確認された方形土坑である。遺構の主軸は、N-10°-Wである。本遺構の東側にあるSK121、SK119と約半間間隔で並び、同時期に機能したものと推定される。遺構の規模は、一辺60cm弱、深さは浅く5cmを計測する。遺構の壁際には、僅かではあるが、木部が遺存しており、木組みであったと思われる。

覆土は、暗灰色土単層である。規模、覆土の状況から、SK119、SK120、SK121の3基で並ぶ便所遺構の可能性が高い。

遺物は、陶磁器類、釘が少量出土している。

SK121（遺構Ⅲ-13図）

調査区東 Dc207 区、A 面で確認された方形土坑である。遺構の主軸は、N-10° -W である。本遺構の西側の SK121、東側の SK119 と約半間間隔で並び、同時期に機能したものと推定される。遺構の規模は、一辺 60cm 弱、深さは最大 10cm を計測する。遺構の壁際には、僅かではあるが、木部が遺存しており、木組みであったと思われる。覆土は、2 層に分層されるが灰色土が多く含まれている。規模、覆土の状況から、SK119、SK120、SK121 の 3 基で並ぶ便所遺構の可能性が高い。

遺物は、出土していない。

SK122（遺構Ⅲ-13図）

調査区東側 Da-Db207 グリッドに位置する方形土坑である。検出面は A 面。遺構の主軸は N-81° -E である。立ち上がりは垂直で、底部は平坦である。長軸 147cm、短軸 96cm、深さ 56cm。東西の両壁面に接して浅い掘り込みがある。覆土が残っている東側ではこの部分に、茶褐色を呈した木材の腐植と考えられる土層が堆積していた（4 層）。土坑の土留として貼られた板の一部と考えられる。最下層の 5 層、6 層は灰褐色土層で、木材の腐植土を含んでいる。遺構の形態と覆土の状況から本遺構は便所と考えられる。また覆土に含まれた木材の腐食部は便所の壁板や床板の痕跡だろう。

遺物は、出土していない。

SU123（遺構Ⅲ-13図、遺物Ⅳ-15図）

調査区北 Ct205 区、B 面で確認された地下室である。遺構北側が調査区外にあり、遺構全体の様子は復元できなかった。遺構の南側で SK144 と重複し、本遺構が新である。開口部は長方形を呈し、遺構南側で、東、南方向にオーバーハングしている。遺構開口部の主軸は、N-16° -W である。本遺構の南側同軸上に SU429 が並び、両遺構は同時期に機能した可能性が高い。遺構の規模は、開口部で長辺 240cm（南北）、短辺 110cm、深さは最大 210cm を計測する。遺構の壁や坑底は、平滑に調整されているが、東側にオーバーハングしている室部には平刃の工具痕が明瞭に残っていた。掘削、あるいは拡張途中で放棄された可能性も考えられる。開口部の壁は、坑底から垂直に立ち上がっている。覆土は、10 層に分層さ

れる。

遺物は、17 世紀後葉の陶磁器・土器類、瓦が 10 数点出土している。

SX133（遺構Ⅲ-14図）

調査区東側 Dc207 区、A 面で確認された石組みである。石に伴う明確な掘り込みなどは、確認できなかった。石はやや軟質な凝灰岩と安山岩で、石の並びは N-33° -E である。確認された石のうち、エレベーションとして図化した板石 4 石は、プライマリーな状態と判断できるが、その他は動いている可能性もある。4 石の石列の長さは 80cm を計測する。本遺構の性格は、明確ではないものの遺構の位置から殿舎の基壇の一部の可能性はある。

SK134（遺構Ⅲ-14図、遺物Ⅳ-15図）

調査区南東隅 Dc208 区、A 面で確認された土坑である。遺構北側を近代以降の埋設管に切られ、遺構全体の様子は復元できなかった。SD138 と SK159 を切って構築されている。遺存している遺構の規模は、東西 150cm、南北 70cm、深さは最大 30cm を計測する。遺構の壁や坑底は、やや凹凸を有し、壁は開きながら立ち上がっている。覆土は 5 層に分層されるが、2 層は瓦が多く含まれていた。

遺物は、19 世紀から近代の陶磁器・土器類が少量と瓦が出土している。

SK140（遺構Ⅲ-14図、遺物Ⅳ-15図）

調査区北 Da205 区、B 面で確認された円形の土坑である。規模は、東西 200cm、南北 190cm、深さは最大 40cm を計測する。遺構の壁や坑底は、凹凸が顕著で、壁は開きながら立ち上がっている。覆土は 3 層に分層される。規模、形態、壁や坑底の状況から植栽痕であると推定される。

遺物は、陶磁器・土器類、瓦が少量出土している。

SD141（遺構Ⅲ-14図、遺物Ⅳ-15図）

調査区北 Da205 区、A 面で確認された溝である。北側で SK119、南側で SK132、東側で SK111 と重複しており、新旧は SK119、SK132 より旧、SK111 より新である。遺存している規模は、長さ 50cm、幅 30cm、深さは最大 20cm を計測する。遺構の壁や坑底は、やや凹凸があり、壁はやや開きながら立ち上がっている。覆土は茶褐色土単層である。

遺物は、陶磁器・土器類、瓦が少量出土している。

SP146 (遺構Ⅲ -14 図)

調査区南東 Da-Db208 区、A 面で確認された坑底に配石を伴うピットである。規模は、東西 50cm、南北 50cm、深さは 80cm を計測する。配石は、割れた自然石の平面を上面に設置していた。遺構の壁や坑底は、やや凹凸があり、壁は坑底から垂直に立ち上がっている。覆土は 4 層に分層され、下層には柱の痕跡が確認された。構造物の基礎であろう。

遺物は、出土していない。

SK147 (遺構Ⅲ -15 図、遺物Ⅳ -15 図)

調査区南東 Dc207 区、A 面で確認された不正円形の土坑である。SD185 を切って構築されている。規模は、東西 80cm、南北 70cm、深さは 30cm を計測する。遺構の壁や坑底は、やや凹凸があり、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は 3 層に分層され、1 層が 2、3 層を切って立ち上がっているように観察された。2 基の遺構の重複の可能性もある。

遺物は、陶磁器・土器類が少量出土している。

SK153 (遺構Ⅲ -15 図、遺物Ⅳ -15 図)

調査区南東 Dc207 区、B 面で確認された東西に主軸を有する長方形の土坑である。遺構の主軸は、N-88° -E である。SD185、SD401 を切って構築されている。規模は、東西 160cm、南北 110cm、深さは最大 50cm を計測する。遺構の壁や坑底は、凹凸があり、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は 4 層に分層され、2 層に多くの焼土の混入が認められる。

遺物は、陶磁器・土器類が 1 箱の他、釘が多く出土している。

SK156 (遺構Ⅲ -15 図、遺物Ⅳ -15 図)

調査区南東 Db207 区、A 面で確認された東西に主軸を有するいびつな長方形の土坑である。遺構の主軸は、N-81° -E である。SK169、SK405、SD411 を切って構築されている。規模は、東西 145cm、南北 80cm、深さは最大 100cm を計測する。遺構の壁や坑底は、凹凸があり、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は 5 層に分層され、2、3 層には多くの灰が認められる。ある段階のイロリの可能性もあろう。

遺物は、陶磁器・土器類が 1 箱の他、瓦、釘が出土している。

SK158 (遺構Ⅲ -15 図)

調査区東側 Dc206 グリッドに位置する円形土坑であ

る。検出面は B 面。遺構の南側上部を SK157 が切っている。長軸 108cm、短軸 106cm、深さ 54cm。立ち上がりは急斜度で、底面は平坦に整形されている。

遺物は出土していない。

SK162 (遺構Ⅲ -16 ~ 18 図、遺物Ⅳ -15 図)

調査区北東 Db204-205 区、B 面で確認された遺構である。遺構の東側が調査区域外で、遺構全体の様子は復元できなかった。遺構の主軸は N-82° -E で、ほぼ中山道軸である。南側で SK412 と重複しており、SK412 を切って構築されている。本遺構の構造は、南北両壁沿いに 40 ~ 50cm 間隔で、15cm 程度の柱痕を伴うピットが合計 19 基並び、遺構の東西から中央に向かってひな壇状に傾斜がつけられていた。中央は一辺 130cm の方形の落ち込みがあるが、この中には安山岩や凝灰岩の加工石片が乱雑に充填され、その上に長さ 280cm、厚さ 10cm 弱で硬化したフラット面を作り出していた（北側柱穴土層図 2 層、中央部土層図 13 層）。フラット面両脇には、長さ 80cm、幅 25cm、厚さ 10cm 程度の板石が面を上にして設置され、階段としての利用が推定された。西側の板石は破損していた。確認できた遺構の規模は、長さ（東西）500cm、幅（南北）150cm、深さは最大 160cm を計測する。遺構の坑底や壁は、凹凸があり、南北壁は坑底から垂直に立ち上がっている。中央の凹みの機能は、雨水の浸透のためであろうか？ 遺構の構造から廊下などをアンダースルーする下掃除などを行う者の通り抜け通路と推定される。絵図面との対比では、宝永 5 (1708) 年に入興した松姫（光現院）御守殿と表の大書院とを繋ぐ廊下に 2 本の階段通路が描かれており、これの可能性が高い。出土遺物の年代とも齟齬はない。

遺物は、17 世紀末の陶磁器・土器類が 10 数点と釘が出土している。

SP174 (遺構Ⅲ -15 図)

調査区南東 Db206 区、A 面で確認された円形のピットである。SK168 と重複しており、新旧は、本遺構が新である。規模は、直径 35cm、深さは最大 30cm を計測する。遺構の坑底や壁は、やや凹凸があり、壁は坑底からやや開きながら立ち上がっている。覆土は黒褐色土単層である。

遺物は、陶磁器・土器類、瓦、釘が少量出土している。

SK176 (遺構Ⅲ -19 図)

調査区北東 Db205 区、A 面で確認された方形のピットである。加工された石を 2 段に積み、平面を上にして

設置されている。規模は、東西 40cm、南北 40cm、深さは最大 25cm を計測する。遺構の坑底や壁は、やや凹凸があり、壁は坑底からやや開きながら立ち上がっている。2層に分層される。

遺物は、出土していない。

SK179 (遺構Ⅲ -19 図、遺物Ⅳ -15 図)

調査区南東 Db206 区、A 面で確認された東西に広がりを持つ不整形の土坑である。SK168、SK169、SP178 と重複しており、新旧は、SK169、SP178 より旧、SK168 より新である。規模は、東西 230cm、南北 140cm、深さは最大 80cm を計測する。遺構の坑底や壁は、凹凸があり、壁は坑底からやや開きながら立ち上がっている。覆土は、8層に分層されるが、6、7層には灰が混入しており、灰などを捨てた土坑とも考えられる。

遺物は、17 世紀後葉と 19 世紀前葉の陶磁器・土器類、瓦、釘が出土している。

SK181 (遺構Ⅲ -19 図、遺物Ⅳ -16 図)

調査区南壁際 Da-Db206 区、B 面で確認された円形を呈すると推定される土坑である。遺構の南側は調査区域外、中央を配管で切れ、遺存状態は不良である。SK182、SK326 と重複しており、本遺構が新である。遺存している規模は、東西 360cm、南北 210cm、深さは最大 120cm を計測する。遺構の坑底や壁は、凹凸が顕著で、壁は坑底から東壁は開きながら、西壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は 3層に分層される。形態、規模、坑底や壁の状況から移植痕であろう。

遺物は、陶磁器・土器類、金属製品が少量出土している。

SK182 (遺構Ⅲ -19 図、遺物Ⅳ -16 図)

調査区南壁際 Da-Db206 区、B 面で確認された方形を呈すると推定される土坑である。遺構の南側は調査区域外にあり、遺構全体の様子は復元できない。SK181、SK183 と重複しており、両遺構より旧である。遺存している規模は、東西 60cm、南北 60cm、深さは最大 60cm を計測する。遺構の坑底や壁は、やや凹凸を有し、壁は坑底から東壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は 4層に分層される。

遺物は、釘が少量出土している。

SD185 (遺構Ⅲ -20 図、遺物Ⅳ -16 図)

調査区南東 Db-Dc207 区、B 面で確認された東西に主軸を持つ溝である。遺構の主軸は N-82° -E で、ほぼ中

山道軸である。SK132、SK153、SK195、SK196、SK405 と重複しており、SK132、SK153 より旧、SK195、SK196、SK405 より新である。規模は、長さ（東西）430cm、幅 70cm、深さは最大 60cm を計測する。遺構の坑底や壁は、やや凹凸を有し、壁は坑底からやや開きながら立ち上がっている。覆土は 3層に分層される。

遺物は、陶磁器・土器類、釘が少量出土している。

SD187 (遺構Ⅲ -20 図)

調査区南東 Dc205-206 区、B 面で確認された南北に主軸を持つ溝である。遺構の主軸は N-6° -E である。SK191、SK192、SD200、SK408 と重複しており、SK408 より旧、SK191、SK192、SD200 より新である。規模は、長さ（南北）700cm、幅 50～70cm、深さは最大 50cm を計測する。遺構の坑底や壁は、凹凸を有し、壁は坑底からやや開きながら立ち上がっている。覆土は 3層に分層される。

遺物は、出土していない。

SK197 (遺構Ⅲ -20 図、遺物Ⅳ -16 図)

調査区南東壁際 Dc208 区、B 面で確認された円形を呈する土坑である。遺構の北および南側は近代の配管で切れ、遺存状態は不良である。坑底は、壁に沿ってドーナツ状に 5～10cm 程度の凹みを有している。遺存している規模は、東西 290cm、南北 200cm、深さは最大 40cm を計測する。遺構の坑底や壁は、凹凸が顕著で、壁は坑底からやや開きながら立ち上がっている。覆土は 3層に分層される。形態、規模、坑底や壁の状況から移植痕であろう。

遺物は、陶磁器・土器類が少量出土している。

SD200 (遺構Ⅲ -21 図)

調査区北東 Cs-Dc205-206 区、B 面で確認された調査区を東西に貫く溝である。遺構の主軸は N-83° -W である。SK144、SD187、SK188、SX205、SD317、SK346、SK416、SK422、SD428、SK446 と重複しており、新旧は SK144、SD187、SK188、SX205、SK346、SD428、SK446 より旧、SD317、SK416、SK422 より新である。規模は、長さ（東西）17.4cm、幅最大 100cm、深さは最大 110cm を計測する。遺構の溝底や壁は、凹凸を有し、壁は溝底からほぼ垂直に立ち上がっている。遺存している溝底の幅は、40～60cm 程度であり、140～160cm 間隔で大きさ 20～4cm の自然石が溝底に配されていた。土層の観察からは、自然石の上に柱痕と推定される層が確認され（1、5層）、自然石を根石とした塀列の基礎遺

構と推定された。また、同じ軸でほぼ同様の構造を持つSD449は、西側が本遺構を突き抜けていないことから同時期に機能していたと推定している。また、本遺構に接してほぼ同軸の溝遺構であるSD187、SD317も溝底に根石が確認されていないが、同時期に機能していた可能性も考えられる。

遺物は、出土していない。

SK201 (遺構Ⅲ -20 図、遺物Ⅳ -16 図)

調査区中央 Cs207 グリッドに位置する不整形を呈する土坑である。検出面は A 面。長軸 82cm、短軸 43cm、深さ 35cm。遺構の中央部に高まりを有している。

17 世紀後半の陶磁器、金属器が少量出土している。

SK203 (遺構Ⅲ -21 図、遺物Ⅳ -16 図)

調査区中央 Cs206 グリッドに位置する楕円形を呈する土坑である。検出面は A 面。遺構の主軸は N-19° -E である。長軸 96cm、短軸 70cm、深さ 38cm。底部は平坦で 2ヶ所の浅い掘り込みを有している。立ち上がりは急傾斜で、3層の部分で軽く外側に屈曲する。1層から瓦片が出土した。

17 世紀代から 19 世紀代の陶磁器少量と瓦が出土している。

SK210 (遺構Ⅲ -21 図)

調査区北側 Cr205 グリッドに位置する不整形を呈した土坑。SX213 より新である。検出面は A 面。遺構の主軸は N-84° -E である。長軸 94cm、短軸 39cm、深さ 20cm。覆土は 2層からなり、1層は円礫や瓦片を多く含む暗褐色土からなる。2層は円礫を少量含む暗茶褐色土である。底部には礫と瓦がわずかに出土している。

遺物は出土していない。

SD212 (遺構Ⅲ -21 図、遺物Ⅳ -16 図)

調査区南東 Cq205-206 グリッドに位置する溝である。検出面は B 面。遺構の主軸は N-88° -E である。西側は攪乱によって一部が壊されているが立ち上がる。東側は調査区外に続いている。現状長軸 945cm、短軸 61cm、深さ 60cm。壁は垂直に立ち上がる。溝の東側で、1層から瓦が集中して出土した。3層の暗褐色土は柱の痕跡だろう。底部は平坦に形成されているが、柱痕が認められることから塀や柵など区画施設に関連する溝と考えられる。

17 世紀後半と思われる陶磁器や瓦が少量出土している。

SX213 (遺構Ⅲ -23 図、遺物Ⅳ -17 図)

調査区中央北側 Cr205 グリッドに位置する。検出面は A 面。SK210、SD214、SD222、SX253、SK701 に切られている。現状長軸 450cm、短軸 400cm。明確な立ち上がりなどは認められない。黄褐色ロームを主体とした硬化面の拡がりを SX として記録したが、遺構の性格は不明。

19 世紀前半から半ばの陶磁器、瓦、金属製品が出土している。

SD214・SP258 (遺構Ⅲ -23 図)

調査区中央北側 Cr-Cs205-206 グリッドに位置する溝である。検出面は A 面。SX213 を切って構築されている。遺構の主軸は N-13° -W である。検出面の削平が著しく、明確な立ち上がりは不明だった。底部に礎石の痕跡が 2ヶ所で認められる (SD214-P1・P2)。礎石本体は削平されており、根石と掘方がわずかに認められる。P1 と P2 の間隔は 180cm である。SP258 は SD214-P2 の南側 180cm で認められた礎石である。SD214-P1・P2 と並んでいることから、一連の遺構と考えられる。

17 世紀後半と 19 世紀代の陶磁器が数十点出土している。遺物の年代が幅広いのは紛れ込みの資料を含んでいるからだろう。

SU224 (遺構Ⅲ -23 図、遺物Ⅳ -17 図)

調査区南東隅 Dd208 グリッドに位置する平面形が長方形を呈する地下室である。検出面は B 面。SA103、SD212 より旧、SK230、SK231、SK233、SK234 より新である。遺構の主軸は N-16° -W である。長軸 179、短軸 107cm、深さ 166cm。SD212 に南側の一部が壊されているが、遺構の立ち上がりは垂直である。7層は青灰色粘土層で、黒灰色粘土粒子と茶褐色土粒子が互層となる。

遺物は 17 世紀後半の陶磁器少量のほか、瓦、金属製品この層から少量出土した。

SK232 (遺構Ⅲ -24 図)

調査区南東隅 Dc208 グリッドに位置する円形の土坑である。検出面は B 面。遺構の南側は SD212 で壊されている。東側の立ち上がりはゆるやかで、西側は一段の平坦部を設けている。

遺物は出土していない。

SP251 (遺構Ⅲ -24 図)

調査区中央東より Da206 グリッドに位置する円形を呈した柱穴。検出面は A 面。遺構の主軸は N-58° -E である。

ある。長軸 48cm、短軸 47cm、深さ 90cm。底部は南側にやや傾斜しており、立ち上がりはほぼ垂直である。覆土には柱の痕跡は認められない。遺構の形状や覆土の状況から、礎石は伴っていなかったと考えられる。これに連なる柱穴は不明。

遺物は出土していない。

SX253 (遺構Ⅲ -24 図、遺物Ⅳ -17 図)

調査区北側 Cs206 グリッドに位置する。検出面は A 面。長軸 366cm、短軸 275cm、深さ 50cm の瓦集中部である。明確な立ち上がりは認められない。堆積状況は不明。北西側に浅い掘り込みを有する。

18 世紀前半の陶磁器・土器が 1 箱、瓦が 1 箱出土している。

SK268 (遺構Ⅲ -24 図、遺物Ⅳ -18 図)

調査区南東隅 Dc-Dd208 グリッドに位置する方形土坑。検出面は B 面。東側は SK230・SK234 によって切られている。現状長軸 72cm、短軸 71cm、深さ 6cm。北西側に浅い掘り込みを有しているが、遺構の上部は大きく削平されているため詳細は不明。

17 世紀後半の陶磁器が少量、瓦が 1 箱出土している。

SK269 (遺構Ⅲ -24 図、遺物Ⅳ -18 図)

調査区南東隅 Dd207 グリッドに位置する方形の土坑である。検出面は B 面。SK233 より旧、SK234 より新である。遺構の主軸は N-80° -E である。長軸 95cm、短軸 54cm、深さ 25cm。底部は平坦で、東寄りに長軸 30cm、短軸 30cm、深さ 10cm の掘り込みを有する。堆積状況は SK233 に大きく削平されて不明だが、この部分に柱を据えた柱穴痕の可能性がある。

瓦と鉛玉が出土しているが時期は不明。

SP276 (遺構Ⅲ -24 図、遺物Ⅳ -18 図)

調査区北側 Cr206 グリッドに位置する遺構。検出面は A 面。上部を大きく削平されていることと、堆積状況に関する記録の欠如のため詳細は不明。

瓦と釘が出土しているが時期は不明。

SK278 (遺構Ⅲ -25 図、遺物Ⅳ -18 図)

調査区中央 Cr206 グリッドに位置する不整形土坑。検出面は B 面。遺構の主軸は N-87° -E である。北側は SK395 に切られている。現状長軸 108cm、短軸 53cm、深さ 20cm。底部はいくつかの掘り込みによって凹凸を有しているが、土層堆積状況は不明。

17 世紀代の陶磁器が少量と金箔瓦が出土した。

SK279 (遺構Ⅲ -25 図)

調査区東側 Cr-Cs207 グリッドに位置する長方形を呈する土坑。検出面は B 面。遺構の主軸は N-14° -W である。SK288、SK381 を壊して構築している。長軸 96cm、短軸 52cm、深さ 46cm。底部は平坦で、北寄りに南北 50cm、東西 20cm、厚さ 10cm の板状礫が置かれている。礫上部の土層堆積に柱の痕跡は認められないが、塀や柵といった区画施設の基礎であった可能性もある。ただしこれに連なる基礎となる遺構は周囲に認められない。

陶磁器が少量出土しているが、時期は不明である。

SK283 (遺構Ⅲ -25 図、遺物Ⅳ -18 図)

調査区南側 Db-Dc209 グリッドに位置する円形土坑。検出面は A 面。SK282、SK284 を切って構築されている。南側は調査区外に続いている。現状長軸 137cm、短軸 81cm、深さ 60cm。東寄りに円形の掘り込みがある。土層の堆積状況は、この掘り込み部分にあたる 1 層が、2 層・3 層を掘り込んでいることを示しているが、別遺構と考えられるような立ち上がりは認められないことから 1 つの遺構とした。

瓦が出土した。時期は不明。

SU286 (遺構Ⅲ -26 ~ 27 図、遺物Ⅳ -19 図)

調査区北側 Cr-Cs205-206 グリッドに位置する方形の地下室。検出面は B 面。B 面の SK287・467、SK386、SK396、SD445、SD449、SK501、SK506 を切って構築される。遺構の主軸は N-12° -W である。長軸 668cm、短軸 545cm、深さ 248cm。底部は壁面に沿って、幅 100cm、深さ 20 ~ 40cm の溝が掘り込まれており、そこに柱穴痕が巡る。柱穴痕は長方形を呈した土坑状を呈しており、長軸 50 ~ 90cm、短軸 40 ~ 50cm まで多様である。大型のプランには複数の柱穴痕が認められることから、複数の柱穴の掘方を 1 つの土坑で兼ねたものであることがうかがえる。柱穴痕の底部には石が据えられているものもあり、これらが本地下室の天井を支えた柱であると考えられる。ただし覆土に柱の痕跡は認められない。地下室の北壁で堆積が確認された 12 層、33 層 ~ 36 層は、柱と壁面との間隔を埋めたものであろう。地下室本体の床面は、柱穴痕が巡る地下室周囲よりも高くなっている。床面の中央部と北側に浅い掘り込みを検出したが、基本的には床面は平坦に仕上げられている。

18 世紀後葉の陶磁器・土器類が 1 箱、瓦、砥石、硯、釘、鋌などが出土している。

SK287・467 (遺構Ⅲ-25 図、遺物Ⅳ-19 図)

調査区中央 Cr206 グリッドに位置する土坑。検出面は B 面。SU286 に切られている。平面形は円形を呈している。調査時に 2 基の遺構としたが、一連の遺構である。現状長軸 280cm、短軸 263cm、深さ 104cm。遺構の北西側を攪乱が壊しているため、土層の堆積状況の確認は一部に留まっている。4 層は瓦が集中して含まれている層である。瓦は二次焼成を受けていない。4 層の上下にある堆積層にも焼土や炭化物は認められない。遺構の形状や規模は不明。9 層・10 層が当初 SK467 とした部分の覆土である。そのうち 10 層は炭化物の集中層である。

瓦が出土した。時期は不明。

SP294 (遺構Ⅲ-28 図、遺物Ⅳ-20 図)

調査区中央 Ct208 グリッドに位置する柱穴。検出面は B 面。堆積状況は不明。

瓦が出土した。

SK314 (遺構Ⅲ-28 図、遺物Ⅳ-20 図)

調査区中央南端 Cs-Ct209 グリッドに位置する円形土坑。検出面は B 面。SK318、SK332 を切って構築されている。長軸 400cm、短軸 344cm、高さ 112cm。中央部に高まりを有していることから植栽痕である。

17 世紀後葉の陶磁器・土器類 1 箱、瓦 1 箱、釘が出土している。

SD317 (遺構Ⅲ-28 図)

調査区東側北端 Db204-206 グリッドに位置する溝。検出面は B 面。SK416 を切って構築されている。遺構の主軸は N-2° -E である。遺構の北側は調査区外に続き、南側は SD200 に切られている。現状長軸 682cm、短軸 60cm、深さは 60cm。底部は平坦で、壁の立ち上がりはややゆるやかである。堆積状況は不明。

遺物は、出土していない。

SK326 (遺構Ⅲ-29 図)

調査区南側 Da-Db208-209 グリッドに位置する不整形を呈した土坑。検出面は B 面。北側は攪乱によって壊されている。南側は SK181 に、東側は SK362 に切られている。現状長軸 169cm、短軸 80cm、深さ 24cm。

17 世紀後葉の陶磁器が 10 数点出土している。

SK327 (遺構Ⅲ-29 図)

調査区南側 Db208 グリッドに位置する長方形の土坑である。検出面は B 面。SK322 に北東隅を切られている。

遺構の主軸は N-2° -W である。長軸 116cm、短軸 69cm、深さ 80cm。底部に 20cm 程度の浅い掘り込みがある。

17 世紀後葉の陶磁器・土器類が少量出土している。

SK333 (遺構Ⅲ-29 図、遺物Ⅳ-20 図)

調査区中央南端 Ct-Da209 グリッドに位置する土坑である。検出面は B 面。SK331 を切って遺構の主軸は N-56° -W である。南側の一部が調査区外に続くが、不整形を呈している。現状で長軸 228cm、短軸 173cm、深さ 46cm。覆土の堆積状況は不明。

17 世紀前葉の陶磁器・土器類が少量出土している。

SK337 (遺構Ⅲ-29 図、遺物Ⅳ-20 図)

調査区東側 Ct-Da208 グリッドに位置する円形土坑である。検出面は B 面、遺構は南側を SD367 によって壊されているが、中央部に高まりがみられることから植栽痕であると考えられる。現状で長軸 324cm、短軸 150cm、深さ 59cm。

18 世紀代と思われる陶磁器・土器類が少量と瓦が出土している。

SK355・SD428 (Ⅲ-30～32 図、遺物Ⅳ-20～21 図)

SD428 は調査区中央 Cs205-209 に位置する溝である。検出面は B 面。遺構の主軸は N-3° -W である。現状で長さ 2339cm、幅 95cm、深さは最大 235cm。SD428 の構造は SK355 を境に南北で異なっている。北側は地山の掘り込み部分が 3ヶ所認められ、これによって溝が 4 節に分けられる。南側では、こうした掘り込みは認められない。断面の観察では、溝底あるいは溝底からやや浮いた部分には、しまりの非常に弱い 30×25cm 程度の箱形の堆積 (Ⅲ-32 図 a-a' 土層図 3 層、b-b' 土層図 10 層) が確認され、両側には上下から長さ 8～9 寸程度の鉄釘が 10～15cm 間隔で打たれていた。これは溝全域から確認されており、類例から上水施設の木樋であると推定された。この木樋は、溝底に位置しているのではなく、粗掘り後にその下に土で高さを調整しながら北から南へ傾斜を持って構築されていた。また、SD428 の南側溝底には、地山にクラックが入っている状況が確認できた。クラックがその上の遺構まで影響がないことから、SD428 構築以前の地震による地割れ痕と推定された。

SK355 は調査区中央 Cs207-208 グリッドに位置する方形土坑で、SD428 を切っている。遺構の主軸は N-5° -W である。長軸 (南北) 232cm、短軸 (東西) 213cm、深さは最大 260cm を計測する。土層は、遺構中央に一辺 100cm 程度の角柱状にしまりの弱い土が入れ子状に堆

積しており（土層図1～3、7、8層）、南北2つの上水樋のジョイント部に構築された柵などの上水関連の施設だったことが考えられる。出土遺物、遺構の切り合いなどから、この上水は中山道敷設されていた仙川上水から引き込んだものだろう。加賀藩邸内の仙川上水関連遺構は本遺構が初めての検出例となる。

遺物は17世紀後葉から18世紀初頭の陶磁器・土器類が10数点出土したほか、木樋に使用されていたと考えられる釘が多数出土している。

SK375（遺構Ⅲ-33図）

調査区中央Ct207グリッドに位置する円形土坑。検出面はB面。SK374、SK377、SK438を切って構築されている土坑中央部の高まりは不整形を呈しているが、植栽痕と考えられる。遺構の規模は長軸281cm、短軸263cm、深さ72cm。

遺物は、出土していない。

SK376、SK377（遺構Ⅲ-33図、遺物Ⅳ-21図）

調査区中央Ct207グリッドに位置する円形土坑。検出面はB面。SK377はSK376に切られている。

SK376は現状で長軸118cm、短軸52cm、深さ35cm。底部は北側にやや傾斜していて、立ち上がりは南側に比べて北側が緩やかである。SK377は遺構の中央付近を大きく攪乱によって壊されているが、南側に1段高まりを持つ円形土坑。現状で長軸368cm、短軸352cm、深さ68cm。遺構の状況から植栽痕と推定される。

どちらの遺構からも、17世紀後葉の陶磁器・土器類が少量出土している。

SK381（遺構Ⅲ-33図、遺物Ⅳ-21図）

調査区中央Da207-208グリッドに位置する不整形円形土坑。遺構の主軸はN-21°-Eである。検出面はB面。SK279、SK288、SK289、SK290、SK291、SK382より旧、SP439、SP440、SK444より新である。長軸341cm、短軸260cm、深さ40cm。堆積土層1～3層は別遺構との切り合いではなく、土坑内の高まりである。高まりがやや西側に位置しているが、本土坑は植栽痕である。

遺物は、17世紀後葉の陶磁器・土器類が10数点、瓦、金属製品が出土している。

SK382（遺構Ⅲ-34図）

調査区東側Da207-208グリッドに位置する方形土坑である。遺構の主軸はN-88°-Eである。検出面はB面。SK381より新である。遺構検出面で東西、南北30cmの

礫を伴うが、建物の基礎の一部となるかは不明。規模は長軸105cm、短軸52cm、深さ30cm。

遺物は、17世紀後葉の陶磁器・土器類が20数点、金属製品が出土している。

SK386（遺構Ⅲ-34図、遺物Ⅳ-21～22図）

調査区北端Cq-Cr205グリッドに位置する土坑である。検出面はB面。遺構の主軸はN-14°-Wである。北側は調査区に続き、東側はSU286によって壊されているため、遺構本来の形状・規模は不明。現状で長軸114cm、短軸128cm、深さ69cm。遺構西側の立ち上がりはほぼ垂直（4層）で、底部は1段掘り込まれていた（5層）可能性がある。

遺物は、17世紀後葉の陶磁器・土器類が10数点、釘が多数出土している。

SD387（遺構Ⅲ-35図）

調査区西側Cq205-206グリッドに位置する溝である。検出面はB面。遺構の主軸はN-6°-Eである。北側は調査区外に続く。調査区北端から2.6mの場所にある攪乱によって壊されているが、遺構はその南側にも続いており、南側はSD460によって切られている。現状で長軸573cm、短軸69cm、深さは最大120cmを計測する。

溝の構造は攪乱の南北で異なっている。北側は溝の東側壁面に接して2基の柱穴が伴う。北側の柱穴は長軸50cm、短軸30cm、深さ20cmで、底面に礎石を伴う。南側の柱穴は攪乱によってこわされているため長軸は不明。短軸は現状で37cm、深さは土層断面図b-b'の部分で確認面から120cm。礎石は伴わないが、南北2基の柱穴の底面の深度はほぼ同じである。攪乱より南側で溝の底面に礎石が据えられている。礎石は5点出土しており、北から3番目・4番目のみ接した状態で出土している他は、それぞれ120cmから140cmの間隔である。礎石には明確な掘方は認められない。Cq208グリッドに位置するSD460と構造が類似していることから、あるいはこれに鉤の手状に繋がる可能性もある。

遺物は、出土していない。

SD388（遺構Ⅲ-35図）

調査区西側Cq205-206グリッドに位置する溝である。検出面はB面。遺構の主軸はN-6°-Eである。SD387の40cm西側でこれとほぼ平行していることから造り替えの可能性もあるが、切り合い関係がなく、どちらの遺構からも遺物を出土していないので新旧関係は不明である。

溝の北側は調査区外に続き、南側は攪乱以南には認

められない。現状で長軸 253cm、短軸 54cm、深さ 40cm。溝の底部には 2 基の柱状穴の掘り込みが認められる。北側の掘り込みは長軸 50cm、短軸 40cm で、底部から礫片が出土した。このことから本来は礎石を伴っていた可能性がある。南側の掘り込みは攪乱によって壊されているが、現状で長軸 45cm、短軸 40cm である。

遺物は、出土していない。

SD390 (遺構Ⅲ -34 図)

調査区北端 Cq205-206 グリッドに位置する溝である。検出面は A 面。遺構の主軸は N-11° -W である。北側は調査区外に続き、南側は攪乱によって壊されているため、遺構本来の規模は不明。現状で長軸 270cm、短軸 119cm、深さ 140cm。ただし 1 層、2 層は本遺構の上部を削平する別遺構で、SK390 は 3 層以下である可能性が高い。北側に掘り込みを有するが、それ以外の部分は底面が平坦に形成されている。立ち上がりは垂直でやや外反する。11 層、12 層、15 層は炭化物の集中、もしくは多く含む層であるが、焼土はすべての堆積層において含んでいない。

遺物は、出土していない。

SD394 (遺構Ⅲ -36 図、遺物Ⅳ -22 図)

調査区西側 Cr206-210 グリッドに位置する溝である。検出面は B 面。遺構の主軸は N-6° -E である。遺構の北端は SK516 に切られており、それ以北では検出していない。南側は調査区外に続いている。現状で長軸 1619cm、短軸 96cm、深さ 96cm。底面からの立ち上がりはほぼ垂直である。底部は平坦で、黒褐色土の覆土が堆積している。SK395・SK484・SK516・SK532・SK541・SK543・SK544・SK545・SK549・SK557・SK560・SK611・SK612・SK708 (SK537) を切り、SD367・SK522 に切られている。

遺物は、19 世紀前葉から中葉にかけての陶磁器・土器類が少量出土している。

SK396 (遺構Ⅲ -37 図)

調査区中央 Cr-Cs206 グリッドに位置する円形土坑である。検出面は B 面。遺構の北側は SK286 に切られている。現状で長軸 280cm、短軸 120cm、深さ 74cm。遺構の中央部に円形の高まりがあることから、植栽痕であることが推測される。

遺物は、出土していない。

SK398 (遺構Ⅲ -37 図、遺物Ⅳ -22・23 図)

調査区中央 Cq207 グリッドに位置する方形土坑である。検出面は A 面。遺構の主軸は N-82° -E である。長軸 72cm、短軸 54cm、深さ 10cm。SD387 を切っている。

覆土は黄褐色土を主体とする 2 層からなり、下層は青灰色粘土粒子を多く含んでいる。北側は削平されており立ち上がりは不明であるが、南側の立ち上がりも残存している範囲では緩やかな点から、便所の伴うものではないだろう。

遺物は、17 世紀後葉の陶磁器・土器類が 20 数点、瓦、金属製品が出土している。

SK406 (遺構Ⅲ -37 図)

調査区東 Db207 区、B 面で確認された不整形の土坑である。遺構の北を SK101、東を SK408 に切れ、遺構全体の様子は復元できない。坑底中央は、径約 100cm、深さ 10cm 程度のドーナツ状の凹みを有している。遺存している規模は、東西 260cm、南北 220cm、深さは最大 60cm を計測する。遺構の坑底や壁は、凹凸が顕著で、壁は坑底から開きながら立ち上がっている。覆土は 5 層に分層される。形態、規模、坑底や壁の状況、覆土の特徴から移植痕であろう。

遺物は、17 世紀後葉から 18 世紀初頭の陶磁器・土器類が 10 数点出土している。

SK408 (遺構Ⅲ -38 図)

調査区東 Db-Dc206-207 区、B 面で確認された円形の土坑である。SK101、SD187、SK406、SK407 と重複しており、新旧は SK101、SK407 より旧、SD187、SK406 より新である。坑底北側は、30～50cm 程度テラス状に高くなっている。遺存している規模は、東西 300cm、南北 320cm、深さは最大 120cm を計測する。遺構の坑底や壁は、凹凸が顕著で、壁は坑底から開きながら立ち上がっている。覆土は 15 層に分層されるが、内側に入れ子状のまとまりがあり、菰などの痕跡かも知れない。形態、規模、坑底や壁の状況、覆土の特徴から移植痕であろう。

遺物は、17 世紀後葉の陶磁器・土器類が少量出土している。

SD411 (遺構Ⅲ -38 図)

調査区東 Db207 区、B 面で確認された南北に主軸を持つ溝である。遺構の主軸は N-3° -E で、ほぼ南通町軸である。SK101、SK156、SK315、SK316、SK412、SK413 と重複しており、SK101、SK156、SK315 より旧、SK316、SK412、SK413 より新である。規模は、長さ (南

北) 360cm、幅 50～60cm、深さは最大 80cm を計測する。遺構の坑底や壁は、凹凸を有し、壁は坑底からやや開きながら立ち上がっている。覆土は 4 層に分層される。本遺構の北方に SK101 を挟んで、同軸、同規模の SD317 が確認されている。同じ遺構の可能性はある。

遺物は、出土していない。

SP413 (遺構Ⅲ -38 図)

調査区東 Db207 区、B 面で確認されたピットである。SK316、SD411 と重複しており、両遺構より旧である。遺存している規模は、東西 28cm、幅 38cm、深さは最大 35cm を計測する。遺構の坑底や壁は、やや凹凸を有し、壁は坑底から開きながら立ち上がっている。覆土は茶褐色土単層である。

遺物は、出土していない。

SE417 (遺構Ⅲ -39 図)

調査区北東 Db-Dc205 区、B 面で確認された遺構である。上部の溝状施設と深い円形の掘り込みで構成される。遺構の西側を近代以降に攪乱され、遺構全体の様子は復元できなかった。調査時は確認面から 1.7m 下までの調査を行ったが、覆土に大型礫が充填されていたことから、安全から以下の調査を重機による掘削に変更し、坑底を確認した。遺存している規模は、溝状の施設が長さ(東西) 220cm、幅(南北) 60cm、深さ 30cm、円形の掘り込みが、径 92cm、深さは約 3m を計測する。遺構の坑底や壁は、溝状施設はやや凹凸を有するが、円形の掘り込みは平滑に整形されている。覆土は、6 層に分層されるが、大型の角礫が円形の掘り込み坑底まで充填されていた。遺構の状況から井戸ではない可能性もあり、また、溝状施設と円形の掘り込みは、別遺構の可能性もあるが、土層の観察から、廃棄は同時に行われたと判断された。

遺物は、出土していない。

SK418 (遺構Ⅲ -39 図)

調査区北東隅 Dc205 区、B 面で確認された円形と思われる土坑である。SK162 に切られ、遺構全体の様子は復元できなかった。遺存している規模は、東西 280cm、南北 120cm、深さは最大 60cm を計測する。遺構の坑底は、凹凸が顕著で、いびつなドーナツ状の浅い落ち込みが確認された。壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は 4 層に分層される。形態、規模、坑底や壁の状況、覆土の特徴から移植痕であろう。

遺物は、17 世紀の陶磁器・土器類が少量出土している。

SK425 (遺構Ⅲ -39 図)

調査区中央 Ct206-207 区、B 面で確認された円形と思われる土坑である。SU107、SK424、SK426 と重複しており、新旧は SU107、SK424 より旧、SK426 より新である。遺構の東側を大きく SU107 に削平され、遺構全体の様子は復元できなかった。遺存している規模は、東西 110cm、南北 230cm、深さは最大 40cm を計測する。遺構の坑底は、凹凸が顕著で、壁は坑底から開きながら立ち上がっている。覆土は 3 層に分層される。形態、規模、坑底や壁の状況、覆土の特徴から移植痕であろう。

遺物は、17 世紀の陶磁器・土器類が少量出土している。

SK429 (遺構Ⅲ -40 図、遺物Ⅳ -24 図)

調査区中央やや東寄り Ct-Da206 区、B 面で確認された南北に主軸を持つ長方形の土坑である。遺構の主軸は、N-23° -w である。SK422、SK442、SK443 と重複しており、SK422 より旧、SK442、SK443 より新である。規模は、東西 110cm、南北 190cm、深さは最大 140cm を計測する。遺構の壁や坑底は、平滑に成形されており、壁は坑底から垂直に立ち上がっている。覆土は、14 層に分層されるが、各層はほぼ水平に薄く版築状に堆積している。

遺物は、17 世紀後葉～18 世紀前葉の陶磁器・土器類が 10 数点の他、近代の混入と思われる陶磁器類、大型の釘が出土している。

SK434・437・438 (遺構Ⅲ -40 図、遺物Ⅳ -24 図)

調査区東 Ct-Da206-207 区、B 面で確認された不整形の土坑である。SK375、SK421、SK426、SK442 と重複しており、SK375、SK421、SK442 より旧、SK426 より新である。遺存している規模は、東西 520cm、南北 500cm、深さは最大 130cm を計測する。遺構の壁や坑底は、凹凸が顕著で、壁は坑底から開いて立ち上がっている。覆土は 10 層に分層される。形態、規模、坑底や壁の状況、土層の状況などから移植痕であろう。

遺物は、17 世紀後半の陶磁器・土器類、瓦、釘などが数 10 点出土している。

SD449 (遺構Ⅲ -43 図)

調査区中央 Cs205-210 区、B 面で確認された調査区を南北に貫く溝である。遺構の主軸は N-6° -E である。SU286、SK355、SD367、SK380、SK395、SK396、SD428、SK448、SD455、SK456、SK458、SK513、SK550 と重複しており、SU286、SD367、SU355、SK380、SK395、SK396、SD428、SK448、SK458、SK513 より旧、SD455、SK456、SK550 より新である。規模は、長さ(南

北) 21.7cm、幅最大 90cm、深さは 100cm を計測する。遺構の溝底や壁は、凹凸を有し、壁は溝底からほぼ垂直に立ち上がっている。遺存している溝底の幅は、40～60cm 程度であり、150～160cm 間隔で自然石を伴う 80～100cm の長さの小ピットが並んでいる。自然石は、大きさが 20～40cm 程度で、小ピット坑底に設置されていた。土層の観察からは、自然石の上に柱痕と推定される層が確認され (P5-1、2 層など)、自然石を根石とした塀列の基礎遺構と推定された。また、同じ軸で同様の構造を持つ SD200 は、西側が本遺構を突き抜けていないことから同時期に機能していたと推定している。西側にも同構造を持つ SD387、SD460 があるが、これらの遺構も同時期に機能していた可能性が高い。

遺物は、釘が少量出土している。

SK454 (遺構Ⅲ -41 図、遺物Ⅳ -25 図)

調査区中央やや南 Cr-Cs208-209 区、A 面で確認された方形の土坑である。遺構の上部を近代以降に攪乱され、遺存状態は不良である。遺構の主軸は、N-22° -E である。SA103、SD394、SD428、SK487、SK544、SK548 と重複しており、SD103 より旧の他は全てに新である。遺構壁際には、長さ 60～80cm、幅 25cm、厚さ 20cm 程度の安産岩の角石を長方形に囲っている。遺存している石は、南西側の 2 石を除いて最下段しか確認できなかった。2 段目の角石は南側がステップ状にずらして配されるが、西側は 1 段目の上に載せられていた。遺存している規模は、東西 220cm、南北 380cm、深さは最大 50cm で、石組の内法は東西 130cm、南北 260cm を計測する。覆土は、5 層に分層されるが、遺構の坑底直上には薄い硬化面が貼られ (土層図 5 層)、最上層には焼土層が確認されている (1 層)。「江戸御屋敷絵図」(金沢市玉川図書館蔵) との対比では、「御表渡り廊下」と書かれた御膳所から御舞台に続く廊下のくぐり部分にあたることから、これに該当する施設と推定される。

遺物は、17 世紀の陶磁器・土器類と金属製品が少量と被熱した瓦が多く出土している。

SK459 (遺構Ⅲ -41 図、遺物Ⅳ -25 図)

調査区西 Cp-Cq208 区、A 面で確認された不整形長方形の土坑である。SD460、SK479、SK632、SK633、SK635 と重複し、その全てより新である。遺存している規模は、南壁際で東西 280cm、北壁際で東西 190cm、南北 120cm、深さは最大 20cm を計測する。遺構の壁や坑底は、凹凸があり、壁は坑底からやや開きながら立ち上がっている。覆土は 2 層に分層される。

遺物は、陶磁器・土器類が少量出土している。

SD460 (遺構Ⅲ -44 図)

調査区西 Cs208-209、Cq208 区、B 面で確認された L 字状に折れた溝である。遺構の主軸は N-6° -E である。SK459、SK462、SK465、SK471、SD473、SK474、SK475、SK481、SD602、SK604、SD606、SD607、SK608、SK627、SK632、SK633、SK655、SK660 と重複しており、SK459、SK462、SK465、SK471、SK474、SK475、SK481 より旧、SD473、SD602、SK604、SD606、SD607、SK608、SK627、SK632、SK633、SK655、SK660 より新である。溝は、調査区南西の調査区域外から、北方に 370cm (溝中央) で東に折れ、570cm まで確認された。東端部からは、北へ SD387 がほぼ同軸で、同じ構造の溝が存在している。溝の幅は 60cm、深さは最大 110cm を計測する。遺構の溝底や壁は、凹凸を有し、壁は溝底からほぼ垂直に立ち上がっている。遺存している溝底の幅は、40cm 程度であり、SD449 よりやや狭い 130～150cm 間隔で自然石を伴う 80～100cm の長さの小ピットが並んでいる。自然石は、大きさが 20～40cm 程度で、小ピット坑底に設置されていた。覆土は、自然石の上に柱痕が確認され、自然石を根石とした塀列の基礎遺構と推定された。また、同じ軸で同様の構造を持つ SD387 は、南側が本遺構を突き抜けていないことから同時期に機能していたと推定している。また、東側にも同構造を持つ SD449、SD200 があるが、これらの遺構も同時期に機能していた可能性が高い。

遺物は、出土していない。

SK463 (遺構Ⅲ -42 図、遺物Ⅳ -25 図)

調査区西 Cp207、Cq207-208 区、B 面で確認された不整形の土坑である。近代の埋設管に遺構の東、SK462 に南側を削平され、遺構全体の様子は復元できなかった。遺存している規模は、東西 200cm、南北 150cm、深さは 30cm を計測する。遺構の坑底は、やや凹凸があり、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は 5 層に分層される。形態、規模、坑底や壁の状況から移植痕であろう。

遺物は、陶磁器・土器類が少量、金箔瓦、釘などが出土している。

SK464 (遺構Ⅲ -42 図、遺物Ⅳ -25 図)

調査区西 Cp207、Cq207-208 区、B 面で確認された円形を呈すると推定される土坑である。近代の埋設管に遺構の西側、攪乱に東側を削平され、遺構全体の様子は復元できなかった。SK393、SK524 を切って構築されて

いる。遺存している規模は、東西 100cm、南北 200cm、深さは 30cm を計測する。遺構の壁や坑底は、やや凹凸があり、壁は坑底からやや開きながら立ち上がっている。覆土は暗褐色土単層である。

遺物は、陶磁器・土器類、金箔瓦、金属製品が少量出土している。

SK465 (遺構Ⅲ -42 図、遺物Ⅳ -25 図)

調査区西 Co-Cp208 区、B 面で確認された不整形の土坑である。近代の攪乱に遺構の東を削平され、遺構全体の様子は復元できなかつた。この他、SK451、SD460、SK471、SD473、SK474、SD602、SD607、SK648 と重複し、SK451 より旧の他は全てに新である。遺存している規模は、東西 270cm、南北 210cm、深さは 50cm を計測する。遺構の坑底は、凹凸があり、壁は坑底から北側はほぼ垂直に、南側は緩やかに立ち上がっている。覆土は 5 層に分層される。形態、規模、坑底や壁の状況から移植痕であろう。

遺物は、17 世紀後半の陶磁器・土器類が少量と瓦が出土している。

SK469 (遺構Ⅲ -45 図、遺物Ⅳ -26 ~ 27 図)

調査区南西隅 Cp209-210 区、A 面で確認された方形の土坑である。南側が調査区域外で遺構全体の様子は復元できなかつた。遺構の主軸は、N-9° -W で、おおむね中山道軸である。SU470、SP472、SP500、SK495、SK498、SK646、SK657、SK663、SK664 と重複しており、その全てより新である。坑底には、壁際より約 25cm 内側に小ピットが 8 箇所巡っている。小ピットは、一辺 20 ~ 30cm、深さ 40cm 程度の方角あるいは円形を呈しており、柱穴と推定された。また、東壁際には板状の加工石が立った状態で確認されたが、機能は不明である。遺存している規模は、東西 240cm、南北 170cm、坑底までの深さは 50cm を計測する。遺構の壁や坑底は、やや凹凸があり、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は 3 層に分層される。前田侯爵邸北辺の廃棄土坑か？

遺物は、19 世紀～近代にかけての陶磁器・土器類、瓦、ガラスビンなどが 2 箱出土している。

SU470 (遺構Ⅲ -45 図、遺物Ⅳ -27 図)

調査区南西隅 Cp209-210 区、A 面で確認された方形の地下室である。南側が調査区域外、北側を SK469、上部を近代以降に攪乱され、遺構全体の様子は復元できなかつた。遺構の主軸は、N-84° -E で、おおむね中山道

軸である。SK469、SK472、SK500、SK622、SD670 と重複しており、新旧は SK469 より旧、SK472、SK500、SK622、SD670 より新である。坑底壁際周囲には、幅約 15cm ほどの溝が巡っている。遺存している入口部の規模は、東西 140cm、南北 90cm、坑底は東西 140cm、南北 90cm、坑底までの深さは 90cm を計測する。また、南東調査区際には、東西 40cm、南北 30cm、深さ 50cm のピットが確認された。遺構の壁や坑底は、やや凹凸があり、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は 2 層に分層される。

遺物は、19 世紀前～中葉にかけての陶磁器・土器類が少量、瓦が 1 箱の他、ガラスビンが出土している。

SP472 (遺構Ⅲ -45 図)

調査区南西隅 Cp209-210 区、A 面で確認された方形と推定される土坑である。東側を SK469 に削平、また、調査当初、本遺構に切られる SK500 との新旧の確認ができなかつたことで、西側の立ち上がりは明確ではない。遺構中央に一辺 50cm、厚さ 40cm の安山岩の大型加工石が面を上設置され、基礎遺構の可能性が想定される。確認できる規模は、南北 110cm、加工石上面からの深さは 60cm を計測する。遺構の壁や坑底は、凹凸があり、壁は坑底から南側はやや開いて、北側は緩やかに立ち上がっている。覆土は 2 層に分層される。

遺物は、出土していない。

SK499 (遺構Ⅲ -46 図、遺物Ⅳ -28 ~ 29 図)

調査区南西隅 Cp209-210 区、A 面で確認された土坑である。遺構の南側および西側が調査区域外、東側を SK469、SU470 に削平され、遺構全体の様子は復元できなかつた。この他、SD670 を切って構築されている。遺存している規模は、東西 190cm、南北 160cm、深さは 50cm を計測する。遺構の壁や坑底は、凹凸があり、北壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は 2 層に分層される。

遺物は、19 世紀中葉の陶磁器・土器類が 2 箱と釘、飾金具などの金属製品が出土している。

SK500 (遺構Ⅲ -45 図、遺物Ⅳ -29 図)

調査区南西隅 Cp209-210 区、A 面で確認された方形と思われる土坑である。遺構の主軸は、N-10° -W で、おおむね中山道軸である。遺構の東を SK469 に削平され、遺構全体の様子は復元できなかつた。この他、SK472、SK499、SD670 と重複しており、SK472 より旧、SK499、SD670 より新である。遺構の下位には、拳大か

ら人頭大の加工された石が乱雑に積まれていた。遺存している規模は、東西 80cm、南北 150cm、深さは 50cm を計測する。遺構の壁や坑底は、やや凹凸があり、壁は坑底からはほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は暗褐色土単層である。大型加工石が配された SP472 との関連性も考えられる。

遺物は、近代の陶磁器・土器類が 1 箱と瓦、釘などが出土している。

SP504 (遺構Ⅲ -35 図)

調査区西側 Cq206 グリッドに位置する柱穴である。検出面は A 面。SD387 によって壊されており、現状で長軸 66cm、短軸 46cm、深さ 132cm。土層断面 e-e' の 1 層 (黄褐色土層) は柱穴に据えられた柱に由来するものだろう。底部から礫が出土している。

遺物は、出土していない。

SK505 (遺構Ⅲ -46 図、遺物Ⅳ -29 ~ 30 図)

調査区中央やや北寄りの Cr-Cs206-207 グリッドに位置する土坑である。検出面は B 面。遺構の主軸は N-5° -E である。本遺構は北側を SU286、SK396、SK516 に、東側を SD449 に、西側を SD394、南側を SK395 によって切られているため、本来の形状は不明。現状では南北に長い方形を呈しており、長軸 324cm、短軸 172cm、深さ 94cm。

遺構の底部は南側から北側にかけて段状に下がっている。遺構上部に堆積している黄褐色土層と暗黄褐色土層 (1 ~ 3 層) の下に堆積している 8 層と 11 層から、金箔瓦がまとまって出土した。8 層と 11 層は暗褐色土を主体としている。

遺物は、陶磁器・土器類が少なく、瓦が 3 箱、釘が出土している。陶磁器類からの年代は詳らかでないが、金箔瓦がまとまって出土していることから 17 世紀代に帰属すると考えられる。

SK506 (遺構Ⅲ -46 図、遺物Ⅳ -30 図)

調査区北側 Cr-Cs206-207 グリッドに位置する浅い不定形の遺構である。検出面は B 面。遺構の主軸は N-10° -E である。長軸 165cm、短軸 78cm、深さ 30cm。

遺物は 19 世紀代の陶磁器・土器類が少量、瓦、鉛玉などの金属製品が出土している。

SK509 (遺構Ⅲ -47 図、遺物Ⅳ -30 図)

調査区西側 Cq-Cr206-207 グリッドに位置する土坑である。検出面は B 面。遺構の主軸は N-17° -W である。

本遺構は SK287・467、SK537 を切り、SK506 に切られているが、平面形は東西に長い方形を呈していたと考えられる。現状長軸 351cm、短軸 298cm、深さ 164cm。

遺構の立ち上がりは東西ともに垂直に近い。東側は 5 層、6 層部分が東側にテラス状にひろがって立ち上がった可能性もあるが、SK287・467 との切り合い関係によって不明である。覆土の中央に堆積している 9 層 ~ 12 層は植木の根の痕跡と考えられる。それらの外側に堆積している 9 層は白色粘土層で、根に巻かれた菰によるものの可能性がある。これらの土層については土壌分析を実施し、9 ~ 11 層はいわゆる本郷礫層と武蔵野ローム層との間に堆積する板橋粘土層に由来するとの結果を得た (研究編研究 4)。本遺跡を含む本郷台地のどこかからの移植が想定される。

遺物は、出土していない。

SK522 (遺構Ⅲ -47 図、遺物Ⅳ -31 図)

調査区西側 Cr207 グリッドに位置する土坑である。検出面は B 面。遺構の主軸は N-17° -W である。本遺構は東側を SD394 に大きく切られているほか、SK287・467、SK537、SK538 にもきられており、遺構本来の形状は不明。現状で長軸 296cm、短軸 66cm、深さ 49cm。底部中央付近に掘り込みがある。

遺物は、17 世紀前葉の陶磁器・土器類が少量と金属製品が出土している。

SK523 (遺構Ⅲ -48 図)

調査区西側 Cr208 グリッドに位置する方形の土坑。検出面は A 面。遺構の主軸は N-72° -E である。長軸 113cm、短軸 62cm、深さ 33cm。東側は後代の削平によって大きく壊されている。覆土の状況は詳らかでないが、西側に長軸 40cm、短軸 20cm、深さ 8cm 程度の掘り込みがある。おそらくここに柱を据えたと考えられる。遺構の長軸が長いことから、あるいは東側には控柱が据えられており、そちらの掘方も兼ねていた可能性もある。

遺物は、出土していない。

SD530 (遺構Ⅲ -48 図、遺物Ⅳ -31 図)

調査区西側 Cr207-208 グリッドに位置する溝である。検出面は B 面。遺構の主軸は N-2° -E である。本遺構は北側を SU286 によって切られている。また遺構の中程は SK509、SE452、SK564 に切られている。南側は SK547、SK555 によって切られている。現状で長軸 759 cm (SK509 に切られている部分を含む)、短軸 67cm、深さ 86cm。

遺構の東西の立ち上がりは垂直に近く、底面は平坦である。底面の中央部には浅い掘り込みが認められる。両者の間隔は180cmである。このことから塀や柵など屋敷内の区画施設をなした溝と考えられる。

遺物は、近代に帰属する可能性のある陶磁器が少量出土した他、金箔瓦が出土している。

SK535、SK536（遺構Ⅲ-49図、遺物Ⅳ-31図）

調査区中央西側 Cq207 グリッドに位置する土坑である。検出面はB面。SK535の主軸はN-17°-Wである。本遺構は北側が攪乱によって壊されているほか、遺構の上部をSK534によって切られている。現状長軸90cm、短軸88cm、深さ44cm。金箔瓦（軒丸瓦）が出土した。

SK536はSK535の北側で検出した土坑である。主軸はN-11°-Wである。北側の立ち上がりがSK534によって壊されているため、SK536との関係は不明である。あるいはSK536の南端部が一段平坦部を形成して立ち上がっていた可能性もある。現状長軸138cm、短軸101cm、深さ44cm。

SK535、SK536共に遺物は、17世紀代の陶磁器・土器類が少量出土している。

SK555（遺構Ⅲ-49図）

調査区中央西側 Cq-Cr207-208 グリッドに位置する円形土坑である。検出面はB面。遺構の主軸はN-28°-Eである。東側をSK547にきられているほか、北側はSD530に切られている。現状長軸325cm、短軸273cm、深さ59cm。

遺構の立ち上がりはゆるやかである。遺構中程に堆積している6層・7層を挟むように2層が堆積している。また底面には小穴が多く認められる。底面はほぼ平坦に形成されているが、こうした状況から本遺構は植栽痕であると考えられる。

遺物は、17世紀末から18世紀初頭の陶磁器・土器類が少量出土している。

SD602（遺構Ⅲ-50図、遺物Ⅳ-31図）

調査区西隅 Co208 区、B面で確認された溝で、遺構の主軸は、N-87°-Wである。遺構の西側が調査区域外、東側でSK471に切られ、遺構全体の様子は復元できなかった。SK471、SD460、SK496、SK671と重複しており、SK471、SK496より旧、SD460、SK671より新である。遺存している規模は、長さ（東西）310cm、幅（南北）110cm、深さは40cmを計測する。遺構の壁や坑底は、凹凸が顕著で、壁は坑底からやや開きながら立ち上がっ

ている。覆土は5層に分層される。

遺物は、18世紀前葉の陶磁器・土器類と瓦が少量出土している。

SP604（遺構Ⅲ-50図）

調査区南西 Co208-209 区、B面で確認されたピットである。SK660、SD460と重複しており、その両者より新である。規模は、東西50cm、南北50cm、深さは最大20cmを計測する。遺構の壁や坑底は、やや凹凸を有し、壁は坑底から開きながら立ち上がっている。覆土は茶褐色土単層である。

遺物は、17世紀と思われる陶磁器・土器類と少量出土している。

SP605（遺構Ⅲ-50図、遺物Ⅳ-31図）

調査区南西 Cq209 区、B面で確認された不整形のピットである。SK492、SK628、SP609と重複しており、SK492、SP609より旧、SK628より新である。規模は、東西50cm、南北60cm、深さは最大70cmを計測する。遺構の壁や坑底は、やや凹凸を有し、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は暗褐色土単層である。

遺物は、瓦が少量出土している。

SD606（遺構Ⅲ-50図）

調査区西 Co207-208 区、B面で確認された溝で、遺構の主軸は、N-86°-Wである。遺構の東側が近代以降の攪乱、南側をSD460、上部をSK475に切られ、遺構全体の様子は復元できなかった。遺存している規模は、長さ（東西）200cm、幅（南北）が最大50cm、深さは25cmを計測する。遺構の壁や坑底は、凹凸があり、壁は坑底からやや開きながら立ち上がっている。覆土は2層に分層される。

遺物は、陶磁器・土器類の小片が少量出土している。

SD607（遺構Ⅲ-50図、遺物Ⅳ-31図）

調査区西 Co-Cp208-209 区、B面で確認された溝で、遺構の主軸は、N-2°-Eである。SD460、SK471、SK632、SK633、SK634、SK638、SK648、SK654、SK655と重複しており、SD460、SK471、SK632より旧、SK633、SK634、SK638、SK648、SK654、SK655より新である。稠密な遺構の重複のため、新旧関係の把握を優先して調査を行ったことから、新しい順に平面図の作成を行うことができなかった。確認できた規模は、長さ（東西）560cm、幅（南北）が最大110cm、深さは80cmを計測する。遺構の壁や坑底は、凹凸があり、壁は坑底か

ら開きながら立ち上がっている。覆土は5層に分層される。

遺物は、18世紀前葉の陶磁器・土器類が少量出土している。

SK621 (遺構Ⅲ-51 図)

調査区西 Cq208 区、A 面で確認された楕円形を呈すると推定される土坑である。SK466、SK479、SK485、SK487、SP623、SD629 と重複しており、SK466、SK479、SK485、SK487、SP623 より旧、SD629 より新である。遺存している規模は、東西 70cm、南北 110cm、深さは最大 30cm を計測する。遺構の壁や坑底は、やや凹凸を有し、壁は坑底からやや開きながら立ち上がっている。覆土は 4 層に分層される。

遺物は、出土していない。

SK622 (遺構Ⅲ-52 図、遺物Ⅳ-31～34 図)

調査区南西隅 Cp-Cq209-210 区、A 面で確認された廃棄土坑である。南側が調査区域外、西側を攪乱され、遺構全体の様子は復元できない。東側で SK624 を切って構築されている。遺存している規模は、東西 200cm、南北 80cm、深さは最大 100cm を計測する。遺構の壁や坑底は、凹凸を有し、壁は坑底から開きながら立ち上がっている。覆土は 4 層に分層される。隣接している SK624 もほぼ同様であるが、上層から下層まで、食物残渣、瓦、陶磁器類などが多く出土しており、当該地域が前田侯爵邸縁辺の廃棄の場となっていたと推定している。

遺物は、藩邸時代の製品も多く含まれるが、19 世期中～後葉の陶磁器・土器類が 1 箱の他、瓦、ガラス、釘などが出土している。

SK624 (遺構Ⅲ-52 図、遺物Ⅳ-34～37 図)

調査区南西 Cq-C r 209-210 区、A 面で確認された廃棄土坑である。南側が調査区域外、西側 SK622 に切れ、遺構全体の様子は復元できない。北側で SK625 を切って構築されている。遺存している規模は、東西 390cm、南北 200cm、深さは最大 90cm を計測する。遺構の壁や坑底は、凹凸が顕著で、壁は坑底から開きながら立ち上がっている。覆土は 5 層に分層される。隣接している SK622 もほぼ同様であるが、上層から下層まで、食物残渣、瓦、陶磁器類、ワインボトルなどが多く出土しており、当該地域が前田侯爵邸縁辺の廃棄の場となっていたと推定している。

遺物は、藩邸時代の製品も含まれるが 19 世期中葉～明治 10 年代の陶磁器・土器類が 3 箱の他、瓦、砥石、釘、

ワインボトルなどが出土している。遺物の様相は、切り合い関係のある SK622 より新しい。

SK625 (遺構Ⅲ-52 図、遺物Ⅳ-37～38 図)

調査区南西 Cq209 区、A 面で確認された長方形を呈する土坑である。南側上部を SK624 に切られている。やや北側が長く、規模は、東西は北側で 230cm、南側で 210cm、南北 160cm、深さは最大 160cm を計測する。遺構の壁や坑底は、やや凹凸を有し、壁は坑底から垂直に立ち上がっている。覆土は 7 層に分層される。

遺物は、藩邸時代の製品も多く含まれるが、19 世期中葉～近代の陶磁器・土器類が 1 箱、ワインボトルが 2 箱の他、瓦、金属製品などが出土している。

SK626 (遺構Ⅲ-51 図、Ⅳ-39 図)

調査区南西 Cq208-209 区、B 面で確認された不整形の土坑である。SA103、SK466、SK628、SK645、SK650、SK652、SK654 と重複しており、SA103、SK466 より旧、SK628、SK645、SK650、SK652、SK654 より新である。規模は、東西 270cm、南北 240cm、深さは最大 80cm を計測する。遺構の壁や坑底は、凹凸が顕著で、壁は坑底から開きながら立ち上がっている。覆土は 6 層に分層される。形態、規模、坑底や壁の状況、覆土の状況などから移植痕であろう。

遺物は、17 世紀後半の陶磁器・土器類が 30 数点、瓦、砥石、釘などが出土している。

SK632 (遺構Ⅲ-53 図、遺物Ⅳ-39 図)

調査区西 Cq208 区、B 面で確認された円形土坑である。SK459、SK629、SK634、SK635、SK645、SK654 と重複しており、SK459 より旧であるほかは、全てより新である。坑底外周は、幅 20～30cm、深さ 5cm 程度の浅い溝状の落ち込みが巡っている。規模は、東西 160cm、南北 160cm、深さは 40cm を計測する。遺構の壁や坑底は、凹凸が顕著で、壁は坑底からやや開いて立ち上がっている。覆土は 5 層に分層される。形態、規模、坑底や壁の状況から移植痕であろう。

遺物は、17 世紀の陶磁器・土器類が 20 数点の他に瓦と金属製品などが出土している。SK632・634・635 として図化した遺物は、切り合い関係を確認する際に入れた 3 基の遺構を通したサブトレンチ内から出土したもので、出土地点が確認できなかったものである。

SK633 (遺構Ⅲ-53 図)

調査区西 Cq208 区、B 面で確認された円形土坑である。

SD607、SK634、SK635と重複しており、全てより新である。規模は、東西90cm、南北90cm、深さは40cmを計測する。遺構の壁や坑底は、凹凸を有し、壁は坑底からやや開いて立ち上がっている。覆土は暗褐色土単層である。形態、規模、坑底や壁の状況から移植痕であろう。

遺物は、陶磁器・土器類小片、金属製品などが少量出土している。

SK634 (遺構Ⅲ-53図、遺物Ⅳ-39図)

調査区西 Cp-Cq208 区、B 面で確認された卵形の土坑である。SK459、SD607、SK632、SK633、SK635と重複しており、SK459、SK632、SK633より旧で、SD607、SK635より新である。規模は、長径200cm、短径160cm、深さは40cmを計測する。遺構の壁や坑底は、凹凸を有し、壁は坑底から開いて立ち上がっている。覆土は4層に分層される。形態、規模、坑底や壁の状況から移植痕であろう。

SK632・634・635として図化した遺物は、切り合い関係を確認する際に入れた3基の遺構を通したサブトレンチ内から出土したもので、出土地点の確認できなかったものである。

SK635 (遺構Ⅲ-53図、遺物Ⅳ-39図)

調査区西 Cq208 区、B 面で確認された円形土坑である。SK459、SD607、SK632、SK633、SK634と重複しており、SK459、SK632、SK633、SK634より旧で、SD607より新である。規模は、直径200cm、深さは最大40cmを計測する。遺構の壁や坑底は、凹凸を有し、壁は坑底から開いて立ち上がっている。覆土は暗茶褐色土単層である。形態、規模、坑底や壁の状況から移植痕であろう。

遺物は、17世紀前半の陶磁器・土器類が少量出土している。SK632・634・635として図化した遺物は、切り合い関係を確認する際に入れた3基の遺構を通したサブトレンチ内から出土したもので、出土地点の確認できなかったものである。

SK636 (遺構Ⅲ-54図)

調査区南西 Cp209 区、B 面で確認された楕円形の土坑である。SK637、SK638、SK639、SK646、SK650、SK657と重複しており、SK637、SK639より旧で、SK638、SK646、SK650、SK657より新である。遺存している規模は、東西230cm、南北260cm、深さは最大90cmを計測する。遺構の壁や坑底は、凹凸を有し、壁は坑底からやや開いて立ち上がっている。覆土は4層に分層される。形態、規模、坑底や壁の状況から移植痕で

あろう。

遺物は、瓦、金属製品が少量出土している。

SK640 (遺構Ⅲ-55図、遺物Ⅳ-39～43図)

調査区北西 Co207-208 区、B 面で確認された不整形の土坑である。遺構北側でSK641・642・643と重複しており、同遺構に切られている。遺存している規模は、東西170cm、南北220cm、深さは最大40cmを計測する。遺構の壁や坑底は、凹凸が激しく、壁は坑底からやや開いて立ち上がっている。覆土は8層に分層される。切り合いがあるSK641・642・643と共に主に粒子の細かい黒褐色土とロームが混入する暗褐色土で構成される。こうした覆土は、金箔瓦あるいは金かわらけが共伴することが多く、本郷構内では寛永期を中心とした江戸時代前期の指標となっている。

遺物は、17世紀前葉の陶磁器・土器類、金箔瓦、硯が少量出土している。

SK641・642・643 (遺構Ⅲ-55図、遺物Ⅳ-39～43図)

調査区北西 Co206-208、Cp207 区、B 面で確認された不整形の大型土坑である。遺構の西側が調査区域外で、遺構全体の様子は復元できない。遺構南東でSK640と重複しており、本遺構が新である。当初、3基の遺構として調査を進めていたが、土層の堆積状況から同時に埋められたと判断された。遺存している規模は、東西550cm、南北620cm、深さは最大110cmを計測する。遺構の壁や坑底は、凹凸が激しく、壁は、東側は緩やかに、南、北側はやや開きながら立ち上がっている。覆土は28層に分層される。切り合いがあるSK640と共に主に粒子の細かい黒褐色土とロームが混入する暗褐色土を中心に構成される。こうした覆土は、金箔瓦あるいは金かわらけが共伴することが多く、本郷構内では寛永期を中心とした江戸時代前期の指標となっている。土層図2層からは、食物残渣、かわらけ、瓦などの遺物が多く出土した。

遺物は、17世紀前葉の陶磁器・土器類が1箱の他、金箔瓦、銭貨、キセル、釘などの金属製品、硯が出土している。

SK646 (遺構Ⅲ-54図、遺物Ⅳ-43図)

調査区南西 Cp-Cq209 区、B 面で確認された隅丸長方形の土坑である。遺構の主軸は、N-7°-Eである。SA103、SK469、SK497、SK498、SK636、SK650と重複しており、その全てより旧である。遺存している規模は、東西230cm、南北170cm、深さは最大80cmを計

測する。遺構の壁や坑底は、やや凹凸を有し、壁は坑底から開いて立ち上がっている。覆土は7層に分層されるが、木質などは確認できなかったが、箱形の施設の存在を想定できる堆積を呈していた。芥溜などの用途が推定される。

遺物は、17世紀後半の陶磁器・土器類、釘が少量出土している。

SK647 (遺構Ⅲ -54 図)

調査区南西 Cq208-209 区、B 面で確認された隅丸長方形の土坑で、遺構の主軸は N-68° -W である。SK484、SK485、SK652 と重複しており、その全てより旧である。遺存している規模は、東西 110cm、南北 70cm、深さは最大 50cm を計測する。遺構の壁や坑底は、やや凹凸を有し、壁は坑底からやや開いて立ち上がっている。覆土は 2 層に分層される。

遺物は、出土していない。

SK648 (遺構Ⅲ -56 図)

調査区西 Cp208 区、B 面で確認された円形の土坑である。SK465、SD607 と重複しており、両遺構より旧である。坑底中央には、凝灰岩の平石が置かれていた。規模は、直径 100cm、深さは石上面までが 80cm、坑底までが 90cm を計測する。遺構の壁や坑底は、凹凸を有し、壁は坑底から開いて立ち上がっている。覆土は 6 層に分層されるが、6 層は石の上に立てられた柱痕と推定される。

遺物は、陶磁器・土器類の小片と金属製品が少量出土している。

SK653 (遺構Ⅲ -56 図)

調査区西 Cq208-209 区、B 面で確認された隅丸長方形の土坑で、遺構の主軸は、N-87° -W である。SK626、SK645、SK650、SK654 と重複しており、SK650 より新である他は、全てに旧である。坑底中央には、安山岩の平石が置かれていた。規模は、東西 120cm、南北 70cm、深さは石上面までが 80cm、坑底までが 100cm を計測する。遺構の壁や坑底は、凹凸が顕著で、東西壁は坑底から直線的に開いて、南北壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は 5 層に分層される。平石などは根石として、構造物の基礎に使用したと推定されるが、対応する遺構は確認できなかった。

遺物は、陶磁器・土器類の小片と金属製品が少量出土している。

SK659 (遺構Ⅲ -56 図、遺物Ⅳ -43 図)

調査区西 Cq208-209 区、B 面で確認された隅丸長方形の土坑である。SK466、SK485、SK621 と重複しており、全てに旧である。規模は、東西 60cm、南北 40cm、深さは 30cm を計測する。遺構の壁や坑底は、やや凹凸があり、鍋底状を呈している。覆土は褐色土単層である。

遺物は、17 世紀と思われる陶磁器・土器類の小片が少量出土している。

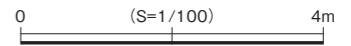
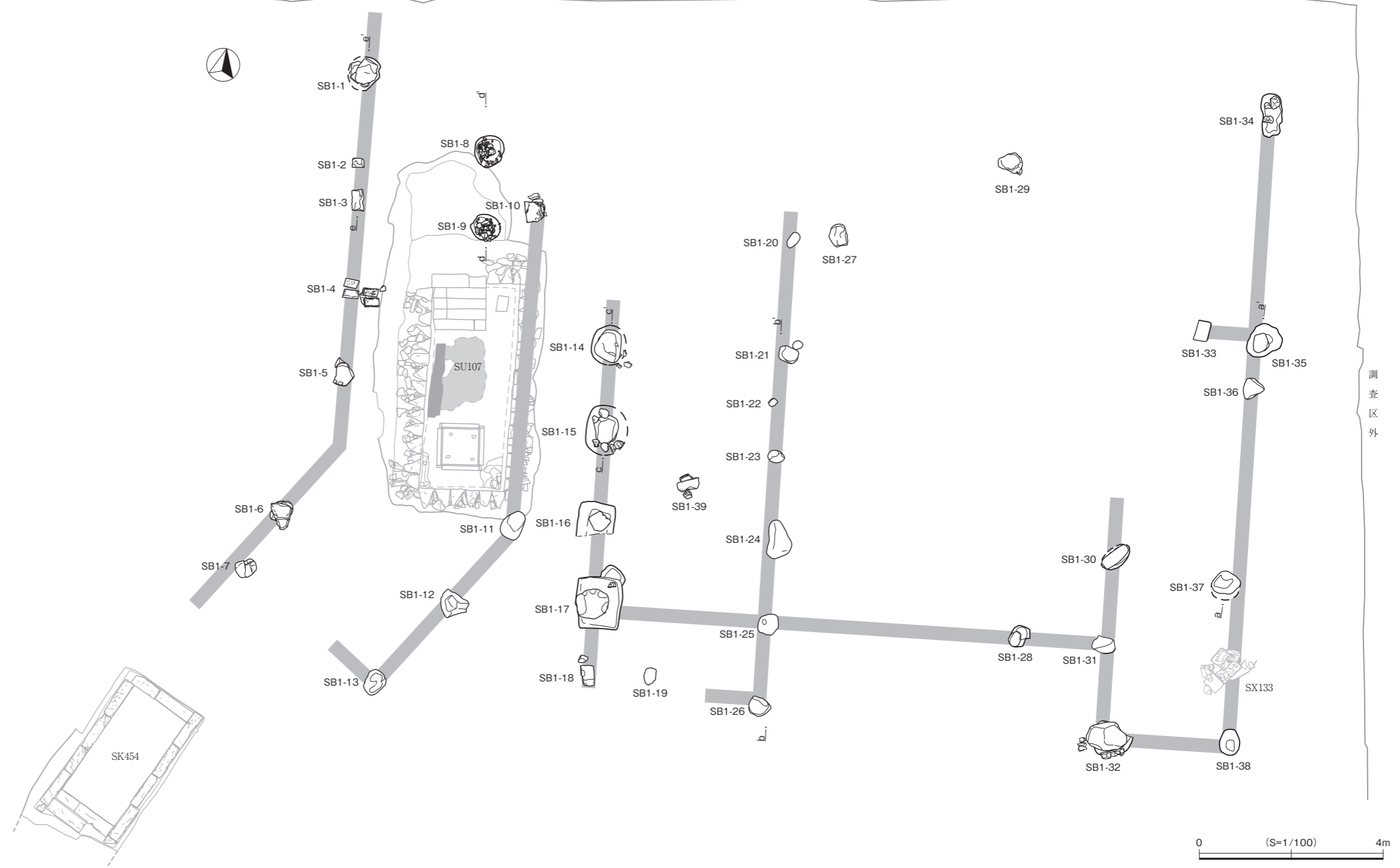
SK662 (遺構Ⅲ -56 図)

調査区南西 Cp209 区、B 面で確認された楕円形の土坑で、遺構の主軸は、N-8° -E である。SK661、SK663、SK665 と重複しており、SK661 より旧、SK663、SK665 より新である。坑底中央には、平石が置かれていた。規模は、東西 60cm、南北 90cm、深さは石上面までが 60cm、坑底までが 70cm を計測する。遺構の壁や坑底は、凹凸を有し、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は 3 層に分層される。平石などは根石として、構造物の基礎に使用した可能性がある。

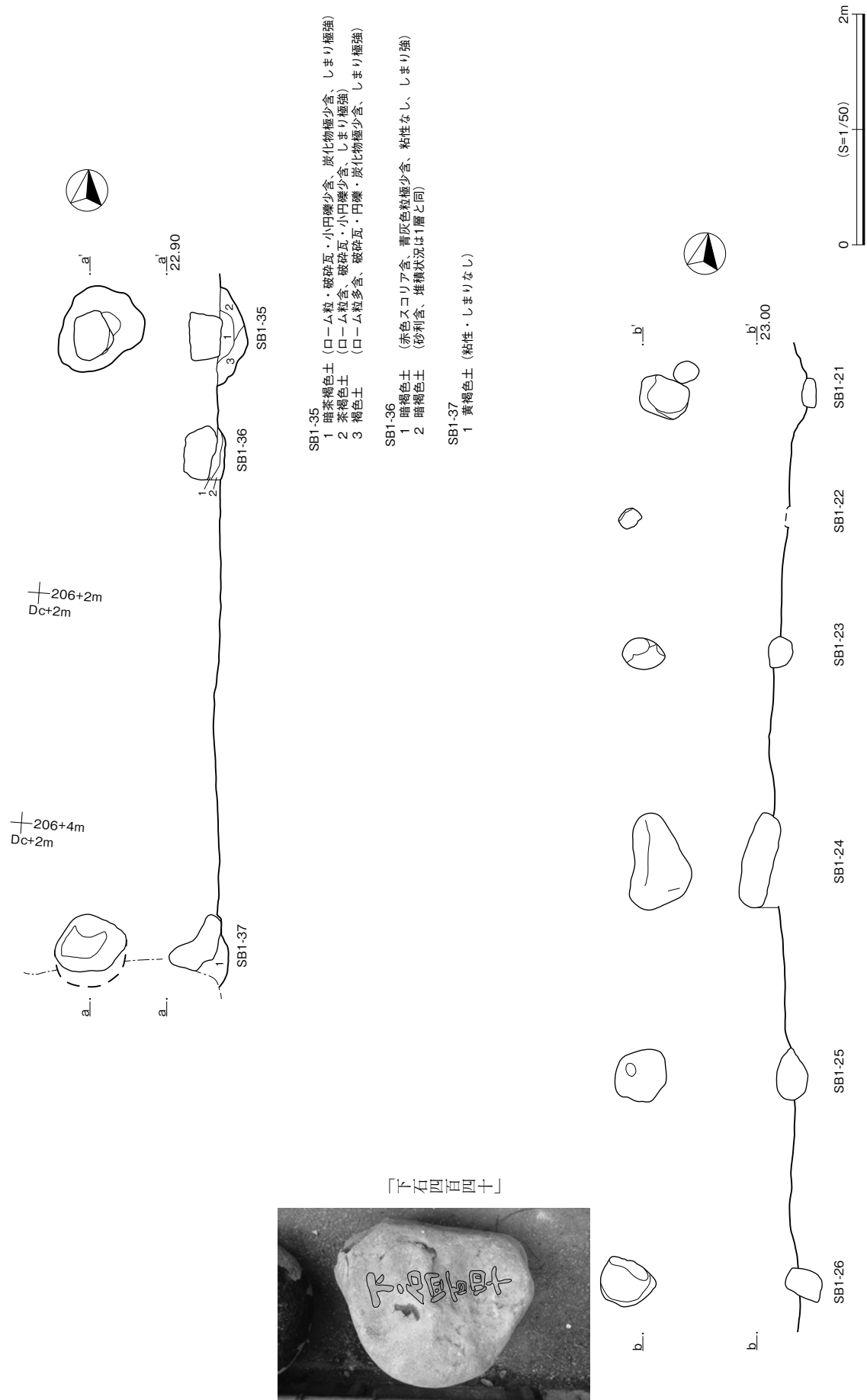
遺物は、17 世紀前葉の陶磁器・土器類の小片と釘が少量出土している。



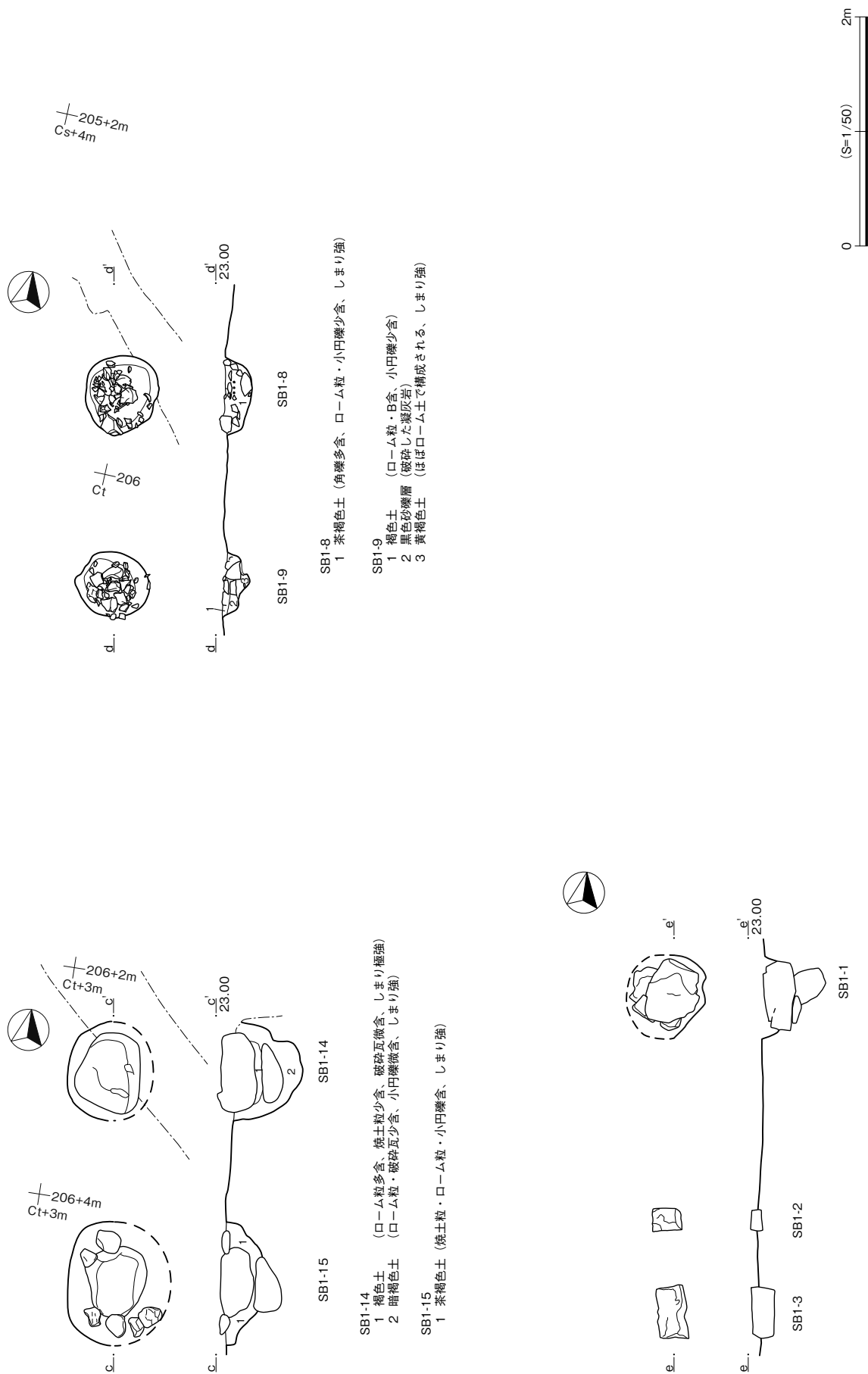
調査区外



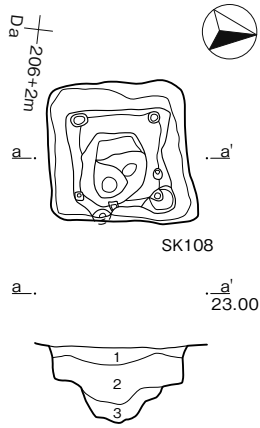
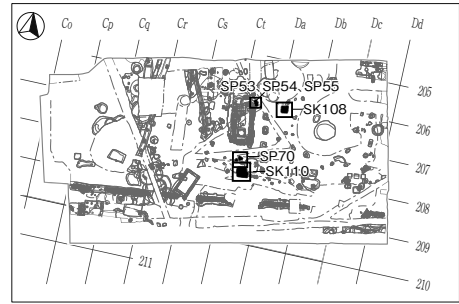
III-1 Ⅹ SB1



III-2 遺構 SB1



III-3

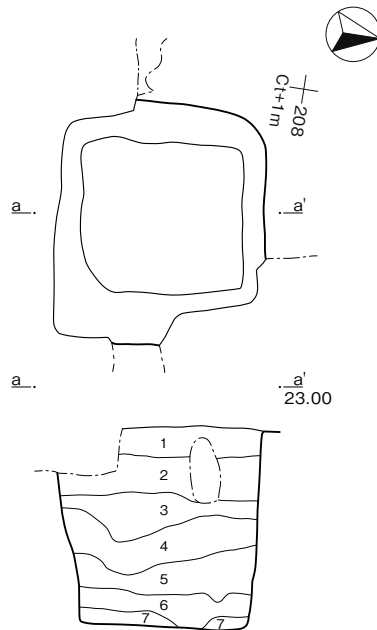


SK108

SK108

- 1 暗灰褐色土 (炭化物少含)
- 2 黒褐色土 (小円礫・砂少含、炭化物微含)
- 3 茶褐色土 (黄褐色粗砂粒含、小円礫少含)

SK108(A面)



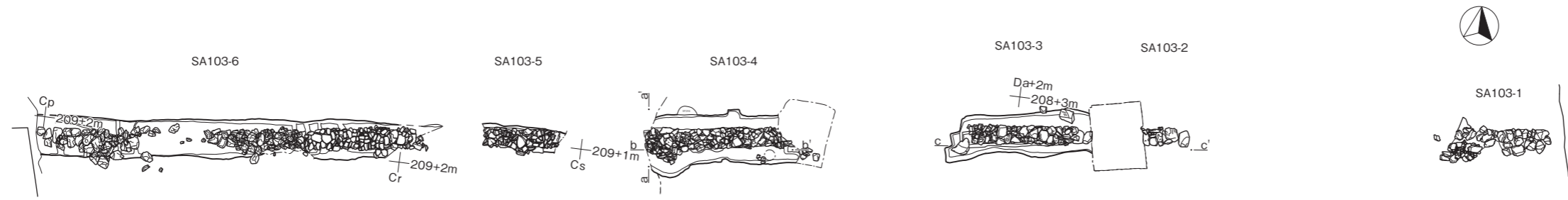
SK110

- 1 淡茶褐色土 (黄褐色ローム粒・小礫少含、しまり極強)
- 2 茶褐色土 (黄褐色ローム粒・炭化物少含、小礫少含)
- 3 暗茶褐色土 (黄褐色土粒・炭化物粒少含、遺物多含)
- 4 暗茶褐色土 (小礫極多含、遺物多含)
- 5 暗茶褐色土 (陶磁器・貝・魚骨等極多含、黄褐色土粒・炭化物多含、しまりなし)
- 6 暗灰褐色土 (角礫・円礫多含、部分的灰褐色ロームB含、遺物少含、粘性極強)
- 7 暗茶褐色土 (円礫少含、遺物極少含)

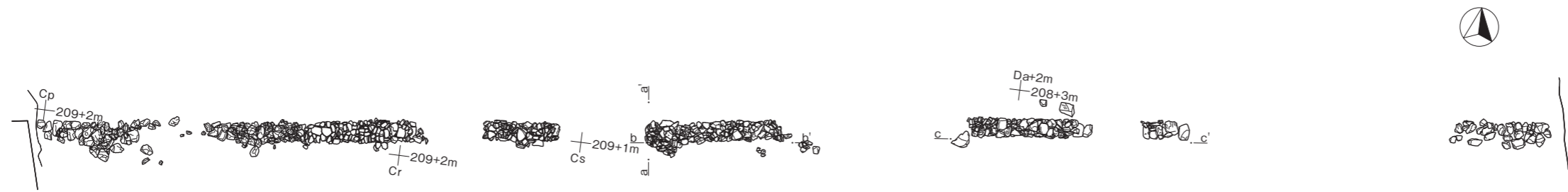
SK110(A面)

III-4図 SK108、SK110

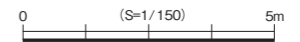
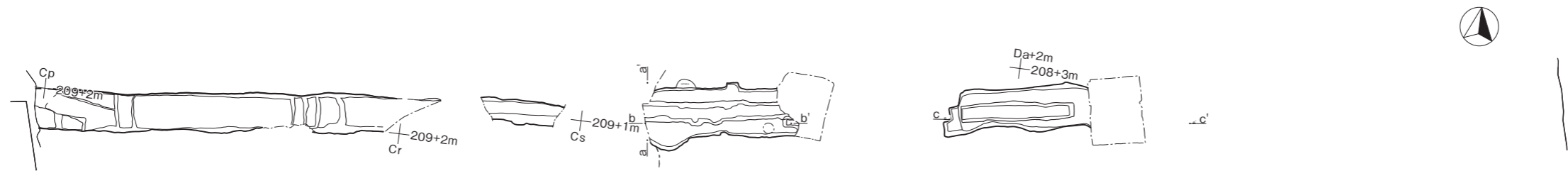
SA103



敷石検出状況

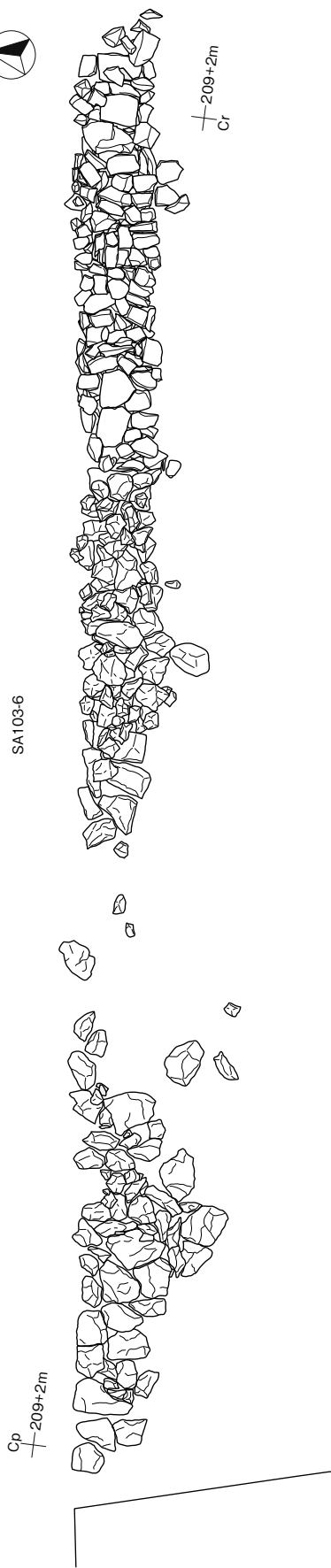


掘方

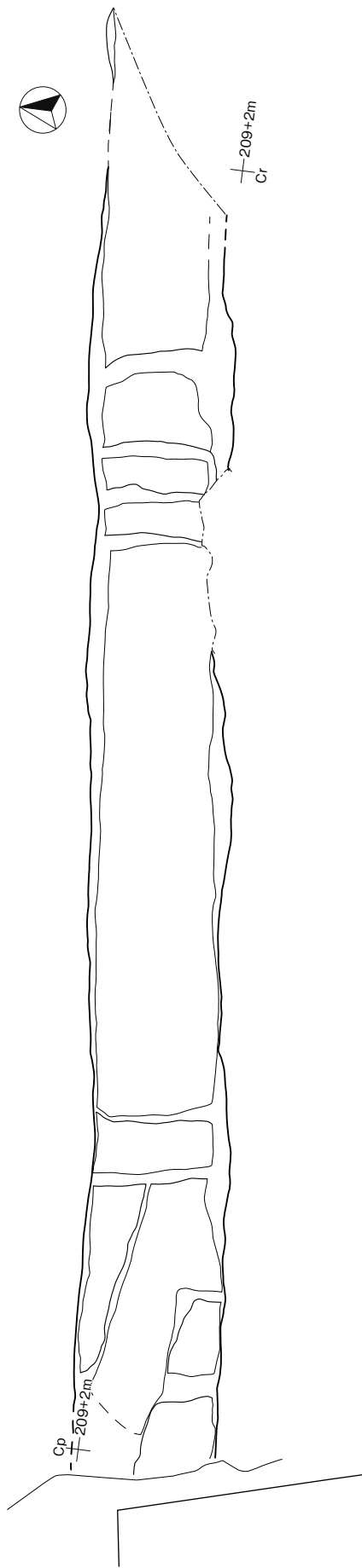


III-5図 SA103(1)

敷石検出状況

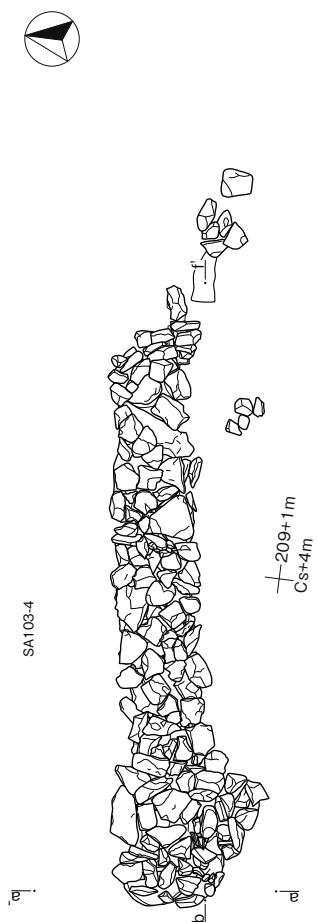


掘方

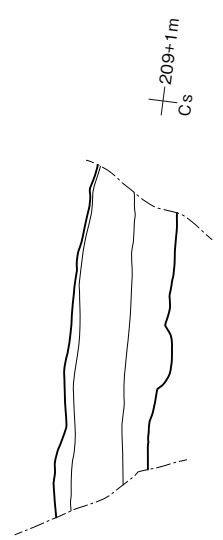
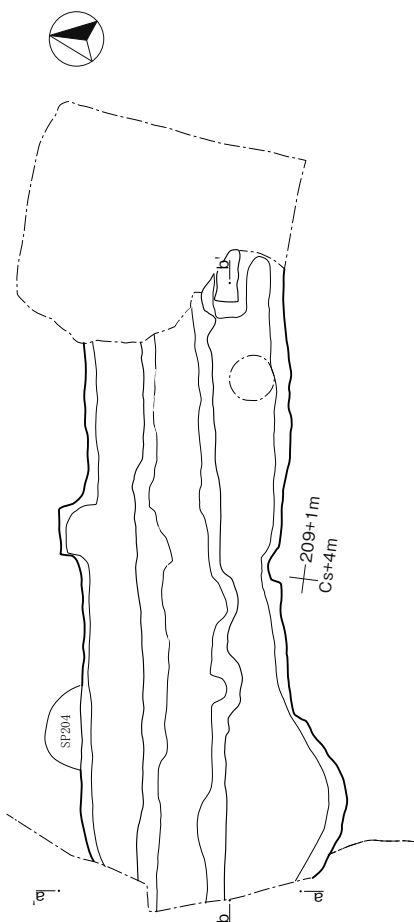


III-6 Ⅱ SA103(2)

敷石検出状況



掘方



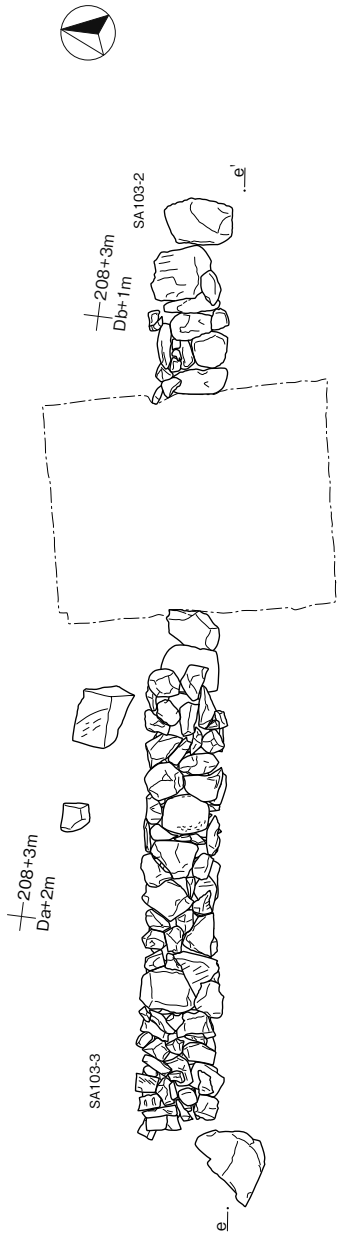
SX103
1 暗褐色土 (黄褐色ローム粒・焼土粒含、しまり強)

瓦

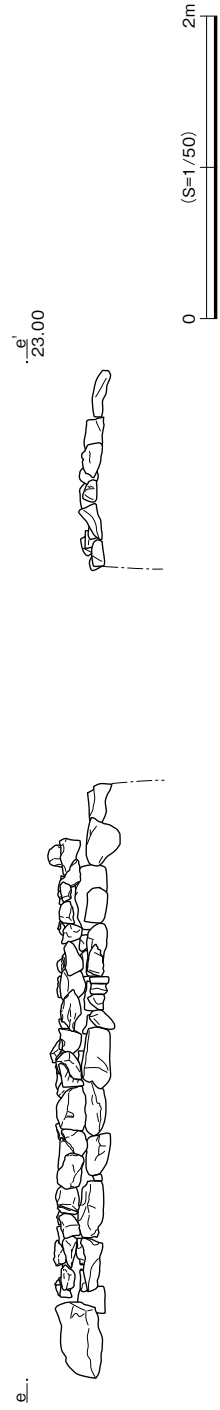
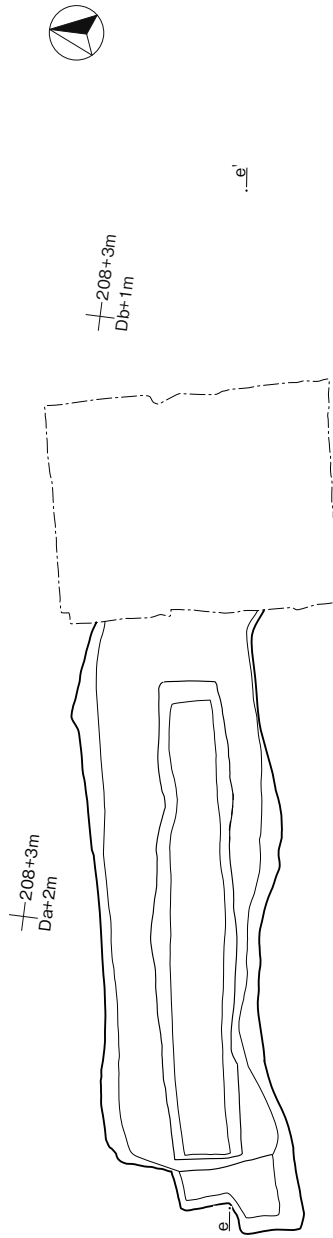


III-7 Ⅲ SA103(3)

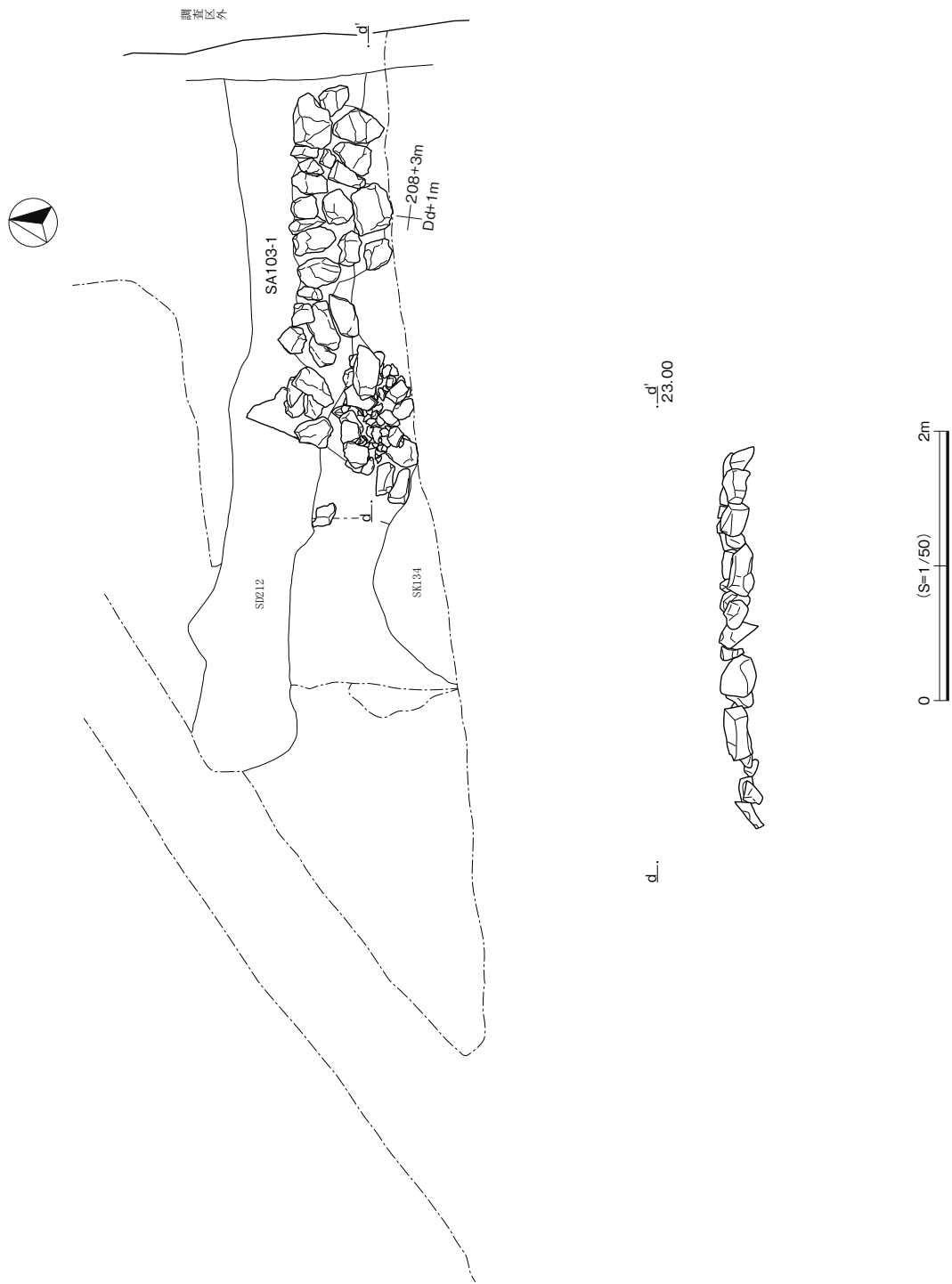
敷石検出状況



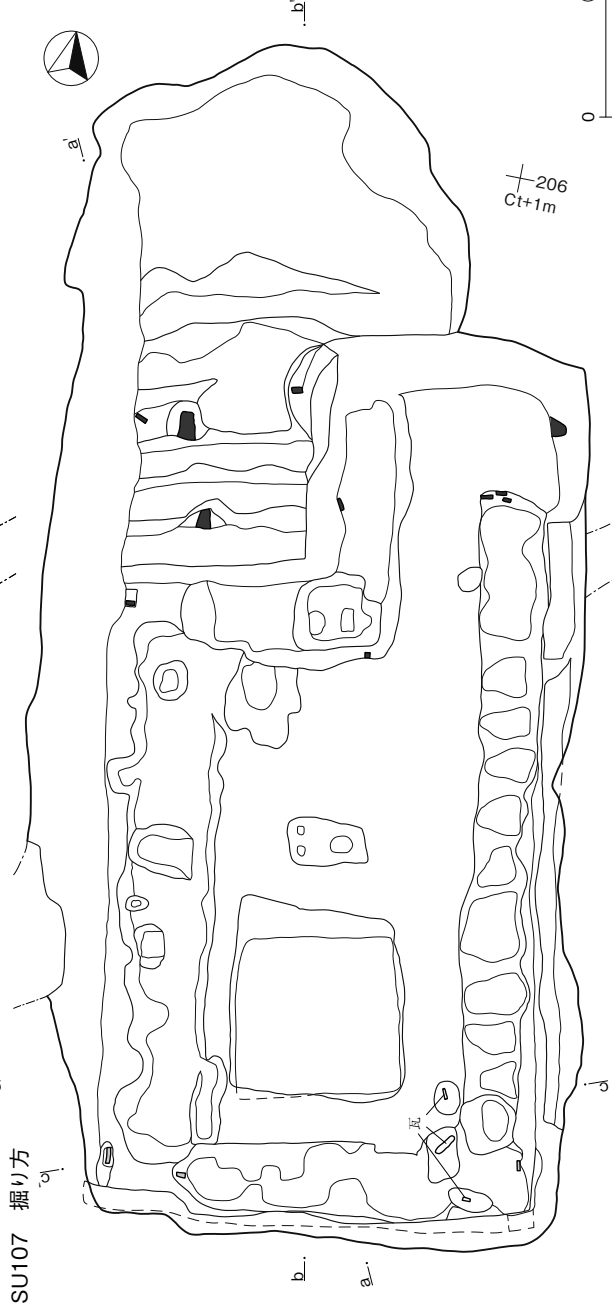
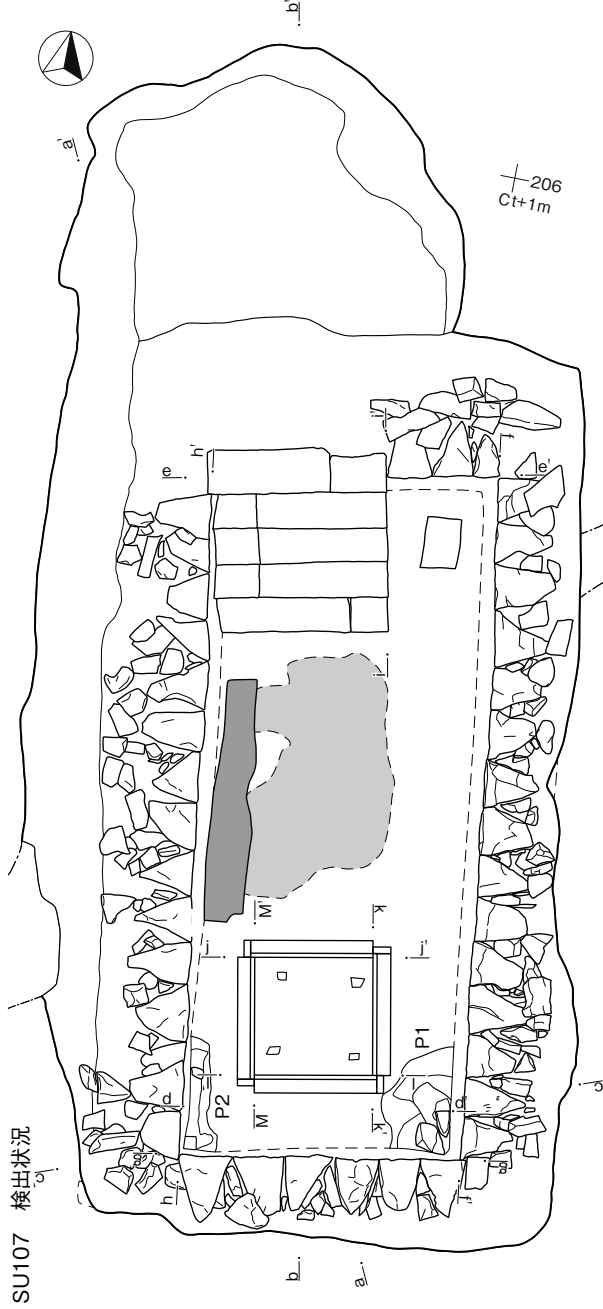
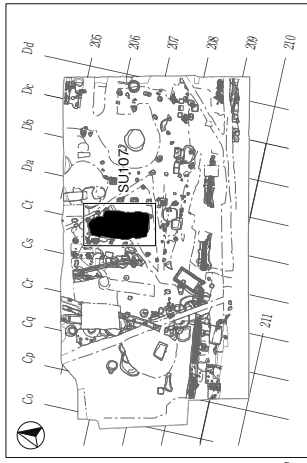
掘方



Ⅲ-8 Ⅷ SA103(4)



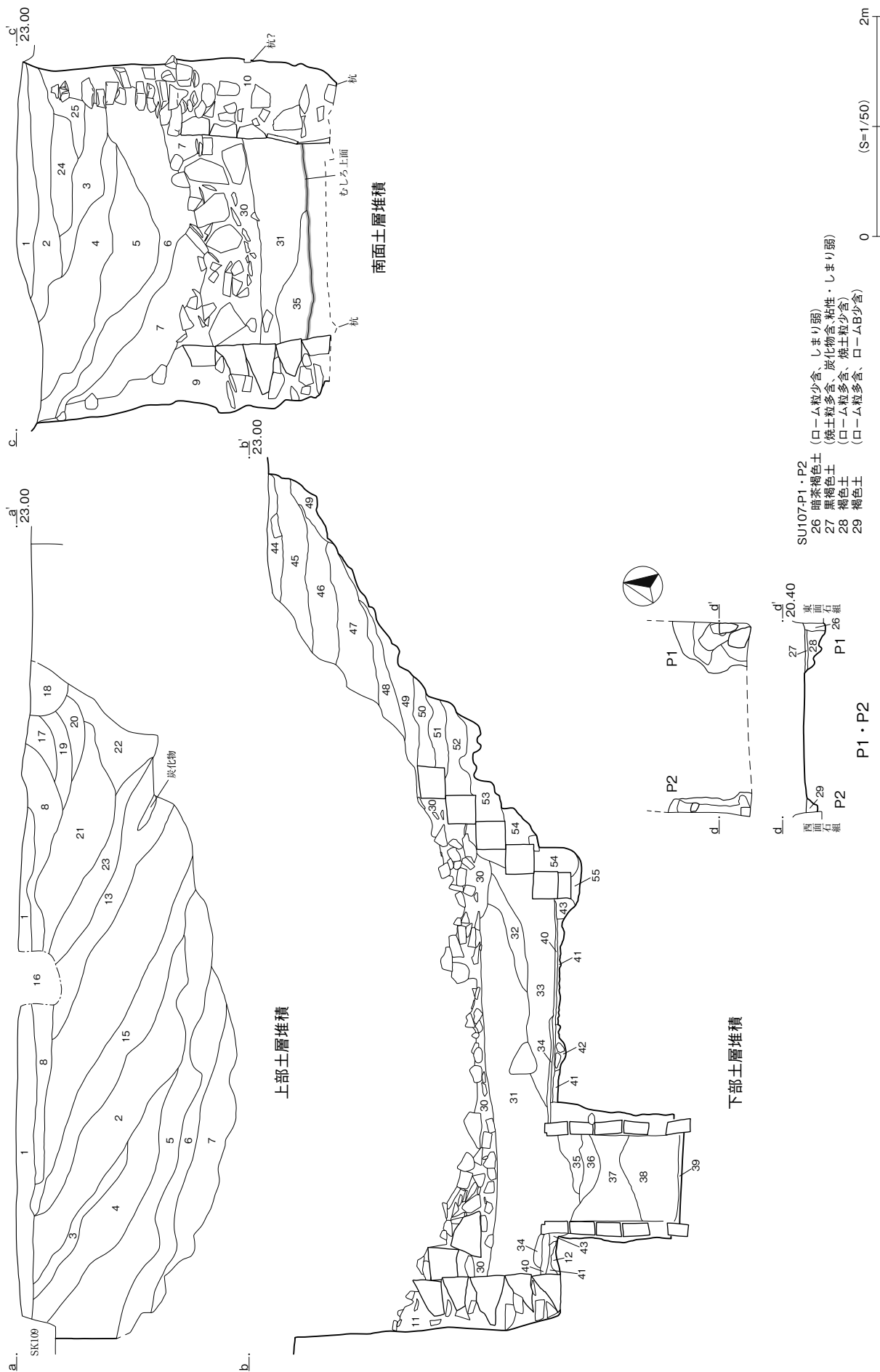
III-9図 SA103(5)



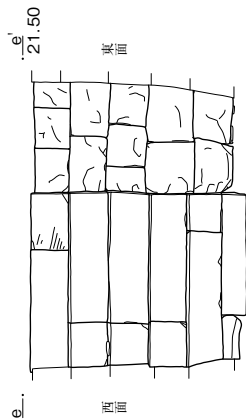
板
むしろ痕
杭痕



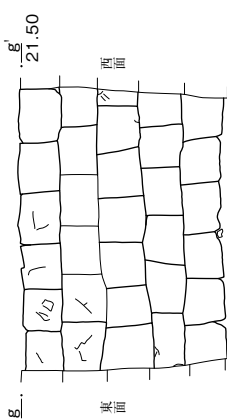
III-10 Ⅲ SU107(1)



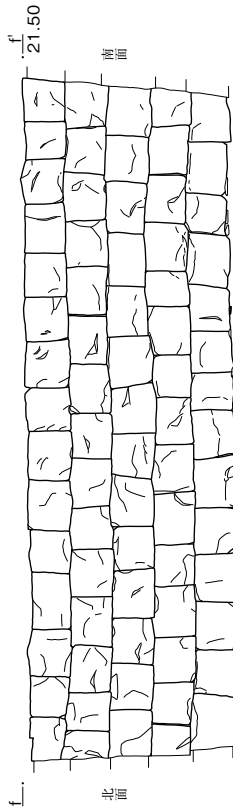
III-11図 SU107(2)



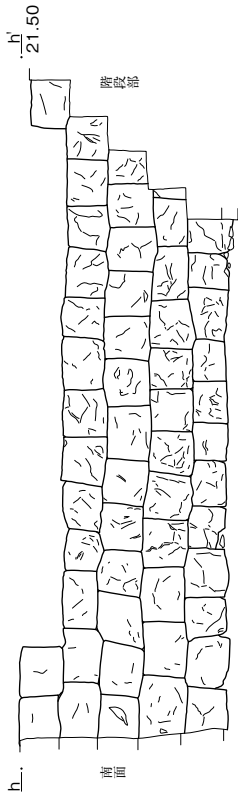
北面・階段部正面立面図



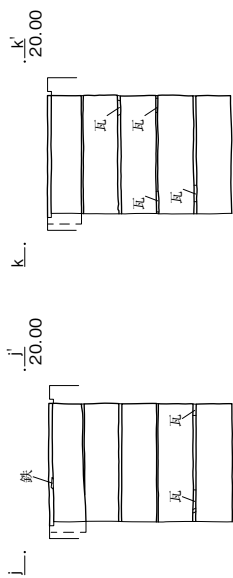
南面立面図



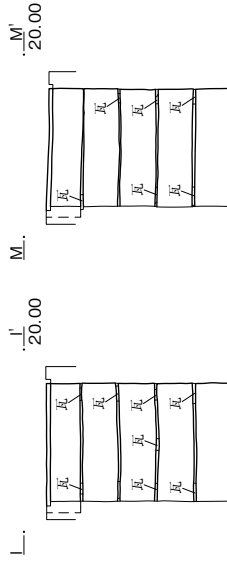
東面立面図



西面立面図



付帯施設東面立面図

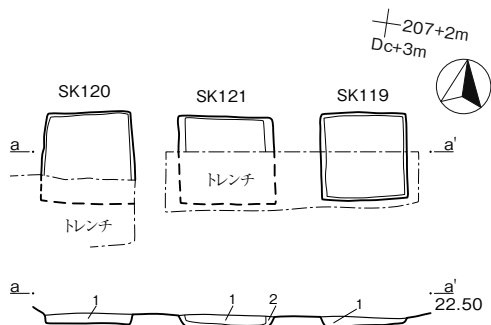


付帯施設西面立面図

SU107

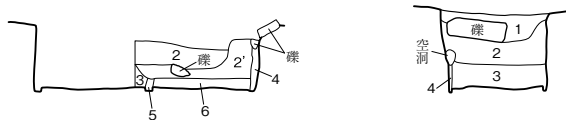
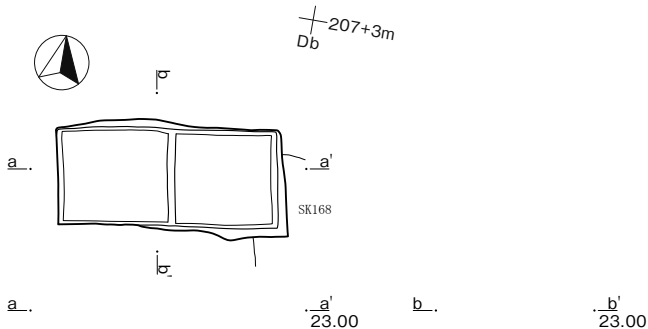
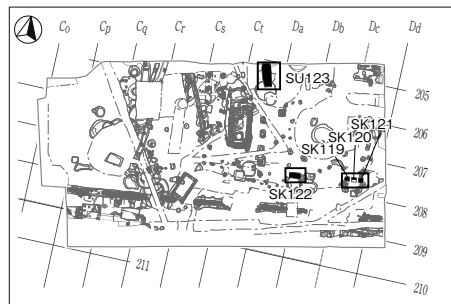
- | | | | |
|----------|-------------------------------------|----------|-----------------------------------|
| 1 茶褐色土 | (ローム粒・焼土粒少含、炭化物・円礫・破碎瓦種少含) | 30 暗茶褐色土 | (ローム粒・B含、粘性弱、しまりなし) |
| 2 橙褐色土 | (焼土粒多含、白色板状漆喰多含、炭化物・破碎瓦片含、粘性・しまりなし) | 31 茶褐色土 | (焼土粒・焼瓦多含、炭化物含、粘性なし、しまり弱) |
| 3 暗橙褐色土 | (焼土粒多含、白色板状漆喰・破碎瓦片少含、粘性・しまりなし) | 32 橙褐色土 | (焼土層・焼瓦少含、粘性・しまりなし) |
| 4 暗褐色土 | (焼土粒・破碎瓦片種多含、炭化物少含、粘性・しまりなし、2層より赤い) | 33 赤褐色土 | (焼土層・焼瓦多含、炭化物含、粘性・しまりなし) |
| 5 暗褐色土 | (焼土粒多含、炭化物・破碎瓦含、粘性・しまりなし、2層より赤い) | 34 黒褐色土 | (炭化物層、粘性・しまりなし) |
| 6 茶褐色土 | (炭化物種多含、焼土粒多含、破碎瓦含、粘性・しまりなし) | 35 暗茶褐色土 | (焼土粒・破碎瓦多含、炭化物含、ローム粒少含、粘性弱、しまりなし) |
| 7 橙褐色土 | (焼土粒・破碎瓦種多含、炭化物含、粘性・しまりなし) | 36 暗褐色土 | (焼土粒多含、炭化物・煉瓦土含、粘性なし、しまり弱) |
| 8 灰白色土 | (灰色粘土粒種多含、炭化物多含、粉砕瓦含) | 37 暗褐色土 | (焼土層・炭化物少含、粘性なし、しまり弱) |
| 9 褐色土 | (ローム粒・B種多含、粘性弱) | 38 赤褐色土 | (灰褐色砂粒種多含、焼土粒・炭化物少含、粘性強) |
| 10 褐色土 | (ローム粒・B種多含) | 39 暗褐色土 | (炭化したΔシロ) |
| 11 褐色土 | (ローム粒・B種多含、粘性弱) | 40 黄褐色土 | (上半黒い褐色土、稜知石の破碎礫多含、しまり強) |
| 12 茶褐色土 | (ローム小B少含) | 41 茶褐色土 | (稜知石の破碎礫多含) |
| 13 赤褐色土 | (焼土粒種多含、破碎瓦含、炭化物少含、粘性・しまりなし) | 42 茶褐色土 | (ローム粒で構成される) |
| 14 橙褐色土 | (焼土粒・破碎瓦種多含、粘性・しまりなし) | 43 黄褐色土 | (ローム粒・B含、ローム粒少含) |
| 15 暗橙褐色土 | (焼土粒種多含、炭化物多含、破碎瓦含、粘性・しまりなし) | 44 茶褐色土 | (ローム粒・B含、ローム粒少含、粘性弱) |
| 16 攪乱 | | 45 褐色土 | (ローム粒・B含、ローム粒少含、粘性弱) |
| 17 暗灰白色土 | (灰白色粘土粒種多含、炭化物多含、しまり弱) | 46 暗褐色土 | (ローム粒・B含、ローム粒少含、粘性弱) |
| 18 褐色土 | (ローム粒・B多含) 他遺構 | 47 暗茶褐色土 | (ローム粒含、ローム粒少含、円礫・小円礫少含) |
| 19 灰白色土 | (ほぼ灰白色粘土で構成される、炭化物多含、しまり弱) | 48 茶褐色土 | (ローム粒含、ローム粒少含、円礫・小円礫少含) |
| 20 灰褐色土 | (灰白色粘土粒多含、焼土粒含、破碎瓦・炭化物少含、しまり弱) | 49 暗褐色土 | (ローム粒少含、小円礫少含、しまり強) |
| 21 暗橙褐色土 | (灰白色粘土粒種多含、破碎瓦多含、炭化物種少含) | 50 褐色土 | (ローム粒少含、ローム粒含、小円礫少含) |
| 22 暗灰白色土 | (灰白色粘土粒種多含、焼土粒少含、炭化物種少含) | 51 暗茶褐色土 | (ローム粒・B少含) |
| 23 暗褐色土 | (焼土粒多含、破碎瓦含、粘性・しまりなし) | 52 褐色土 | (ローム粒多含、ローム粒少含、51層と53層の間に剥片含) |
| 24 暗橙褐色土 | (焼土粒種多含、炭化物含、破碎瓦少含、粘性・しまりなし) | 53 茶褐色土 | (ローム粒多含、ローム粒少含) |
| 25 橙褐色土 | (焼土粒種多含、炭化物少含、粘性・しまりなし) | 54 褐色土 | (ローム粒・B含) |
| 26 同上 | | 55 黄褐色土 | (ほぼローム土で構成される、しまり強) |
| 27 同上 | | | |
| 28 同上 | | | |
| 29 同上 | | | |

III-12図 SU107(3)



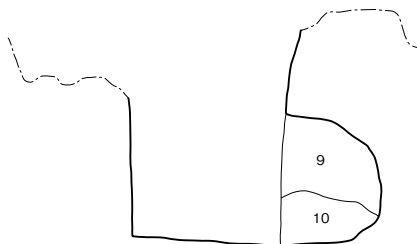
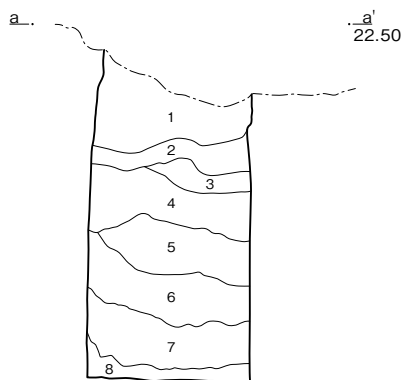
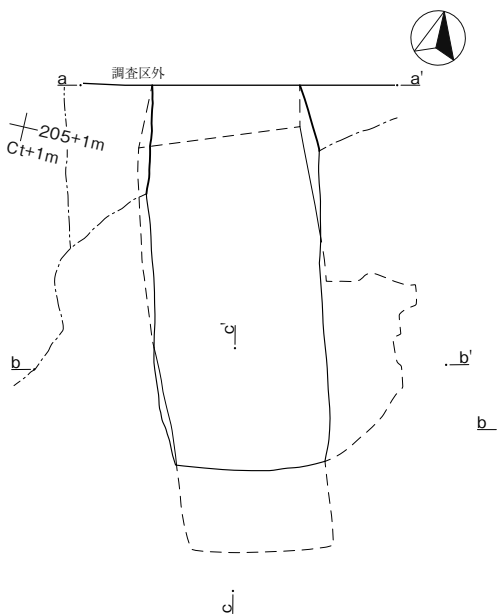
- SK119
1 暗灰褐色土 (灰褐色粘土粒多含、小円礫含、炭化物少含)
- SK120
1 暗灰色土 (灰褐色砂質土極多含、小円礫多含、炭化物極少含、しまり弱)
- SK121
1 灰白色土 (炭化物極少含、粘性・しまり弱)
2 暗灰褐色土 (灰褐色土粘土B含、しまり強)

SK119・SK120・SK121 (A面)



- SK122
1 暗褐色土 (小円礫・漆喰片含、ローム粒・炭化物少含、粘性弱)
2 暗茶褐色土 (ローム粒少含)
2' 暗茶褐色土 (ローム粒含、しまり2層より強い)
3 灰白色土 (炭化物・円礫極小含、粘性なし、しまり弱、やや緑がかかる)
4 茶褐色土 (粘性・しまりなし、木部の腐食土か)
5 灰褐色土 (粘性・しまりなし、木部の腐食土か、灰色に変色か)
6 灰褐色土 (粘性・しまりなし、木部の腐食土か、灰色に変色か)

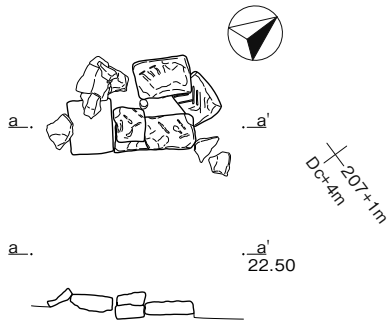
SK122 (A面)



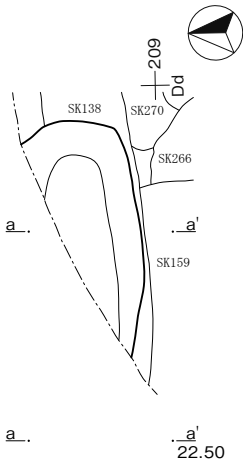
- SU123
1 茶褐色土 (小円礫含、ローム粒少含、しまり弱)
2 暗茶褐色土 (ロームB・小円礫少含、しまり強)
3 暗茶褐色土 (ローム粒極少含、粘性強、2層・4層より明るい)
4 暗茶褐色土 (ローム粒・ロームB・小円礫少含、炭化物極少含)
5 暗茶褐色土 (ローム粒・小円礫少含、粘性強、しまり強)
6 暗褐色土 (ローム粒少含、粘性・しまり強)
7 茶褐色土 (黄褐色砂粒少含、小円礫極少含、粘性強)
8 褐色土 (ローム粒多含、粘性・しまり強)
9 暗茶褐色土 (ローム粒・小円礫少含、しまり弱)
10 暗茶褐色土 (ローム粒・小円礫少含)

SU123 (B面)

III-13図 SK119, SK120, SK121, SK122, SU123

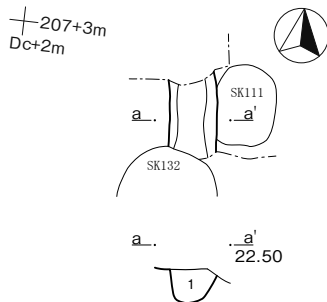


SX133 (A面)



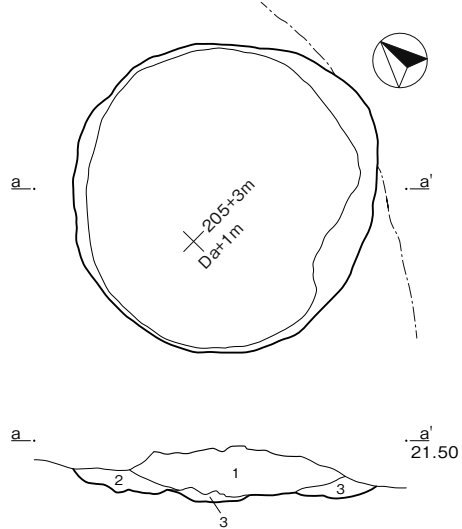
SK134 (A面)

- SK134
- 1 暗黄褐色土 (ロームB多含、小礫含、しまり強)
 - 2 灰褐色土 (瓦多含、ローム粒・小礫含)
 - 3 暗褐色土 (砂粒多含、小礫含、炭化物少含、粘性・しまり弱、ガラス片出土)
 - 4 褐色土 (ローム土主体、黄褐色ロームB・炭化物・赤色スコリア少含、しまり強)
 - 5 褐色土 (ロームB・砂粒・小礫少含、粘性弱)



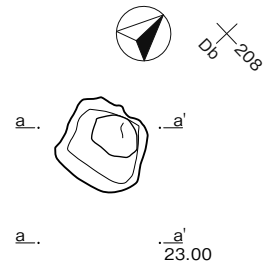
- SD141
- 1 茶褐色土 (ローム粒・円礫含)

SD141 (A面)



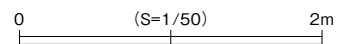
- SK140
- 1 黒褐色土 (ローム粒・黄褐色砂粒少含)
 - 2 暗褐色土 (ローム粒多含、ロームB含)
 - 3 黄褐色土 (ローム土で構成される)

SK140 (B面)

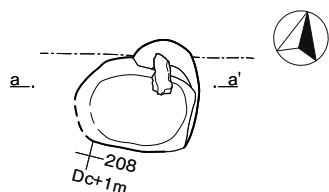


- SP146
- 1 暗茶褐色土 (ローム粒少含、小円礫極少含)
 - 2 暗褐色土 (ローム粒・小円礫・焼土粒極少含)
 - 3 暗褐色土 (粘性・しまりなし、柱痕)
 - 4 褐色土 (ローム粒多含、ロームB少含、しまり強)

SP146 (A面)



III-14図 SX133、SK134、SK140、SK141、SP146



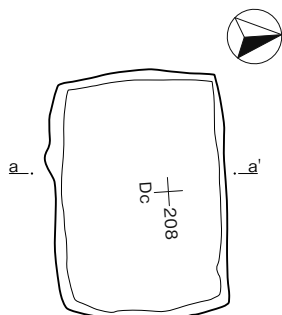
a.. a'
22.50



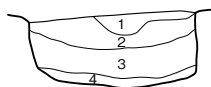
SK147 (A面)

SK147

- 1 暗茶褐色土 (ローム粒含、灰褐色粘土粒少含、小円礫極少含)
- 2 茶褐色土 (ローム粒・灰褐色粘土粒少含)
- 3 黄褐色土 (ほぼローム土で構成される)



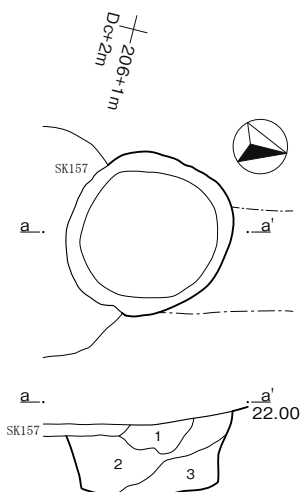
a.. a'
22.00



SK153

- 1 暗灰褐色土 (灰褐色粘土粒多含、ローム粒・焼土粒含、粘性強)
- 2 橙褐色土 (焼土粒極多含、円礫少含、粘性・しまり弱)
- 3 黒褐色土 (ローム粒少含)
- 4 黄褐色土 (ほぼローム粒で構成される)

SK153(B面)



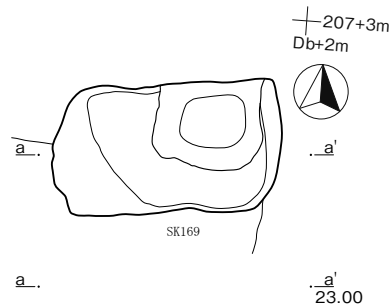
a.. a'
22.00



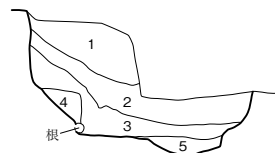
SK158

- 1 黒褐色土 (黄褐色ローム粒含、粘性・しまりなし)
- 2 黄褐色土 (黄褐色ロームB主体、黒色土粒含、粘性・しまりなし)
- 3 黄褐色土 (粘性なし、しまり弱)

SK158(B面)



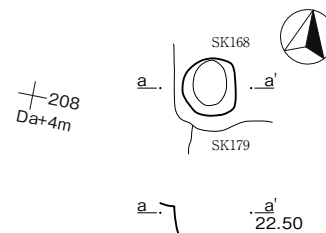
a.. a'
23.00



SK156

- 1 茶褐色土 (ローム粒・小円礫少含、ロームB極少含)
- 2 灰白色土 (ローム粒少含、粘性・しまりなし)
- 3 灰褐色土 (灰白色土粒多含、ローム粒少含、炭化物極少含)
- 4 茶褐色土 (ローム粒少含)
- 5 暗茶褐色土 (ローム粒少含)

SK156(A面)



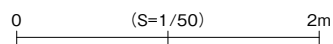
a.. a'
22.50



SP174

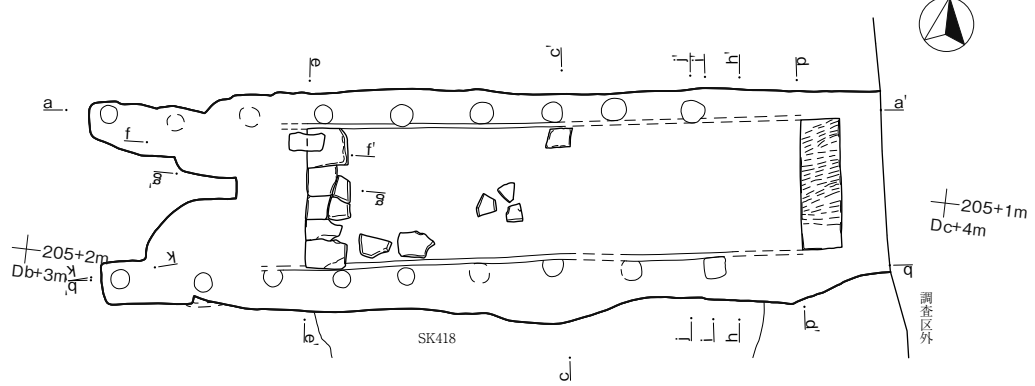
- 1 黒褐色土 (小礫多含、部分的に青灰色土粒含、しまりなし)

SP174(A面)

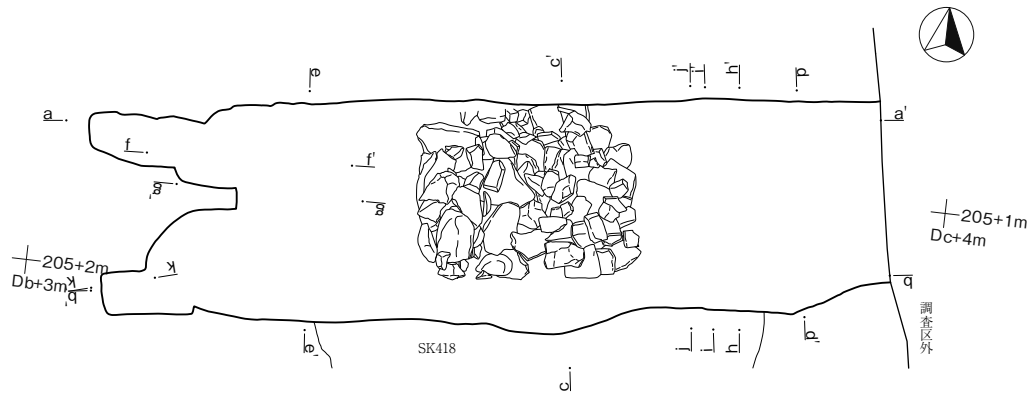




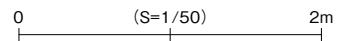
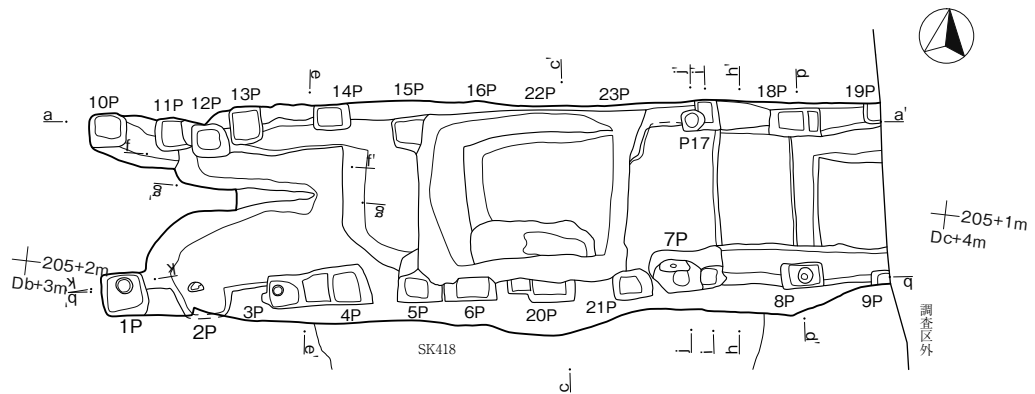
SK162上部



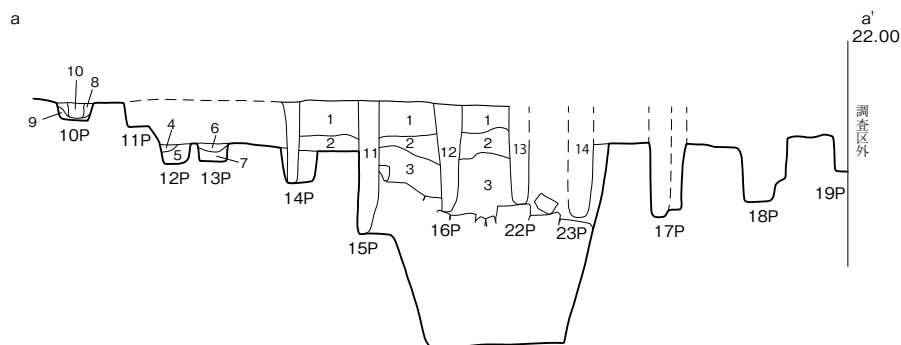
SK162(石検出)



SK162掘方



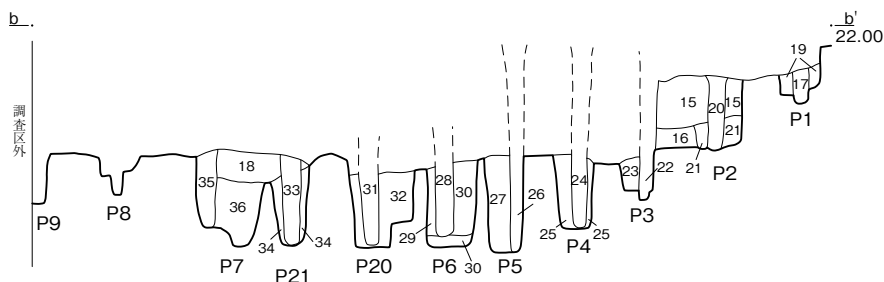
III-16図 SK162(B面)(1)



SK162 北側柱穴

SK162 北側柱穴

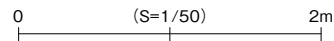
- 1 暗茶褐色土 (黄褐色ローム粒少含、円礫極少含、粘性なし)
- 2 暗黄褐色土 (黄褐色B極多含、しまり極強)
- 3 茶褐色土 (円礫多含、ロームB少含)
- 4 暗褐色土 (ロームB・小礫極少含、粘性・しまりなし)
- 5 茶褐色土 (ロームB主体、小礫極少含、粘性・しまりなし)
- 6 暗褐色土 (4層と類似)
- 7 暗褐色土 (ローム粒極少含、しまりなし)
- 8 暗褐色土 (ローム粒・小礫含、粘性・しまりなし)
- 9 茶褐色土 (ローム土主体、小礫含、暗褐色土粒を極少含、粘性弱、しまりなし)
- 10 暗茶褐色土 (砂質土主体、粘性・しまりなし)
- 11 暗茶褐色土 (粘性・しまりなし)
- 12 暗茶褐色土 (粘性・しまりなし)
- 13 暗褐色土 (下層に礫含、粘性・しまり弱)
- 14 暗褐色土 (下層に礫含、粘性・しまり弱)



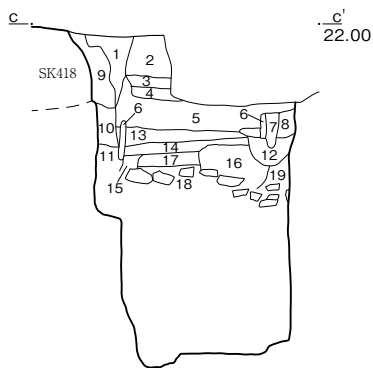
SK162 南側柱穴

SK162-ピット 南側柱穴

- 15 暗茶褐色土 (黄褐色ローム粒・小円礫少含)
- 16 暗茶褐色土 (黄褐色ローム粒多含、部分的に黄褐色ロームB含)
- 17 暗黄褐色土 (黄褐色ロームB主体、粘性・しまり極強)
- 18 暗茶褐色土 (小礫含、粘性・しまりなし)
- 19 茶褐色土 (ロームB主体、礫含、しまりなし)
- 20 茶褐色土
- 21 茶褐色土 (黄褐色ローム粒多含)
- 22 暗茶褐色土 (円礫多含、粘性・しまりなし)
- 23 暗褐色土
- 24 暗茶褐色土 (11層と酷似、柱痕)
- 25 暗黄褐色土 (黄褐色ロームB多含、粘性極強)
- 26 暗茶褐色土 (11層と酷似、柱痕)
- 27 暗黄褐色土 (黄褐色ロームB主体、粘性極強)
- 28 暗茶褐色土 (11層と酷似、柱痕)
- 29 暗黄褐色土 (黄褐色ロームB主体、しまり極強)
- 30 暗黄褐色土 (黄褐色ロームB含、しまりなし)
- 31 暗茶褐色土 (11層と酷似、柱痕)
- 32 暗黄褐色土 (ロームB主体)
- 33 暗茶褐色土 (11層と酷似、柱痕) しまり極強)
- 34 暗黄褐色土 (黄褐色ロームB多含、茶褐色土粒を均一含、粘性極強)
- 35 暗茶褐色土 (11層と酷似、柱痕)
- 36 暗黄褐色土 (黄褐色ロームB多含、粘性極強)



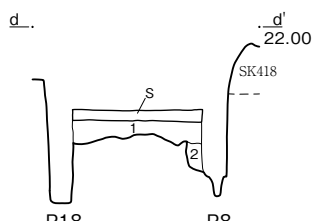
III-17図 SK162(B面) (2)



SK162 中央部

SK162 中央部 c-c'

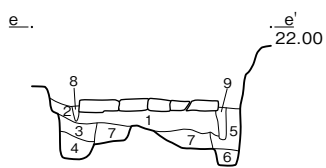
- 1 暗茶褐色土 (礫少含、ローム微粒子極少含、粘性弱、やや明るい)
- 2 暗茶褐色土 (礫多含、ローム微粒子含、しまり弱、1層より茶色)
- 3 暗茶褐色土 (礫極少含)
- 4 暗茶褐色土 (礫極多含、暗灰色粘土粒少含、粘性・しまり強)
- 5 暗黄褐色土 (ローム粒斑点状含、炭化物・礫少含、粘性強、しまり弱)
- 6 暗黄褐色土 (粘性強、しまり弱、柱痕)
- 7 暗褐色土 (しまり弱、6層よりややしまる、柱痕)
- 8 暗黄褐色土 (礫含、ローム粒少含、粘性強、しまり弱)
- 9 暗黄褐色土 (ローム粒・礫含、灰色粘土B極少含、しまり強)
- 10 茶褐色土 (ローム粒・礫極少含、粘性・しまり強)
- 11 黄褐色土 (ローム土主体、暗褐色土含、粘性強、しまり弱)
- 12 暗黄褐色土 (ローム粒斑点状多含、黒褐色土斑点状含)
- 13 暗灰色土 (赤い土(酸化物か)を層状に含、粘性・しまり強、硬化面)
- 14 黄褐色土 (ローム土主体、黒褐色土粒・礫極小含、粘性・しまり強、硬化面)
- 15 黄褐色土 (ローム土主体、暗褐色土粒含、粘性・しまり強、14層より黒い)
- 16 暗黄褐色土 (ローム粒多含、ローム粒・暗褐色土粒をモザイク状含、粘性強、しまり弱)
- 17 暗黄褐色土 (ローム粒含、粘性・しまり強)
- 18 暗黄褐色土 (ロームB含、粘性強、しまり弱)
- 19 暗黄褐色土 (ローム粒含)



SK162 東側石板

SK162 東側石板 d-d'

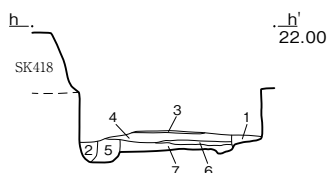
- 1 暗黄褐色土 (暗褐色土主体、ローム粒斑点状含、黒褐色土粒斑点状少含、礫少含、粘性・しまり強)
- 2 黄褐色土 (ローム粒主体、黒褐色土粒少含、しまり強)



SK162 西側石列1

SK162 西側石列1 e-e'

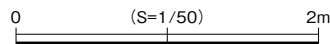
- 1 茶褐色土 (暗黄褐色ロームBを均一に含、円礫極少含、しまり極強)
- 2 暗黄褐色土 (黄褐色ロームB極多含、礫極少含、しまり極強)
- 3 暗茶褐色土 (礫多含)
- 4 茶褐色土 (暗黄褐色ロームBを均一に含)
- 5 暗茶褐色土 (礫多含、ローム粒極少含、しまりなし)
- 6 暗黄褐色土 (黄褐色B多含)
- 7 茶褐色土 (黄褐色土B均一に含、円礫極少含、しまり極強、1層よりやや暗い)
- 8 暗茶褐色土 (粘性・しまりなし、板の痕跡か)
- 9 暗茶褐色土 (粘性・しまりなし、板の痕跡か)



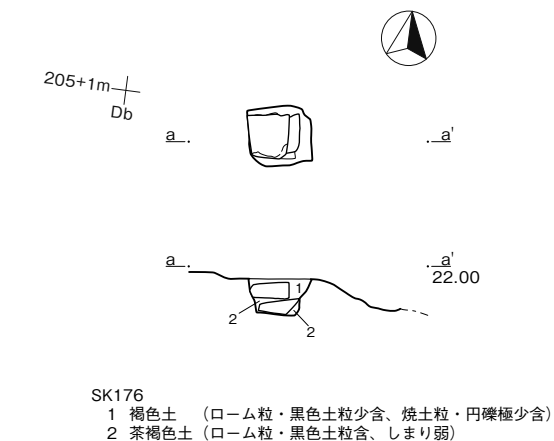
SK162 東側掘方

SK162 東側掘方 h-h'

- 1 暗黄褐色土 (ローム粒多含、礫少含、粘性強、しまり弱)
- 2 黒褐色土 (粘性・しまり弱、ふかふかな土)
- 3 暗褐色土 (灰色砂質土粒・赤褐色土粒所々に含、粘性弱、しまり強)
- 4 暗褐色土 (礫極少含、粘性弱、しまり強、灰色がかかる)
- 5 黄褐色土 (ローム土主体、粘性・しまり強)
- 6 黄褐色土 (ローム土主体、粘性・しまり強)
- 7 暗黄褐色土 (中央部に白色粘土塊1点含、しまり強)

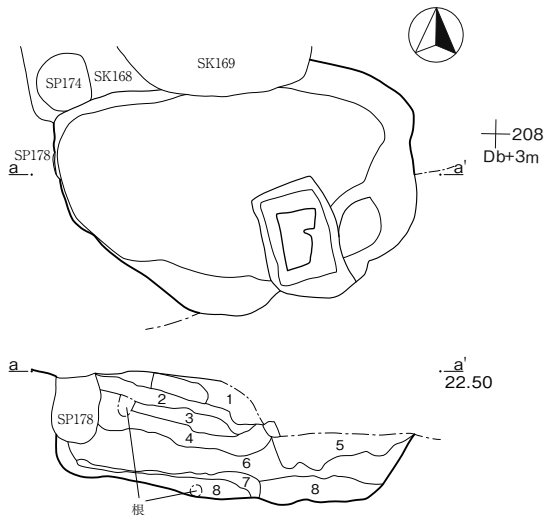


III-18図 SK162(B面) (3)



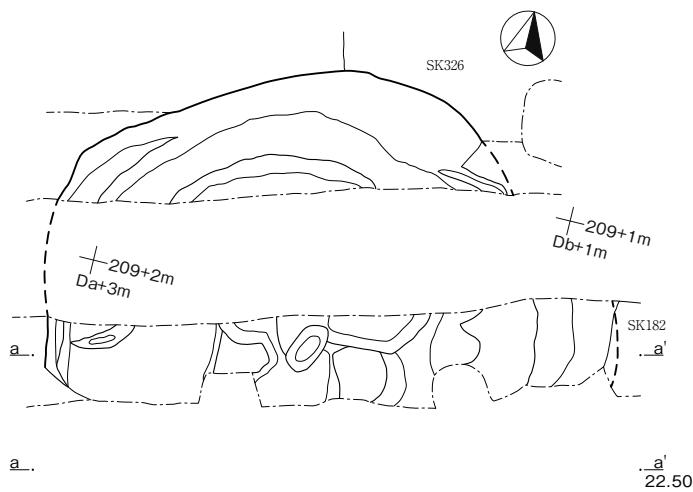
- SK176
 1 褐色土 (ローム粒・黒色土粒少含、焼土粒・円礫極少含)
 2 茶褐色土 (ローム粒・黒色土粒含、しまり弱)

SK176(A面)



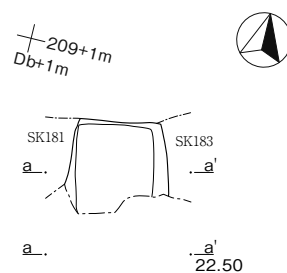
- SK179
 1 茶褐色土 (ローム粒・灰褐色粘土粒含、ロームB・小円礫少含)
 2 暗茶褐色土 (ローム粒・B含、しまり強)
 3 暗褐色土 (ローム粒少含、しまり強)
 4 暗褐色土 (ローム粒・焼土粒・角礫極少含、3層よりやや暗い)
 5 暗褐色土 (ロームB、円礫少含、ローム粒・角礫極少含)
 6 茶褐色土 (ローム粒多含、灰褐色粘土粒含、ロームB少含、焼土粒極少含)
 7 暗褐色土 (灰褐色粘土粒極多含、円礫少含、粘性強、しまり弱)
 8 暗茶褐色土 (ローム粒少含、小円礫・破碎瓦極少含)

SK179(A面)



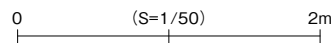
- SK181
 1 暗茶褐色土 (ローム粒・小円礫少、ロームB・円礫・焼瓦極少量含)
 2 茶褐色土 (ローム粒・ロームB・円礫・小円礫少含)
 3 黄褐色土 (ほぼローム土で構成される。円礫極少量含)

SK181(B面)

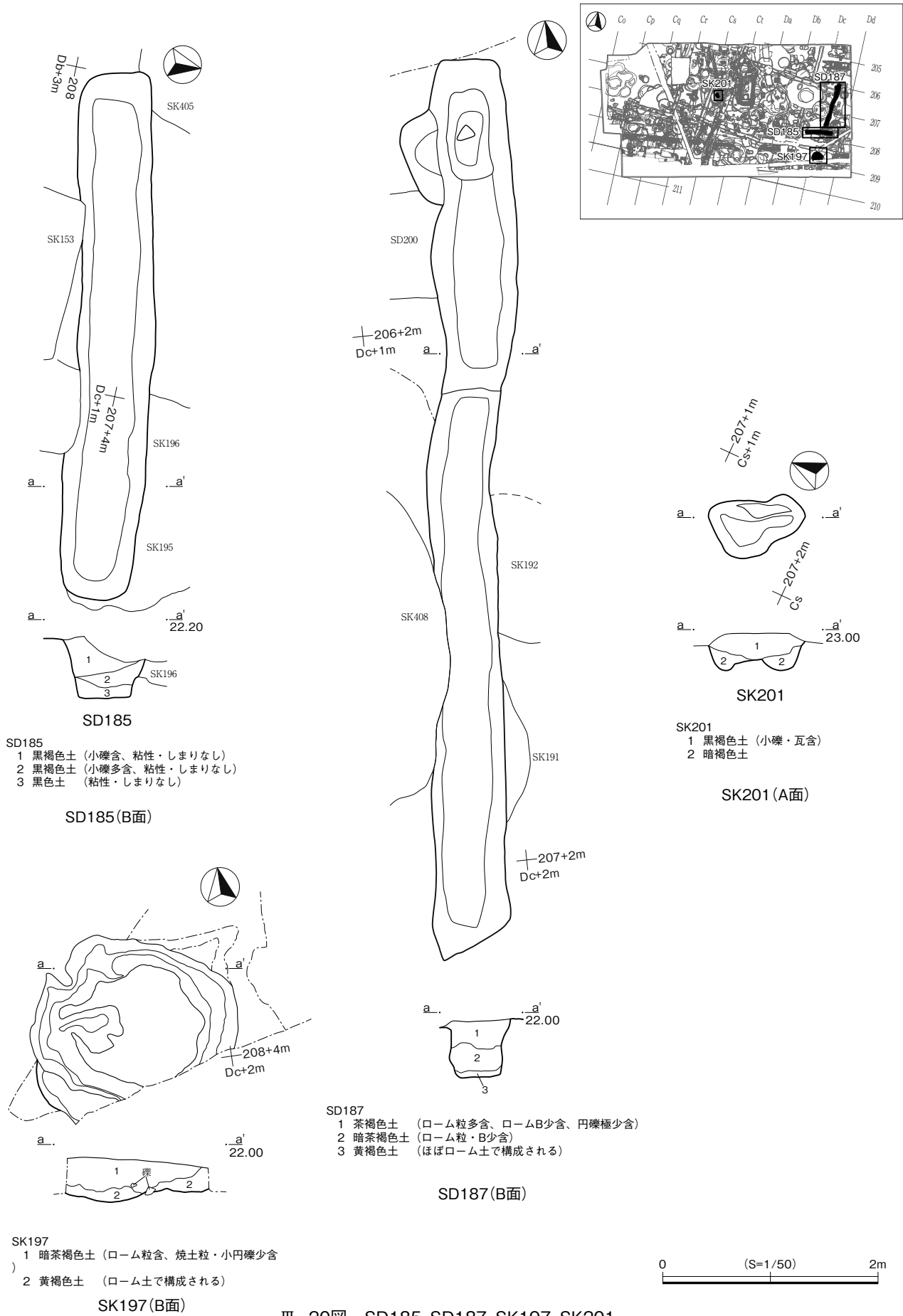


- SK182
 1 褐色土 (ローム粒多含、円礫少含、焼土粒極少含)
 2 茶褐色土 (ローム粒含、ロームB少含、円礫極少含)
 3 暗茶褐色土 (ローム粒少含、焼土粒極少含)
 4 茶褐色土 (ローム粒少含)

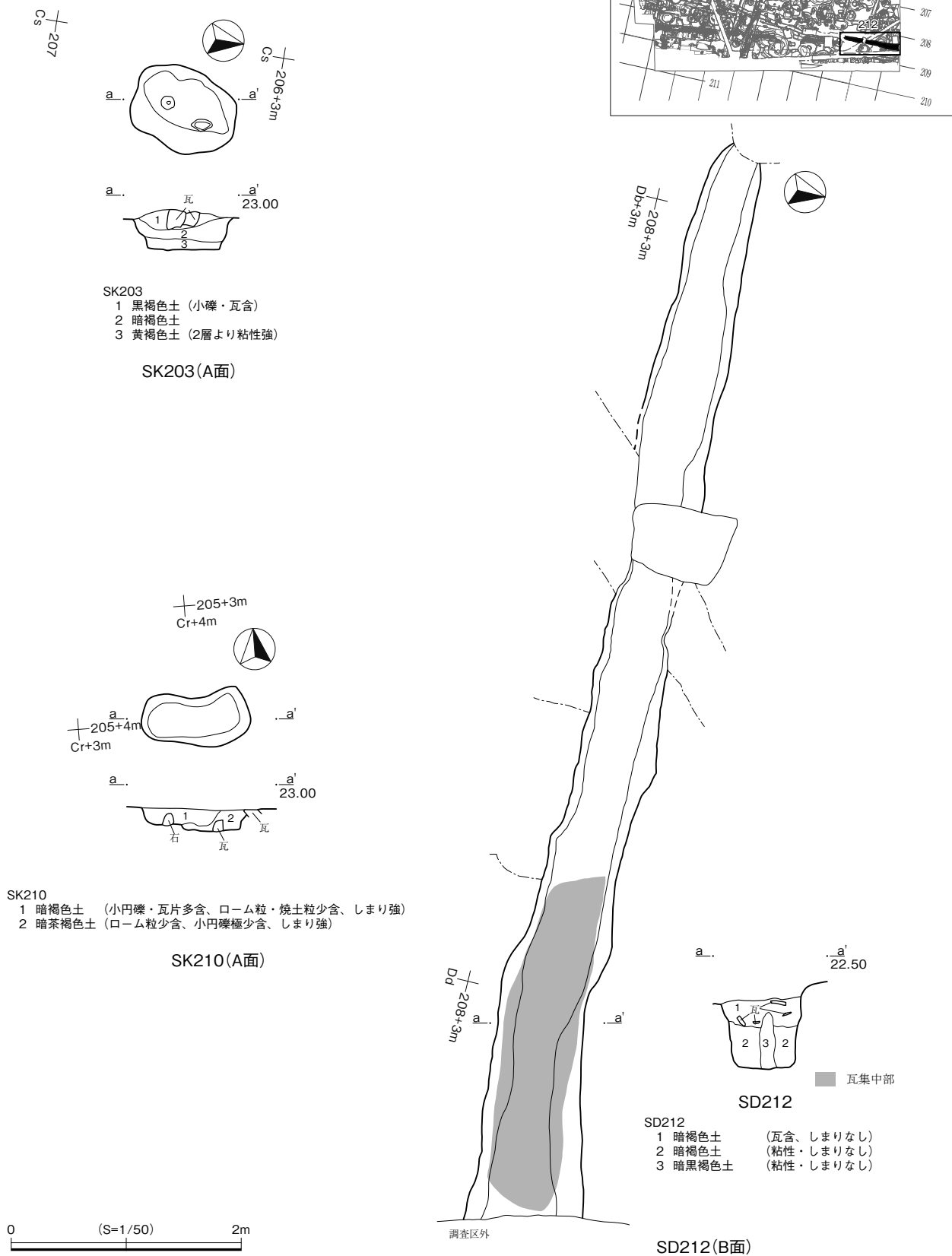
SK182(B面)



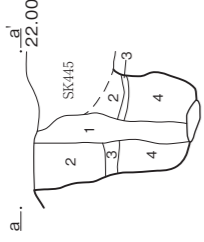
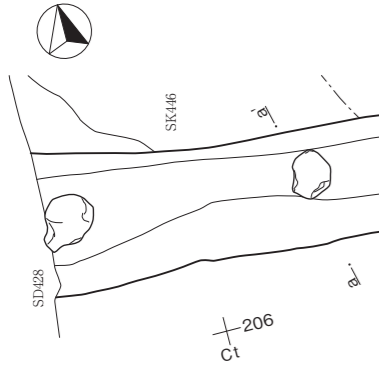
III-19図 SK176、SK179、SK181、SK182



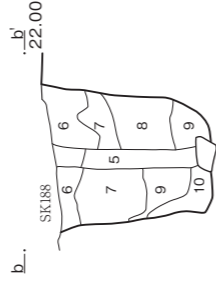
III-20図 SD185、SD187、SK197、SK201



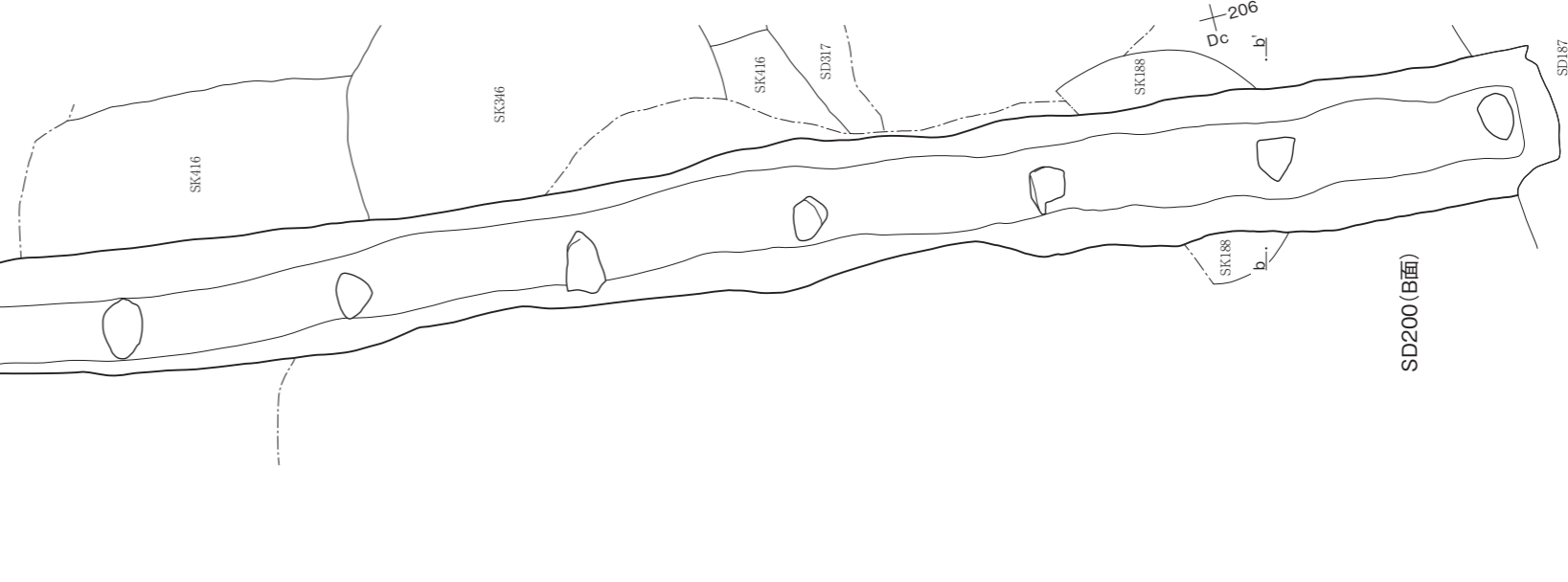
Ⅲ-21図 SK203、SK210、SD212



- SD200 a-a'
 1 暗褐色土 (ローム粒・黄褐色砂粒少含、粘性・しまりなし、柱痕)
 2 暗褐色土 (ローム粒多含、ロームB少含)
 3 黒褐色土 (ローム粒少含)
 4 茶褐色土 (ローム粒・B極多含)

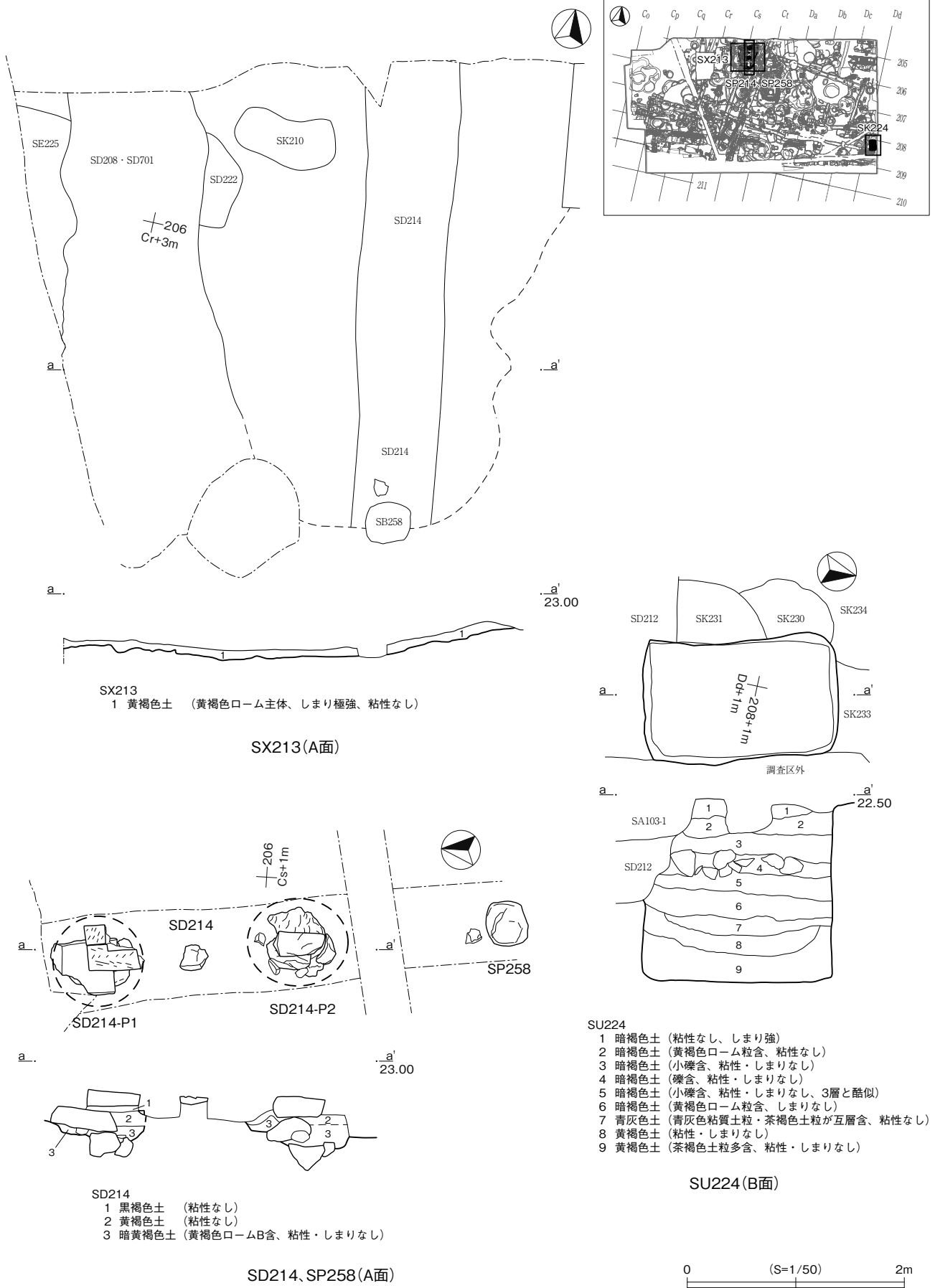


- SD200 b-b'
 5 黒褐色土 (ローム粒・ロームB・黒色土Bをマール状に含)
 6 黄褐色土 (ローム大B極多含、ローム粒多含、粘性なし)
 7 褐色土 (ローム粒・B極多含、粘性・しまり弱)
 8 黄褐色土 (ロームBで構成される、粘性なし)
 9 茶褐色土 (ローム粒・ロームBで構成される、粘性弱)
 10 茶褐色土 (ローム粒少含、粘性・しまりなし、柱痕か)

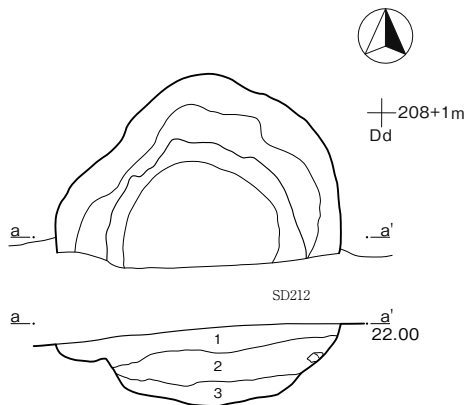


SD200 (B面)



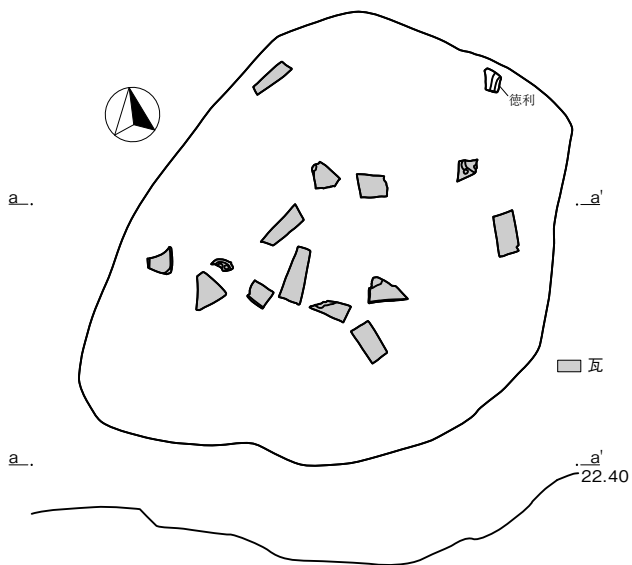


III-23図 SX213、SP214、SU224、SP258

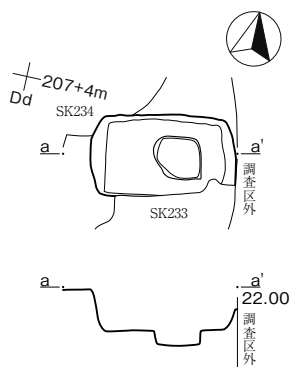


- SK232
 1 黄褐色土 (黄褐色ローム粒主体、粘性・しまりなし)
 2 黒褐色土 (黄褐色ロームB含、粘性・しまりなし)
 3 暗黄褐色土 (ローム粒極少含、粘性・しまりなし)

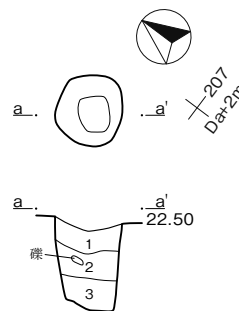
SK232(B面)



SX253(A面)

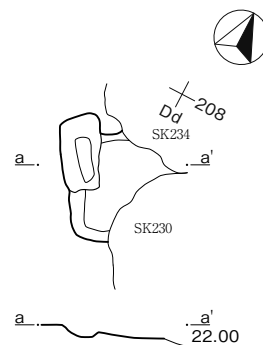


SK269(B面)

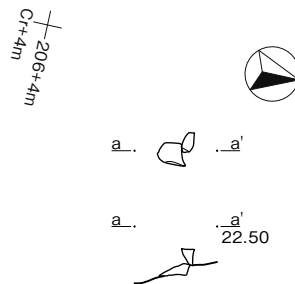


- SP251
 1 暗褐色土 (粘性・しまりなし)
 2 暗褐色土 (黄褐色ローム粒極少含)
 3 暗褐色土 (黄褐色ローム粒多含、しまりなし)

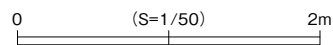
SP251(A面)



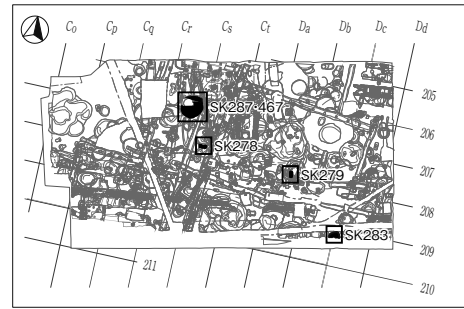
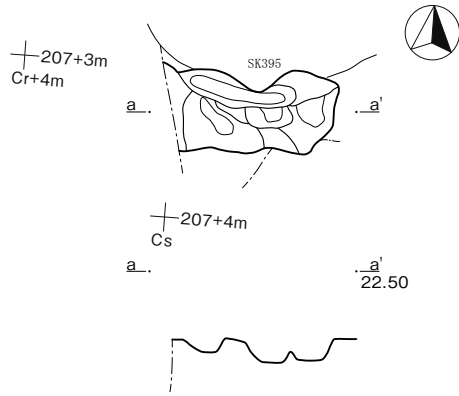
SK268(B面)



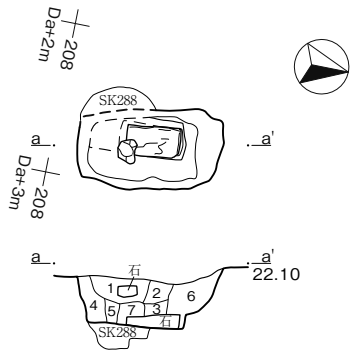
SP276(A面)



III-24図 SK232、SP251、SX253、SK268、SK269、SP276



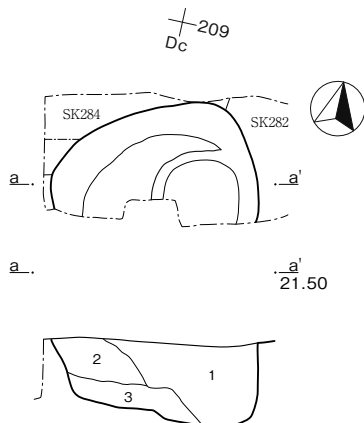
SK278(B面)



SK279

- 1 暗褐色土 (黄褐色ローム粒含、粘性・しまりなし)
- 2 黒褐色土 (粘性・しまりなし)
- 3 暗褐色土 (粘性なし)
- 4 黒褐色土B
- 5 黄褐色ロームB
- 6 黄褐色土 (黄褐色ローム粒多含)
- 7 黄褐色土 (粘性・しまりなし)

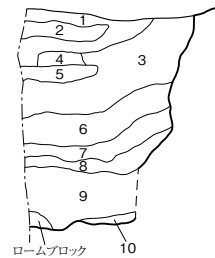
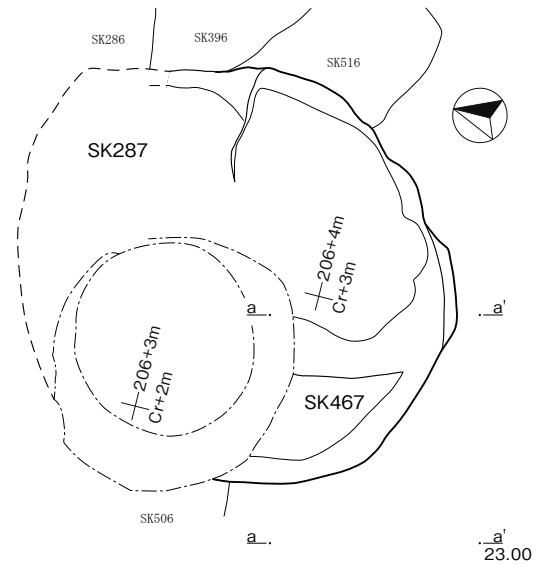
SK279(B面)



SK283

- 1 暗褐色土 (小礫含、炭化物・石灰粒少含、粘性・しまり弱)
- 2 茶褐色土 (炭化物・石灰粒少含、粘性・しまり弱)
- 3 明褐色土 (石灰粒少含、粘性弱、しまり強)

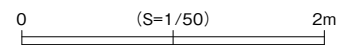
SK283(A面)



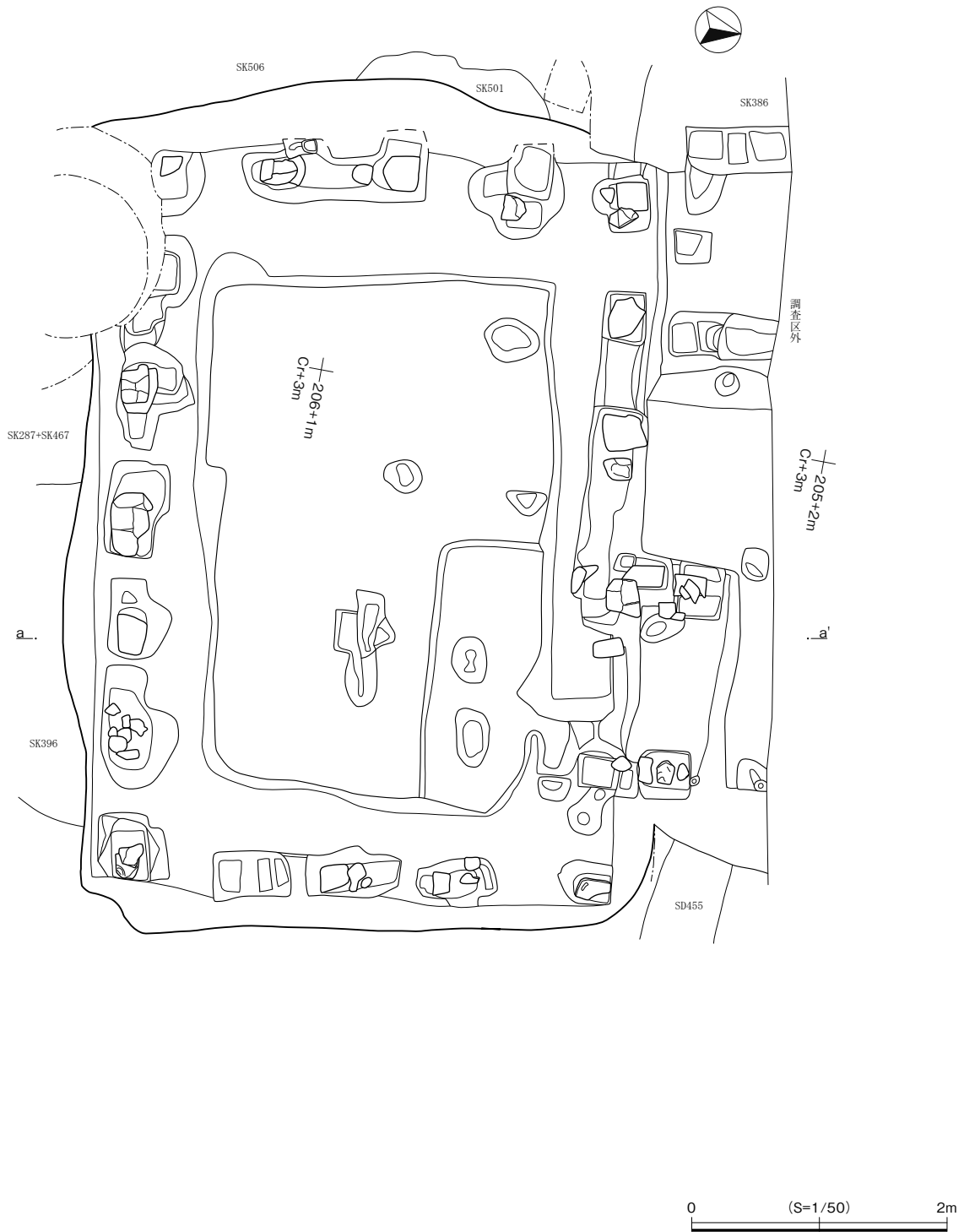
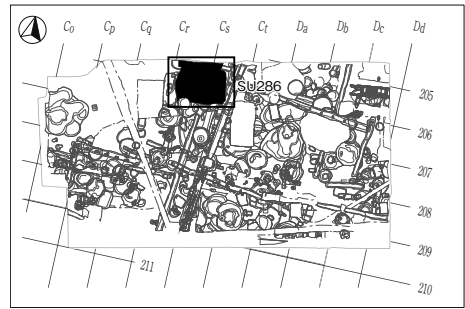
SK287・467

- 1 暗褐色土 (白色土粒・礫多含、粘性なし)
- 2 淡灰色土 (礫多含、粘性極強)
- 3 暗褐色土 (白色土粒多含、礫少含、粘性なし)
- 4 瓦層
- 5 青灰色土 (橙色砂粒部分的に含、粘性なし)
- 6 暗褐色土 (礫多含、粘性・しまりなし、3層より明るい)
- 7 暗褐色土 (礫多含、粘性・しまりなし)
- 8 暗褐色土 (礫極少含、しまりなし)
- 9 暗褐色土 (黄褐色ロームB含、粘性なし)
- 10 黒褐色土 (炭化物が集中する、粘性・しまりなし)

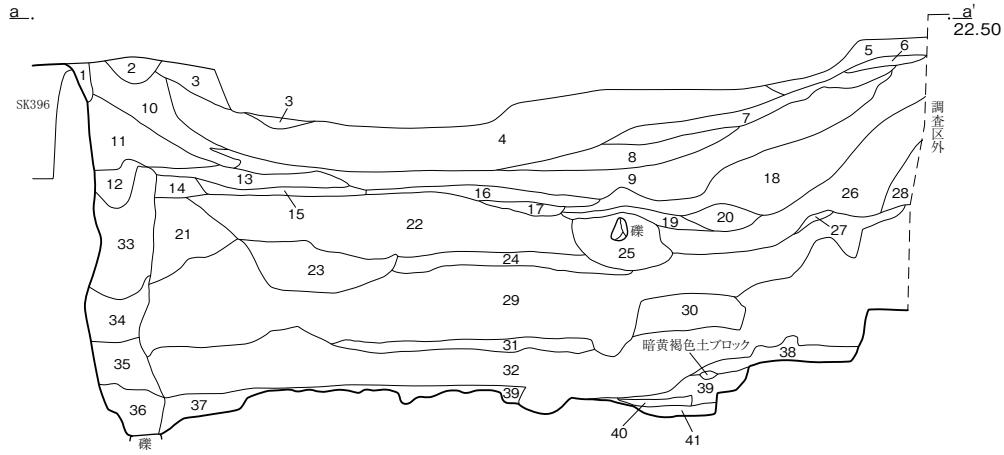
SK287・467(B面)



III-25図 SK278, SK279, SK283, SK287・467

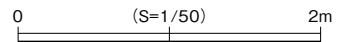


III-26図 SU286(1)

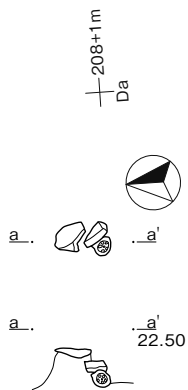


- SK286 a-a'
- 1 黄褐色土 (粘性なし)
 - 2 暗褐色土 (小礫多含、粘性・しまりなし)
 - 3 黒色土 (漆喰多含、粘性・しまりなし)
 - 4 暗褐色土 (小礫を全体的に含、黄褐色ローム粒極少含、粘性なし)
 - 5 黒褐色土 (小礫多含、粘性なし)
 - 6 黒色土 (粘性・しまりなし)
 - 7 黒褐色土 (ガラス質土粒多含、粘性なし)
 - 8 黄褐色土 (黒色土B・小礫含、粘性なし、しまり強)
 - 9 黄褐色土 (小礫多含、粘性・しまりなし)
 - 10 黄褐色土 (粘性なし、9層より明るい)
 - 11 暗褐色土 (小礫多含、ガラス質土粒含、粘性・しまりなし)
 - 12 暗黄褐色土 (小礫極少含、しまりなし)
 - 13 青灰色土 (小礫多含、白色土粒含、粘性・しまりなし)
 - 14 暗褐色土 (粘性・しまりなし)
 - 15 黒色土 (漆喰・貝殻少含、粘性・しまりなし)
 - 16 赤褐色土 (粘性なし、暗い赤色を呈する部分は硬化)
 - 17 黄褐色土 (青灰色砂粒多含、粘性・しまりなし)
 - 18 黄褐色土 (粘性・しまりなし)
 - 19 黒褐色土 (赤色を呈し硬化した土粒をブロック状に含、しまりなし)
 - 20 黒褐色土 (ガラス質土粒含、しまりなし)
 - 21 暗褐色土 (黄褐色ロームB多含、粘性・しまりなし)
 - 22 黄褐色土 (黄褐色ロームB多含、白色土粒含、粘性・しまりなし)
 - 23 暗褐色土 (小礫多含、粘性・しまりなし)
 - 24 青灰色土 (粘性・しまりなし)
 - 25 黄褐色土 (黄褐色ロームB・黒色土粒から構成される、しまりなし)
 - 26 黒褐色土 (小礫多含、黄褐色ローム粒を全体的に含、粘性・しまりなし)
 - 27 白色砂土
 - 28 黒色土 (黄褐色ローム粒少含、粘性なし)
 - 29 黄褐色土 (黄褐色ローム粒・B多含、粘性なし)
 - 30 暗黄褐色土 (黄褐色ロームB少含、小礫極少含、粘性・しまりなし)
 - 31 黒褐色土 (黄褐色ロームB極少含、しまり強)
 - 32 黄褐色土 (黄褐色ロームB多含、しまり強)
 - 33 暗褐色土 (黄褐色ローム粒多含、粘性なし)
 - 34 黄褐色土 (黄褐色ロームB多含、粘性なし)
 - 35 暗褐色土 (黄褐色ローム粒少含、しまりなし)
 - 36 黄褐色土 (黄褐色ロームB多含、粘性・しまりなし)
 - 37 黄褐色土 (黄褐色ロームB主体、黒色土粒少含)
 - 38 黄褐色土 (粘性なし、しまり強)
 - 39 暗黄褐色土 (粘性なし、しまり強、硬化面)
 - 40 暗褐色土 (黄褐色ローム粒含、粘性なし)
 - 41 黄褐色土 (黄褐色ロームB主体、粘性なし)

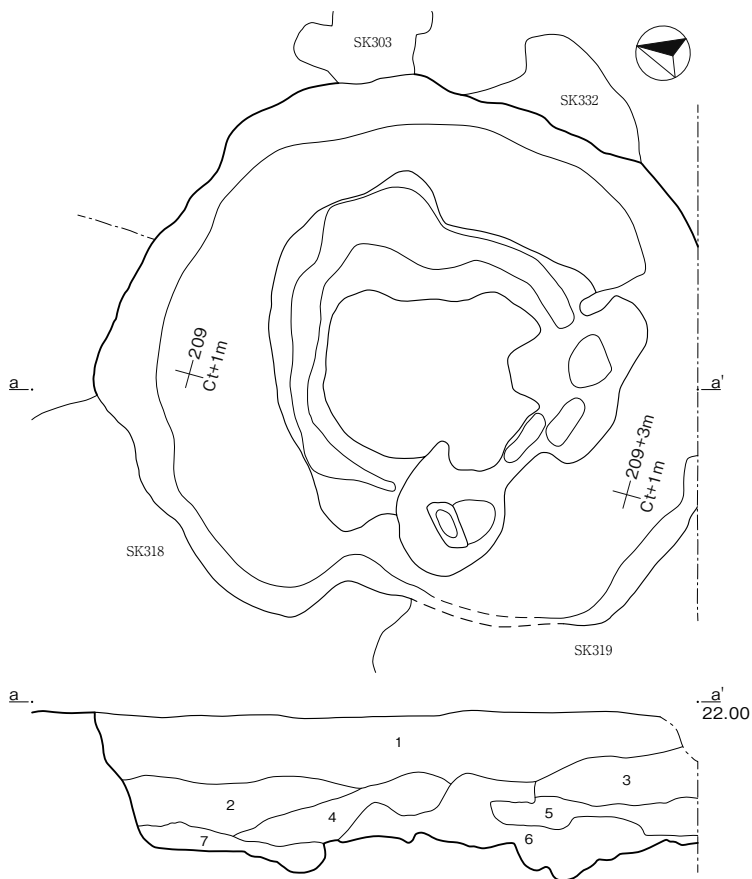
SU286(B面)



III-27図 SU286(2)

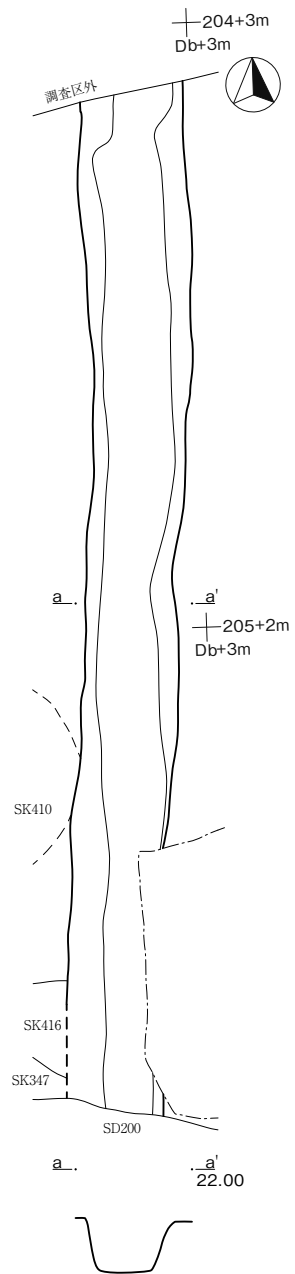


SP294(A面)

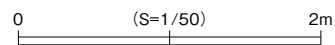


- SK314
- 1 暗褐色土 (黄褐色ローム粒・焼土粒・炭化物粒・小礫含、粘性・しまりなし)
 - 2 暗褐色土 (黄褐色ローム粒含、粘性・しまりなし)
 - 3 黒褐色土 (黄褐色ローム粒少含、粘性・しまりなし)
 - 4 暗褐色土 (黄褐色ロームB含、粘性・しまりなし)
 - 5 黒褐色土 (粘性・しまりなし)
 - 6 黄褐色土 (黄褐色ロームB多含、粘性・しまりなし)
 - 7 黄褐色土 (黄褐色ロームB主体、しまりなし)

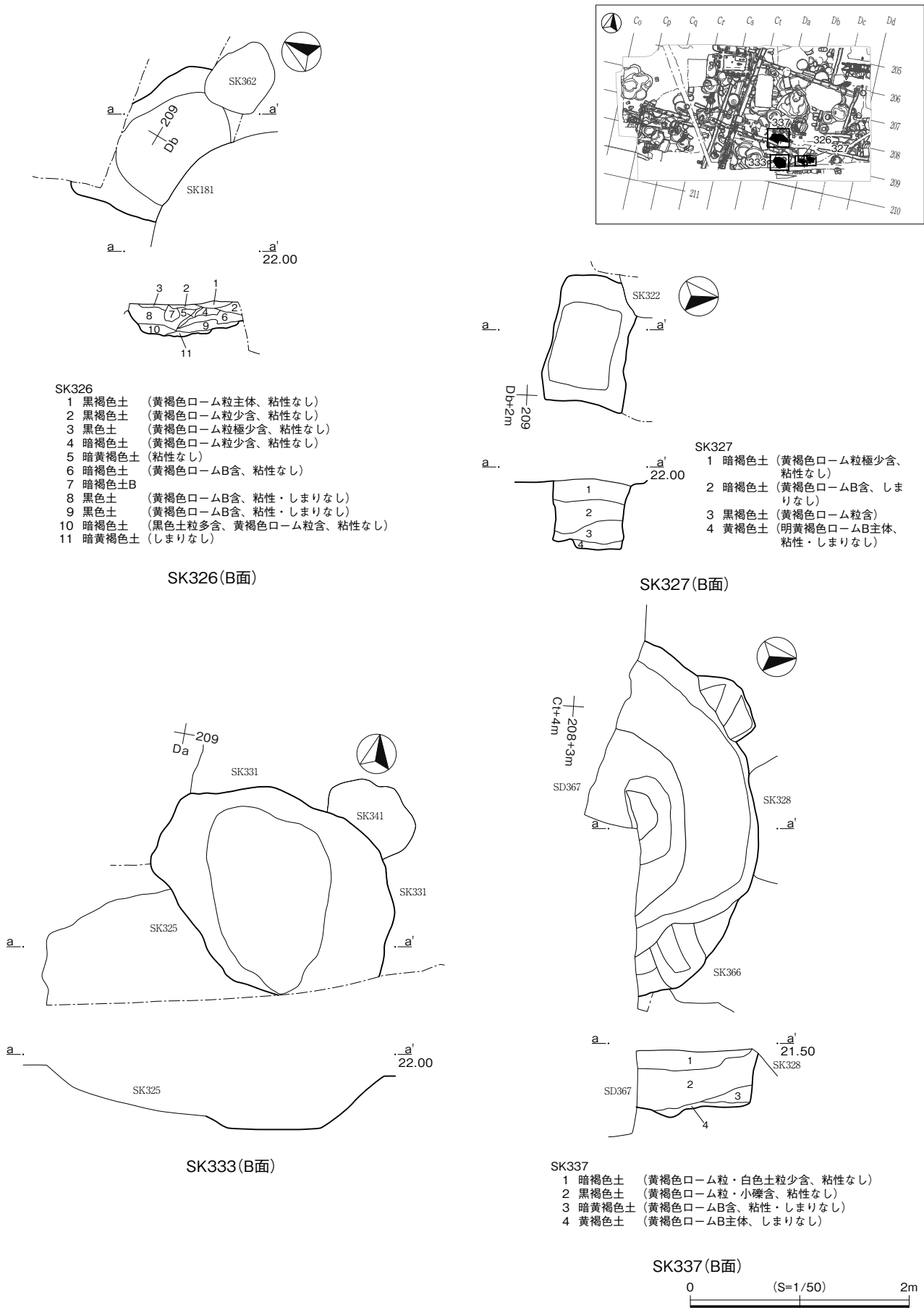
SK314(B面)



SD317(B面)

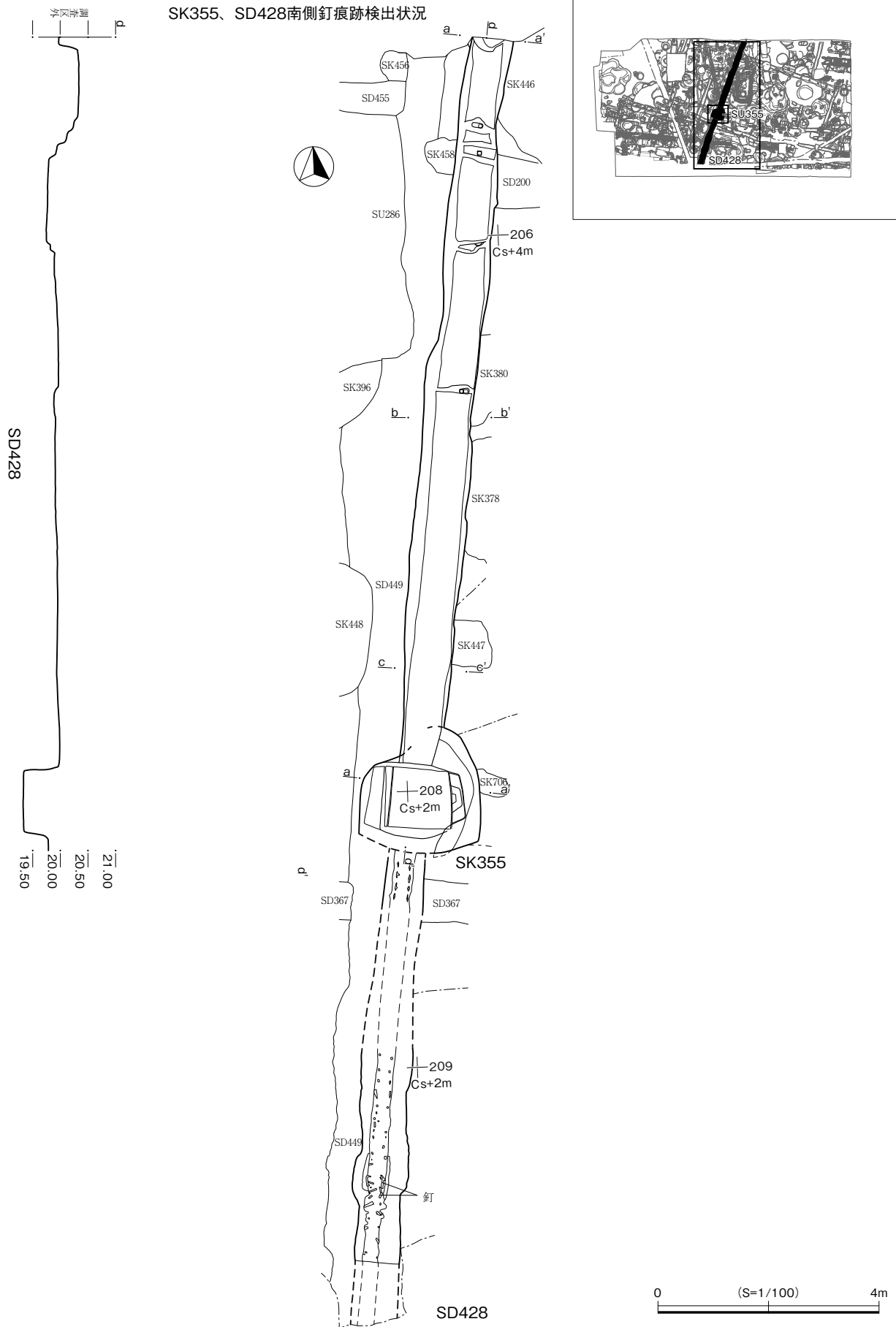


III-28図 SP294、SK314、SD317



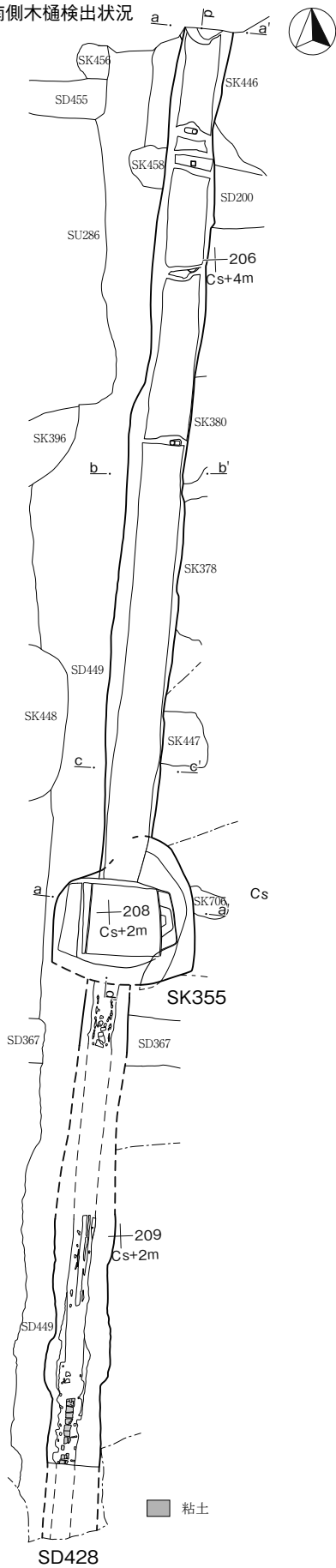
III-29図 SK326、SK327、SK333、SK337

SK355、SD428南側釘痕跡検出状況

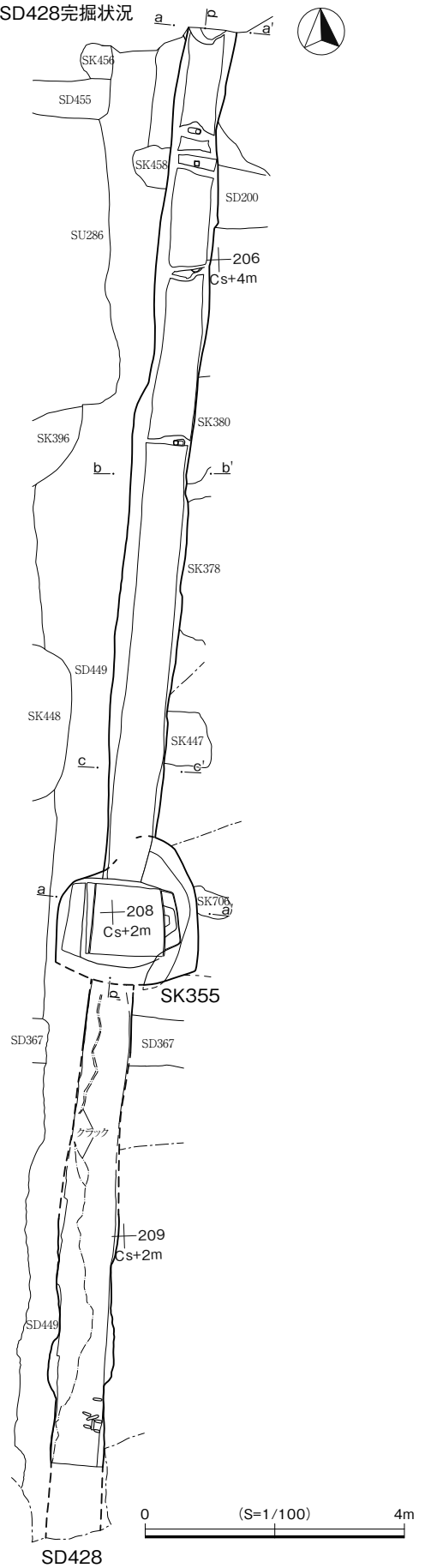


III-30図 SK355、SD428(1)

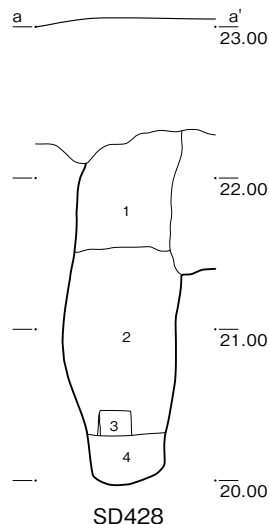
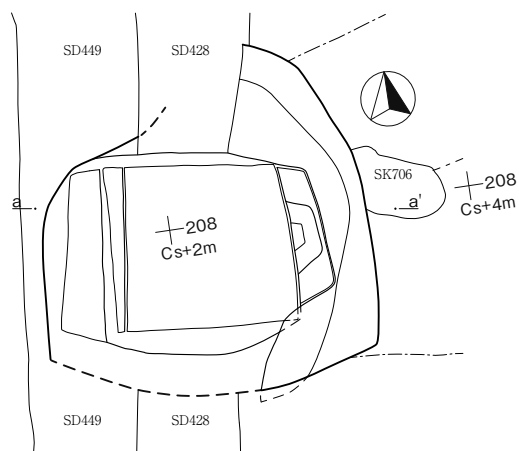
SK355、SD428南側木樋検出状況



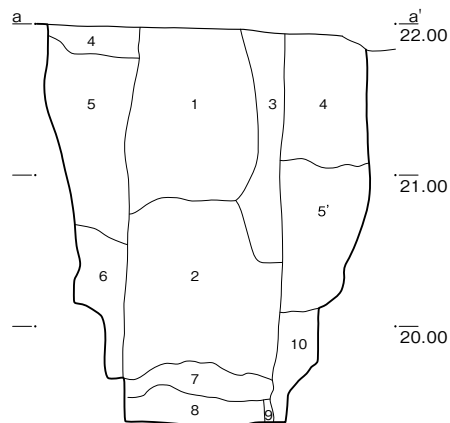
SK355、SD428完掘状況



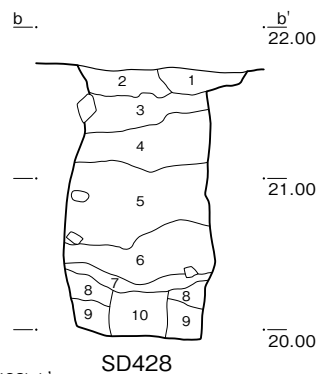
III-31図 SK355、SD428(2)



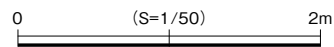
- SD428 a-a'
- 1 黄褐色土 (ローム粒・B極多含、粘性・しまり弱)
 - 2 褐色土 (ローム粒極多含、ロームB多含、粘性・しまり弱)
 - 3 茶褐色土 (ローム粒含、粘性・しまりなし)
 - 4 褐色土 (ローム粒・ロームB多含)



- SK355
- 1 暗褐色土 (ローム粒・円礫少含、しまり弱)
 - 2 褐色土 (ローム粒極多含、ロームB多含、しまり弱)
 - 3 茶褐色土 (ローム粒・焼土粒少含、ロームB・円礫極少含、しまり弱)
 - 4 暗茶褐色土 (ローム粒・円礫少含、ロームB極少含)
 - 5 褐色土 (ローム粒極多含、ロームB多含)
 - 5' 褐色土 (ロームB極多含)
 - 6 暗褐色土 (ローム粒含、ロームB少含、しまり弱)
 - 7 褐色土 (ロームB含、ローム粒少含、粘性強)
 - 8 暗褐色土 (ローム粒少含、粘性強)
 - 9 黄褐色土 (灰褐色粘土粒多含、しまりなし、板の痕か)
 - 10 暗茶褐色土 (ローム粒・B多含、粘性・しまり弱)



- SD428 b-b'
- 1 暗茶褐色土 (白色土粒多含、円礫少含)
 - 2 暗茶褐色土 (円礫少含)
 - 3 暗黄褐色土 (ローム粒多含)
 - 4 暗黄褐色土 (ローム粒・B多含、粘性なし)
 - 5 暗黄褐色土 (ロームB極多含、礫少含、しまりなし)
 - 6 暗黄褐色土 (ロームB極多含、しまりなし)
 - 7 暗灰褐色土 (ローム粒・円礫少含、しまりなし)
 - 8 黄褐色土 (ロームB主体、しまり極強)
 - 9 黄褐色土 (ロームB多含)
 - 10 暗灰褐色土 (暗灰褐色土主体、鉄釘多含、ローム粒・小円礫極少含、粘性・しまりなし)

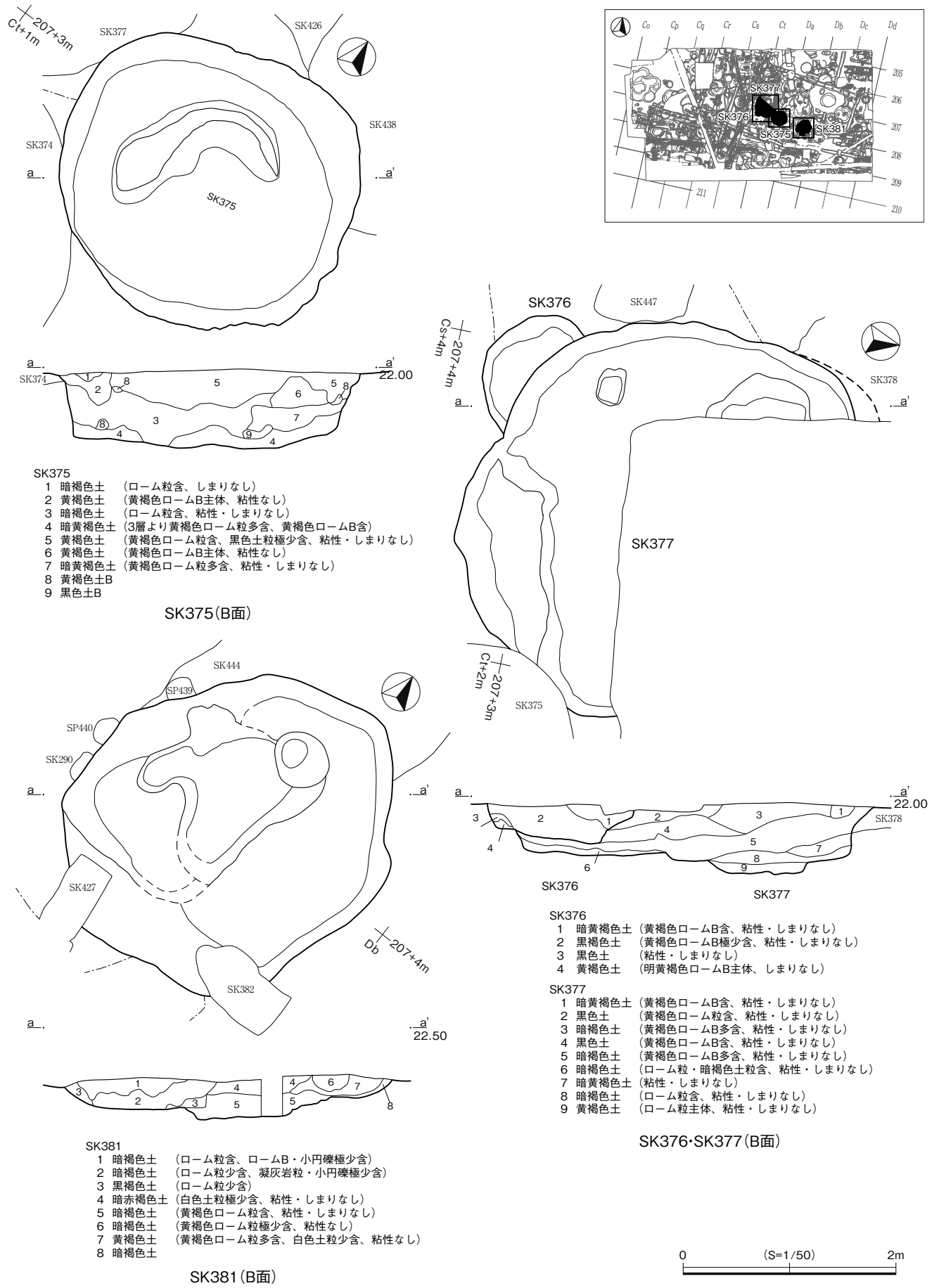


SD428釘検出状況



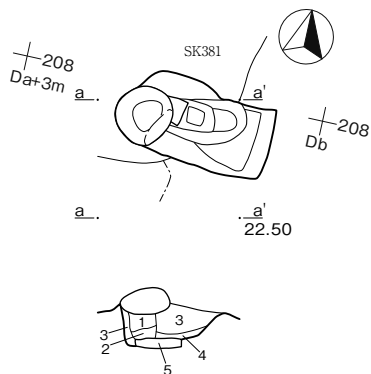
SD428地震痕

III-32図 SK355, SD428(3)



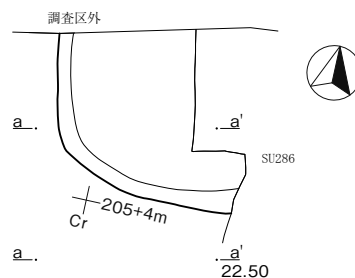
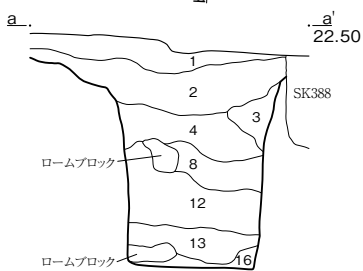
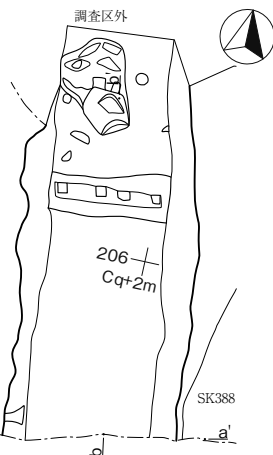
III-33図 SK375、SK376、SK377、SK381

□-101



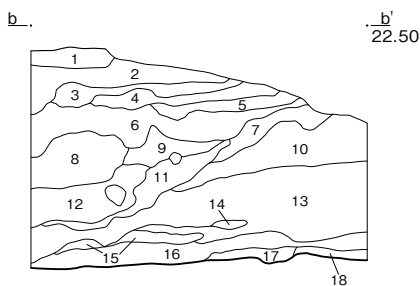
- SK381
- 1 暗茶褐色土 (ローム粒・灰褐色粘土粒少含、しまりなし)
 - 2 暗褐色土 (ローム粒少含、しまりなし)
 - 3 茶褐色土 (ローム粒・焼土粒・炭化物粒少含)
 - 4 暗灰褐色土 (灰褐色粘土粒極多含)

SK382(B面)



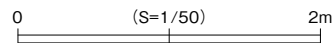
- SK386
- 1 黒色土 (ローム含、粘性・しまりなし)
 - 2 黒色土 (粘性・しまりなし、1層より色調は暗い)
 - 3 黒色土 (ローム粒含、粘性なし)
 - 4 暗褐色土 (黄褐色ローム粒多含、粘性・しまりなし)
 - 5 黄褐色土 (黄褐色ロームB主体、粘性・しまりなし)

SK386(B面)

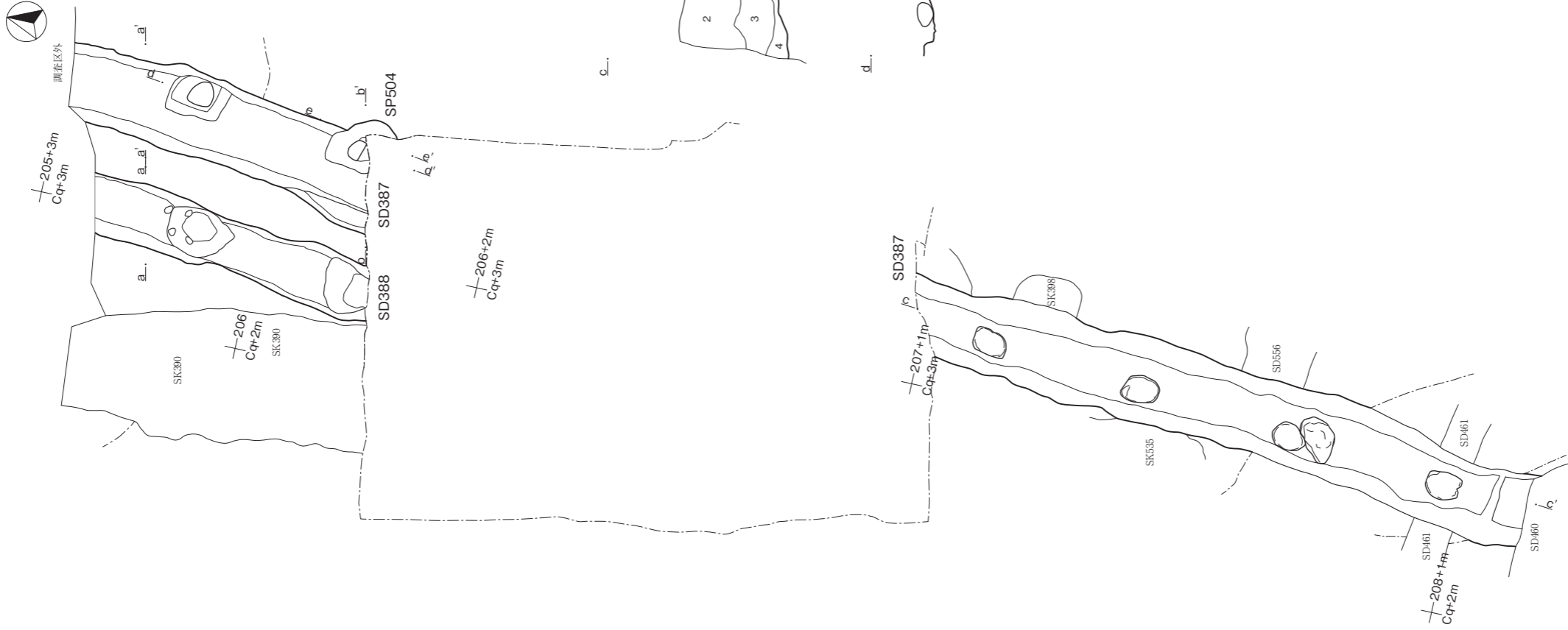
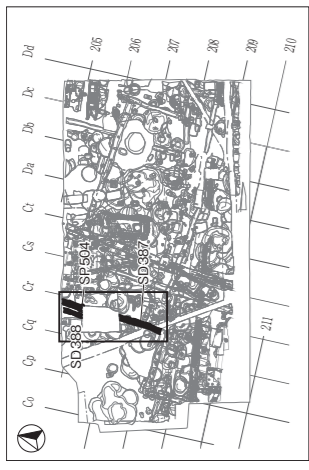


- SK390
- 1 暗褐色土 (黄褐色ロームB含、粘性なし、しまり極強)
 - 2 黒褐色土 (黄褐色ローム粒多含、炭化物粒含、黄褐色ロームB少含、粘性なし)
 - 3 暗褐色土 (黄褐色ローム粒多含、粘性なし)
 - 4 黒褐色土 (粘性・しまりなし)
 - 5 黒褐色土 (黄褐色ローム粒含、粘性・しまりなし)
 - 6 黒褐色土 (粘性・しまりなし)
 - 7 暗褐色土 (黄褐色ローム粒含、粘性・しまりなし)
 - 8 黄褐色土 (黄褐色ロームB主体、黒色土粒少含、粘性・しまりなし)
 - 9 黒色土 (黄褐色ロームB少含、粘性・しまりなし)
 - 10 黄褐色土 (粘性・しまりなし)
 - 11 黒色土 (黄褐色ローム粒・炭化物粒多含、粘性・しまりなし)
 - 12 黒色土 (炭化物粒多含、粘性なし、11層より色調は暗い)
 - 13 黒色土 (黄褐色ローム粒極少含、粘性なし)
 - 14 黄褐色ロームB
 - 15 黒褐色土 (炭化物が集中する、粘性・しまりなし)
 - 16 暗褐色土 (黄褐色ローム粒少含、粘性・しまりなし)
 - 17 黄褐色土 (黄褐色ロームB主体、粘性・しまりなし)

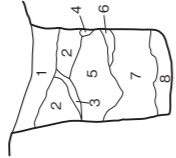
SK390(B面)



III-34図 SK382, SK386, SD390



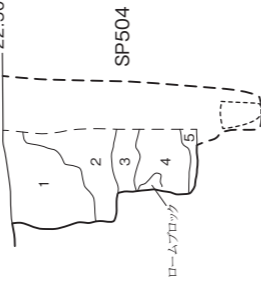
a.. a' 22.50



SD387

- SD387 a-a'
 1 黒褐色土 (黄褐色ローム粒少含、粘性なし)
 2 暗褐色土 (黄褐色ロームB含、粘性・しまりなし)
 3 黒褐色土 (粘性・しまりなし)
 4 黄褐色土 (黄褐色ロームAB)
 5 暗黄褐色土 (粘性なし)
 6 暗黄褐色土 (黄褐色ロームAB多含、粘性なし)
 7 黄褐色土 (黄褐色ロームAB極多含、粘性・しまりなし)
 8 黄褐色土 (黄褐色ローム粒・B主体)

b.. b' 22.50

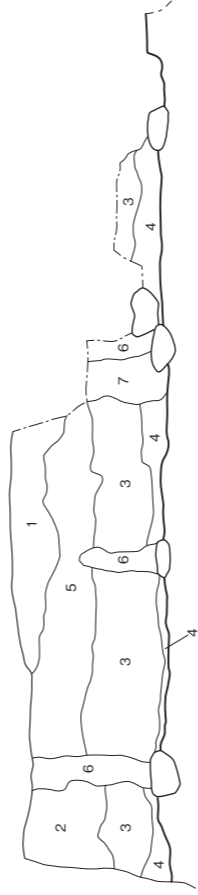


SP504

- SD387 b-b'
 1 暗褐色土 (黄褐色ローム粒多含、粘性なし)
 2 黄褐色土 (黄褐色ロームB多含、粘性なし)
 3 暗褐色土 (黄褐色ロームB少含、粘性・しまりなし)
 4 暗褐色土 (粘性・しまりなし)
 5 暗褐色土 (暗褐色ロームAB主体、粘性・しまりなし)

SD387

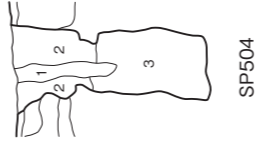
c.. c' 22.50



d.. d' 21.50

- SD387 c-c'
 1 黄褐色土 (黄褐色ローム粒極多含、黄褐色ロームB多含、黒色土B含、粘性・しまりなし)
 2 暗褐色土 (黄褐色ローム粒・B多含、粘性なし)
 3 黒褐色土 (黄褐色ロームAB極多含、粘性・しまりなし)
 4 黄褐色土 (黄褐色ロームAB主体、しまりなし)
 5 暗褐色土 (黄褐色ロームAB多含、しまりなし)
 6 暗褐色土 (粘性・しまりなし)
 7 暗黄褐色土 (黄褐色ロームB少含、粘性なし)

e.. e' 22.50



SP504

- SP504
 1 黄褐色土 (粘性なし、しまり極強)
 2 黄褐色土 (暗褐色土とロームBの混層、粘性なし、しまりなし)
 3 暗褐色土 (黄褐色ロームB・暗褐色土多含、粘性りなし)

a.. a' 22.50



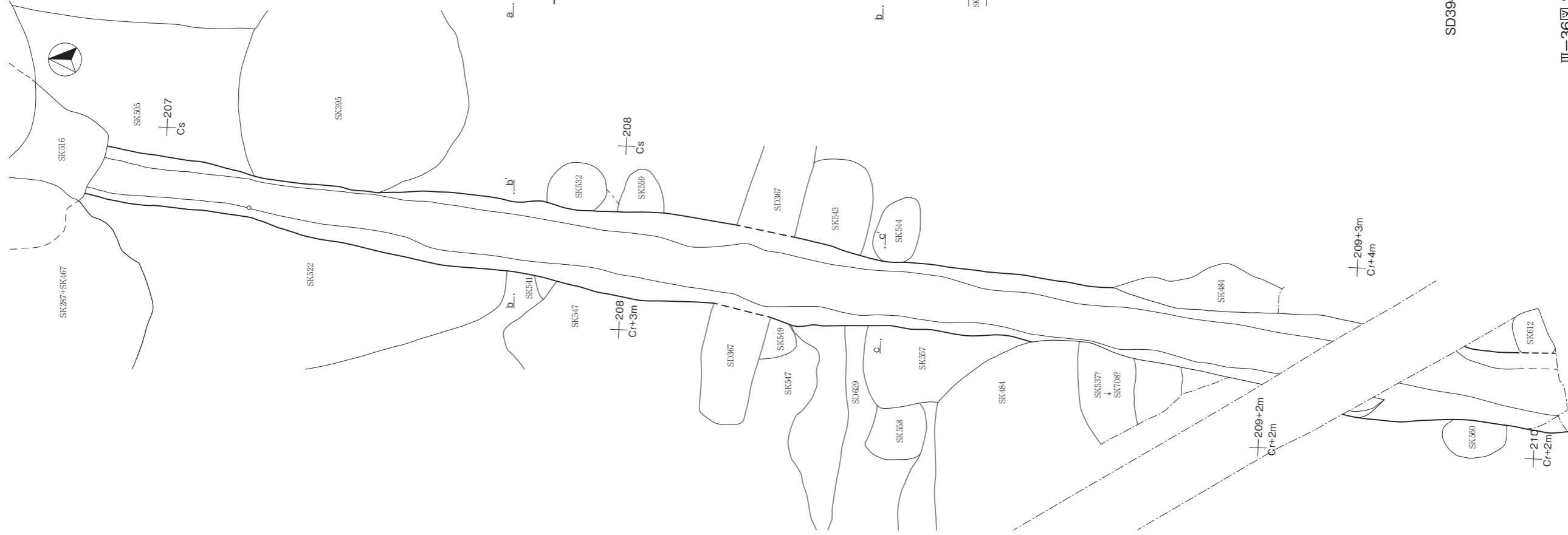
SD388

- SD388 a-a'
 1 黄褐色土 (粘性なし、しまり強)
 2 黄褐色土 (黄褐色ローム粒含、粘性・しまりなし)
 3 暗褐色土 (粘性・しまりなし)

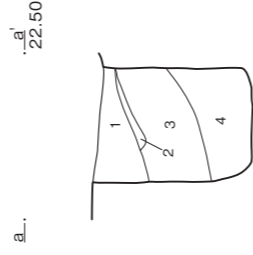


SK387・SP504 (B面) 、SD388 (B面)

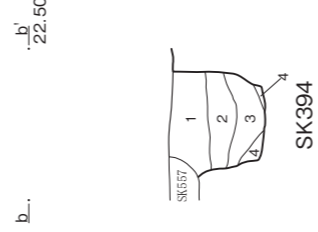




SK394 a-a'
 (黄褐色ローム主体)
 1 黄褐色土 (黄褐色ローム主体、黒色土粒多量、粘性・しまりなし)
 2 黄褐色土 (しまりなし)
 3 暗黄褐色土 (しまりなし)
 4 黒褐色土 (しまりなし)

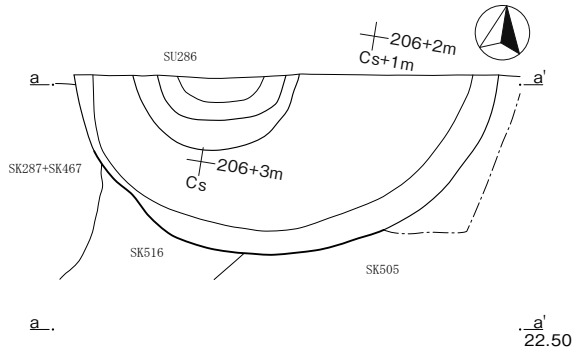


SK394 b-b'
 (黄褐色ローム粒・黒色土B含、しまりなし)
 1 暗黄褐色土 (粘性・しまりなし)
 2 黒色土 (ローム粒含、粘性・しまりなし)
 3 黄褐色土 (粘性・しまりなし)
 4 黄褐色ローム

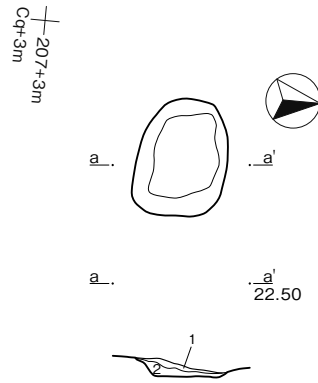
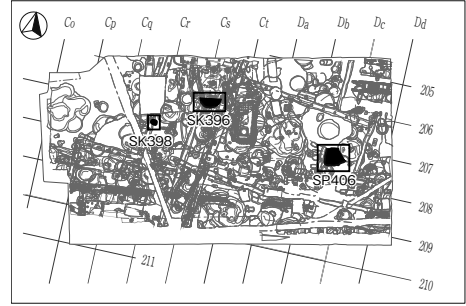


SD394 (B面)





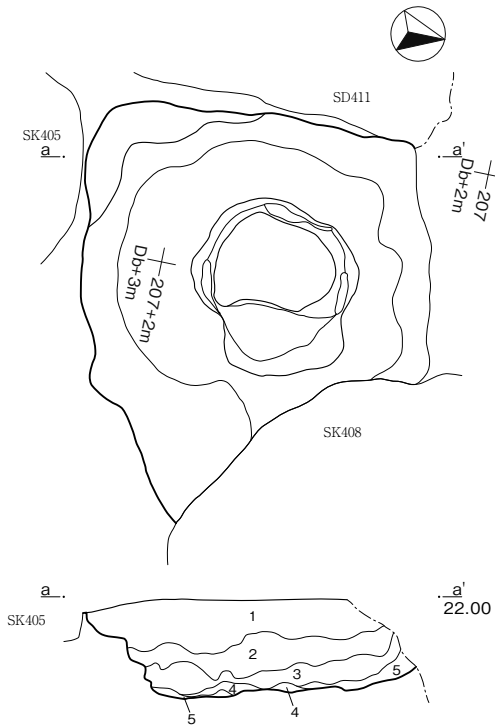
SK396(B面)



SK398

- 1 黄褐色土 (黄褐色ローム粒含、粘性・しまりなし)
- 2 黄褐色土 (青灰色粘土粒多含、しまりなし)

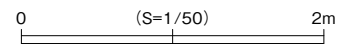
SK398(A面)



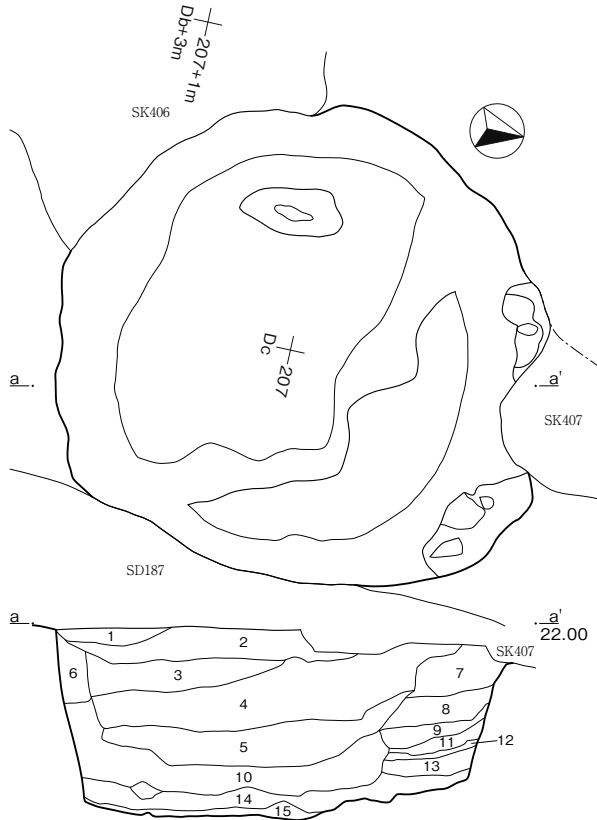
SK406(B面)

SK406

- 1 茶褐色土 (ローム粒・小円礫少含)
- 2 暗褐色土 (ロームB多含、ローム粒含)
- 3 黄褐色土 (ほぼローム土で構成される)
- 4 黒褐色土 (ローム粒極少含、しまり弱)
- 5 黄褐色土 (ほぼローム土で構成される)

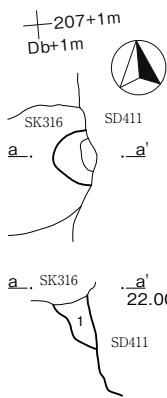


III-37図 SK396、SK398、SK406



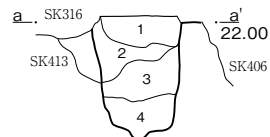
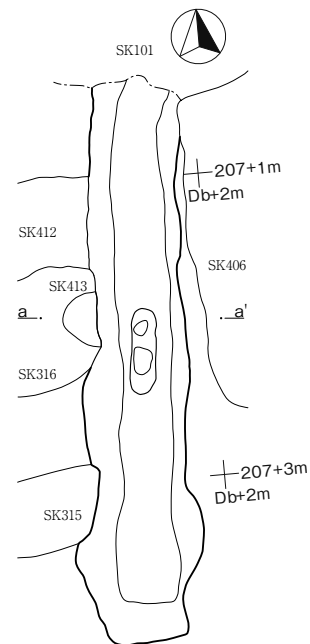
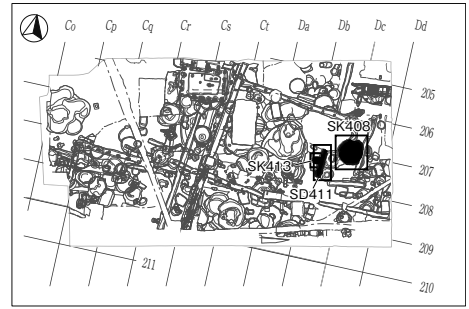
- SK408**
- 1 褐色土 (ほぼローム土で構成される、小円礫少含)
 - 2 茶褐色土 (ローム粒少含、ロームB・円礫極少含)
 - 3 茶褐色土 (ローム粒・小円礫少含)
 - 4 暗茶褐色土 (ロームB少含、ローム粒・小円礫極少含)
 - 5 暗褐色土 (ロームB含、ローム粒・小円礫少含)
 - 6 褐色土 (ローム粒多含、ロームB少含、粘性弱)
 - 7 褐色土 (ローム粒多含、小円礫少含)
 - 8 茶褐色土 (ローム粒多含、ロームB含)
 - 9 黄褐色土 (黄褐色砂粒極多含、ロームB少含、粘性弱、しまり強)
 - 10 茶褐色土 (ローム粒・B少含、小円礫極少含)
 - 11 褐色土 (ローム粒・B多含、しまり強)
 - 12 黄褐色砂土 (粘性弱、しまり強)
 - 13 黒褐色土 (ローム粒多含)
 - 14 黄褐色土 (ほぼローム土で構成される、黄褐色砂粒多含)
 - 15 黒褐色土 (小円礫多含、ローム粒・B含)

SK408(B面)



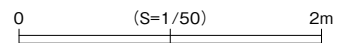
- SP413**
- 1 茶褐色土 (ローム粒含)

SP413(B面)

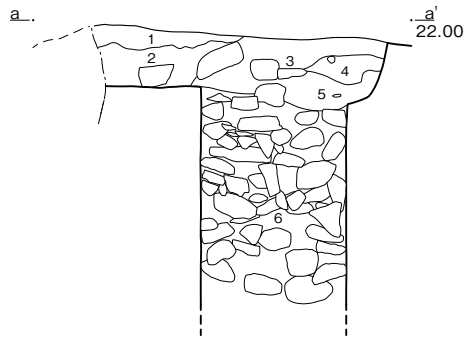
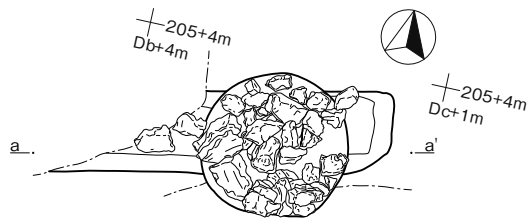


- SD411**
- 1 褐色土 (ローム粒・ロームB・小円礫少含、円礫・破碎瓦極少含)
 - 2 茶褐色土 (ローム粒多含、ロームB少含、円礫極少含)
 - 3 褐色土 (ローム粒含、小円礫極少含)
 - 4 暗褐色土 (ローム粒少含)

SD411(B面)

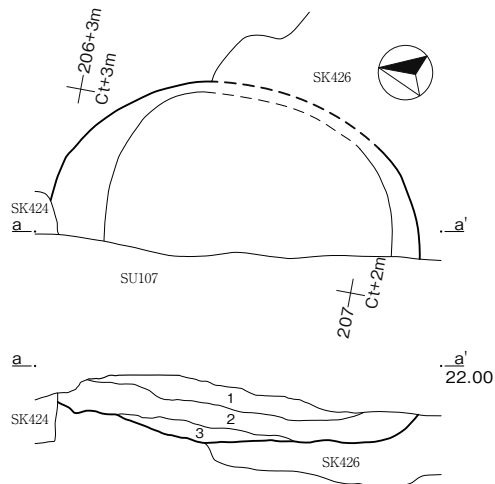


III-38図 SK408、SD411、SP413



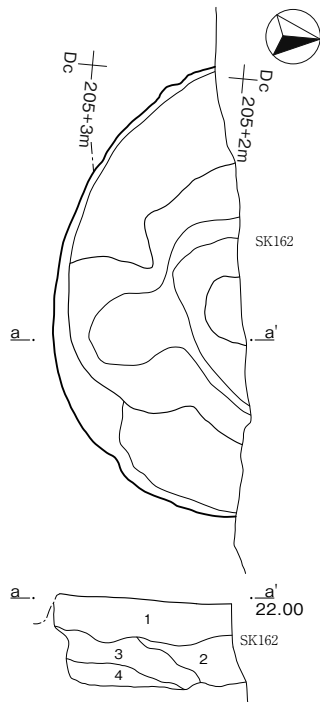
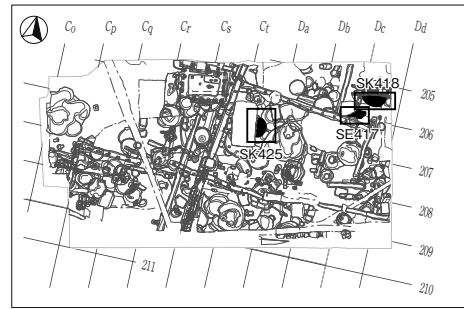
- SE417
- 1 暗褐色土 (ローム粒少含、円礫・小円礫極少含)
 - 2 黄褐色土 (ほぼローム土で構成される)
 - 3 茶褐色土 (ローム粒少含、円礫・小円礫極少含)
 - 4 暗茶褐色土 (ローム粒少含)
 - 5 黄褐色土 (ほぼローム土で構成される)
 - 6 角礫層 (少礫含、暗茶褐色土少含)

SE417(B面)



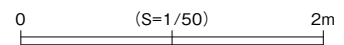
- SD425
- 1 暗褐色土 (貝片極多含、円礫・小円礫少含)
 - 2 暗茶褐色土 (ローム粒・円礫・小円礫極少含)
 - 3 暗褐色土 (ローム粒・B極少含)

SK425(B面)

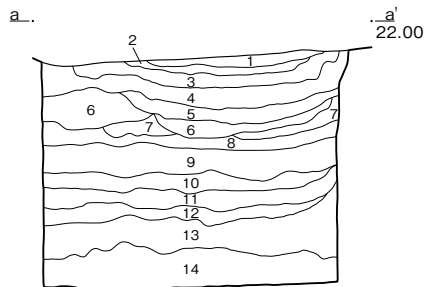
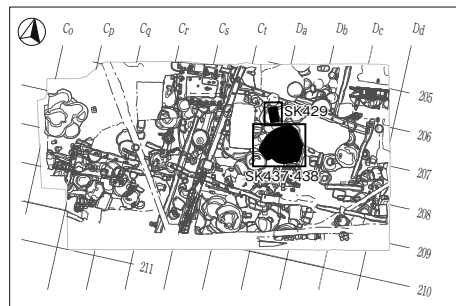
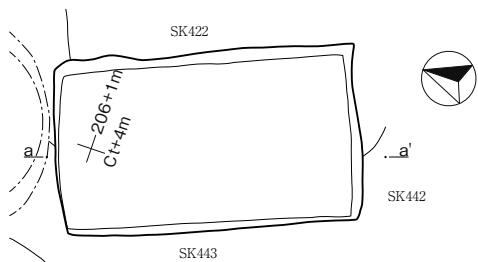


- SK418
- 1 褐色土 (ローム粒含、ロームB・小円礫少含)
 - 2 茶褐色土 (ローム粒・B含、小円礫極少含)
 - 3 暗茶褐色土 (ローム粒・小円礫少含、炭化物極少含)
 - 4 茶褐色土 (ローム粒・B含)

SK418(B面)

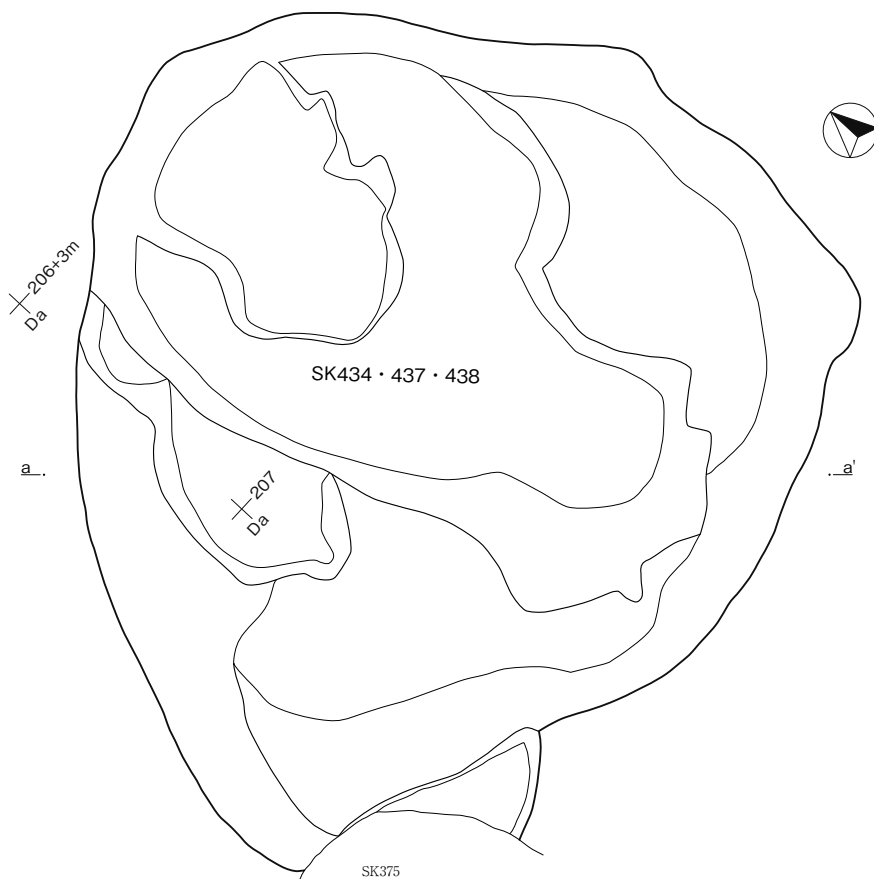


III-39図 SE417、SK418、SK425

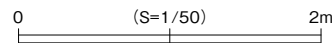
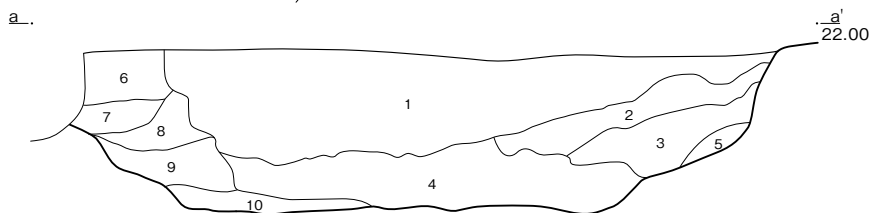


- SU429
- 1 茶褐色土 (小円礫含、ローム粒・焼土粒極少含)
 - 2 暗褐色土 (ローム粒・ロームB・小礫含、炭化物極少含、しまり強)
 - 3 褐色土 (ローム粒・B多含、円礫極少含)
 - 4 暗褐色土 (ローム粒・焼土粒・円礫・小円礫少含)
 - 5 暗茶褐色土 (ローム粒含、ロームB・小円礫少含)
 - 6 暗褐色土 (ローム粒・小円礫極少含、粘性強)
 - 7 褐色土 (ローム粒多含、黄褐色粘土粒・円礫少含)
 - 8 暗褐色土 (ローム粒・円礫・小円礫少含)
 - 9 褐色土 (ローム粒・B多含、円礫極少含)
 - 10 暗褐色土 (円礫多含、黄褐色粘土粒含、ローム粒少含)
 - 11 褐色土 (ローム粒・B多含、円礫少含)
 - 12 赤褐色土 (焼土粒・円礫多含、ローム粒少含)
 - 13 暗褐色土 (ローム粒・小円礫少含、粘性強)
 - 14 暗褐色土 (ローム粒・小円礫極少含、粘性・しまり強)

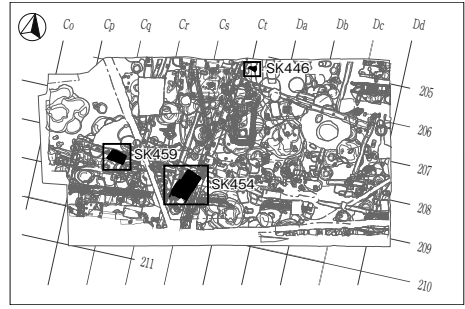
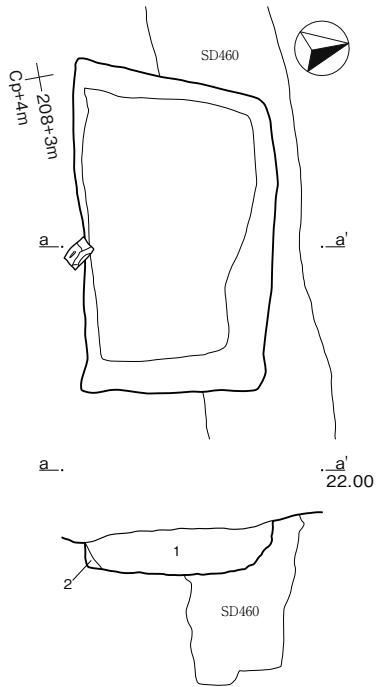
SU429(B面)



- 1 茶褐色土 (ロームB・粒含、円礫微含)
- 2 暗茶褐色土 (ロームB多含、ローム粒含)
- 3 褐色土 (ロームB・粒多含)
- 4 暗褐色土 (ロームB・ローム粒多含、円礫少含)
- 5 黄褐色土 (ローム土、しまり強)
- 6 褐色土 (ロームB・粒多含)
- 7 暗褐色土 (ロームB・粒含)
- 8 暗茶褐色土 (ロームB・粒多含)
- 9 褐色土 (ロームB・粒多含、しまり強)
- 10 暗褐色土 (ローム粒・炭化物少含)

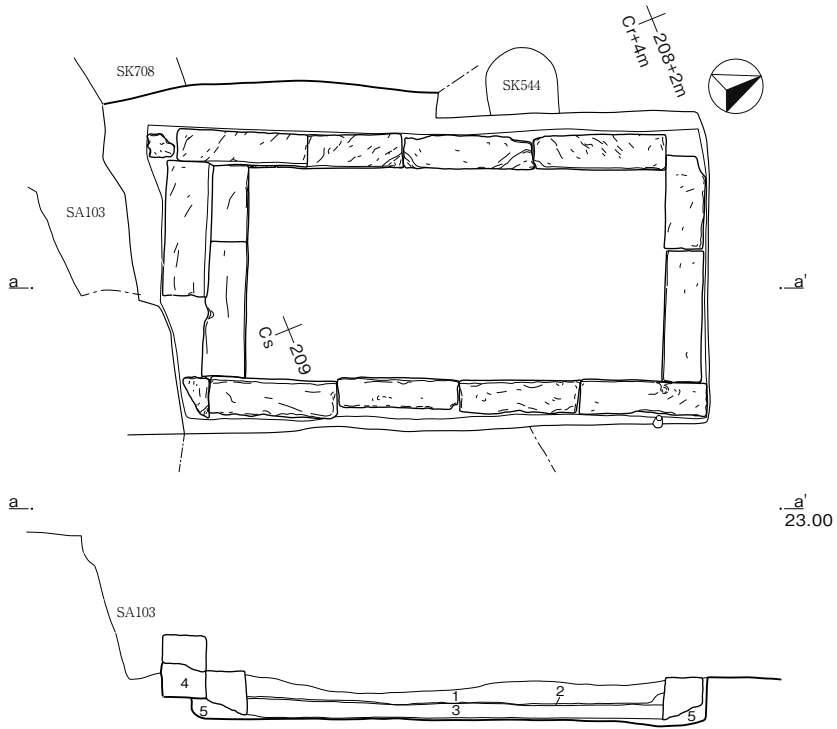


III-40図 SK429, SK434・437・438



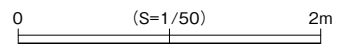
- SK459
 1 黄褐色土 (黄褐色ロームB・黒色土B多含、粘性なし)
 2 黄褐色土 (粘性・しまりなし)

SK459(A面)

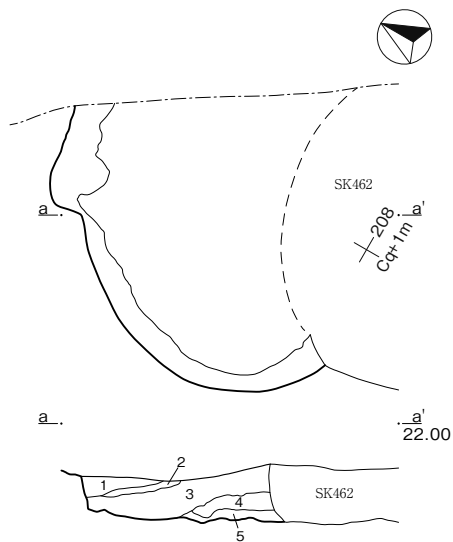


- SK454
 1 赤色土 (赤化した焼土粒極多含、白色土粒?炭化物粒少含、粘性・しまりなし)
 2 黒色土 (炭化物層、粘性・しまりなし)
 3 暗褐色土 (黄褐色ローム・炭化物粒多含、白色粘土粒少含)
 4 茶褐色土 (ローム粒・小円礫少含)
 5 褐色土 (ローム粒・B含、しまり強)

SK454(A面)

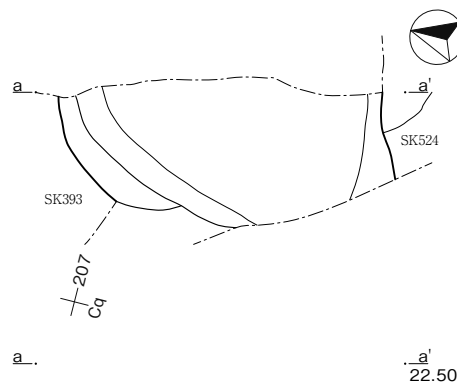


III-41図 SK454, SK459



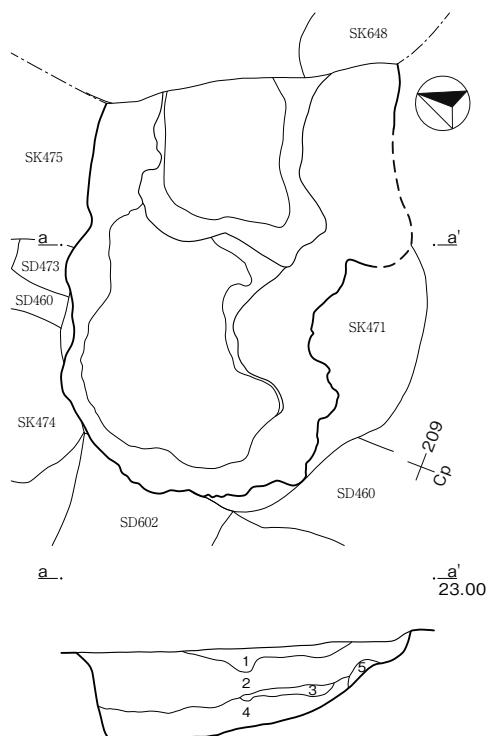
- SK463
- 1 暗褐色土 (黄褐色砂粒含、粘性弱)
 - 2 黄褐色土 (粘性なし)
 - 3 茶褐色土 (黄褐色砂粒含、ローム粒・小円礫少含)
 - 4 褐色土 (ローム粒多含、小円礫少含)
 - 5 暗褐色土 (ローム粒少含、小円礫極少含)

SK463(B面)



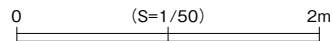
SK464
1 暗褐色土

SK464(A面)

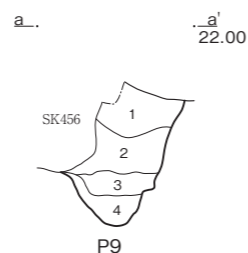
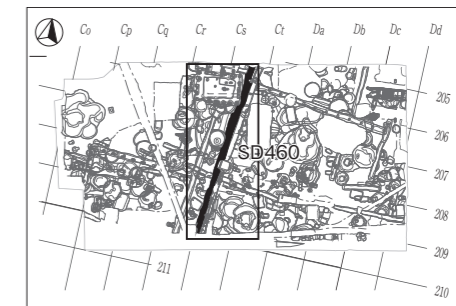
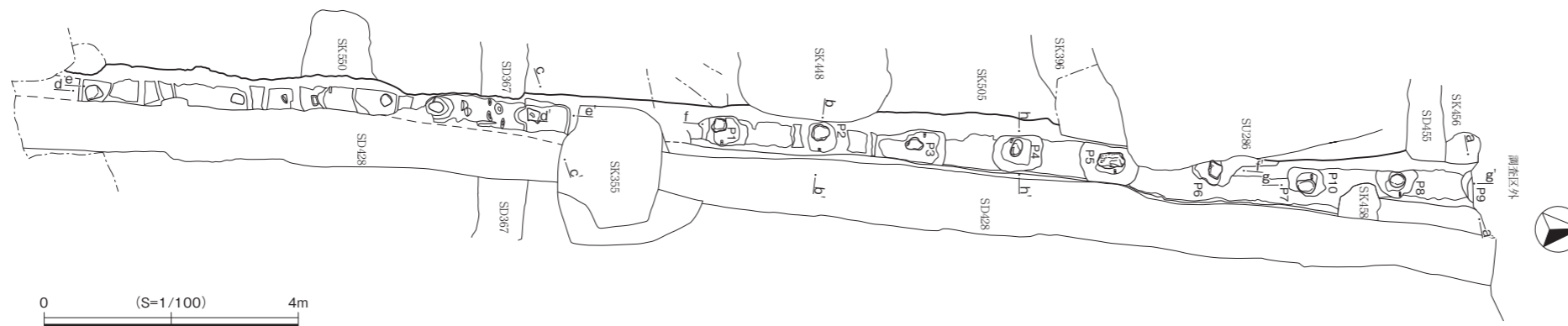


- SK465
- 1 茶褐色土 (ほぼローム土で構成される、円礫極少含、粘性弱)
 - 2 黄褐色土 (ほぼローム土で構成される、粘性弱)
 - 3 灰褐色土 (ローム粒少含、粘性弱)
 - 4 黄褐色土 (ほぼローム土で構成される)
 - 5 暗茶褐色土 (ローム粒・灰褐色粘土粒極少含)

SK465(B面)

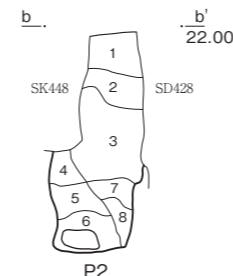


III-42図 SK463, SK464, SK465



SD449 a-a'セク

- SD449 a-a'
- 1 茶褐色土 (黄褐色ローム粒多含、暗褐色粘質土粒を团子状に少含)
 - 2 茶褐色土 (黄褐色ロームB多含、暗褐色粘質土粒を粒团子状に少含)
 - 3 暗茶褐色土 (ローム粒・暗褐色土粘質土粒少含)
 - 4 暗黄褐色土 (ロームB主体、粘性・しまり極強)

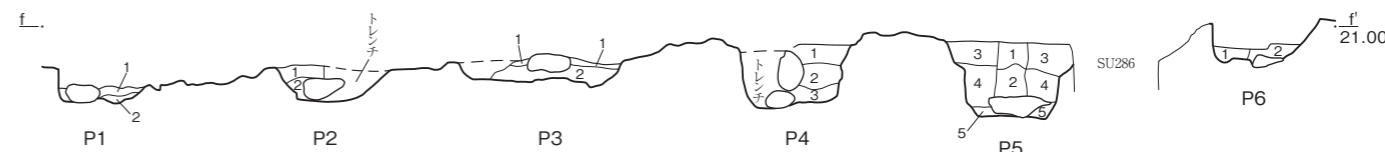


SD449 b-b'セク

- SD449 b-b'
- 1 茶褐色土 (ローム粒少含)
 - 2 茶褐色土 (ローム粒多含)
 - 3 暗黄褐色土 (ローム粒・B極多含、暗茶褐色粘質土を斑点状に少含、しまり極強)
 - 4 暗茶褐色土 (黄褐色ローム粒少含、暗茶褐色粘質土を斑点状に含、しまりなし)
 - 5 暗茶褐色土 (4層に類似するが黄褐色ローム粒少ない、暗茶褐色粘質土を斑点状に含、しまりなし)
 - 6 暗茶褐色土 (ロームB多含、粘性極強、しまりなし (f-f' (P2) -1と同))
 - 7 暗茶褐色土 (暗褐色土粒主体、ローム粒斑点状に極少含)
 - 8 暗灰褐色土 (しまりなし)



SD449 e-e'



P1~P6

- SD449 f-f' (P1)
- 1 暗黄褐色土 (黄褐色ロームB主体)
 - 2 茶褐色土 (ロームB多含)

- SD449 f-f' (P5)
- 1 暗黄褐色土 (黄褐色ロームB少含、粘性・しまりなし、柱痕)
 - 2 暗茶褐色土 (しまりなし茶褐色土粒主体、粘性・しまりなし、柱痕)
 - 3 茶褐色土 (ローム粒・暗褐色土粒多含)
 - 4 茶褐色土 (ローム粒・B含、暗褐色土部分的に含)
 - 5 暗黄褐色土 (ロームB主体、しまり極強)

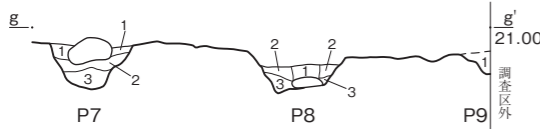
- SD449 f-f' (P2)
- 1 暗黄褐色土 (ローム粒・B多含、部分的に暗茶褐色土粒を团子状に含) (b-b'-6と同)
 - 2 茶褐色土 (茶褐色土粒主体、ロームB極少含)

- SD449 f-f' (P6)
- 1 茶褐色土 (しまりなし黄褐色土粒主体、粘性・しまりなし、柱痕か)
 - 2 黄褐色土 (ロームB極多含、粘性なし)

- SD449 f-f' (P3)
- 1 茶褐色土 (ロームB多含、暗褐色土粒を斑点状に多含)
 - 2 暗黄褐色土 (ローム粒・B主体)

- SD449 f-f' (P4)
- 1 茶褐色土 (茶褐色土中にローム粒・B多含、粘性なし) (d-d' (P4) -1と同)
 - 2 黄褐色土 (黄褐色土主体、ロームB少含、粘性なし) (d-d' (P4) -1と同)
 - 3 茶褐色土 (茶褐色土中にロームB部分的に多含) (d-d' (P4) -2と同)

SD449 (B面)

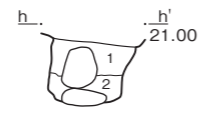


P7~P9

- SD449 g-g' (P7)
- 1 暗茶褐色土 (ロームB全体的に含)
 - 2 茶褐色土 (茶褐色粘質土粒主体、暗茶褐色土粒極少含)
 - 3 暗黄褐色土 (黄褐色ロームB極多含)

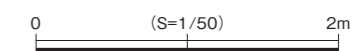
- SD449 g-g' (P8)
- 1 暗茶褐色土 (しまりなし暗茶褐色土主体、粘性・しまりなし、柱痕か)
 - 2 暗黄褐色土 (黄褐色ロームB極多含)
 - 3 茶褐色土 (ローム土主体)

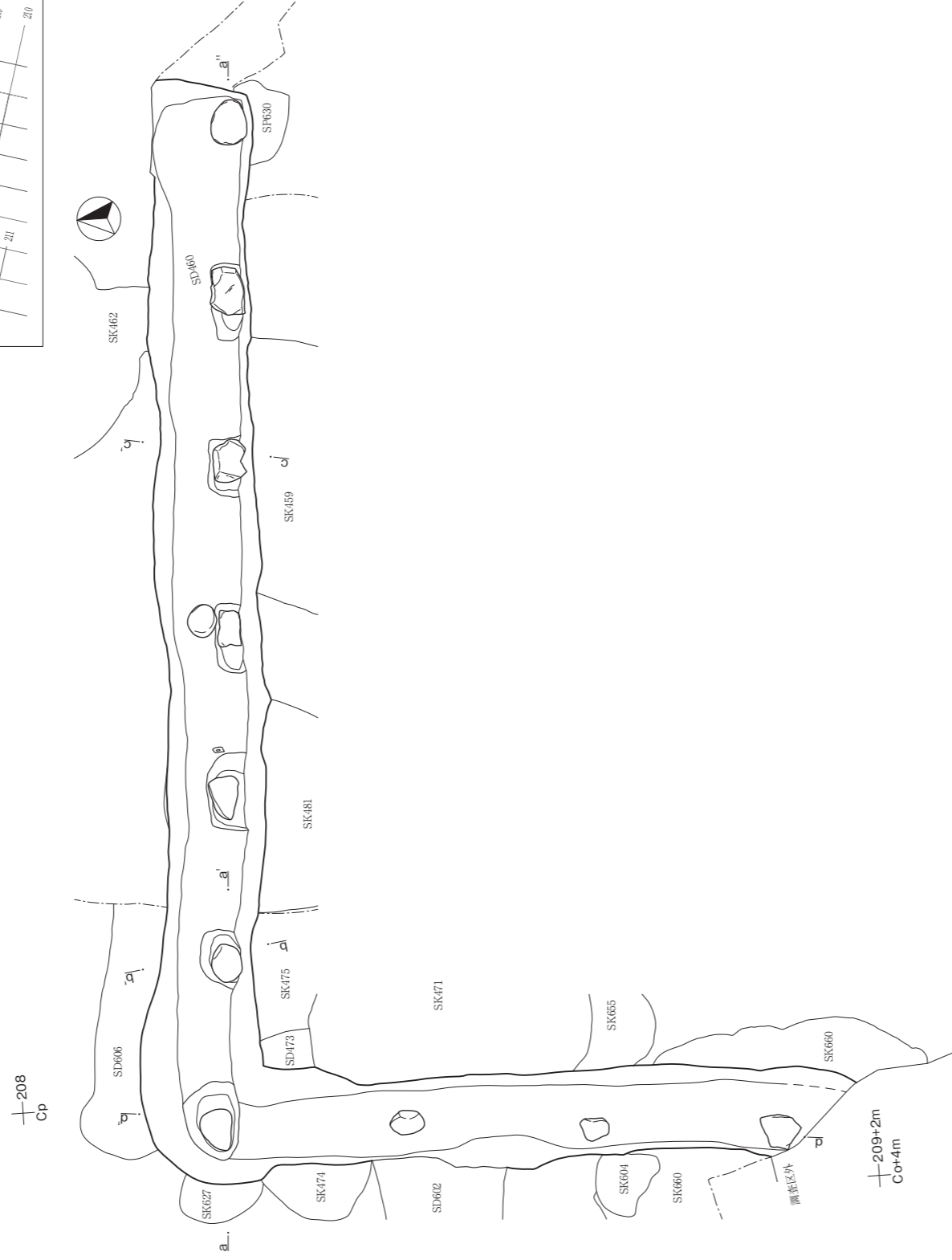
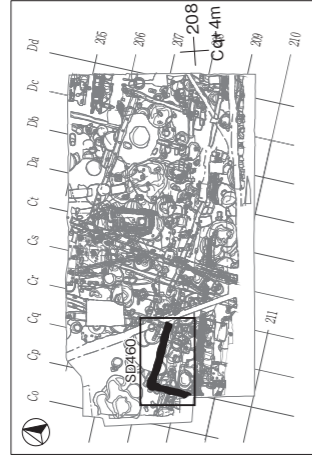
- SD449 g-g' (P9)
- 1 暗黄褐色土 (ロームB主体、粘性・しまり極強)



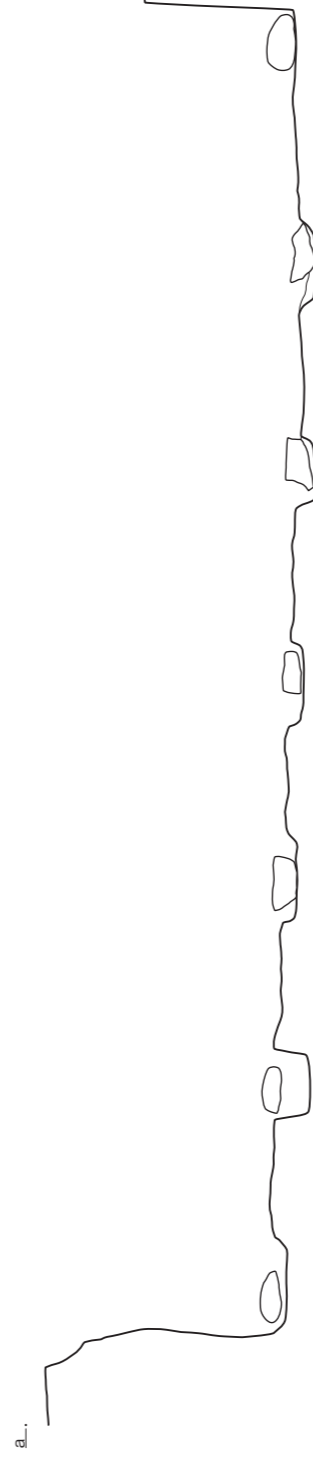
P4

- SD449 h-h' (P4)
- 1 暗褐色土 (暗茶褐色土粒主体、黄褐色ロームB少含、しまりなし (f-f' (P4) -1・2と同))
 - 2 暗茶褐色土 (黄褐色ロームB多含 (f-f' (P4) -3と同))





a' 22.50

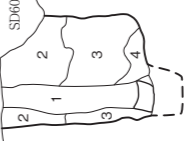


c' 22.00



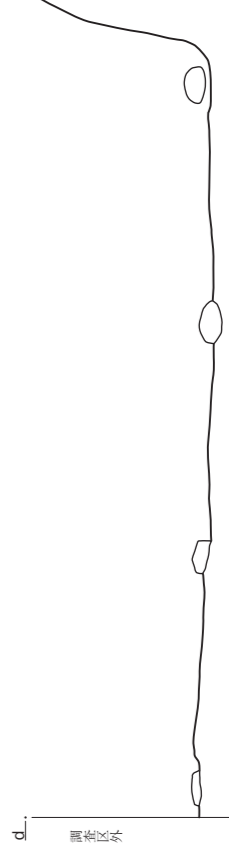
SD460 c-c'
 1 黄褐色土 (粘性なし)
 2 黄褐色土 (黄褐色ロームB多含)
 3 暗褐色土 (黄褐色土多含、黄褐色ロームB含、粘性・しまりなし)
 4 黄褐色土 (黄褐色ロームA主体、しまりなし)

b' 22.00

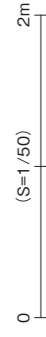


SD460 b-b'
 1 暗茶褐色土 (ローム粒多含、粘性・しまり弱、柱痕)
 2 褐色土 (ローム粒・B多含)
 3 黒褐色土 (ローム粒・B含)
 4 褐色土 (ローム粒・Bで構成される)

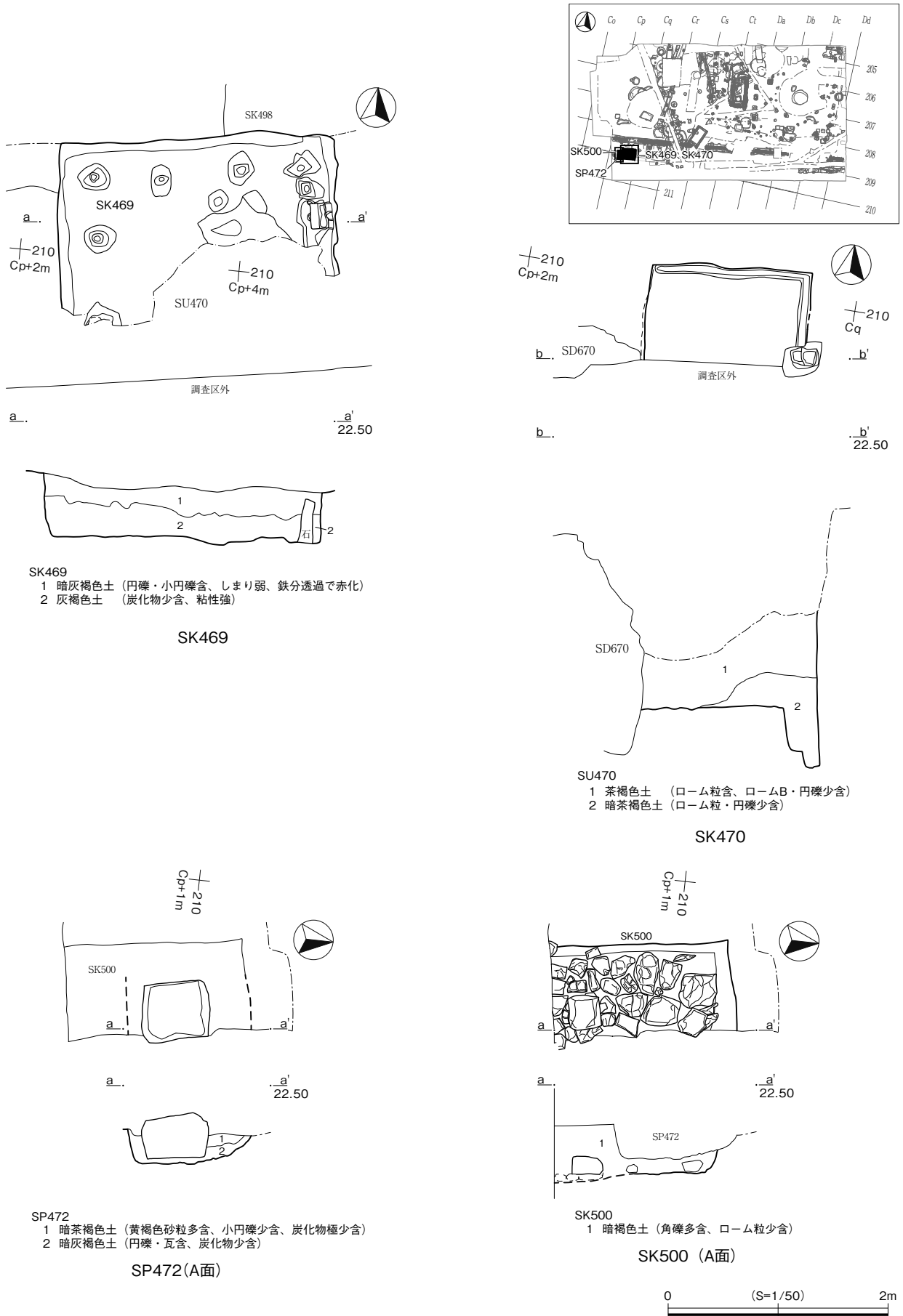
d' 22.00



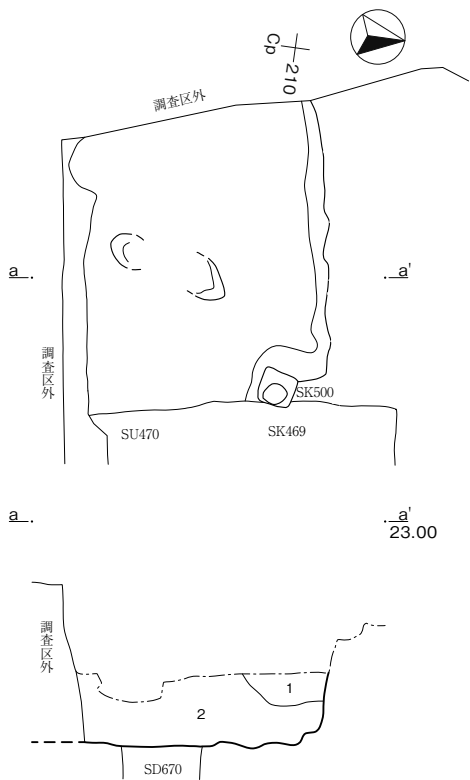
SD460 (B面)



III-44図 SD460 (B面)



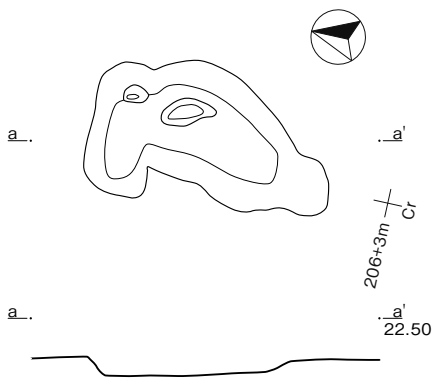
III-45図 SK469、SK470、SP472、SK500



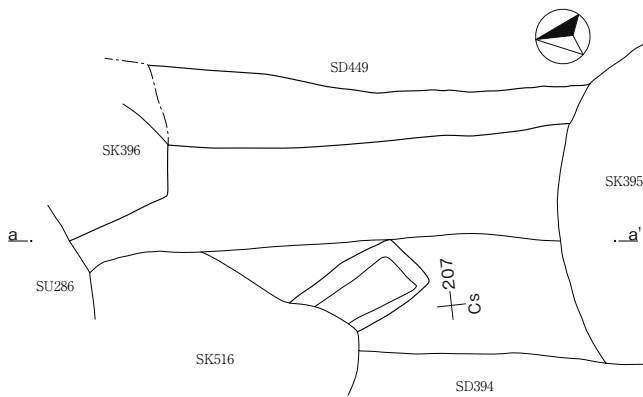
SK499

- 1 灰褐色土 (灰褐色土粒で構成される、炭化物・少円礫・円礫・瓦片含)
- 2 暗灰色土 (灰褐色土粒で構成される、炭化物・少円礫・円礫・瓦片含、粘性強)

SK499(A面)



SK506(B面)

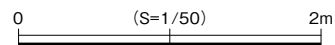
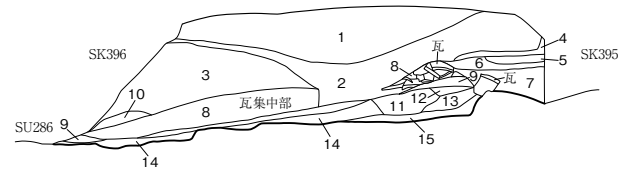


SK505

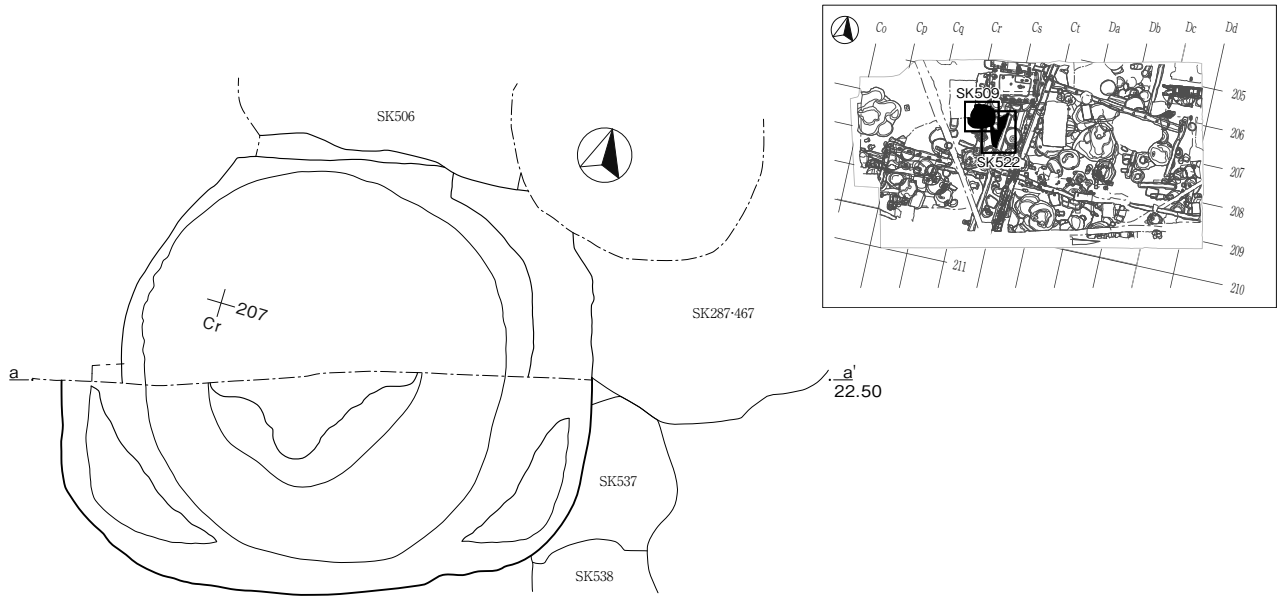
SK505

- 1 黄褐色土 (黄褐色ロームB多含、粘性なし)
- 2 暗黄褐色土 (炭化物極多含、黄褐色ロームB多含、粘性なし)
- 3 黄褐色土 (黄褐色ロームB主体、しまりなし)
- 4 炭化物主体
- 5 暗褐色土 (黄褐色ロームB多含、粘性なし)
- 6 炭化物主体
- 7 暗黄褐色土 (粘性・しまりなし)
- 8 金箔瓦極多含
- 9 炭化物主体
- 10 暗黄褐色土 (粘性・しまりなし、7層と同一)
- 11 金箔瓦極多含
- 12 暗褐色土 (黄褐色ローム粒・黒色土粒多含、粘性なし)
- 13 黄褐色土 (黒色土粒含)
- 14 黒色土 (黄褐色ロームB含)
- 15 黒色土 (粘性・しまりなし)

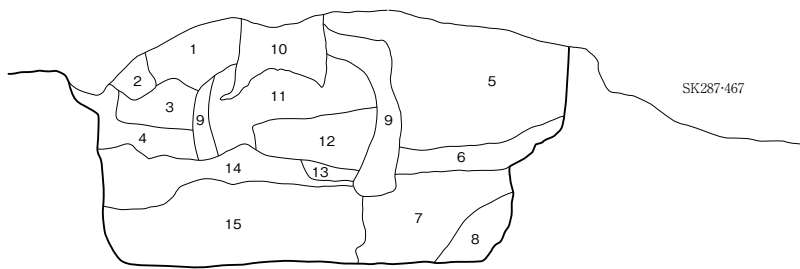
SK505(B面)



III-46図 SK499、SK505、SK506

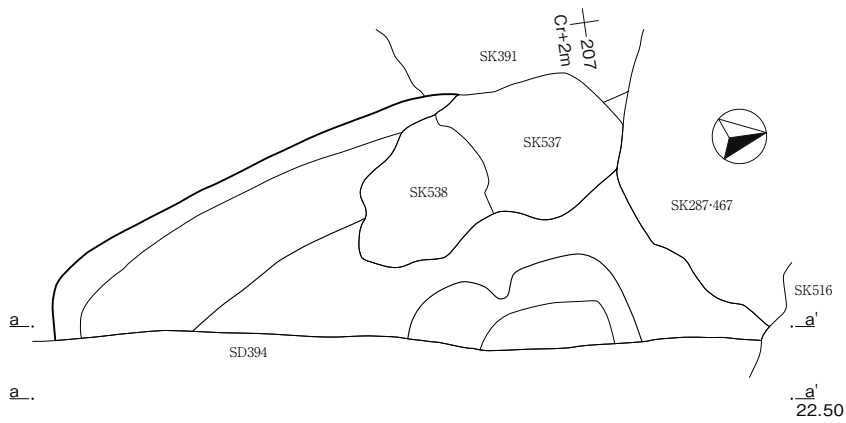


a. a' 22.50

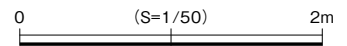


SK509(B面)

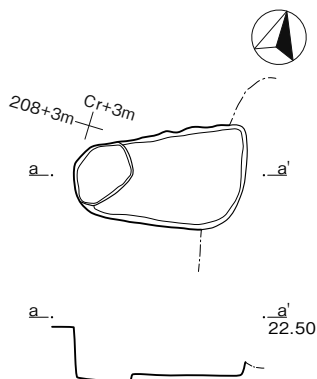
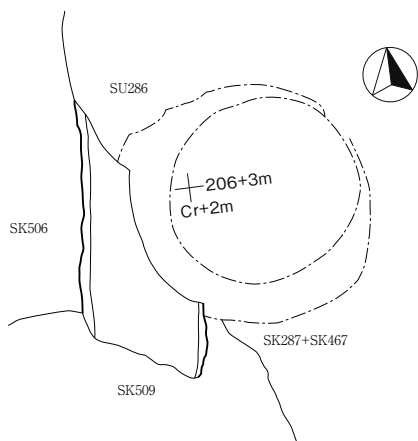
- SK509
- 1 黄褐色土 (黄褐色ローム小B少含、粘性・しまりあり)
 - 2 褐色土 (黄褐色ローム粒多含、粘性・しまりあり)
 - 3 暗茶褐色土 (黄褐色ローム粒・B少含、粘性・しまりあり)
 - 4 暗褐色土 (黄褐色ローム粒・B少含、粘性・しまりあり)
 - 5 黄褐色土 (黄褐色ロームB極多含、粘性なし)
 - 6 暗褐色土 (黄褐色ロームB含、粘性・しまりなし)
 - 7 暗褐色土 (黄褐色ロームB含、粘性・しまりなし)
 - 8 暗褐色土 (粘性・しまりなし)
 - 9 白色粘土
 - 10 青灰色土
 - 11 黄褐色土 (礫極少含、粘性・しまりなし)
 - 12 黒色土 (粘性・しまりなし)
 - 13 黒色土 (黄褐色ロームB多含、粘性・しまりなし)
 - 14 黄褐色土 (粘性なし)
 - 15 黄褐色ローム



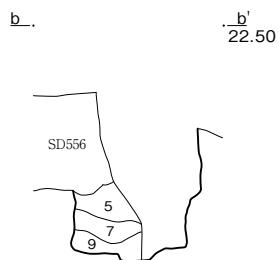
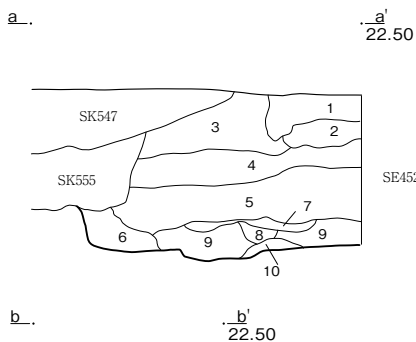
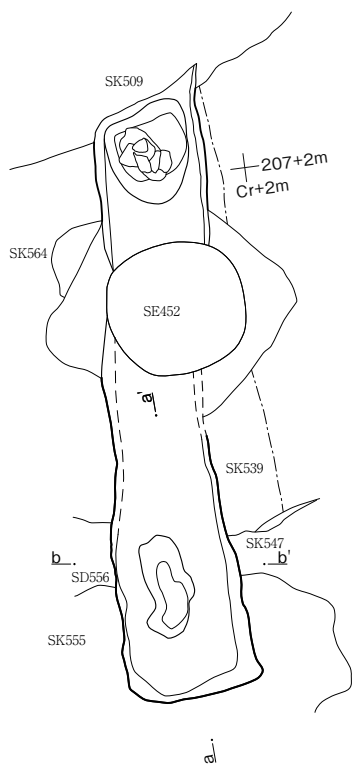
SK522(B面)



III-47図 SK509、SK522

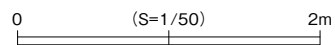


SK523(A面)

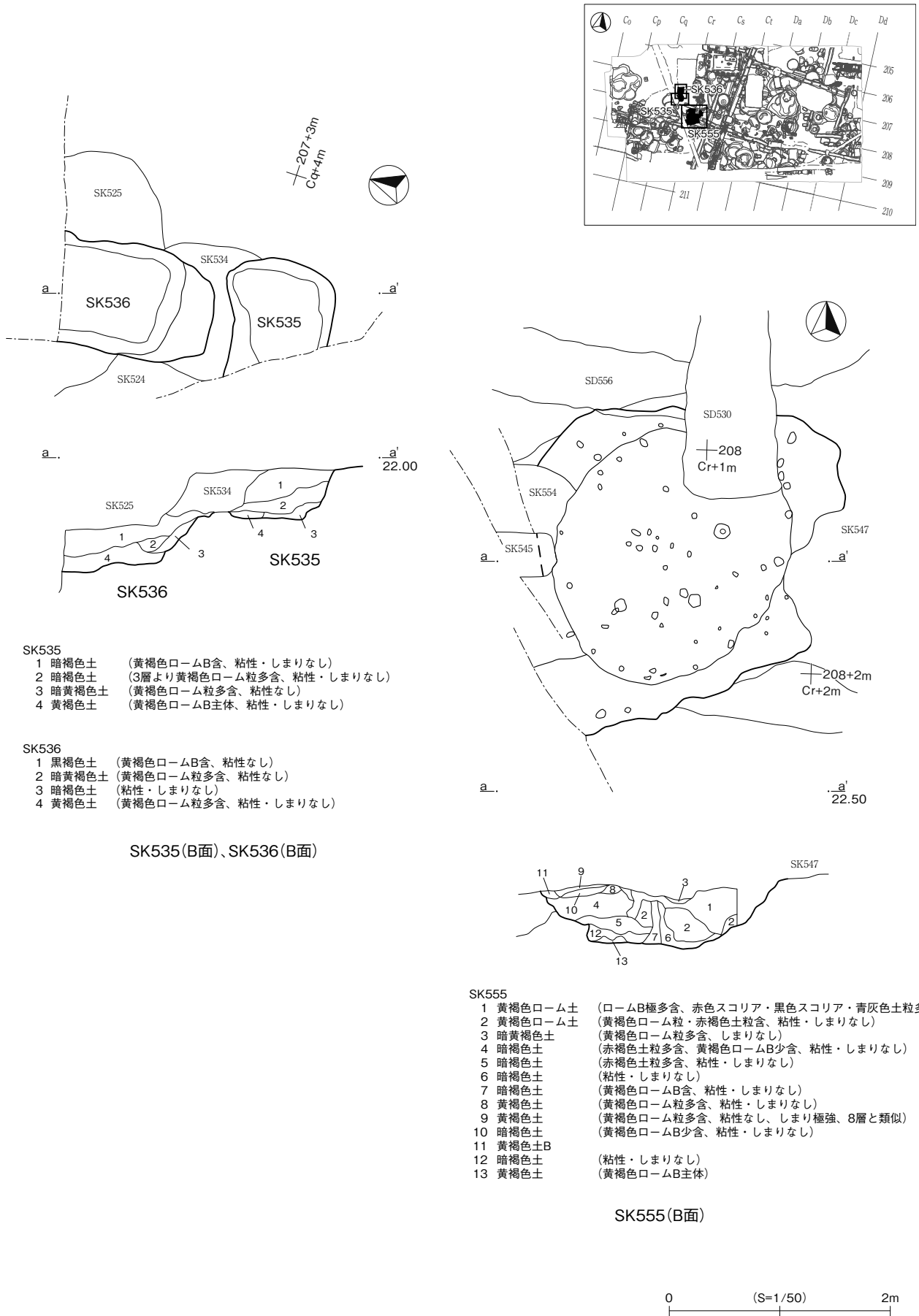


- SD530
- 1 黄褐色土 (黄褐色ロームB多含、粘性なし)
 - 2 黒褐色土 (黄褐色ロームB少含、粘性・しまりなし)
 - 3 暗黄褐色土 (黄褐色粘土B多含)
 - 4 暗黄褐色土 (粘性・しまりなし)
 - 5 黄褐色土 (黄褐色ローム粒多含、しまりなし)
 - 6 黒褐色土 (粘性・しまりなし)
 - 7 黒色土 (黄褐色ローム粒多含、粘性・しまりなし)
 - 8 暗褐色土B
 - 9 黄褐色土 (黄褐色ロームB主体、しまりなし)
 - 10 黒褐色土 (粘性・しまりなし)

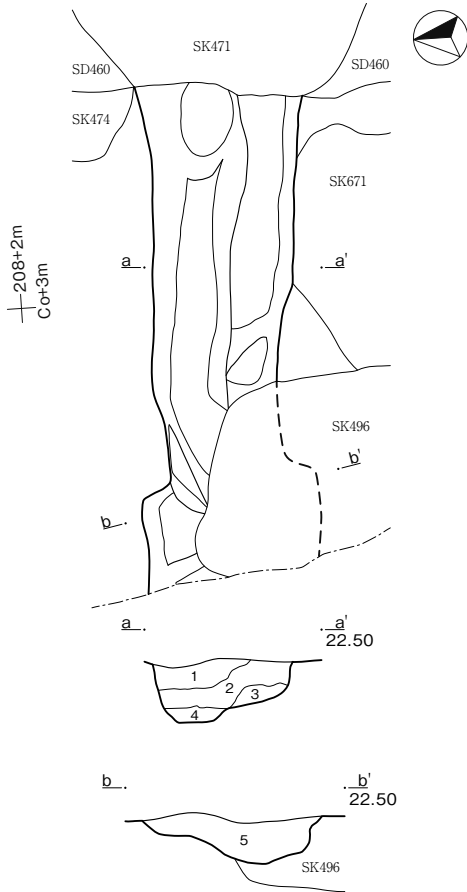
SD530(B面)



III-48図 SK523, SD530

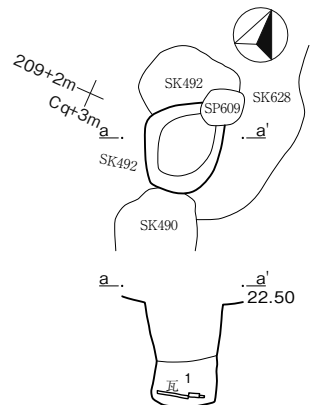


III-49図 SK535、SK536、SK555



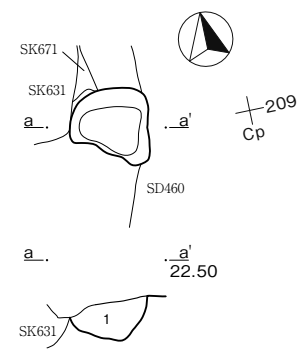
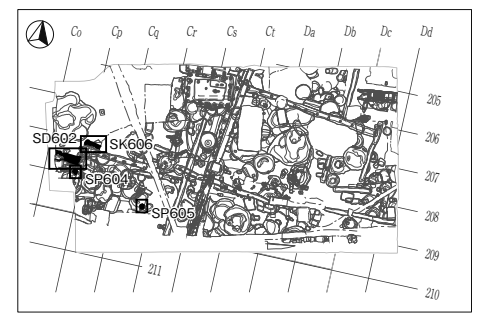
- SD602 a-a'
- 1 茶褐色土 (ローム粒・小円礫少含)
 - 2 茶褐色土 (灰褐色粘土含、ローム粒・小円礫少含、1・3層より明るい)
 - 3 茶褐色土 (灰褐色粘土少含)
 - 4 黄褐色土 (ローム土で構成される)
- SD602 b-b'
- 5 暗褐色土 (ロームB・黒色土B・灰褐色粘土Bをマール状に含、小円礫極少含、締まり強)

SD602 (B面)



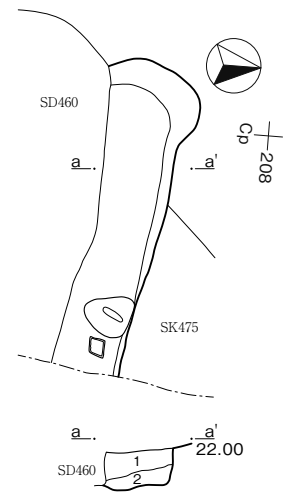
- SP605
- 1 暗褐色土 (ローム粒・小円礫少含)

SK605 (B面)



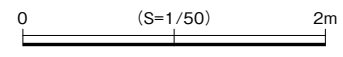
- SP604
- 1 茶褐色土 (貝片多含、円礫・小円礫少含)

SP604 (B面)

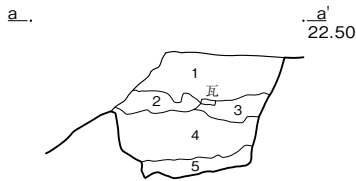
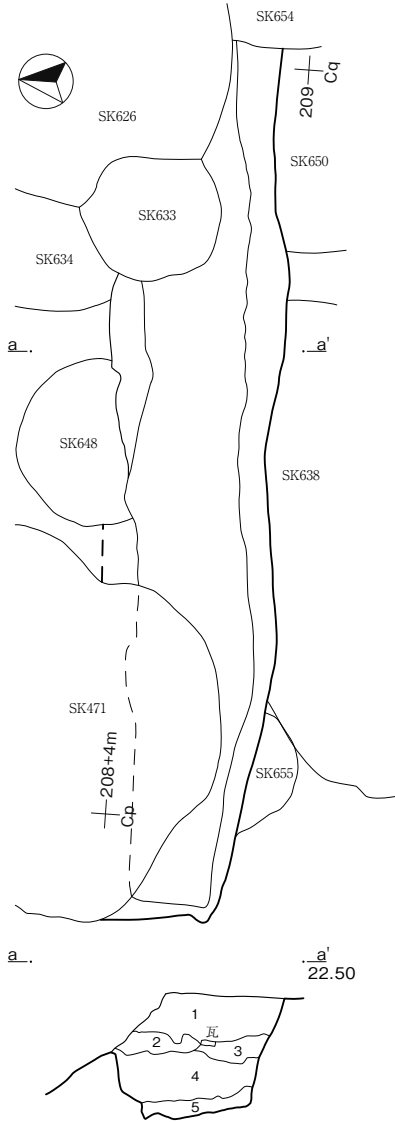


- SD606
- 1 暗褐色土 (ローム粒少含、ロームB・炭化物極小含)
 - 2 黄褐色土 (ローム粒・Bで構成される)

SD606 (B面)

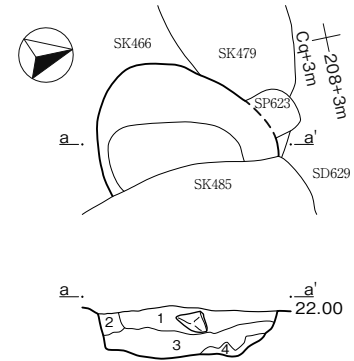


III-50図 SD602、SP604、SP605、SD606



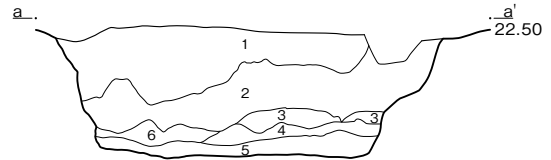
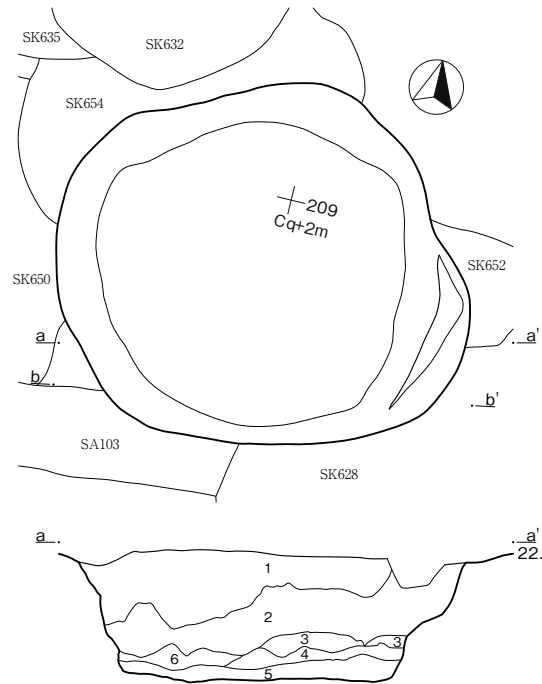
- SD607
- 1 暗茶褐色土 (ローム粒含、小円礫少含、ロームB・焼土粒・瓦片極少含)
 - 2 褐色土 (ローム粒・灰褐色粘土粒・焼土粒少含、小円礫極少含)
 - 3 暗灰色土 (灰褐色粘土粒極多含、ローム粒少含)
 - 4 暗褐色土 (ローム粒・焼土粒・小円礫少含、灰褐色粘土粒・炭化物極少含)
 - 5 褐色土 (ローム粒・ロームB多含)

SD607(B面)



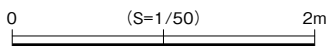
- SK621
- 1 暗褐色土 (ローム粒・灰褐色粘土粒・小円礫少含)
 - 2 茶褐色土 (ローム粒極多含)
 - 3 暗褐色土 (ローム粒・小円礫少含、焼土粒極少含)
 - 4 褐色土 (ローム粒多含、小円礫極少含)

SK621 (A面)

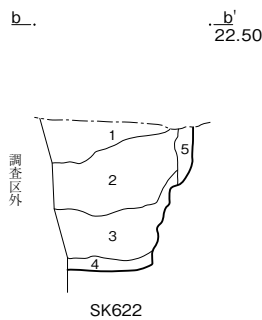
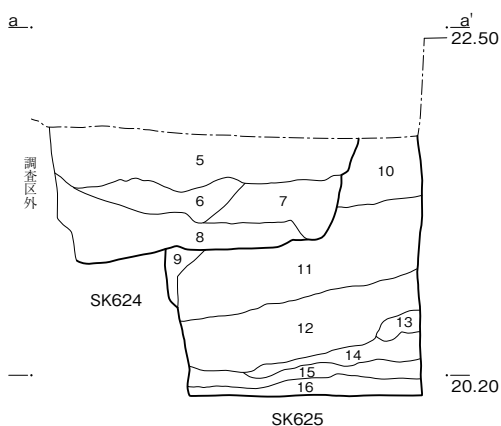
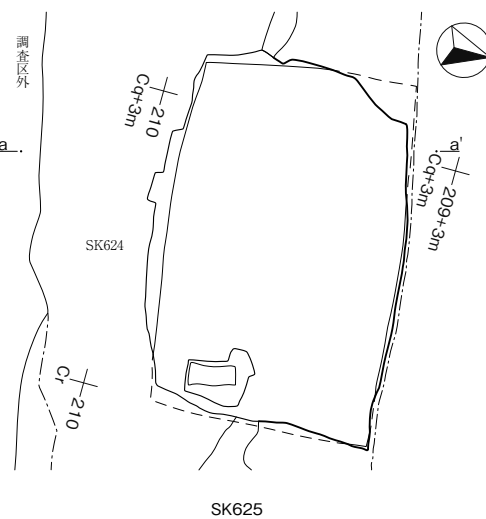
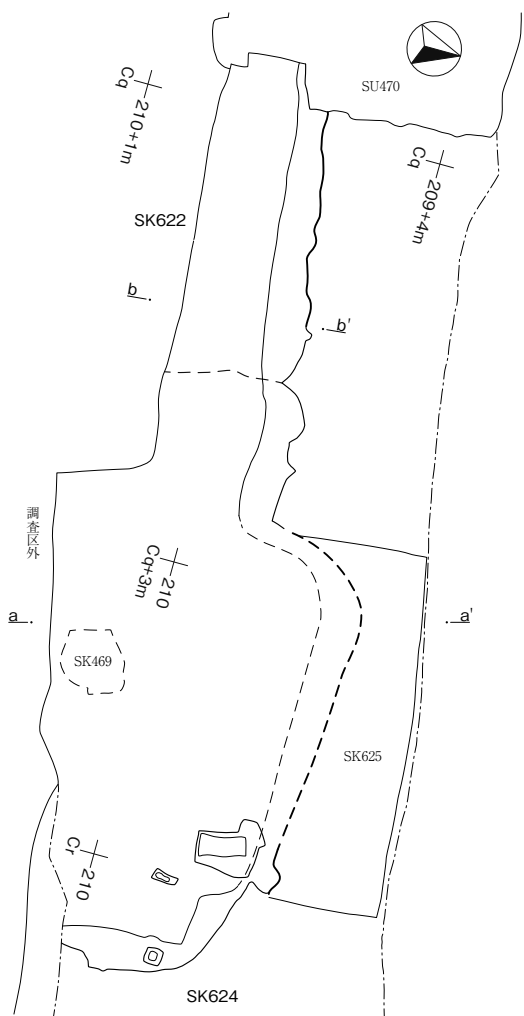


- SK626 a-a'
- 1 茶褐色土 (ローム粒・小円礫少含、円礫極少含)
 - 2 暗茶褐色土 (ローム粒含、小円礫極少含)
 - 3 黒褐色土 (ローム粒少含、焼土粒・炭化物極少含)
 - 4 黄褐色土 (ほぼローム土で構成される、炭化物極少含)
 - 5 暗茶褐色土 (黄褐色砂粒・小円礫含、ローム粒少含、粘性弱、しまり強)
 - 6 茶褐色土 (ローム粒多含、黄褐色砂粒少含)

SK626 (B面)



III-51 図 SD607、SK621、SK626

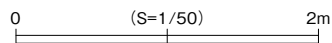


- SK622
- 1 暗褐色土 (炭化物多含、貝含、小円礫・瓦片少含、しまり強)
 - 2 暗褐色土 (円礫・瓶・瓦片多含、ローム粒少含、しまり弱、1層より明るい)
 - 3 暗褐色土 (ローム粒・小円礫少含、炭化物極少含)
 - 4 褐色土 (ローム粒多含、粘性強)
 - 5 褐色土 (ローム粒多含、黄褐色土粒含、炭化物極少含)

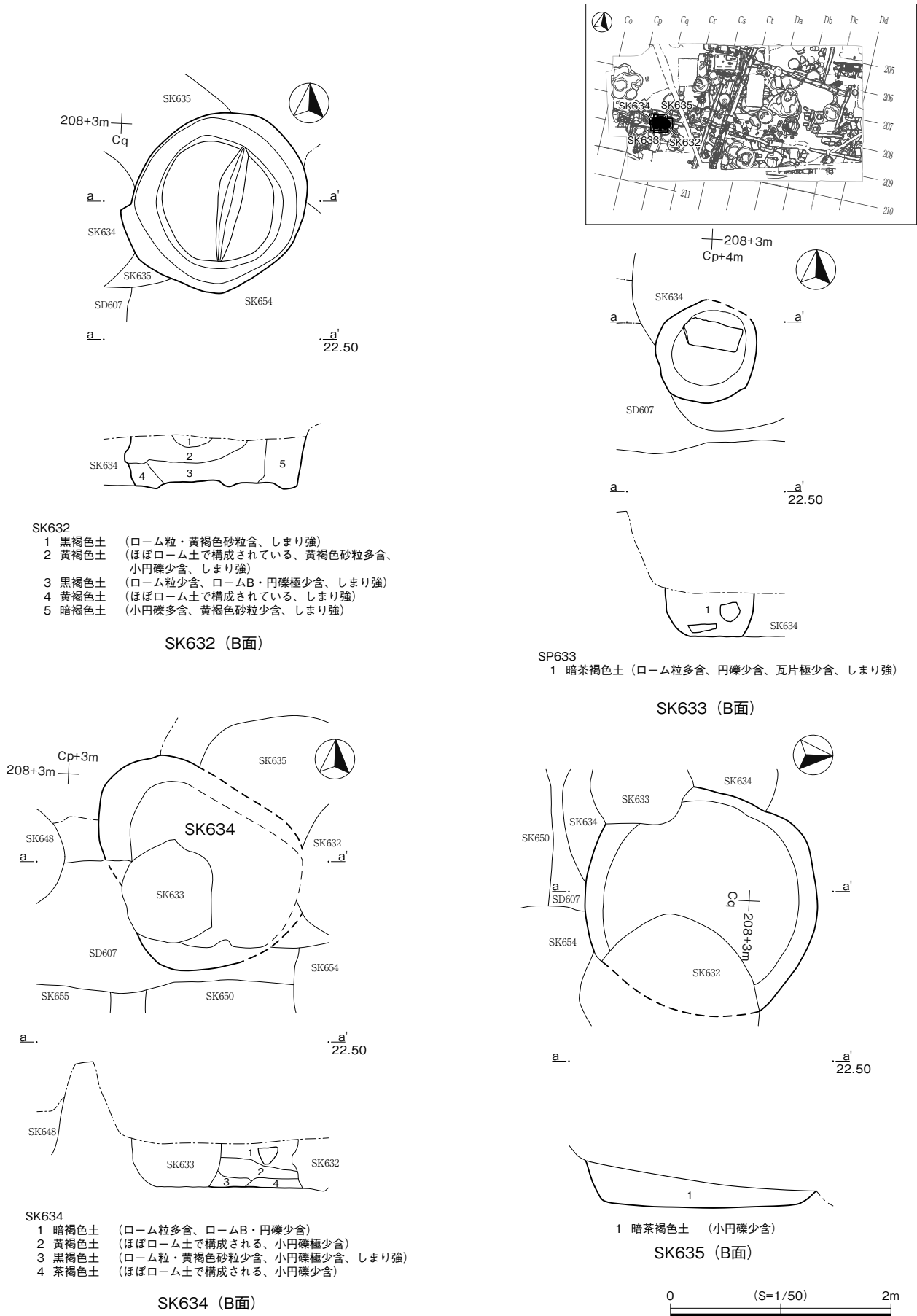
- SK624
- 5 褐色土 (ローム粒・円礫・角礫・瓦片含、炭化物・貝片・漆喰少含)
 - 6 暗褐色土 (円礫含、角礫・瓦片少含)
 - 7 茶褐色土 (ローム粒・B少含、円礫極少含)
 - 8 暗灰褐色土 (ローム粒・炭化物・小円礫・瓦片少含、粘性・しまり強)

- SK625
- 9 暗褐色土 (しまりなし、柱痕か)
 - 10 暗茶褐色土 (瓦片極多含、粘性・しまりなし)
 - 11 灰褐色粘土 (円礫・瓦片極少含、粘性・しまり強)
 - 12 茶褐色土 (小円礫含、ローム粒・瓦片少含、しまり強)
 - 13 灰褐色粘土 (粘性・しまり強)
 - 14 明茶褐色土 (ローム粒多含、灰褐色粘土含、粘性強)
 - 15 暗褐色土 (円礫・小円礫多含、ローム粒少含、粘性・しまり弱)
 - 16 暗茶褐色土 (円礫含・ローム粒少含、粘性・しまり強)

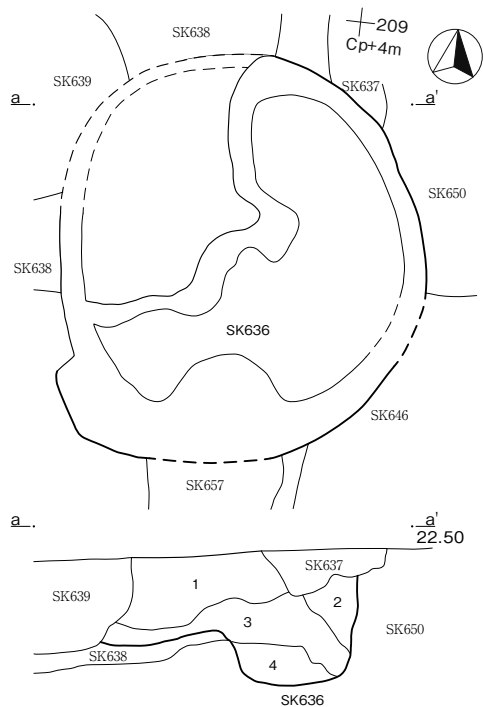
SK622(A面)、SK624(A面)、SK625(A面)



III-52図 SK622、SK624、SK625

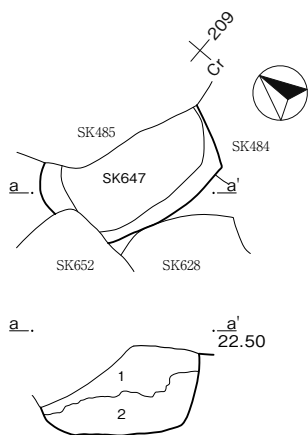


III-53図 SK632, SK633, SK634, SK635



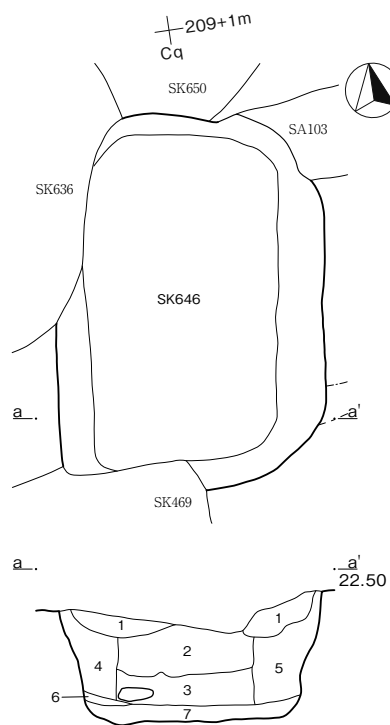
- SK636
 イ 暗茶褐色土 (灰褐色粘土粒多含、ローム粒含、ロームB・小円礫・炭化物少含)
 ロ 暗褐色土 (ローム粒・B含、小円礫・瓦片少含)
 ハ 茶褐色土 (ローム粒含、ロームB・小円礫少含、円礫極小含)
 ホ 褐色土 (ローム粒多含、小円礫少含)

SK636(B面)



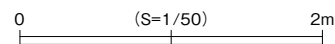
- SK647
 1 暗茶褐色土 (ローム粒含、小円礫少含)
 2 茶褐色土 (ローム粒少含、小円礫極少含)

SK647(B面)

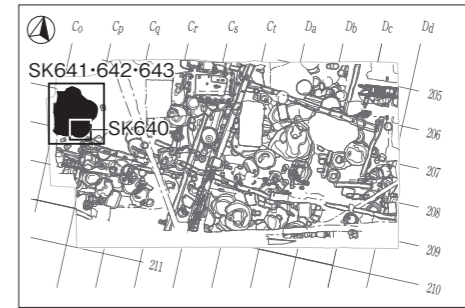
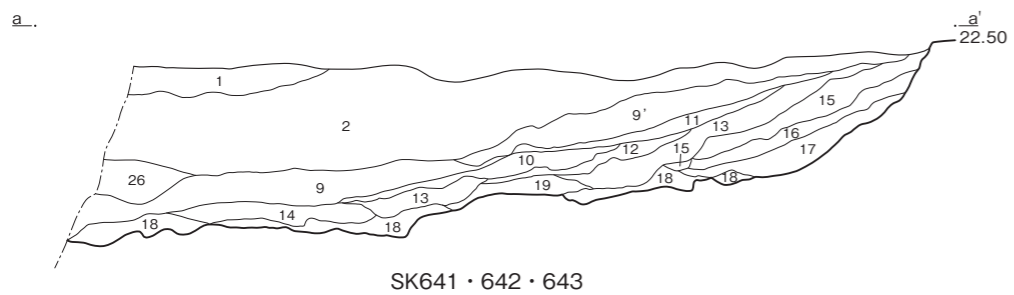
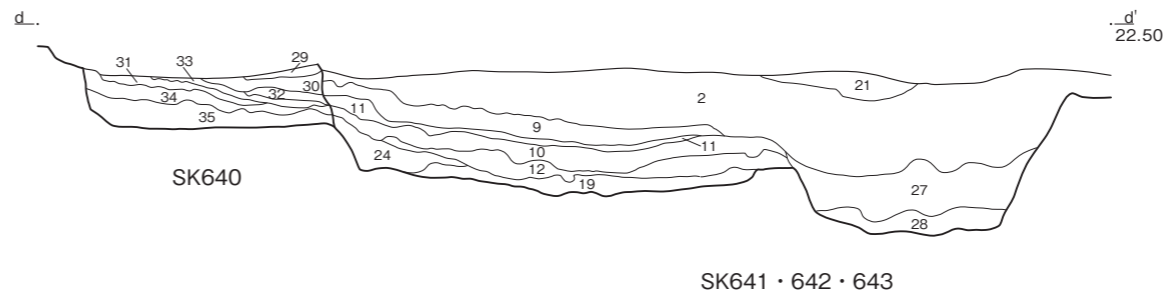
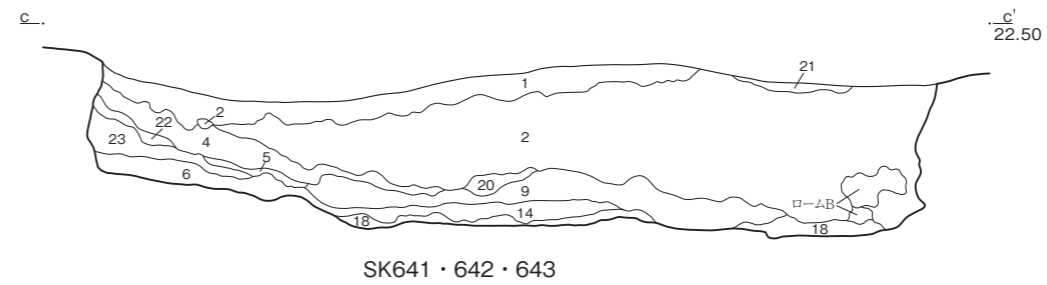
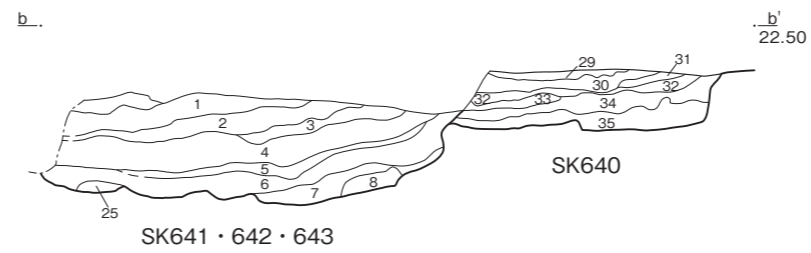
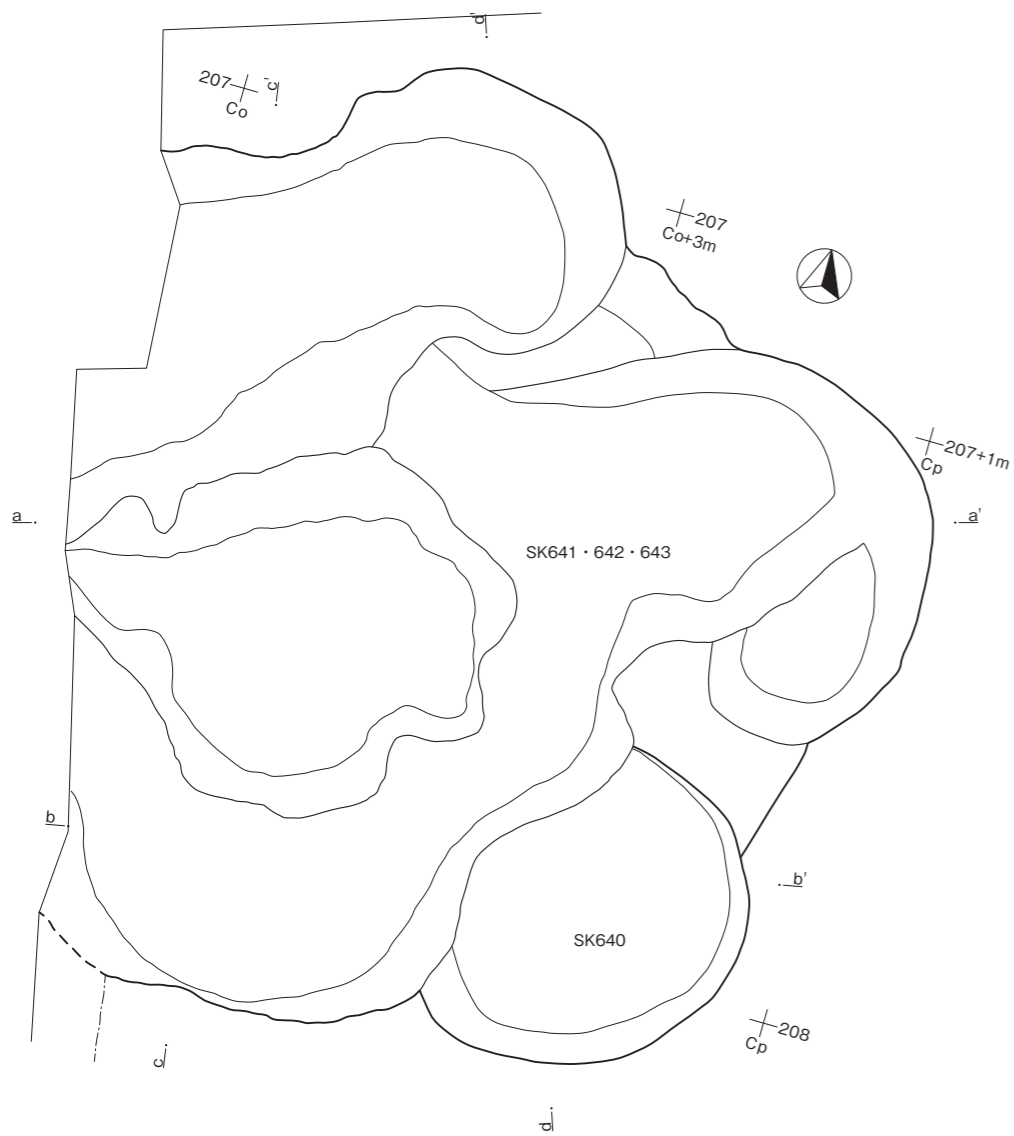


- SK646
 1 暗褐色土 (ローム粒・黄褐色砂粒少含、炭化物・小円礫極少含)
 2 暗茶褐色土 (ローム粒・B含、黄褐色砂粒少含、小円礫極少含)
 3 暗褐色土 (ローム粒・小円礫・貝片少含、粘性強)
 4 黄褐色土 (ほぼローム粒で構成される、小円礫極少含、しまり強)
 5 褐色土 (ローム粒多含、ロームB含、小円礫少含)
 6 黒褐色土 (ローム粒含、しまり強)
 7 黄褐色土 (ほぼローム土で構成される)

SK646(B面)



III-54図 SK636、SK646、SK647



SK641・642・643

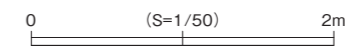
- 1 黒褐色土 (炭化物少含、ローム粒極少含)
- 2 黒褐色土 (ローム粒・灰褐色粘土粒極少含)
- 3 褐色土 (小円礫多含、褐色土中に暗茶褐色土粒少含)
- 4 暗褐色土 (円礫多含、瓦片含、ローム粒・炭化物少含)
- 5 暗灰色土 (貝片・魚骨多含、円礫極少含、粘性極強)
- 6 茶褐色土 (小円礫・炭化物多含、ローム粒少含、貝片極少含)
- 7 暗褐色土 (ローム粒多含、小円礫少含、貝片極少含)
- 8 灰褐色土 (ローム粒少含、粘性・しまり極強)
- 9 黒褐色土 (貝片多含、ローム粒・ローム小B・炭化物少含)
- 10 褐色土 (ローム粒多含、ロームB・暗黄色砂粒含、炭化物少含、しまり強)

- 11 黒褐色土 (ローム粒・ロームB・貝片少含)
- 12 明灰褐色土 (ローム粒・B多含)
- 13 褐色土 (ローム粒多含、ロームB含、小円礫・炭化物・貝片少含)
- 14 黒褐色土 (ローム粒少含)
- 15 茶褐色土 (ローム粒多含、ロームB・小円礫少含)
- 16 暗茶褐色土 (ローム粒少含、ロームB・小円礫極少含)
- 17 暗褐色土 (ローム粒少含、ロームB・炭化物極少含)
- 18 黄褐色土 (ローム粒極多含、ロームB多含、しまり強)
- 19 黒褐色土 (ローム粒・ローム大B・灰褐色粘土大B少含)
- 20 黒褐色土 (灰褐色粘土粒多含、小円礫・炭化物少含)

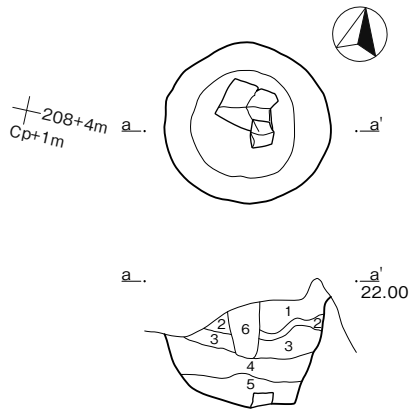
- 21 黒褐色土 (ローム粒含)
- 22 暗灰褐色土 (灰褐色粘土粒含、小円礫少含、しまり強)
- 23 暗褐色土 (貝片多含、炭化物含、ローム粒少含)
- 24 暗茶褐色土 (ローム粒少含、小円礫極少含)
- 25 黄褐色土 (ローム土で構成されている)
- 26 黒褐色土 (ロームB・灰褐色粘土塊少含)
- 27 黒褐色土 (ロームB極少含)
- 28 黄褐色土 (ローム土で構成されている)

SK640

- 29 暗灰色土 (ローム粒極少含)
- 30 灰褐色土 (円礫少含、ローム粒極少含)
- 31 黄褐色土 (黄褐色土中に暗灰色土粒少含、炭化物極少含)
- 32 暗灰色土 (ローム粒極少含)
- 33 灰褐色土 (ローム粒極少含、しまり極強)
- 34 灰褐色土 (ローム粒・炭化物少含、灰褐色粘土粒極少含)
- 35 褐色土 (ローム粒含、炭化物極少含、しまり強)



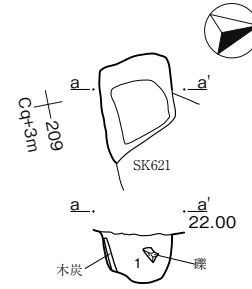
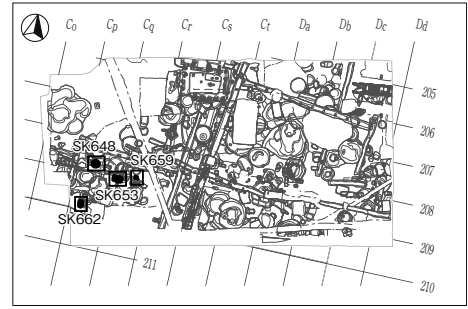
SK640, SK641・SK642・SK643 (B面)



SK648

- 1 暗褐色土 (ローム粒・黄褐色砂粒含、ロームB・小円礫極少含、粘性弱、しまり強)
- 2 褐色土 (ほぼローム粒で構成されている)
- 3 黒褐色土 (ローム粒含、ロームB・炭化物・小円礫極少含)
- 4 褐色土 (ローム粒極多含、ロームB多含、円礫少含)
- 5 茶褐色土 (ローム粒・B多含)
- 6 茶褐色土 (ローム粒・炭化物・小円礫極少含)

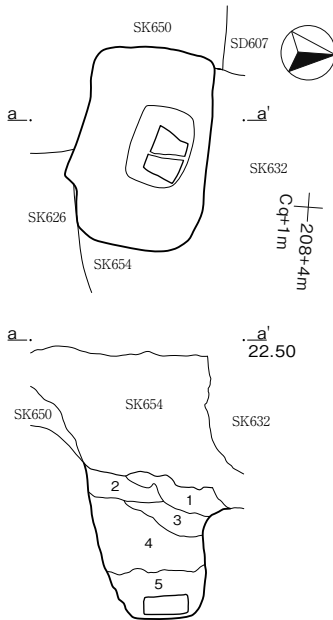
SK648 (B面)



SK659

- 1 褐色土 (ローム粒多含、円礫・小円礫極少含)

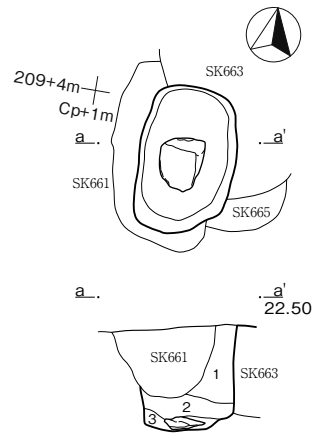
SK659 (B面)



SK653

- 1 暗茶褐色土
- 2 暗黄褐色土 (ローム粒・ロームB多含)
- 3 暗黄褐色土 (ロームB極多含)
- 4 暗茶褐色土 (ローム粒・B多含、暗灰色粘土B極少含)
- 5 暗茶褐色土 (ロームB少含、粘性なし)

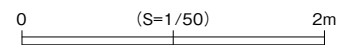
SK653 (B面)



SK662

- 1 暗茶褐色土 (ローム粒少含、しまりなし)
- 2 暗黄茶褐色土 (ローム粒多含)
- 3 暗黄褐色土 (ロームB主体)

SK662 (B面)



III-56図 SK648、SK653、SK659、SK662

第IV章 遺物

第1節 人工遺物

出土遺物の概要

本地点からはコンテナ総数、186箱の遺物（磁器・陶器・土器・瓦・金属・その他）が出土している。このうち64.5%にあたる120箱が瓦である。磁器・陶器・土器は49箱、その他17箱である。磁器・陶器・土器の分類基準は「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）」（東京大学埋蔵文化財調査室1999）を基に作成した最新版の一部修正を加えたもの（分類Ver4.3）によった。人形玩具の分類基準は「東京大学構内遺跡出土人形玩具の分類」（安芸・小林・堀内2012）によった。遺跡における分類は数量分析により文化、社会、経済、年代の様相を浮かび上がらせる手段である。そのためにはある一定以上の数量（便宜的に推定個体数100個体以上）をボーダーとした。SU107から出土した遺物はコンテナ総数51箱ではあるが瓦が44箱で、陶磁器は5箱と少ない。

推定個体数100個体以上の遺物量を有さない遺構は、大まかな年代観を出し検証した。生活面A面とB面が確認されている。

SB1（遺構Ⅲ-1～3図、遺物Ⅳ-1図）

1、2は軒棧瓦である。1は軒丸部の上半と軒平部中央付近から右側のみ残存している。瓦当紋様は、軒丸部は推定八個の珠紋が巡る巴紋、軒平部は唐草がK、子葉がgに分類される。2の軒丸部は完形だが軒平部は右端部のみ残存している。瓦当紋様は、軒丸部が十個の珠紋が巡る巴紋である。赤褐色を呈し、被熱した可能性がある。3は軒棧瓦である。軒丸部は完形だが、軒平部は周縁右側の一部のみ残存している。軒丸部が当紋様は10個の珠紋が巡る巴紋である。

SA103（遺構Ⅲ-5～9図、遺物Ⅳ-1図）

1～4は軒棧瓦である。1は軒平部右半分のみ残存している。瓦当紋様は、加藤氏の分類（加藤1989）に従えば、II Kiに分類される。2は軒平部中央付近から右半分のみ残存している。瓦当紋様は、加藤1989分類ではⅢ Kgに分類される。3は軒平部左半分のみ残存している。瓦当紋様は、加藤1989分類では唐草はK、子葉はiに分類される。4は軒平部左端のみ残存している。瓦当紋様は、加藤1989分類では唐草はK、子葉はjに分類される。褐色を呈し、被熱した可能性がある。5は

軒平瓦ないし軒棧瓦である。軒平部右半分のみ残存している。瓦当紋様は、加藤1989分類では唐草はIに分類されるが、子葉は唐草のFに類似した形態を呈する。6は平瓦ないし棧瓦である。前端部中央付近のみ残存している。「音」の刻印が押されている。7～9は鬘斗瓦である。7の紋様部は右半分のみ残存している。金子氏の分類（金子1990）に従えば、19類に分類される。8の紋様部は左端のみ残存している。金子分類の16類に分類される。9の紋様部は左端のみ残存している。紋様は二本の凸線によって描かれており、全形は不明だが金子分類の14類に分類される可能性がある。

SU107（遺構Ⅲ-10～12図、遺物Ⅳ-1～11図）

コンテナ総数51箱。陶磁器、土器は5箱。瓦は44箱。金属、その他2箱である。遺構の位置は溶姫御殿の台所である御膳所とされているところで、覆土には大量の焼土と共に焼けた瓦が含まれていた。陶磁器、土器は11点のみであるが、場所の特定に結びつく「口々御膳所」と書かれたこね鉢が出土している。2・3は東大編年Ⅷa～c期（1800年代～1840年代）に多く見られるものである。被熱している遺物が多く見受けられ、慶応4（1868）年の火災に拠るものであろう。覆土は間層を挟み上下二層に分かれる。発掘時の状況では下層の瓦はSU107直上に葺かれており、火災時に落ち込んだ瓦群（70～103）、上層の瓦は火災後に投棄された瓦群と推定された。紋様、刻印、二つ以上角を持つものを中心にした。本遺構の瓦の考察は研究編研究3に詳しく述べられており、参照されたい。

1、2は肥前系染付磁器である。1は高台断面「U」字状で口縁部が輪花に成形されている。見込み全面に山水楼閣文が描かれている。JB-2-qに分類される。口唇部には口錆が施されている。高台内には「御末」（おすえ）と釘書きされている。御末は、奥女中のなかで雑役を務めた下級の者のことで、使用する部屋も同様に使われ、絵図などにも「御末」と記載されている。そこで使用された器であろう。被熱し、釉の光沢が無くなっている。2は大型の鉢でJB-5に分類される。底部欠損。口径40cm。内面口縁には四方襷文が巡る。多くの遺物が被熱しているが、この鉢は被熱していない。

3、4は陶器である。3は京都・信楽系灰釉端反碗である。TD-1-gに分類される。釉には細かい貫入が多く入る。被熱し、釉の表面が溶けかかっている。4は瀬戸・

美濃系こね鉢。TC-5-Iに分類される。口縁部欠損。灰釉緑釉流し。底部中央墨書あり。「口カ御膳所」。被熱し、釉の光沢が無くなっているところがある。

5～10は土器である。高温で被熱し、部分的に赤化しているものもある。5は耳かわらけ。DZ-2-eに分類される。底部の糸切り痕は消され磨かれている。箸置き。6～8は土師質丸火鉢。DZ-31-aに分類される。いずれも無文で脚は貼り付けである。6は2脚残存。7は脚欠損。8は小振りである。9は土師質角火鉢。DZ-31-eに分類される。脚は貼り付けで1ヶ所残存する。10は塩壺である。板作り成形。大枠。「泉州麻生」。DZ-51-iに分類される。内面布目。受け部の立ち上がりは高いが、やや内湾気味になっている。

11は人形玩具である。江戸在地系基石状製品で、DQ-4004に分類される。手びねり。胎土は橙色である。基石の代用品として使われたものであろう。

12～103は瓦である。12、13は軒丸瓦である。12は瓦当部と筒部の一部のみ残存している。瓦当紋様は幼剣梅鉢紋であり、加藤氏の分類（加藤1990）に従えばC類に分類される。なお同遺構からは少なくとも5種類の範を異にする幼剣梅鉢紋・C類の軒丸瓦が出土している。13は瓦当部のみ残存している。瓦当紋様は16個の珠紋が巡る巴紋である。周縁上半が褐色を呈し、被熱した可能性がある。14～18は軒棧瓦である。14は筒部の左角を含め四分の一ほどを欠損するが、全形の窺える資料である。瓦当紋様は、軒丸部が八個の珠紋が巡る巴紋、軒平部が加藤1989分類ではII Kjに分類される。筒部の後端部寄り中央付近に釘孔が設けられる。15は軒丸部、軒平部中央付近から右側、筒部の一部が残存する。瓦当紋様は、軒丸部が十個の珠紋が巡る巴紋、軒平部が加藤1989分類ではIII Kjに分類される。83と同範である。同範資料が同遺構から破片6点、最小個体数で4個体出土している。16は軒丸部、軒平部中央付近から右側、筒部の一部が残存する。瓦当紋様は、軒丸部が十個の珠紋が巡る巴紋、軒平部が加藤1989分類ではIII 1Kjに分類される。同範資料が同遺構から破片14点、最小個体数で9個体出土している。うち二点には「やまに庄一」の刻印が確認される。17は6と同範資料だが、軒平部左端に「やまに庄一」の刻印が押されている。この刻印は3の刻印と同範と考えられる。褐色を呈し、被熱した可能性がある。18は軒丸部上半の一部、軒平部中央付近から右側、筒部の一部が残存する。瓦当紋様は、軒丸部には珠紋が巡ることは確認されるが、破損が著しく全形は不明である。軒平部は加藤1989分類ではIII Liに分類される。赤褐色を呈し、被熱した可能性がある。

19～21は軒平瓦ないし軒棧瓦である。19は軒平部中央付近下半が残存する。瓦当紋様は、加藤1989分類ではIII K?に分類される。赤色を呈し、被熱した可能性がある。20は軒平部中央付近から右側の一部が残存している。瓦当紋様は、加藤1989分類ではIII 3F?に分類される。赤色を呈し、被熱した可能性がある。21は軒平部中央付近から左側の一部が残存している。瓦当紋様は、加藤1989分類ではIII K?に分類される。褐色を呈し、被熱した可能性がある。同範資料が同遺構から破片2点出土している。22は廻隅瓦である。右側の瓦当部の中央付近から左側が残存している。瓦当紋様は、加藤1989分類ではIII Kjに分類される。

23、24は丸瓦である。23は玉縁を一部欠損するが全形を窺える資料である。凸面には周囲に漆喰が塗られており、屋根に葺いた後に隙間を埋めるために漆喰を盛り付けたと考えられる。凸面は縦方向のナデ調整が施される。凹面はコビキ痕、布目、棒状工具による押し引き痕が順に重なって確認される。左右端部は内面に大きな面取りが施され、先端が尖るよう整形されている。24は全形を窺える資料である。凸面には周囲に漆喰が塗られた痕が確認され、屋根に葺いた後に隙間を埋めるために漆喰を盛り付けたと考えられる。また前端部よりに釘孔が設けられており、凹凸面から打ち割って加工している。凸面は縦方向のナデ調整が施される。凹面はコビキ痕、布目、棒状工具による押し引き痕が順に重なって確認される。左右端部は平坦になるよう整形されている。25、26は軒丸瓦ないし丸瓦である。25は玉縁よりおよそ半分程度が残存している。凸面は縦方向のナデ調整が施される。凹面はコビキ痕、布目、棒状工具による押し引き痕が順に重なって確認される。左右端部は平坦になるよう整形されている。褐色を呈し、被熱した可能性がある。凸面側玉縁よりに「やまに庄十」の刻印が押されている。26は玉縁部から筒部が残存している。凸面には周囲に漆喰が塗られており、屋根に葺いた後に隙間を埋めるために漆喰を盛り付けたと考えられる。また二つの釘孔が設けられている。凸面は縦方向のナデ調整が施される。凹面はコビキ痕、布目、棒状工具による押し引き痕が順に重なって確認される。左右端部は平坦になるよう整形され

ている。28は平瓦である。ほぼ完形資料である。凹面側前端部寄り中央付近には幅90mm長さ110mm程の黒色に変色した部位があり、屋根に葺かれた際表に出た部分の痕跡だと推察される。なお凸面側左右の辺に沿い、30～40mm程の幅をあけて漆喰が筋状に付着している。また4箇所角と左右側面にも漆喰が付着している。平瓦として一般的な使われ方を行った後、凸面を上にして伏せ、16に示したような小形の丸瓦を両側に重ねて漆喰を塗布し、再利用された痕跡と推察される。29、30は棧瓦である。29はほぼ完形資料である。凹面は斜め方向、凸面は横方向の調整痕跡が認められる。後端部左角が斜めに失われているが、こうした事例がしばしば見られ、屋根葺き時に調節のため意図的に打ち割られた可能性も考えられる。30の全幅は同遺構出土の棧瓦と同様だが、全長が400mmを超える大型の資料である。後端部寄り中央付近に一箇所の釘孔が設けられているが、その他にやや左後にずれた箇所に一つ、左短部前端部寄りにもう一つの釘孔が打ち割って追加されている。後端部寄りのうち左側の追加された釘孔には鉄釘が残った状態になっている。また後端部寄り端から60mmほど間隔をあけて漆喰が筋状に付着している。葺き足を示す可能性がある。平部、棧部ともに切込みがないが、後右角は斜めに面取り整形されている。31～34は鬘斗瓦である。中央付近から右半分が残存している。紋様は、金子氏の分類(金子1990)に従えば、15類-1に分類される。右端部が赤色化しており、被熱の痕跡だと推察される。32は紋様部中央付近から左側のみ残存している。紋様は、金子分類では16類に分類される。左端には漆喰が一面に付着しており、左端に配置された子葉紋様を隠している。33は紋様部中央付近から右側のみ残存している。紋様は、金子分類では19類に分類される。褐色を呈し、被熱の痕跡だと推察される。34は右端後端角のみ残存している。左端面に「○升」の刻印が天地逆に押される。赤褐色を呈し、被熱の痕跡と推察される。35は伏間瓦である。後端部右角のみ残存している。赤褐色を呈し、被熱の痕跡と推察される。36、37は鬼瓦である。36は紋様部右下の一部のみ残存している。紋様は幼剣梅鉢紋だと推察される。赤褐色を呈し、被熱の痕跡と推察される。37は紋様部右上の一部のみ残存している。紋様は周縁のみ残存している。赤褐色を呈し、被熱の痕跡と推察される。

38～69は前端部に刻印が押されているものを取り上げた。38～61は棧瓦である。38、40、41、43、48、50、51、58、61は赤褐色を呈し、被熱の痕跡と推察される。62～69は平瓦ないし棧瓦である。63、

64、65、66、68は赤褐色を呈し、被熱の痕跡と推察される。70～83は最下層出土である。70、71は軒平瓦ないし軒棧瓦である。70は軒平部中央付近のみ残存している。瓦当紋様は、加藤氏の分類(加藤1989)に従えばⅢL?に分類される。赤色を呈し、被熱した可能性がある。71は軒平部中央付近のみ残存している。瓦当紋様は、加藤1989分類ではⅣK?に分類される。赤色を呈し、被熱した可能性がある。72～78は棧瓦である。前端部に刻印を有するものを取り上げた。79～82は平瓦ないし棧瓦である。前端部に刻印を有するものを取り上げた。83は軒平瓦である。唐草はK、子葉はjに分類される。軒平部左端に「やまに庄一」の刻印が押されている。褐色を呈し、被熱した可能性がある。84～103は床下マスからの出土である。84は軒棧瓦である。軒丸部は完形、軒平部は周縁右端のみ残存している。瓦当紋様は十個の珠紋が巡る巴紋である。85は軒平瓦ないし軒棧瓦である。軒平部中央付近から右側の一部のみ残存している。瓦当紋様は、加藤1989分類では中心飾りがⅢ3、唐草がKに分類される。褐色を呈し、被熱の痕跡と推察される。86は丸瓦である。前端部左角付近のみ残存している。凹面にはコビキ痕、布目の転写された痕跡、棒状工具による縦方向の押し引き痕が順に重なって確認される。褐色を呈し、被熱の痕跡と推察される。87は平瓦である。後端部の両角を欠損する。褐色を呈し、被熱の痕跡と推察される。88は棧瓦である。完形で、平部と棧部の切込深さと全長の組み合わせがわかる貴重な資料である。平部切込深さは25mm、棧部は65mm、全長は263mmを測る。褐色を呈し、被熱の痕跡と推察される。89、90は鬘斗瓦である。89の紋様部は左角を欠損している。左右端に漆喰が付着しており、紋様の両端を覆っていたと推察される。紋様は、金子氏の分類(金子1990)に従えば19類に分類される。90は紋様部左右角を欠損している。右端付近に漆喰が付着している。紋様は、金子分類には該当するものがないが19類に近似している。91、92は海鼠瓦である。91は全体の半分が残存している。ひとつの角の頂点には固定金具を設置するための溝が設けられており、鉄製の留め金が残存している。表面は縁辺部に輪郭に沿って漆喰が盛られていた痕跡が見られる。92は完形を呈する。もともとは平面正方形だったものを、表側にあらかじめ設けられた分割溝に沿って切断し直角二等辺三角形にしたものである。表面は縁辺部に輪郭に沿って漆喰が盛られていた痕跡が見られる。また辺の中央付近に固定金具を設置するためと推察される溝が設けられている。93～103は前端部に刻印を有するものを取り上げた。93～

99は平瓦である。95～99は何れも赤褐色を呈し、被熱の痕跡と推察される。100～103は平瓦ないし棧瓦である。何れも赤褐色を呈し、被熱の痕跡と推察される。

104～125は金属製品である。104～114は銅合金製。104は環状金具である。太さ0.6cm。上下に可動する。105は調度類の金具。106は金具。径1mmほどの鉸孔が6ヶ所開けられている。建具や調度の木製品に付けられていたのであろう。107は線。断面が四角いものを留めていたのであろう。108～113は釘。108～110の頭部は大振り。径1.1cm。108は頭部隅丸方形。長さ1寸。111～113の頭部は小振り径約0.6cm。114は鉸。頭径0.8cm。115～125は鉄製品。火災により建物の崩落でできた灰に埋もれていたためか酸化せず依存状態は良好である。ほとんど錆が見られないものが多い。115は鋸。長さ13.9cm、爪長さ3.0cm。116は鉸。頭部隅丸方形。117～125は和釘。軸断面が四角い鍛造。117は合釘。板を継ぐための、両端が尖った真っ直ぐな釘。長さ3.8cm。二寸五分。118～125は頭が巻かれている頭巻釘。長さは118は11.2cm、119は10.9cmで三寸五分～四寸。120は10.1cm、121は9.6cm、122は9.3cmで三寸～三寸五分。123は7.3cm、124は6.5cm、125は6.3cmで二寸～二寸五分。頭巻釘は本遺構で317本出土した。30層より下層と確認できたものは57本である。瓦を屋根に固定するためなどに使われたものであろう。

126は石製七輪。凝灰岩。房州石か。口縁の平面形は方形の角が落とされて八角形になっていたと思われる。口縁部は5cmの幅で立ち上がっている。風口の縁には高さ1.5cm、幅2cmほどの高まりがある。内面はラップ形に削り出され、被熱で赤色と黒色に変色している。

127は貝パレット。ハマグリ。右殻。中型。長さ3.4cm。内面全体にベンガラが付着している。外面にもわずかに付着している。

SK110 (遺構Ⅲ-4図、遺物Ⅳ-12～14図)

磁器の端反碗、湯呑碗、肥前系磁器志田皿、青土瓶などが出土しており19世紀前半を中心とした遺物である。A面に属する遺構である。

1～5は磁器である。1～4は瀬戸・美濃系碗。1は口縁部が外反する端反碗でJC-1-dに分類される。見込み模様あり。釉が厚く掛かり表面に凸凹が見られる。文様は区画で区切られている。2、3は腰が張り体部が直立する腰張湯呑碗でJC-1-eに分類される。2は高台がやや高い。3は口唇部が比厚している。寿字文。見込み中央に文様あり。4は高台の低い薄手半球碗でJC-1に分

類される。細い線で鶴が描かれ、動きのある連続模様になっている。高台脇には亀甲文が描かれており、鶴亀の吉祥文様になっている。5は肥前系染付皿。口縁部はわずかに輪花に成形され「く」の字状に屈曲している志田皿で、JB-3-eに分類される。見込み山水楼閣文。周縁部には花文。高台内に目跡が5箇所ある。口縁部に一箇所焼継ぎをした痕がある。

6～13は陶器である。6～11は瀬戸・美濃系瓶である。6～9は灰釉徳利で「一」「△」の釘書きが付けられている。6は二合半徳利底部釉つけ掛けでTC-10-cに分類される。肩が張った寸胴形。胴部上方に大きく3箇所に溶着痕がある。口縁部欠損。7は五合徳利でTC-10-dに分類される。肩が張った寸胴形。この瓶のみ酸化した強い油臭がしており、油入れとして利用されていたことがわかる。8、9は一升徳利でTC-10-eに分類される。肩が張った寸胴形。10、11は柿釉備前写しの徳利でTC-10-gに分類される。10は胴部に条線が巡る糸目徳利。口縁と底部欠損。11は胴部に凹みを持つ「ペコカン」徳利。12、13は青土瓶でTZ-34-aに分類される。体部は算盤玉形で口は鉄砲口である。茶漉し穴は3箇。青緑釉が化学変化し白濁している。13は蓋。

14～17は土器である。14～16は底部が平滑な磨きかわらけでDZ-2-dに分類される。15、16は立ち上がり部分からきれいに加工されており、底部のみ二次加工品として使われたと考えられる。「前かわらけ」などとして使われたのではないか。見込み部分は黒色になっており、部分的に光沢のある付着物が見受けられる。

17は人形玩具。江戸在地系基石状製品で、DQ-4004に分類される。手びねり。胎土は橙色である。表面には胡粉と思われる白色がわずかに残り、白石として使われたと考えられる。基石の代用品として使われたものであろう。

18～30は瓦である。18～21は軒丸瓦である。18は瓦当部のほぼ半分、左上半から右下半の部位のみの破片である。紋様は剣梅鉢紋であり、加藤氏の分類(加藤1990)に従えばC類に分類される。19は瓦当部のみほぼ完形で残存している。紋様は葵紋である。20は瓦当部のみほぼ完形で残存している。紋様は巴紋で、16個の珠紋が巡る。21は瓦当部右下のみ残存している。紋様部は珠紋の巡る巴紋だと推察される。22は軒平瓦である。瓦当部右半分と筒部の一部のみ残存している。軒平部右角に面取りが無く、軒棧瓦ではないと判断される。瓦当紋様は「江戸式・大坂式折衷文様」(金子1996)に分類され、加藤1989分類では唐草はLに該当する。子葉はjに似るが、下側にも括れがあり異なる。23は軒

平瓦ないし軒棧瓦である。軒平部瓦当紋様はほぼ完形、筒部は一部残存している。瓦当紋様は、加藤 1989 分類では I Li に分類される。24 は軒棧瓦、あるいは軒平瓦の軒平部である。右半の紋様部のうち、唐草と子葉のみ残存している。「江戸式」になるものと推察され、加藤 1989 分類では唐草は K、子葉は j に分類される。25、26 は軒棧瓦である。25 は軒丸部は完形、軒平部は右端の一部のみ残存している。軒丸部瓦当紋様は巴紋で、9 個の珠紋が巡る。軒平部は子葉の一部が残存するのみで定かでないが、「江戸式」の可能性が高いと推察される。26 は軒丸部のみ残存している。瓦当紋様は巴紋で、9 個の珠紋が巡る。27 は丸瓦である。右半分のみ残存している。玉縁長は 21mm と短めである。凹面には斜め方向のコビキ痕、布目の転写、棒状工具の押し引き痕が順に重なって確認される。28 は棧瓦である。前端部右端のみ残存している。凹面は縦ナデ、凸面は横ナデ調整が確認される。29 は熨斗瓦である。厚みは 15mm と熨斗瓦にしては薄手だが、左端面に金箔が貼られていることから、熨斗瓦だと推察される。30～32 は鬼瓦と推察される。30 は紋様部右端の一部のみ残存している。紋様の全形は明らかでないが、医学部附属病院地点から類似した資料が出土しており、共伴陶磁器から 18 世紀に位置づけられている（東京大学遺跡調査室 1990：769-770）。裏面には横ナデと、紋様の貼り付け部に沿ったナデ調整が施されていることが確認される。31、32 は裏面側に当たると推察される紐通しのみ残存している。厚手の粘土帯を棒状にし、体部の接合部にはカキヤブリを施して接合をよくしている。

33 は金属製品、鉄、頭巻釘。長さ 6.8cm。

34、35 は漆漉し紙。CZ に分類される。34 は赤漆を漉したもの。最大径 0.7cm。35 は顔料を含んでいない漆を漉したもの。表面にわずかに見られる赤漆は外面に部分的に付着したものであろう。最大径 1.0cm。

SU123（遺構Ⅲ-13 図、遺物Ⅳ-15 図）

1 は軒丸瓦である。瓦当部右端と筒部の一部のみ残存している。瓦当紋様はほとんど破損しているが、珠紋の巡る巴紋だと推察される。2、3 は熨斗瓦である。2 は紋様部中心付近のみ残存している。紋様は、金子氏の分類（金子 1990）に従えば、20 類に分類される。3 は紋様部左側の一部のみ残存している。紋様は、金子分類の 15 類に分類される。上下逆さに刻印されている。

SK134（遺構Ⅲ-14 図、遺物Ⅳ-15 図）

1 は鬼瓦と推察される。一見軒丸瓦の瓦当部だが、裏

面には全面にカキヤブリが認められることから、鬼瓦の紋様部の一部だと判断した。紋様は珠紋の巡る巴紋だと推察される。

SK140（遺構Ⅲ-14 図、遺物Ⅳ-15 図）

1 は飾り瓦と推察される破片資料である。平面形は台形を呈し、長辺はゆるやかな弧を描く。中心に直線を二本、さらにそれを取り囲むように左右 3 対の曲線が描かれる。

SD141（遺構Ⅲ-14 図、遺物Ⅳ-15 図）

1 は熨斗瓦である。紋様部は中央付近左側のみ残存している。紋様は残存部が少ないため分類することは出来ない。

SK147（遺構Ⅲ-15 図、遺物Ⅳ-15 図）

1 は熨斗瓦である。紋様部中央付近のみ残存している。金子氏の分類（金子 1990）の 15 類に分類される。

SK153（遺構Ⅲ-15 図、遺物Ⅳ-15 図）

1 は 18 世紀前半から中頃の様相を示す。

1 は堺系陶器播鉢。TL-29 に分類される。高台が付く。底部、見込みに焼台痕が残る。播目は見込み途中から入っている。高台の内側断面はドーム状。刻印は片口部ではなく高台内に押されている。扇形の囲みに「上」。堺系播鉢では古いタイプである。播目は 13 条 1 単位で施される。胎土に白色粒子混入。2 は板作り成形。胴部刻印は大枠「泉州麻生」で DZ-51-i に分類される。受け部の立ち上がりが高く、断面形は長方形である。本分類の中では古手のものである。

SK156（遺構Ⅲ-15 図、遺物Ⅳ-15 図）

1 は貝製品。貝柄杓。イタヤガイの右殻。長さ木製の柄を留めるための穴が二箇所穿たれている。

SK162（遺構Ⅲ-16～18 図、遺物Ⅳ-15 図）

1 は軒丸瓦である。瓦当部上半のみ残存している。瓦当紋様は珠紋が巡る巴紋である。

SK179（遺構Ⅲ-19 図、遺物Ⅳ-15 図）

1 は軒丸瓦である。瓦当部上半のみ残存している。紋様は珠紋の巡る巴紋である。2 は軒棧瓦である。軒丸部のみ残存している。瓦当紋様は 8 個の珠紋が巡る巴紋である。3 は平瓦ないし棧瓦である。前端部中央付近のみ残存している。「やまに庄十」の刻印が押されている。

SK181 (遺構Ⅲ-19 図、遺物Ⅳ-16 図)

1 は鬘斗瓦である。体部中央付近と紋様部の一部のみ残存している。紋様部は唐草の一部と推察されるが、判然としない。凹面に、5本一組の条線が交差して描かれる。条線は浅めで、凹部内に筋目が確認される。2 は軒平瓦、ないし軒棧瓦である。軒平部中央付近のみ残存している。「江戸式」には分類されるが、中心飾りは加藤氏の分類(加藤 1989)ではⅣ類に近いものの該当するものはない。唐草はⅠに分類される。

SK182 (遺構Ⅲ-19 図、遺物Ⅳ-16 図)

1 は鬘斗瓦である。体部中央付近のみ残存しており、紋様部は欠損している。凹面に、5本一組の条線が交差して描かれる。SK181で確認された鬘斗瓦の条線より深く、凹部内に筋目は確認されない。色調は、凸面の一部と芯の一部が褐色、凹面が灰色を呈することから、被熱した可能性がある。

SD185 (遺構Ⅲ-20 図、遺物Ⅳ-16 図)

1 は軒平瓦、ないし軒棧瓦である。軒平部右半分のみ残存している。また右端は欠損している。全体的に「江戸式」軒平部より大きい。瓦当紋様は中心飾りと左右二対の唐草から構成される。加藤氏の分類(加藤 1989)にはなく、「江戸式」には分類されない。搬入品である可能性がある。2 は鬘斗瓦である。紋様部中心付近のみ残存している。紋様は、金子氏の分類(金子 1990)に従えば、15類に分類される。

SK197 (遺構Ⅲ-20 図、遺物Ⅳ-16 図)

1、2 は軒丸瓦である。1 は瓦当部の中心部付近のみ残存している。なお裏面、筒部が破損しているため、上下の向きは定かでない。実測図では残存部の多い部位を断面実測している。瓦当紋様は梅鉢紋に分類される。2 は瓦当部右下の一部のみ残存している。色調は表面が黒色、芯は褐色を呈する。瓦当紋様は梅鉢紋に分類される。3 は平瓦ないし棧瓦と推察される。前端部の中央付近のみ残存している。「○」の刻印が押されている。

SK201 (遺構Ⅲ-20 図、遺物Ⅳ-16 図)

1 は軒丸瓦である。瓦当部の周縁部上端付近と筒部の瓦当部より右端のみ残存している。瓦当紋様は破損のため不明瞭だが、珠紋の巡る巴紋だと推察される。珠紋は他の軒丸瓦と比べ大きい。筒部の凹面にはコビキ痕、布目の痕跡、棒状工具による押し引き痕が順に重なって確

認される。端部は平坦に調整される点も特徴的である。2～5 は軒棧瓦である。2 は軒丸部と軒平部中央付近より右側のみ残存している。瓦当紋様は、軒丸部が珠紋の巡らない巴紋、軒平部が加藤氏の分類(加藤 1989)に従えば唐草がL、子葉がiに分類される。3 は軒丸部と軒平部周縁右端のみ残存している。瓦当紋様は、軒丸部が珠紋の巡らない巴紋に分類される。4 は軒平部左端のみ残存している。左角に三角形の面取りが施されていることから軒棧瓦と判断した。瓦当紋様は、加藤 1989 分類では唐草がK、子葉がgに分類される。5 は軒平部左端のみ残存している。左角に三角形の面取りが施されていることから軒棧瓦と判断した。瓦当紋様は、加藤 1989 分類では唐草がK、子葉がjに分類される。6 は軒平瓦ないし軒棧瓦である。軒平部中央付近のみ残存している。瓦当紋様は、加藤 1989 分類ではⅠKjに分類される。

SK203 (遺構Ⅲ-21 図、遺物Ⅳ-16 図)

1 は軒丸瓦である。瓦当部右下のみ残存している。瓦当紋様は幼剣梅鉢紋であり、加藤氏の分類(加藤 1990)に従えばC類に分類される。表面は赤色、芯は灰褐色を呈し、被熱した可能性がある。2 は軒棧瓦である。軒丸部上半と軒平部右端上半、筒部の一部のみ残存している。瓦当紋様は、軒丸部が珠紋の巡る巴紋、軒平部が加藤 1989 分類では唐草がK、子葉がjに分類される。3 は軒平瓦ないし軒棧瓦である。軒平部左端のみ残存している。瓦当紋様は、加藤 1989 分類では唐草がA、子葉がaに分類される。

SD212 (遺構Ⅲ-21 図、遺物Ⅳ-16 図)

1、2 は軒丸瓦である。1 は瓦当部の上部周縁の一部と筒部が残存しているが、玉縁部は欠損している。瓦当紋様は破損のため不明である。筒部には釘孔が設けられている。筒部凹面にはコビキ痕、布目の痕跡、棒状工具の押し引き痕が順に重なって確認される。2 は瓦当部下半の一部のみ残存している。瓦当紋様は梅鉢紋であり、加藤氏の分類(加藤 1990)に従えばB類に分類される。

SK213 (遺構Ⅲ-23 図、遺物Ⅳ-17 図)

1 は中国景德鎮の十錦手色絵端反碗でJA1-1に分類される。粉彩。口唇部口銹。鉄で花の輪郭を描いている。地模様は沈線で描かれ上から七宝エナメル顔料(琺瑯彩)で絵付している。

2～6 は瓦である。2 は軒丸瓦である。瓦当部上半右半分が残存している。瓦当紋様は梅鉢紋であり、加藤氏

の分類（加藤 1990）に従えば B 類に分類される。3、4 は軒棧瓦である。3 の軒丸部は完形、軒平部は右端のみ残存している。瓦当紋様は、軒丸部が十個の珠紋が巡る巴紋、軒平部が加藤 1989 分類では唐草が L、子葉が j に分類される。4 は軒平部右端のみ残存している。軒丸部は残存していないがはがれた痕跡が確認されることから軒棧瓦と判断した。瓦当紋様は加藤氏の分類に従えば子葉が a に分類される。5、6 は鬘斗瓦である。紋様部左端のみ残存している。5 の紋様は加藤 1990 分類では 16 類に分類される。6 の紋様は金子氏の分類（金子 1990）に従えば 19 類に分類される。

SU224（遺構Ⅲ -23 図、遺物Ⅳ -17 図）

1 は鬘斗瓦である。紋様部中央から左側の一部のみ残存している。紋様は金子氏の分類（金子 1990）に従えば 15 類に分類される。

SX253（遺構Ⅲ -24 図、遺物Ⅳ -17 図）

1 は軒丸瓦である。瓦当部のみ残存している。瓦当紋様は梅鉢紋である。2、3 は軒平瓦である。2 は軒平部右端のみ残存している。瓦当紋様は「江戸式」に分類され、加藤氏の分類（加藤 1989）に従えば、Aa に分類される。右端部には「本」の刻印が押される。3 は軒平部中心飾りから右側のみ残存している。瓦当紋様は、加藤 1989 分類では唐草が C、子葉が c に分類される。4、5 は軒平瓦ないし軒棧瓦である。4 は軒平部瓦当紋様の、中心飾りから左側のみ残存している。瓦当紋様は、加藤 1989 分類では唐草が B、子葉が d に分類される。5 は軒平部瓦当紋様の中心飾り付近と左側の子葉のみ残存している。瓦当紋様は、加藤 1989 分類では中心飾りがⅣ、唐草がⅠに分類される。6 は平瓦である。前端部中央付近から右側のみ残存している。前端部中央付近に「○庄○庄」の刻印が押されている。7、8 は鬘斗瓦である。左端部のみ残存している。7 の紋様は、金子分類（金子 1990）に従えば 16 類に分類される。8 の紋様は、金子分類の 18 類に分類される。9 は海鼠瓦である。角部付近の小破片であり、具体的な部位は不明である。釘孔が一つ設けられる。紋様の全形は判然としないが、陽刻された円盤紋様が確認されることから梅鉢紋になると推察される。

SK268（遺構Ⅲ -24 図、遺物Ⅳ -18 図）

1、2 は軒丸瓦である。1 は瓦当部上部のみ残存している。瓦当紋様は梅鉢紋である。推定径は 120 ～ 130mm 程度であり、小型の軒丸瓦だといえる。2 は瓦

当部下半部のみ残存している。瓦当紋様は梅鉢紋である。推定径は 140mm 程度であり、小型の軒丸瓦だといえる。3 は鬘斗瓦である。右半部のみ残存している。紋様部は唐草と子葉のみ確認され、「江戸式」に分類される。金子氏の分類（金子 1990）に従えば 15 類に該当する。凹面には分割線が確認される。

SK269（遺構Ⅲ -24 図、遺物Ⅳ -18 図）

1 は鬘斗瓦である。紋様部右側の一部のみ残存している。紋様は、金子氏の分類（金子 1990）に従えば 15 類に分類される。

2 は鉛玉。径 1.3cm。重さ 12.7g。径の大きさから火縄銃の弾か。

SK276（遺構Ⅲ -24 図、遺物Ⅳ -18 図）

1 は軒丸瓦である。筒部の一部のみ残存している。瓦当部は完全に欠損しており、破面にはカキヤブリが確認される。筒部には釘孔が確認される。凹面には、コビキ痕、布目の痕跡、縦方向の細かい調整痕が順に重なって確認される。2 は軒平瓦である。右半分と前端部の左角を欠損するが、前後端面は残存している。瓦当はないが、前端面に金箔が貼られている。全長が短く横長の形態を呈する。

SK278（遺構Ⅲ -25 図、遺物Ⅳ -18 図）

1 は軒丸瓦である。軒平部左上半のみ残存している。瓦当面に金箔が貼られている。瓦当紋様は無剣梅鉢紋であり、加藤氏の分類（加藤 1990）に従えば A 類に分類される。2 は軒平瓦である。軒平部右側のみ残存している。瓦当面に金箔が貼られている。瓦当紋様は唐草二対のみ確認され、加藤 1989 分類では F に分類される。

SK283（遺構Ⅲ -25 図、遺物Ⅳ -18 図）

1 は軒丸瓦である。瓦当部下半のみ残存している。瓦当紋様は幼剣梅鉢紋であり、加藤氏の分類（加藤 1990）に従えば C 類に分類される。

SK286（遺構Ⅲ -26 ～ 27 図、遺物Ⅳ -19 図）

1 は高麗青磁。13、14 世紀。梅瓶の胴部片か。白の象嵌で草の穂部分、黒の象嵌で葉部分が描かれている。青磁象嵌蒲柳水文の部分か。胎土灰色。堅く焼しまっている。茶道具などとして見立てられたものであろう。

2 ～ 8 は瓦である。2、3 は軒丸瓦である。2 の瓦当部は完形だが筒部は欠損している。瓦当紋様は幼剣梅鉢紋であり、加藤氏の分類（加藤 1990）に従えば C 類に

分類される。瓦当下半の外周に漆喰が付着している。3の瓦当部はほぼ完形だが筒部は一部のみ残存している。瓦当紋様は幼剣梅鉢紋であり、加藤 1990 分類では C 類に分類される。筒部凹面にはコビキ痕、布目の痕跡、棒状工具の押し引き痕跡が順に重なって確認される。4は軒棧瓦である。瓦当部はほぼ完形だが、筒部は右側一部のみ残存している。瓦当紋様は、軒丸部が巴紋、軒平部が加藤 1989 分類では IV Fa に分類される。5は軒平瓦ないし軒棧瓦である。軒平部中央付近のみ残存している。瓦当紋様は、加藤 1989 分類では III Ki に分類される。筒部凹面に爪痕状の短沈線が並ぶ。何らかの整形にまつわる痕跡と推察されるがその意味は不明である。6は棧瓦である。前端部は完形だが、後端側は大きく欠損している。前端部中央付近に「○庄」の刻印が押されている。7は平瓦ないし棧瓦である。前端部中央付近から左側が残存している。前端部中央付近に「○庄」の刻印が押されている。一部に斜め方向に溝を削った痕跡が認められ、凹凸両面の対応する部分に施されている。何らかの理由で斜め方向に切断しようとした痕跡だと推察される。8は熨斗瓦である。左側のみ残存している。紋様は、金子氏の分類（金子 1990）に従えば 19 類に分類される。

SU287・467（遺構Ⅲ-25 図、遺物Ⅳ-19 図）

1は軒丸瓦である。瓦当部はほぼ完形だが筒部は欠損している。瓦当紋様は幼剣梅鉢紋であり、加藤氏の分類（加藤 1990）に従えば C 類に分類される。2は軒棧瓦である。軒丸部下半のみ残存している。瓦当紋様は巴紋である。3は軒棧瓦である。軒丸部のみ残存している。凸面は全面を破損している。瓦当紋様は珠紋が巡らない巴紋である。4は軒平瓦ないし軒棧瓦である。軒平部瓦当紋様の中央から左側が残存している。瓦当紋様は、加藤 1989 分類では II Fa に分類される。

SK294（遺構Ⅲ-28 図、遺物Ⅳ-20 図）

1は軒丸瓦である。瓦当部はほぼ完形だが筒部は欠損している。瓦当紋様は幼剣梅鉢紋であり、加藤氏の分類（加藤 1990）に従えば C 類に分類される。

SK314（遺構Ⅲ-28 図、遺物Ⅳ-20 図）

1～3は軒丸瓦である。1は瓦当部右下部のみ残存している。瓦当紋様は梅鉢紋だが、中央部が破損しているため剣の有無は不明である。加藤氏の分類（加藤 1990）に従えば B 類に分類される。2は瓦当部下半のみ残存している。瓦当紋様は無剣梅鉢紋で、加藤 1990 分類では B 類に分類される。3は瓦当部左下部のみ残存している。

瓦当文様は珠紋の巡る巴紋である。4は軒棧瓦である。軒丸部の瓦当部のみ残存している。裏面の筒部の痕跡から右棧になると推察される。瓦当紋様は珠紋が巡る巴紋である。珠紋は5個残存しており、下は8個あったと推察される。5は棧瓦である。前端部左角を大きく欠損するが、破面が直線的であることから意図的に加工された可能性も考えておきたい。全長 273mm、棧部の切込は深さ 112mm を測り、石井の棧瓦分類（石井 2008）には該当する分類がない。前端部中央付近には「○平」の刻印が確認される。全体的に風化している。6は平瓦ないし棧瓦と推察される。前端部中央付近のみ残存している。「○V」の刻印が確認される。7は熨斗瓦である。中央付近柄左端部まで残存している。紋様は金子氏の分類（金子 1990）に従えば 15 類-2 に分類される。凹面には、5本平行した条線が交差して施される。

SK333（遺構Ⅲ-29 図、遺物Ⅳ-20 図）

1は軒平瓦ないし軒棧瓦である。軒平部中央から左側の一部のみ残存している。瓦当紋様は加藤 1989 分類にはない。SK333からは軒丸瓦も出土しているが、小破片のため実測図、写真は省略した。

SK337（遺構Ⅲ-29 図、遺物Ⅳ-20 図）

1は熨斗瓦である。紋様部中央付近左側のみ残存している。紋様は金子氏の分類（金子 1990）に従えば 15 類に分類される。2、3は軒丸瓦である。2は瓦当部中央付近から下半部が残存している。瓦当紋様は無剣梅鉢紋であり、加藤氏の分類（加藤 1989）に従えば C 類に分類される。3は瓦当部上半左側のみ残存しており、周縁は全て欠損している。瓦当紋様は無剣梅鉢紋であり、加藤 1989 分類では A 類に分類される。

SK355（遺構Ⅲ-30～32 図、遺物Ⅳ-20～21 図）

1は京都・信楽系陶器で高台径の大きい碗である。TD-1 に分類される。高台脇面取り、高台内に釉が鳥状に付けられている。高台と体部の境に段が一段入る。高台内側も丸みを帯びて削られている。灰釉。灰が降ったように内外面共に表面に白色粒子が見られる。

2は熨斗瓦である。中央から左端部まで残存している。紋様は金子氏の分類（金子 1990）に従えば 15 類-3 に分類される。凹面には6本一組の条線が交差して施される。

3～8は鉄製品、和釘である。頭を直角に曲げた皆折釘である。残存状況は悪い。5は、全面に錆と共に木片がこびりついている。長さは 18.8cm (6寸2分)。5以外は、

錆と共に剥落し薄くなったり欠損しており正確な長さは不明であるが、木樋などに使われたものであろう。残存状況は悪く、頭の数のみ数えたところ 157 本まで数えることができた。

SK377 (遺構Ⅲ-33 図、遺物Ⅳ-21 図)

1 は軒丸瓦である。瓦当部下半左側のみ残存している。瓦当紋様は梅鉢紋であり、加藤氏の分類 (加藤 1990) に従えば C 類に分類される。

SK381 (遺構Ⅲ-33 図、遺物Ⅳ-21 図)

1 は軒平瓦ないし軒棧瓦である。軒平部中央付近から左端まで残存している。瓦当紋様は加藤氏の分類 (加藤 1989) に従えば中心飾りがⅡ、中心よりの唐草が F、外側よりは Aa、子葉は a に分類される。周縁左側に「ト」の刻印が確認される。SK381 からは軒棧瓦の瓦当部と推察される資料が出土している。

SK386 (遺構Ⅲ-34 図、遺物Ⅳ-21 ~ 22 図)

1 は軒平瓦である。瓦当部のみ残存している。瓦当紋様は、加藤氏の分類 (加藤 1989) に従えば IV Fg に分類される。瓦当部左右両端のほぼ全面と、筒部凹面の左右よりと中央付近に筋状に漆喰が付着している。2、3 は丸瓦である。2 は玉縁から筒部の一部のみ残存している。筒部の中心軸に沿って二つの釘孔が設けられていることから、軒丸瓦の筒部となる可能性もある。釘孔の内部と孔周辺には鉄錆が付着している。凹面にはコビキ痕、布目の痕跡、ヘラ状工具による押し引き痕が順に重なって確認される。3 は玉縁から筒部の一部のみ残存している。筒部の中心軸に沿って二つの釘孔が設けられていることから、軒丸瓦の筒部となる可能性もある。釘孔の内部には鉄錆が付着している。凹面には布目の痕跡、ヘラ状工具による押し引き痕が順に重なって確認される。2 より小型である。4、5 は平瓦である。4 は前端部左角と後端部右角を欠損している。5 は前端部中央付近から左角までのみ残存している。前端部中央付近に「○庄」の刻印が押されている。4 より厚手である。6 は鬘斗瓦である。端部のみ残存している。中央には分割線が確認される。凹面は無紋である。紋様は、金子氏の分類 (金子 1990) に従えば 18 類に分類される。

SD394 (遺構Ⅲ-36 図、遺物Ⅳ-22 図)

1 は軒平瓦である。紋様部には金箔が貼られている。瓦当紋様は中心飾りと唐草が確認される。加藤 1989 分類に該当するものは無い。

SK398 (遺構Ⅲ-37 図、遺物Ⅳ-22 ~ 23 図)

「清閑寺」の刻印を持つ京都・信楽系陶器碗や大椀「泉州麻生」刻印を持つ塩壺が出土しており、東大編年Ⅳ期 (1680 年代 ~ 1700 年代) 頃に多く見られるものである。

1 は京都・信楽系陶器で高台径の大きい碗である。TD-1-c に分類される。高台内中央が一段彫り窪められており、一段高い豊付脇に「清閑寺」の刻印あり。灰釉、錆絵染付。2 ~ 7 は土器の塩壺である。

板作り成形。胴部刻印は大椀「泉州麻生」で DZ-51-i に分類される。内面布目。4 は受け部の立ち上がりが高く、断面形は長方形である。本分類の中では古手のものである。2、3 は受け部の立ち上がりがやや内湾気味になっている。5 ~ 7 は塩壺の蓋である。DZ-00-a に分類される。

8、9 は瓦である。8 は軒丸瓦である。軒丸部下半の一部のみ残存している。瓦当紋様は幼剣梅鉢紋であり、加藤氏の分類 (加藤 1990) に従えば C 類に分類される。9 は鬘斗瓦である。紋様側の中央から右側が残存している。紋様は金子氏の分類 (金子 1990) に従えば 15 類-3 に分類される。凹面には 7 本一組の条線が交差して描かれる。

SD428 (遺構Ⅲ-30 ~ 32 図、遺物Ⅳ-23 ~ 24 図)

B 面に属する遺構である。木樋で木部は腐ってしまい、釘のみ立った状態で出土した。釘は全部で 212 本確認できた。鋸は 11 本である。

1 は渡来銭。北宋銭「元祐通寶」。初鑄年は元祐元 (1086) 年。直径 24.5mm、内径 17.6mm、穴径 6.7mm、厚さ 1.1mm、重さ 1.5g。文字は潰れて、状態は良くない。

2 ~ 8 は鉄製の和釘で、頭を直角に曲げた皆折釘である。残存状況は悪い。全面に錆と共に木片がこびりついている。2 は、長さ 16.9cm。5 寸 6 分。4 は 18.8cm、六寸である。ほとんど錆と共に剥落し薄くなったり欠損しており正確な長さは不明であるが、木樋に使われたものであろう。

9 は黒漆塗りの木棒の先端に銅の棒先金具の付けられているものである。建具や調度の部分と思われる。棒先金具は側面につなぎ目が見られる。金具に合わせて漆を切り取った刃物の傷が金具の下の棒部に見られる。一旦切り取ったが金具に合わず、漆部分を再度切り直したものであると思われる。その後、金属部分をはめ込んだものであろう。金具と棒部の間には部分的に光沢のある黒色状の物質が付着しており接着剤として塗られていたものであろう。鋸孔などは見られない。

SK429 (遺構Ⅲ-40 図、遺物Ⅳ-24 図)

1は瀬戸・美濃系陶器播鉢でTC-29に分類される。播目は9条1単位で2単位で施される。内面口縁部に明瞭に段を有する。17世紀末から18世紀初頭頃のものか。内面体部上方から口唇部に掛けて赤褐色の付着物あり。ベンガラか。

SK434・437・438 (遺構Ⅲ-40 図、遺物Ⅳ-24 図)

「清閑寺」の刻印を持つ京都・信楽系陶器碗や大椀「泉州麻生」の刻印を持つ塩壺が出土しており、東大編年Ⅳ期(1680年代～1700年代)頃に多く見られるものである。

1は京都・信楽系陶器で高台径の大きい碗である。TD-1-cに分類される。高台内中央部は渦巻き状に削り取られており、その脇に丸に「清閑寺」の刻印あり。灰釉、錆絵染付。

2、3は土器で塩壺である。2は板作り成形。胴部刻印は大椀「泉州麻生」でDZ-51-iに分類される。内面布目。受け部の立ち上がりが高く、断面形は長方形である。本分類の中では古手のものである。3は塩壺の蓋でDZ-00-aに分類される。

SK454 (遺構Ⅲ-41 図、遺物Ⅳ-25 図)

1は土製の土師質丸火鉢である。DZ-31-aに分類される。口縁部欠損。内面は灰が入っていたと思われる部分まで白く変色している。脚は3箇所、付けられている。

2～9は瓦である。2は軒丸瓦である。瓦当部右上から左下にかけて全体のほぼ半分が残存している。瓦当紋様は珠紋が巡る巴紋であり、珠紋は16個巡ると推察される。3～6は軒棧瓦である。3は軒丸部と軒平部はほぼ完形だが、軒平部左端周縁を欠損している。瓦当紋様は、軒丸部が十個の珠紋が巡る巴紋、軒平部が加藤氏の分類(加藤1989)に従えばI Kiに分類される。筒部に鉄片が付着している。4の瓦当部はほぼ完形である。瓦当紋様は、軒丸部が九個の珠紋が巡る巴紋、軒平部が加藤1989分類ではII Kiに分類される。筒部に鉄片が付着している。一部褐色を呈し、被熱した可能性がある。5の軒丸部は完形、軒平部は中央付近から右端まで残存している。瓦当紋様は、軒丸部が八個の珠紋が巡る巴紋、軒平部が加藤1989分類ではIII Kjに分類される。軒平部周縁に鉄片が付着している。6の軒丸部は完形、軒平部は右側のみ残存している。瓦当紋様は、軒丸部が珠紋の無い巴紋、軒平部が加藤1989分類では唐草がK、子葉がjに分類される。7は軒平瓦ないし軒棧瓦である。軒平部中央付近のみ残存している。瓦当紋様は、加藤1989分類では中心飾りがIIに分類される。同じくIIに

分類される2とは異範である。子葉はKに分類される。8、9は鬘斗瓦である。8は紋様部左端のみ残存している。紋様は金子氏の分類(金子1990)に従えば18類に分類される。褐色を呈し、被熱した可能性がある。また漆喰が付着している。9は紋様部中央付近のみ残存している。紋様は金子分類では19類に分類される。一部褐色を呈し、被熱した可能性がある。

SK459 (遺構Ⅲ-41 図、遺物Ⅳ-25 図)

1は瀬戸・美濃系磁器色絵坏。口縁部が外反する端反形でJC-6-bに分類される。内面に赤褐色の付着物あり。

SK463 (遺構Ⅲ-42 図、遺物Ⅳ-25 図)

1は軒丸瓦である。上半部の破片資料だが、詳細な部位は不明である。瓦当紋様は梅鉢紋であり、中心部を破損しているため剣の有無は不明である。加藤氏の分類(加藤1990)に従えばA類に分類される。瓦当面に金箔が貼られている。

SK464 (遺構Ⅲ-42 図、遺物Ⅳ-25 図)

1、2は軒丸瓦である。1は瓦当部左下のみ残存している。瓦当紋様は無剣梅鉢紋で、加藤氏の分類(加藤1990)に従えばA類に分類される。瓦当面に金箔が貼られている。2は瓦当部左下のみ残存している。瓦当紋様は無剣梅鉢紋で、加藤1990分類ではC類に分類される。瓦当面が上下逆あるいは5分の一回転して筒部と接合されており、紋様は上下逆さになっている。3は鬼瓦である。左下部のみ残存している。裏面は浅く肉抜きされており、またヘラ状工具を用いた整形痕跡が全面に残る。

SK465 (遺構Ⅲ-42 図、遺物Ⅳ-25 図)

1、2は軒丸瓦である。1は瓦当部上半のみ残存している。瓦当紋様は幼剣梅鉢紋で、加藤氏の分類(加藤1990)に従えばC類に分類される。2は瓦当部右上半のみ残存している。瓦当紋様は幼剣梅鉢紋で、加藤1990分類ではB類に分類される。3は鬘斗瓦である。紋様部左端のみ残存している。紋様は金子氏の分類(金子1990)に従えば15類に分類される。

SK469 (遺構Ⅲ-45 図、遺物Ⅳ-26～27 図)

1～5は磁器である。1は瀬戸・美濃系磁器丸碗でJC-1-aに分類される。口縁内面帯文あり。見込み松竹梅文。2、3は瀬戸・美濃系磁器坏。2は体部が直線的に開く坏でJC-6-fに分類される。口縁部が外反する。コバ

ルト顔料。3は体部が丸形を呈する坏でJC-6-aに分類される。底部高台内銘有り。4は肥前系皿、蛇ノ目凹形高台の高台高が高い皿でJB-2-iに分類される。見込み環状松竹梅文。内面周縁部蜻唐草文。底部高台内墨書。「月」、「様」以外は不明。5は肥前系蓋物でJB-13に分類される。

6～11は陶器である。6、7は京都・信楽系灰釉灯明皿で3箇所のピン痕がある。櫛目のないものでTD-2-bに分類される。口縁部内外面にべつとりとススが附着している。8は瀬戸・美濃系石皿の大皿でTC-3-cに分類される。幅広高台。9は瀬戸・美濃系播鉢でTC-29に分類される。柿釉。幅広高台。播目は金櫛による15条1単位。胎土は白色である。10は京都・信楽系灰釉油受皿でTD-40-bに分類される。口縁部外面にススが附着しており、油受皿のみで灯明皿として使っていたと思われる。11は行平鍋の蓋でTZ-42-cに分類される。外面トビガンナ。内面鉄釉。摘み縁外周は面取りしてある。

12、13は軒棧瓦である。12は軒丸部と軒平部中央付近から右側が残存している。瓦当紋様は、軒丸部が八個の珠紋が巡る巴紋、軒平瓦が加藤氏の分類（加藤1989）に従えばI Kjに分類される。なお筒部に鉄片が附着している。13は軒丸部と軒平部右側が残存している。瓦当紋様は、軒丸部が十個の珠紋が巡る巴紋、軒平部が「東海式」（金子1996）瓦当紋様になると推察される。

14は金属製品銅合金の網である。1辺0.9cmほどの六角形に編み込んである。用途不明。

SK470（遺構Ⅲ-45図、遺物Ⅳ-27図）

ロクロ成形で筒形の塩壺が出土しており19世紀前半代の遺物である。

1、2は土器である。1はロクロ成形で筒形の塩壺でDZ-51-wに分類される。口縁部が平らで筒形のものや口縁部に鏝を持つものなどいくつかのタイプに分けられるが、口縁部に鏝を持ち底部がやや窄まっているタイプのものである。2は塩壺の蓋である。断面は台形でDZ-00-dに分類される。DZ-51-wの蓋である。

3～6は瓦である。3は軒平瓦である。軒平部左端のみ残存している。瓦当紋様は加藤氏の分類（加藤1989）に従えば、I Kgに分類される。筒部凹面左端には、左端部に沿って沈線が一条走っており、誤って引かれた分割線の可能性がある。4は軒棧瓦である。軒丸部と軒平部周縁右端のみ残存している。瓦当紋様は、軒丸部は九個の珠紋が巡る巴紋である。5は丸瓦である。玉縁から筒部中央付近の右側のみ残存している。凸面には「太」の刻印が確認される。全体的に風化している。6は棧瓦

である。前端部から筒部中央付近まで残存している。左角には切込みが無い。前端側に一部鏝状の付着物が確認される。

SK499（遺構Ⅲ-46図、遺物Ⅳ-28～29図）

ロクロ成形で筒形の塩壺やが出土しており19世紀初頭から明治時代にかけての遺物であろう。

1、2、4～6は瀬戸・美濃系磁器である。1は体部が丸形を呈する碗でJC-1-aに分類される。口唇部口銹。見込みに月と兎が描かれている。高台内銘有り。外面には高台脇のみに模様が描かれている。2は1の蓋である。摘み内銘有り。内面に碗の見込みと同様の月と兎が描かれている。口唇部口銹。3は肥前系端反碗でJB-1-nに分類される。見込みは環状松竹梅文、口縁部内面に帯文様あり。空間を細線書きのいわゆる素描で埋めるような文様構成を持つものは東大編年Ⅷc期以降に多く見られる。4は坏でJC-6に分類される。曲げ物を模したと言われている漆の平椀などからきている形と思われ、胴部中央に細い隆帯が入る。5は皿でJC-2-bに分類される。6は急須でJC-16に分類される。

7～9は陶器。7は京都・信楽系の櫛目のない灰釉灯明皿で目跡が3箇所にみられる。TD-2-bに分類される。口縁部外面にはススが附着している。8は壺でTZ-15に分類される。外面は無釉で自然釉がわずかにみられる。内面は透明釉が掛けられている。9は瀬戸・美濃系灰釉片口でTC-23-bに分類される。片口部欠損。口縁部は内側に折り返しており隆帯が1本入る。

10～16は土器。10～13はロクロ成形、筒形、無印の塩壺でDZ-51-wに分類される。口縁部が平らで筒形のものや口縁部に鏝を持つものなどいくつかのタイプに分けられるが、いずれも口縁部に鏝を持ち底部がやや窄まっているタイプのものである。10、11は器高が高く、底部近くに持ち上げたときの指痕が残る。14～16はロクロ成形、筒形、無印の塩壺（DZ-51-w）の蓋である。14、16は断面逆台形でDZ-00-dに分類される。15は断面長方形でDZ-00-gに分類される。

17、18は人形・玩具・ミニチュアである。17は江戸在地系基石状製品で、DQ-4004に分類される。手びねり。胎土は橙色である。径1.6cmとやや小振り。墨が塗られており、基石の代用品として使われたものであろう。18はミニチュア。把手付きの鉢。江戸在地系土器DQ-2000に分類される。胡粉で下地が塗られその後に明黄緑色で彩色している。型で鉢部分が作られその後に紐状の把手が付けられている。

19は棒先金具。銅に錫でメッキされたものか。棒部

径0.9cm。棒部と先端部は別作りである。棒部には側面につなぎ目が見られ、上下に鋳孔がある。表面は魚々子(ななこ)状になっている。魚々子とは、切先が小さな円状のノミで打ち込んだもので、魚の卵をまき散らしたように見えることから名がつけられた地文様である。

SK500 (遺構Ⅲ-45 図、遺物Ⅳ-29 図)

1は軒丸瓦である。瓦当部の左上半のみ残存している。瓦当紋様は幼剣梅鉢紋で、加藤氏の分類(加藤1989)に従えばC類に分類される。2は軒棧瓦である。軒丸部と軒平部右端のみ残存している。軒丸部は10個の珠紋が巡る巴紋である。軒平部は子葉の先端のみ確認される。3、4は軒棧瓦である。3は軒丸部の瓦当部のみ残存している。紋様は10個の珠紋が巡る巴紋である。筒部は欠損しているが、破面の観察から右棧になると推察される。2の資料より軒丸部の瓦当径が大きい。4は軒平部左端と筒部の一部のみ残存している。左端角に軒棧瓦に特徴的な三角形の平坦面が作出されている。色調は裏面が赤色を呈し、被熱した可能性がある。瓦当紋様は、加藤1989分類では唐草がK、子葉がjに分類される。5～7は軒平瓦あるいは軒棧瓦である。5は軒平部の左端のみ残存している。瓦当紋様は、加藤1989分類では唐草がA、子葉がgに分類される。6は軒平部の左端と、筒部左端側のみ残存している。後端部は欠損している。全体に赤色を呈し、被熱した可能性がある。瓦当紋様は、加藤1989分類では唐草がK、子葉がiに分類される。7は軒平部の中央付近のみ残存している。瓦当紋様は、加藤1989分類ではⅢLjに分類される。8は熨斗瓦である。紋様部右端が残存している。紋様は、金子氏の分類(金子1990)に従えば18類に分類される。なお紋様の異なる資料も確認されるが、小破片であるため図・写真は省略した。9は鬼瓦である。雲状の渦巻き紋が確認される。

SK505 (遺構Ⅲ-46 図、遺物Ⅳ-29～30 図)

1～3は軒丸瓦である。1の瓦当部はほぼ完形だが筒部を欠損している。瓦当紋様は無剣梅鉢紋で、加藤氏の分類(加藤1990)に従えばA類に分類される。瓦当面に金箔が貼られている。2の瓦当部は、紋様部はほぼ完形を留めるものの周縁のうち上半右側が残存するのみである。瓦当紋様は無剣梅鉢紋で、加藤1990分類ではB類に分類される。金箔は確認されない。他の金箔が貼られた軒丸瓦より小型である。3は瓦当部のみ残存している。瓦当紋様は無剣梅鉢紋であり、加藤1989分類ではA類に分類される。紋様部、周縁部といった瓦当面の凸部に金箔が貼られている。4、6～9は軒平瓦と推

察される資料である。4は瓦当部の中央部から左側が残存している。瓦当面に金箔が貼られているが、ほとんど剥落している。瓦当紋様は中心飾りと唐草からなり、中心飾りは加藤氏の分類に類例は無く、唐草はFに分類される。5は軒平瓦である。瓦当部は中央付近から右側のみ残存している。瓦当面に金箔が貼られている。唐草が二対確認され、加藤1989分類ではIに分類される。6は瓦当部の左端のみ残存している。瓦当面に金箔が貼られている。瓦当紋様は唐草の先端のみ確認される。7は瓦当部の中央部から右側が残存している。瓦当部の紋様部分に金箔が貼られている。瓦当紋様は中心飾りと唐草からなり、中心飾りは加藤氏の分類に類例は無く、唐草はIに分類される。8の瓦当部は左端を欠損するがほぼ全形を留めている。瓦当部の紋様部分と周縁に金箔が貼られている。瓦当紋様は中心飾りと唐草からなり、中心飾りは加藤氏の分類に類例は無く、唐草はIに分類される。9の瓦当部は無いが、一端に金箔が貼られていることから端部が露出する軒平瓦と推察される。前後端部と右側面が残存しており、平面形が横長長方形となる小さな規格であることが窺える。10、11は熨斗瓦である。10は左右端が残存している。端部には金箔が貼られており、無紋だがこの面が紋様部になる熨斗瓦だと推察される。11は端部と筒部の一部が残存している。端部には金箔が貼られており、無紋だがこの面が紋様部になる熨斗瓦だと推察される。SD449と接合。12は鬼瓦である。表面の紋様部上面にのみ、赤色の漆を塗布した上で金箔が貼られている。紋様部以外の表面は黒色処理されており、紋様を強調する意図があると推察される。断片的な資料であるため全形は判然としないが、下端および左端(向かって右側)上方は残存している。下端は緩やかな弧を描いて膨らむ。左端は下方に向けて広がりながら湾曲しており、表面左端に配置された帯状の紋様部の右端と平行すると推察される。また裏面から見ると下端、左端は何れも突出する。表面右側には直径約55mmの円盤状の紋様が配置され、表面には1mm未満、側面には3～4mmほどの厚みで粘土状の物質が盛りつけられた痕跡が見られ、その上に漆と金箔が貼られている。金箔瓦のうち軒丸瓦の梅鉢紋と類似しており、また配置から梅鉢紋の左下部と推察される。その左斜め上のえぐれたように弧を描く破損部は、破損部に沿ってわずかな立ち上がりとして上述の粘土状塗布物の痕跡が認められることから、梅鉢紋の左上部が破損し脱落した痕跡と推察される。13は飾り瓦である。30と共通した紋様要素が見られるため同一個体の可能性もあるが、相違点も認められる。下端のみ残存する。裏面は確認できる限り扁平だが、

一部にカキヤブリの痕跡が見られることから突出部が存在したことがうかがえる。表面には円盤状の紋様とそこから左上方に伸びる突帯が残存しており、右上の突帯も残存する。梅鉢紋の右下部および右上に伸びる枝の一部と推察される。表面には厚さ1mm未満、側面には3～4mmほど粘土状の物質が盛りつけられた痕跡が見られ、その上に漆と金箔が貼られている。なお枝には金箔は認められるが粘土状物質は認められない。全体に風化しているが、紋様部以外には一部に黒色処理された痕跡が認められる。14は鬼瓦である。右端部の一部のみ残存している。表面と側面には金箔が貼られている。

SK506 (遺構Ⅲ-46図、遺物Ⅳ-30図)

1は軒丸瓦である。瓦当部はほぼ完形、筒部は玉縁側が欠損している。瓦当紋様は幼剣梅鉢紋であり、加藤氏の分類(加藤1989)に従えばC類に分類される。瓦当部の径は114mmと小形である。

2は鉛玉。径1.2cm。重さ11.5g。径の大きさから火縄銃の弾か。

SK509 (遺構Ⅲ-47図、遺物Ⅳ-30図)

1は渡来銭。北宋銭「治平元寶」。初鑄年は治平元(1064)年。直径22.8mm、内径18.3mm、穴径7.0mm、厚さ1.0mm、重さ1.6g。

SK522 (遺構Ⅲ-47図、遺物Ⅳ-31図)

1は軒丸瓦である。周縁の一部のみ残存している。瓦当面に金箔が貼られている。裏面には筒部がはがれた痕があることから、瓦当部上半の一部であると推察される。2は熨斗瓦である。小破片であり、また薄手のため平瓦と誤認しやすいが、端部には金箔が貼られており、無紋だがこの面が紋様部になる熨斗瓦だと推察される。

SK530 (遺構Ⅲ-48図、遺物Ⅳ-31図)

1は鬼瓦である。左端部のみ残存している。表面は破損しており、紋様は不明である。右側面に金箔が貼られている。

SK535 (遺構Ⅲ-49図、遺物Ⅳ-31図)

1は軒丸瓦である。瓦当部の上半と筒部の一部が残存している。瓦当紋様は無剣梅鉢紋であり、加藤氏の分類(加藤1989)に従えばA類に分類される。瓦当面に金箔が貼られている。凹面には布目が確認される。

SK536 (遺構Ⅲ-49図、遺物Ⅳ-31図)

1は丹波系陶器挿鉢でTK-29に分類される。石英、長石などの小石粒を多く含む。口縁部断面方形。口縁部内面に凹線。外面に指頭圧痕。播目は5条1単位で施される。

SD602 (遺構Ⅲ-50図、遺物Ⅳ-31図)

1は熨斗瓦である。紋様部中央から左側の一部のみ残存している。紋様は唐草のみ確認され、金子氏の分類(金子1990)に従えば15類に分類されると推察される。

SP605 (遺構Ⅲ-50図、遺物Ⅳ-31図)

1は熨斗瓦である。中央付近左側の一部のみ残存している。紋様は、金子氏の分類(金子1990)に従えば16類に分類される。

SK607 (遺構Ⅲ-51図、遺物Ⅳ-31図)

1は熨斗瓦である。紋様部中央から左側が残存している。金子氏の分類(金子1990)に従えば18類に分類される。この他、SK607からは軒丸瓦、平瓦ないし棧瓦の破片が出土している。

SK622 (遺構Ⅲ-52図、遺物Ⅳ-31～34図)

幕末から明治時代前半の遺物である。

1～11は磁器である。1は肥前系筒形碗でJB-1-1に分類される。見込み松竹梅文。口縁内四方襷文。2は瀬戸・美濃系端反碗でJC-1-dに分類される。幅広高台。3は肥前系端反碗でJB-6-bに分類される。色絵(黄、赤、緑)。鳳凰と龍。高台内銘有り。4は瀬戸・美濃系端反碗でJC-6-bに分類される。コバルト。底部高台内銘有り。5は極薄手の碗でJC-6-dに分類される。上絵。金彩。鉛ガラスに呉須を混ぜ上絵を描いている。鳥と草。高台上に模様あり。6は九谷系碗でJN-6に分類される。明治期以降盛んに焼かれる九谷の赤絵。細密な線で描かれた赤絵が特徴的である。赤絵の上に金彩が施される。口唇部に赤色で線。体部下方の帯状に赤色で塗られている中央に金線が引かれている。高台内銘「九谷」。幅広高台。7は肥前系染付皿で高台断面がシャープな「U」字状を呈す。JB-2-dに分類される。口縁部は輪花に成形され1枚絵、非常に丁寧である。口唇部口鏽。高台内銘有り二重角枠内渦福。他の遺物の年代観とは異なる。高台内には目跡が5箇所見られる。8、9は爛徳利でJC-4に分類される。底部墨書。8は「拾本之内」、9は「六ノ十本」。10は肥前系染付鉢でJB-5に分類される。地模様は墨弾きで描かれ、体部外面から内面に模様が繋がっている。千鳥文。11は肥前系銚子でJB-27-aに分類される。型

作り。脚3足。

12～21は陶器である。12は京都・信楽系灰釉灯明上皿で見込みには3箇所のピン痕がある。櫛目のないのでTD-2bに分類される。口縁部内外面にべっとりとススが付着している。13は瀬戸・美濃系灰釉皿でTC-2に分類される。口縁部周縁にススが付着しており、被熱部分は釉が剥離している。断面が小さい三角形状の高台を持つ。14は壺・甕でTZ-15に分類される。広口壺。内面灰釉。口唇部、底部に鉄泥を掛けている。15、16は常滑系藻掛け急須でTG-16に分類される。煎茶に用いられる小振りの急須。白泥。藻を器に巻き付けて焼く。海水が釉の替わりとなって赤く発色している。底部墨書「上□介 九十之内四」のように見えるが不明。16は蓋。17、18は両手鍋でTZ-33に分類される。錆釉。焼締められ薄い。17は内外面に釉。外面は体部上半のみ釉が掛けられている。底部は、内側が一段窪められ高台が作られている。底部際に1条の沈線刻みが巡る。取っ手が2箇所に付く。18は蓋。内外面に釉。摘み部分は一段窪められており、その中に紐状摘みが付されている。沈線が5本巡る。19は白土染付の土瓶でTZ-34bに分類される。底部には直接火に掛けたススの痕が残る。20は京都・信楽系灰釉油受皿でTD-40-bに分類される。21は小振りの行平鍋でTZ-42に分類される。胎土は黄燈色。鉛釉。把手欠損。

22～25は土器。22は植木鉢でDZ-21-aに分類される。23は油受皿でDZ-40-dに分類される。24、25はロクロ成形、筒形、無印の塩壺でDZ-51-wに分類される。口縁部が平らで筒形のものや口縁部に鏝を持つものなどいくつかのタイプに分けられるが、いずれも口縁部に鏝を持ち底部がやや窄まっているタイプのものである。このタイプは高さに幅がある。

26、27は熨斗瓦である。26は紋様部中央付近から左側の一部が残存している。紋様は金子氏の分類（金子1990）に従えば17類に分類される。27は紋様部中央付近から右側の一部が残存している。紋様は金子分類では18類に分類されるが、上下逆に施紋されている。

28は鉛ガラスの燭台。ホヤ。無色透明。劣化により銀化、白濁している。明治時代中期頃のものか。

SK624（遺構Ⅲ-52図、遺物Ⅳ-34～37図）

底部に「纏印」の墨書のある鉢や「加本」の釘書きが付されている皿が出土している。幕末から明治時代に掛けての遺物である。

1～9は磁器である。1、2は瀬戸・美濃系端反碗でJC-1-dに分類される。1は口縁内面帯文。2は幅広高台。

SK622の2と類似。3は体部が直線的に開く坏でJC-6-fに分類される。高台内銘有り。4、5は肥前系染付皿で高台断面の形状が「U」字状を呈し、口縁部が輪花に成形している。JB-2-qに分類される。見込み松竹梅文。内面周縁部は縮み唐草文。底部銘「成化年製」。釘書き「加本」。「本」は藩主が主に生活をする場である御本宅を意味すると思われる。6は瀬戸・美濃系爛徳利、JC-4に分類される。7は肥前系白磁鉢、8は肥前系染付鉢である。7はJB-5に分類される。8は蛇ノ目凹形高台でJB-5-dに分類される。内面はカキツバタか。外面にシノギが入る。底部に墨書あり。「纏印」、「御筆洗」。「纏印」は第14代藩主前田慶寧のお印とされている。慶寧は天保元（1830）年に生まれ、慶応二（1866）年に藩主になっている。母は溶姫。御殿下記念館地点49号遺構（東京大学埋蔵文化財調査室1990）から「纏印」と書かれたこね鉢や餌入れが出土している。「御筆洗」と書かれており、墨や絵具の筆を洗っていたのであろう。9はそば猪口でJC-7に分類される。底部は輪高台、無釉。見込みに文様あり。小振りである。底部に墨書「祢左女」（ねざめ）。酒肴を入れて野遊びなどにさげて行く手軽な重箱のことを「寝覚め提げ重」と言うので、これに入れるための器かもしれない。

10～12は陶器である。10は瀬戸・美濃系皿でTC-2に分類される。再興織部。底部が円く窪んでいる。11は瓶。12はインク瓶。産地は不明。コルク栓。刻印なし。肩までで35mlの容量があったので、1oz（1オンス＝28.41ml）瓶であろう。胎土は灰色で粒子が細かい。褐釉が掛けられている。頸部は短く、口縁は折り返し口縁で注口はない。底部は縁をわずかに削っている。底部釉。丸善などの24oz、12oz瓶は本遺跡からも出土しているが、1ozの陶器製インク瓶は本遺跡では今まで出土していない（大貫2005）。

13は土器である。磨きかわらけでDZ-2-jに分類される。胎土は橙色で、内外面を「三つ星」状に黒く還元焰焼成している。雲土器（くもかわらけ）とも呼ばれ、祝いの席などに用いられるかわらけである。14は御神酒徳利。瓶子形。DZ-11に分類される。胎土は橙色で内面には鉛釉が掛けられている。

15～30は瓦である。15、16は軒丸瓦である。15は瓦当部上半の一部が残存している。瓦当紋様は珠紋の巡る巴紋だと推察される。16の瓦当部は下半四分の一を欠損するのみで全形の窺える資料である。瓦当紋様は梅鉢紋に分類される。上述の1よりも小型であり、異なる屋根に葺かれる瓦だと推察される。17は軒平瓦である。軒平部は全体が残存している。加藤氏の分類（加藤

1989) に従えば I Bc に分類される。18～20 は軒棧瓦である。18 は軒平部が残存している。瓦当紋様は、加藤 1989 分類では IV Ki に分類される。赤褐色を呈することから、被熱した可能性がある。19 は軒平部左半分が残存している。瓦当紋様は先端の丸まる唐草が二対配置されることが確認される。加藤 1989 分類には見られないが、唐草は K に分類される。20 は軒丸部右半分が残存している。瓦当紋様は珠紋が巡る巴紋に分類される。赤褐色を呈することから、被熱した可能性がある。21～24 は軒平瓦ないし軒棧瓦である。21 は軒平部左右端を欠損するが、紋様の全形は確認される。瓦当紋様は、加藤 1989 分類では III 1Lj に分類される。22 は軒平部中央付近が残存している。瓦当紋様は、加藤 1989 分類では中心飾りは I に分類される。色調は赤褐色を呈し、被熱した可能性がある。23 は軒平部中央付近と左の唐草が残存している。瓦当紋様は、加藤 1989 分類では中心飾りは II、唐草は L に分類される。24 は軒平部左端が残存している。瓦当紋様は、加藤 1989 分類では子葉は I に分類される。25～28 は鬘斗瓦である。25 は紋様部の中心付近が残存している。紋様は金子氏の分類（金子 1990）によれば 15 類に分類される。26 は紋様部右側が残存している。金子分類では 15 類に分類される。なお上下逆に施紋されている。27 は紋様部左端が残存している。金子分類では 16 類に分類される。28 は紋様部左端が残存している。金子分類では 16 類に分類される。なお上述の 13 類と紋様は細部で異なる。29 は冠瓦である。鬘斗瓦を積み上げた棟の上に並べる瓦で、筒部が平瓦の形態になっているものである。後端部(帯状部)中央付近と右端の一部が残存している。帯状部と筒部の接合部にはカキヤブリが施されている。30 は鬼瓦である。左下の端部のみ残存している。釘孔が三個確認され、うち左よりの 2 つは釘が詰まった状態である。

31～33 は金属製品である。銅合金製。31 は、キセル。32 は襖の引き手の中央部分。草花(萩?)の模様が付されている。外枠欠損。33 は柄か。

34～38 はガラスである。34 は鉛ガラスの燭台。無色透明。明治時代中期頃のものか。ガラスのホヤ。劣化により銀化、白濁している。35 は広口瓶。底の中心が盛り上がっている。36 は瓶か?「□ ST&CE □ □ EAUX □」とエンボスで付されている。上下にカットが入っている。37 はビールやワインの瓶である。コルク栓。色は暗緑色不透明。肩の張るボルドー形。内部には縦長の気泡が多く見られる。肩の付け根には皺が見られる。底部のキックは深く、中心部からずれ偏っている。底部もやや楕円形になって、偏った片側のヒ-

ルにガラスが溜まったようになっている。底部には「R. COOPER & CO PORTOBELLO」のエンボスが付けられている。PORTOBELLO はイギリスの EDINBURGH の近くにある町で、陶器やガラスの工場などで知られている。1874～1900 年の期間に生産されたと、されている。38 はビールやワインの瓶である。コルク栓。色は緑色透明。肩の張るボルドー形。内部には縦長の気泡が多く見られる。肩の付け根や首には皺や筋が見られる。底部のキックは浅い。首から口縁にかけて紙の貼られていた痕跡が残る。

SK625 (遺構Ⅲ-52 図、遺物Ⅳ-37～38 図)

1、2 は瀬戸・美濃系磁器。1 は薄手半球碗。高台が高い。幼剣梅鉢紋。2 は端反形坏で JC-6-b に分類される。コバルト。高台内銘有り。「大明□化年製」。SK622 の 5 と類似。

3、4 は軒丸瓦である。3 の瓦当部はほぼ全形が窺え、筒部も一部残存している。瓦当紋様は梅鉢紋に分類される。筒部凹面には、横方向のコビキ痕、布目の転写、棒状工具による縦方向の押し引き、瓦当部寄りには瓦当部との接合をよくするためのカキヤブリが順に重なり合っただけ認められる。また筒部凸面には金属器を用いた格子目状の刻み付けがある。その意味するところは判然とせず、類例を待ちたい。4 は瓦当部上部の一部が残存している。紋様は珠紋が確認され、巴紋と推察されるが、完全に欠損しているため定かではない。筒部凹面にはコビキ痕、棒状工具による縦方向の押し引きの他、爪痕のような刻みが数箇所確認される。製作にまつわる痕跡であろうか、類例を待ちたい。5 は軒平瓦である。瓦当部の右端が残存している。瓦当紋様は子葉と唐草のみ確認され、加藤氏の分類（加藤 1989）に従えば唐草が B、子葉が c に分類される。6 は軒棧瓦である。軒丸部と軒平部の右端が残存している。瓦当紋様は軒丸部が巴紋、軒平部は子葉の先端しか確認されないため判然としない。7 は軒平瓦ないし軒平瓦である。軒平部中央付近が残存している。瓦当紋様は、加藤 1989 分類では中心飾りが IV、唐草が G に分類される。8 は丸瓦である。体部が残存しており、前端部、玉縁部は欠損している。中央からやや左にずれた所に丸の一つ引きの刻印が押されている。凹面には横方向のコビキ痕、布目の転写、棒状工具による縦方向の押し引きが順に重なって確認される。9 は谷丸瓦である。前半部が残存している。前端部右角は大きく斜めに切断され、切断部は整形されているが凹凸の残る雑な整形である。玉縁部は欠損している。体部玉縁寄りに釘孔が設けられている。凹面には横方向のコビキ痕、布目の転写、

棒状工具による縦方向の押し引きが順に重なって確認される。10～14は罫斗瓦である。10は紋様部中央付近が残存している。金子分類では15類-2に分類される。11は紋様部中央付近から左側が残存している。金子分類では16類に分類される。12の紋様部中央付近は欠損しているが、中央付近から右側は端部まで残存している。金子分類では17類に分類される。13は紋様部中央付近は欠損しているが、中央付近から左側が残存している。金子分類では18類に分類される。14は紋様部中央付近から右側が残存している。金子分類では19類に分類される。なお上下逆に施紋されている。

15～21は金属製品である。銅合金製。15は襖の引手。組み合わせ式になっている。襖に留めるための釘穴が向かい合わせの位置で2箇所に見られる。16～21は釘。16、17は頭が半球形。鋏。18、19は頭径の大きい円形。20、21は頭径の小さい円形。

22～25はガラス製品である。22、23は鉛ガラスの燭台のホヤ。色は無色透明。劣化により銀化、白濁している。明治時代中期頃のものか。22は先端部分。23は付け根に近い部分。24、25はビールやワインの瓶である。コルク栓。肩の張るボルドー形。表面や内部には気泡が多く見られる。肩の付け根や首には皺や筋が見られる。底部のキックは深い。24の色は暗緑色透明。口縁部に皺、欠け、筋などが見られる。

SD626 (遺構Ⅲ-51図、遺物Ⅳ-39図)

SD626からは軒丸瓦、軒平瓦ないし軒棧瓦、罫斗瓦が出土している。1は軒丸瓦である。瓦当部のみ残存している。上部周縁は欠損している。瓦当紋様は幼剣梅鉢紋で、加藤氏の分類(加藤1990)に従えばC類に分類される。2は罫斗瓦である。右端部のみ紋様側のみ残存している。紋様は、金子氏の分類(金子1990)に従えば15類に分類される。

SK632 (遺構Ⅲ-53図、遺物Ⅳ-39図)

1、2は罫斗瓦である。1は紋様側右端のみ残存している。薄手である。紋様は金子氏の分類(金子1990)に従えば8類に分類される。2は紋様側中央左側のみ残存している。紋様は金子分類では15類に分類される。

SK632、SK634、SK635 (遺構Ⅲ-53図、遺物Ⅳ-39図)

1は軒丸瓦である。瓦当部右側から下半部が残存している。紋様は梅鉢紋に分類される。2は罫斗瓦である。紋様側中央付近右側のみ残存している。紋様は金子氏の分類(金子1990)に従えば15類に分類される。

SK640、SK641・642・643

(遺構Ⅲ-55図、遺物Ⅳ-39～43図)

肥前系磁器は含まれず、中国磁器、瀬戸・美濃系陶器天目碗が出土している。銭は渡来銭6枚、(古)寛永通寶1枚が出土している。17世紀前半代の遺物であろう。

1は明末～清初の中国景德鎮窯青花芙蓉手鹿文皿でJA1-2に分類される。畳付は斜めに削られ砂が付着している。高台裏にはカンナ痕が見られる。型打ちは見られず後出のものであろう。2は瀬戸・美濃系陶器天目碗でTC-1-aに分類される。口縁部の立ち上がりが長く、古い段階であると言えよう。

3～19は土器である。3～18はロクロ成形、19は手づくねのかわらけである。3～18はDZ-2-aに分類される。DZ-2-aはいわゆる江戸式とされている前段階の様々な種類のかかわりを含む。3～17は2群に分けられる。3～11は底部糸切り痕は右回転である。底部から体部に掛けての立ち上がりが滑らかで、口縁部はやや外反している。10は他と比べ大きく外反している。胎土は橙色。11は黄橙色。12は底部欠損のため不明であるがこちらの一群であろう。13～17は底部離れ糸切り。内面立ち上がり際に窪みがみられる。13、14、16には外面立ち上がり際に腰折れ状痕がみられるが部分的で、15、17には見られない。胎土は鈍い黄橙色。いわゆる江戸式かわらけの要素を多く持つ。18は体部下方に丸みを帯び、内面立ち上がり際に窪みがみられる。底部は厚く、糸切りは不鮮明である。19は手づくね白色系かわらけでDZ-2-gに分類される。胎土は淡黄色。白色小礫を含む。口縁部に調整痕有り。外面指頭圧痕は不明瞭。底部の蓆状痕は不明。底部は外から内に向けて二次的に穿孔されている。内面見込みにススが付着しており、蠟燭を立てた跡か。同様の手づくね白色系かわらけは本遺跡の本地点以外の17世紀代の遺構からも散見される。小林が①～④類に分類を行っており、①類に相当する(小林2020)。また、長佐古により胎土の分析が行われ国元である金沢からの搬入品とされる(長佐古2020)。

20～25は瓦である。20、21は軒丸瓦である。20の瓦当部はほぼ完形だが、筒部と、筒部が接合する瓦当周縁上部が欠損している。紋様部には金箔が貼られている。紋様は無剣梅鉢紋で、加藤氏の分類(加藤1990)に従えばA類に分類される。21は瓦当部の中央付近から下半のみ残存している。瓦当面には金箔が貼られている。瓦当紋様は無剣梅鉢紋で、加藤1990分類ではA類に分類される。22、23は軒平瓦である。22は瓦当部

中央付近のみ残存している。瓦当面には金箔が貼られているが、ほとんど剥落している。瓦当紋様は、加藤 1989 分類では中心飾りは該当するものが無く、唐草は J に分類される。23 は瓦当部左側のみ残存している。瓦当面には金箔が貼られているが、ほとんど剥落している。瓦当紋様は中心飾りと左右二対の唐草のみで構成されており、中心飾りは欠損しているが、唐草は加藤 1989 分類では J に分類される。24 は軒丸瓦である。瓦当部右上半のみ残存している。瓦当紋様は梅鉢紋で、加藤 1990 分類では B 類に分類される。25 は軒平瓦ないし軒棧瓦である。軒平部中央付近のみ残存している。瓦当紋様は、加藤 1989 分類では中心飾りは該当するものが無く、唐草は A に分類される。

26～32 は銅銭である。渡来銭 6 枚、(古)寛永通寶 1 枚が出土している。26～31 は渡来銭。26 は唐銭。「軋元重寶」。初鑄年は唐 758 年。4 分 1 欠損。27 は北宋銭。「祥符通寶」。初鑄年は北宋 1009 年。字が潰れ輪郭のみ識別できる。28 は北宋銭「元豊通寶」。初鑄年は北宋 1078 年。29 は北宋銭「紹聖元寶」。初鑄年は北宋 1094 年。字が潰れ輪郭のみ識別できる。30 は北宋銭。「(聖)宋元(寶)」?。初鑄年は北宋 1101 年。残存状態は悪く、ほぼ形をとどめていない。31 は北宋銭。「政和通寶」。初鑄年は北宋 1111 年。中心の孔は、ほぼ円くなっている。32 は(古)寛永通寶。

33～40 は金属製品。銅合金製。33、34 はキセルの雁首。33 の火皿は潰れてしまっている。脂返しの湾曲が大きく、補強帯を有する。首部が長い。34 の火皿は器高の高い碗形。脂返しの湾曲が大きい。35～40 は釘である。35～37 は頭巻きの鉄釘。1 寸～2 寸の小型のものである。38～40 は釘である。1 寸以下のものばかりである。

41～43 石製品。41 は硯。粘板岩。四隅が丸く削り出されている。42 は砥石。斜めにすり減っており、持ち砥として使われたものであろう。43 は先端に切り込みが入ったようになっている。用途不明。

SK646 (遺構Ⅲ -54 図、遺物Ⅳ -43 図)

1～4 は軒丸瓦である。1 は瓦当部のみ残存しており、周縁上部は欠損している。瓦当紋様は無剣梅鉢紋であり、加藤氏の分類(加藤 1990)に従えば A 類に分類される。SK646 からは数種類の軒丸瓦が出土しているが、この資料が最も大きい。2 は瓦当部上半左側のみ残存している。瓦当紋様は梅鉢紋で、加藤 1990 分類では A 類に分類される。3 は瓦当部上半左側の一部のみ残存している。瓦当紋様は梅鉢紋で、加藤 1990 分類では C 類に分類さ

れる。なお紋様はややずれて筒部と接合されている。4 は瓦当部上半の一部のみ残存している。瓦当紋様は珠紋の巡る巴紋である。5 は軒平瓦である。瓦当部中央付近のみ残存している。瓦当部が逆三角形を呈する滴水瓦になると推察される。瓦当紋様は無剣梅鉢紋を中心飾りとし、左右に唐草が配置される。

SK659 (遺構Ⅲ -56 図、遺物Ⅳ -43 図)

1 は平瓦である。中央付近の一部のみ残存している。一般的な平瓦と異なり、横断面形は半円ではなく扁平で、端部が上方に反り上がる形態を示す。凹面には布目、凸面には横方向に走る溝が形成されている。

遺構外 (遺物Ⅳ -43～47 図)

1～4 は洋食器である。1 はカップ&ソーサーのカップである。プリント絵付け。ツバメの模様と共に「YENRAKUKEN」。裏印は「MEITO CHINA」、 「NAGOYA SEITOSHO」と王冠のマーク。大正 11(1922)年から昭和 12(1937)年頃の国内向け製品。2、3 はカップ&ソーサーのソーサーである。プリント画付け。2 の裏印は「TOYOTOKIKAISHA」、「JAPAN」と OCW を組み合わせたマーク。OCW は Oriental Ceramic Works の略。大正 8～10(1919～21)年頃の国内向け製品。3 の裏印「東洋陶器會社」「TOYOTOKIKAISHA」と OCW を組み合わせたマーク。大正 10(1921)年から昭和 16(1941)年頃の国内向け製品。4 は洋皿。プリント画付け。草花の模様。径 23.0cm。裏印は月桂樹に「R.C.」。昭和 10(1935)年～18(1943)年頃にインド・インドネシア向けに輸出された製品。

5、6 は軒丸瓦である。5 は瓦当部の左上半のみ残存している。瓦当紋様は梅鉢紋だが、中心部の剣の有無は破損により不明である。加藤氏の分類(加藤 1990)に従えば A 類に分類される。瓦当面に金箔が確認される。6 は紋様部の一部のみ残存している。瓦当紋様は無剣梅鉢紋であり、加藤 1990 分類では A 類に分類される。瓦当面に金箔が確認される。なお裏面筒部が完全に破損しているため上下の向きは定かでない。7 は軒平瓦である。軒平部左半分のみ残存しており、中心飾りは確認されない。瓦当面の一部に金箔が確認される。8～15 は軒丸瓦である。8 の瓦当部は上端を欠損するもののほぼ完形である。筒部は欠損している。瓦当紋様は無剣梅鉢紋で、加藤 1990 分類では C 類に該当する。9 は瓦当部左半分のみ残存している。瓦当紋様は無剣梅鉢紋であり、加藤 1990 分類では C 類に該当する。10 は瓦当部下半の一部

のみ残存している。紋様は梅鉢紋になると推察され、加藤 1990 分類では C 類に分類される。11 は瓦当部の左下部のみ残存している。瓦当紋様は幼剣梅鉢紋で、加藤 1990 分類では C 類に該当する。12 は瓦当部は完形、筒部は欠損している。瓦当紋様は幼剣梅鉢紋であり、加藤 1990 分類では C 類に該当する。13 は瓦当部の左側と右下のみ残存している。瓦当紋様は上下逆、あるいはずれて接合されている。瓦当紋様は幼剣梅鉢紋であり、加藤 1990 分類では C 類に該当する。14 の瓦当部はほぼ完形だが筒部の大半を欠損している。瓦当紋様は 16 個の珠紋が巡る巴紋である。加藤 1990 分類では B 類に該当する。15 は筒部左端と玉縁左角を欠損するもののほぼ完形である。やや小形で、筒部玉縁よりに凸面側から穿孔した釘孔が設けられる。瓦当紋様は巴紋であり、加藤 1990 分類では A 類に該当する。

16～22 は軒棧瓦である。16 の軒丸部は完形、軒平部は左端の子葉から端までを欠損するがほぼ完形である。瓦当文様は、軒丸部が十個の珠紋が巡る巴紋、軒平部が加藤氏の分類（加藤 1989）に従えばⅢ Kj に分類される。17 は軒丸部と軒平部中央付近から左側、筒部右端の一部が残存している。軒丸部瓦当紋様は珠紋が十個巡る巴紋、軒平部瓦当紋様は江戸式・大坂式折衷紋様であり、加藤 1989 分類では唐草が K、子葉が j に分類される。18 の軒丸部は完形、軒平部は右端付近のみ残存している。瓦当紋様は、軒丸部が九個の珠紋が巡る巴紋、軒平部が加藤 1989 分類では唐草が K、子葉が j に分類される。褐色を呈し、被熱した可能性がある。また瓦当部下端に鉄片が付着している。19 の軒丸部は完形、軒平部は右端のみ残存している。瓦当紋様は、軒丸部が珠紋の無い巴紋、軒平部が加藤 1989 分類では j に分類される。20 は軒丸部のみ残存している。瓦当紋様は、十一個の珠紋が巡る巴紋である。裏面の筒部破面から右棧になると推察される。21 は軒丸部瓦当部のみ残存している。瓦当紋様は 8 個の珠紋が巡る巴紋である。裏面には筒部がはがれた痕跡が確認され、観察から右棧だと推察される。22 は軒平部中央付近から右端まで残存している。軒丸部は破損しているが、右棧であることがわかる。軒平部瓦当紋様は、加藤 1989 分類では唐草が L、子葉が j に分類される。23～40 は軒平瓦ないし軒棧瓦である。23 は軒平部紋様部がほぼ残存している。瓦当文様は、加藤 1989 分類では I Aa に分類される。24 は軒平部中央付近から左端までのみ残存している。瓦当文様は、加藤 1989 分類では I Kj に分類される。25 は軒平部中央付近から右側付近のみ残存している。瓦当文様は、加藤 1989 分類では中心飾りがⅡ、唐草が K に分類

される。26 の軒平部はほぼ完形だが、左右周縁から先は欠損している。瓦当紋様は、加藤 1989 分類ではⅢ Lj に分類される。27 は軒平部中央付近から左側端まで残存している。瓦当紋様は、加藤 1989 分類ではⅢ Lj に分類される。28 は軒平部中央付近から左側のみ残存している。瓦当文様は、加藤 1989 分類ではⅢ Lj に分類される。瓦当面の一部に鉄錆が付着している。29 は軒平部中央付近のみ残存している。瓦当文様は、加藤 1989 分類では中心飾りがⅢ、唐草が K に分類される。赤褐色を呈し、被熱した可能性がある。30 は軒平部中央付近の左側のみ残存している。瓦当文様は、加藤 1989 分類では中心飾りがⅢ、唐草が K に分類される。31 は軒平部中央付近から右側のみ残存している。瓦当文様は、加藤 1989 分類では中心飾りがⅣ、唐草が F に分類される。32 は軒平部中央付近の上部と筒部の一部のみ残存している。瓦当紋様は江戸式・大坂式折衷紋様である。唐草、子葉は欠損しているため不明である。33 は瓦当部中央付近から右側のみ残存している。瓦当紋様は、中心飾りが加藤 1989 分類には該当するものがないが、唐草は F に分類される。34 は軒平部中央付近から左側のみ残存している。瓦当文様は、加藤 1989 分類では唐草が K、子葉が g に分類される。35 は軒平部左側の一部のみ残存している。瓦当文様は、加藤 1989 分類では唐草が K、子葉が i に分類される。36 は軒平部左端のみ残存している。瓦当文様は、加藤 1989 分類では唐草が K、子葉が j に分類される。37 は軒平部中央付近右側のみ残存している。瓦当文様は、加藤 1989 分類では唐草が L、子葉が j に分類される。38 は軒平部右側の一部のみ残存している。瓦当文様は、加藤 1989 分類では唐草が L、子葉が i に分類される。39 は軒平部右側の一部のみ残存している。瓦当文様は、加藤 1989 分類では唐草が F に分類される。40 の瓦当部は破損し、紋様は判別できない。筒部は後端部が破損しているが、残存部だけで 478mm を測り、一般的な軒平瓦、軒棧瓦の筒部より明らかに長い。また後端部寄りに釘孔が設けられる。41 は丸瓦である。玉縁部を一部欠損するもののほぼ完形をとどめている。筒部凸面中央付近に縦長の変色部が見られ、重ね焼きの痕跡だと推察される。

42 は平瓦ないし棧瓦である。「やまに庄 二十」の刻印が確認される。43 は棧瓦である。甚の刻印が確認される。44～49 は平瓦ないし棧瓦である。44 は八角形の枠内に「庄」、45 は「○ト」、46 は「○」、47 は「○V」、48 は「和梅」、49 は「川濱石」の刻印が確認される。

50～56 は鬘斗瓦である。50 は紋様部右端のみ残存している。紋様は陽刻されており、加藤 1990 分類では

2類ないし4類になると推察される。凹面には6本一組の条線が2組、横方向に施される。51は紋様部中央付近から左側の一部が残存している。紋様は、金子氏の分類（金子1990）に従えば15類に分類される。52は紋様部側左端の一部のみ残存している。紋様は、加藤1990分類では15類に分類される。53は中央付近から左端まで残存している。紋様は、金子分類では15類-1に分類される。凹面には6本一組の条線が交差して施される。54は紋様部側の左端が残存している。紋様は、金子分類では19類に分類される。紋様部左端に漆喰が付着している。55は紋様部中央付近のみ残存している。紋様は、金子分類では15類に分類される。56は中央部分の筒部のみ残存している。凹面には条線が交差して施される。破損のため条線一組の本数は判然としない。57は鬼瓦である。雲形をしており、渦巻状の部分のみ残存している。裏側は中空になっている。一部に鉄片が付着している。58は海鼠瓦である。破損により全形は不明だが、紋様部と片方の端部は残存している。紋様は無剣梅鉢紋であり、加藤1990軒丸瓦分類ではA類に分類される。紋様部には一部金箔が確認される。端部には左右に一つずつ固定用の孔が設けられている。59は破片資料のため全形を窺うことが出来ないが、形状は薄手の板状になると推察される。タイルに類した機能を持つものと推察される。

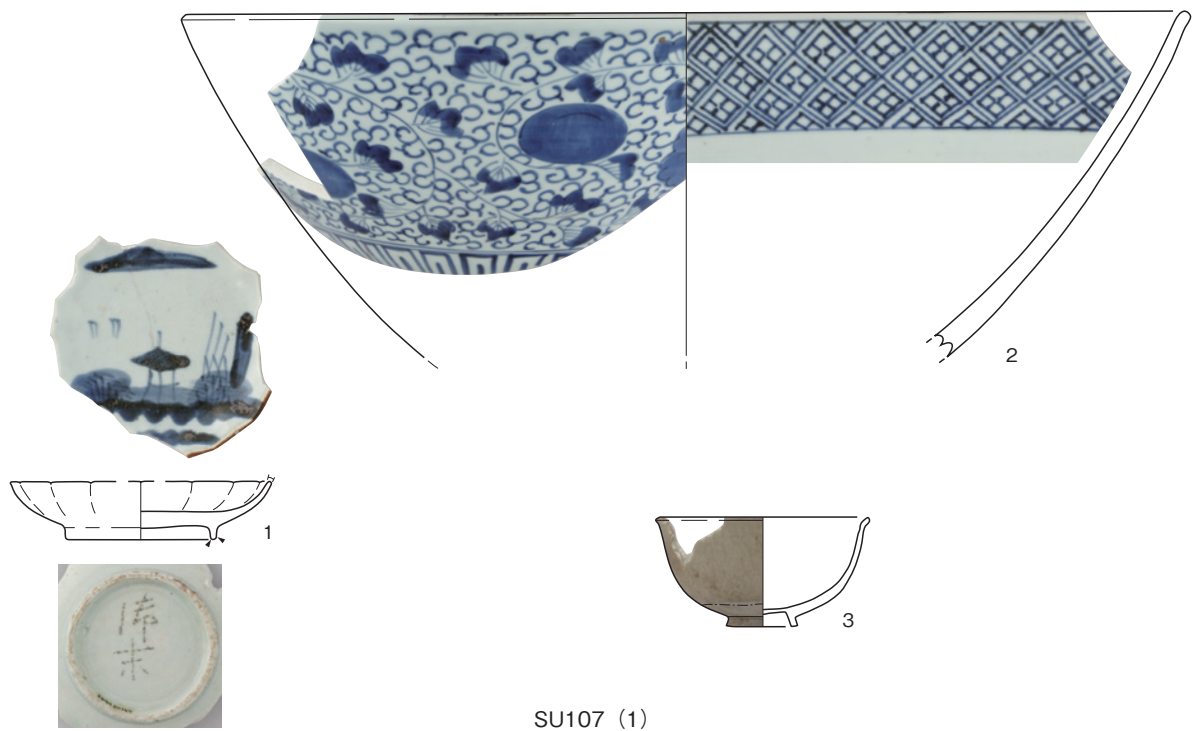
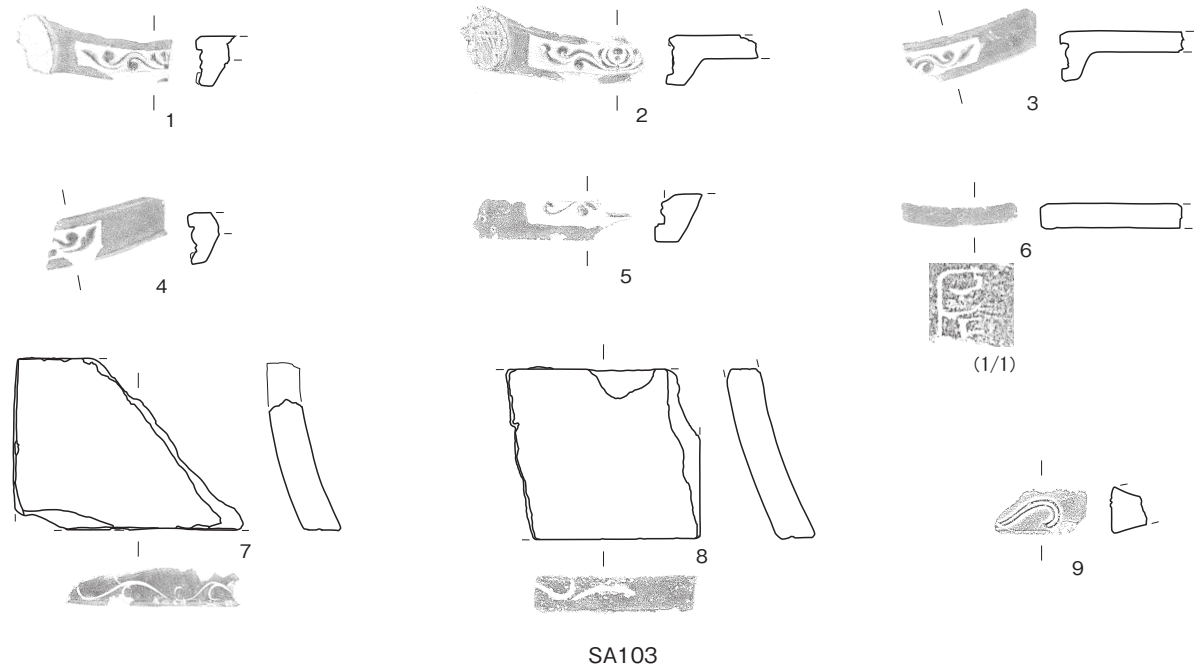
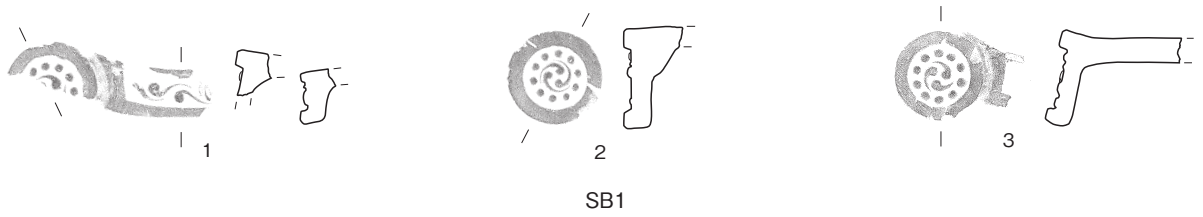
60～64は瓦質。瓦として屋根に葺かれていたものかもしれないが用途不明。胎土はかなりボソボソしており粗い。東大構内遺跡の山上会館地点からは同様のものが出土している。

65は磁器。万年炭？素焼きで中空。片側に5箇所、反対側に4箇所孔が開いている。豆炭や木炭の間に入れて使う助燃剤で火力を長持ちさせる国策炭の一種と思われる。本製品は被熱して赤変し、胎土も堅く焼締められたようになっており、使用済みのものであろう。第二次大戦中に作られた国策炭「助燃器ほのお炭」は9個入り95銭で販売されていた。また、統制番号が付されているものもある。

66はガラス製のビール瓶。大日本麦酒株式会社(1906～1949年)。肩にDNBを組み合わせたマークと「□□ADE」のエンボスが付けられ、胴下半には「DAINIPPON BREWERY Co. LTD」、底面には星形の真ん中に丸と点、「3」、「11」のエンボス。茶色透明。胴部内にほんのわずか気泡が見られる。胴部左右に成形の型痕が見られる。底部の数字は製造番号と思われる。

接合資料（遺物IV-48図）

1～4は本地点の肥前系磁器と医学部附属病院入院棟A地点C2層出土の肥前系磁器が接合した資料である。1は端反形坏でJB-6-bに分類される。被熱して表面の釉が溶けている。H9・10グリット出土。入院棟A地点の報告には非掲載。2は八角形の皿でJB-2-dに分類される。底部欠損。体部型打成形。口縁部は輪花を形成する。口唇部口錆。内面雪輪文。外面牡丹唐草文。被熱している。包含層出土。入院棟A地点IV-309図671と揃いである。3は瑠璃釉大平鉢でJB-3-bに分類される。高台高は21mm。被熱して表面の釉が溶けて発泡している。SR22出土。入院棟A地点IV-315図698と揃いである。4は水注でJB-27に分類される。筒形で、注口は胴部との接合部のみ残る。注口周辺に鋸歯文。被熱して表面の釉が溶けて発泡している。遺構外出土。入院棟A地点の報告に非掲載。



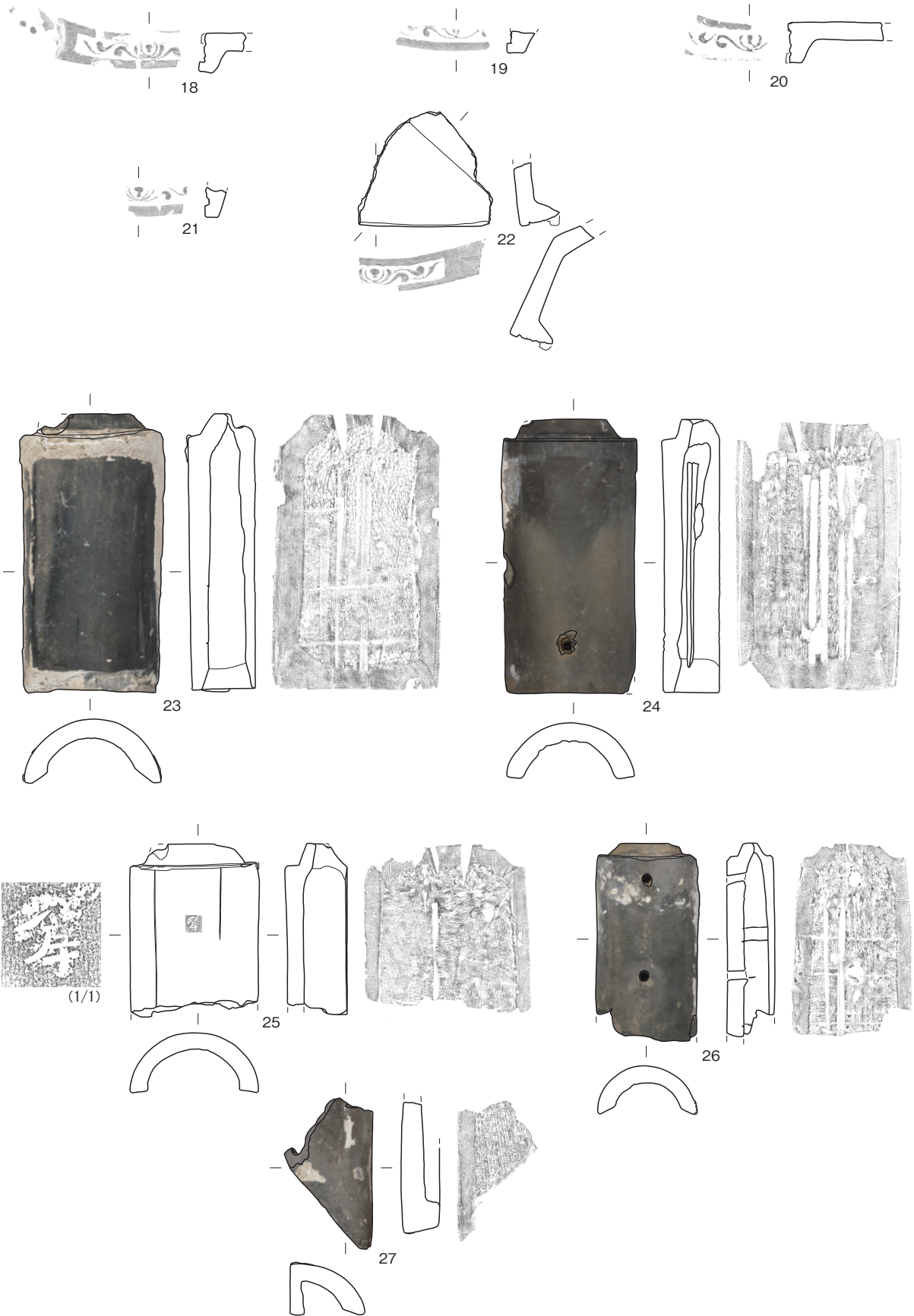
IV-1 図 SB1、SA103、SU107 (1) 出土遺物



IV-2 図 SU107 (2) 出土遺物



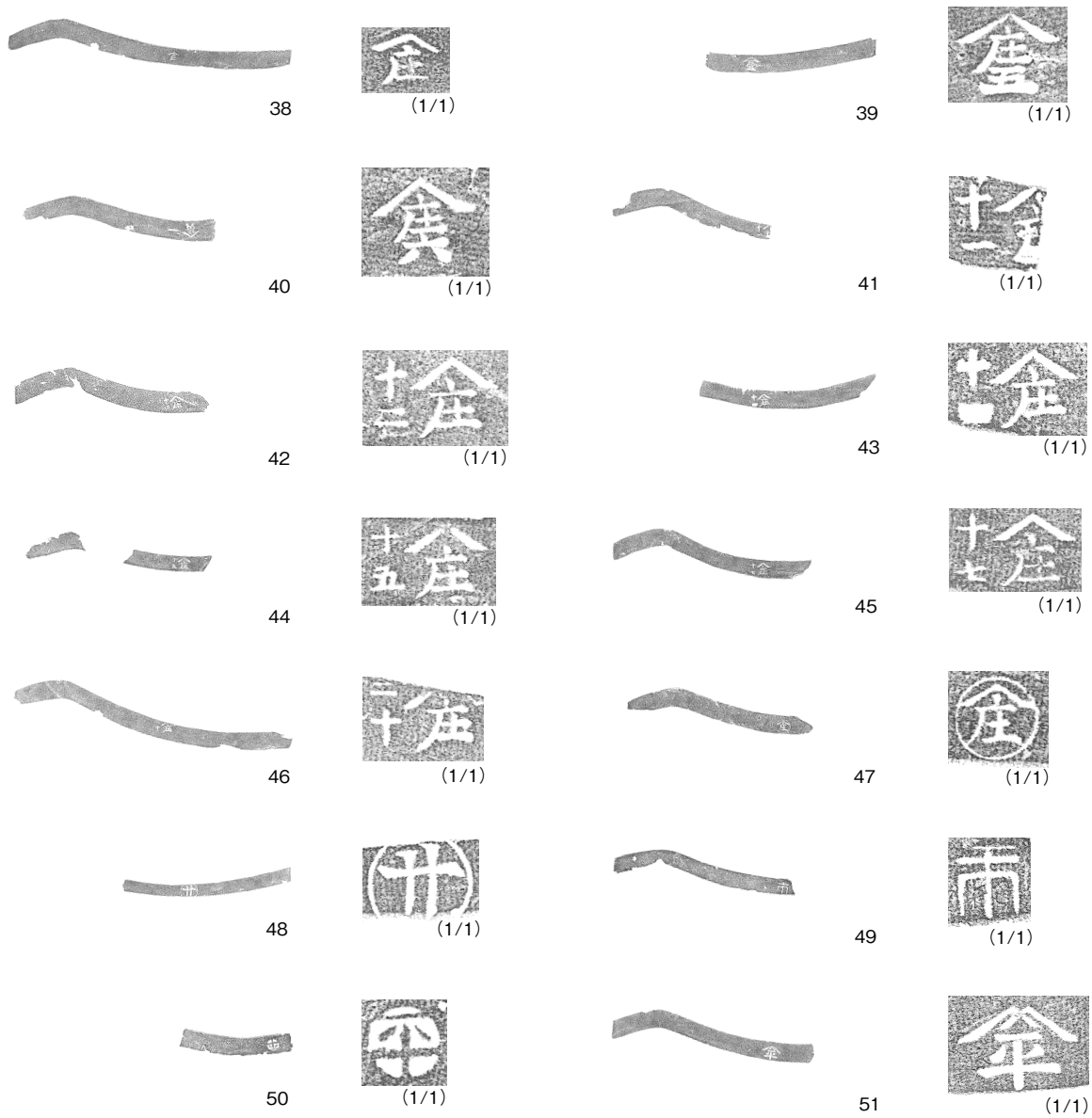
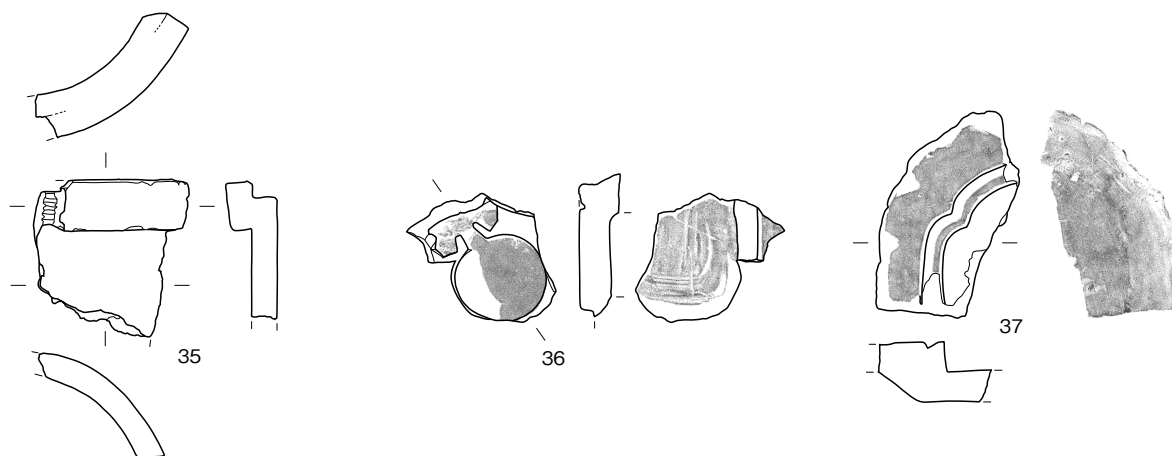
IV-3 図 SU107 (3) 出土遺物



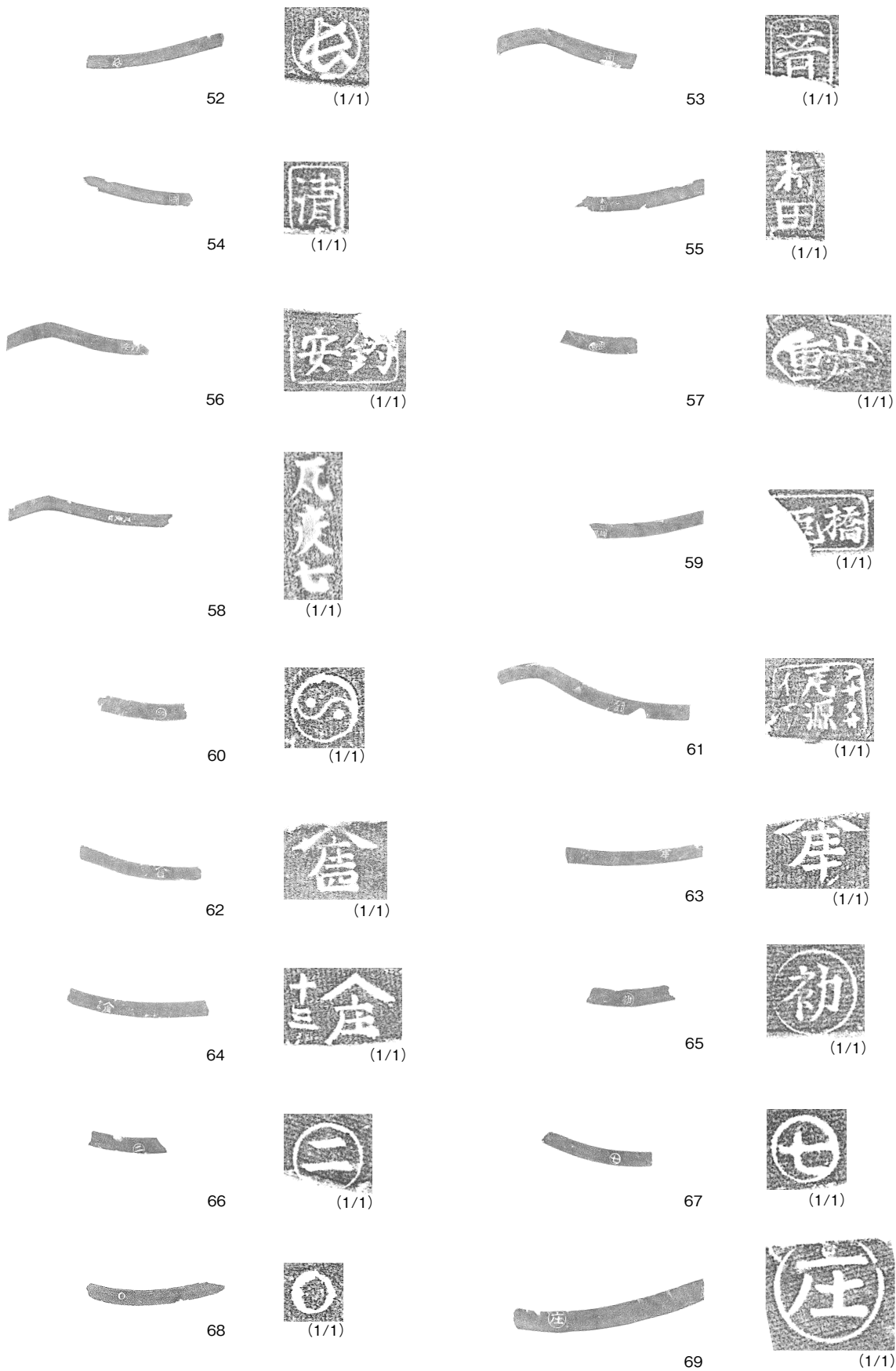
IV-4 図 SU107 (4) 出土遺物



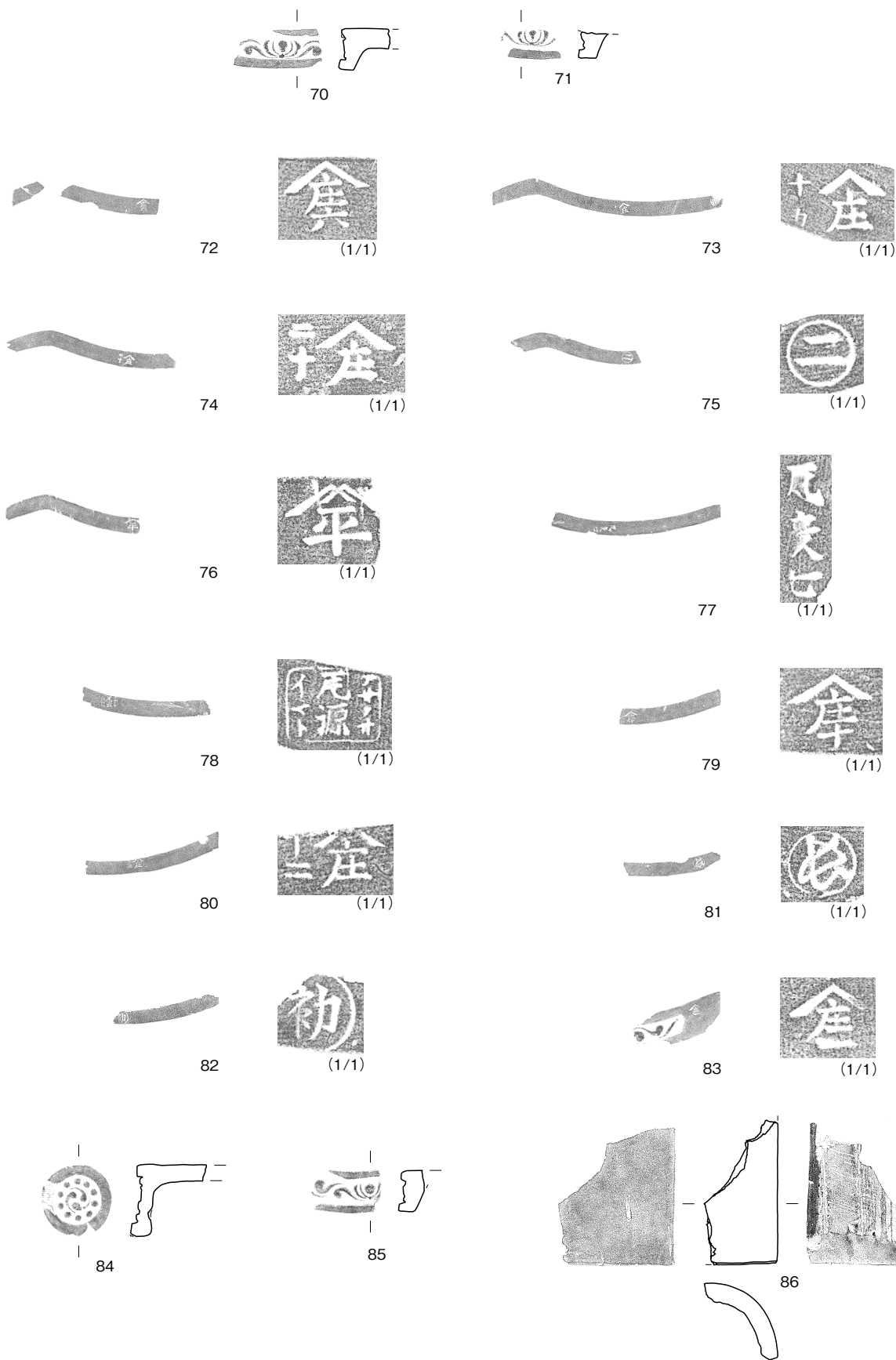
IV-5 図 SU107 (5) 出土遺物



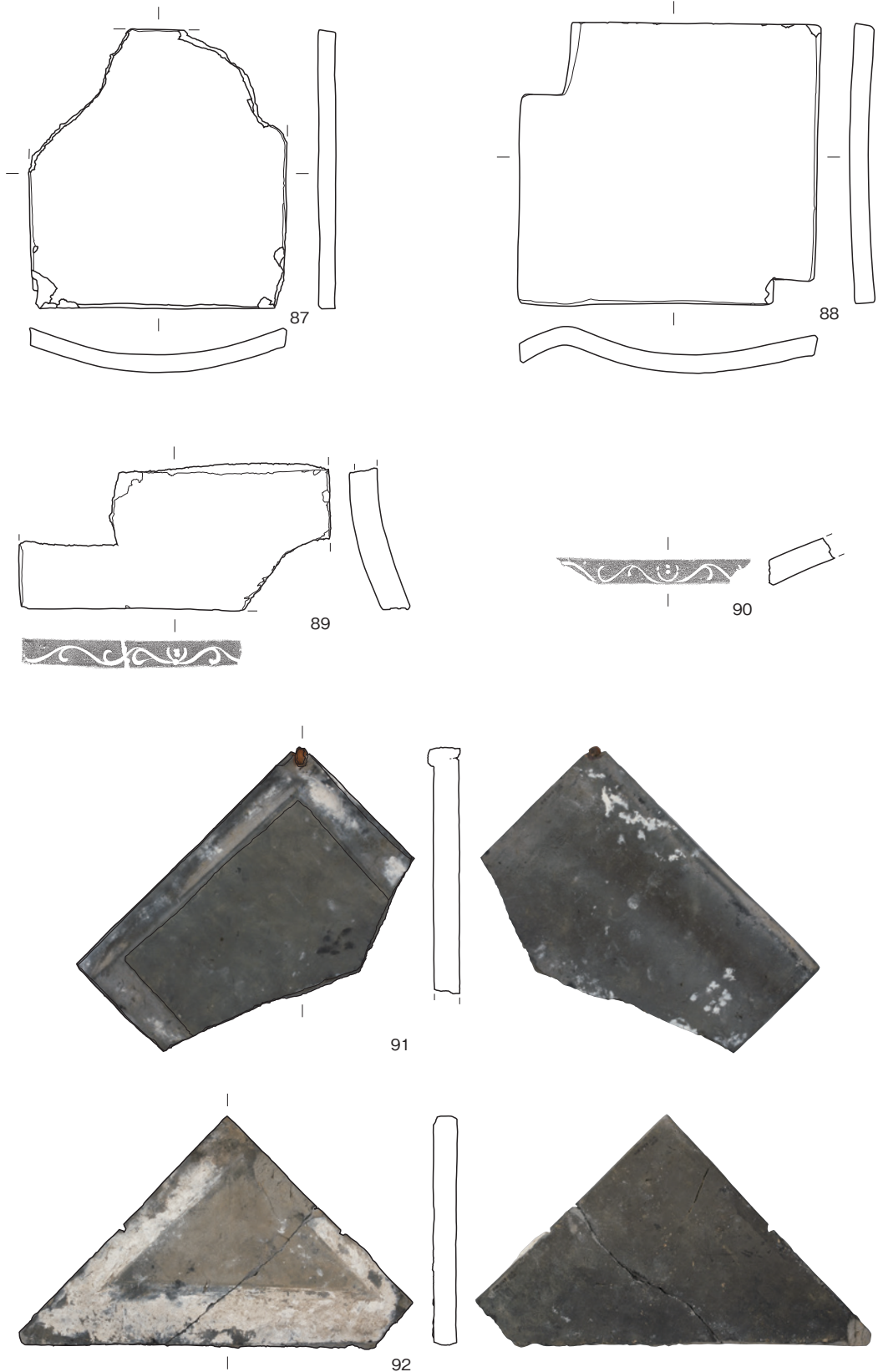
IV-6 図 SU107 (6) 出土遺物



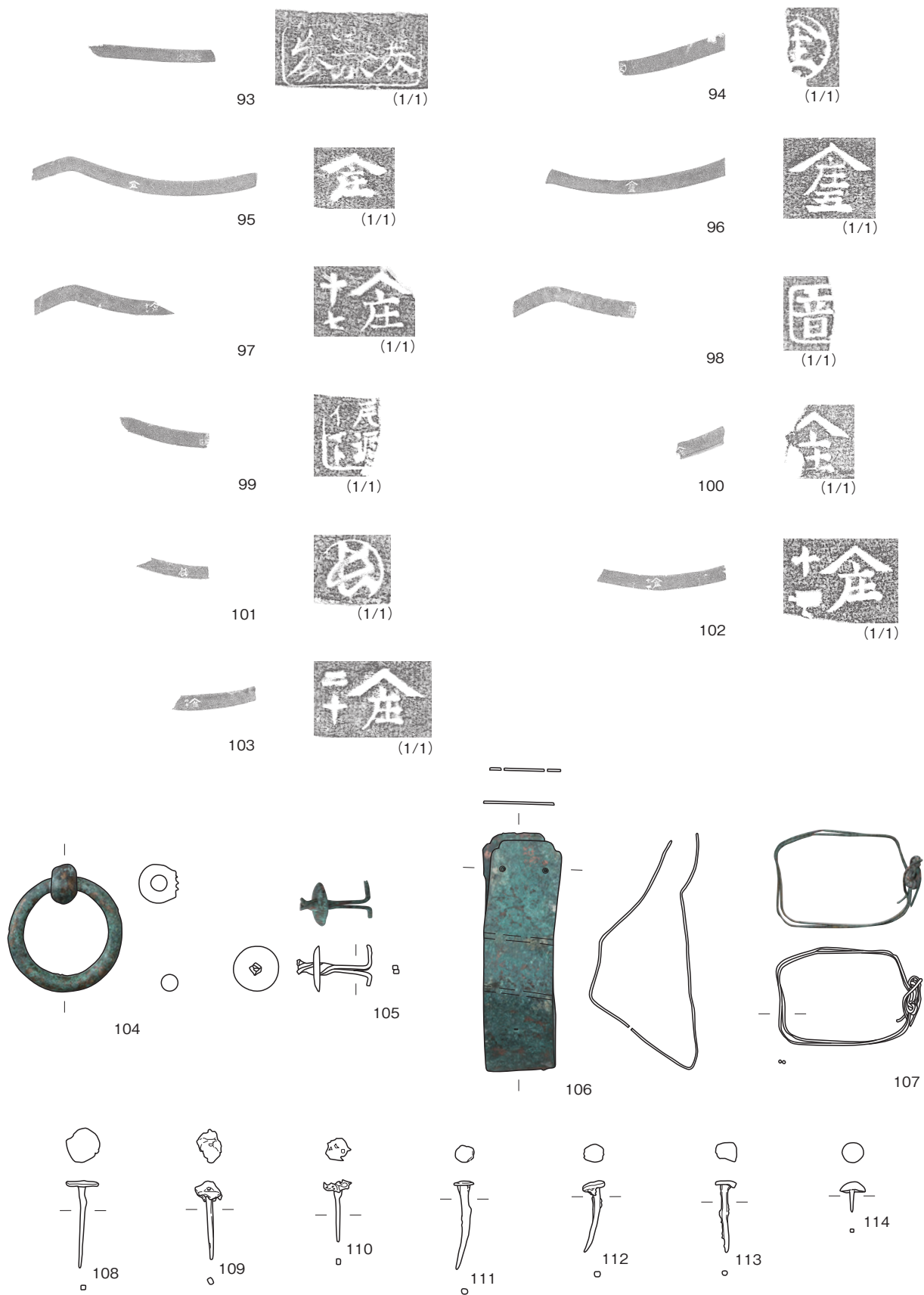
IV-7 図 SU107 (7) 出土遺物



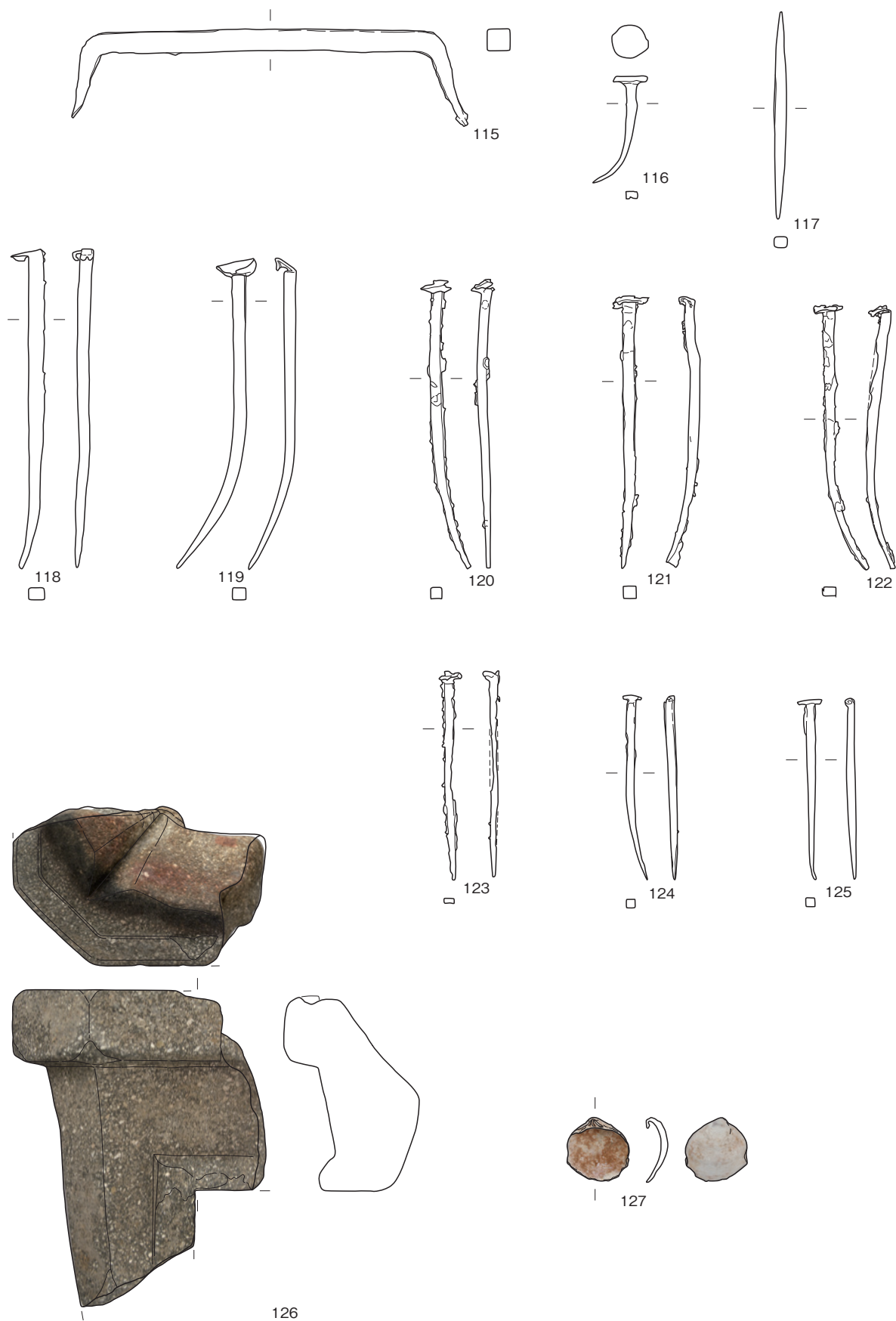
IV-8 圖 SU107 (8) 出土遺物



IV-9 図 SU107 (9) 出土遺物



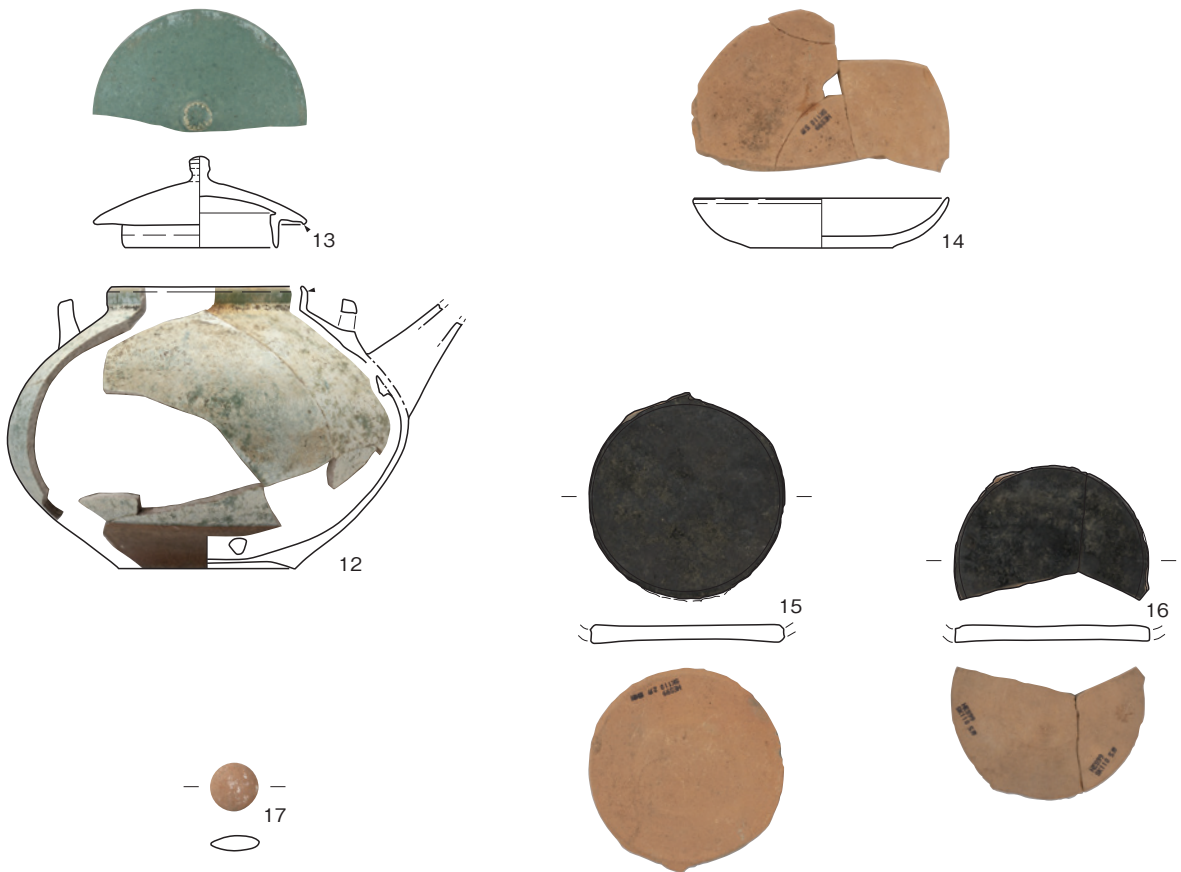
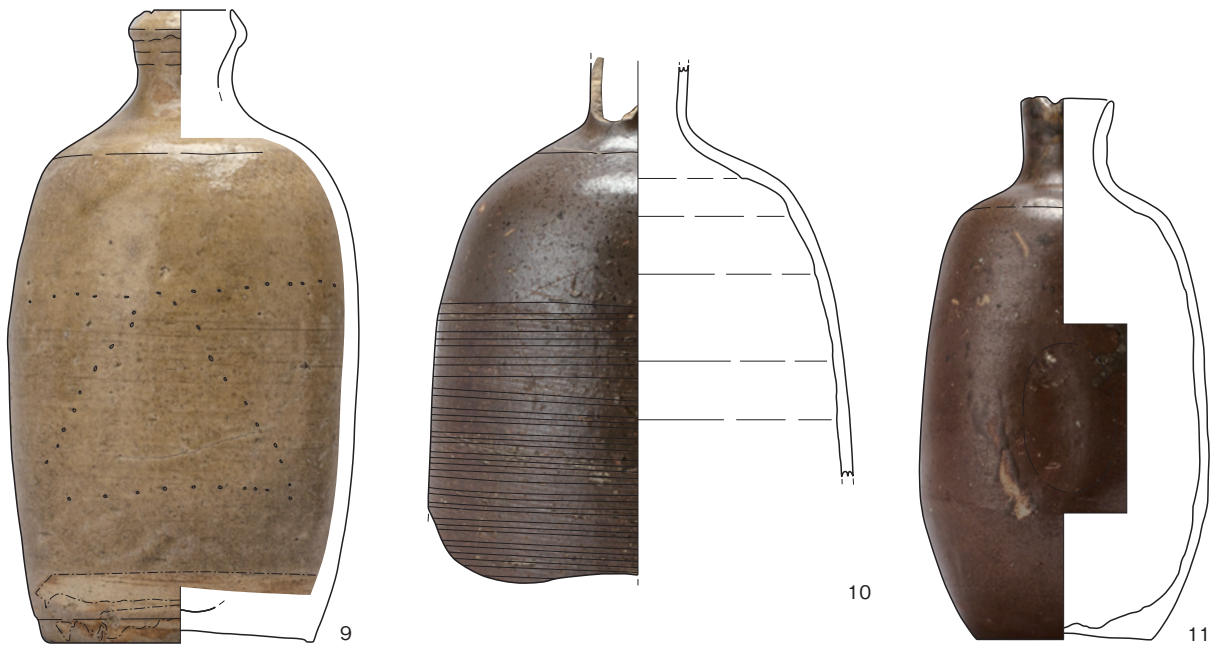
IV-10 圖 SU107 (10) 出土遺物



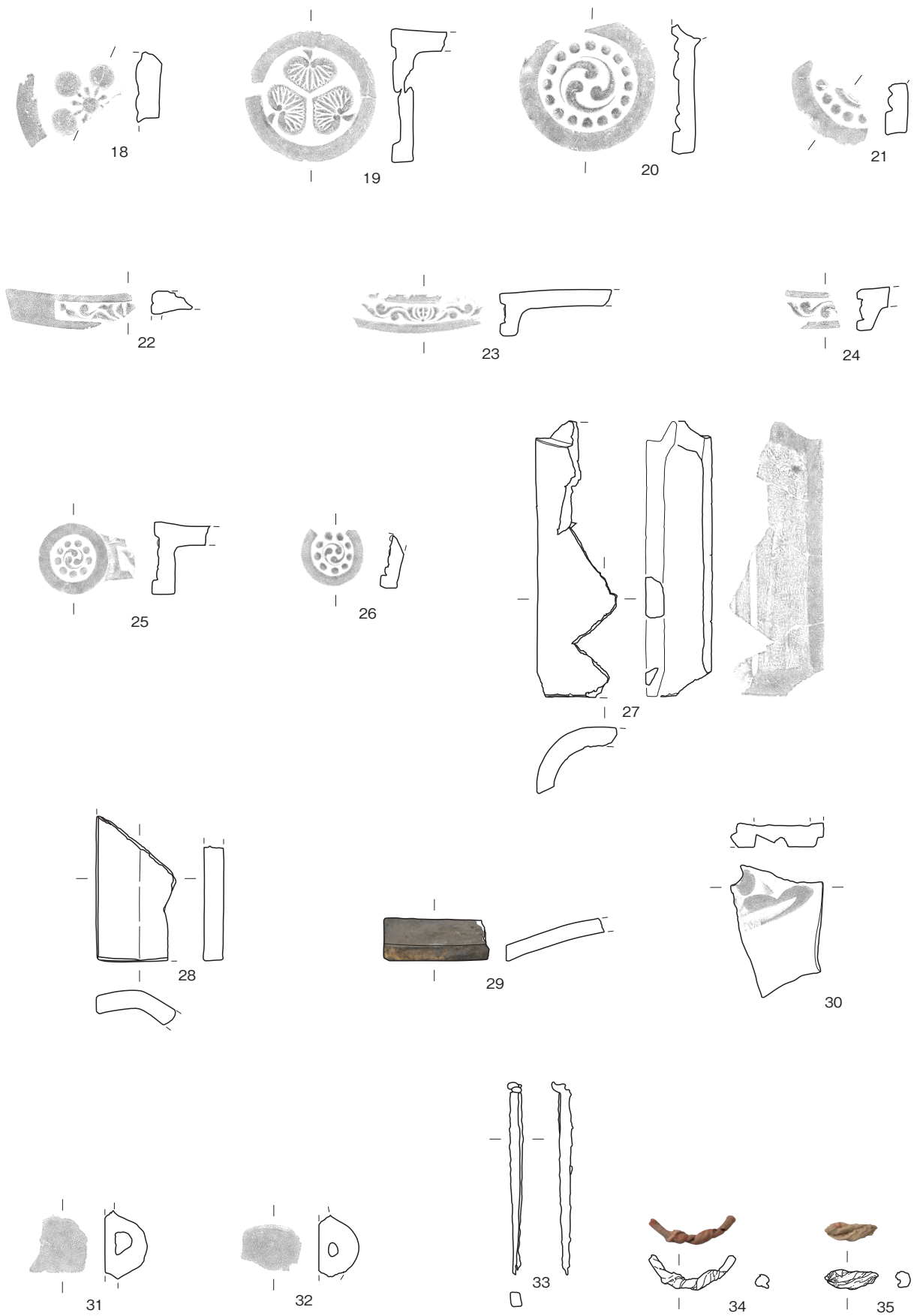
IV-11 图 SU107 (11) 出土遺物



IV-12 図 SK110 (1) 出土遺物



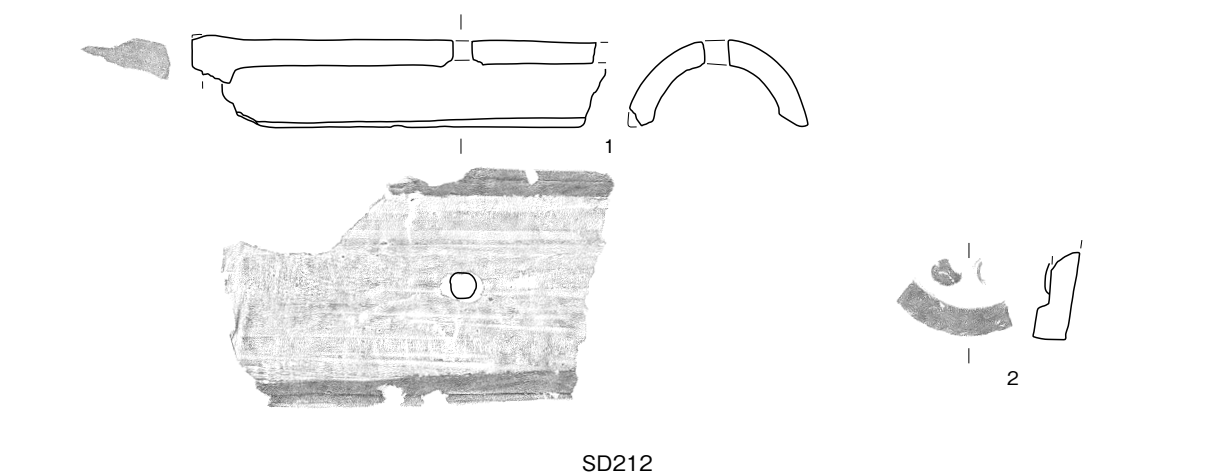
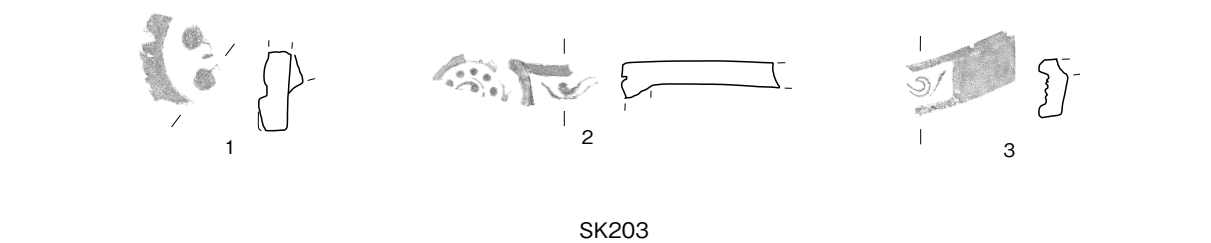
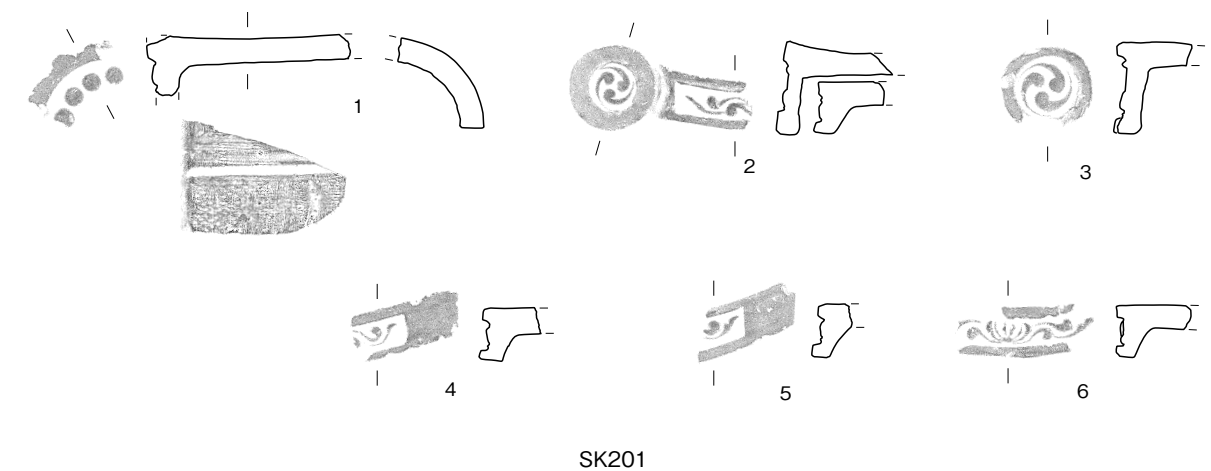
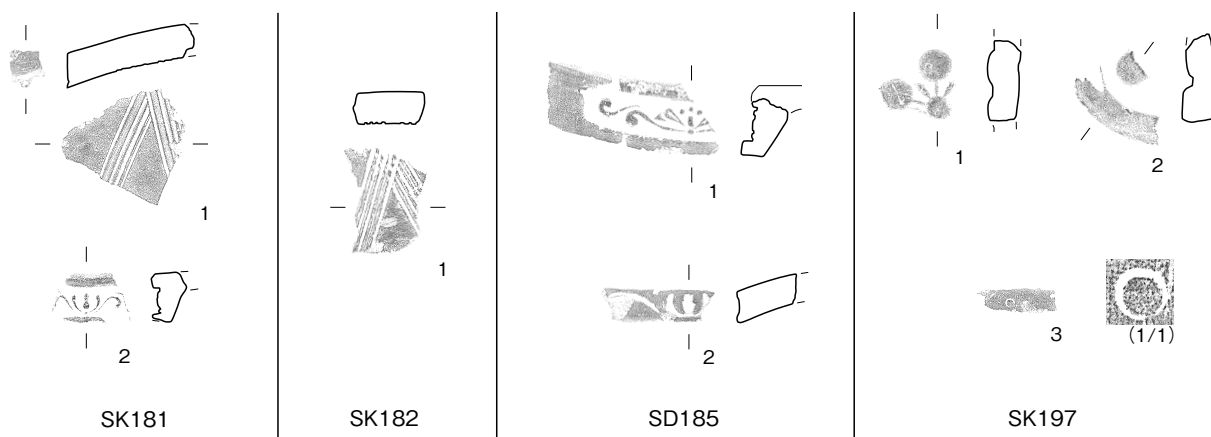
IV-13 図 SK110 (2) 出土遺物



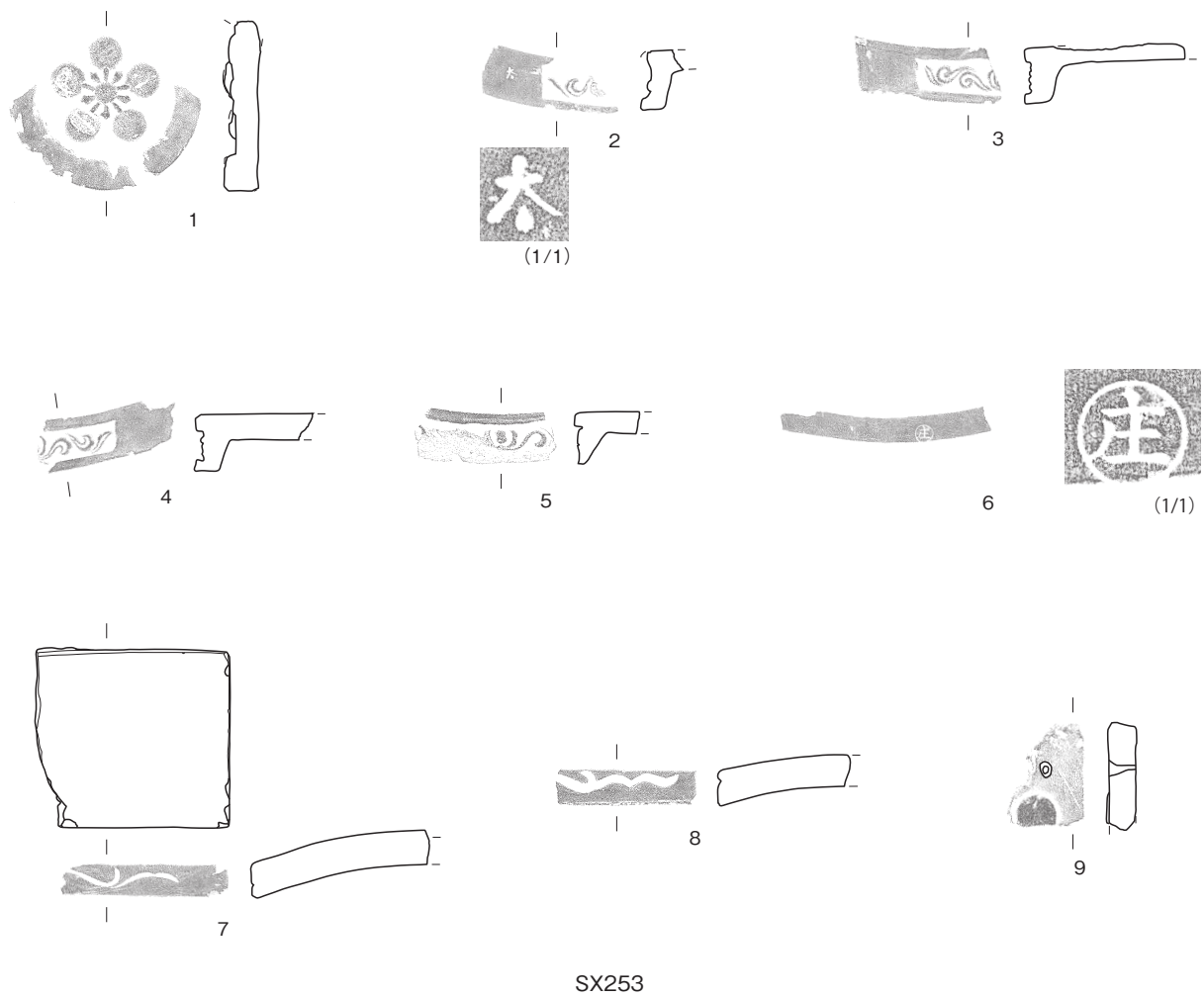
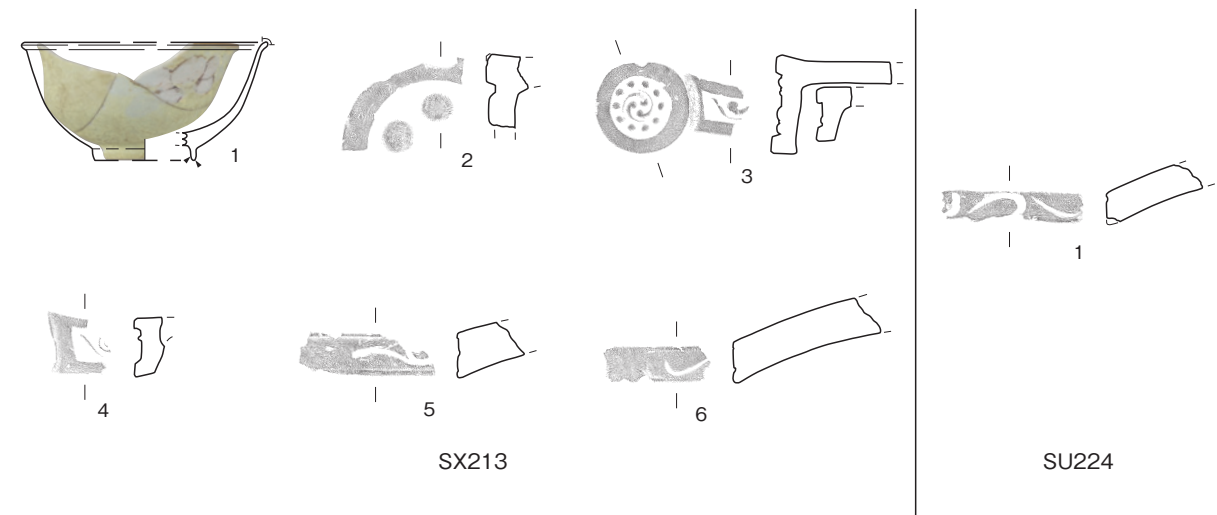
IV-14 図 SK110 (3) 出土遺物



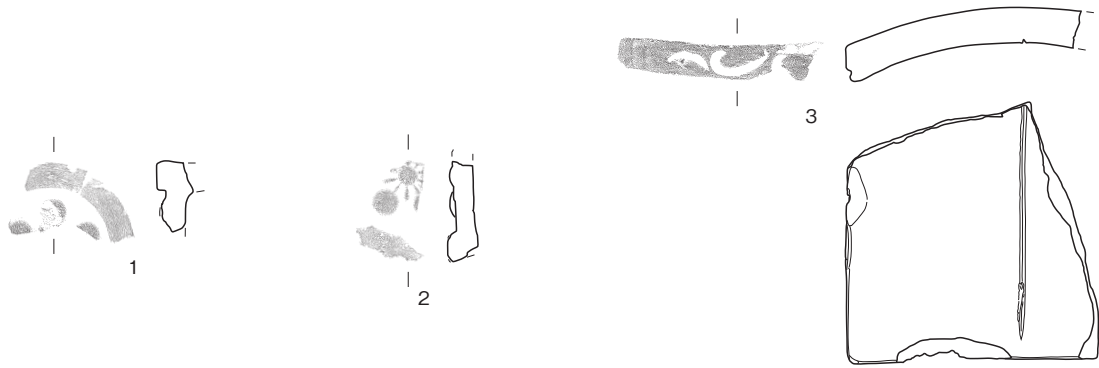
IV-15 図 SU123、SK134、SK140、SD141、SK147、SK153、SK156、SK162、SK179 出土遺物



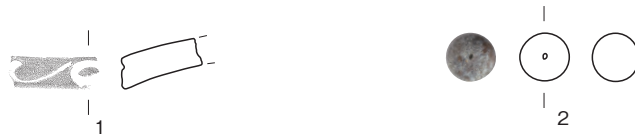
IV-16 圖 SK181、SK182、SD185、SK197、SK201、SK203、SD212 出土遺物



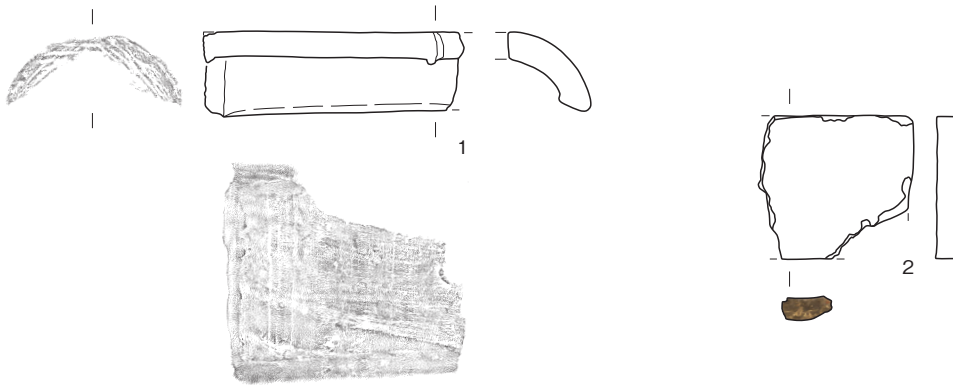
IV-17 図 SX213、SU224、SX253 出土遺物



SK268



SK269



SP276

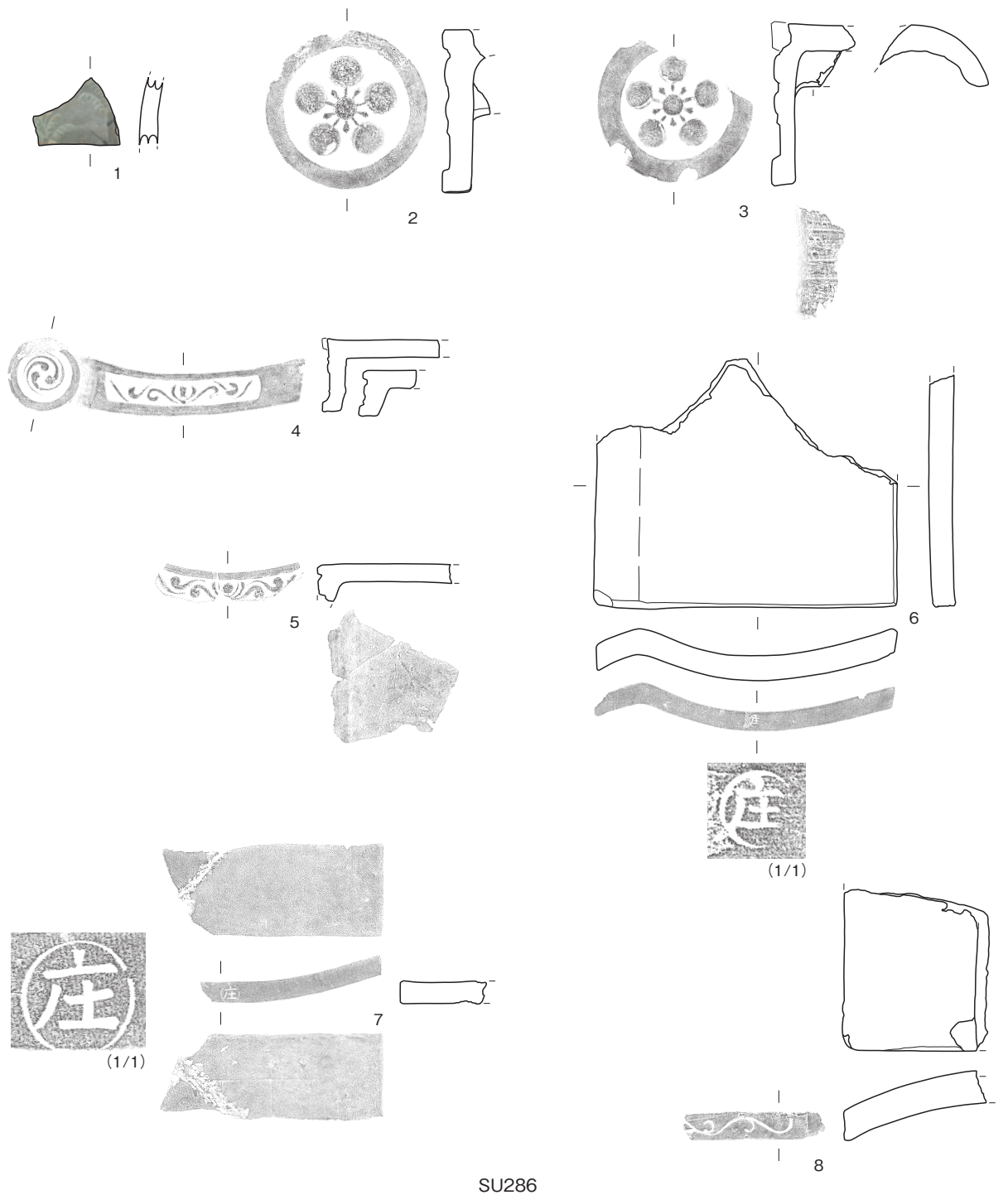


SK278

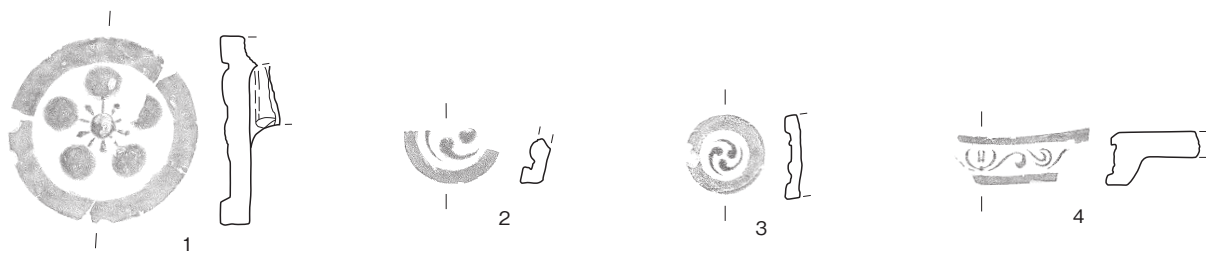


SK283

IV-18 図 SK268、SP269、SP276、SK278、SK283 出土遺物

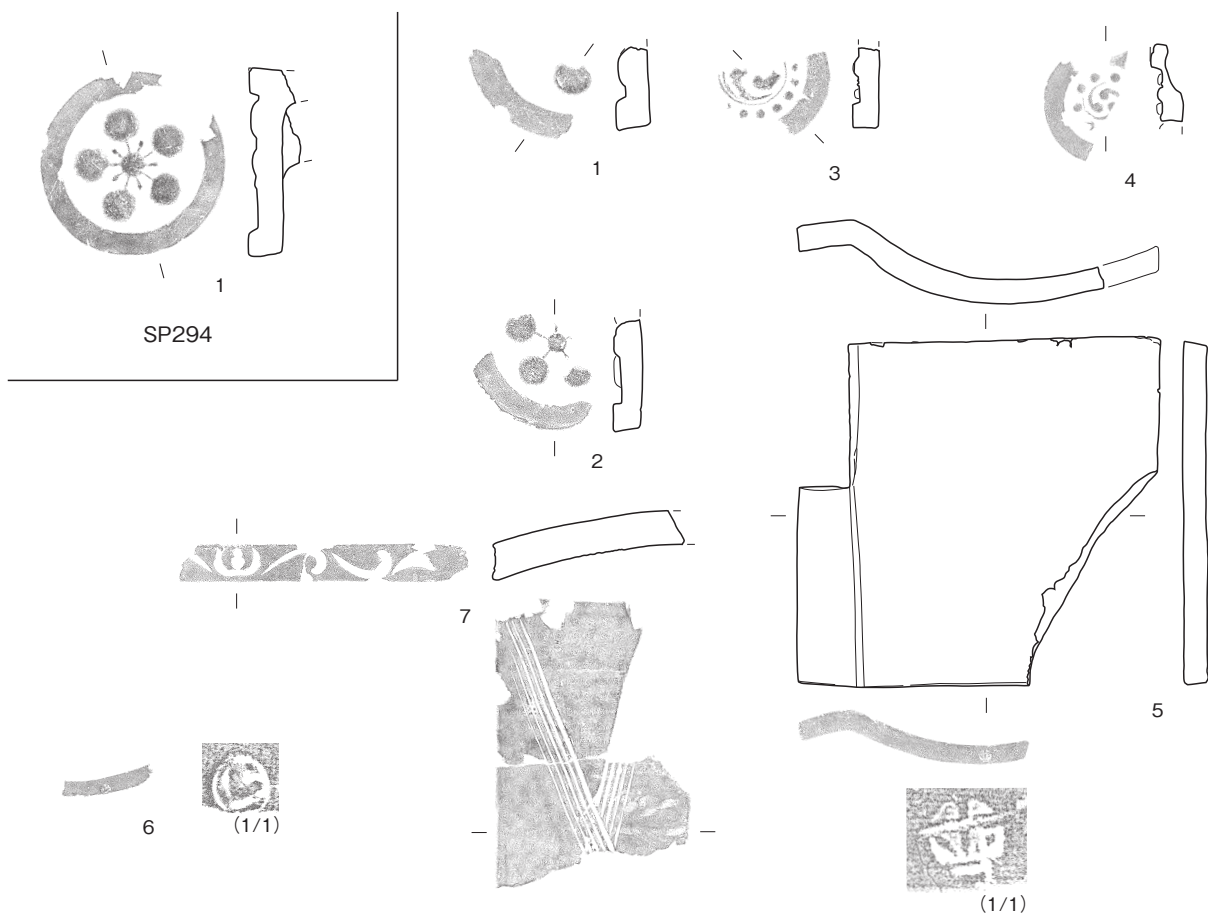


SU286

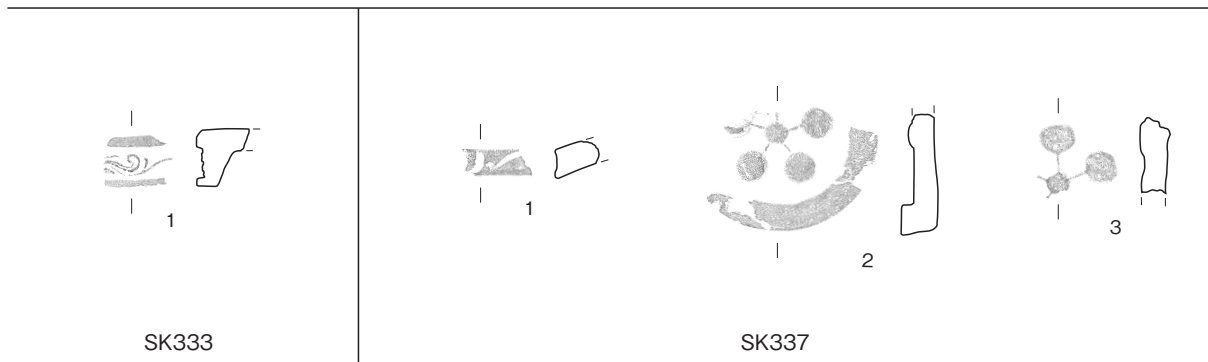


SK287 · 467

IV-19 図 SU286、SK287 · 467 出土遺物



SK314



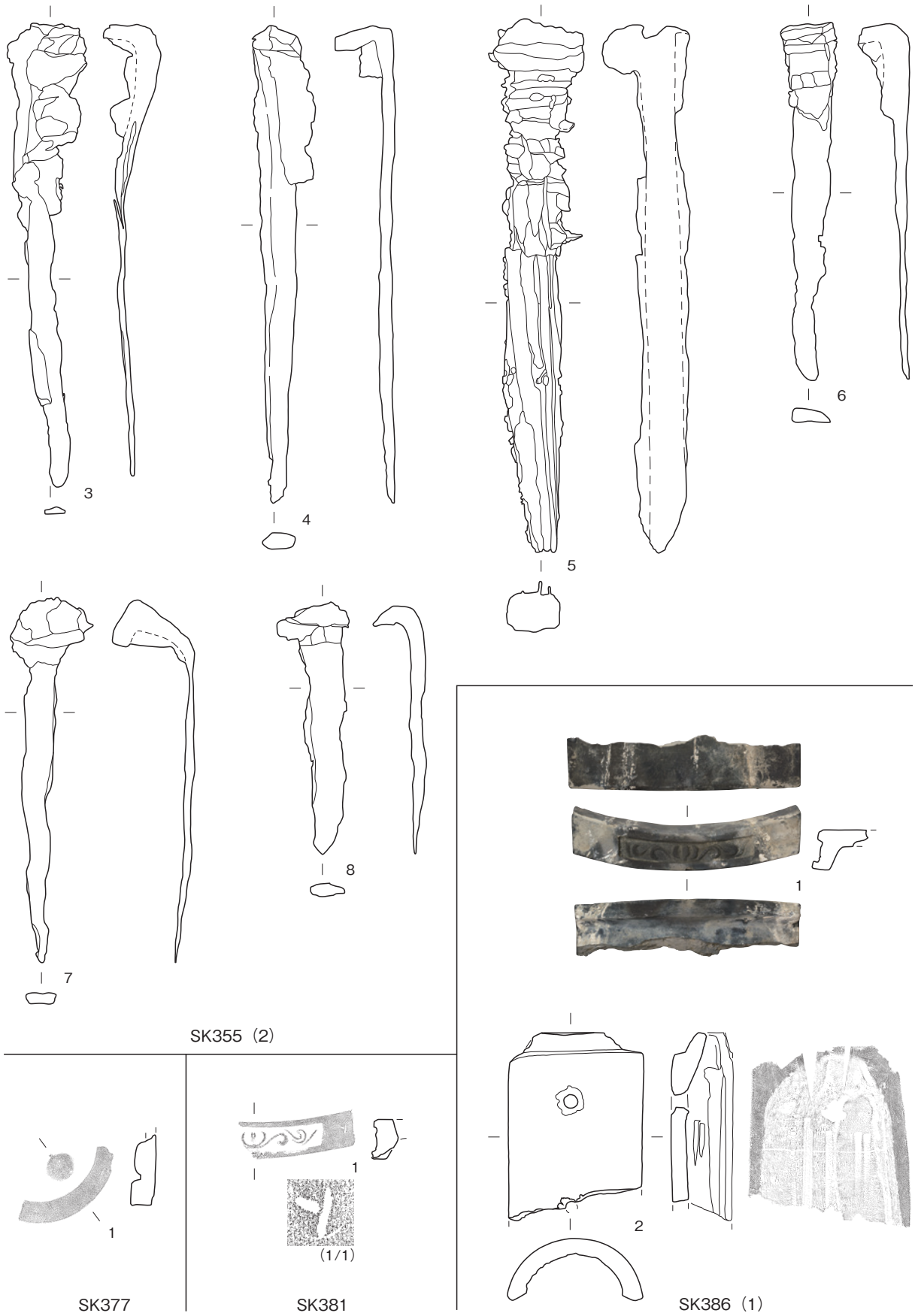
SK333

SK337

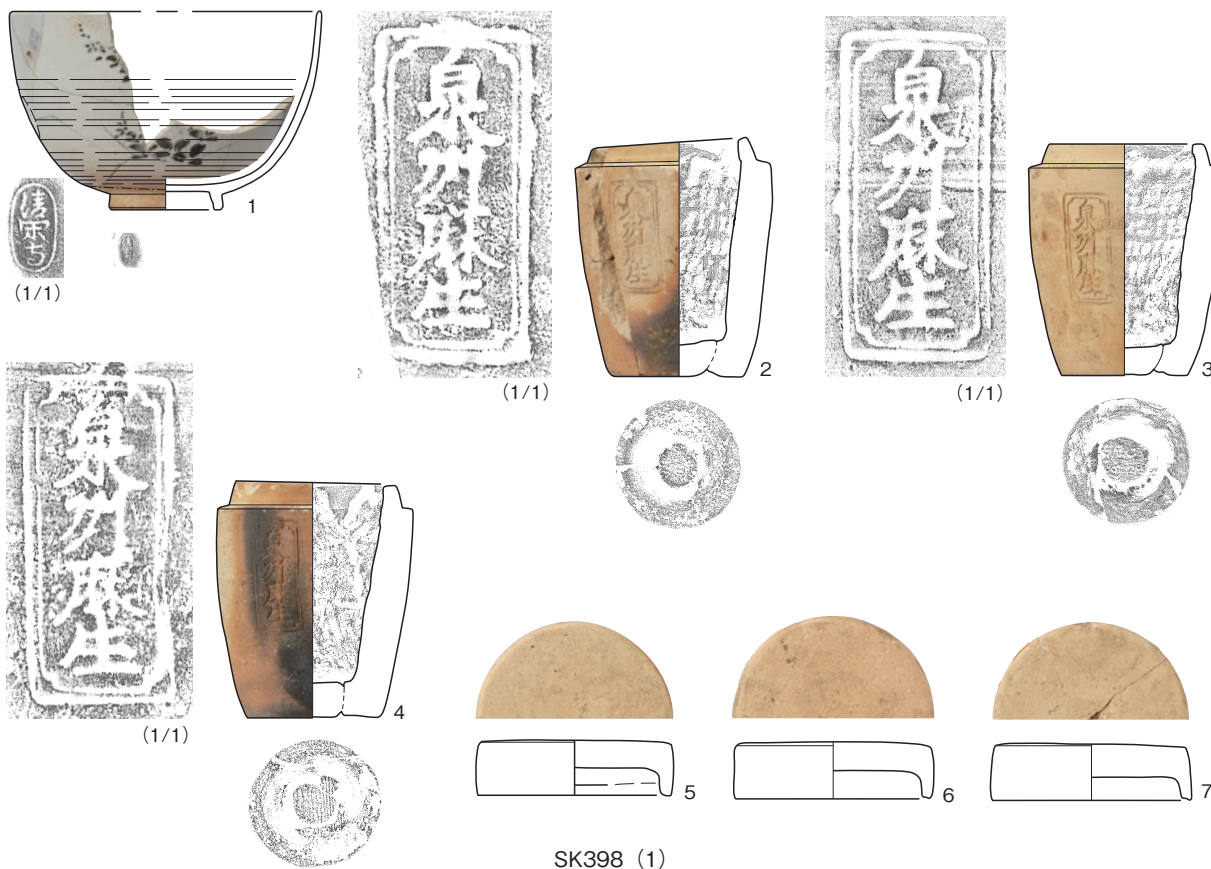
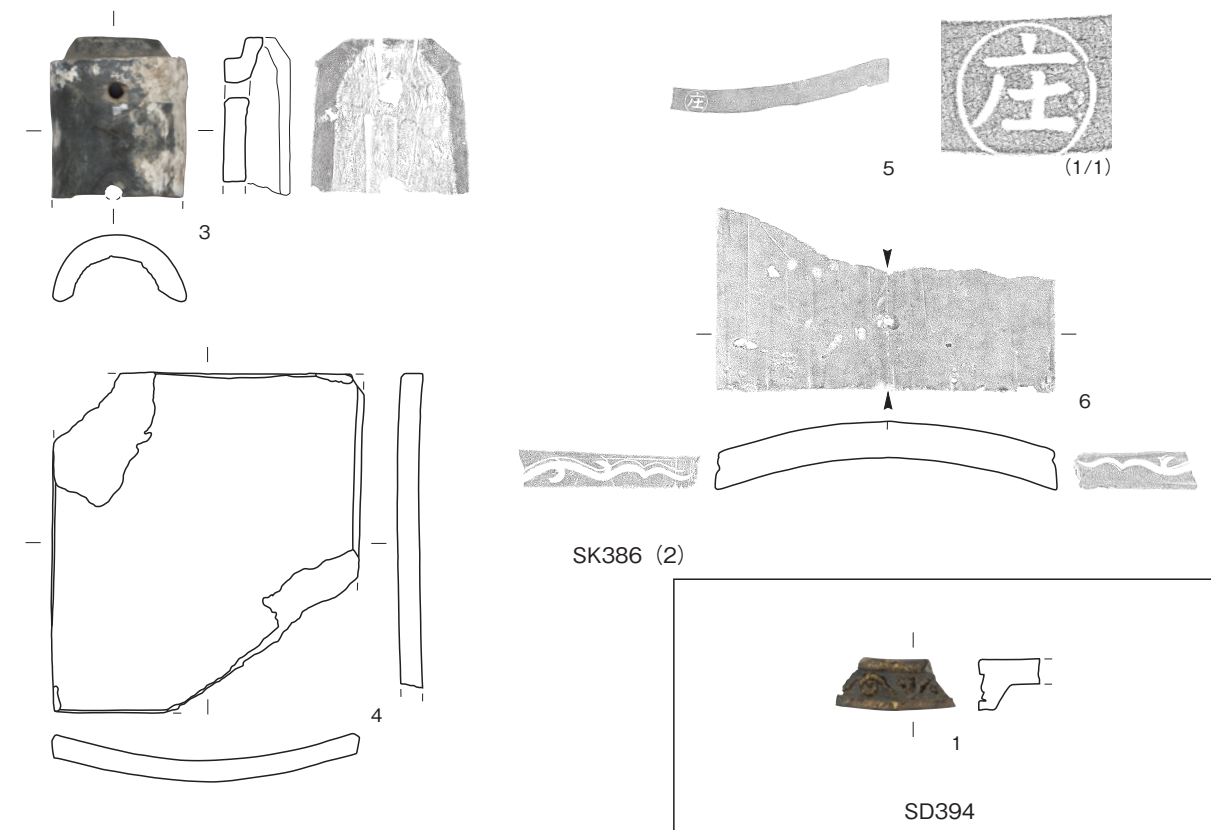


SK355 (1)

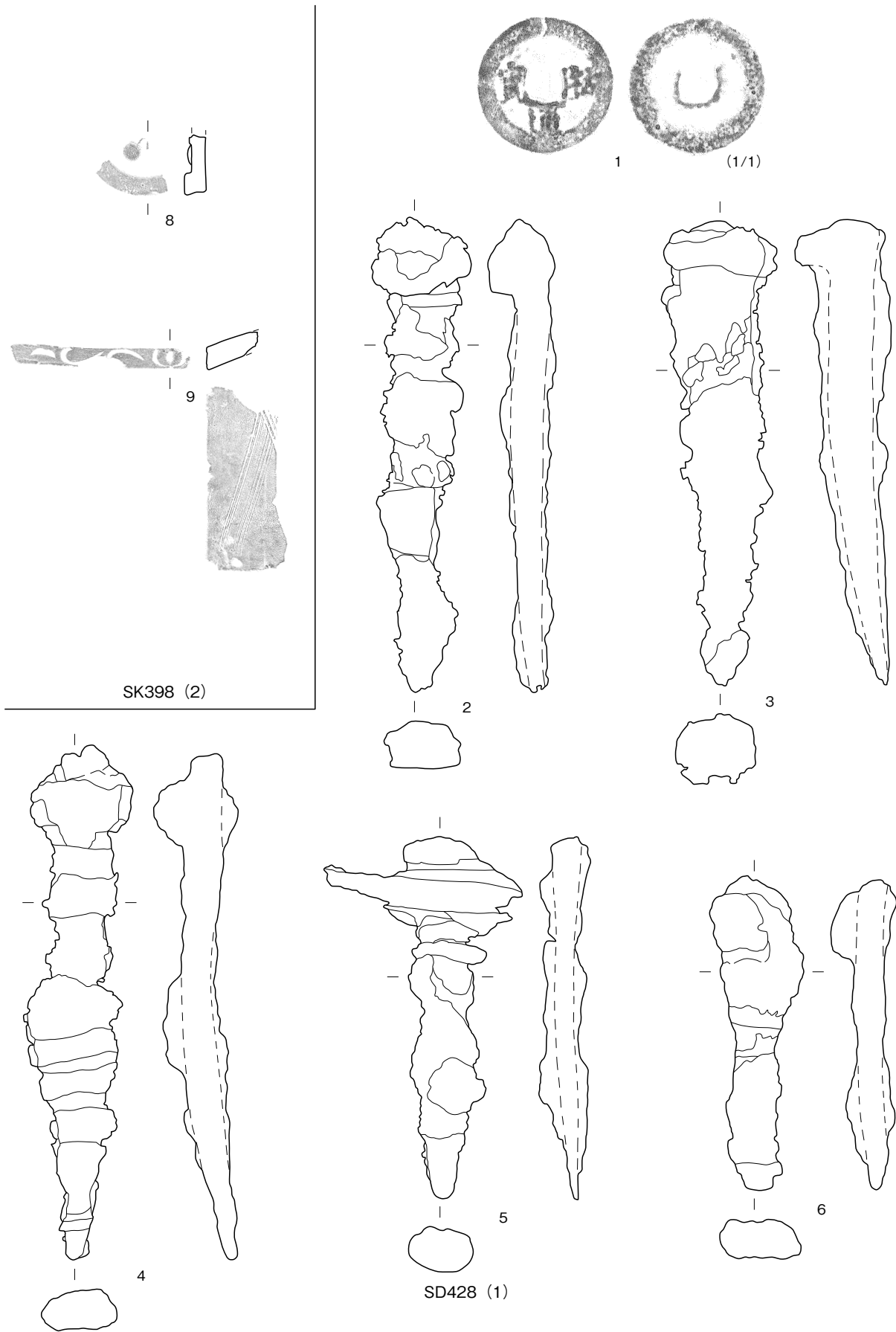
IV-20 図 SP294、SK314、SK333、SK337、SK355 (1) 出土遺物



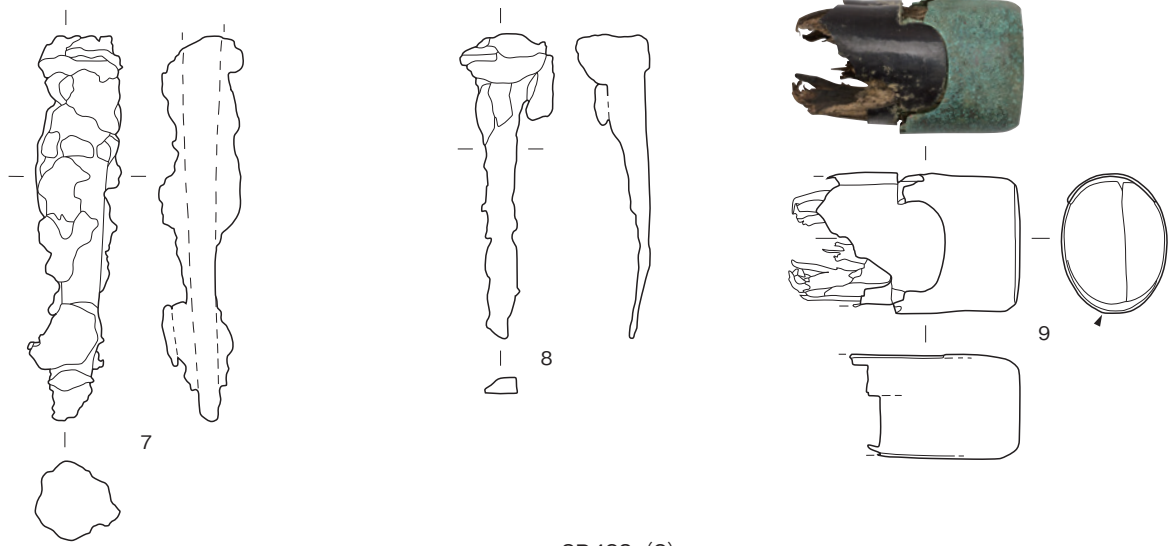
IV-21 図 SK355 (2)、SK377、SK381、SK386 (1) 出土遺物



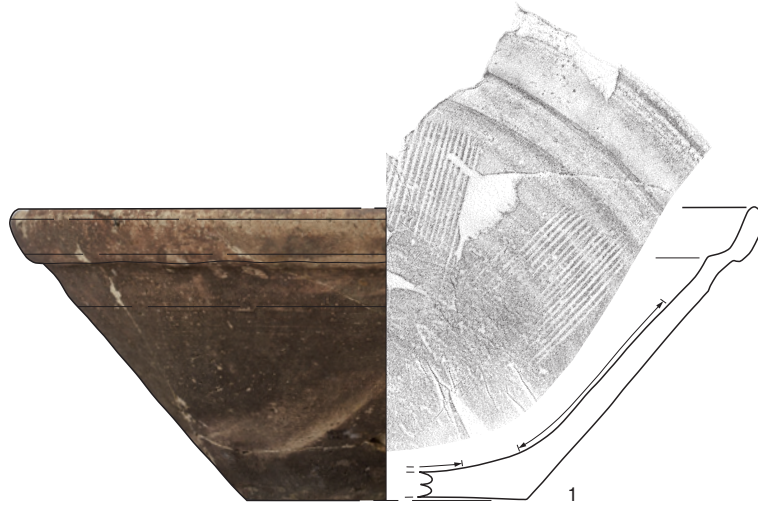
IV-22 図 SK386 (2)、SD394、SK398 (1) 出土遺物



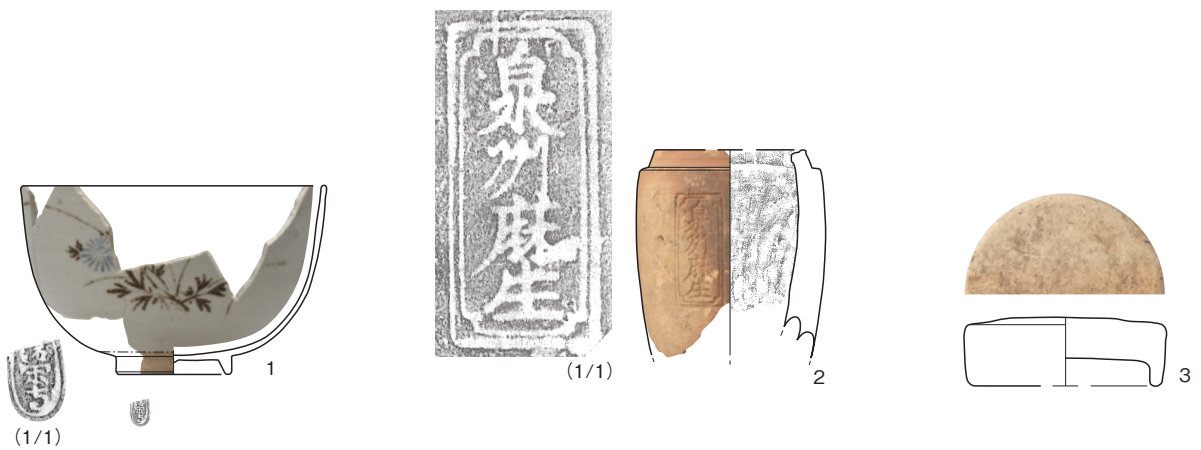
IV-23 図 SK398 (2)、SD428 (1) 出土遺物



SD428 (2)

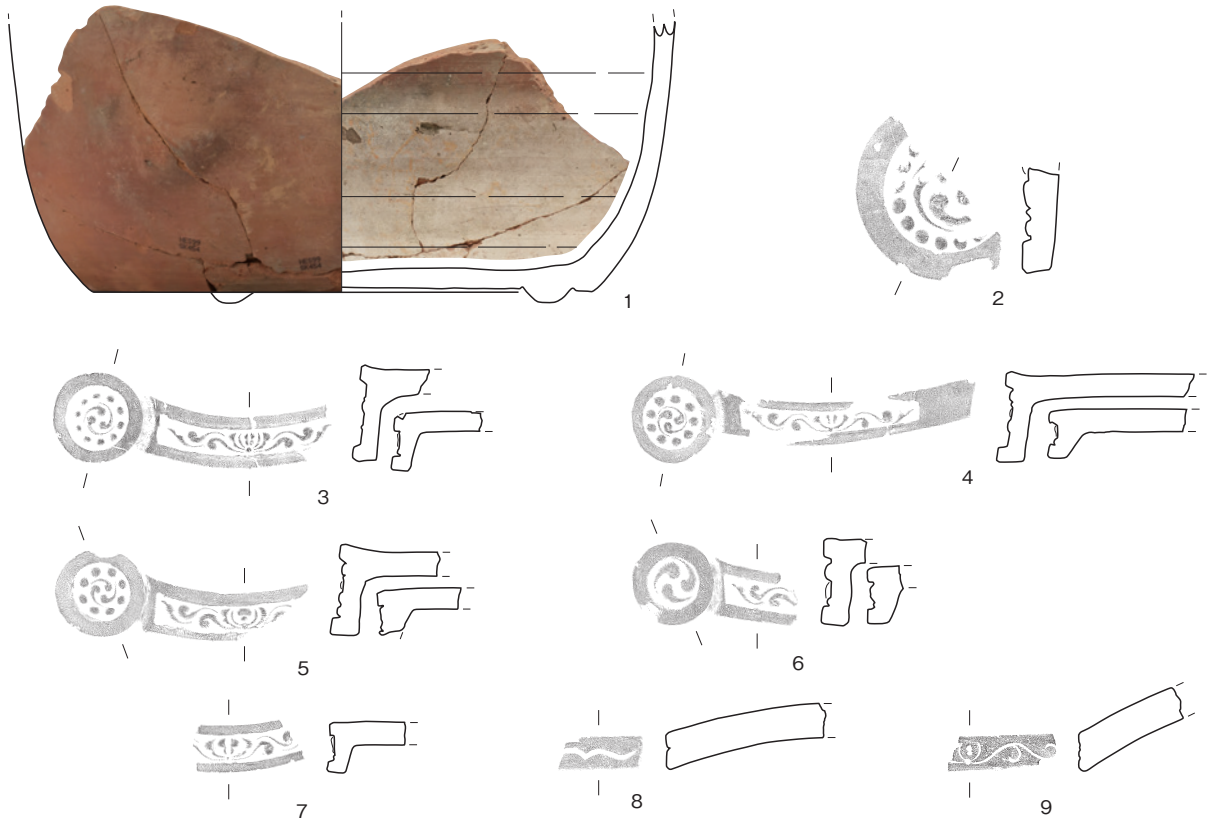


SK429

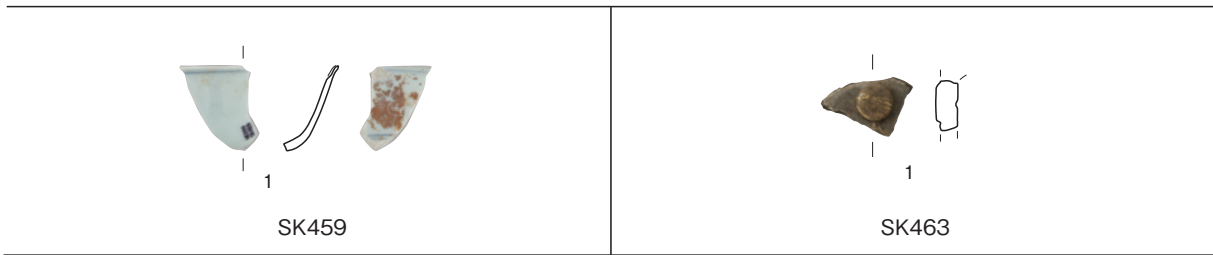


SK434・437・438

IV-24 図 SD428 (2)、SK429、SK434・437・438 出土遺物

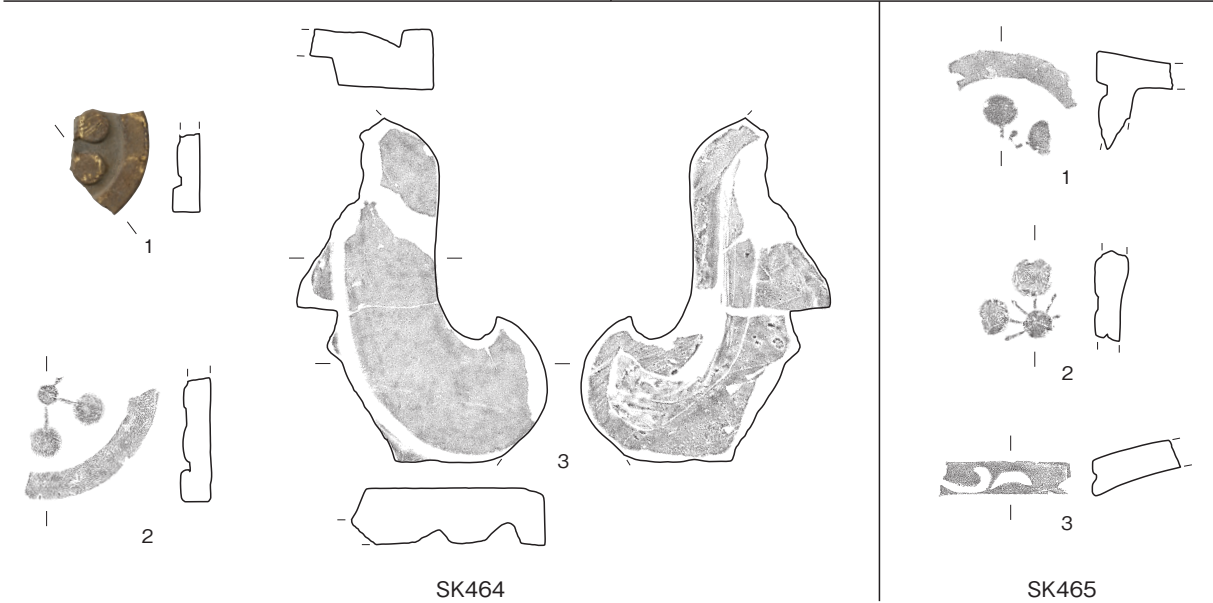


SK454



SK459

SK463



SK464

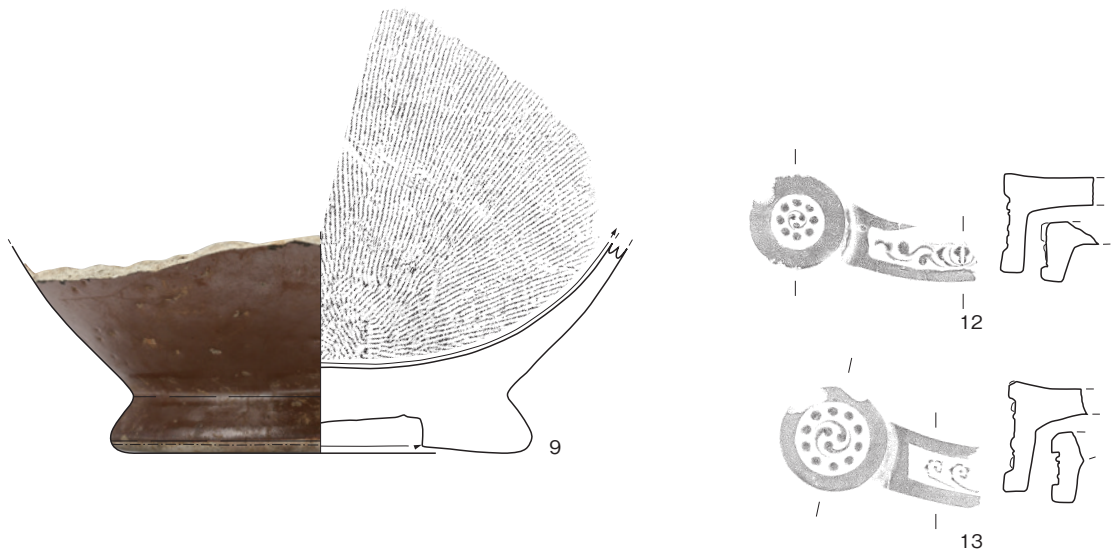
SK465

IV-25 図 SK454、SK459、SK463、SK464、SK465 出土遺物



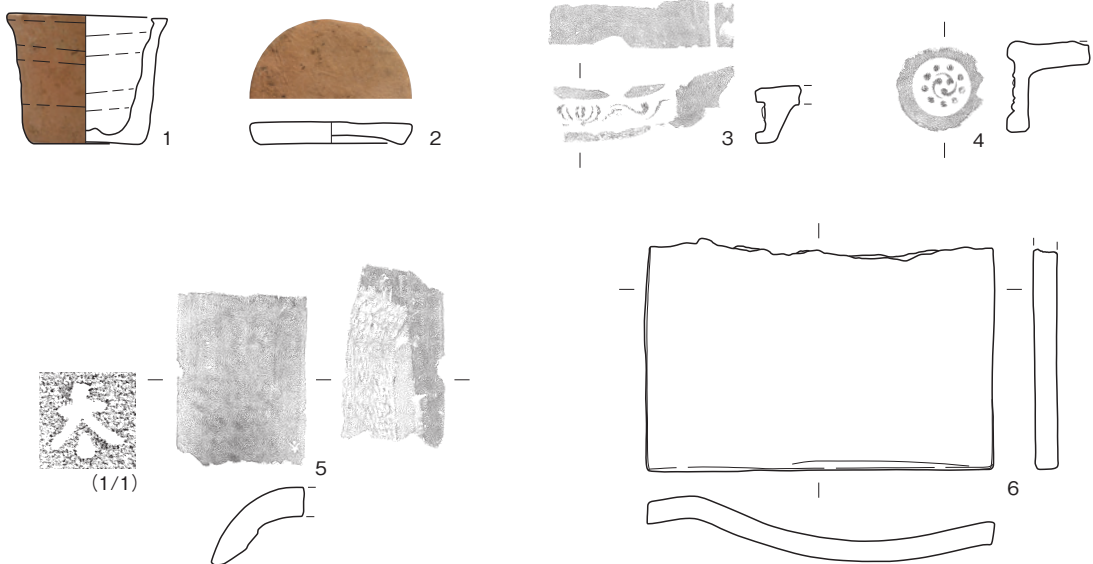
SK469 (1)

IV-26 図 SK469 (1) 出土遺物



14

SK469 (2)



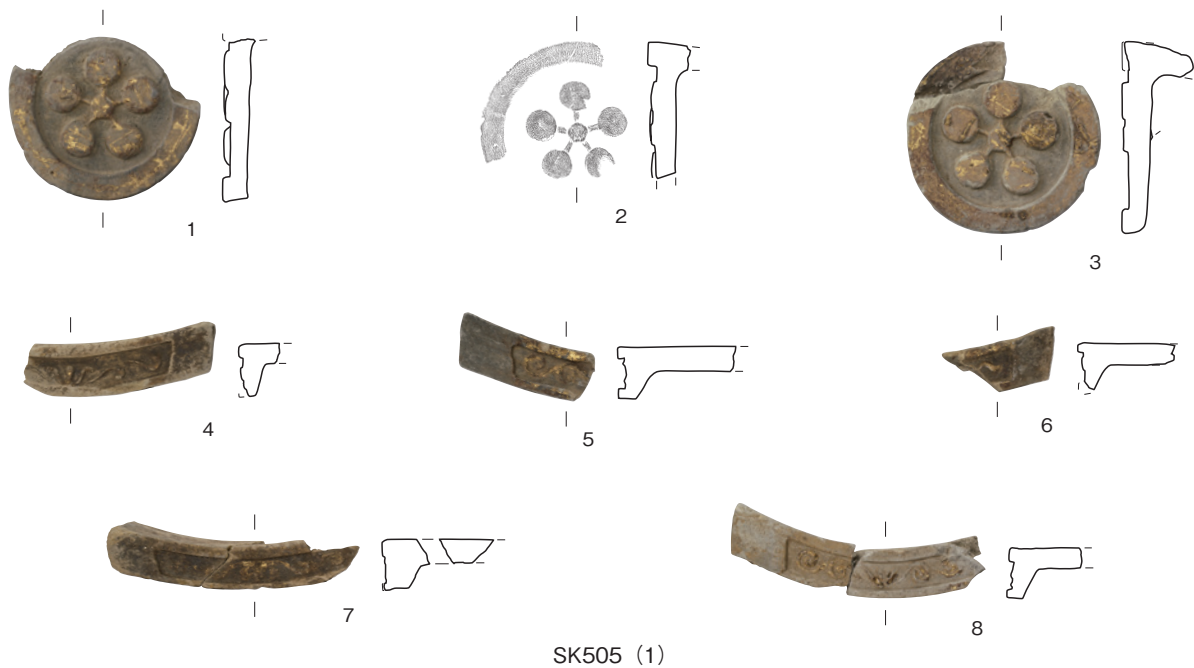
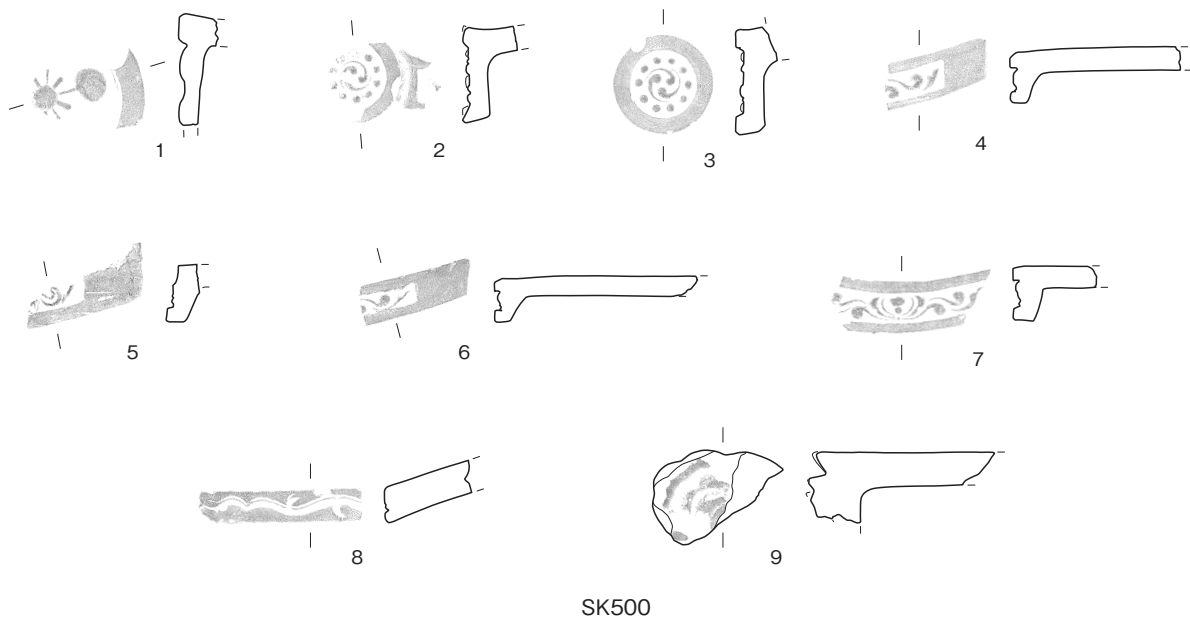
SK470

IV-27 図 SK469 (2)、SK470 出土遺物

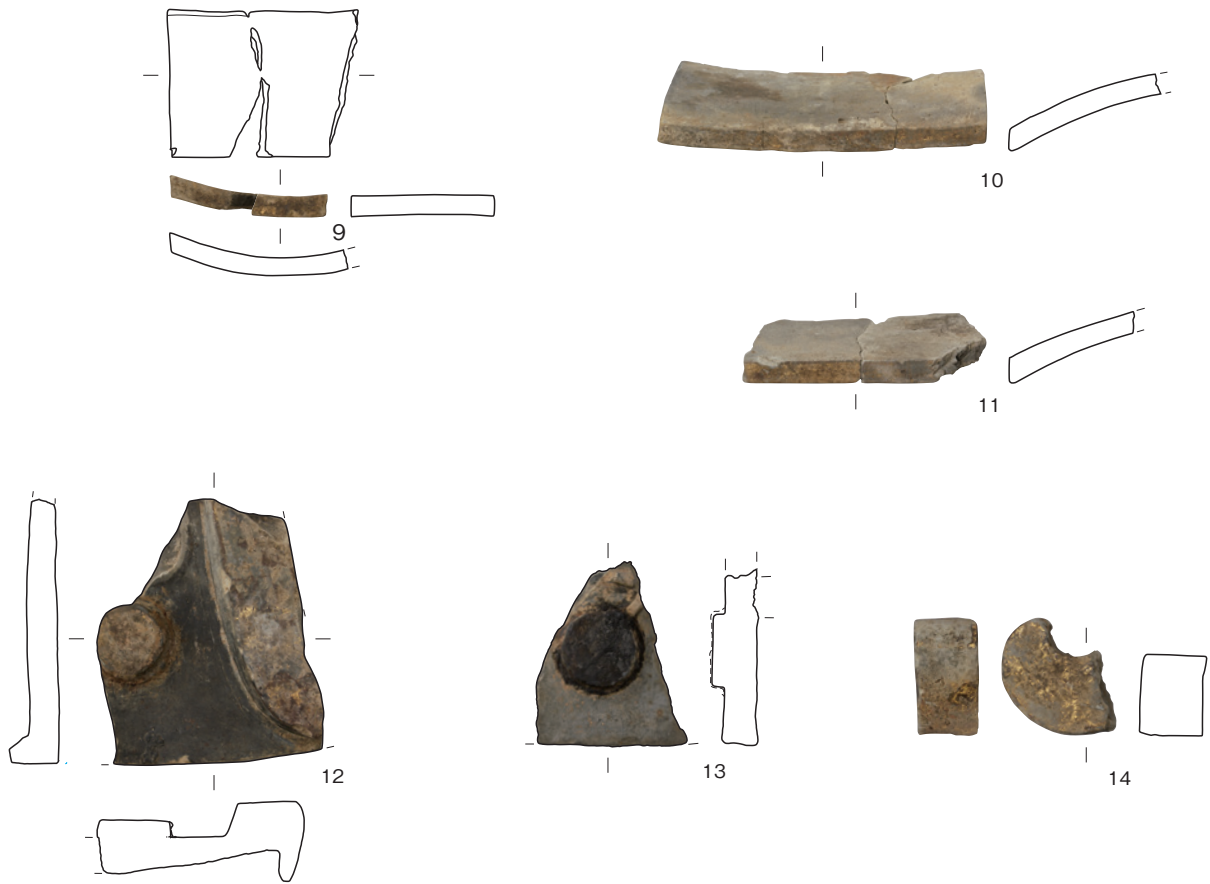


SK499 (1)

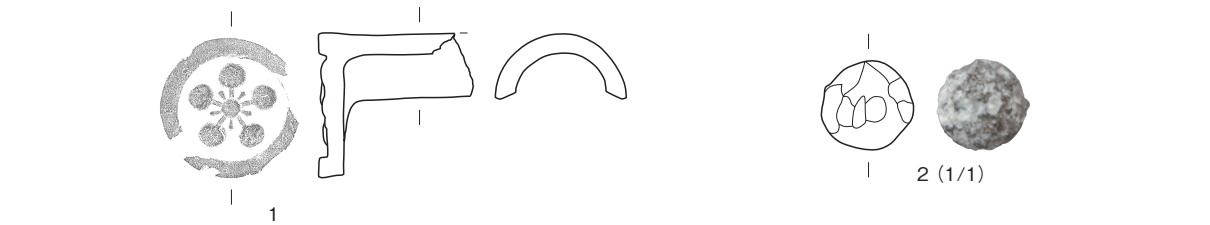
IV-28 図 SK499 (1) 出土遺物



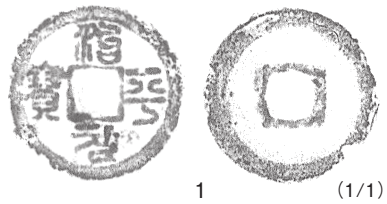
IV-29 図 SK499 (2)、SK500、SK505 (1) 出土遺物



SK505 (2)



SK506



SK509

IV-30 図 SK505 (2)、SK506、SK509 出土遺物



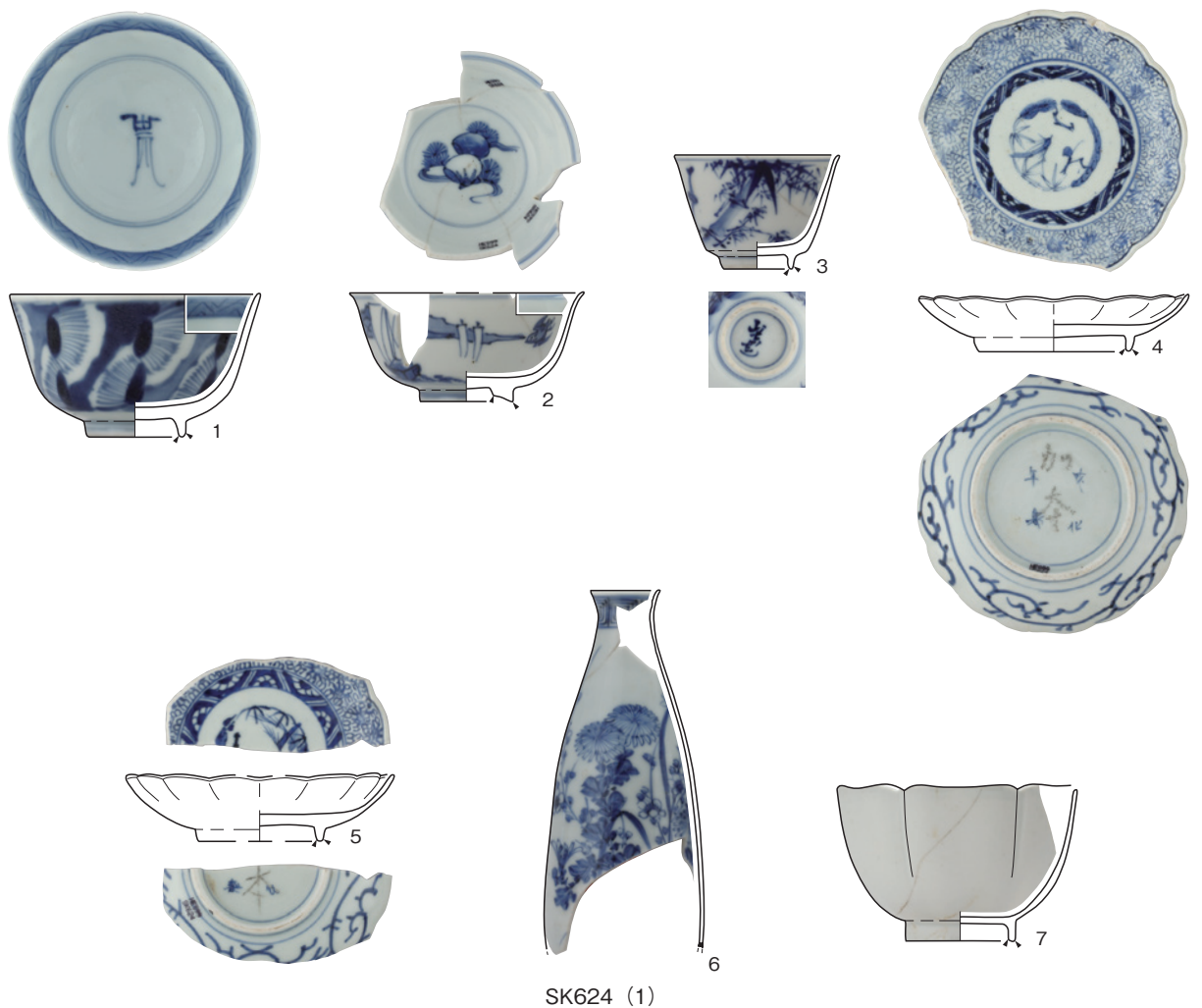
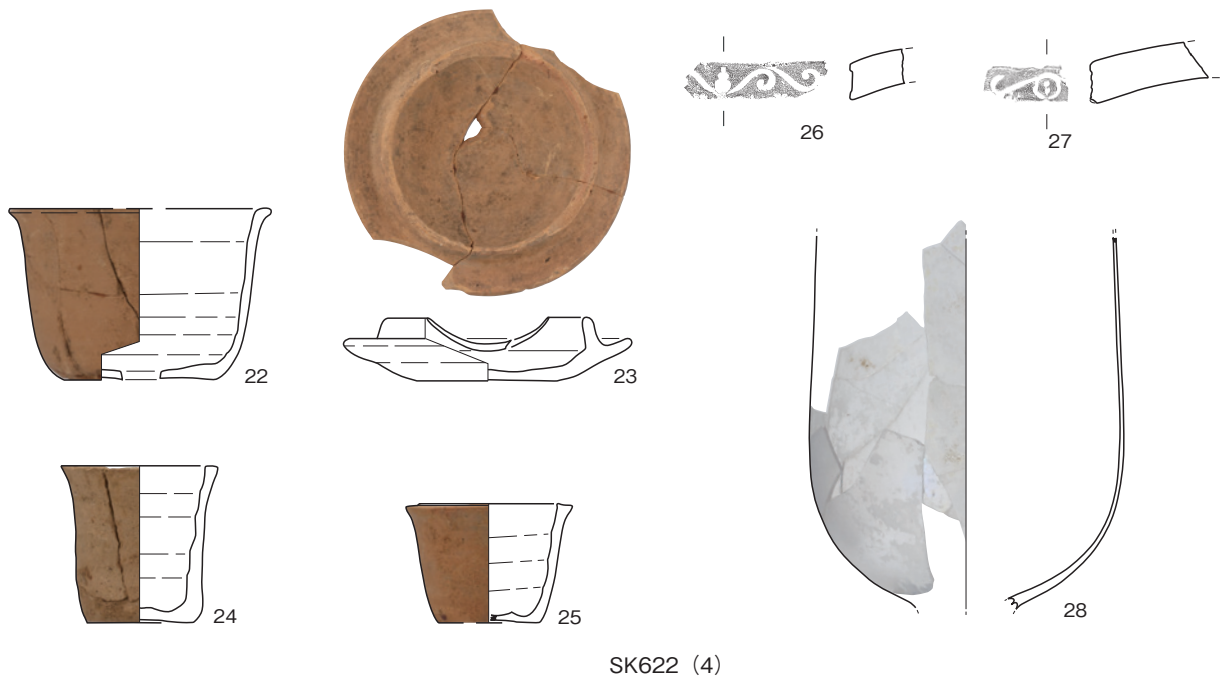
IV-31 図 SK522、SK530、SK535、SK536、SD602、SP605、SD607、SK622 (1) 出土遺物



IV-32 図 SK622 (2) 出土遺物



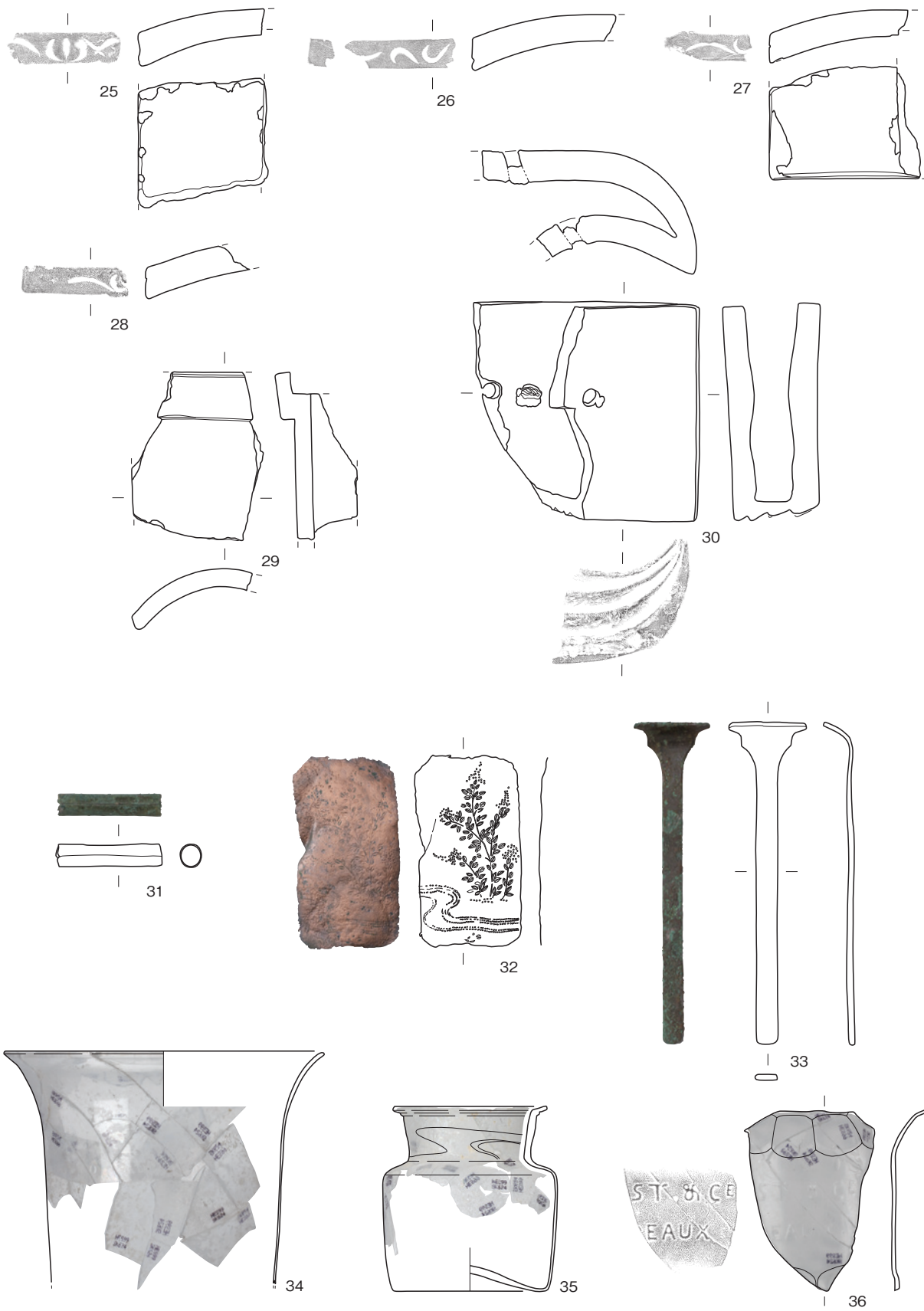
IV-33 図 SK622 (3) 出土遺物



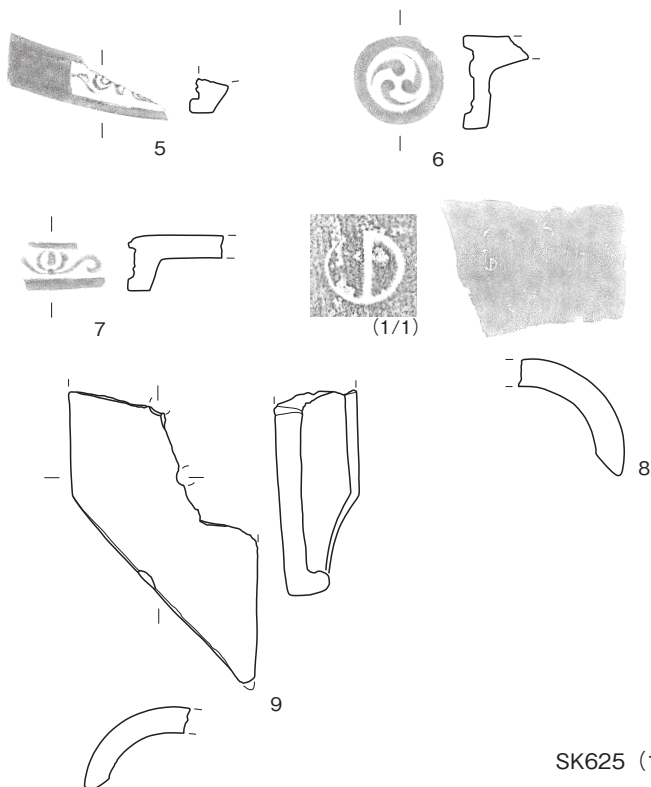
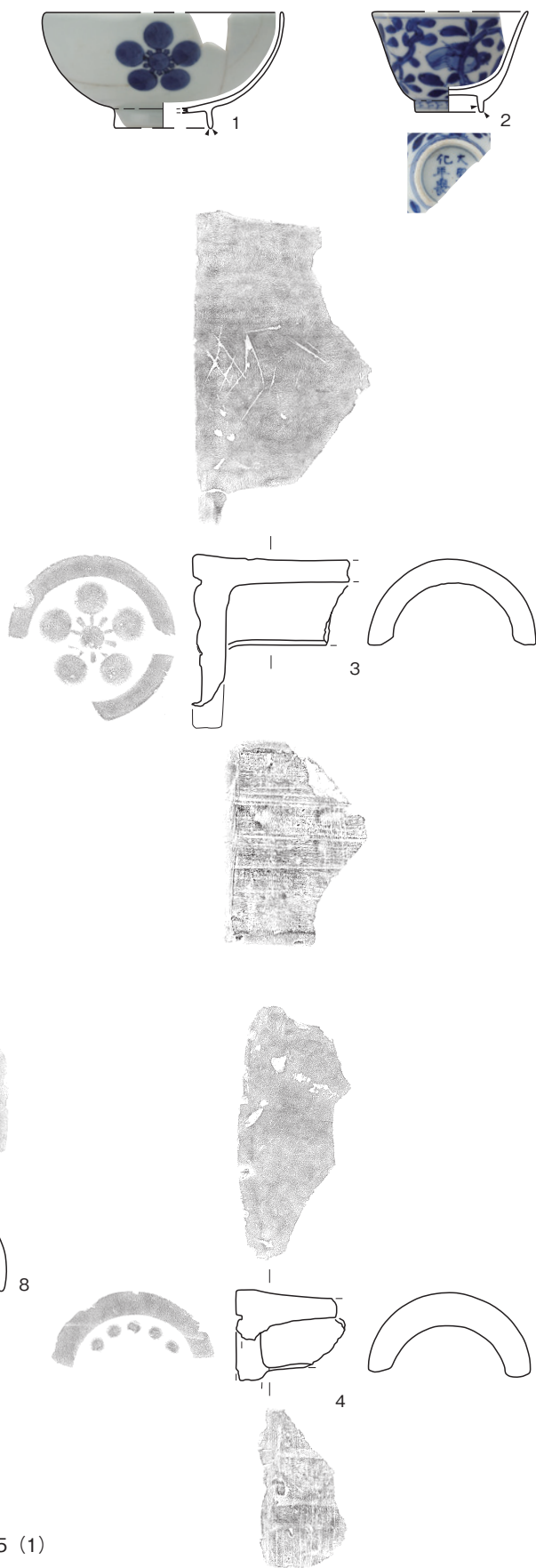
IV-34 圖 SK622 (4)、SK624 (1) 出土遺物



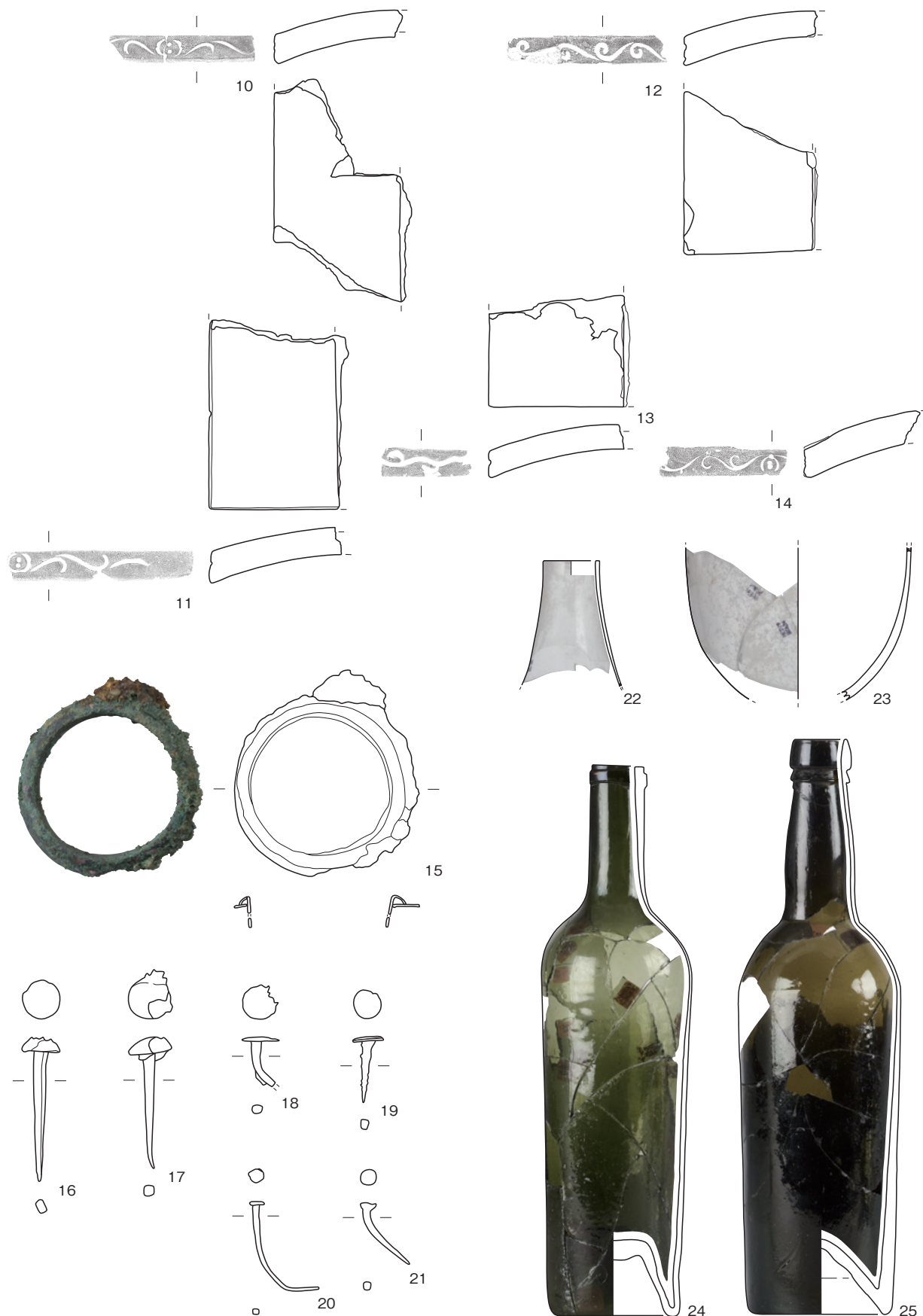
IV-35 図 SK624 (2) 出土遺物



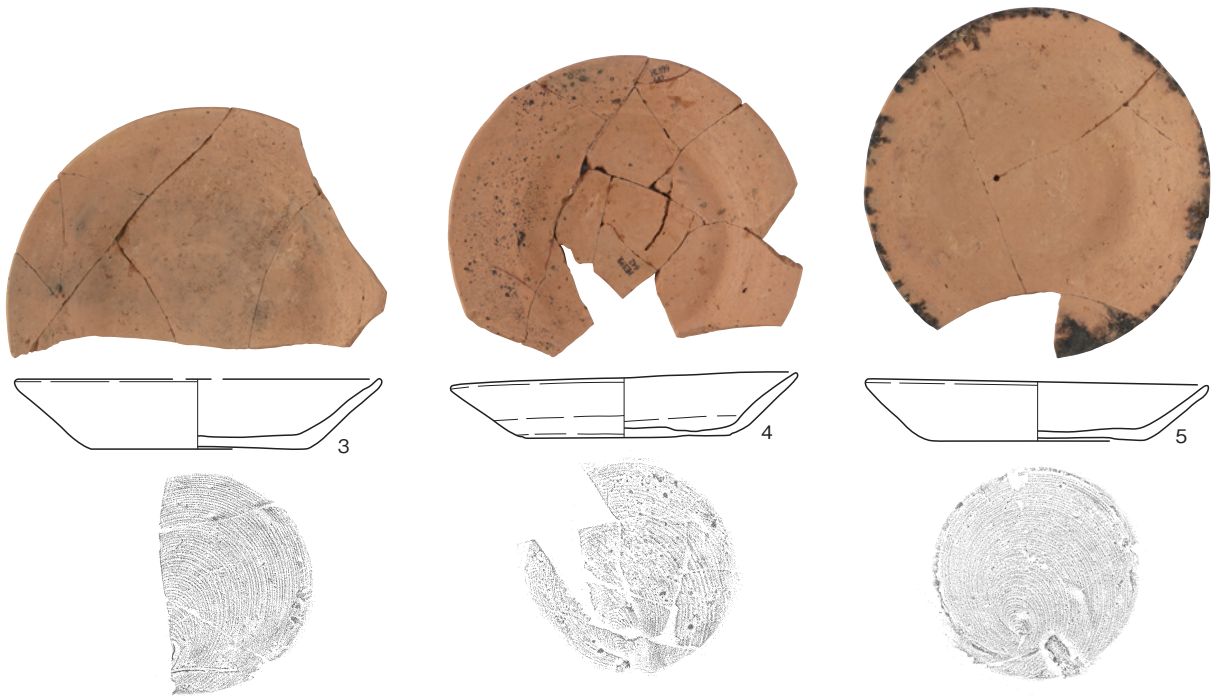
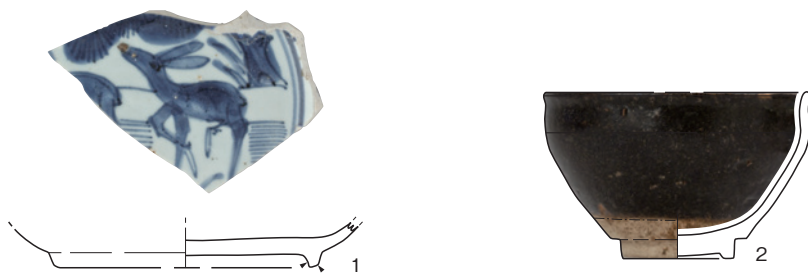
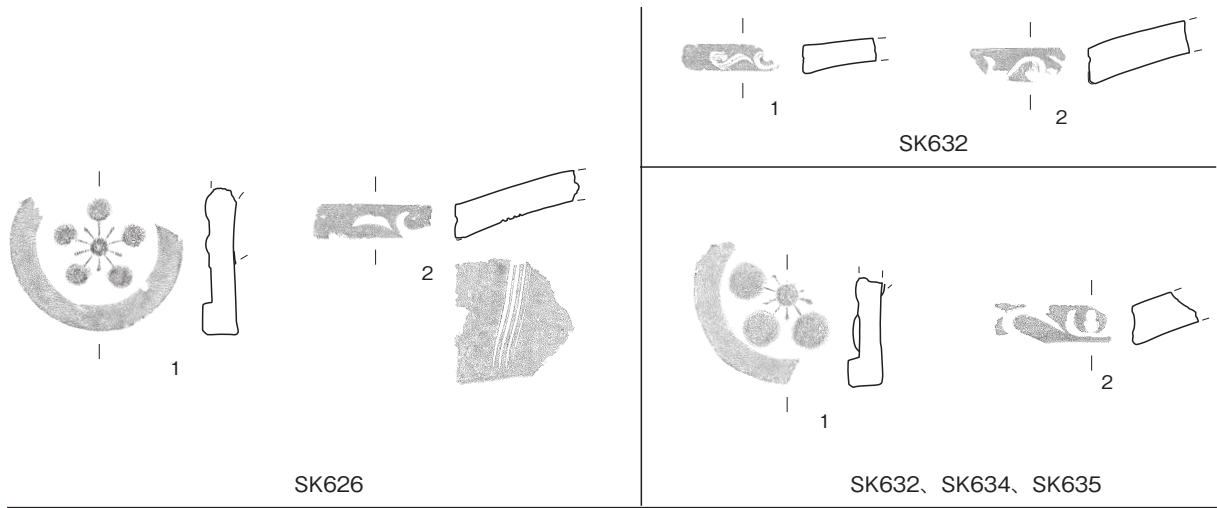
IV-36 図 SK624 (3) 出土遺物



IV-37 图 SK624 (4)、SK625 (1) 出土遺物

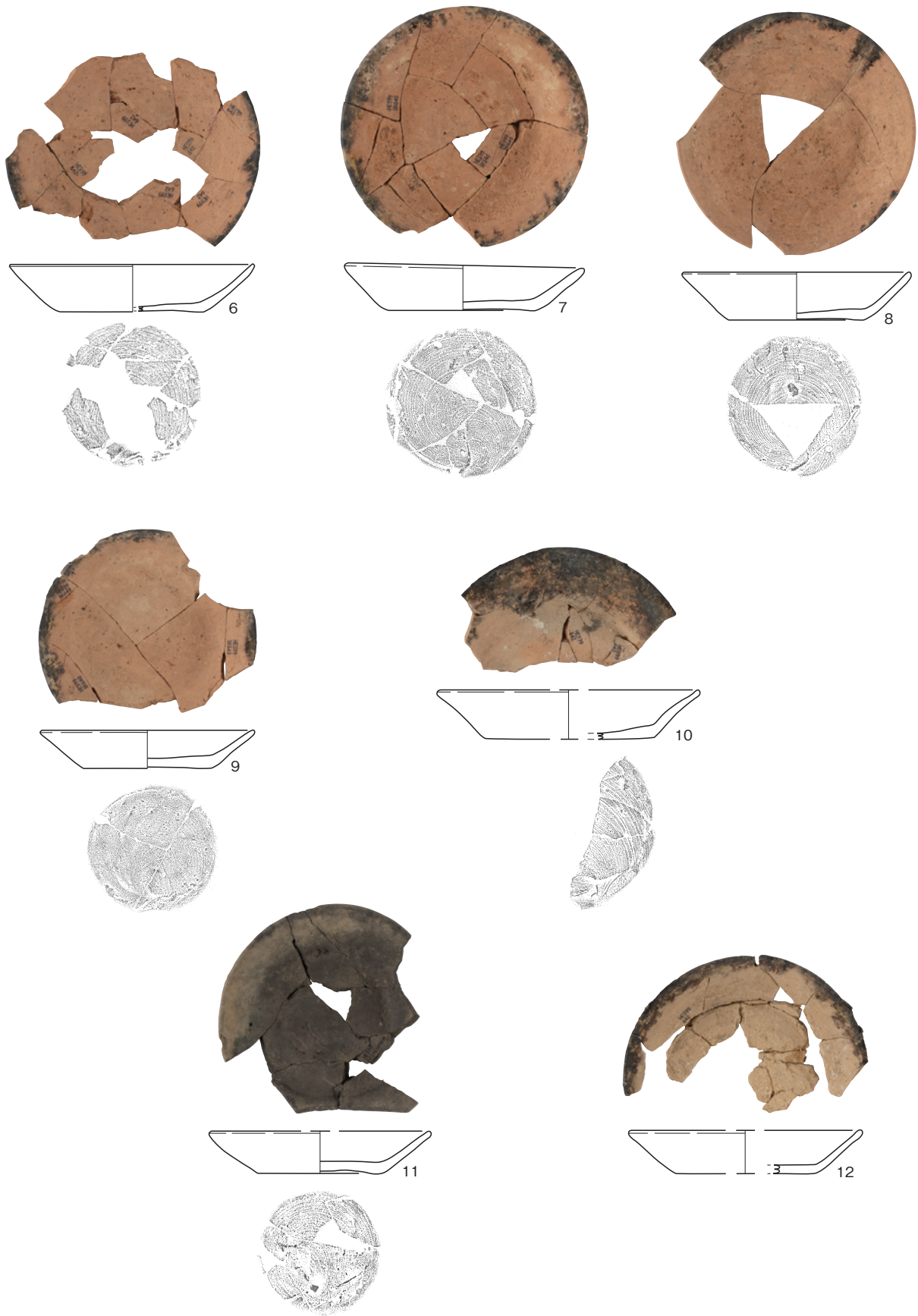


IV-38 圖 SK625 (2) 出土遺物

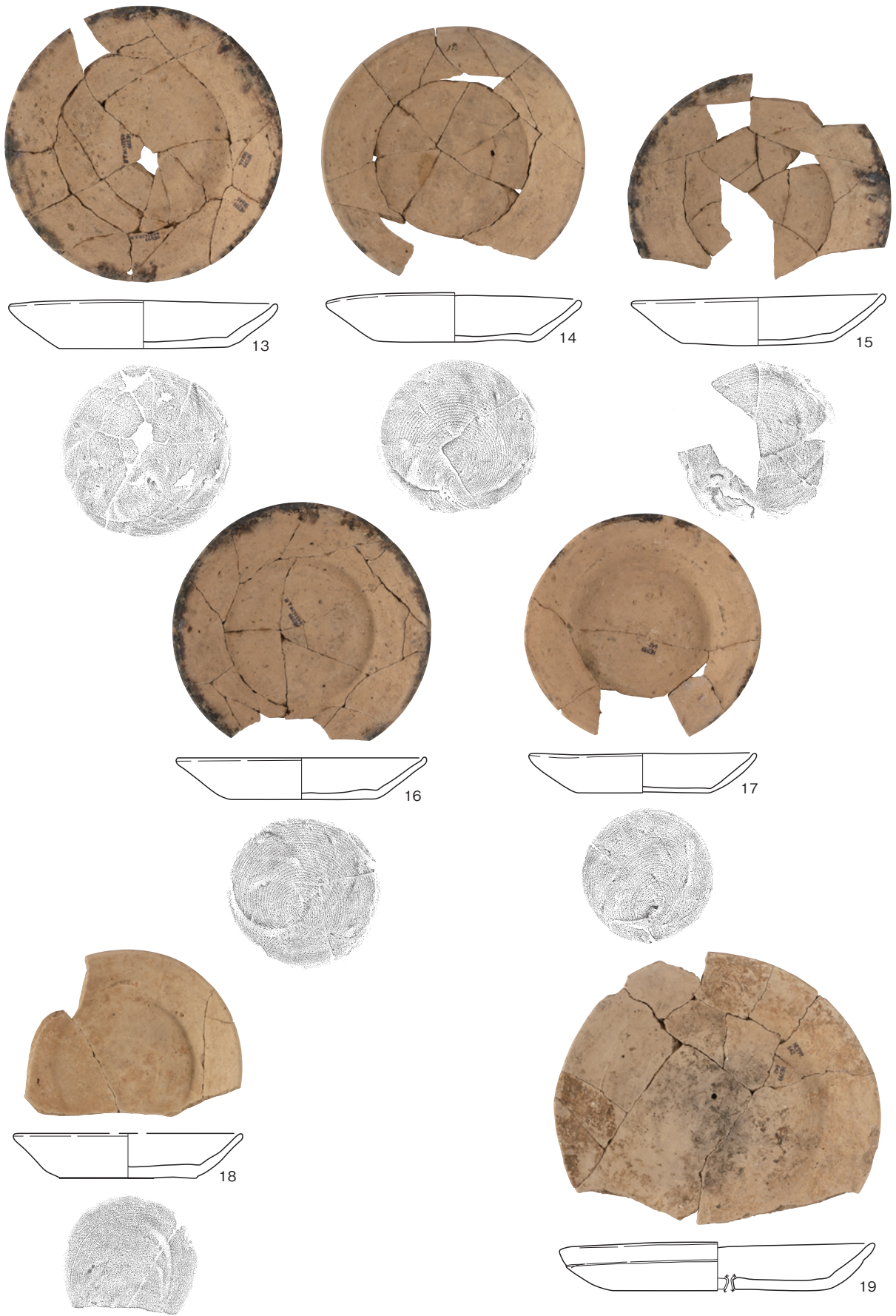


SK640、SK641・642・643 (1)

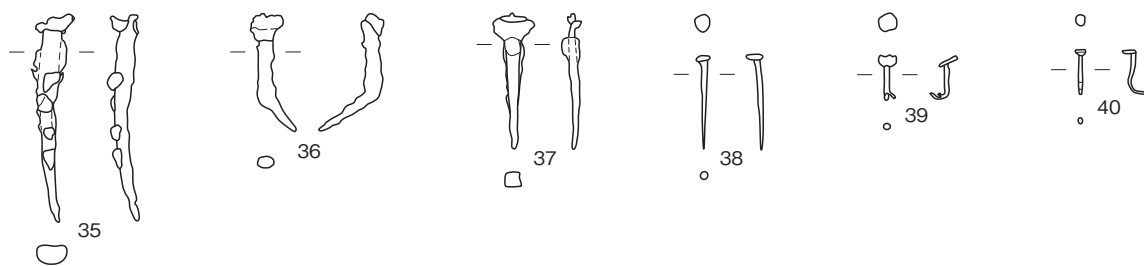
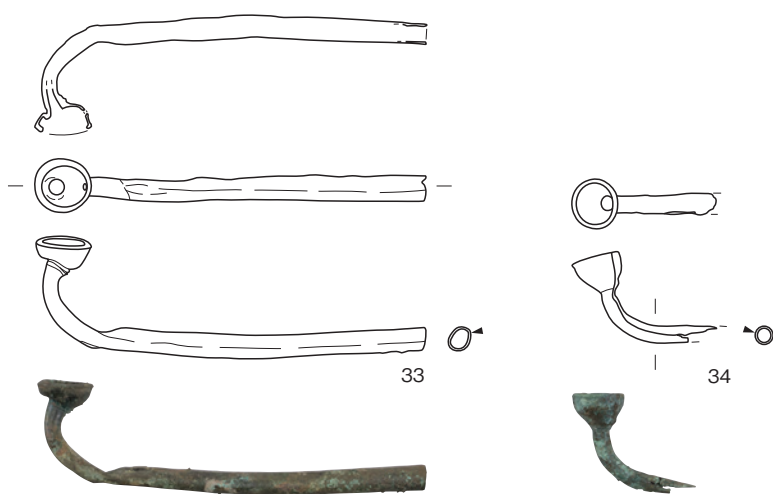
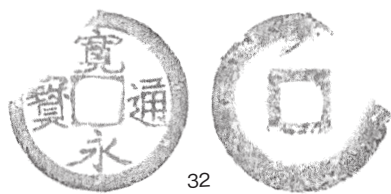
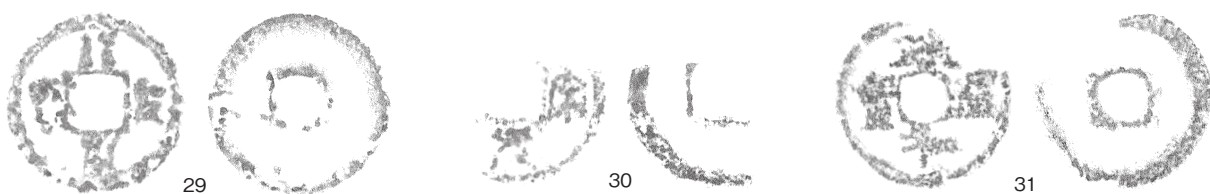
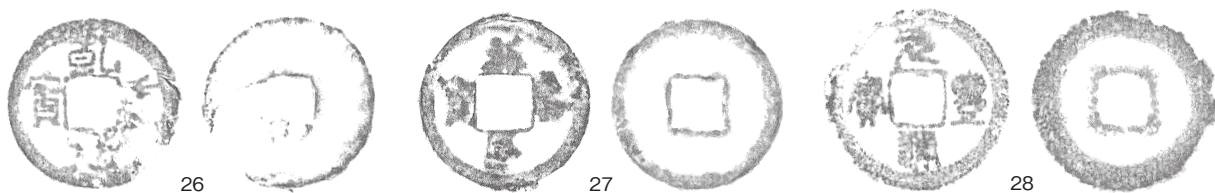
IV-39 図 SD626、SK632、SK632、SK634、SK635、SK640、SK641・642・643 (1) 出土遺物



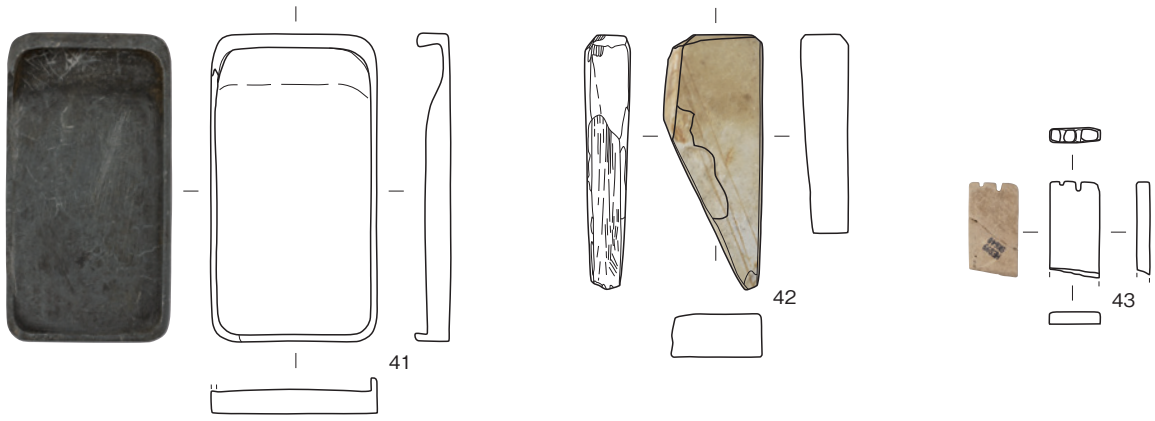
IV-40 図 SK640、SK641・642・643 (2) 出土遺物



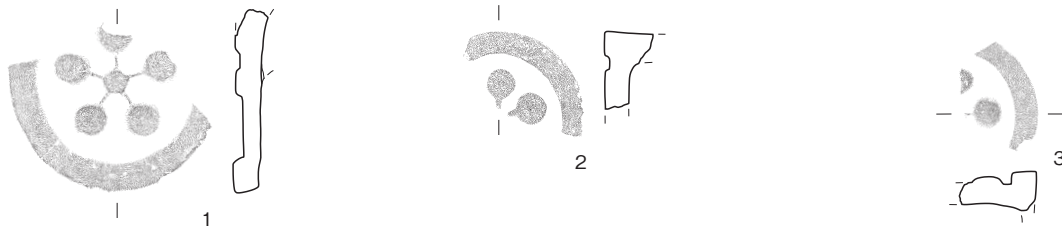
IV-41 図 SK640、SK641・642・643 (3) 出土遺物



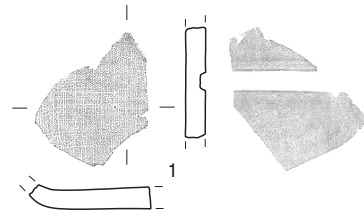
IV-42 図 SK640、SK641・642・643 (4) 出土遺物



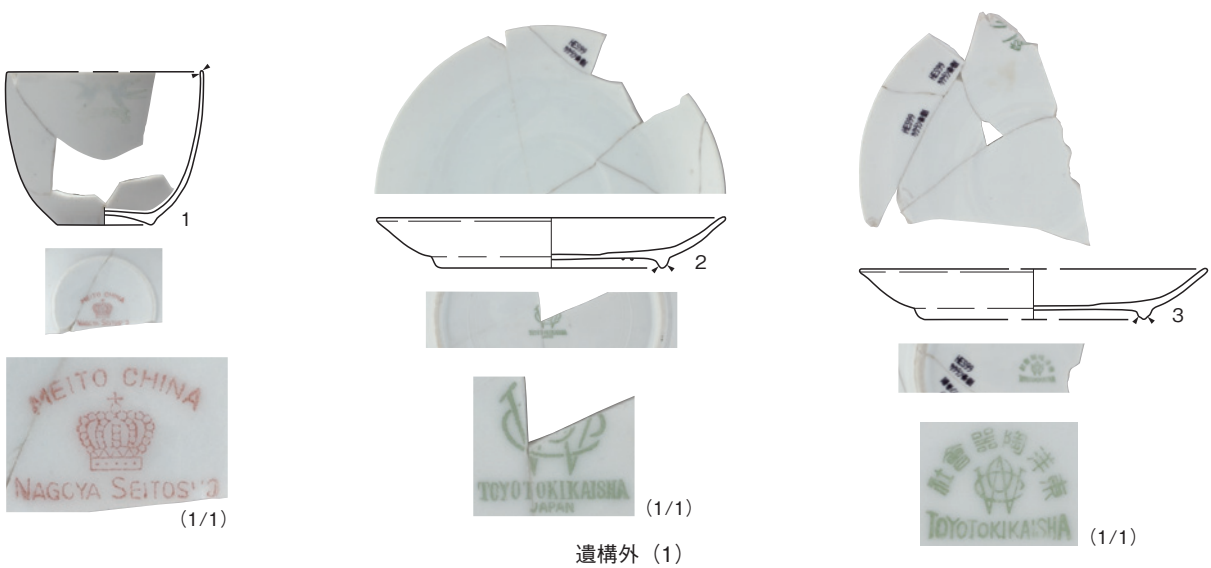
SK640、SK641・642・643 (5)



SK646

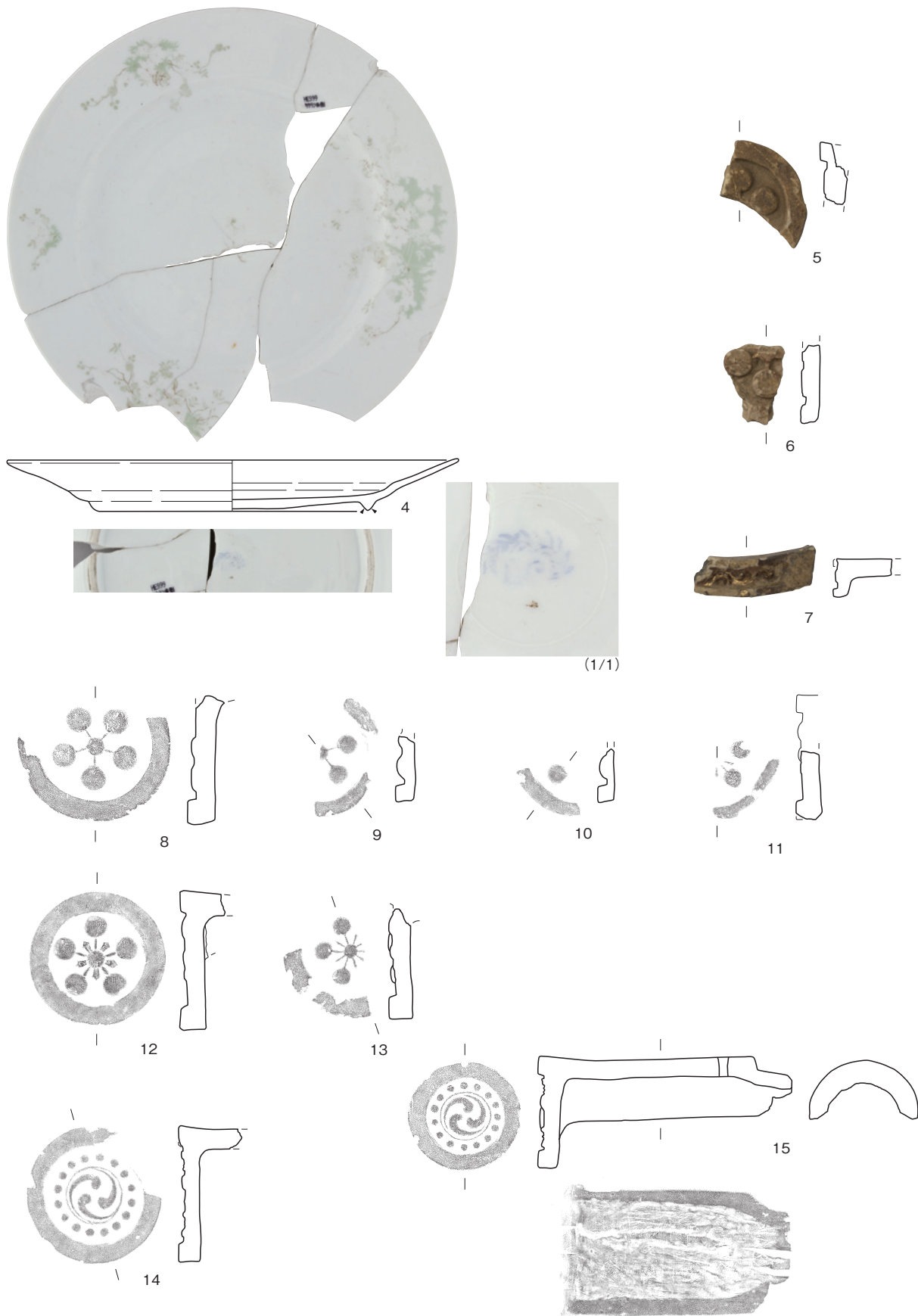


SK659

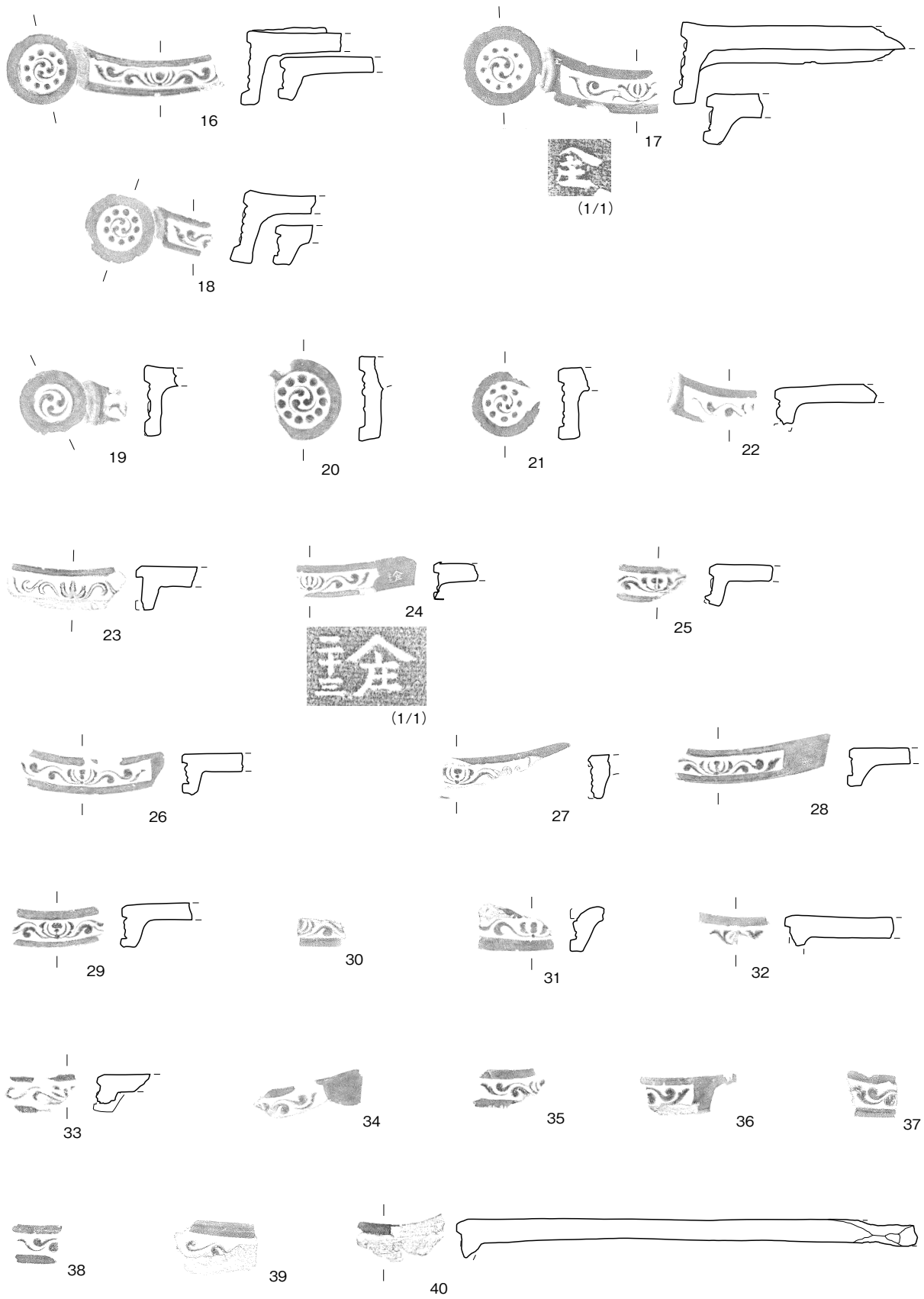


遺構外 (1)

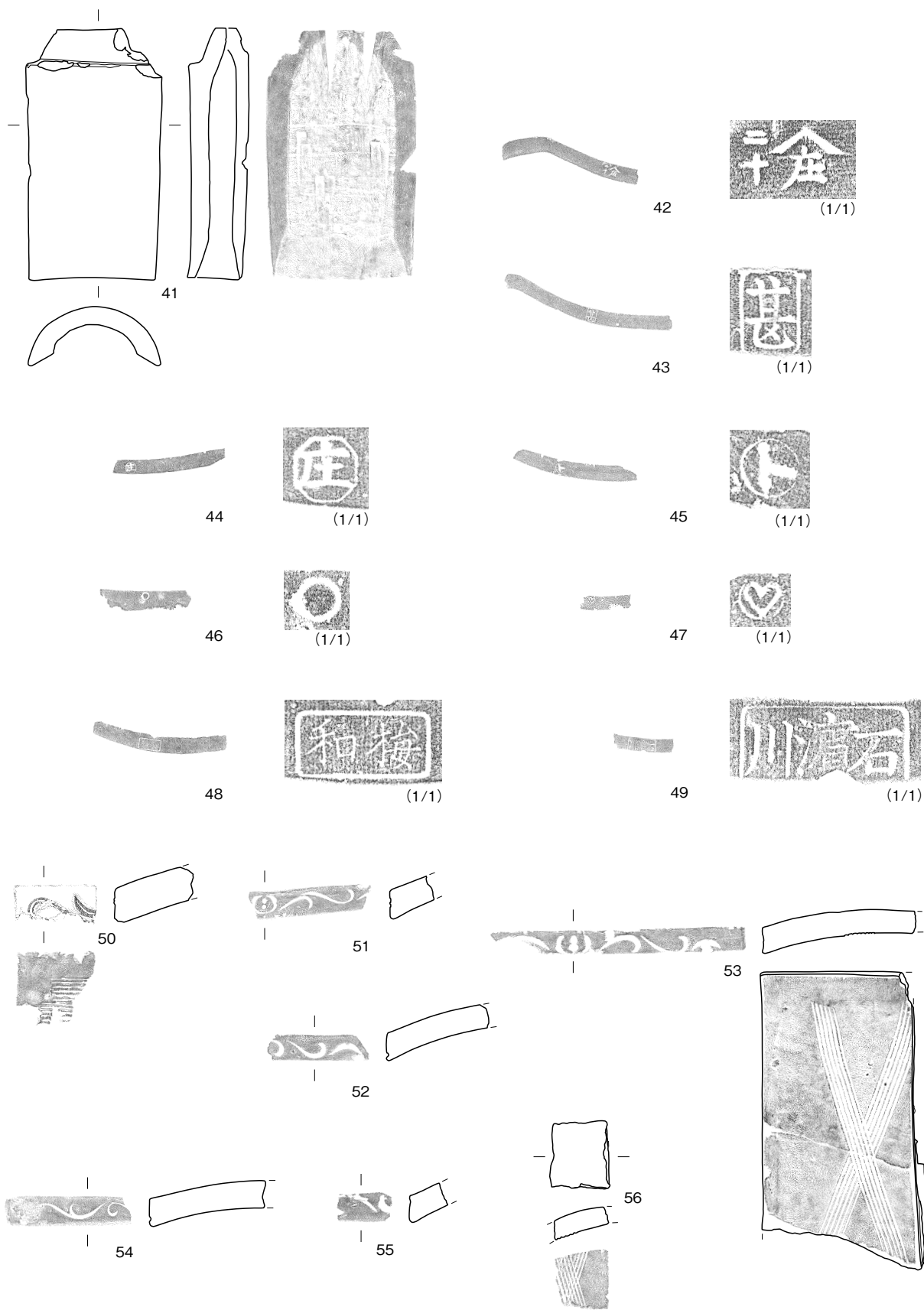
IV-43 図 SK640・641・642・643(5)、SK646、SK659、遺構外 (1) 出土遺物



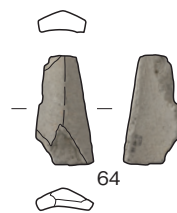
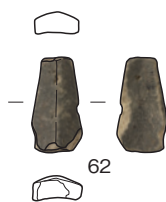
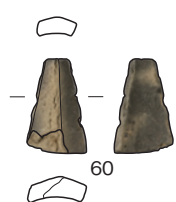
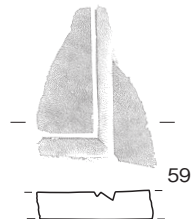
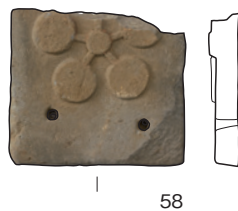
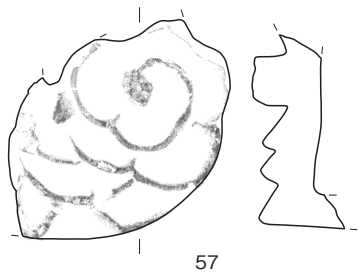
IV-44 図 遺構外 (2) 出土遺物



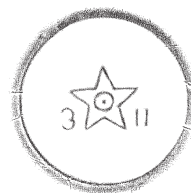
IV-45 図 遺構外 (3) 出土遺物



IV-46 遺構外 (4) 出土遺物

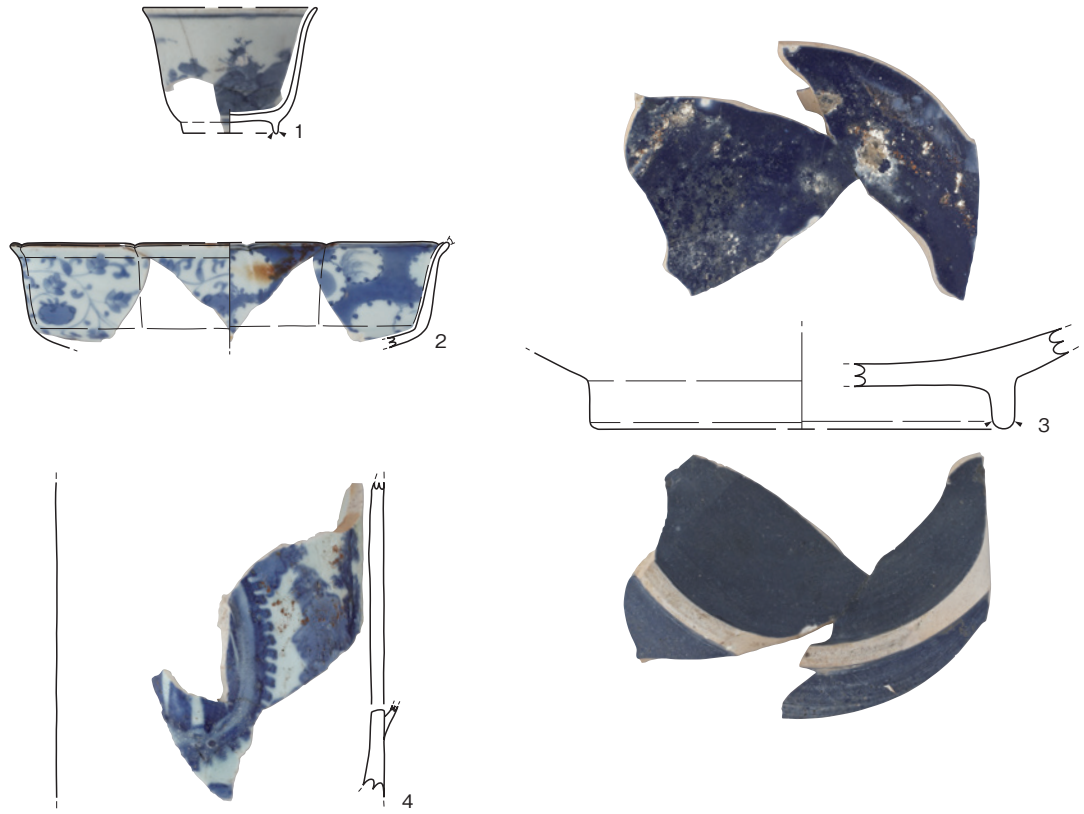


DAINIPPON BREWERY CO. LTD



IV-47 図 遺構外 (5) 出土遺物

〈医学部附属病院入院棟 A 地点 C2 層と接合〉



IV-48 図 接合資料

【引用・参考文献】

- 葵航太郎・木村一彦 2001 「オールド大倉・東陶・名陶 大正・昭和モダン食器」
- 安芸穂子・小林照子・堀内秀樹 2012 「東京大学構内遺跡出土人形・玩具の分類」『東京大学構内遺跡調査研究年報 8』東京大学埋蔵文化財調査室
- 石川県図書館協会 1938 「東邸沿革図譜」『景周先生小著集』
- 江戸文化資料刊行会 1970 万治年間江戸測量図
- 大成可乃 2011 「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(2)」『東京大学構内遺跡調査研究年報 7』
- 加藤晃 1989 「江戸時代の瓦における江戸式の展開」『史学研究集録』第 14 号：43-61、國學院大學日本史学専攻大学院会
- 加藤晃 1992 「江戸瓦の変遷 - 加賀藩本郷邸出土の瓦について -」『國學院雑誌』第九十三卷第十二号：78-97、國學院大學
- 加藤晃・金子智 1990 「御殿下記念館・山上会館地点検出の瓦について」『山上会館・御殿下記念館地点 第 3 分冊』東京大学埋蔵文化財調査室：140-148
- 金行信輔 2007 『寛永江戸全図』之潮
- 金子智 1990 「第 2 章 御殿下記念館地点、山上会館地点検出の瓦について 8. 道具瓦」東京大学埋蔵文化財調査室編『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』：174-183
- 統群書類従完成会 1964 『新訂 寛政重修諸家譜』
- 小林照子 2020 「研究 10 本郷構内出土白色系かわらけの消長」東京大学埋蔵文化財調査室編『医学部教育研究棟地点 研究編』
- 古板江戸図集成刊行会 1958 『古板江戸図集成』
- 鈴木本章 1989 「遺跡の層序と地質学的調査・分析」『理学部 7 号館地点』東京大学遺跡調査室
- 地図資料編纂会 1988 『江戸 - 東京市街地図集成』柏書房
- 東京大学遺跡調査室 1990 「第三節 各地点出土瓦」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』：757-771、東京大学医学部附属病院
- 東京大学埋蔵文化財調査室編『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』：140-148
- 東京都教育委員会 1985 『都心部の遺跡』
- 長佐古真也 2020 「研究 12 東京大学本郷構内遺跡出土手捏かわらけの元素分析による生産地推定」東京大学埋蔵文化財調査室編『医学部教育研究棟地点 研究編』
- 成瀬晃司 2008 「Ⅲ章 白山御殿の惣囲いについて」『東京大学構内遺跡調査研究年報 6』東京大学埋蔵文化財調査室
- 日本建築学会 1908 「卷末附図説明 前田侯爵邸建築工事概要」『建築雑誌』263
- 橋本真紀夫 2009 「東京大学浅野地区の方形周溝墓における土壌分析」『浅野地区 I』東京大学埋蔵文化財調査室
- 堀内秀樹 1997 「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報 1』東京大学埋蔵文化財調査室
- 堀内秀樹 2016 「江戸大名藩邸出土陶磁器の消費モデル - 加賀藩本郷邸の出土資料の分析から -」『中近世陶磁器の考古学』第二卷
- 堀内秀樹 2020 「加賀藩本郷邸南域の地業について - 医学部教育研究棟地点および周辺の調査から -」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部教育研究棟地点』東京大学埋蔵文化財調査室
- 宮崎勝美 1994 「大名藩邸の境界装置 - 表長屋の成立とその機能 -」『武家屋敷 空間と社会』山川出版社
- 吉田伸之 1988 「近世の城下町・江戸から金沢へ」『週刊朝日百科日本の歴史別冊 歴史の読み方 2 都市と景観の読み方』朝日新聞社
- 吉田伸之 1992 「都市の時代」『日本の近世 9 都市の時代』中央公論社
- 本郷區役所 1937 『本郷區史』
- 東京大学埋蔵文化財調査室関連刊行物
- 東京大学遺跡調査室 1989 『理学部 7 号館地点』
- 東京大学遺跡調査室 1990a 『法学部 4 号館・文学部 3 号館建設地遺跡』
- 東京大学遺跡調査室 1990b 『医学部附属病院地点』
- 東京大学総合研究博物館 2000 『加賀殿再訪』
- 東京大学総合研究博物館 2011 『弥生誌 - 向岡記碑をめぐって -』
- 東京大学総合研究博物館・東京大学埋蔵文化財調査室 2017 『赤門 - 浴姫御殿から東京大学へ -』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1997 『東京大学構内遺跡調査研究年報 1』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1999 『東京大学構内遺跡調査研究年報 2』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2002 『東京大学構内遺跡調査研究年報 3』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2004 『東京大学構内遺跡調査研究年報 4』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2005a 『医学部附属病院外来診療棟地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2005b 『工学部 1 号館地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2006a 『工学部 14 号館地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2006b 『東京大学構内遺跡調査研究年報 5』

- 東京大学埋蔵文化財調査室 2008 『東京大学構内遺跡調査研究年報 6』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2009 『浅野地区 I』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2011a 『教育学部教育研究棟地点・IML 地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2011b 『東京大学構内遺跡調査研究年報 7』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2012a 『東京大学構内遺跡調査研究年報 8』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2012b 『総合研究博物館新館地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2016 『医学部附属病院入院棟 A 地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2017 『東京大学構内遺跡調査研究年報 10』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2019a 『東京大学構内遺跡調査研究年報 11』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2019b 『東京大学構内遺跡調査研究年報 12』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2019c 『医学部教育研究棟地点報告編』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2019d 『医学部教育研究棟地点研究編』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2021a 『東京大学構内遺跡調査研究年報 13』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2021b 『東京大学構内遺跡調査研究年報 14』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2021c 『医学部附属病院看護職員等宿舍 1 号棟地点・臨床試験棟地点・看護職員等宿舍 3 号棟地点 (1)』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2021d 『薬学部新館地点・薬学部資料館地点』

研究編

経済学研究科棟地点B面の遺構分布からみた空間利用

追川吉生

1. B面の概要

経済学研究科棟地点は武蔵野台地東端の、本郷台に立地する。調査地の現地表面は約23.1～23.3mである。自然堆積層の立川ローム層は21.7～22.2mで確認した。本地点はその間に2枚の遺構検出面がある。上位のA面は標高22.4～22.6mに展開しており、溶姫御殿から近代にかけての遺構を検出している。B面は立川ローム層上の遺構検出面である。

B面には縄文時代～中世までの遺構はみられない。加賀藩がこの地を拝領した時期は詳らかでないが、『東邸沿革図譜』によれば1616・17年（元和2・3）のことであるという。本地点の最も古い遺物は寛永期に帰属するものである。B面の出土遺物・検出遺構は全て加賀藩邸のものである。一方、溶姫（景德院）が12代藩主斉泰の正室として入輿したのは1827年（文政10）であり、御守殿（当初は御住居と呼称）の造営は1825年（文政8）から行われている。したがってB面は17世紀前葉から19世紀前葉までの長期間にわたる。B面とA面との間の盛土層の厚さは約70cmある。II-1図は堆積状況を模式化した柱状図であるが、B-A面間の盛土の堆積状況は、短期間に一気になされたわけではないことを示している。A面の最終的な盛土造成は溶姫の御守殿建築に伴うものであったとしても、その間に上屋敷となった1683年（天和3）以降でも本地点周辺では、松姫（光現院）の入輿に伴う御守殿建築とその解体がなされており、そうした藩邸内の空間利用の変遷も嵩上げに関係していると考えられる。

B面で検出した336基の遺構のうち、最も検出例が多いのは土坑である。その多くは円形を呈しており、樹木を植えた、もしくは抜いた痕跡と捉えられる植栽痕（豊島区遺跡調査会1990、1991）であり、廃棄に供された土坑は多くない。また地下室が3例、井戸や便所は未検出である。こうした遺構の検出状況から、B面段階の本地点は殿舎が建てられた生活空間というよりは、樹木が植えられた空閑地として利用されていたことがうかがえる。こうした状況は上屋敷として古い絵図と位置づけられる「御上屋敷殿閣図」（I-4図）でも看取できる。

とはいえB面で検出した溝には、調査区を南北方向あるいは東西方向に貫くようなものがいくつかあり、空

閑地とはいえ、いくつかの区画に分けられていたこともうかがえる。そこで、こうした屋敷内の区画施設だったと考えられる溝の分布から、該期の空間利用のあり方を検討したい。

2. 溝の分類からみた時期区分

B面で検出した溝はいずれも素掘りの溝で、築石や板による土留の痕跡は認められない。この素掘りの溝を構造から以下の3つの形態に分類しよう（各形態には主軸方向を示す記号として南北方向にはA、東西方向にはBを併記する）。

- 1類：素掘りの溝で、底部中央に柱穴を伴うもの。
- 2類：素掘りの溝。
- 3類：上水木樋のホリカタ。

調査区のほぼ中央、Cr205、Cs205～Cr210、Cs209グリッドには1～3類全ての形態の溝、即ち、A1類（SD449）、A2類（SD394）、A3類（SD428）が存在する。調査区内でこうした分布を看取できるのはこの一帯のみである。A面では当該グリッドに区画施設としての溝は検出していない。したがって17世紀前葉から19世紀前葉までの長期間にわたるB面段階において、この附近に区画施設が造り替えられながら、長期にわたって設けられていたことが推測される。

ではそれぞれの溝が区画施設として機能していた期間はいつだろうか。溝は遺物の出土量の少ない遺構だが、上記3基の溝に関して言えば、SD394（A3類）から紛れ込みの可能性の高い19世紀前葉から中葉にかけての遺物が出土しているに過ぎない。ただしSD394は北側でSU286に壊されていることから、少なくともSU286以前に位置付けることができるだろう。SU286は天井が被せられたオープンカットの地下室で、18世紀後葉の出土遺物が出土しているので、SD394の年代はそれ以前ということになる。

SD449（A1類）とSD428（A3類）は切り合いが認められる。また東西方向に延びるSD200（B1類）も底部中央に柱穴を伴う構造がSD449と共通している上、Dc206グリッド内でSD428に切られているものの、

SD449 との接続関係が認められる。

SD428 は出土状況から千川上水の木樋のホリカタと捉えられている（Ⅲ章）。千川上水の給水期間は、1696年（元禄9）から1722年（享保7）、1781年（天明元）から1786年（天明6）なので、SD449 と SD200 は少なくとも17世紀末以前に位置付けることが可能である⁽¹⁾。

以上のことから、Cr205、Cs205～グ Cr210、Cs209 グリッドに存在する A1～A3 類の溝の前後関係は以下のようになる。

SD394（A2 類）：18 世紀後葉以前

（N-6° -E）

SD428（A3 類）：17 世紀末から 18 世紀前葉

（N-7° -E）

SD449（A1 類）：17 世紀末以前

（N-6～7° -E）

加賀藩邸内の遺構の主軸は、時間的制約と空間的制約によって一定の方向がとられることが成瀬晃司によって明らかにされている（成瀬 1990）。これは下屋敷段階には南通町（現春日通り）を軸としていたものが、上屋敷段階（1683年・天和3以降）になると大御門が中山道に向かうようになった（大御門が面していたのは日蔭町通）のに合わせて、御殿空間の諸施設も中山道を軸とした（詰人空間は南通町を軸としたままだった）ことに起因する。上記3つの溝はいずれも主軸が6～7°東にブレており、これは中山道（N-5～10° -W）と同軸と捉えて差し支えない。

このうち千川上水の木樋のホリカタである SD428 は、この木樋が検出状況から埋設管であることが明らかのため、区画施設からは除外しよう。その結果、Cr205、Cs205～Cr210、Cs209 グリッドの区画施設は SD449 と SD394 ということになる。これを基に、B 面を 17 世紀末以前（B 面 1 段階）と以後（B 面 2 段階）の 2 段階にわけて、空間構成を検討してみよう。

3. B 面 1 段階（17 世紀末以前）の空間構成

SD449 と同様に、底部に柱穴を伴う 1 類の溝は南北方向の溝だけでなく、東西方向の溝でも認められる。SD200（B1 類）は Cs205 グリッドで SD449 と接続して東側へ延びる。SD387、SD388 は平行した 2 本の溝で、どちらも南側を攪乱で壊されている。SD387 はそれを挟んだ延長線上で A1 類の SD460 を検出しているの、本来は一体のものだと考えられる。

SD499 は Cs208 グリッドでも、東側へ延びる溝

SD367 が接続している。SD367 は遺存状況は良好とは言い難いが、底部に掘り込みを有している点や遺構主軸が SD200 と同じことから、これも同時期の区画施設と考えられる。SD200 との間隔は 13.5m である。SD367 と主軸方向を同じくする、調査区南東端で検出した SD212 からは 17 世紀代の遺物が出土している。SD367 の延長線上ではないので同時期に存在した可能性は低い、一連の区画施設と捉えてもよいだろう。

Cp205 グリッドで約 1m の間隔で平行している SD387、SD388 も A1 類の溝である。南側の攪乱によって壊されているが、Cq207 グリッドにある SD460 は SE387 の延長線上にあたっており、本来は同一遺構だったものと推測される。この SD460 は鉤手状に西側へ屈曲した後、Cp208 付近で更に南側へと屈曲して調査区外へと続いていく。

こうした 1 類の主軸は、A1 類は SD449 と同様 N-6～7° -E であるのに対して、B1 類は N-93～98° -E なので、90° の角度で屈曲していることがわかる。このことから 17 世紀末の本地点は、A1 類および B1 類によって 5 つに細分されていたと推測される（1 図）。これを B 面 1 段階のエリア 1～5 と呼称しよう（1 図 1～5）。医学部附属教育研究棟地点では、F 面で検出した SD870・980・4498 や SD1211・4426 が 1 類と同様に底部に柱穴を伴う形態の溝からなる屋敷内の区画施設と位置付けられている（東京大学埋蔵文化財調査室 2019、3 図）。医研地点のこれらの溝からは 17 世紀前半の遺物が出土していることから、B 面で検出した 1 類の区画溝も、下屋敷段階まで遡る可能性が高い。

遺構分布をみてみよう（1 図で提示した土坑と地下室は、17 世紀末以前の遺物が出土したものである）。遺構は調査区全体に均質に検出しているわけではなく、疎密をもって分布していることがわかる。特に植栽痕の分布が密なのがエリア 2 の南側、SD460 の東西部分だろう。エリア 5 も調査区内に限れば植栽痕で埋めつくされているような状況である。一方、エリア 3、4 では地下室や土坑が構築されており、植栽痕はそれらとはある程度の距離をもって認められる。建物遺構は未検出だが、土坑や地下室の検出から、何らかの施設は存在した可能性が高い。こうしたことから、樹木が茂る部分とオープンな部分とが併存していた景観が推測される。

SD449 と SD387 とに挟まれたエリア 2 に関しては、18 世紀代の大型遺構や攪乱の影響が著しい。しかし植栽痕は SD449、あるいは SD387 に沿って南北に並ぶような傾向がうかがえるので、逆 L 字状を呈したエリア 2 は居住空間というよりは、エリア 1 とエリア 3～5 の間

の通路として機能していた可能性がある。ただし発掘調査段階で、当該エリアに道路遺構になるような硬化面や版築面は認められなかった。

なお後代の植栽痕に壊されてエリア3・4にまたがるSD317は素掘りの溝(A2類)だが、この遺構の主軸方位はN-3°-Wを示し、ほぼ南北軸に沿ったものとなっている。SD200に切られていることから、B面1段階よりも更に古い区画施設が存在することがうかがえる。同様に調査区南西隅で検出したSD670(B2類)も主軸をN-98°-Eを示しており、東西軸を基準としている。こうした南北あるいは東西を基準とする遺構も少数ながら検出しているが、いずれも部分的な検出であることから、ここではB面1段階に先行する遺構群の存在を指摘するに留めたい。

4. B面2段階(17世紀末以降)の空間構成

調査区を南北に貫く区画施設は、SD449からSD394(A2類)に移る(2図)。前段で調査区東側を3つに分けていた溝は廃絶され、1つの区域に統合されたようだ⁽²⁾。一方調査区西側は、Cr208グリッドでB2類の溝(SDSD602、SD607、SD629)がSD394と接続する。この結果、調査区内はエリア1～3に細分される(2図1～3)。

遺構の分布状況を見てみよう。エリア1内に認められる植栽痕は、前段階のSD387・388、SD460沿いに位置しているので、これらも前段階に帰属すると考えられる。そうするとエリア1は遺構がほとんどみられない空地となる。エリア2はB2類の溝周辺に植栽痕が集中する。SD602、SD607、SD629が延長線上に並ばないことと、いずれも植栽痕によって壊されていることから、ここに植えられていた植木の植え替えの度に、区画施設が造り直されていたことが推測される。ただしこの段階は17世紀末以降19世紀前葉までと長期間にわたるので、植え替えと区画施設の造り直しが短期間の内に頻繁に繰り返されたと捉えるのは早急だろう。

エリア3の区画施設であるSD394に沿って、SD428(千川上水)が敷設されている。2図で示した植栽痕は、当該期の遺物を出土したものに限っているので、実際にはこれよりも植栽痕は多いはずだ。しかし調査区南側の植栽痕群が前段階のエリア5の区画をなしたSD367に沿って分布していたことを踏まえれば、植栽痕の分布は前段階のエリア3～5よりは疎だった可能性が高い。また地下室や土坑は未検出なので、植木の少ないオープンな空地が広がっていたことが推測される。その中で注目さ

れる遺構が調査区北東隅で検出したSK106・SK162だろう。SK106は遺構の北側が調査区外に続いているが両者の間隔は約1.8mで、どちらも階段状の構造を有することから一連の遺構であると考えられる。

18世紀後半になるとSD394を壊してSU286が構築される。SD394を検出したのが調査区北端であるため、同様の地下室が北側に他にも分布するかは不明だが、南側に類似の地下室は検出していない。区画施設を壊し、エリア1と3にまたがるように地下室が構築されていることから、18世紀後半代に空間構成に大きな変化が生じたことは確実だが、発掘調査ではそれに対応するような新たな区画施設を検出することができなかった。そのためB面3段階に位置づけられるべき18世紀後半以降の状況は不明である。

5. 遺構の分布状況からみた 富士山のあり方

以上のように、B面は屋敷内の区画施設の変遷に伴って3つの段階(17世紀末以前、17世紀末～18世紀後葉以前、同以降)があることが想定された。そのうちB面3段階の空間構成は詳らかにならないが、いずれにしても本稿でエリア1とした調査区西側一帯がB面の期間を通じて遺構がほとんど存在しない空地であったことは明らかで、これはB面の遺構分布上の大きな特徴の1つといえるだろう。

現在、本地点の西側には赤門総合研究棟が隣接している。しかしこれが建設された1964年(昭和39)まで、経済学部棟から本地点の西側には、椿山と呼ばれる築山が存在した。これは江戸時代の富士塚跡で、駒込の富士神社境内にある富士塚はこれが遷座したものと伝わっている(『新編武蔵風土記稿』による)。景観年代が1840～45年に比定される(細田1990)「江戸御上屋鋪惣御絵図」には、緑色に彩色された富士山に「富士権現旧地」と記されている(本研究編研究2 2図「近世後期の遺構と土地利用」)。また椿山は1885年(明治18)に坪井正五郎によって発掘調査が行われ石段を検出しており、坪井はこれを富士塚に伴うものと捉えている(有坂1923)。B面を通じてエリア1が遺構の疎な空間であったのは、この富士山が存在したことによる。

ところで富士山の構築時期は詳らかでなく、『新編武蔵風土記稿』では1573年(天正元)、滝沢馬琴の『兔園小説』では1603年(文政4)とされている。竹谷朝負は本郷邸の富士山に関する論考において、筆者による本地点の概報(追川2000)に基づいて後者の説を有力な

ものと位置付けている（竹谷 2009）。そこで改めて B 地点の様相からエリア 1 に存在した富士山について検討を加えよう。

エリア 1 は B 面の全期間を通じて、遺構がほとんど存在しないということは前述した。エリア 1 で例外的に検出した遺構が SK641・642・643・640 である。これらは不定形の土坑で、出土遺物はプラスチックコンテナ 1 箱と少ないが、中国製磁器や瀬戸・美濃系の天目茶碗に、カワラケを伴う組成や、金箔瓦を共伴することから、概ね 17 世紀前葉に位置付けられる。

また覆土（1 層、2 層、9 層）には黒褐色土が認められる。こうした覆土は本地点では他に類例をみないが、医学部附属病院入院棟 A 地点 E 層や同第 2 中央診療棟地点 8 層などの盛土には、これに類似した土が認められる。成瀬は本郷台東縁の傾斜地上に位置する入院棟 A 地点の盛土造成の層位的検証から、これを 1639 年（寛永 16）の富山藩邸建設がそれ以前の開発によるものとし、出土遺物の年代から 1620～30 年代に位置付けている（成瀬 1994）。SK641・642・643・640 中に含まれる黒褐色土がどこから持ち込まれたかは詳らかでないが、仮に藩邸東側の盛土層から持ち込まれたとするならば、それは黒褐色土による盛土造成がなされた 1620～30 年代以降のこととなる。エリア 1 の遺構分布状況や椿山の位置関係から、SK641・642・643・640 の上に位置する富士山の構築はそれ以降のこととなり、馬琴が示した 1603 年（慶長 8）まで遡ることはないと考えられる。

本郷邸の全体図で最も古い段階に位置付けられている「武州本郷邸図」（1688 年・元禄元）では、大御門よりも北の位置に東西に細長い不定形な緑地が描かれている。続く「上屋敷殿閣図」（下限年代が 1702・元禄 15）にも同様の描写が認められるので、これが富士山の描写と捉えてよいだろう。これらに描かれた富士山には、外周に樹木が茂るような描写がなされているが、富士山の周辺には囲いや樹木は描かれていない。

藩邸の全体図の中で富士山の形状が具体的に描かれているのはむしろ少数で、多くは富士山の範囲を囲み線で描くのみである。こうした描写は富士山そのものなのか、あるいはその周囲に設けられた囲みなのかが判然としない。富士山の形がうかがえる絵図の一つ、「前田家本郷屋敷略図」（1803～1806 年）では円形の富士山が描かれており、「山ノ上御亭」と書き添えられている。また 1806～1825 年に位置付けられている（細田前掲）『御上屋敷御圍并惣小屋割図』は、藩邸内外の区画の状況と小屋割の状況を示した図である。ここでは富士山の西側と南側に御殿空間を画す塀が設けられており、北側

から東側にかけては弧線によって囲まれている。このうち西側と南側の塀の部分にはそれぞれ拾六間九寸、三拾間二尺五寸九分と註記がなされている。ただし、これが富士山そのものの規模なのか、富士山を囲む範囲を示したものなのかは詳らかでない。「江戸御上屋鋪惣御絵図」には富士山の寸法についての記述はないが、1/600 のスケールの絵図には 10 間（18 m）四方のグリッドが描かれており（細田前掲）、これに基づけば南北 42m、東西 39m となる。

必ずしも正確な縮尺で作成されたわけではない藩邸絵図を基に、屋敷内の施設の位置や規模を比較することはできない。しかし「江戸御上屋鋪惣御絵図」に描かれた富士山が正方形に近い形であるのに対して、「御上屋敷御圍并惣小屋割図」の富士山は（富士山そのものは描かれていないが）東西に細長い形状をしていた可能性がある。「武州本郷邸図」や「上屋敷殿閣図」に描かれている富士山は東西に細長く描かれている。このことから富士山の形状や大きさが、江戸時代の中で変化していたことも考えられる。寛永期の遺物が伴う SK641・642・643・640 の上に富士山が構築されているならば、その構築時期は寛永期以降に下がるが、該期の富士山がより小型で、その東縁が SK641・642・643・640 よりも西側で収まっていたならば、これらの土坑との併存や、富士山の構築年代自体がそれ以前に遡る可能性もある。

富士山の形状や規模が変わることを裏付ける史料はないが、B 面の検出状況、特に SK641・642・643・640 と富士山の構築時期の関係を考察する上では検討すべき課題の 1 つである。

6. B 面の遺構分布からみた下屋敷段階の本郷邸の様相

竹谷は『三壺聞書』の慶安 3 年（1650 年）の次の記事から、富士山が当初は本郷邸外にあったことを指摘している（竹谷 2009）。

「慶安三年四月一九日午の刻成に、天気能くしてから風はげしく吹けるに、本郷五町目の加賀の御下屋敷へ行く道筋に、富士塚とて小山有り。」⁽³⁾

1650 年（慶安 3）の火災の痕跡は、本郷構内で実施したこれまでの発掘調査では未確認なため火災の規模や被災範囲の実態は不明である。しかし火災の記事は『徳川実紀』にもみえるので、火災自体はあったと考えていいだろう。この時期の本郷邸は未だ南側が南通町（現在の

春日通り)に面しておらず、同心屋敷や寺院などとの間に道が敷設されていた。この道との屋敷境や道に面して設けられていた大御門は医学部附属教育研究棟地点の発掘調査で検出しており、その空間利用については堀内秀樹が考察を加えている(3図、堀内2020)。

「(江戸全図)」(臼杵市教育委員会蔵、4図上)の景観年代は金行信輔によって1642年(寛永19)11月から、1643年(寛永20)9月と比定されている(金子2007)。本郷邸が南側の同心屋敷など約2万坪を添地として取り込むのは1657年(明暦3)の大火以後のことなので、本図は1650年(慶安3)当時の状況を考える上で有効な資料となる。

そこで本図から本郷邸周辺の屋敷割をみてみよう。まず本郷邸は中山道に面していない。また南側の同心屋敷との間に敷設されていた道は中山道から東へ直進するのではなく、三筆の大森半七同心屋敷が出合うT字路(4図a)をなしてから鉤手状に東側へのびている。

このT字路と中山道との間、町家と大森半七同心屋敷とに挟まれた道が北へと伸びている(4図b)。その行き止まりに、もう一筆の大森半七同心屋敷が存在する(4図c)。

「(江戸全図)」の町割りをキャンパス内の各調査地点と重ね合わせることは不可能だが、医学部教育研究棟地点の門遺構(SB250)と、B面の最も東側に位置する土坑(SK641・642・643)の距離は、東西間106.8m、南北間61.6mである。また懐徳門地点からは、南側の武家屋敷などが加賀藩邸に取り込まれて拡張された以後の、日蔭町通りと加賀藩邸との屋敷境を検出しているが(東京大学埋蔵文化財調査室2019)、最も古い段階の屋敷境は日蔭町通り敷設以前の町家と同心屋敷との屋敷境と考えられる。日蔭町通り敷設以前の屋敷境が、それ以降の屋敷境と層位的に重なって認められるということは、「(江戸全図)」で町家と同心屋敷の間に引かれた屋敷境を示す黒線の位置の、正確さに欠けるとはいえ1つの目安ともなろう。というのも椿山の跡地に建つ経済学部棟は、懐徳門地点を含む大学の塀の延長線上よりも東側に位置しているからである。

4図をみると大森半七同心屋敷(4図c)は加賀藩邸の東側に食いこむようにひろがっており、藩邸との屋敷境は鉤形状を呈している。

B面において1段階エリア1、2段階エリア1は遺構分布の疎なエリアで、植栽痕もその区画をなす溝の周囲には著しく切り合って存在するものの、エリア1の内部には展開しない。前項で指摘したように、富士山の規模が変化している可能性もあるが、そうであってもこうし

た植栽痕の分布状況から富士山がエリア1よりも東側まで広がっていたことはない。

B面1段階でエリア1を区画した溝はSD387-SD460である。この溝は鉤手状に屈曲して調査区を南北に貫いている(1図)。「(江戸全図)」の大森半七同心屋敷(4図c)の屋敷境も鉤手状になっている。同図においては本郷邸と大森半七同心屋敷(4図c)との屋敷境は、南北方向に対して西側へとブレており、その点がSD460-SD387とは異なっている。しかしSD460の東西方向の溝は、該期の屋敷境SD311とほぼ平行の関係にあり(1図)、明暦の大火以前のある段階の屋敷境であった可能性が高い。したがってエリア1に存在した富士山は、この段階では大森半七同心屋敷内に位置していたこととなる。

富士山が加賀藩邸に囲い込まれる時期、すなわちエリア1が加賀藩邸となった時期はいつだろうか。竹谷は『東邸沿革図譜』の記述に基づき、1659年(万治2)をあげている。ただし富士山が加賀藩邸の敷地となったことに関しては、『東邸沿革図譜』以外にみられない。SD460-SD387が屋敷境であるならば、その西側(エリア1)にあった富士山も、同心屋敷の本郷邸への取り込みに伴って本郷邸内になった可能性がある。

7. B面の遺構分布からみた上屋敷段階(18世紀～19世紀前葉)の本郷邸の様相

18世紀代の本郷邸の全体図には、御殿空間内を詳細に描写したものは少ない。そこで松姫(綱吉養女、光現院)の御守殿を描いた「御守殿廻惣御絵図」をみてみよう。

松姫は1708年(宝永5)に入興しており、その御守殿は松姫逝去後の1721年(享保6)に取り毀されている。絵図に描かれているのは主殿のみだが敷地は9,000坪にのぼっており、当時の御殿空間では本殿よりも大きな面積を占めていた可能性がある(宮崎1988)⁽⁴⁾。

「御守殿廻惣御絵図」をみてみよう(4図下)。東西に長い富士山(富士社跡)の周囲は「塀」で囲われている。この塀の東側には便所が4つ並んでおり、そのとなりに「腰掛」がある。いずれも松姫の御守殿内の施設だ。一方、「腰掛」の塀よりも南側は御殿域である。ただ殿舎が展開するのはより南側で、その間の空地には「御表向/御広敷」がある(4図)。この空地には御守殿と御殿とを結ぶ「御廊下」が設けられていた(4図)。この廊下が御守殿と接続する周辺部に注目してみよう。御守殿と御殿とを隔てる塀を挟んで2つ、廊下の下に施設が存在している(4図d、e)。「床下通路」とあるので、

渡り廊下の下に設けられたアンダーパスだと思われる。調査区北東隅で検出したSK106とSK162は階段状の構造となっている。この構造から、両遺構は図で描かれたアンダーパスに相当する可能性が高い。

B面の遺構のうち17世紀後葉以降に帰属する(2図)ものの中には、B面2段階と同3段階に帰属する遺構が含まれている。そのうちのいくつかは「御守殿廻惣御絵図」で描かれた状況を反映していることになる。

「御守殿廻惣御絵図」では富士山を画する塀から御守殿一大書院間の渡り廊下までの間は、空閑地だが、「御表向/御広敷」が描かれている。しかしB面ではこれに該当する建物遺構は検出していない。また2図をみてわかるように、この段階でも調査区には広く植栽痕が広がっている。前段階に引き続いて富士山周辺に植栽痕が集中しているが、富士山から渡り廊下までの間に相当する部分にも植栽痕が多い。従って絵図では空閑地となっているが、実際には緑樹帯となっていた可能性が高い。

なお「御守殿廻惣御絵図」では区画施設(4図f)が水色で彩色されている。発掘調査では千川上水に関連するSD428が検出している。千川上水は1696年(元禄9)に敷設され、1722年(享保7)に廃止となっている⁽⁵⁾。松姫の御守殿が存在していた期間は、千川上水が機能していた時期にあたり、絵図上の水色の線がこれを示しているかもしれない。ただし水色の線の南側に一ヶ所、戸口をうかがわせる描写が認められる。SD428の南側(SK355以南)では、鉄釘がほぼ等間隔で並んだ状態で出土しており、埋設管だったと思われる。絵図にはSK355に相当する施設はないが、絵図で戸口が描かれているのは空閑地の南寄りの、考古学的に埋設管であることを確認できた部分である。そのためこの場所に戸口が存在するならば、埋設管とは別に地上に区画施設があったことになる。

なおB面2段階では東側がc,d,eの3つに細分される可能性を指摘したが(2図)、前述のように該期は御殿空間内を詳細に描いた絵図が極めて少なく、こうした状況をうかがわせる資料はない。

8. B面の空間利用と植栽痕のあり方

以上のようにB面段階の本地点は、富士山およびその周辺のエリア1を除いて、樹木が広がるような空間だった。富士山周辺を含むエリアを区画する施設周辺は植栽痕が密集しているが、それ以外では植栽痕の分布に特に密集した状況はみられない。B面段階の植栽痕の特徴の一つが、切り合い関係を有するものが多いというこ

とだ。樹木の生育条件を踏まえれば、切り合い関係を有する植栽痕は、樹木の密集した状況ではなく、植え替えが繰り返された状況を想定できる。

つまりB面でみられる植栽痕の検出数の多さは、長期にわたって樹木が植わる空閑地として利用され続け、その間に植木が植え替えられたという状況を反映したものと推測される。これはB面の時期が17世紀前葉から19世紀前葉までと長期間であることや、A面までの盛土層が1m程度あるにもかかわらず、その間に明確な遺構確認面ないし生活面を認定することができないという堆積状況と合致しよう。

18世紀代の御殿空間を描いた藩邸絵図は限られているが、そこに描かれた本調査地点は、施設のほとんど存在しない空白域である。発掘調査で明らかになった本地点の景観は、植木がある程度の密度で植わった空閑地であった。

ところで植栽痕とは、樹木を植える際、あるいは抜き取る際にその周囲を円形に掘られた穴である(豊島区教育委員会1991)。これは江戸郊外の植木屋跡である染井遺跡の発掘調査を基になされた定義で、植える/抜き取るという正反対の行為を包括したものになっている⁽⁶⁾。遺構断面の観察から、いわゆる「根巻き」や「根回し」の存在が明らかになったように(美濃部1999)、植栽痕の堆積状況の検討から、植える/抜き取るという行為をある程度区別することができるだろう。

SK509(Ⅲ-47図)では、10層が幹で、そこから周囲に根が張っている状況が9~13層にみとれる。特に11~13層を囲むように堆積している9層は白色粘土層で、植樹の際に根巻きがなされた状況を推測させる。9~13層を対象として実施した自然科学分析の結果、9層は本郷台を構成する砂礫層と武蔵野ローム層との間に堆積する、板橋粘土層に由来するものであることが示されている。分析を実施したパリオ・サーヴェイ株式会社は、崖面に露出した板橋粘土層を利用したという可能性を示している(本研究編研究4)。つまり根巻きは本郷邸の外で、恐らく植木屋によってなされた可能性がある。SK555(Ⅲ-49図)は根巻きの痕跡はみられないが、2層、6・7層が幹や根に相当するだろう。2層、6・7層と遺構確認面の間には覆土が1層存在する。したがってこうした堆積状況も、幹だけを伐採して根は地中に遺棄したものと考えられる。

一方、SK607やSK626(Ⅲ-51図)にみられる水平堆積は抜き取った後に堆積し土層と考えられる。SK375(Ⅲ-33図)にみられる不整合な堆積状況も、根を抜く行為によって生じたものだろう。調査の観察所見として6層・

7層が安定的な堆積状況が認められたので、一つの作業仮説として抜根は6・7層側に幹を倒していたことが考えられる。

このように、植栽痕は土層堆積状況の特徴から遺構が形成された要因を推測できる場合もある。覆土中に根の痕跡が認められるのは地中に根が遺棄されたままになっていたことを示しているの、土坑が掘削されたのはその樹木を植えた際の掘削である。対して根の痕跡がなく、覆土が水平堆積やレンズ状の堆積をなす場合は、抜根作業の際に掘られたものだろう（後者には植樹の際のホリカタが存在する場合もある）。

その上で、覆土中に根の痕跡が認められる植栽痕（植樹時に形成）をタイプA、根の痕跡が認められない（抜根時に形成）をタイプB、堆積状況が不明なものをタイプCと分けてみよう。

B面では27基の植栽痕を抽出した。その内訳はタイプAが3基、タイプBが11基、タイプCが13基である（1表）。抽出遺構のみを対象としている点と、対象遺構の半数が堆積状況不明（タイプC）という点は、今後分析対象を非抽出遺構にまで拡大することで改めて検討していくことにする。現時点でみればタイプBがタイプAを上回っている。抜根による植栽痕が多いということは、植木を抜き取った跡地周辺に、新たに植木を植えるという行為が繰り返行われていたというB面の利用状況を示している。

大名屋敷跡では御殿空間（御殿・庭園）、詰人空間を問わず植栽痕が認められる。植木の植樹から抜根までのサイクルは各空間の利用状況を反映していると考えられる。大名屋敷の景観や空間利用の変遷を考える上で、植栽痕のあり方は一つの示唆となる。

B面で検出した植栽痕の多くが、抜根によるものであるということが、17世紀前葉から19c後葉までの長期にわたる樹木が広がる空地というB面の土地利用状況を反映している。

【註】

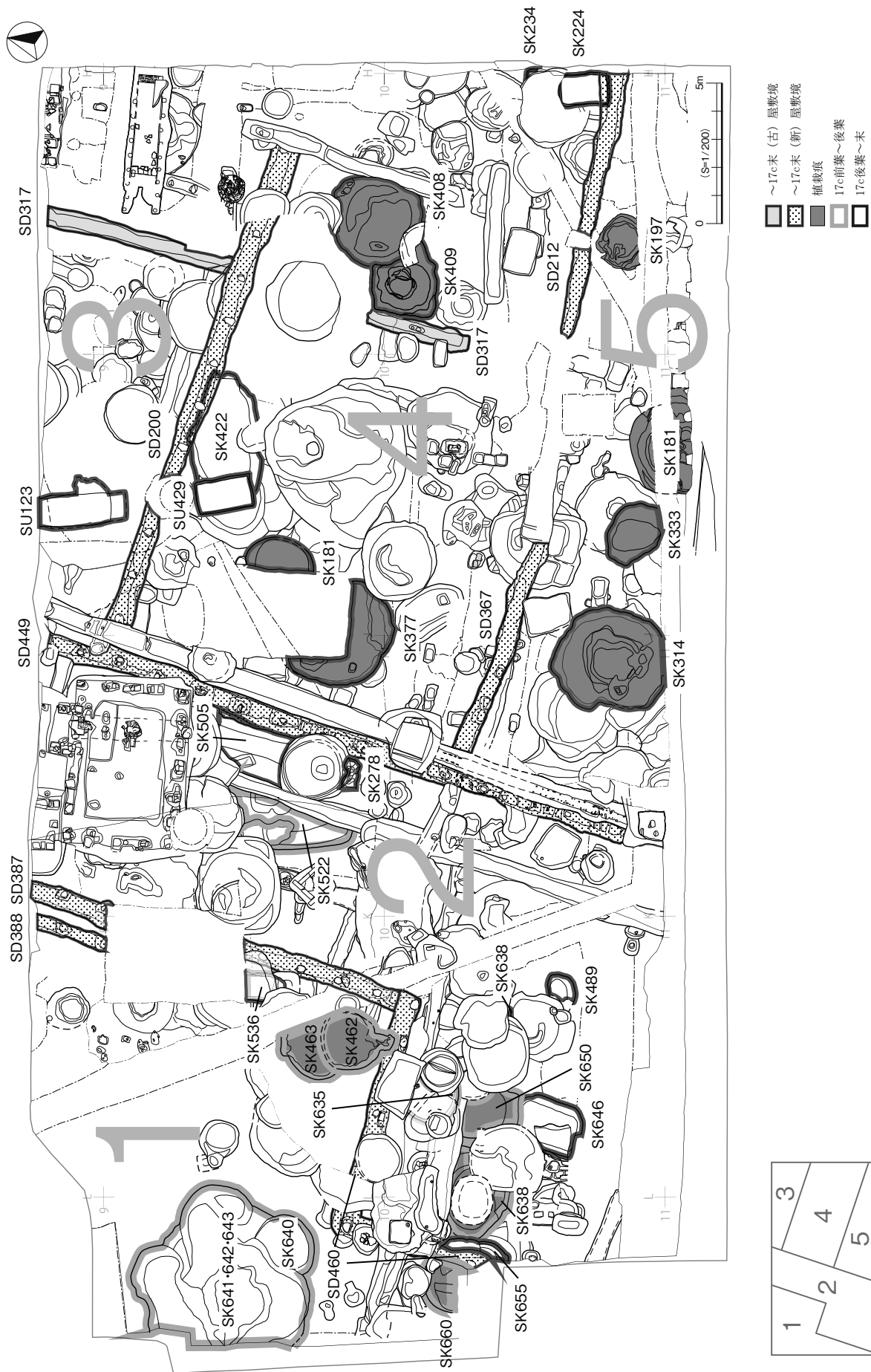
- (1) ただし木樋に沿うような位置で出土した鉄釘はSU355以北では認められないので、上水の導水管の構造が、SU355をジョイント部として南北で異なっていた可能性もある。
- (2) SD394は調査区北端でSD455と直角に接続するが、SD455は東側に続く痕跡が認められない。またDc206-Dc207グリッドのSD187は、SD394と主軸を等しくしているが、遺構の北側が立ち上がることと、南側ほどの程度続いているかが不明なので、これらは措いておく。
- (3) 加賀藩史料3による。日付は『徳川実紀』では3月29日になっ

ている。

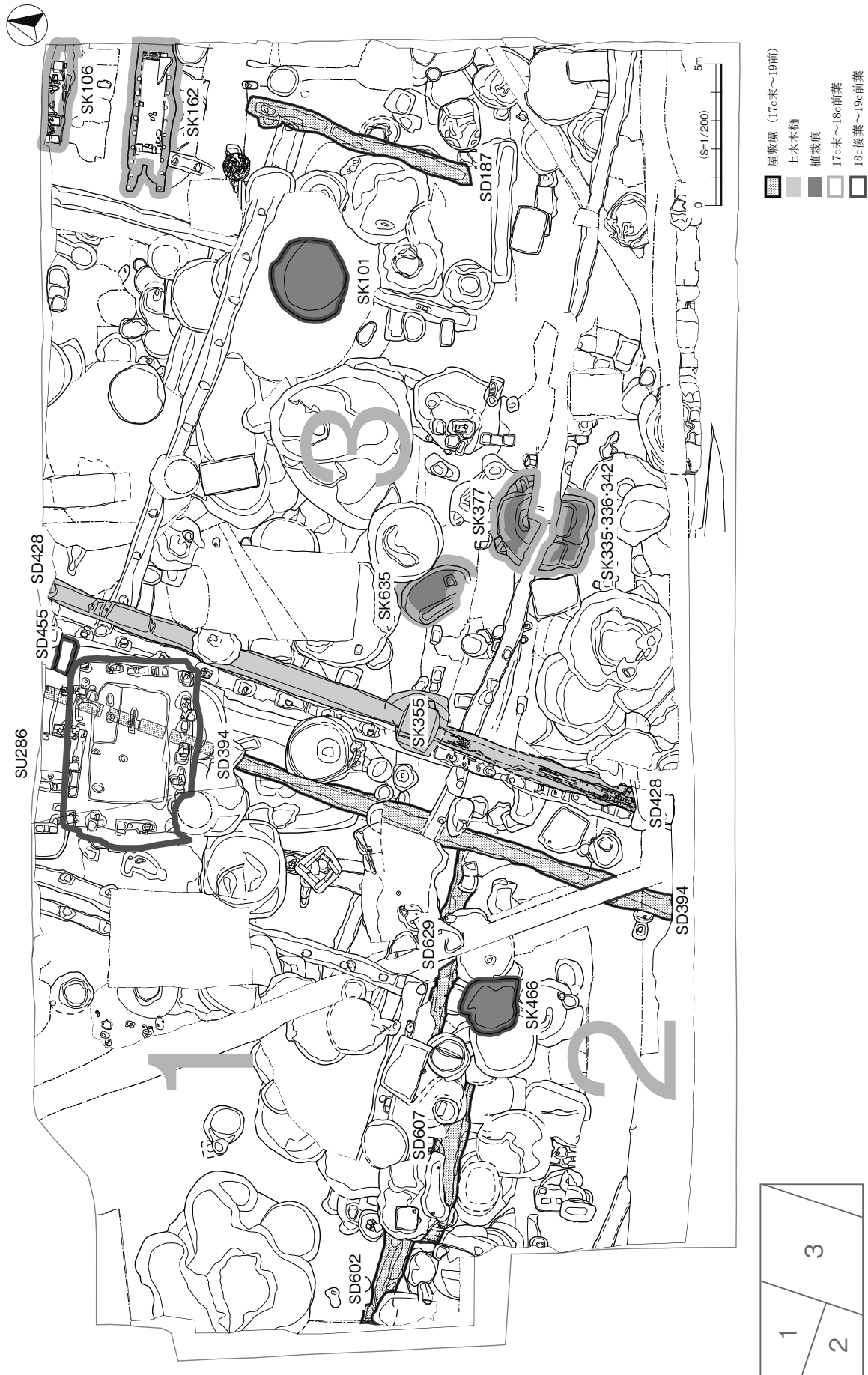
- (4) 山上会館地点の調査区に御守殿北側の一部がかかっており、126号井戸などが御守殿の施設である可能性が高い。
- (5) 1781年（天明元）に再興し、1786年（天明6）に再度廃止となった。
- (6) 江戸の遺跡で広く用いられている植栽痕という遺構名は、植える行為と抜く行為という、対極的な形成要因を併せ持つ点がタームとしての問題点ではあるが、一方で江戸の遺跡では広く用いられていることから、本稿でも用いることにした。

【参考文献】

- 金行信輔 2007 「寛永江戸全図 解説」 之潮編集部編 『寛永江戸全図 仮撮影版』 之潮
- 竹谷朝負 2009 『富士塚考 江戸高田富士築造の謎を解く』 岩田書院
- 豊島区教育委員会 1990 『染井Ⅰ 染井遺跡日本郵船地区』
- 豊島区教育委員会 1991 『染井遺跡の発掘調査』
- 豊島区教育委員会 1991 『染井Ⅱ 染井遺跡丹羽家地区』
- 成瀬晃司 1990 「江戸藩邸内土地利用研究の一指針」 東京大学遺跡調査室編 『東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館地点・文学部3号館地点』 pp.813-831
- 成瀬晃司 2016 「加賀藩本郷邸における斜面地開発と変遷」 東京大学埋蔵文化財調査室編
- 『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属入院棟A地点 研究編』 pp.81-117
- 東京大学埋蔵文化財調査室編 2019 『東京大学本郷構内の遺跡 医学部教育研究棟地点 報告編』
- 細田 義 1990 「加賀藩本郷邸の全体図について」 東京大学埋蔵文化財調査室編 『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』 pp.24-46
- 堀内秀樹 2020a 「医学部教育棟地点の発掘調査成果と土地利用1 天和2（1682）年まで」 東京大学埋蔵文化財調査室編 『東京大学本郷構内の遺跡 医学部教育研究棟地点 研究編』
- 前田育徳会編 1980 『加賀藩史料（復刻版）』 3
- 美濃部達也 1999 「植栽痕について」 新宿区払方町遺跡調査団編 『払方町遺跡』
- 宮崎勝美 1988 千代田区紀尾井町遺跡調査会編 「紀州藩麹町邸の平面構成と紀尾井町遺跡」
- 山田四郎右衛門著・日置謙校訂・解説 1931 『三壺問書』 石川県図書館協会



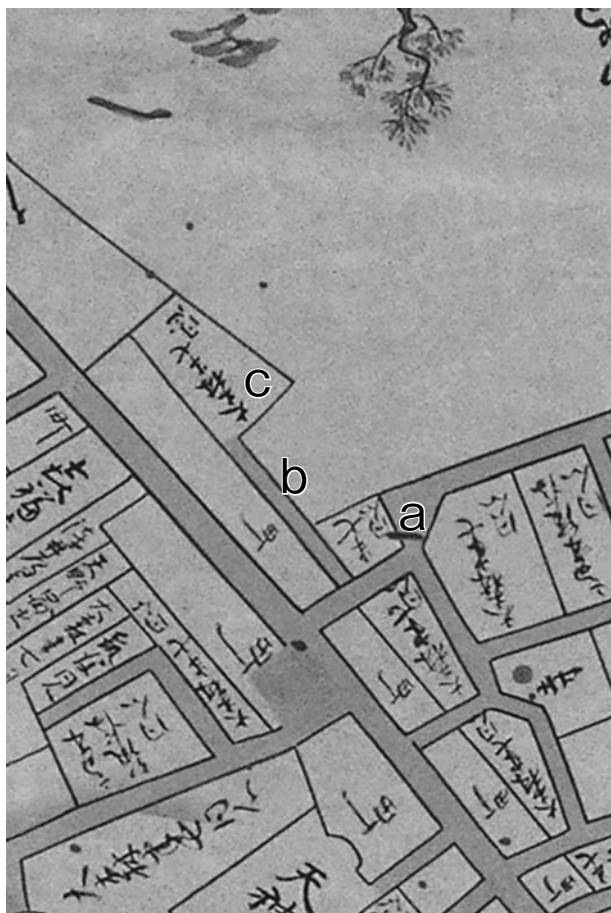
1 図 遺構分布(17世紀末まで)



2図 遺構分布(17世紀末~19世紀前葉)



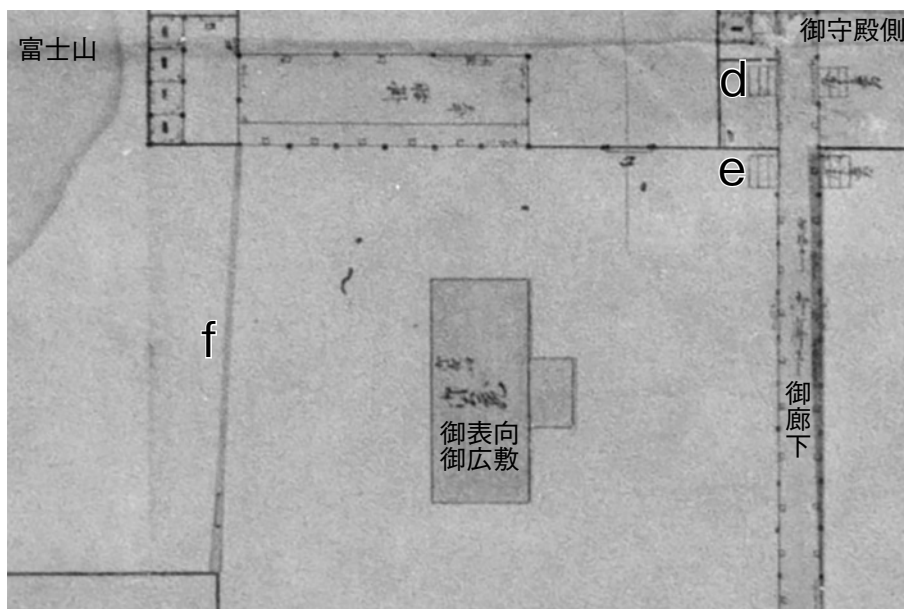
3 図 経済学研究科棟地点と医学部教育研究棟地点



「(江戸全図)」(白杵市教育委員会蔵)

1 表 植栽痕の分類

遺構	タイプ
140	C
158	C
181	C
197	B
232	B
287・467	C
314	A
333	C
337	C
375	B
381	B
376・377	B
396	C
406	B
408	B
418	C
425	C
437・438	C
463	C
464	C
465	B
509	A
555	A
626	B
632	B
635	C
636	B



「御守殿廻惣御絵図」(金沢市立玉川図書館蔵)

4 図 B 面段階の本地点周辺を描く絵図史料

溶姫御殿期以降の状況と建物基礎遺構

堀内 秀樹

はじめに

経済学研究科棟地点（以下、「経済棟」と略す）は、南北に走る本郷台地の頂部からやや東に位置している。不忍池へと東へ降る傾斜は本地点より100m東側付近から始まり、本地点は建物群造営に適した平坦地が広がっている。経済棟は上位面（A面）と下位面（B面）2枚の遺構確認面が認められた。ここでは2枚の遺構面のうち上位面の土地利用とその変遷について復元するものである。A面からは、本地点から確認された453遺構中141遺構が確認されている（1図）。遺構は、一見して調査区西側が希薄で、東側には礎石が並んでいることが看取できるが、これらは出土遺物から近世後期から近代にかけての遺構群と推定された。以下、近世後期と近代とに分けて説明したい。

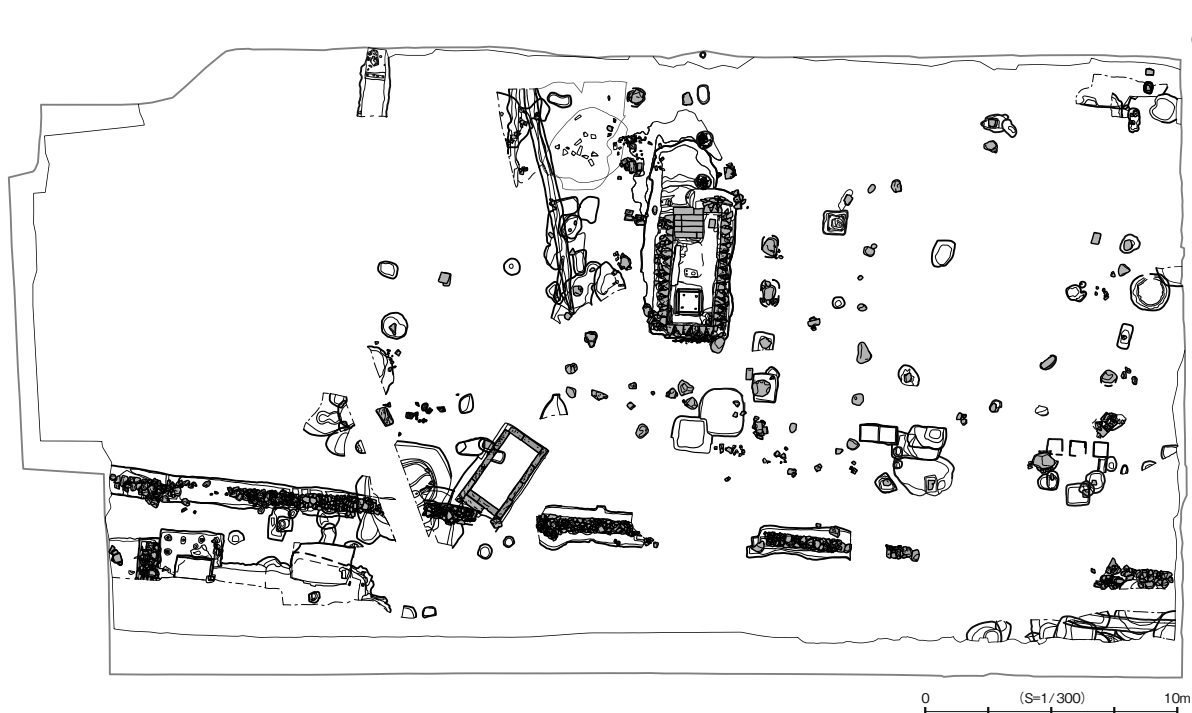
1. 江戸後期の遺構と土地利用

（1）近世後期の面と遺構

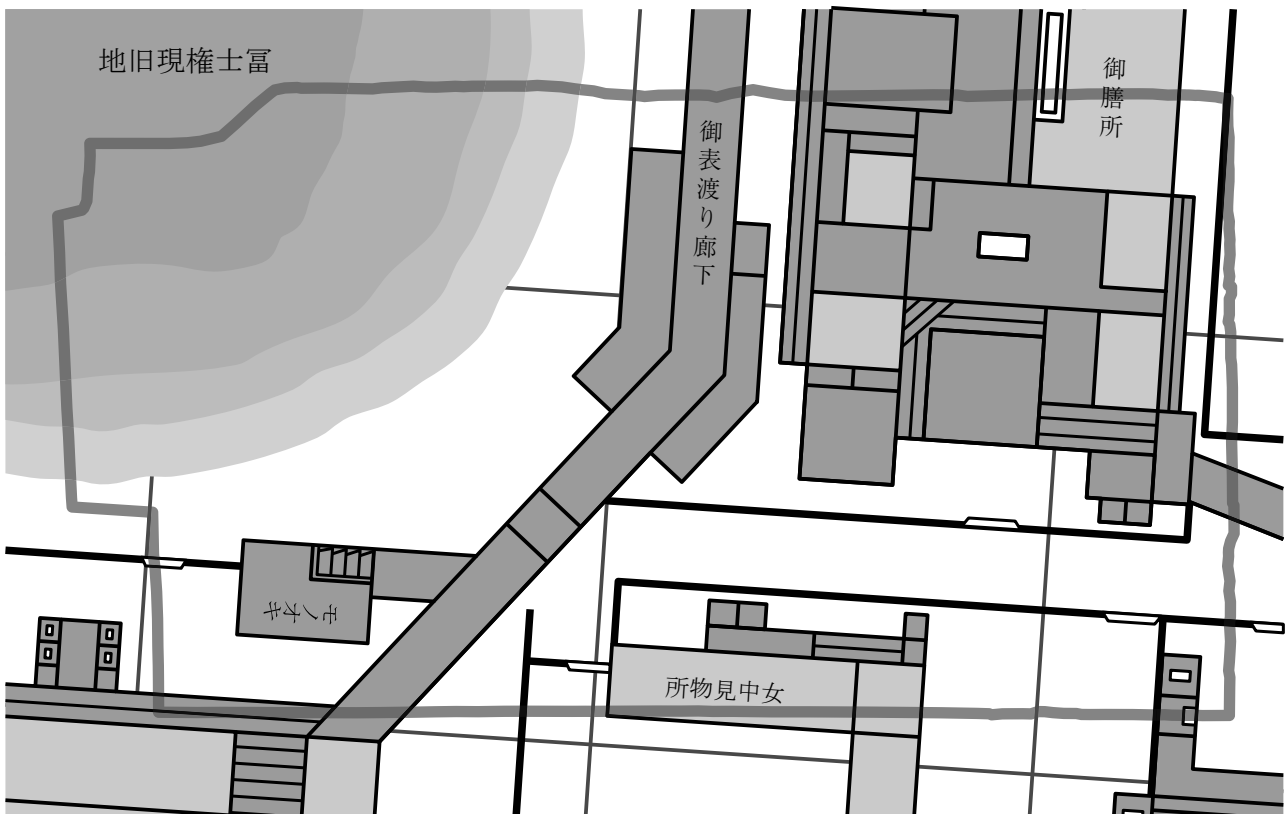
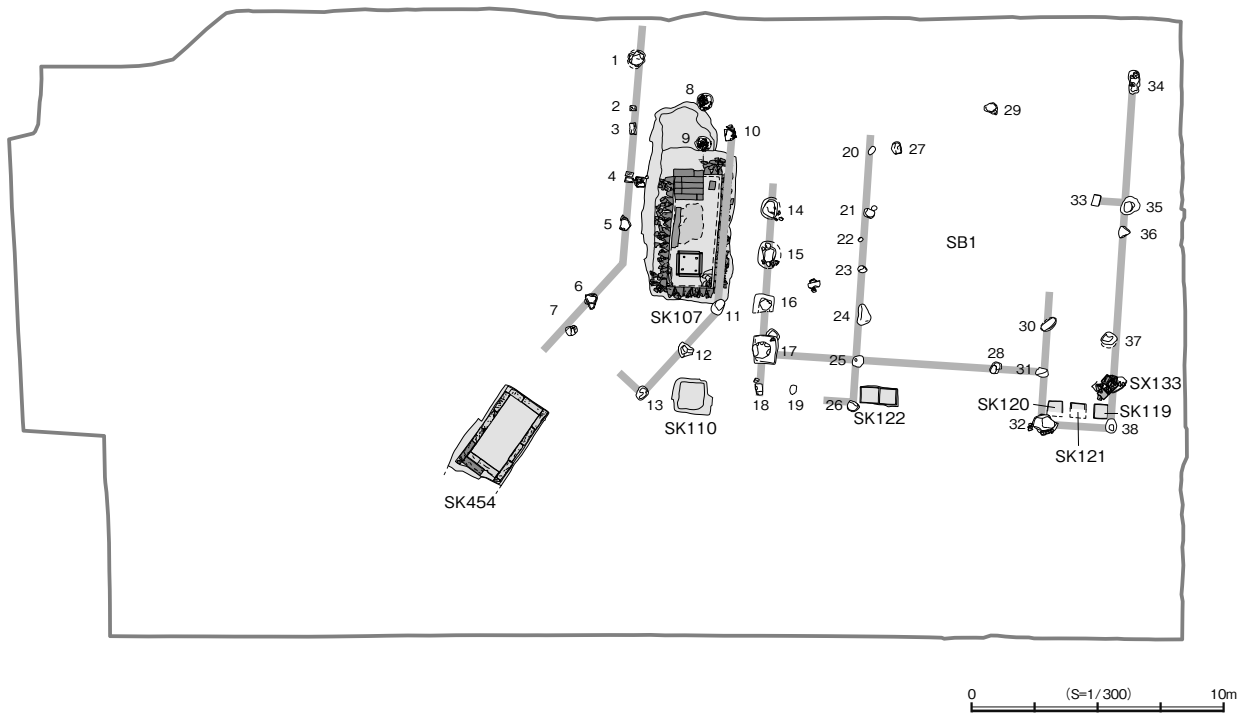
重機による掘削後、最も高い位置で確認された遺構は、調査区東側に広がる建物基礎群（SB1）と調査区南

側を東西に横断する石を伴う塀基礎列（SA103）であった。このうちSB1の多くは、石に伴っていたはずの堀方が確認されず、近代に削平されたと推定され、根石の最下段がようやく遺存しているような状態であった。最も良好に遺存していた根石（配石14～16）は、大型の自然石を上下に積み重ねられた状態で確認された。配石はN-9°-Wで中山道軸を主軸とし、1間（江戸間）間隔で確認された（2図）。

建物基礎の構造は、御殿下記念館地点で確認された梅之御殿の基礎と類似し、坑底に大型の自然石をいくつか配し、その上に自然石を載せるものであった。御殿下記念館地点から確認された建物基礎群は、確認面から40～60cm程度の深さを有していることから、調査区付近の当時の生活面はSB1の確認面よりおそらく数十cm程度高かったと推定される。SB1の確認面は、おおよそ標高23.0mなので、23m半ば程度であったと思われる。一方、隣接する医学部教育研究棟地点のC面とした天和2（1682）年以降の殿舎基礎の確認面の標高は最も高い北域で22.7mなので、本調査区が30cmほど高い。これに削平されたであろう数十cmを加えると本調査区が1m近くも生活面が高かったことになる。もともとあ



1 図 A面全体図



(上：SB1 および関連遺構、下：「江戸御上屋敷総絵図」と調査区)

2図 近世後期の遺構と土地利用

た表御殿と奥御殿間も現地形から勘案しても比高差があったと思われるが、渡り廊下で連結されており、各御殿ごとの比高差を解消していたと考えられる。

建物基礎遺構 SB1 周辺には、これに関連する遺構が確認されている。石組遺構の SU107、SX133、SK454、便所遺構あるいは灰の廃棄場の SK119、SK120、SK121、SK122、廃棄土坑の SK110 などである。SU107 は石組の地下室で、間知石を壁に巡らし、石の階段で昇降するものであった。こうした構造はこれまでの東京大学構内の遺跡では確認されておらず、藩邸の内でも特殊である。後述するが、当該地域は、文政 10 (1827) 年に入興した溶姫御殿脇の御膳所付近であり、金沢市立玉川図書館蔵の「江戸屋敷絵図」では、「御膳所物置」と記載されている部分にあたる。

A 面上面は、焼土が散っており、A 面上層の近代盛土中に焼土が包含されていたと推定される。また、A 面で確認された SU107、SK454 などの遺構埋土に焼土が含まれていた。これらの遺構の年代的検証をするために出土遺物を再確認したい (3～5 図)。なお、瓦は別稿 (研究編研究 3) があるので、ここでは陶磁器を中心に行うことにしたい。SU107 から出土した遺物の多くは瓦であったが、陶磁器の資料の中に 1 の「御末」と刻書された肥前系磁器皿 (JB-2-q)、4 の「御膳所」と墨書された瀬戸・美濃系陶器捏鉢 (TC-5-1) がある (3 図)。製品に書かれた「御末」は、奥に使える奥女中の職名であり、「御膳所」は場所を示している。これについては、絵図面との対比して後述したい。廃棄年代であるが、1 は出土初現が東大編年Ⅶ期で、量的に増加するのはⅧ b 期以降である。また、捏鉢が増加するのはⅧ a 期以降で、本例は高台が円盤状になる新しい段階の製品である。

SK110 から出土した遺物は、陶磁器・土器類の他、特に瓦、動物遺体が多く出土している (4 図)。動物遺体については別稿 (研究編研究 5) を参照されたい。1～4 は瀬戸・美濃系磁器碗、5 は肥前系志田皿で、共に東大編年Ⅷ b 以降に多く出土する製品である。7、11、12、13 も東大編年Ⅷ期に多く出土している。注目したいのは 19 の三葉葵の軒丸瓦であるが、これについても後述したい。以上の点から、19 世紀以降の火災によって藩邸の被災に伴って廃棄された資料と考えることができる。

(2) 建物基礎遺構

これまでの本郷構内の発掘調査では、いくつかの地点で江戸時代の建物基礎遺構が確認されている。1 表は、石を用いて一定の範囲に広がっている 25 例の建物基礎

と推定された遺構である (註 1)。加賀藩本郷邸は、絵図面が比較的多く遺存し、対比を行うことができるものも多い。ここでは、藩邸の建物基礎のバリエーションを示し、使われている場所、時期などについて確認してみたい。

① 基礎遺構の分類

建物は単体の基礎では存立せず、建物の形状、屋根、壁の構造、目的、年代、地形等の他、伝統、経費、普請を行う工人集団など種々の要因によってその工法や構造が異なることが想定される。本郷邸は台地上に位置し、加賀藩の他、その支藩の富山藩、大聖寺藩の上屋敷として利用しており、地形や藩による伝統の相違などのバイアスが排除できるメリットを有している。石を用いた建物基礎構造のバリエーションを以下の 8 つのグループに分類した (6 図)。

○ A 類：複数の石を用いて上から搗き固めているもの

・ A1 類 やや大型の石を下半を中心に配し、土と共に強く搗き固めているもの

大蛸などを用いて強く搗き固めているもので、堀方坑底は配された石が下層まで大きくめり込んだ様になり、上面中央が突き固めによってレンズ状を呈している。

・ A2 類 やや大型の石を土と交互に入れ、強く搗き固めているもの

大蛸などを用いて強く搗き固めているもので、堀方には石、土と交互に入れている状況が看取される。A1 も同じ方法で行っている可能性がある。

・ A3 類 やや小型の石と土を用いて、強く搗き固めているもの

大型の石を用いないで、強固に搗き固めているもので、全体的にやや小型の礫が確認される。工法は小型礫と土を交互に入れて、搗き固める A2 類と同じ可能性がある。

・ A4 類 石を小場立てに配して、搗き固めているもの
A1～3 類の基礎に比べて、搗き固める強度がやや弱い。

○ B 類：大型の石を上下に配しているもの

・ B1 類 底に花卉状に石を配しているもの

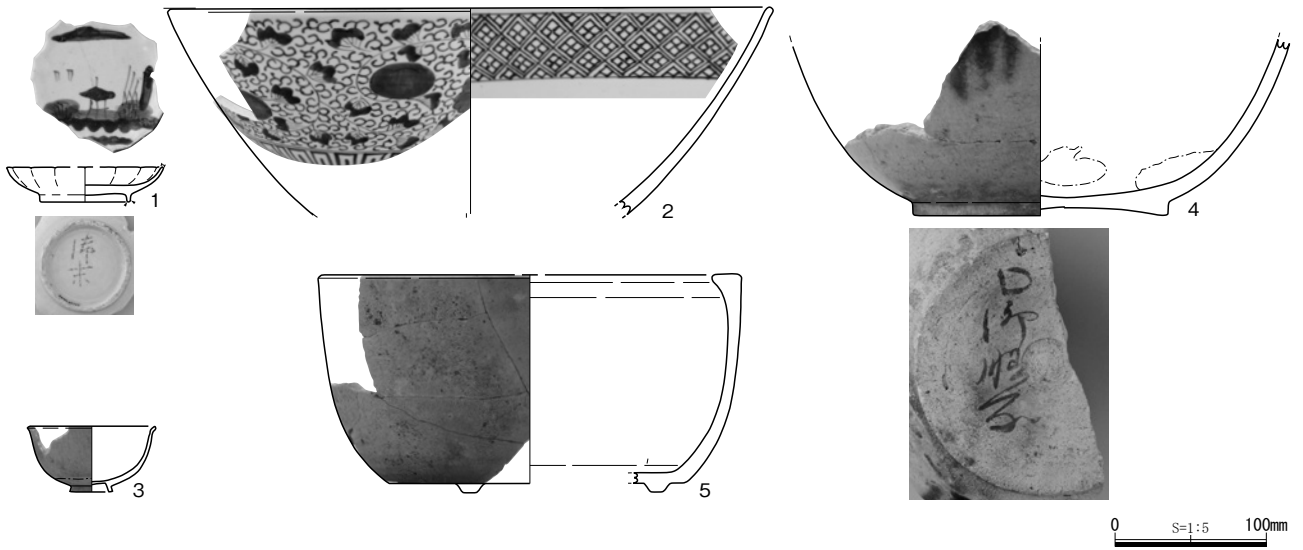
多くは中央に大型石、周囲に小型石を配している。搗き固めは顕著ではない。

・ B2 類 上下に大型の石を配しているもの

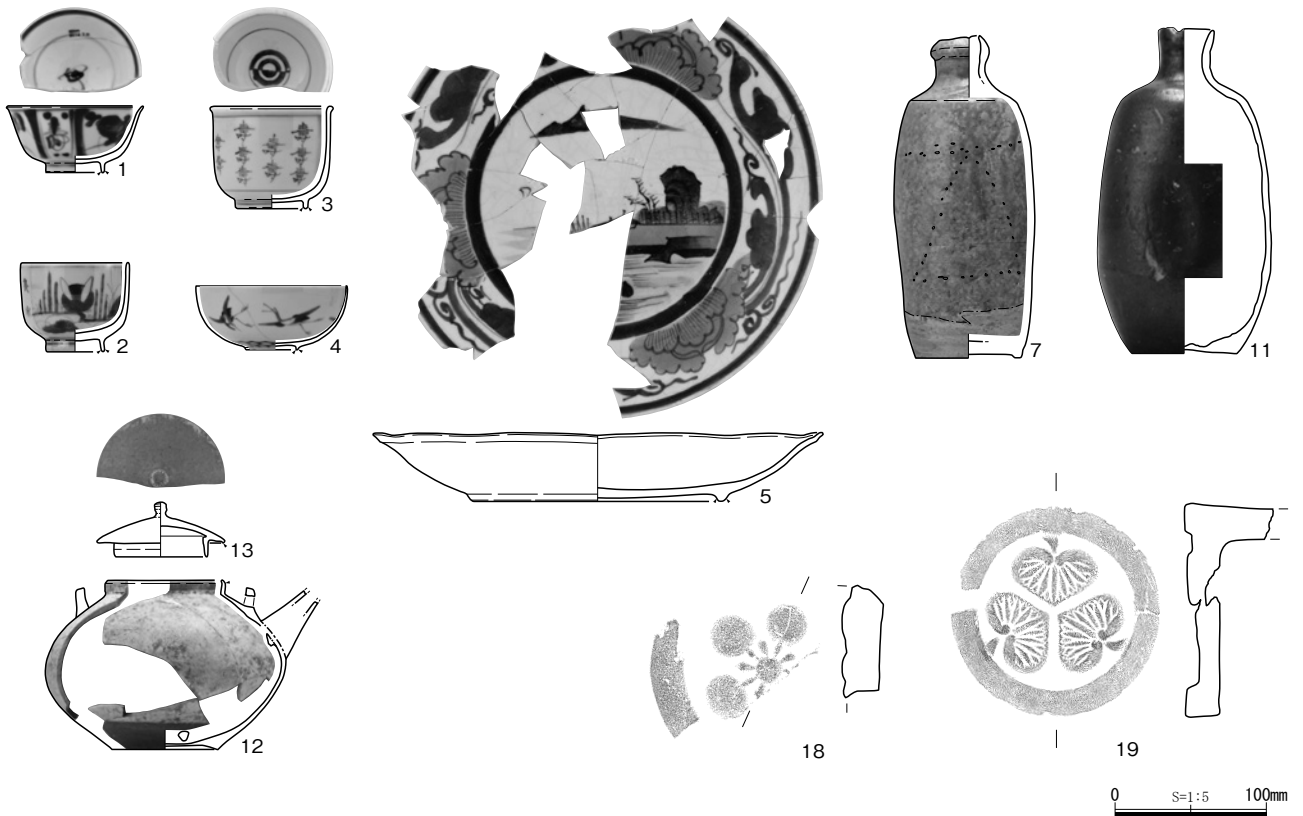
それほど大きさが異なる大型石を上下に配している。搗き固めは顕著ではない。

○ C 類：堀方に礎石を直接埋設しているもの

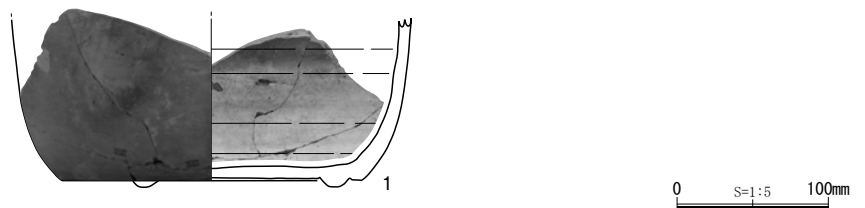
A 類より大型の堀方を有し、設置されている大型



3図 SU107出土遺物



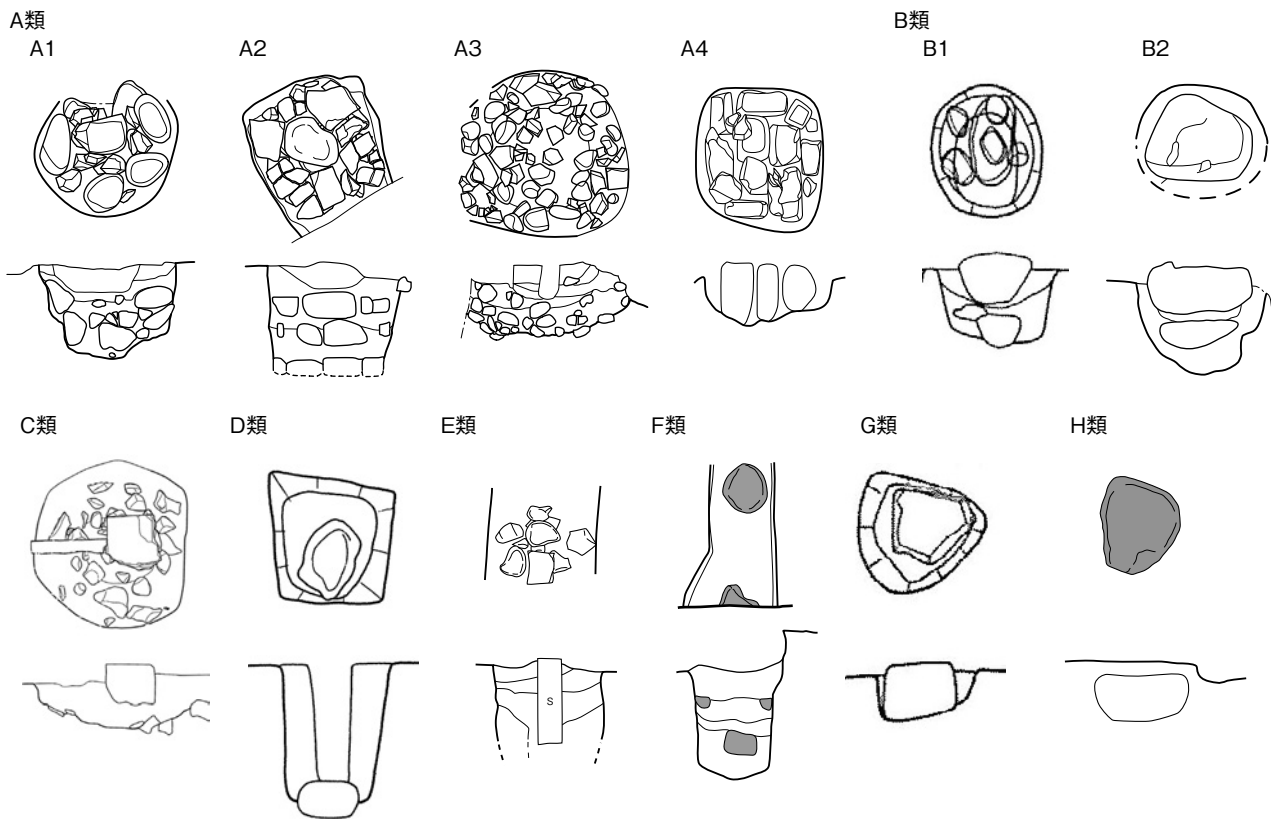
4図 SK110出土遺物



5図 SK454出土遺物

1表 各地点の建物基礎遺構

番号	地点	遺構	総方平面形	基礎類型	間隔	屋敷地	空間	性格	年代		備考
1	経済	SB1	方形?	B1	1.8m	加賀藩上屋敷	御殿	奥御殿	19-2	1827~68	清姫御殿
2	設備管理棟	1号礎石列	円形	F	1.0m	大聖寺藩上屋敷	?	?	~18-3	?	Y34-4より旧
3	共同溝建設	V31-6	?	B?	1.8m	大聖寺藩上屋敷	?	?	?		
4	御殿下	572号遺構	円形	A?	1.8m	加賀藩上屋敷	?	?	17-4	1682-1703	
5	御殿下	577号遺構	円形	G	1.8m	加賀藩上屋敷	?	?	17-4	1682-1703	
6	御殿下	573号遺構	円形	G	1.5m	加賀藩上屋敷	詰人	在府家臣?	17-4	1682-1703	「頭分一」
7	御殿下	101号遺構	なし	H	0.9m	加賀藩上屋敷	御殿	飼料所	18-4		
8	御殿下	蔵舎	方形	D	2.0m	加賀藩上屋敷	御殿	蔵舎	18-3		坂下御蔵
9	御殿下	11、21、26、27号遺構	円形	B2	1.8m	加賀藩上屋敷	御殿	隠居御殿	19-1	1802~1820s	梅之御殿
10	御殿下	4号遺構	布堀	F	0.9m	加賀藩上屋敷	御殿	米蔵	19-1	1802~1820s	梅之御殿
11	御殿下	3号遺構	布堀	F	0.9m	加賀藩上屋敷	御殿	米蔵	19-3	1850s~1868	
12	外来	SB228	方形	A?	1.8m	大聖寺藩上屋敷	詰人?	?	18-1~2		
13	医研	III-2期基礎	円形	A	1.8m	加賀藩上屋敷	御殿	表御殿	18-1~2	1703-1868	
14	医研	III-1期基礎	円形	A	1.8m	加賀藩下屋敷	御殿	表御殿?	17-4	1682-1703	
15	医研	SB250	円形	C	1.8m	加賀藩下屋敷	御殿	檢門	17-3	1650s-1682	
16	入院棟A	SB2150	なし	G	0.9m	加賀藩下屋敷	?	?	17-2	~1650s	
17	入院棟A	D1面基礎	円形	H	1.8m	加賀藩上屋敷	詰人	長屋(足輕・閑番)	17-3	~1682	2寸角のあたり
18	入院棟A	SB93	方形	A4	1.8m	大聖寺藩上屋敷	?	?	?	1703~	
19	HWK-2	SB4	方形?	BとE	1.8m	大聖寺藩上屋敷	?	?	?	1703~	
20	看護職員1	SB49他	円形	A1	1.8m	富山藩上屋敷	御殿?	?	~19-1	~1825	
21	看護職員1	SB15他	円形	A2	1.8m	富山藩上屋敷	御殿	奥御殿	19-2	1825-46	
22	看護職員1	SB71他	円形	A	1.8m	富山藩上屋敷	御殿	奥御殿	19-2	1825-46	
23	看護職員1	SB116他	円形	A1	1.8m	富山藩上屋敷	御殿?	?	~19-1	~1825	
24	看護職員1	SB175	布堀	F	0.9m	富山藩上屋敷	御殿	?	~19-2	~1846	
25	看護職員1	SB186	布堀	F	0.9m?	富山藩上屋敷	?	?	~18-1	~1703	



6図 建物基礎遺構の分類

礎石の周囲は、大小の石と土を混ぜて大蛸などで強く搗き固めている。

○D類：堀方の底に石を配しているもの

Pit 状の堀方の底に石を配し、その石の上に柱を載せているもの。

○E類：角柱形の石を配しているもの

大型石の上に角柱状の石を縦に置き、周囲を補強しているもの。いわゆるろうそく地業である。

○F類：布堀状の堀方の中に石を配しているもの

根石周囲に補強の石を配している。搗き固めは顕著ではない。いわゆる布基礎である。

○G類：石とほぼ同じ大きさの堀方を有するもの

根固めは存在せず、石固定のための堀方を有しているもの。

○H類：堀方を有しないもの

堀方を有せず、石を置いて建物周囲一体を土で固めるもの

この分類のうち、C類、D類、H類は石の上に柱あるいは大引などが載ることが推定されるが、その他は、礎石下の根固めに該当するものと思われる。

②各類型と使用された場

A類に分類したものは4（御殿下 572 号遺構）、12（外来 SB228）、13（医研Ⅲ -2 期基礎）、14（医研Ⅲ -1 期基礎）、18（入院棟 A SB93）、20（看護職員 1 SB49 他）、21（同 SB15 他）、22（同 SB71 他）、23（同 SB116 他）の9例である。この中で絵図面との対比から使用されている建物が比定できるものは13、14、21、22である。13は加賀藩上屋敷表御殿と推定される基礎で、建物軸が中山道軸に変化していることから、元禄 16 年以降の御殿と考えられる。14は加賀藩下屋敷表御殿と推定される基礎で、天和 2（1682）年の火災層より新しく、南通町軸に主軸があることから、天和 2 年から御殿の建物軸が変化する元禄 16（1703）年の間の建物と考えられる。13と14の構造に大きな違いは確認できなかった。いずれも石と土とを使い強く搗き固めており、上記分類では、A1、A2類が多くを占め、A3類が少数認められた。17世紀末以降に加賀藩の御殿建築にこれらの基礎が用いられており、幕末までこうした工法を基準として殿舎が造営されていたと思われる。基礎の平面形は、方形を呈しているものもあるが、ほとんどが円形である。方形のものは搗固めにより変形したものと思われる。基礎の規模は、直径 1～1.5m 程度で、この間の間尺は、江戸間 1 間である。21、22は富山藩上屋敷奥御殿と推定される基礎である。基礎の構造は、加賀藩邸の13、14と大きな違いはないが、堀方の規模が21では0.8m、22では0.7

～0.8m と加賀藩邸と比べて小型である。この違いは、上屋構造、本家と分家などによるものと推定されるが、明確ではない。

B類に分類したものは1（経済 SB1）、3（共同溝建設 V31-6）、9（御殿下 11 号他）、19（HWK-2 SB4）の4例である。この中で絵図面との対比から使用されている建物が比定できるものは1、9である。1は本調査地点で文政 10（1827）年に新営された13代藩主斉泰の正室溶姫の御守殿脇の御膳所で、遺存状態は悪かったものの、部分的に上下段が確認されていることと、配石 26 に「下石四百四十」と書かれていたことで、B類と判断された。9は享和 2（1802）年に10代藩主重教の正室寿光院の隠居所として造営された梅之御殿である。共に19世紀に造営されている点、奥御殿という点が共通するが、2002年に行った薬学部総合研究棟地点（I期）では、表から連続する加賀藩歴代の室が居住する奥向の御殿の基礎が確認されているが、この基礎はA類であったことから、1、3は藩の財政が悪化したことや棧瓦利用による簡略化と推定される。梅之御殿はB2類が多かったが、B1類も存在した。一方、本地点で遺存している基礎はB1類であったが、溶姫御殿と共に作られたものの別棟の御膳所であることで異なっていた可能性も考えられる。

C類に分類したものは、15（医研 SB250）のみであった。SB250は調査成果から天和 2（1682）年の火災で焼けた加賀藩下屋敷の長屋門と推定されるが、その作事は、寛永年間（1624～45）後半に遡る可能性がある。東側の門扉に近い4基と西側の長屋部分の基礎は、堀方に礎石が埋設されている点は同じであるが、礎石周囲の根固めが大きく異なっていた。東側4基は、大きい堀方の中に埋め込み、礎石周囲を強固に搗き固めているのに対し、西側は小型の堀方に礎石を設置したのみで顕著な根固めを行っていない。これらのことから、C類は門のような特殊な建築物に行う工法の可能性がある。

D類に分類したものは、8（御殿下厩舎）のみであった。邸内の調査では、例えば本地点 SD200、SD387、SD460 など一列に並ぶ遺構は比較的多く確認できるが、面的な広がりを持たない。厩舎は、18世紀後半に絵図に描かれている加賀藩邸御殿空間内の坂下御厩で、その設置は調査成果から1750～60年代と推定される。記録では、南と北の二棟の厩舎があり、最終的にはそれが連結する形になるが、4本の柱とその中央に設置された馬の便槽が連続した長屋構造になっている。下限年代は梅之御殿建設（1802年）に伴って破却される。厩に伴うピットは、方形で1mを超える深さで掘られ、想定される柱痕もその痕跡から20cm程度の太いものであった。このように

D類も特殊な建築物に行う工法の可能性がある。

E類として上げた遺構は、19 (HWK-2 SB4) のみであった。いわゆるろうそく地業で、これまでの調査でいくつか確認されているが、少しずつ構造が異なっている様である。SB4 例も、全ての基礎遺構に角柱状の石が用いられてないことをはじめ遺構全体の様子が不明確で、また、年代、場所などの特定もできない。2013年度に行った国際科学イノベーション総括棟地点の調査では、正確な構造や年代については報告を待ちたいが、富山藩邸内に18世紀に遡る段階で角柱状の石を用いた大型の構造物 (SB200) が確認されている。富山藩邸は、本郷台地の東側、不忍池に降る斜面地に位置している。SB200もこうした地形の影響が想定されるが、今後の検討課題としたい。

F類に分類したものは、2 (設備管理棟1号礎石列)、10 (御殿下4号遺構)、11 (御殿下3号遺構)、24 (看護職員1 SB175)、25 (同 SB186) の5遺構である。この中で絵図面との対比から使用されている建物が比定できるものは10と11の2遺構である。10は、享和2 (1802)年に10代藩主重教の正室寿光院の隠居所として造営された加賀藩の御殿である。4号遺構は大廊下の西側、南北二棟の部屋方のある「二間」、「九間」と寸法が書かれている土蔵で、遺構と寸法や形も合致する。約30cmの礎石 (根石) は布堀状の溝の中に設置されており、部分的に二段に積まれていた。礎石 (根石) 周囲は、小型の礫で固定されていたが、顕著な搗き固めは行われていなかった。11は幕末期の「江戸上屋敷絵図」 (金沢市玉川図書館蔵) に「御米御土蔵」と書かれた土蔵にあたる。遺構はあまり遺存状態が良くなかったが、最下段の石と布堀状の溝が確認された。両遺構とも江戸時代後期の土蔵の基礎であり、F類がこうした建造物の基礎構造であったことが看取される。

G類に分類したものは、5 (御殿下577号遺構)、6 (御殿下573号遺構)、16 (入院棟A SB2150) の3遺構である。この中で絵図面との対比から使用されている建物が比定できるものはない。この他の3例は建築されていた空間や建物の性格などは不明であるが、17世紀の基礎であり、江戸前期に用いられた構造とも考えられる。

H類に分類したものは、7 (御殿下101号遺構)、17 (入院棟A D1面基礎) である。この中で絵図面との対比から使用されている建物が比定できるものは7である。御殿下101号遺構は、18世紀第4四半期の絵図にD類として先述した坂下厩舎東側に位置する「飼料所」と推定できる。だが、101号遺構は1間毎に大小の石が交互に置かれ、やや特殊な構造をしている。17は17図のよ

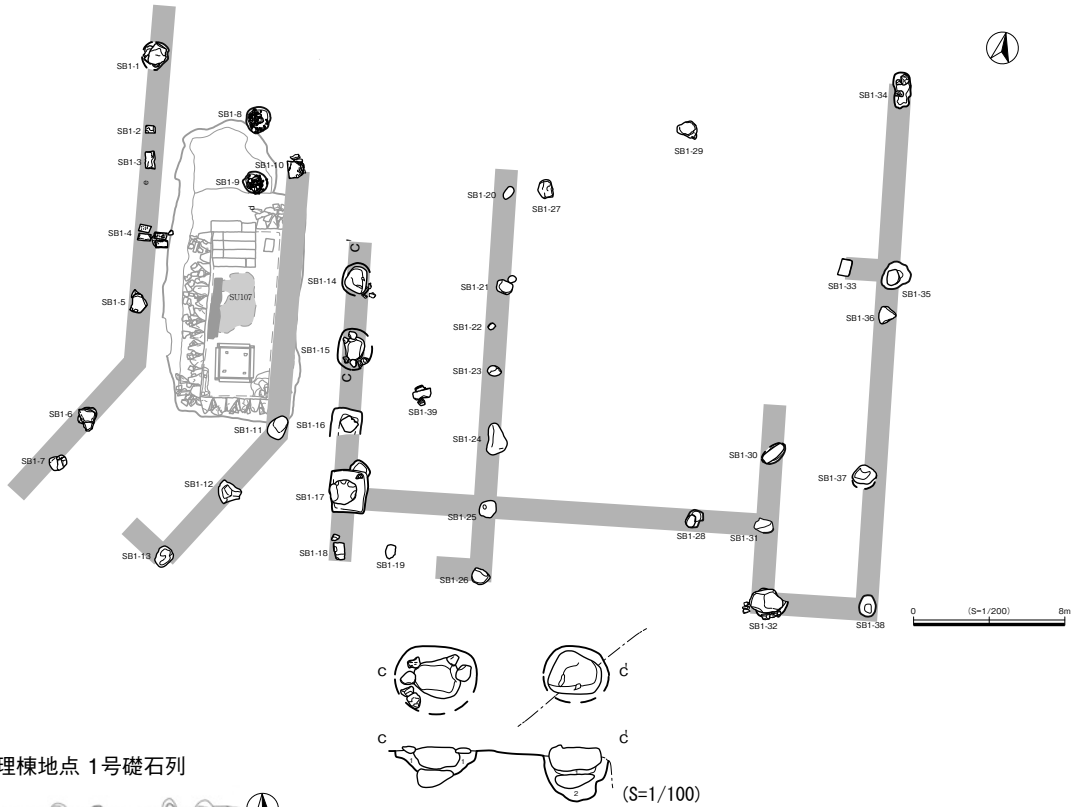
うに広域に長屋建物が確認され、確認面上面には天和2 (1682)年の火災層で覆われていたことから、それ以前に建設されている。また、史料よりここには江戸時代初期から証人が居住していたが、寛文5 (1665)年の証人制度の廃止に伴い、聞番、足軽、中間、小者が居住したことが判っている (宮崎2016)。証人は、藩の上級家臣の子弟を人質として江戸に居住することを定めた制度によるもので、加賀藩では6名が交代で藩邸に置かれた。この長屋が、本郷邸の他の長屋とは異なり礎石建てにしているものの重臣の子弟が居住した建物に該当するかは明確ではない。ただ、被災した直前には軽輩用の住居として使用していたことが明らかであった。

(3) 文献・絵図との対比

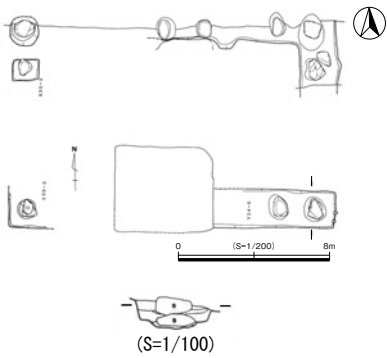
加賀藩本郷邸を描いた絵図面は、全体図、部分図合わせて200枚以上確認されている。現存の絵図面は、天和2 (1682)年に屋敷が全焼した火災後の元禄元年の様子を描いた「武州本郷第図」 (前田育徳会蔵) が最古である。これを見ると、調査区西には富士権現があった築山が存在することからおおまかな位置が推定でき、この段階で既に御殿空間内に位置している。その後の絵図面から、幕末まで一貫して御殿空間内であったことが看取される。江戸時代後期に比定される遺構は、東側に広がっている建物基礎群とその関連施設、南東端に表御殿北周縁の遺構群が存在するのみで、西側には大きな空白域がある。この空白域は旧富士権現築山があるエリアと考えられる (1図、2図)。

享和2 (1802)年には、御殿下記念館地点で確認された梅之御殿が御殿空間北東部に造営されるが、この段階の当該地は、馬場の西側の空地であった。当該地の土地利用が大きく変わるのが、文政10 (1827)年の将軍徳川家斉の娘である溶姫の入輿に伴う新御殿普請であった。新御殿は、文政7 (1824)年から開始され、既存の本郷邸表御殿の北側、育徳園と中山道に挟まれた地域に、五千数百坪の「御住居」 (註2) が造営された。このあたりの経緯は、小松論文に詳しいので参照されたい (小松2017)。御住居を描いた絵図面をいくつか比較すると、当該地周辺の状況が異なっていることが判る。2図下は、天保11 (1840)～弘化2 (1845)年の邸内を描いたと考えられる「江戸御上屋敷絵図」 (金沢市立玉川図書館蔵)、14図は、文久3 (1863)年前後の邸内を描いたと推定できる「江戸屋敷絵図」 (金沢市立玉川図書館蔵) である。この両者を比較すると御膳所南東部の取り付けられていた廊下がなくなり、小部屋が設置されている点など多少の変化が看取される。また、「江戸屋敷絵図」には建物

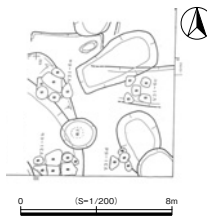
1 経済学研究科棟地点 SB1



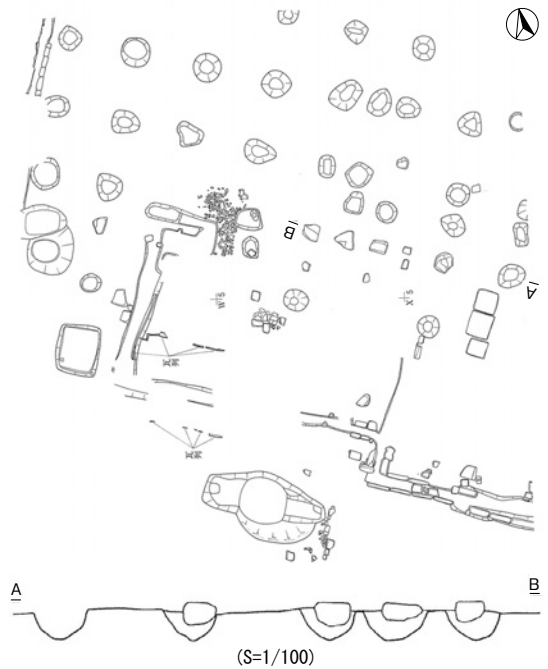
2 設備管理棟地点 1号礎石列



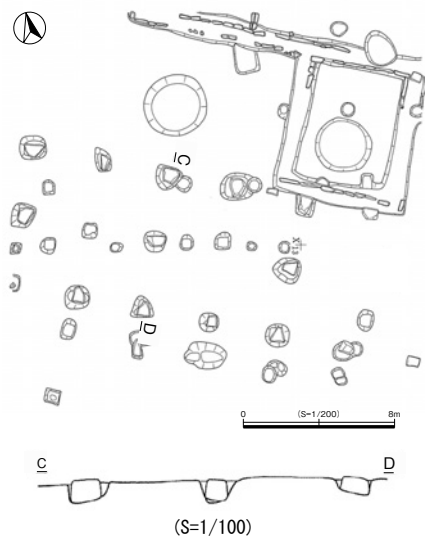
3 共同溝建設地点 V31-6



4 御殿下記念館地点 572号遺構

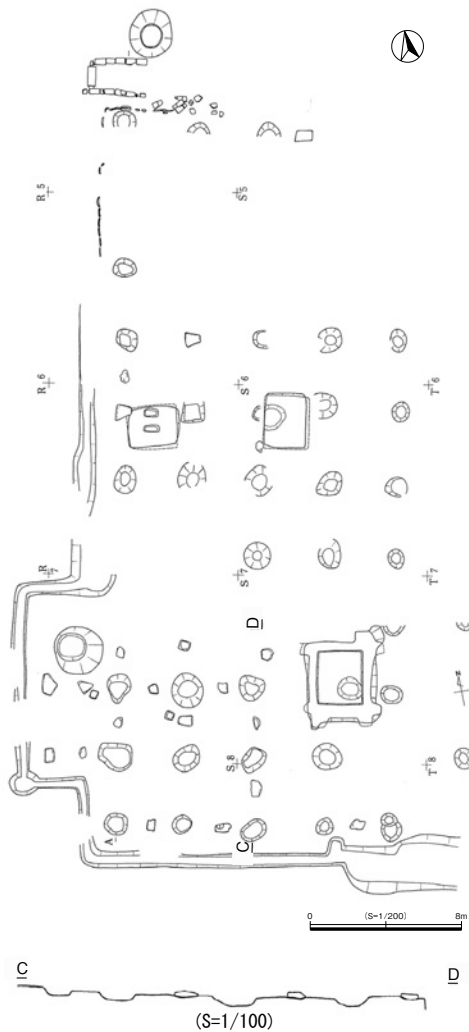


5 御殿下記念館地点 577号遺構

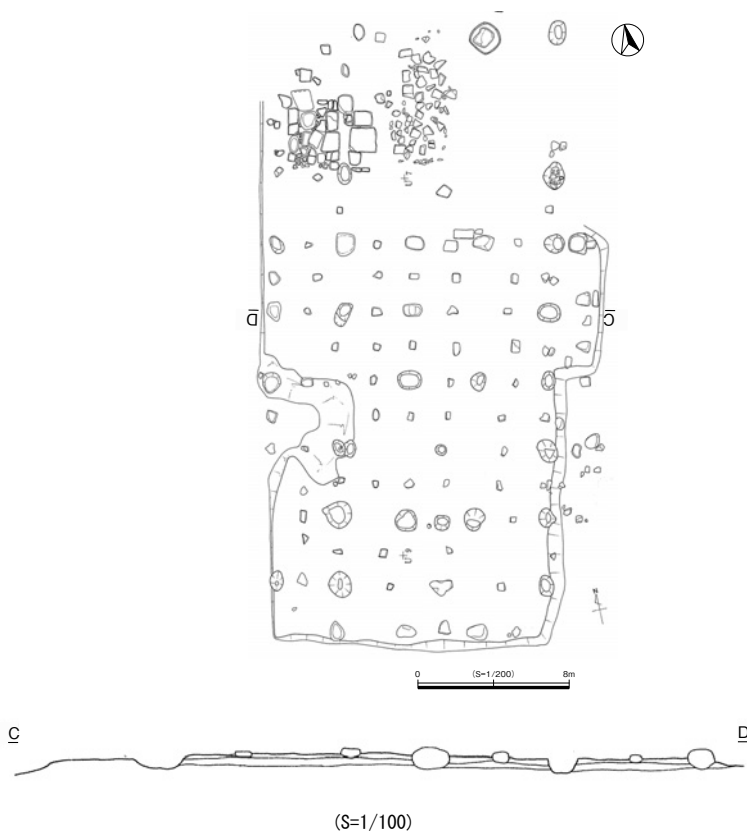


7図 各地点の建物基礎遺構(1)

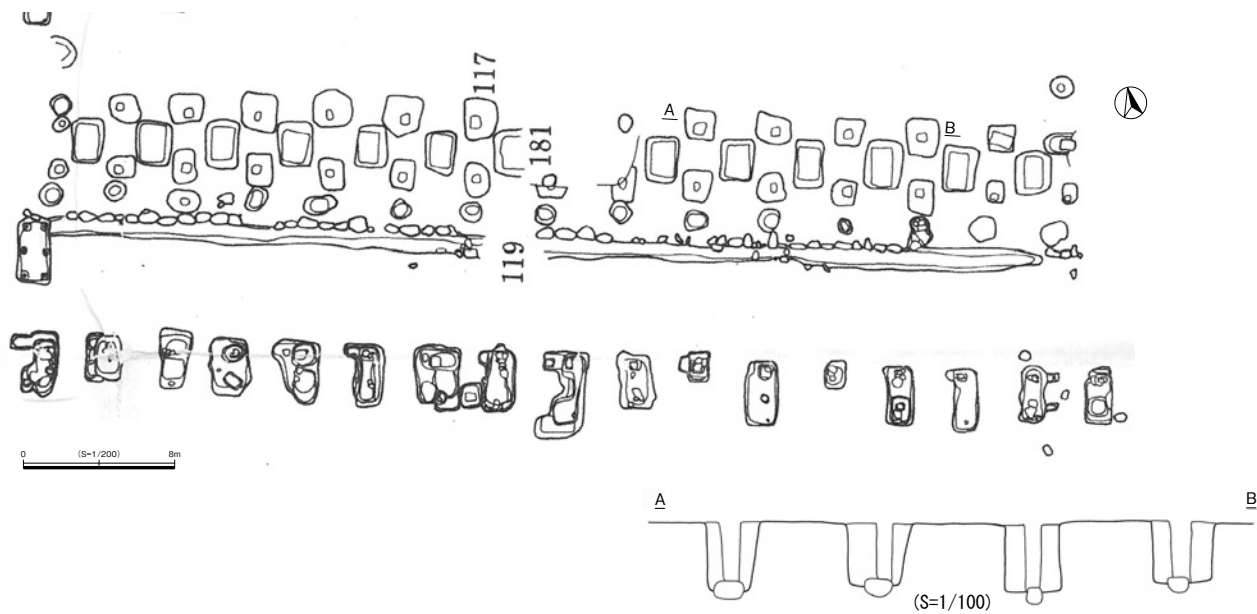
6 御殿下記念館地点 573号遺構



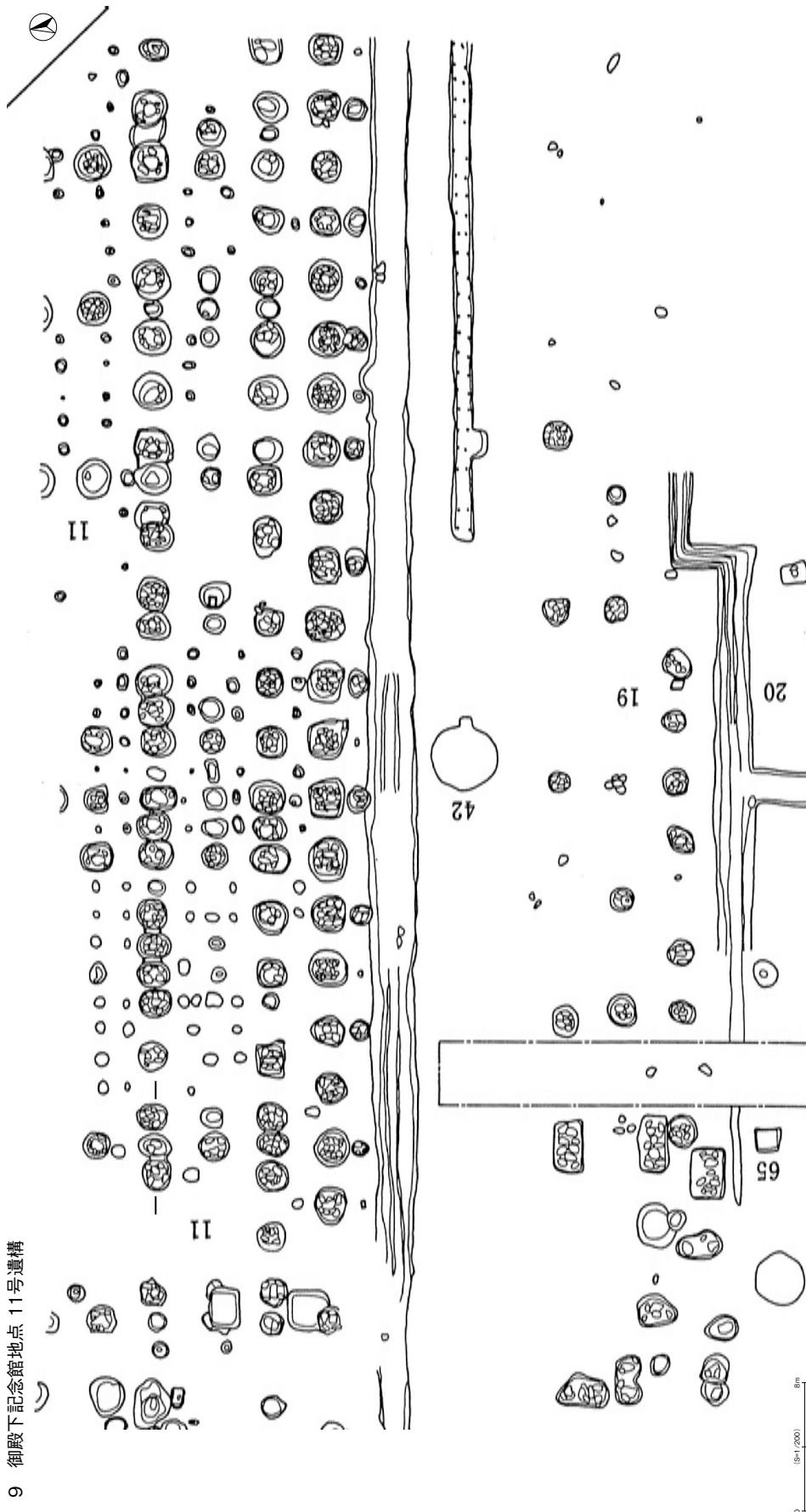
7 御殿下記念館地点 101号遺構



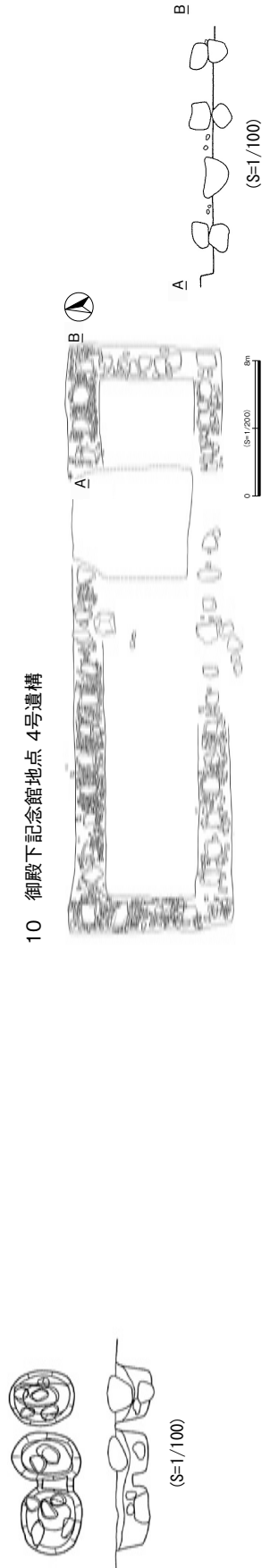
8 御殿下記念館地点 厩舎



8図 各地点の建物基礎遺構(2)



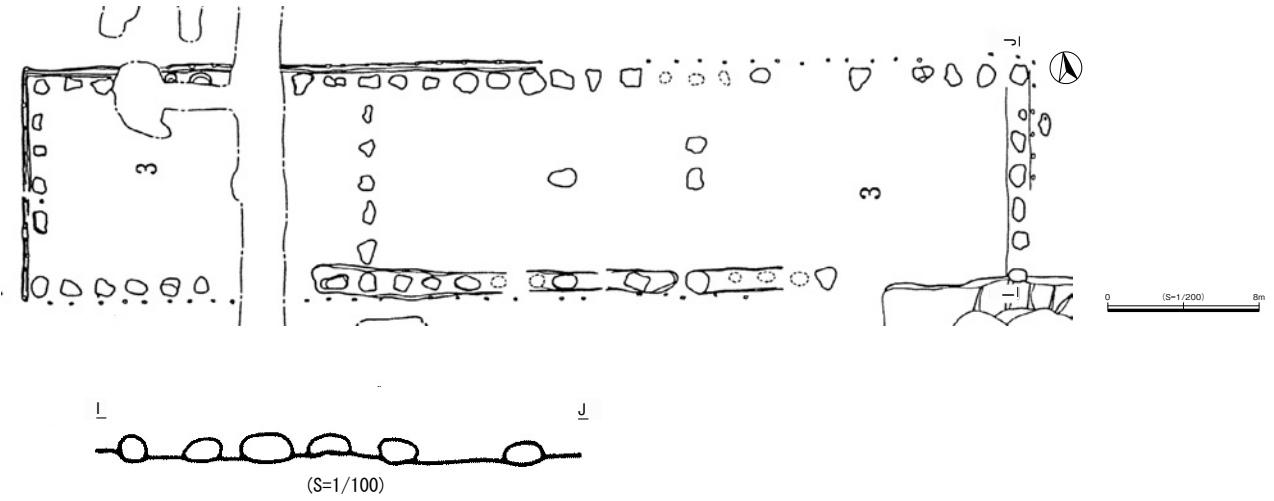
9 御殿下記念館地点 11号遺構



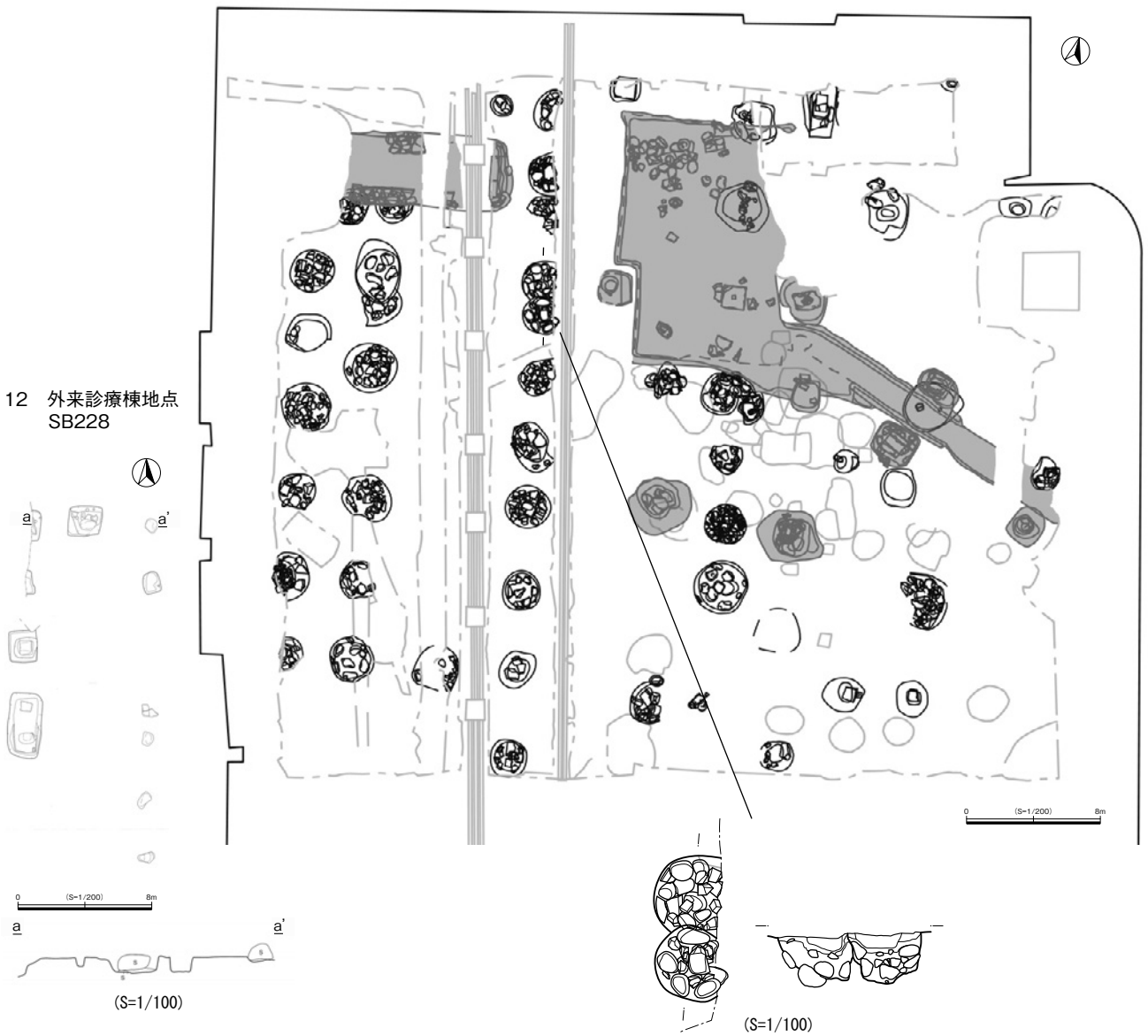
10 御殿下記念館地点 4号遺構

9図 各地点の建物基礎遺構(3)

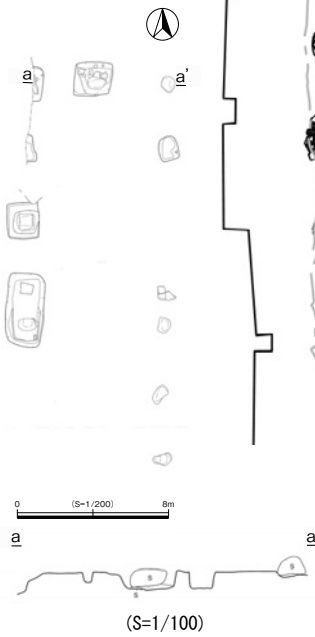
11 御殿下記念館地点 3号遺構



13 医学部教育研究棟地点 III-2期基礎

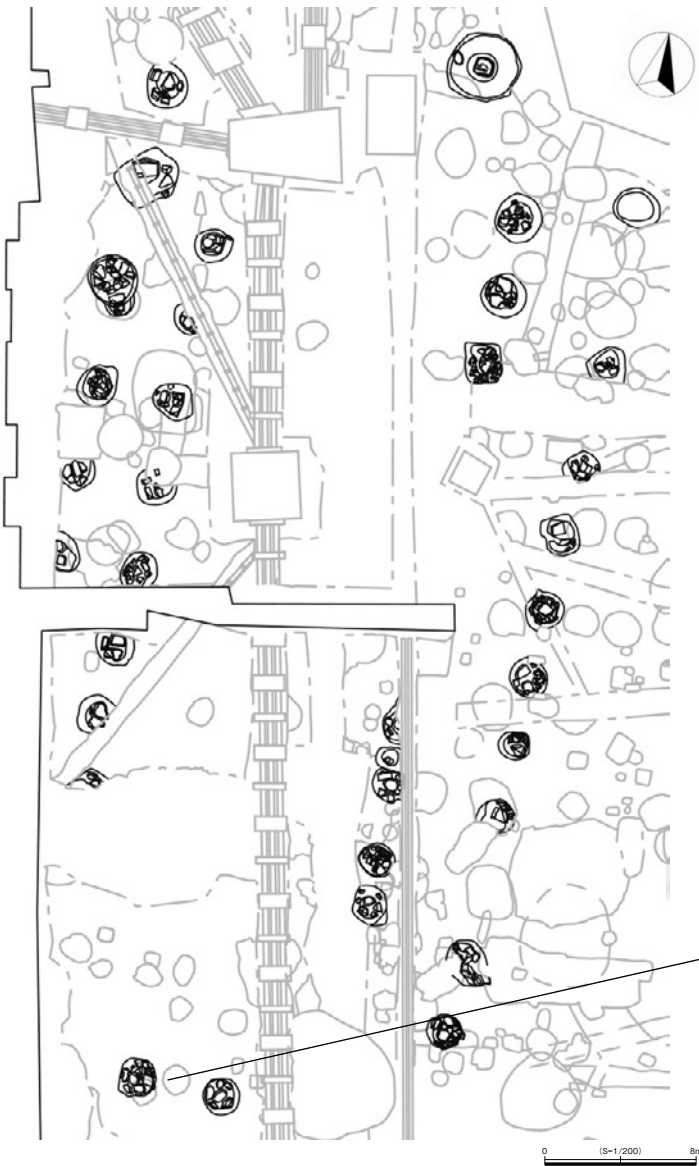


12 外来診療棟地点 SB228

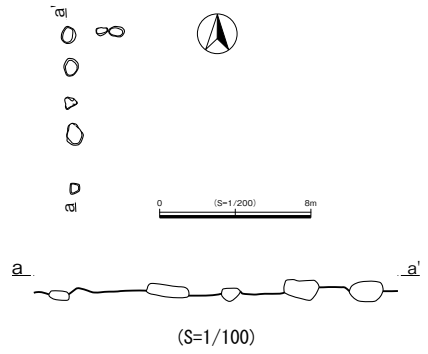


10図 各地点の建物基礎遺構(4)

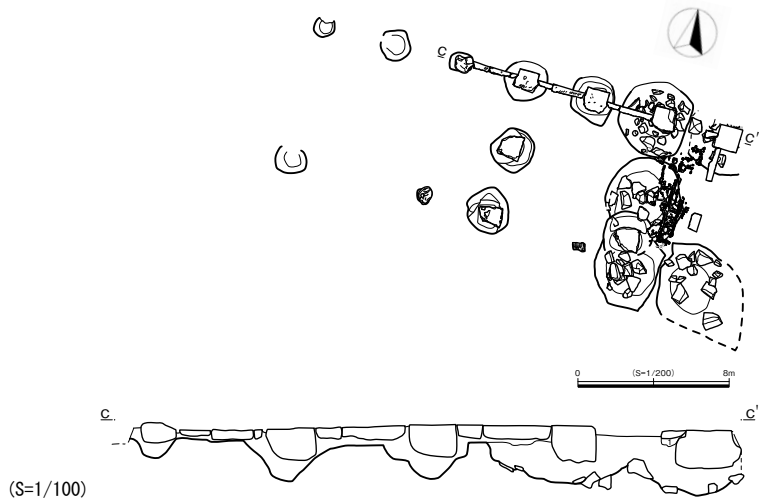
14 医学部教育研究棟地点 III-1期基礎



16 入院棟A地点 SB2150



15 医学部教育研究棟地点 SB250

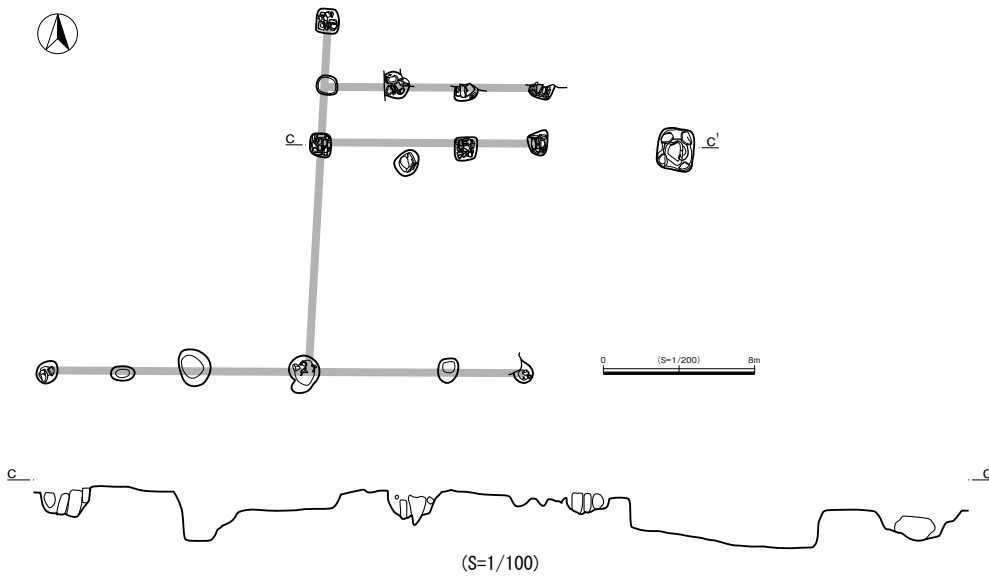


11図 各地点の建物基礎遺構(5)

17 入院棟A地点 D1面基礎

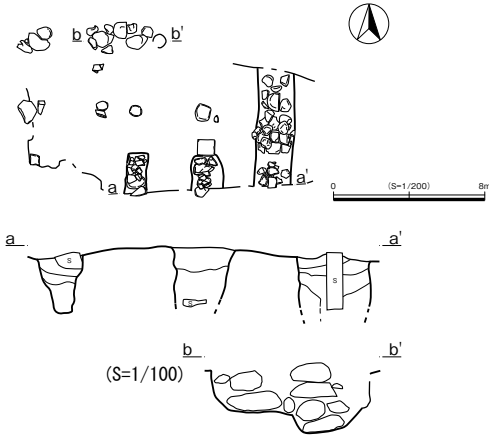


18 入院棟A地点 SB93

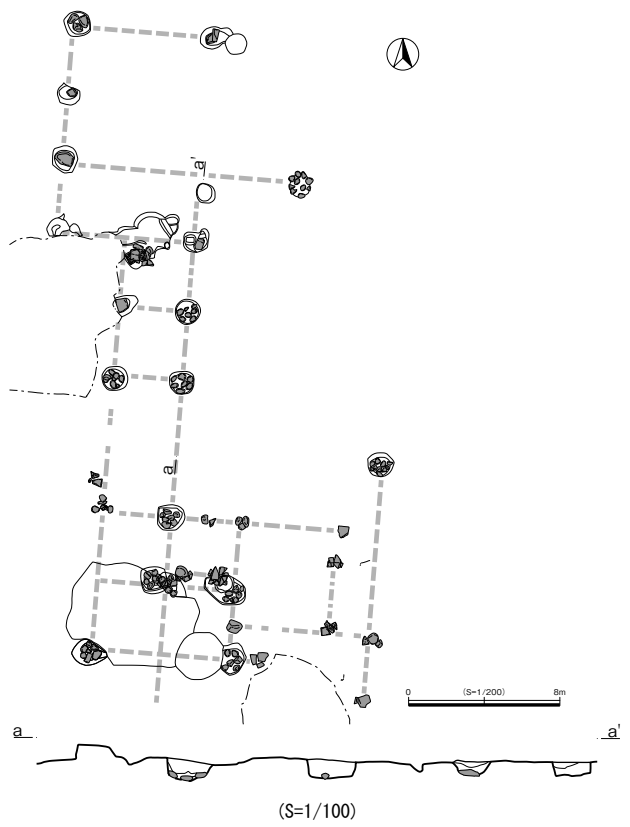


12図 各地点の建物基礎遺構(6)

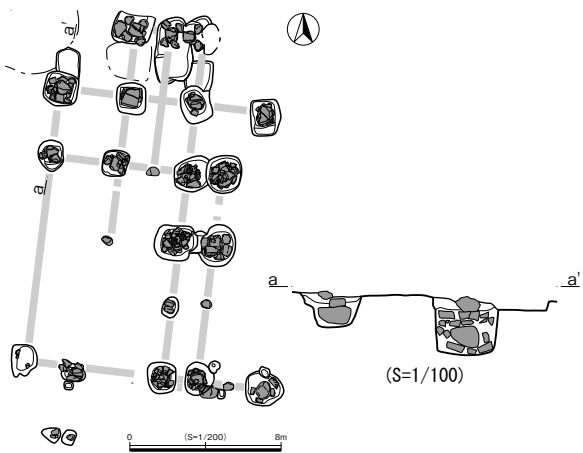
19 HWK-2地点 SB4



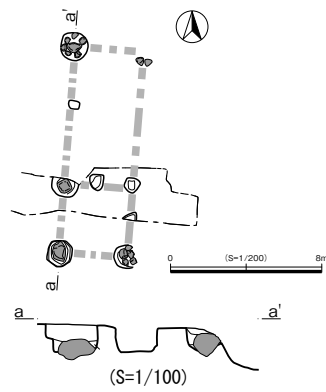
20 看護職員等宿舎1号棟地点 SB49他



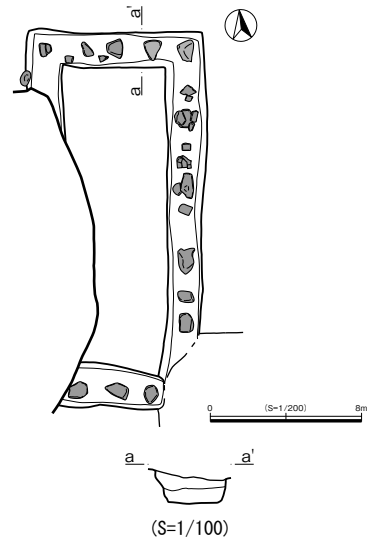
21 看護職員等宿舎1号棟地点 SB15他



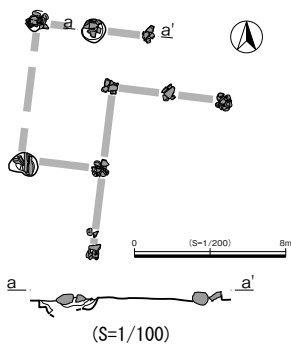
23 看護職員等宿舎1号棟地点 SB116他



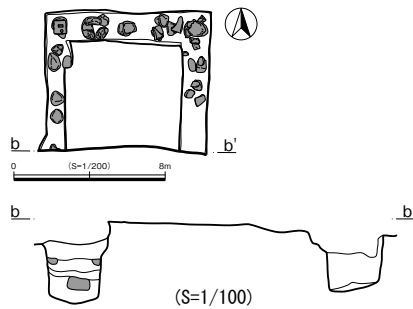
25 看護職員等宿舎1号棟地点 SB186



22 看護職員等宿舎1号棟地点 SB71他



24 看護職員等宿舎1号棟地点 SB175



13図 各地点の建物基礎遺構(7)

を取りまく、基壇をはじめ、部屋の用途もやや多くの情報が書き込まれている。

調査区は、旧富士権現築山東側から築山と御住居との間に別棟として造られた「御膳所」南側に該当する。この御膳所は、廊下で御住居「御鎖口」、表舞台楽屋、中奥部分と接続しているが、この御住居、表、中奥のいずれも御膳所、料理所、台所などの調理を行う場所が既に設置されており、この御膳所の機能が明確ではない。文政8(1825)年の普請計画図である「御住居向惣御絵図」(金沢市立玉川図書館蔵)には「加賀守様御膳所」と書かれていることから、溶姫御殿の専用施設ではないことが推定されるが、SK110から出土した動物遺体のキス、タラの出土状況から大奥との類似性が指摘されており(研究編研究5)、溶姫御殿の御膳所としても利用していたことが窺える。14図には、「イロリ」と書かれた施設、便所、基壇、階段、竈などが描かれているが、こうした施設について詳しく見てみたい。

① SB1 (建物基礎)

SB1は、前述した様に近代以降の削平によって遺存度が悪く、明確な対応は難しいが、2つの建築物で構成されていると思われる。西側の配石1～13は、「江戸御上屋敷絵図」(2図)に「御表渡り廊下」と書かれた廊下と屈曲部両脇にある「御膳所物置」で、東側の配石14～39が「御膳所」に相当しよう。渡り廊下は、配石1～7が廊下西側、配石10～13が御膳所物置の東壁、御膳所は、配石14～18の列が御膳所西壁、配石34～38の列が東壁に相当すると考えている。

② SU107 (御膳所物置)

「江戸屋敷絵図」には、御表渡り廊下東側の「御膳所物置」北端に階段が描かれている(14図)。この階段がSU107北側に取り付けられていた石段であろう。石段上部は抜き取られていたが、想定される生活面と石段の斜度から、施設の一部2m程度石が抜き取られたと推定でき、配石10が東側物置の北東角の基礎と推定された(2図)。先述したが、これまでに確認されたことがない堅牢な構造の地下室である点や付けられている昇降用設備は石段であり、避難用というよりは常用と推定されることから、御膳所で常時使用できる食料貯蔵施設と推定している。また、室内の石積方形床下施設は、最上段の石に蓋を載せる切り込みがあり、室内保冷用に加賀藩で献上を行っていた氷室雪との関連性も考えられる。一方、出土遺物には、「御末」の刻書、「御膳所」の墨書などが出土しており、当該地や隣接する溶姫御殿との関連性が窺え、この対比は妥当であろう。

③ SK454 (廊下くぐり通路)

「御表渡り廊下」は、「御膳所物置」で南側の表御舞台裏に向かって約40°ほど西方に折れるが、折れた位置から4間南側に廊下をくぐる撥板が描かれている。これはこの奥にある表御殿や溶姫御殿の下掃除などで利用する通路と考えられるが、SK454は、遺構の位置や主軸方位から撥板下のくぐり通路施設と考えられる。

④ SX133 (基壇?・雨落石?)

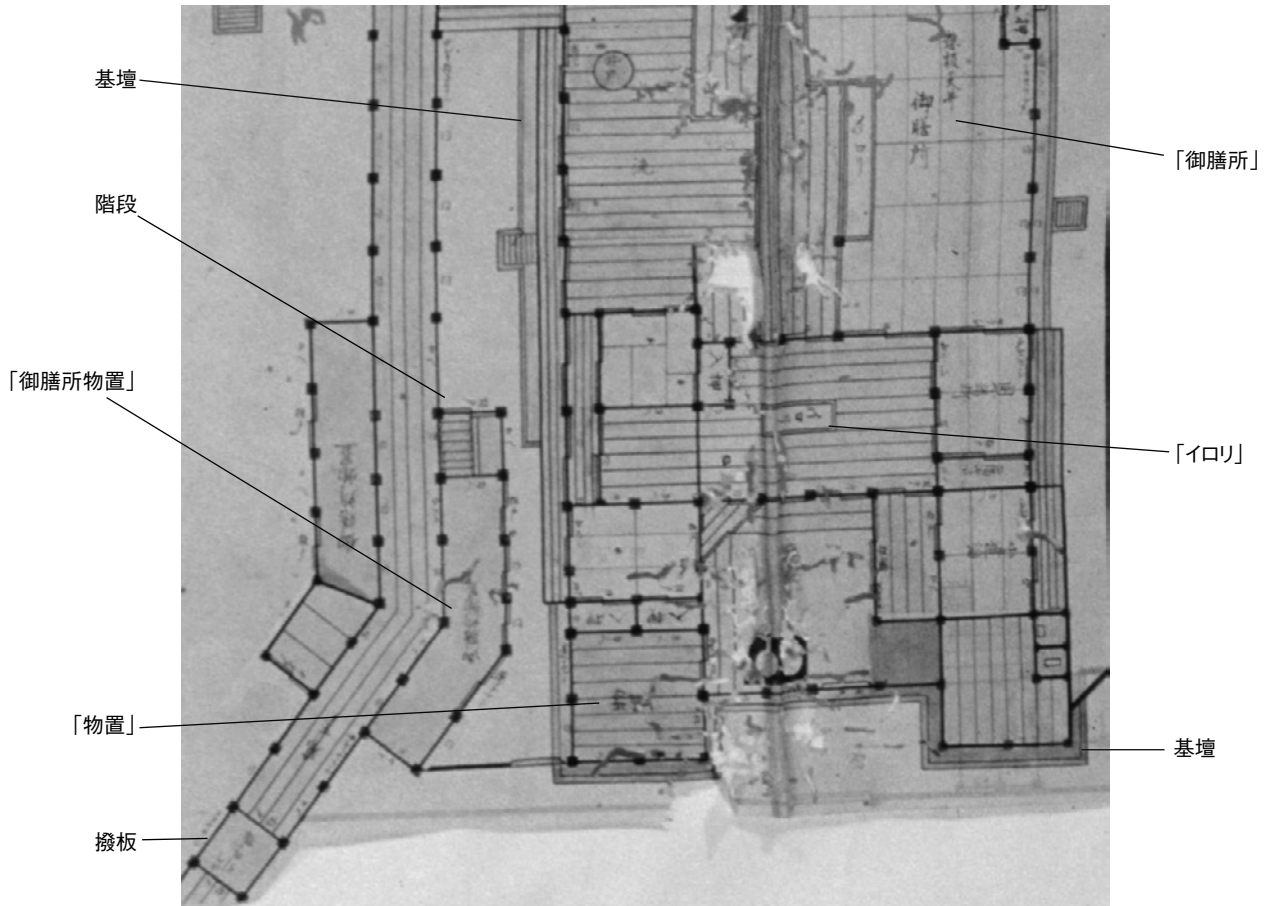
「江戸屋敷絵図」(14図)には、建物周りに基壇と思しき二重線が描かれている。当初、溝の可能性も考えたが、溝とは異なる描き方がされていることから基壇の可能性を指摘した(堀内2020)。あるいは雨落ち石のような施設の可能性も考えられる。SX133の石組は凝灰岩を長方形に加工していた。御殿の基壇石であれば、より硬質な石材を使用することが想定されるが、これまでこれに相当する遺構は、確認されていない。今回の調査では遺構の遺存が悪く、石の原位置も明確ではないが、SX133がこうしたものである可能性を指摘したい。

⑤ SK119、SK120、SK121、SK122 (便所遺構?、灰などの廃棄場?)

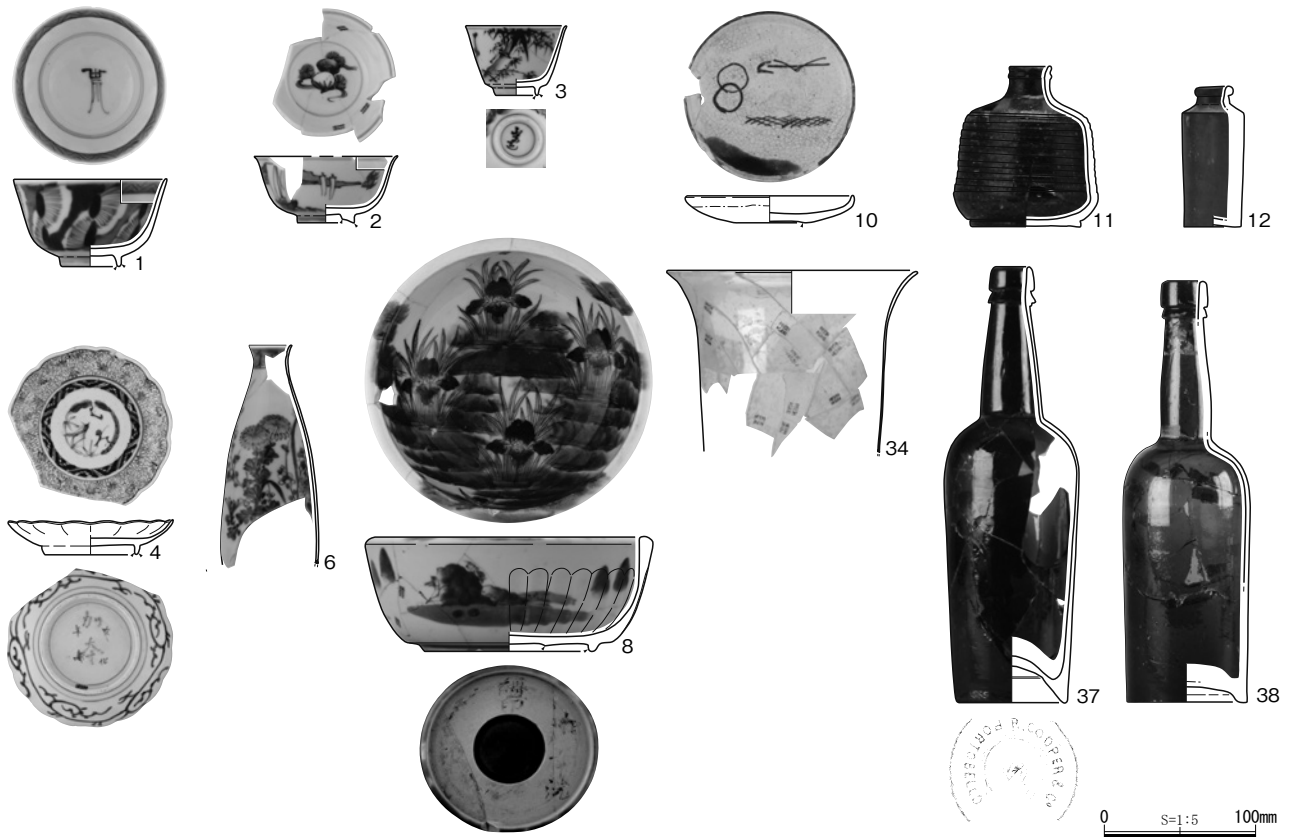
SK119、SK120、SK121は単独に東西に並ぶ3基の方形遺構で、遺構中央で半間おきに設置されている。いずれも埋土は灰褐色の土で、遺構周囲には木部が腐食しており、木組みの便所遺構と推定された。一方、SK122は2基が連結しているもので、構造は異なるもののこの前述した3基の延長上に造られていたことから、関連性が想起される。また、年代的にもSK122出土遺物に瀬戸・美濃の木型打込製品が出土している点や遺構軸が中山道軸である点から溶姫御殿との関係が想定される。今回の合わせでは、「江戸御上屋敷絵図」(2図下)、「江戸屋敷絵図」(14図)とも御膳所南端付近にあたるが、これに対応する施設は描かれていない。異なる時期に便所遺構が存在したか?あるいは便所であれば、描かれると考えられることから灰などを廃棄した施設とも考えられる。

⑥ SK110 (廃棄土坑)

「江戸屋敷絵図」(14図)に描かれている御膳所南西隅の「物置」と御表渡り廊下東の「御膳所物置」の狭い間に位置している廃棄土坑である。ここからは東大編年Ⅷb～c期に多く出土する陶磁器・土器類が出土している(4図)他、三葉葵文の軒丸瓦(19)や魚骨、貝類をはじめとする多量の動物遺体が出土している。特にキス、タラの出土状況から大奥との類似性が指摘されていることから(研究編研究5)、溶姫御殿の御膳所との関連性が窺える。



14図 「江戸屋敷総図」(部分)に加筆(金沢市立玉川図書館蔵)



15図 SK624出土遺物

2. 近代初期の遺構と土地利用

(1) 近代初期の遺構

調査区からは、近代前期のレンガやコンクリートを使用した基礎は確認されていない。調査では、レンガ、コンクリート、塩化ビニールなどの化石素材を用いた構造物と調査直前に伐採を行った樹木痕などは、調査の対象外とした。

先述の様に、重機による掘削後、最も高い位置で確認された遺構は、調査区南側を東西に横断する破碎礫を充填する溝状遺構 (SA103) であった。この他、近代に比定される遺物が出土した遺構は、調査区南西隅に確認されたSK469、SK622、SK624、SU625などの廃棄土坑群のみであった。こうした状況は土地利用を反映したものと考えられる。先述の様にA面から確認された遺構の遺存状況から、江戸時代後期の生活面の標高は、23m半ば程度と思われる。近代の当該地は大学や前田侯爵邸用地として利用されるが、藩邸から近代への土地利用の変化過程で50cm程度の削平を受けたと推定された。

15図は、SK624の出土遺物である。遺物は幕末～明治期の製品で構成されているが、江戸時代のものも多い。8は肥前の蛇ノ目凹形高台の鉢で、底部に「纏印」、「御筆洗」と墨書されている。「纏印」は第14代藩主前田慶寧のお印とされている。慶寧は天保元(1830)年に生まれ、慶応二(1866)年に藩主になっている。明治7(1874)年に死去しているので、その間のものであろう。明らかに近代に入るものとして、西洋コバルトを使用して絵付けされた坏(3)、そば猪口(11)、インク瓶(12)、ランプ(34)、ワインボトル(37、38)などがあげられる。この中で37のワインボトルは底部に確認されるエンボスから1874～1900年の期間に生産された製品と推定され、このあたりが遺構の下限と考えられる。

(2) 文献・絵図との対比

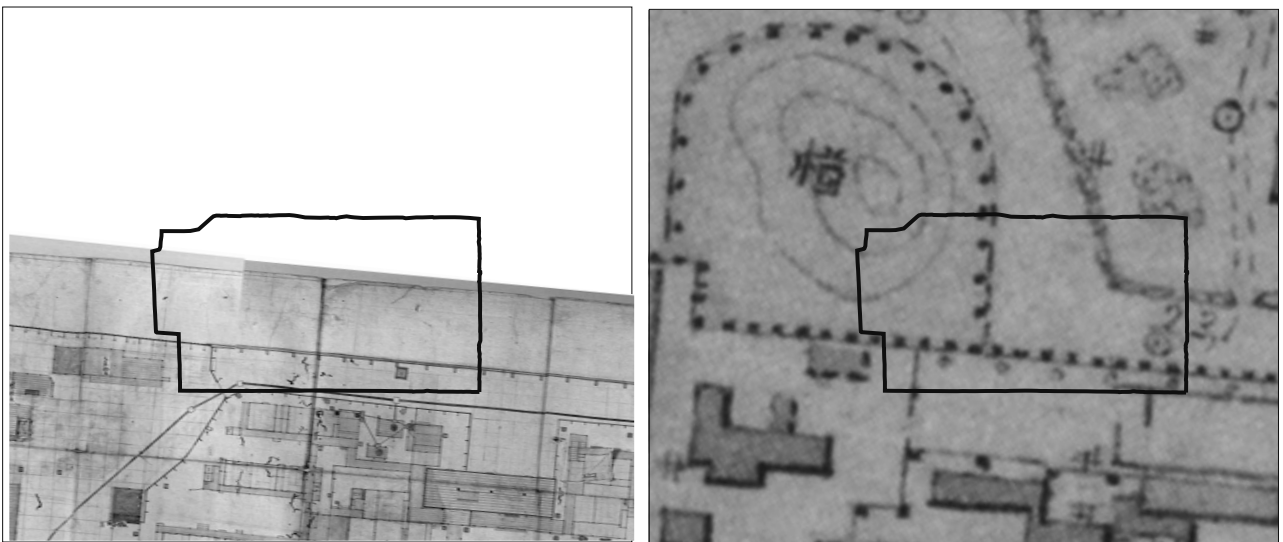
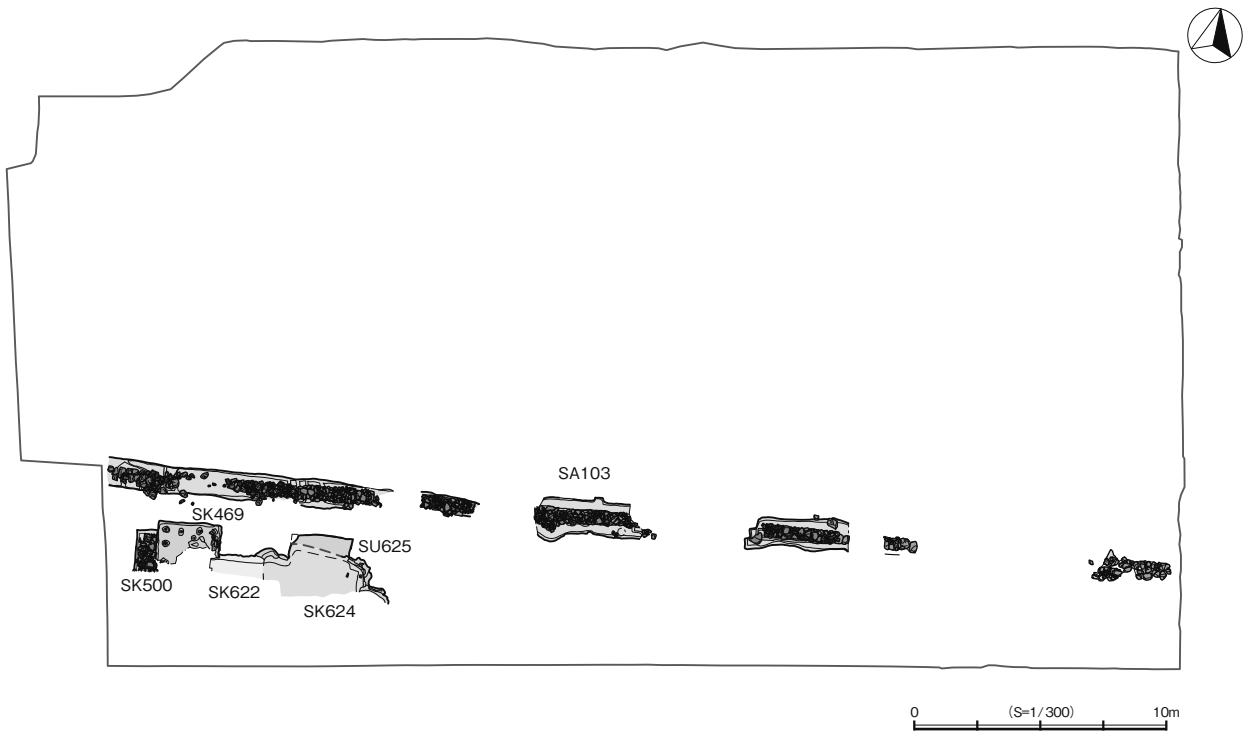
加賀藩本郷邸は、明治4(1871)年に明治政府に収公されるが、藩邸南西側15,078坪が前田家の私邸として残され、継続的に使用されている。明治前期の土地利用は、明治16(1883)年の陸軍参謀本部制作の測量図「東京府武蔵國本郷區本郷本富士町近傍」から知られる(16図下右)。これに調査区を照射すると、調査区西側に位置する2図で「富士権現旧地」と記された山は、ここでは「椿」と書かれている。また、SA103の主軸は中山道軸で、広がりがないことから、塀状施設の基礎と推定したが、絵図に描かれた位置から前田侯爵邸と帝国大学との境であると考えられる。16図下右測量図の調査区

東側には「23.1」と標高が書き込まれており、江戸時代の推定生活面(23m半ば)から50cm程度削平され、新たに大学用地として利用されていることが判る。その後、明治39(1906)年には、調査区東側に大型の校舎(法医学教室)が建設されるまで当該地は、道および空地になる。大学に残る構内図から校舎は、大正12(1923)年の関東大震災によって被災するものの、昭和5(1930)年まで取り壊されていないようである。調査区東側が大きく攪乱されていた経緯は、この校舎基礎による削平によるものと推定できる。また、西側の椿山は遺存され、昭和14(1939)年には椿山東側に花壇状の緑樹帯ができていた。その後、昭和40(1965)年椿山と緑樹帯を壊して経済学部研究室が建築された。こうした土地の履歴が、大学用地となったSA103以北に近代の遺構などが確認できなかった要因であろう。

一方、SA103より南側は、近代以降に大きく攪乱されていたが、南西隅にはSK469、SK622、SK624、SU625などの遺構が確認されている。明治期の前田侯爵邸を描いた「本郷御邸惣絵図」(前田育徳会蔵)(16図下左)をみると調査区南西隅は、建物が無い屋敷縁辺部の空地で、こうした場所に生活ゴミなどを廃棄したことが想定される。明治38(1905)年には、懐徳館建設のために大きく邸内の建物配置が変更され、当該位置には使用人の家屋が建てられていることから、これらの遺構はそれ以前に埋められたと考えられる。

おわりに

当該区を中心に、溶姫御殿が建設された江戸時代後期から近代初期にかけての土地利用の変遷と加賀藩本郷邸内で確認された建物基礎遺構について概観した。江戸時代には御殿空間に位置していたものの、主要な殿舎の建設は溶姫御殿の造営以降であり、遺構の遺存状態は不良にもかかわらず、その位置の特定は比較的容易であった。特徴的な遺構として、「御膳所物置」と比定されたSU107があげられるが、こうした構造を持つ地下室は加賀藩以外でも類例を知らない。御守殿として建築された殿舎の特殊性であろう。一方で、目に見えない基礎部分は、もともと南側にあった加賀藩の表御殿や奥御殿よりも簡易な構造となっており、殿舎が一律に堅牢な普請が行われたわけではないことが考古学的にも明らかになった。また、出土した遺物の大部は瓦であり、陶磁器・土器類などの日常廃棄物が御殿空間から多く出土しないことも、隣接する医学部教育研究棟地点と同様で、御殿空間の様相と指摘できる。



(上：SA103および関連遺構、下左：「本郷御邸惣絵図」(部分、前田育徳会所蔵に加筆)、下右：「東京府武蔵国本郷區本富士町近傍」(部分)に加筆)

16図 近代初期の遺構と土地利用

近代には、調査区が前田侯爵邸と東京帝国大学をまたぐ位置にあった。前田侯爵邸側の面積が少なく、対比を行う状況ではなかったものの、大学側にはほとんど遺物が出土しなかったのに対して、侯爵邸には明治前期にワインボトル、ランプ、カップ&ソーサーなどが出土し、土地利用の相違が明らかに異なっていることが確認できたとともに公爵邸では、いち早く西洋の生活様式が導入されたことが看取された。

【註】

- (1) 表の略称は、「経済」：経済学研究科棟地点、「御殿下」：御殿下記念館地点、「外来」：医学部附属外来診療棟地点、「医研」：医学部教育研究棟地点、「入院棟 A」：医学部附属病院入院棟 A 地点、「看護職員 1」：医学部附属病院看護職員等宿舎 1 号棟地点である。
- (2) 「御住居」は当初の呼称で、安政 3（1856）年に幕府から許されて「御守殿」と唱替した。

【引用参考文献】

- 小松愛子 2017 「溶姫の引移り婚」『赤門－溶姫御殿から東京大学へ－』東京大学総合研究博物館
- 東京大学遺跡調査室 1990a 『医学部附属病院地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1990b 『山上会館・御殿下記念館地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2016 『医学部附属病院入院棟 A 地点』
- 東京大学総合研究博物館・東京大学埋蔵文化財調査室 2017 『赤門－溶姫御殿から東京大学へ－』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2019a 『医学部教育研究棟地点報告編』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2019b 『医学部教育研究棟地点研究編』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2021 『医学部附属病院看護職員等宿舎 1 号棟地点・臨床試験棟地点・看護職員等宿舎 3 号棟地点 (1)』
- 畑 尚子 2009 『徳川政権下の大奥と奥女中』岩波書店
- 堀内秀樹 2017 「溶姫御殿の発掘調査」『赤門－溶姫御殿から東京大学へ－』東京大学総合研究博物館
- 堀内秀樹 2020 「加賀藩本郷邸南域の地業について－医学部教育研究棟地点および周辺の調査から－」『医学部教育研究棟地点 研究編』東京大学埋蔵文化財調査室
- 宮崎勝美 2016 「江戸時代の文献・絵図史料からみた入院棟 A 地点」『医学部附属病院入院棟 A 地点』東京大学埋蔵文化財調査室

経済学研究科棟地点出土瓦の考察

石井龍太*

1. はじめに

本稿で主に扱うのは、SK107 から出土した棧瓦である。軒棧瓦については先行研究があるものの、瓦当紋様の無い棧瓦は遺跡からの出土量は圧倒的でありながら、それ故に省みられることの無かった遺物である。幸いにも良好な一括資料を検討するチャンスを得た。東京大学構内遺跡出土資料の検討を通じ、溶姫御殿について、さらに近世アジアでも例を見ない特異な瓦・棧瓦について考えてみたい。

なお同遺構出土瓦については、江戸遺跡研究会第113回例会（2007年11月21日（水）午後19時00分～於 江戸東京博物館学習室）にて取り上げ、その内容は『江戸遺跡研究会会報』No.112にて公表した。本稿はその後新たに得られた知見を盛り込んで再構成したものである。

2. 溶姫御殿の遺構

調査区東側 A 面で検出された SU107 は、地下室としての性格を持っていたと推察される。周辺では建物礎石群、SA103（石組遺構）、SK110（ゴミ穴）、SK122（便所跡）などが検出されている。一帯は幕末期には溶姫の御殿（「御住居」）における膳所周辺にあたることが想定される。SU107 は、周囲を 1 辺約 30cm の四角錐を呈する石で組まれ、床面は張り床状に構築されており、そこからムシロが検出された。南よりの部分に小地下室がさらに設けられている。また北側の壁面には階段が確認されている。

SU107 の覆土には大量の焼土と焼けた瓦が含まれていた。覆土は間層を挟み上下二層に分かれる。下層の瓦は SU107 直上で検出されており、火災時に落ち込んだ瓦群、上層の瓦は火災後に投棄された瓦群と推察される。文献記録から、本遺構に見られる火災の痕跡には、明治元年（1868 年）の火災が該当すると推察される。SU107 出土瓦の検討は、溶姫御殿について知る上で重要な作業といえよう。

・SU107 の瓦

莫大な出土量であったため、大半は現場で廃棄された。

資料を採取した選択基準は

- ・紋様を持つ資料
- ・刻印を持つ資料
- ・二つ以上角を持つ資料

である。但し角を持つ資料に関しては取り上げた時点で確認されたものに限られ、接合は行われていないため全てが拾い上げられたわけではない。また破片資料は現場で廃棄されたため、接合して完形まで復元することは出来ない。そのため、採取された時点で完形だった一部の資料を除き、全形を復元することは出来ない。従って可能な分析は限られる。

3. 瓦の概況

軒棧瓦、軒丸瓦、棧瓦、丸瓦、平瓦、鬩斗瓦、海鼠瓦などが見られる。色調は灰色系が大半を占める。中には赤色を呈するものがみられるが、意図的に焼成し分けたものではなく、出土状況からして被熱の痕跡と見なされる。

また意図的な破壊が行われた様子はない。先の遺構の検討で見たように、地下室を埋めるのに用いた瓦ではなく、火災後の一括廃棄と推察される。以下、瓦の種類毎に概観する。

・軒棧瓦

瓦当紋様は、いわゆる江戸式に限定される。紋様は複数に分類可能だが、詳細は SU107 出土遺物を参照されたい。

・軒丸瓦

軒丸瓦が出土している。瓦当紋様は巴紋のほか、加賀藩の家紋である丸に梅鉢も出土している。但し下層からは出土していない。

出土している軒丸瓦は大きさ、葺き方も基本的に出土する軒棧瓦と互換性を持たず、下層から出土した資料でないことも含め、火災時に類焼した他の建築物の部材である可能性がある。一方で棧瓦葺きの屋根に丸瓦、平瓦が共存する事例はあり、屋根の左右端寄りに葺かれる例はよく見られる。実際 SU107 の下層からは丸、平瓦が出土している。出土状況からは何れの可能性も考えられるが、もし他の江戸式軒棧瓦と共に同じ屋根状に共存したのなら、溶姫御殿の屋根上に加賀藩の家紋が掲げら

*所属 城西大学

れたことになる。

・熨斗瓦

紋様は江戸式に限られる。紋様は片面に陰刻される。軒棧瓦の瓦当紋様と同じく、複数に分類可能だが、本稿では省略する。

・棧瓦

本遺構から出土した瓦の大半を占める。前述したように全形を確認出来る資料は少ない。確認出来る限り大きさは概ね一致しており、全長約 26cm。端部中央付近に刻印が押される。

4. 棧瓦の刻印

(1) 刻印の種類 (図1)

種類数は 50 種にのぼる。文字のものと、紋様になっているものと大きく二分できる。文字のものはさらに一文字のもの、二文字のもの、一文字と数字の組み合わせるもの、三文字以上のものなどに分けることが出来る。

(2) 刻印出土比率 (図1)

総計点数は 284 点にのぼる。但し下層から出土した点数は 24 点を数えるのみである。

出土比率を見たとき、刻印は満遍なく出土することは無く、刻印毎にかなりの偏りがある。「アサクサ瓦源イマト」、「やまに庄」、「庄六」、「庄二十」、「瓦彦七」だけで過半数を占める。特に「アサクサ瓦源イマト」は他の刻印を大きく引き離し多数を占める。

また上下層ともほぼ同様の傾向を示す。前述の通り上層の資料は必ずしも SU107 直上に葺かれていた瓦とし難く、周辺の被災家屋の瓦が混入している可能性がある。下層の出土点数が少ないため他方面からの検討も必要だが、この結果からすると周辺家屋の瓦の刻印も SU107 直上に葺かれていた瓦の刻印と同傾向にあった可能性が考えられる。

さて刻印のうち、「アサクサ瓦源イマト」は今戸焼をさしていると推察される。今戸焼の検証という意味でも本遺跡の検討は意義深いといえる。残念ながら現時点で具体的な生産地点を特定することは出来ない。また表に見る比率が個々の産地からの供給量の差を意味しているのか、同じ産地内での刻印が押される比率の差を意味しているのかは判然としない。従って単純に今戸焼の瓦が多く供給されたとはし難い。

(3) 刻印の持つ意味

金子智氏は先行研究の中で近世瓦の刻印について考察している。金子氏によると、18 世紀前半以前の刻印は、製作者個人に属する可能性があるとし、屋号あるいは姓

に当たる表記がなく、名前のみを配していること、その刻印が個人に属することを示す可能性がある、としている。一方 18 世紀中葉以降の、屋号、人名の一部を指すと思われる刻印は、多くが瓦屋に属し、商標的な意味を有するとする。そして常識的に考えれば、それらは瓦の製作された瓦屋を示すと考えられるとする。一方で、瓦屋が近世前半期において、果たして「屋号」に当たるものを有していたのかどうかという基本的な問題は今だ十分に吟味されていないとしている (金子 1997)。

瓦工場の屋号について、『日本瓦業総覧』昭和二年には多くの瓦屋の広告が掲載されている。広告には多くの屋号が掲載されており、中には瓦の刻印に見られるものと同じもの、近似するものが見られる。これらが近世にまで遡るならば、瓦の刻印は屋号の一種と見なしうる。

(4) 棧瓦にみる、流儀に関する特徴

もし刻印が屋号、すなわち瓦の生産集団を示しているのなら、同じ刻印の瓦群は同じ生産集団によって生産されていたことになる。そして遺物に観察される製作の流儀に関する特徴は、何らかの形で生産集団を反映すると期待される。すなわち、刻印が屋号を示しているのなら、同じ刻印の瓦群に見られる製作の流儀に関する特徴は、同様かあるいは一定のグループ内に収まると推察される。では棧瓦にはどのような流儀に関する特徴が見られるだろうか。

棧瓦の角には、平部の狭端側と棧部の広端側に切込が設けられる。棧瓦の稜は面取りが施されるが、しかし平部、棧部の切込だけは必ずしも面取りが施されない。そして何処の稜に面取りが施されるか、すなわち切込部の面取りの組み合わせは瓦毎に異なる。

(5) 棧瓦にみる刻印と切込部面取りの組み合わせ

そこで刻印毎にどのような面取りの組み合わせが見られるか、資料毎にカードを作成して検討した (図2)。その結果、刻印と面取りの組み合わせとの間にある程度相関関係が確認された。同じ刻印ならば面取り部の組合せがかなり固定されると見なしうる。一方、刻印が異なっても面取り部の組合せが同じになる資料も多い。そのため平角部の面取りの組み合わせからだけでは必ずしも刻印を想定できない。しかし逆はある程度可能と期待される。

また面取りの組み合わせが同じなら、刻印が異なる瓦同士に近縁関係がある、とまで言うことは出来ない。面取りの組合せは単純な特徴で、製作者を規定するほど強い個性を反映した特徴とはいえない。

(6) 小結切込部の面取りと刻印

さて製作の流儀はどのように考えられるだろうか。厳密には、製作の流儀は概ね工人の数だけ存在すると推察される。一方、同じ瓦生産集団では、集団の構成員の間で土・窯・作業場・道具は共有される、ないし近似したものが使用されると推察される。土・窯・作業場・道具が共通ないし近似する以上、製作の手法は限定され、場合によっては製作過程も近似する可能性がある。特定の指導者から製作法を学んだ、ないし生産集団内の統率が取れている場合、製作過程はもとより工人のクセまで近似する可能性がある。瓦が大量生産品であり、流れ作業で生産されるとすれば工程は固定化され、この可能性の蓋然性はさらに高まる。

一つの瓦生産集団内でありながら、個々の瓦工が異なる道具を使い異なる技法で製作していた場合、同じ集団が製作した瓦でも製作の流儀に関する特徴はばらつくと推察される。例えば構成員が激しく入れ替わる流動的な集団ならば、製作の流儀に関する特徴はばらつくと推察される。但しこの場合集団の意識は薄いと推察され、別の工人が製作した製品と同じ刻印を押すか疑問がある。一方、集団の構成員が固定化されているならば、技法の差は最大でも工人の数までに留まり、一定の触れ幅に収まると推察される。

切込部にみる面取りの組み合わせは、屋根上に葺かれる際の互換性に関わるものではない。むしろ製作者の流儀に関わる特徴であるということが出来る。SU107 出土資料の場合、「アサクサ瓦源イマト」をはじめ、確認出来た何れの資料も刻印毎にまとまりがよい。しかし何れの角も面取りを施さないという、整形の意図が無いことを何処まで評価出来るか判断は難しい。一方、「やまに庄」の刻印を持つ瓦群は、1、2の面取りにややばらつきが見られるものの、5、6の面取りは何れの資料にも見られる。5、6の部位への面取りは他に例が見られず、極めて特徴的といえる。このように、ある特徴を共有しつつ一定のばらつきを持つあり方は、生産集団内で共有される流儀と工人個人の流儀との混在と評価出来るかもしれない。しかし断定には至らない。面取り部の整形の組み合わせを比較するという単純な検証法には限界があり、分析の端緒を提供するに留まる。

5. 棧瓦の規格

(1) 棧瓦の切込と葺き足

SU107 出土資料には多くの刻印が確認された。一方で、多様な刻印が見られながら切込部の深さは何れも差がない。SU107 出土資料の場合、平部の切込の深さは

3cm (一寸) 前後に一致しており、誤差5mm 以下に留まる。

さて互いに重ね合わせて屋根に葺く平瓦と異なり、棧瓦は切込部の深さが異なれば葺き足に違いが生じ、同じ屋根上に葺くことが出来なくなる。そのため切込部の深さは、面取りの組み合わせとは異なり、葺き方に強く影響する特徴だということが出来る。切込部の深さと棧瓦の全長とは、棧瓦における葺き方に関する特徴、棧瓦の規格だということが出来る。

SU107 出土棧瓦の切込の深さや全長が一致するのは、同じ建物に葺かれていた瓦であるのなら当然というべきだろう。ではこの棧瓦の規格は、溶姫御殿の資材発注者が指定した規格なのだろうか。あるいは既存の規格なのだろうか。規格の問題は溶姫御殿の資料だけで論じることの出来ない問題であり、他の遺跡で見られる棧瓦と比較する必要がある。

(2) 近世瓦の規格性

瓦の規格に注目した例として、仙台城三の丸跡の発掘調査では出土した瓦の寸法から検討し分類している(仙台市教育委員会1985年)が、本稿ではさらに広範な地域との比較を試みたい。発掘報告書を参照し、各地の遺跡から出土した全形をうかがえる棧瓦の全長と切込部の深さを集計した(表1、図3)。結果、地域毎にある程度のまとまりがあるものと評価出来た。

・江戸式軒棧瓦と、伴う棧瓦

全長：約26cm 平部切込：約3cm 棧部切込：約8cm

・大坂式軒棧瓦と、伴う棧瓦

全長：約31cm 平部切込：約4cm 棧部切込：約4cm

・東海式軒棧瓦と、伴う棧瓦

全長：約28cm 平部切込：約4.5cm 棧部切込：約4cm

大坂式と東海式の規格は近いが、若干大坂式の全長が東海式を上回る傾向にある。一方両者と江戸式とは棧部切込に大きな差が見られる。また八重洲北口遺跡の出土例から、東海式には全長30cm、棧部切込5～6cmの規格が存在する可能性がある。何れにせよ今回調査し得た資料は100点ほどに留まり、今後継続調査が必要であるのはいうまでもない。

6. まとめと展望

・刻印

溶姫御殿出土瓦には50種に及ぶ刻印が確認された。刻印は屋号ないし瓦工個人に対応するとされるが、溶姫御殿の建築に先立ち、大量の瓦需要を短時間で満たした

め、複数の生産集団に瓦を発注したと推察される。今回はSU107 出土資料を主な検討対象としたが、層の上下に関わらず刻印の傾向は同じであった。前述の通り上層の資料は必ずしもSU107 直上に葺かれていた瓦とし難く、周辺の被災家屋の瓦が混入している可能性がある。しかし刻印の傾向が一致していることで、周辺家屋も同じ生産集団群に発注した瓦を用いていた可能性がある。溶姫御殿に関連する他の施設の調査事例として『法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』がある。出土資料の刻印はSU107 出土資料の刻印と同じものが見られ、一帯の施設へ同じ瓦生産地から瓦が供給されたものと推察される。(東京大学遺跡調査室1990)。但し「アサクサ瓦源イマト」が見られないのは興味を引く。発掘調査の進展と資料の検討を要する。

・家紋瓦について

SU107 下層からは丸瓦が出土している。ならば丸瓦列の軒先には軒丸瓦が葺かれた可能性がある。下層から軒丸瓦の出土は確認されていないが、SU107 出土資料には丸に梅鉢の軒丸瓦が存在する。また同じ調査区東側A面に位置付けられる遺構・SK110からは葵紋の軒丸瓦が1点出土している。これら家紋瓦が溶姫御殿に使用されていたかいないか、出土状況からは何れの可能性もあるが、単一の建物には単一家紋が掲げられるとすべきか、複数の家紋が共存し得るかの検討は容易でない。

溶姫御殿の近隣では、複数の家紋瓦が出土する遺跡がある。浅野公爵別邸に該当する地区で「丸に違い鷹の羽」をあしらう鬼瓦と、「丸に三つ引き」の紋様をあしらう菊丸瓦が出土している。「丸に三つ引き」は浅野氏の家紋に無く、こうした家紋瓦が使われた経緯を検討する必要がある点、近代においても家紋は存続している点も見逃せない。

一方で、こうした家紋をあしらう軒丸瓦が溶姫御殿に葺かれていた可能性はあるものの、主体を占めるのは特殊とはいえない三つ巴紋と江戸式の紋様からなる軒棧瓦である。本瓦葺きの赤門と対照的である。些か本質主義的ではあるが、瓦はいわば建物の屋根に展示され自身の政治的社会的立場を体現すると期待される。溶姫御殿に葺かれていたと推察される瓦の紋様は明らかにアイデンティティの主張が弱い。敷地内の御殿であるが故に対外的に強く自己主張する必要がないのかもしれない。出土した資料に見られる瓦当紋様には、御殿の立地上の性質が反映されている可能性がある。

・棧瓦にみる製作の流儀

検討した資料の平部切込の製作技法に注目したとき、同一の刻印には一定のまとまりを持った面取りの組み合

わせが対応するという結果が得られた。面取りの組み合わせが、葺き方に影響しない製作上の流儀に関する特徴である以上、同一の刻印には一定のまとまりを持った製作上の流儀が対応するものと推察される。これは一つの刻印が一つの纏まった生産集団をあらわすものであるとする仮説を補強する。将来的には棧部切込に見られる面取りの組み合わせと合わせ、さらに複雑かつ詳細な製作の流儀を追求出来る可能性がある。

・棧瓦にみる規格

御殿や大規模な寺院といった大口の消費先には、単一生産集団だけでは供給が追いつかない事態は当然考えられる。すなわち、複数の生産集団が一つの現場に資材を供給する必要がある。一方、棧瓦は一般的に型を用いた一枚作りである。従って棧瓦の大きさ・形状は型の大きさ・形状に固定される。一つの屋根に葺ける瓦を複数の生産集団が供給するためには、個々の生産集団が統一された瓦の型を有している、あるいは同一規格の瓦をすでに生産し備蓄している必要がある。個々の集団が異なる規格の型を有している、短期間に大量の瓦需要を満たすために複数の生産集団に発注したとしても、発注者の需要に答えることが出来ない。

軒棧瓦の瓦当紋様について、金子智氏は軒棧瓦の瓦当紋様が大きく三種に大別されること、さらに近世の軒平瓦、軒棧瓦の瓦当紋様に地域差があることを指摘している(金子1996)。今回複数県の報告書で棧瓦の規格を検討したところ、紋様のみならず規格にも地方色が見られる可能性が出てきた。こうした地方色の背景には、あるいは「江戸間」「京間」という尺度の差異があるのかもしれない。瓦の規格と対応する可能性はあるが必ずしも断定し難い。今後の検討課題である。

一方で江戸に持ち込まれる地方の瓦、あるいは地方に持ち出される江戸の瓦は供給先の規格に合わせていない。民俗誌には顧客つなぎのために瓦の規格を店毎に意図的に変えておく記述が見られる。規格の差は単に地域差に留まらず、生産者単位で発生する可能性も視野に入れていく必要があるだろう。

汎アジア的視点で棧瓦を見たとき、現時点では他の諸地域に類例の見られない独自の瓦である。一方で、統一規格の必要性は近隣諸国でも意識されていたらしく、中国と琉球においては明文化された瓦の規格が存在する。中国の瑠璃瓦には十の様式があり、それぞれ大きさを異にする。また近世期の琉球国では瓦の大きさと葺き方に応じた葺き足について定めたものがある。但し中国、琉球に見られる瓦の規格は官営窯業のものであり、近世・近代の棧瓦とは生産体制が異なる。対比には瓦の観察に

留まらず瓦生産の背景にまで目を配る必要がある。

【引用・参考文献】

石井龍太 2008「溶姫御殿と幕末近世瓦～瓦文化と近世アジア世界～」江戸遺跡研究会編『江戸遺跡研究会会報』No.112:2-13

今泉潔 1984年「「栃木棧瓦」の造瓦器具と製作技術」『物質文化』No.42

井上要 1927年『日本瓦業總覽』日本瓦業總覽刊行會

河南省文物考古研究所 2007年「鄭州商城宮殿区商代板瓦発掘簡報」『華夏考古』2007.3

金子智 1996年「江戸遺跡出土資料に見る近世軒平瓦・軒棧瓦の地方色」『古代』第101号

金子智 1997年「近世瓦の刻印」『早稲田大学大学院文学研究科紀要第4分冊日本史東洋史西洋史考古学』43巻早稲田大学大学院文学研究科

金子智 2007年「江戸の瓦」『考古学ジャーナル』553

関口広次・手塚直樹 1975年「沖繩本島与那原に残る造瓦技術について」『Circum-Pacific』2環太平洋学会

坪井利弘 1977年『図鑑瓦屋根（改訂版）』理工学社

坪井利弘 1981年『古建築の瓦屋根－伝統の美と技術－』理工学社

報告書

尼崎市教育委員会歴博・文化財担当 2007年『尼崎市埋蔵文化財調査年報平成8年度（2）・9年度・10年度（1）尼崎城跡第43・46次調査概要』-8-

江戸城跡北の丸公園地区遺跡調査会 1999年『江戸城跡北の丸公園地区遺跡』

金沢市都市政策局歴史遺産保存部文化財保護課（金沢市埋蔵文化財センター）2007年『石川県金沢市広坂遺跡（1丁目）近世編2』

株式会社武蔵文化財研究所 2006年『東京都千代田区有楽町二丁目遺跡』

財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター 2004『上中・西屋敷遺跡』

財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター 2005『名古屋城三の丸遺跡Ⅶ』

滋賀県教育委員会事務局文化財保護課 1992年『特別史跡安土城跡発掘調査報告2-大手道および伝羽柴秀吉邸跡伝前田利家邸跡・伝徳川家康邸跡-』

滋賀県教育委員会事務局文化財保護課財団法人滋賀県文化財保護協会 2000年『上田上牧遺跡Ⅲ ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書27-7』

滋賀県教育委員会事務局文化財保護課財団法人滋賀県文化財保

護協会 2002年『中畑遺跡Ⅰ 草津川改修事業ならびに草津川放水路建設事業に伴う発掘調査報告書Ⅴ』

滋賀県教育委員会事務局文化財保護課財団法人滋賀県文化財保護協会 2006年『松原内湖遺跡琵琶湖流域下水道事業（東北部浄化センター増設工事）に伴う埋蔵文化財調査報告書』

仙台市教育委員会 1985年『仙台城三の丸跡発掘調査報告書』

仙台市教育委員会 2006年『仙台城跡登城路1次調査』

仙台市教育委員会 2006年『仙台城跡地震災害石垣復旧事業及び史跡整備事業報告書中門跡・清水門跡』

高島市教育委員会 2005年『高島市内（旧高島町）遺跡調査報告書-平成10年度～16年度町内遺跡発掘調査・町内遺跡分布調査・打下古墳調査等-』

千代田区紀尾井町遺跡調査会 1988年『東京都千代田区紀尾井町遺跡』

千代田区隼町遺跡調査会 1996年『東京都千代田区隼町遺跡-警視庁隼町宿舎建設工事に伴う調査-』

東京大学遺跡調査室 1990年『法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』

東京大学埋蔵文化財調査室 1990年『東京大学本郷構内の遺跡山下会館・御殿下記念館地点第2分冊御殿下記念館地点の調査』

東京大学埋蔵文化財調査室 1990年『東京大学本郷構内の遺跡医学部付属病院地点』

東京大学埋蔵文化財調査室 2002年『東京大学構内遺跡調査研究年報3 1998・1999年度』

東京都千代田区教育委員会 1986年『平河町遺跡』

豊田市教育委員会 1997『挙母城内藤氏居城・七州城跡の発掘調査報告書』

都立学校遺跡調査会 1999年『日影町遺跡都立竹早高校内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』

名古屋市見晴台考古資料館 2000『尾張元興寺跡第8次発掘調査報告書』

浜松市博物館 2002『大通院旧境内遺跡静岡県浜松市新橋町大通院旧境内遺跡発掘調査報告書』

文京区遺跡調査会 1993年『新諏訪町遺跡興和不動産ホテル棟新築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』

文京区遺跡調査会 1996年『諏訪町遺跡鹿島建設㈱自社ビル等建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』

文京区遺跡調査会 1999年『春日町遺跡第Ⅵ地点』

文京区遺跡調査会 2000年『春日町遺跡第Ⅲ・Ⅳ地点』

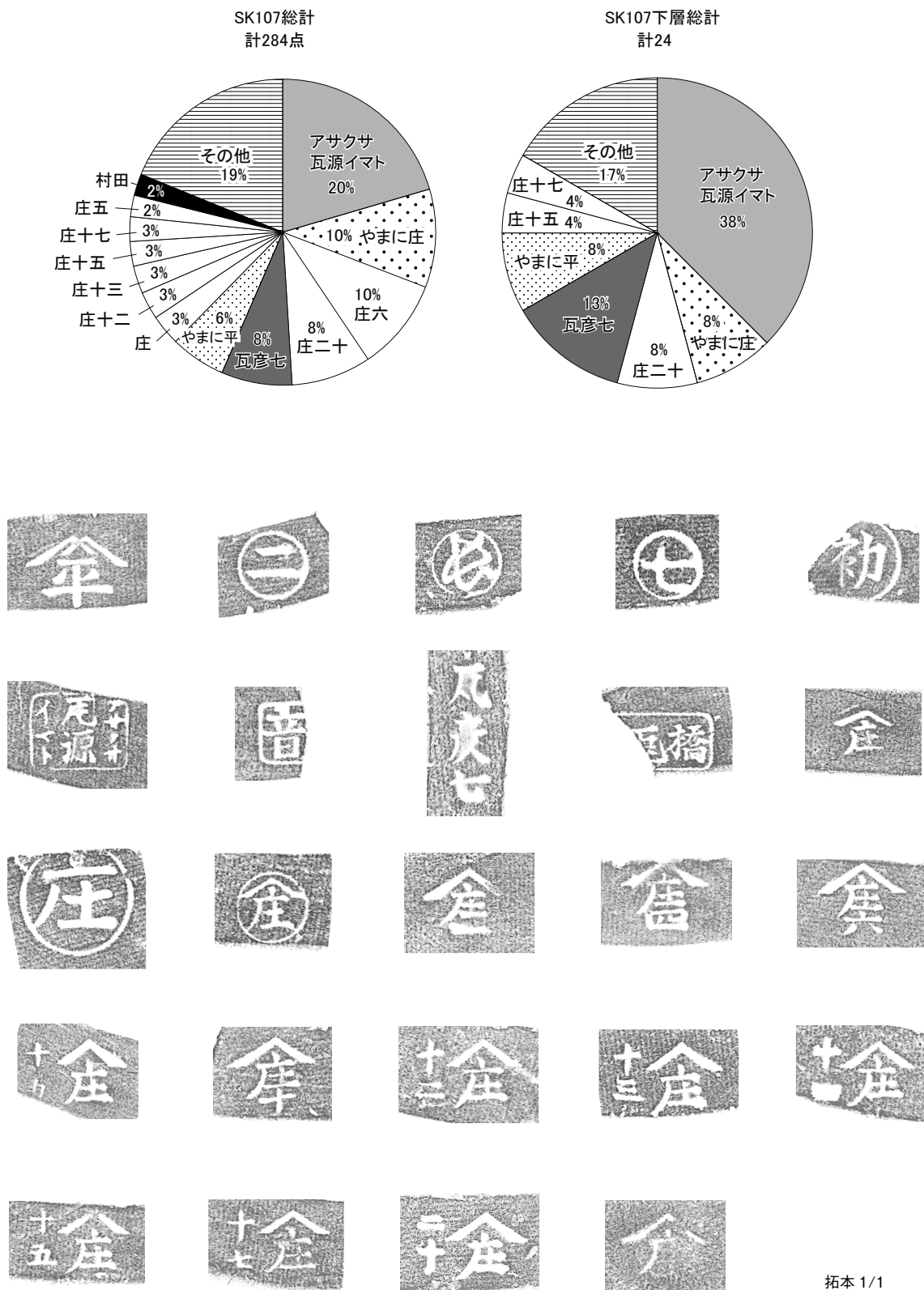
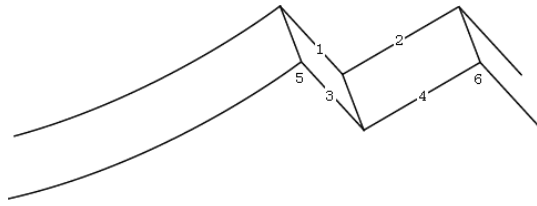


図1 SU107 出土瓦資料の刻印と出土比率



	1	2	3	4	5	6
アサクサ瓦源イマト	×	×	×	×	×	×
	×	×	×	×	×	×
	×	×	×	×	×	×
	×	×	×	×	×	×
	×	×	×	×	×	×
	×	?	×	?	?	?
	×	?	×	?	×	?
	?	?	×	?	×	?
	×	×	×	×	×	?
	×	×	×	×	×	?
×	?	×	?	×	?	
やまに庄	○	○	×	×	○	○
	×	×	×	×	○	○
	×	×	×	×	○	○
	?	○	×	×	○	○
	○	?	×	×	?	?
	○	?	?	?	○	?
	×	?	×	?	○	?
やまに平	×	×	×	×	×	×
	×	×	×	×	×	×
	×	?	×	×	×	×
	×	?	×	?	×	?
瓦彦七	○	○	×	×	×	×
	○	○	×	×	×	×
	×	?	×	?	?	?
やまに庄十五	○	○	×	×	×	×
	?	○	?	?	×	×
	○	?	×	?	×	?
やまに庄二十	○	○	×	×	×	×
	○	?	×	?	×	?
	○	?	×	×	×	×
やまに庄五	×	×	×	×	×	×
記号B	×	×	×	×	×	×
音	×	×	×	×	×	×
なし	×	×	×	×	○	○

面取りを施している角は○、施されていない角は×、破損し確認できない角は?とした。

図2 棧瓦平角部切込面取り組み合わせ一覧

表1 棧瓦寸法集計表

県名	遺跡名	時期	器種名	全長	全幅	平部	棧部	備考	報告書名	
東京都	江戸城跡 北の丸公園地区遺跡	Ⅲ期	棧瓦	28.8	28.0	4.0	4.4	釘穴。四角に「ヒコ／土山／ラ」の刻印。	江戸城跡北の丸公園地区遺跡調査会 1999年	
	溜池遺跡	17世紀後半～19世紀前半	軒棧瓦（江戸式）	27.2					軒丸部欠。釘穴。	都内遺跡調査会 永田町二丁目地内調査団 1996年
			棧瓦				4.0			
			棧瓦					8.0		
			棧瓦					9.2		
	平河町遺跡	縄文時代～近世	棧瓦	29.2				釘穴。引っ掛け棧瓦。凸面に並行する溝あり。	東京都千代田区教育委員会 1986年	
	東京都千代田区紀尾井町遺跡	Ⅲ期（棧瓦使用開始期～1823年）のうち、1823年の火災に伴う可能性が高い。	棧瓦	27.3	27.7	3.8	9.2		SK08（大阪式、東海式の瓦当が伴う）、22と25には「紀州多田孫三郎」銘。 SK09（江戸式、東海式の瓦当が伴う）	千代田区紀尾井町遺跡調査会 1988年
			棧瓦					7.3		
			棧瓦					7.6		
			棧瓦	26.8	27.6		7.8			
			棧瓦			3.2				
			棧瓦	27.8			3.8			
	東京都千代田区隼町遺跡	18世紀後葉から19世紀初頭までが主体的	軒棧瓦（江戸式）	26.4					軒丸部欠。釘穴。	千代田区隼町遺跡調査会 1996年
			軒棧瓦（江戸式）			27.3			瓦当のみ。	
			軒棧瓦（江戸式）			28.3			瓦当のみ。	
	東京都千代田区八重洲北口遺跡	近世	棧瓦	29.4	29.4	4.2	3.8		「大」の刻印。	千代田区 東京都八重洲北口遺跡調査会 2003年
			棧瓦	28.8	28.8	3.6	4.2			
			棧瓦	28.2	28.2	4.2	3.6			
			軒棧瓦（江戸式）	26.4	28.2		8.4		軒丸部まで含めると26.8cm。釘穴。	
			軒棧瓦（江戸式）	25.2	27.0		7.8		軒丸部まで含めると27.0cm。釘穴。	
			軒棧瓦（江戸式）	26.4	27.6		7.8			
			軒棧瓦（東海式）	27.0	30.0		3.6		軒丸部まで含めると28.1cm。釘穴。	
			軒棧瓦（東海式）	27.0	28.8		4.2		軒丸部まで含めると28.8cm。釘穴。	
軒棧瓦（東海式）			28.2	28.8		4.2		軒丸部まで含めると30.6cm。釘穴。「丸に一」の刻印。		
軒棧瓦（東海式）			28.8	29.4		4.8		軒丸部まで含めると30.0cm。釘穴。「丸に三」の刻印。		
軒棧瓦（東海式）			28.2	29.4		4.2		軒丸部まで含めると30.0cm。釘穴。		
軒棧瓦（東海式）			27.6	28.8		3.6		軒丸部まで含めると30.0cm。釘穴。		
軒棧瓦（東海式）			28.2					釘穴。		
軒棧瓦（東海式）			28.2	30.0		5.4		釘穴。		
軒棧瓦（東海式）	27.6					軒丸部を含めると28.2cm。釘穴。				
軒棧瓦（東海式）	28.8	29.4		4.2		軒丸部を含めると30.0cm。釘穴。				
有楽町二丁目遺跡	江戸時代後期～幕末	軒棧瓦（江戸式）	26.0					軒丸部は算入せず。釘穴。	株式会社 武蔵文化財研究所 2006年	
日影町遺跡	19世紀後半～20世紀主体	棧瓦	25.4				7.2	24号井戸	都立学校遺跡調査会 1999年	
諏訪町遺跡	17世紀～19世紀	棧瓦	25.6	26.8	2.8	7.6		Ⅱ面一括（混入と思われる資料 江戸式、東海式？）	文京区遺跡調査会 1996年	
新諏訪町遺跡		軒棧瓦（江戸式）	26.6	28.3		8.6		釘穴。軒丸部含めると29.0cm	文京区遺跡調査会 1993年	
春日町遺跡第Ⅵ地点		軒棧瓦（江戸式）	18.3	13.3				第54号遺構。釘穴。小型。軒平部直線的。	文京区遺跡調査会 1999年	

研究3 経済学研究科棟地点出土瓦の考察

県名	遺跡名	時期	器種名	全長	全幅	平部	棧部	備考	報告書名		
	春日町遺跡第三・IV地点	1629年より水戸藩の屋敷地。	棧瓦	27.2	26.8	なし	8.0	安志藩小笠原家屋敷跡。特異な形状。	文京区遺跡調査会 2000年		
			棧瓦	26.8		なし	7.6				
			軒棧瓦(江戸式)	26.4	26.8			水戸藩徳川家屋敷跡。軒丸部まで含めると28.4cm。釘穴。			
			棧瓦	26.8	26.8	なし	9.2	水戸藩徳川家屋敷跡			
	御殿下記念館地点	3期(遺構のV~VII期)	棧瓦	26.5		2.5	11.5		東京大学埋蔵文化財調査室 1990年		
			棧瓦	27.0		なし	8.0				
			棧瓦	26.5		なし	8.0				
			軒棧瓦(江戸式)	27.2							
			軒棧瓦(江戸式)	27.2							
			軒棧瓦(江戸式)	26.0							
			軒棧瓦(江戸式)	26.8							
	医学部付属病院地点	近世	軒棧瓦(江戸式)	25.6				8.4	釘穴。軒丸部を入れると28.2cm	東京大学埋蔵文化財調査室 1990年	
			軒棧瓦(江戸式)	25.8				7.8	釘穴。軒丸部を入れると27.0cm		
			軒棧瓦(江戸式)	25.2							
			棧瓦	24.6		なし	なし				
			棧瓦	36.6		なし	なし				
			棧瓦	26.4		2.4					
			棧瓦	27.0		3.6	6.6				
	静岡県	大通院旧境内遺跡	1401年~1925年	軒棧瓦	30.0			4.0		浜松市博物館 2002	
	愛知県	挙母城	1784年~1870年	軒棧瓦	29.2	30.4		4.0	釘穴。軒丸部を入れると30.8cm。	豊田市教育委員会 1997	
				軒棧瓦			30.0				
軒棧瓦				29.2	30.0			釘穴。軒丸部を入れると30.8cm。			
軒棧瓦				29.6	30.8		4.0	釘穴。軒丸部を入れると32.0cm。			
名古屋城三の丸遺跡		C期	棧瓦			30.1		5.16	財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター 2005		
			棧瓦					5.16			
			棧瓦	28.81				4.3			
			棧瓦					4.3			
二子古墳Cトレンチ		近世以降	棧瓦	29.2	30.0	4.8	4.4		安城市教育委員会 2007		
上中・西屋敷遺跡		古墳~江戸	棧瓦	28.4				4.0	財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター 2004		
	けら羽瓦		28.4	24.8	3.6	なし					
元興寺	古墳時代、奈良時代、江戸時代	軒棧瓦	28.8					名古屋市見晴台考古資料館 2000			
			軒棧瓦(大阪式)	32.0				5.0			
			軒棧瓦(大阪式)	32.5	31.5			5.0		軒丸部なし。釘穴。	
			軒棧瓦(大阪式)			32.0					軒丸部なし。
			軒棧瓦(大阪式)	32.5	32.0			5.0		軒丸部なし。釘穴。	
			軒棧瓦(大阪式)	32.0				4.5			
			軒棧瓦(大阪式)	29.5				4.5			
			棧瓦	31.5				4.0			
			棧瓦	31.5				4.0			
			棧瓦	32				4.0			
			棧瓦	30.5		4.0					
			棧瓦	31.5		4.0					
			棧瓦	31.0				4.5			

県名	遺跡名	時期	器種名	全長	全幅	平部	棧部	備考	報告書名
滋賀県	松原内湖遺跡A区第1テラス 今村忠右衛門邸	近世	棧瓦		32.0	4.0			滋賀県教育委員会事務局 文化財保護課 財団法人 滋賀県文化財保護協会 2006年
			棧瓦	31.5			4.5		
			棧瓦	32.5		4.0			
			棧瓦	31.5		4.5			
			棧瓦	31.5		4.0			
			棧瓦	31.0			4.0		
			棧瓦	32.5			4.0		
			棧瓦	32.0			4.0	栴に右斜め線の刻印	
			棧瓦	31.0	31.0	4.0	4.0		
			棧瓦	28.0	28.5	4.0	4.0	釘穴。	
			棧瓦	33.3		4.0	5.0	釘穴二つ。	
			棧瓦	30.0	29.0	4.5	4.0	○の刻印	
			棧瓦	30.5	29.0	4.5	4.2	○に右斜め線の刻印	
			棧瓦	29.0	28.5				
			棧瓦	29.0	28.0	4.0	4.0		
			棧瓦	31.0		4.0	4.0		
			棧瓦	32.5			4.0		
			棧瓦				3.5		
			棧瓦	29.5	29.0	4.5	4.0	○に右斜め線の刻印	
			棧瓦	28.0			4.0		
	棧瓦	28.5	28.0	3.5					
		安土城跡		棧瓦	30.6			3.9	滋賀県教育委員会事務局 文化部文化財保護課 1992年
				棧瓦	31.2			3.9	
	福泉寺遺跡第21次	室町時代～	棧瓦	28.2		4.2		高島市教育委員会 2005 年	
			棧瓦			4.5	○に紋様の刻印		
			棧瓦			3.6	○の刻印		
	福泉寺遺跡第22次		棧瓦			4.5			
			棧瓦			3.9	四角に一の刻印		
			棧瓦	30.3			4.2		
	中畑遺跡Ⅰ	江戸時代	棧瓦	29.4	28.8		4.8	滋賀県教育委員会事務局 文化財保護課 財団法人 滋賀県文化財保護協会 2002年	
	上田上牧遺跡	中世 近世	棧瓦	27.9	27.2			滋賀県教育委員会事務局 文化財保護課 財団法人 滋賀県文化財保護協会 2000年	
	辻野遺跡		棧瓦	28.0		4.0	4.0	滋賀県教育委員会事務局 文化財保護課 財団法人 滋賀県文化財保護協会 2000年	
石川県	広坂遺跡		軒棧瓦(分類不能)	26.4				金沢市都市政策局歴史遺 産保存部文化財保護課 (金沢市埋蔵文化財セン ター) 2007年	
長崎県	尼崎城跡		軒棧瓦(江戸式)	25.2	27.0		6.6	軒丸部欠。 尼崎市教育委員会 歴 博・文化財担当 2007年	
	仙台城跡 登城路 1次調査	江戸時代	軒棧瓦	32.2	35.0		4.8	釘穴三つ。軒丸部の み。三つ巴文。 仙台市教育委員会 2006 年	
	仙台城跡	江戸時代	軒棧瓦(分類不明)	33.0			4.2	釘穴。軒平部欠損。	仙台市教育委員会 2007 年
棧瓦			29.7	29.0	なし	なし	釘穴三つ。角を斜めに 切断。		
棧瓦			31.8	28.0	なし	なし	釘穴三つ。角を斜めに 切断。		

県名	遺跡名	時期	器種名	全長	全幅	平部	棧部	備考	報告書名
宮城県	仙台城三の丸跡		軒棧瓦	34.8	36.0		4.8	釘穴三つ。軒丸部のみ。軒丸部まで含めると36.6cm。	仙台市教育委員会 1985年
			軒棧瓦	34.2	35.4			釘穴三つ。軒丸部のみ。軒丸部まで含めると36.6cm。	
			軒棧瓦	33.6	35.4		3.6	釘穴三つ。軒丸部のみ。軒丸部まで含めると36.0cm。	
			軒棧瓦	34.2	34.8		3.6	釘穴三つ。軒丸部のみ。軒丸部まで含めると35.4cm。	
			棧瓦	33.0	34.2	なし	3.6	釘穴三つ。	
			棧瓦	31.2	37.8	なし	なし	釘穴三つ。棧角を斜めに切断。	
			棧瓦	30.0	34.2	なし	なし	釘穴三つ。棧角を斜めに切断。	
			棧瓦	31.2	35.4	なし	なし	釘穴三つ。	
			棧瓦	31.2	36.0	なし	なし	釘穴三つ。	
			棧瓦	31.2		なし	なし	釘穴三つ。	

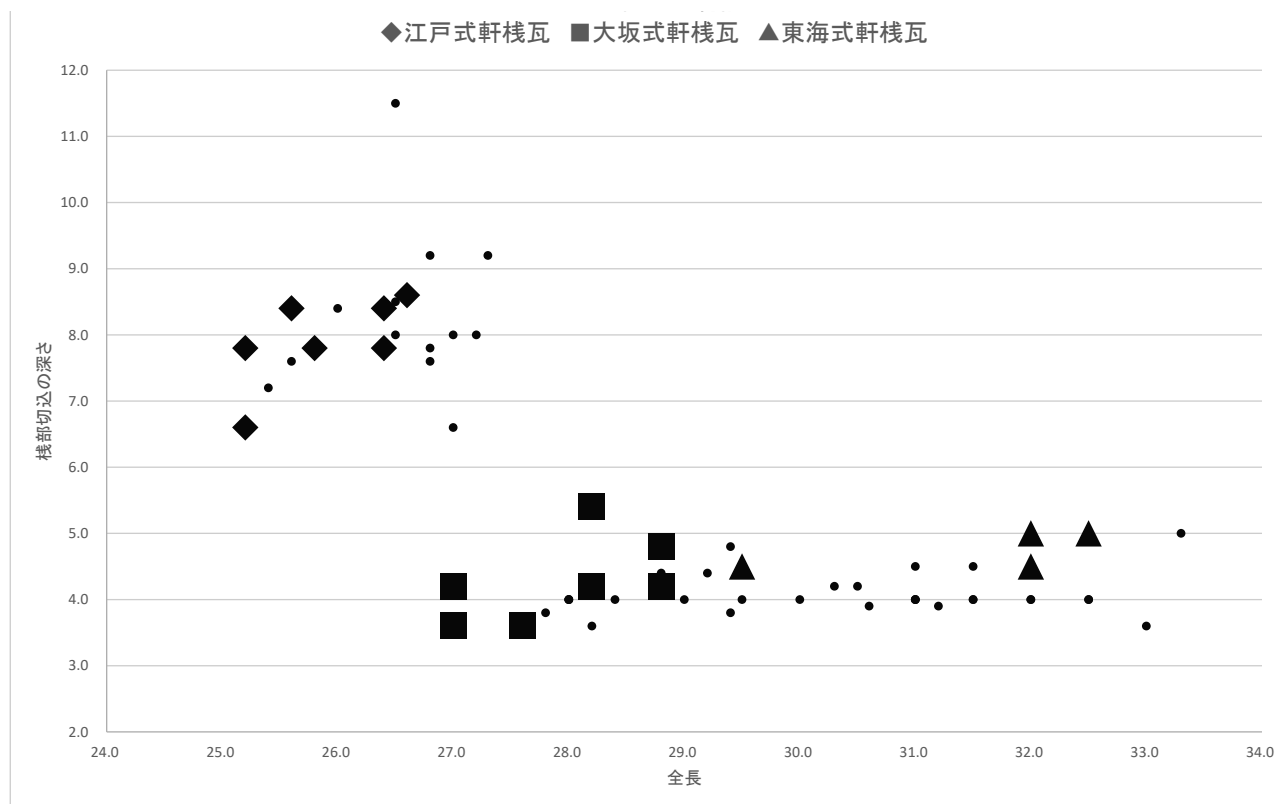


図3 棧瓦の規格

植栽痕の分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

東京都文京区に所在する加賀藩本郷邸御殿空間内遺跡は、武蔵野台地北東部を構成する本郷台の南部平坦面上に位置する。今回行われた発掘調査では、御殿内に構築された植栽の跡とされる土坑状の遺構が確認されている。本報告では、土坑内を埋める特徴ある土層について、その特性を明らかにすることにより、植栽痕であることの検証や埋め土の由来について検討する。

1. 試料

試料は、調査区内の検出されたSK509とされる遺構の覆土層より採取された2点の土壌である。覆土層は発掘調査所見により、5層から15層までの分層がなされている。SK509の平面図と断面図を図1に示す。

覆土層のうち、9層は白色を呈する粘土からなり、土坑中央部に壁状をなしている。9層の内側には青灰色土層の10層と黄褐色土の11層が堆積するが、10層は木の幹のような破碎状の土が立ち上がって様相が窺え、その下位に9層と11～13層からなる径1.4m程度で白みを帯びる土を含んだやや潰れた俵形の層が確認されている。9層から13層までを植栽痕とすれば、その規模は、直径3.5m、底径2.5m、深さ1.6m程度を示す。

分析に供する試料は、9層から採取された土壌1点と

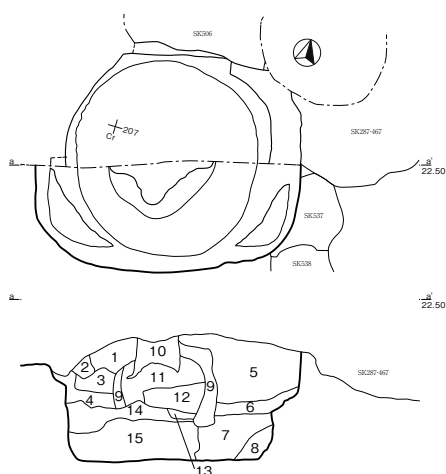


図1. SK509の平面図と覆土層断面

10・11層として9層の内側から採取された土壌1点の計2点である。

2. 分析方法

ここでは、薄片を用いた顕微鏡観察、X線回折による結晶質物質の特定を行う。以下に各分析手法について述べる。

(1) 薄片作製鑑定

試料は、ダイヤモンドカッターにより22×30×15mm程度の直方体に切断して薄片用のチップとする。そのチップをプレパラートに貼り付け、#180～#800の研磨剤を用いて研磨機上で厚さ0.1mm以下まで研磨する。さらに、メノウ板上で#2500の研磨剤を用いて正確に0.03mmの厚さに調整する。プレパラート上で薄くなった薄膜状の断面試料の上にカバーガラスを貼り付け、観察用の薄片とする。薄片は偏光顕微鏡を用い、下方ポラーおよび直交ポラー下において観察記載を行う。

(2) X線回折分析

試料は恒温乾燥器において60℃程度で12時間以上乾燥させた後、メノウ乳鉢を用いて磨砕し、粉末試料とする。粉末試料は、X線回折用のアルミニウムホルダーに充填し、不定方位試料とする。作成した不定方位試料をX線回折測定装置によって以下の条件で測定する。

装置：理学電気製 MultiFlex Divergency Slit : 1°
 Target : Cu (Kα) Scattering Slit : 1°
 Monochrometer : 湾曲 Graphite

Receiving Slit : 0.3mm

Voltage : 40KV

Scanning Speed : 2° /min

Current : 40mA

Scanning Mode : 連続法

Detector : SC

Sampling Range : 0.02°

Calculation Mode : cps

Scanning Range : 2 ~ 61°

3. 結果

(1) 薄片作製鑑定

1) SK509 9層 白色土

本試料には、粗粒シルト～極粗粒砂の鉱物片、岩片が中量程度含まれる。基質は、粒径0.003mm以下の微細不

定形状を呈する粘土によって埋められる。鉱物片は、粒径 0.49mm 以下で少量程度認められる。石英が主体となっており、その他に斜長石、カリ長石、かんらん石、斜方輝石、単斜輝石、角閃石、不透明鉱物などが認められる。岩片は、粒径 2.3mm 以下で少量程度含まれる。円礫状～亜円礫状を呈する花崗岩類、安山岩、凝灰岩、砂岩、頁岩、チャート、多結晶石英、変質岩などが認められる。その他、バブル型火山ガラス、植物珪酸体がきわめて微量含まれる。基質は、淡褐色～褐色を呈し、主に粘土鉱物および非晶質物質から構成されており、水酸化鉄が鉱染状に分布している。粘土鉱物は、隠微晶質で淡褐色～褐色を呈する。非晶質物質は組織や構造が認められない。

2) SK509 10・11層 白色土層内側

本試料には、粗粒シルト～極粗粒砂の鉱物片、岩片が中量程度含まれる。基質は、粒径 0.003mm 以下の微細不定形状を呈する粘土によって埋められる。鉱物片は、粒径 0.66mm 以下で、少量程度認められる。石英、斜長石、カリ長石、かんらん石、単斜輝石、斜方輝石、黒雲母、不透明鉱物などが認められる。岩片は、粒径 1.6mm 以下で少量程度含まれる。花崗岩、安山岩、砂岩、頁岩、チャート、多結晶石英などが認められる。その他、バブル型火山ガラス、植物珪酸体がきわめて微量含まれる。

基質は、褐色を呈し、主に粘土鉱物および非晶質物質から構成されており、水酸化鉄が鉱染状に分布している。粘土鉱物は、隠微晶質で淡褐色～褐色を呈する。非晶質物質は組織や構造が認められない。

(2) X線回折分析

試験結果の同定解析は、測定回折線の主要ピークと回折角度から原子面間隔および相対強度を計算し、それに該当する化合物または鉱物を、JCPDS (Joint Committee on Powder Diffraction Standards) の PDF (Powder Data File) をデータベースとした X線粉末回折線解析プログラム JADE により検索し、同定した。X線回折チャートを図 2、3 に示す。図中の最上段が試料の回折チャートであり、下段が同定された結晶性鉱物もしくは化合物の回折パターンである。検出鉱物の量比は、最強回折線の回折強度 (cps) から、多量 (>5,000cps)、中量 (2,500～5,000cps)、少量 (500～2,500cps)、微量 (250～500cps) およびきわめて微量 (<250cps) という基準で判定し、表 1 に示した。

1) SK509 9層 白色土

不定方位法では、中量の石英、微量の斜長石・ハロイサイトおよびきわめて微量の赤鉄鉱が検出される。ハロイサイトは、4.44Å (2θ:20°) 付近および 2.56Å (2θ:

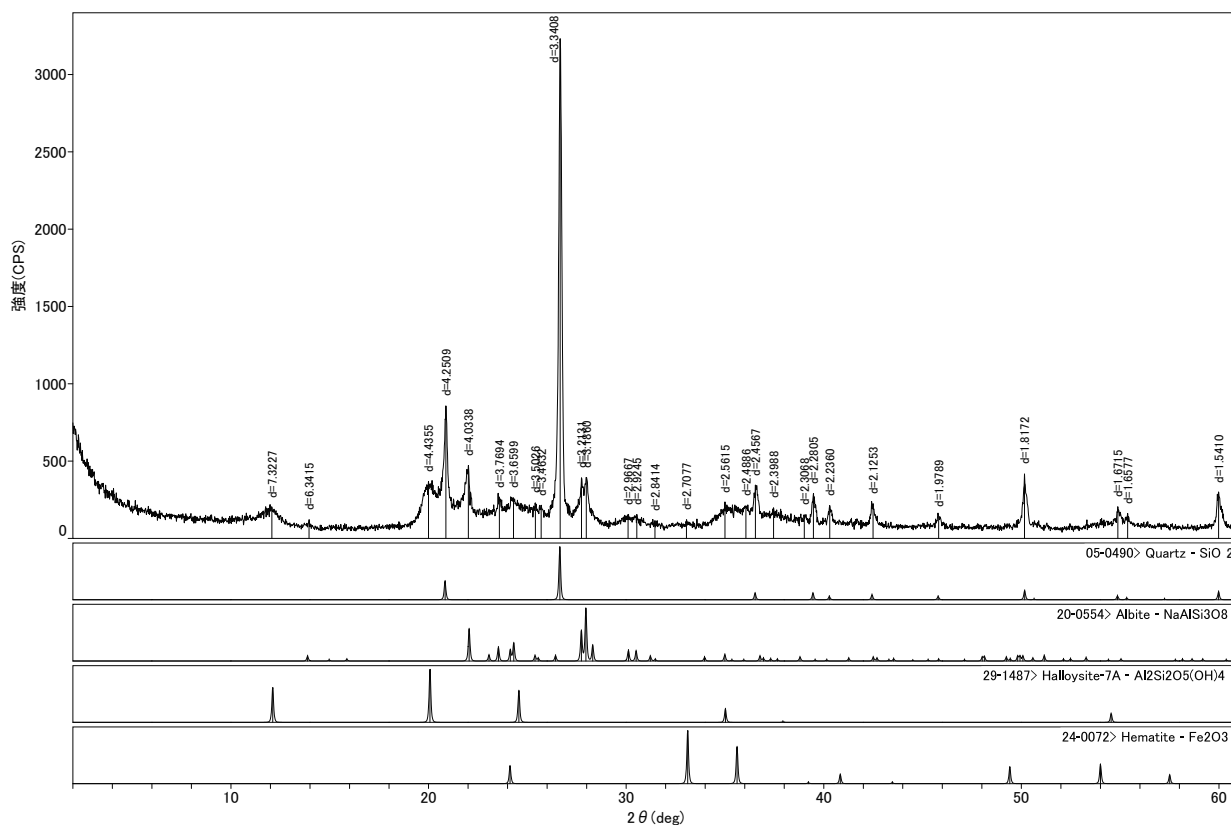


図 2. SK509 9層 白色土の不定方位法 X線回折チャート

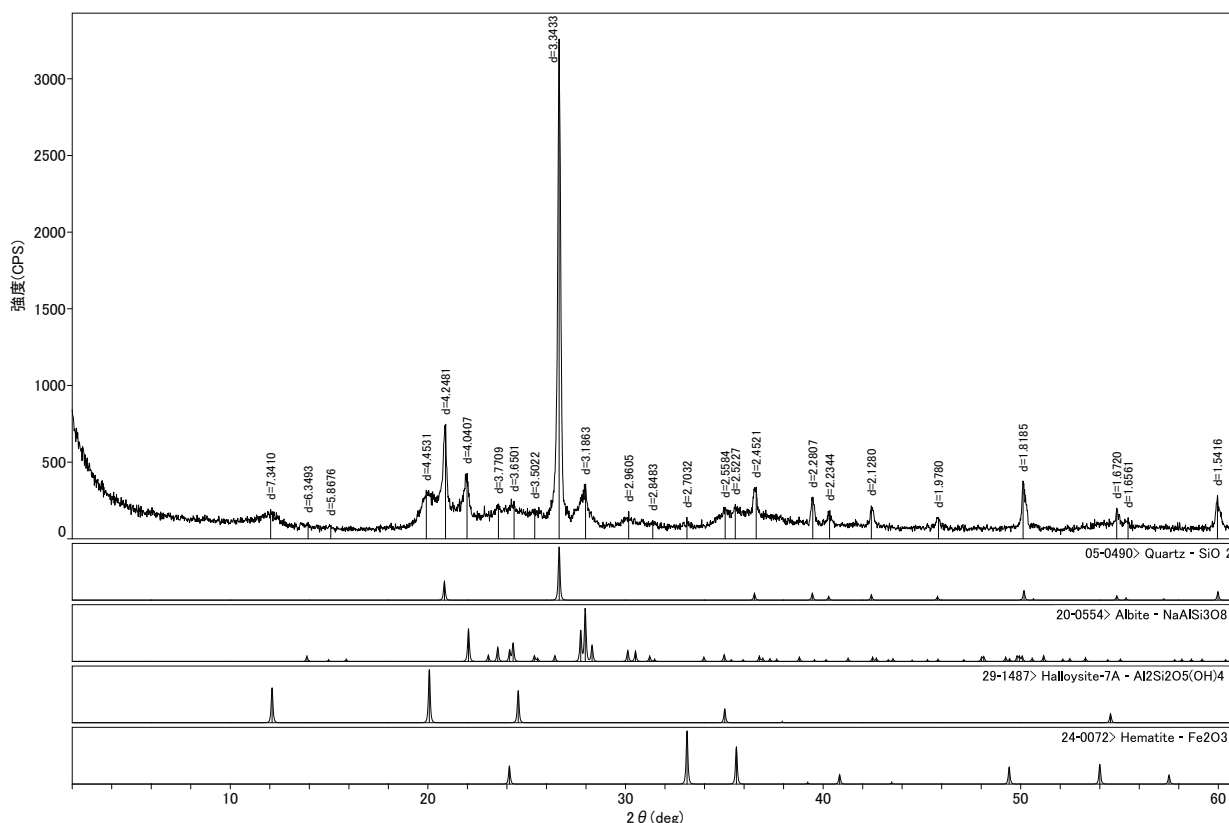


図 3. SK509 10・11層 白色土層内側の不定方位法 X線チャート

試料	検出鉱物			
	石英	斜長石	ハロイサイト	赤鉄鉱
SK509 9層 白色土	○	+	+	±
表 1. X線回折分析による検出鉱物 SK509 10・11層 白色土層内側	○	+	+	±

量比

◎: 多量(>5,000cps), ○: 中量(2,500~5,000cps), △: 少量(500~2,500cps),
+ : 微量(250~500cps), ±: きわめて微量(<250cps).

X線回折チャート上で使用したpdfデータの鉱物名

石英: quartz 斜長石: albite ハロイサイト: halloysite-7A 赤鉄鉱: hematite

35°) 付近において、低角側で低く、高角側で高くなる非対称な回折線を示す。また、その(001)面反射は7.3 Å (2θ:12.1°) 付近にブロードな回折線を示しており、7 Å型と判断される。

2) SK509 10・11層 白色土層内側

不定方位法では、中量の石英、微量の斜長石・ハロイサイトおよびきわめて微量の赤鉄鉱が検出される。ハロイサイトは、4.45 Å (2θ:20°) 付近および2.56 Å (2θ:35°) 付近において、低角側で低く、高角側で高くなる非対称な回折線を示し、7.3 Å (2θ:12.1°) 付近に(001)

面反射を示すことから、7 Å型とみることができる。赤鉄鉱は、2.70 Å (2θ:33.2°) にきわめて微弱な最強回折線を示す。

4. 考察

SK509の9層白色土からは、薄片下でも淡褐色～褐色の粘土が確認された。白色粘土のX線回折分析では中量の石英、微量の斜長石・ハロイサイトおよびきわめて微量の赤鉄鉱が検出されていることから、粘土を構成す

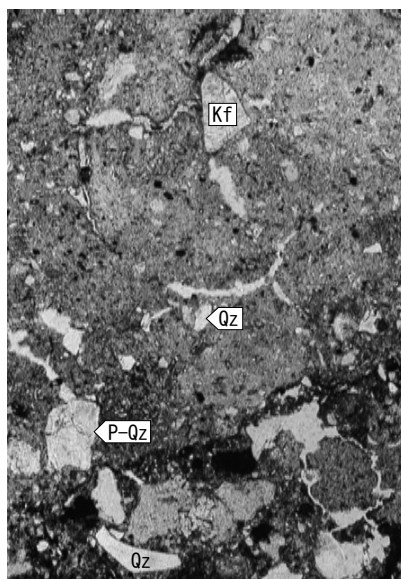
る主要な粘土鉱物はハロイサイトであると考えられる。ハロイサイトは、地表付近での風化作用によっても生成し得るが、SK509 覆土中に局在する産状から、9層は元々ハロイサイトを含む土壌であったと考えられる。ハロイサイトを多く含む地層としては、遺跡の所在する本郷台を構成する砂礫層と武蔵野ローム層との間に堆積する板橋粘土層で確認されている(森・佐藤,1977)。おそらく、台地の崖面に露出する板橋粘土層に由来する。SK509の10・11層も図2に示されるように9層の回折パターンと類似することから、9層と同質の土壌とみることができる。薄片鑑定では植物遺体は認められず、関東ローム由来と推定される砕屑片や褐色粘土鉱物などが認められた。植物遺体が検出されていないことは、植栽

痕であることを否定するものではないが、ローム層やその下位の板橋粘土層に由来することは推定することができる。

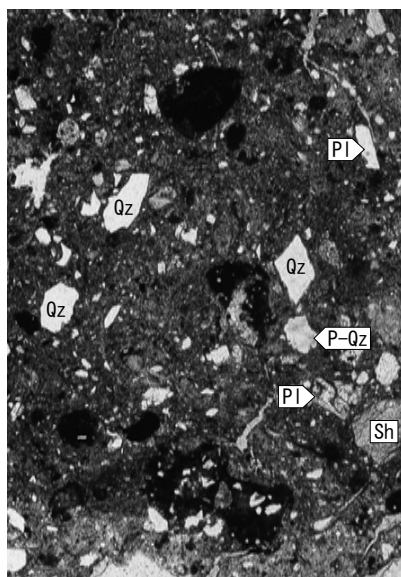
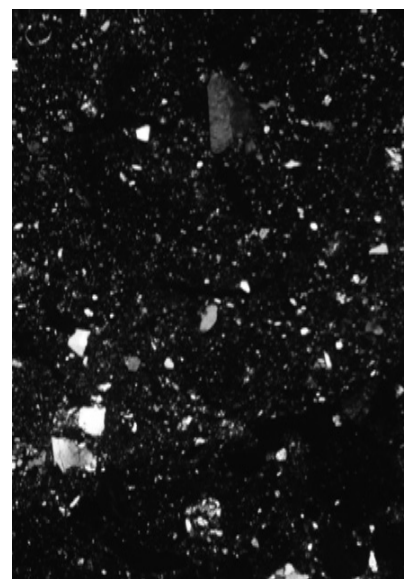
また、9層、10層、11層、12層の断面構造が埋め戻しの様相とは考えにくく、植栽を行なった際の構造が残っている可能性も考えられる。その場合、板橋粘土層を用いて根の部分の囲うような状況があったことが想定される。

【引用文献】

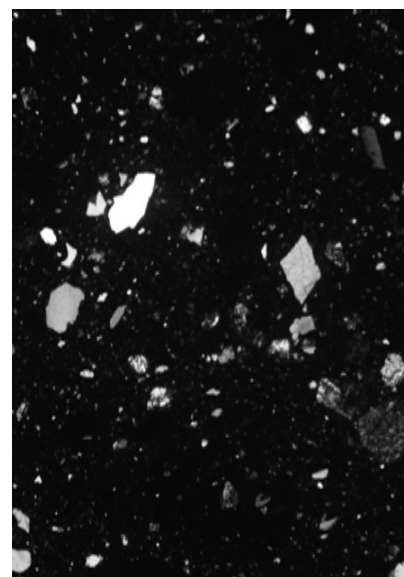
森 隆二・佐藤由美子,1977,本郷台における関東ローム層の粘土鉱物について,東京家政大学研究紀要第17集,29-32.



1. SK509 9層 白色土



3. SK509 10・11層 白色土層内側



Qz:石英, Kf:カリ長石, Pl:斜長石, Sh:頁岩, P-Qz:多結晶石英.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

図版1 土壌薄片

経済学研究科棟地点出土の動物遺体

阿部常樹*・江田真毅**

はじめに

本調査地点において、動物遺体は2つの方法を用いて採集された。1つは、これらの資料が含まれる覆土ごと採集を行い、その後、水洗選別法及び浮遊選別法によって、資料の抽出をおこなったもの、もう1つは、現場にて目視で確認のできたもののみを任意で採集したもの（ピックアップ法）である。採取方法の違いによる回収率の違いを考慮にいれ、章を分けて報告をおこなう。なお、水洗選別法には、5mm、3mm、1mm目の3つの篩を用いられている。

鳥類に関しては江田が報告までの一連の作業をおこなった。鳥類以外は、阿部と野々村海で整理と分析を行い、阿部が報告をおこなった。なお、SK110の部分は、『東京大学構内遺跡調査研究年報5』にて筆者らがそれぞれ報告をおこなったもの（阿部2006、野々村2006、江田2006）をもとにしている。（阿部・江田）

1. 分析方法

1-1. 貝類遺体

①計数方法

貝種組成は最小個体数で提示する。なお、計数方法は以下のとおりである。巻貝類は基本的に殻高が2分の1以上残存している資料を計数対象とした。しかし、アワビ類やキクスズメなど殻口部分が広くそれによって形状が笠・皿形の巻貝類は、殻頂部分が残存している資料を計数対象とした。

二枚貝類は、殻頂部分の残存している資料を計数対象とし、それらを左殻と右殻に分類してからそれぞれ計数した。そして、そのうち多いほうを最小個体数とした。以上の計数対象以外の資料は、「破片」として一括して扱った。なお、各サンプルの分類群内において、計数対象資料が残存せず「破片」のみである場合は、一括して1個体として計数をおこなった。

②貝種のサイズ分析

サイズ計測の定義は、阿部（2006a）にもとづく。特に二枚貝類に関しては、形状によって計測定義が異なる。具体的に、アカガイ、サルボウガイ、ヤマトシジミ、シ

オフキガイは前・後側歯の外側端部（アカガイ類は鉸歯の両端）を結んだ線を基準軸とする計測法A、アサリ、ハマグリ、ミルクイは殻の前後（横軸：殻長部分）で最も長い箇所を基準軸とする計測法B、マガキは殻の背と腹の間（縦軸：殻高部分）で最も長い箇所を基準軸とする計測法Cを用いる。また、計測に際して二枚貝類は、遺構などのサンプル単位で左右殻の多いほうを対象とした。さて、出土資料は、破損が激しく、主要計測部位（殻長など）が計測できないものも多い。そこで、ハマグリは欠損の少ない外韌帯溝の長さ（外韌帯溝長）から殻長を推定した。具体的に、回帰・相関分析によってその推定式の導出した。その分析結果は、6表、22表、35表を参照されたい。殻長の表記は、計測で得られた値を「計測値」、推定式で導出された値を「推定値」とし、本文中では「推定値」を分析に用いる。なお、SK110は層位間、SK622・623・624はブロック間で、それぞれ平均値の差の有意性について最小有意差法を用いて統計学的な検定をおこなった。（阿部）

1-2. 魚類・両生類・哺乳類遺体

①同定及び計数方法

同定に際して、国立歴史民俗博物館西本豊弘先生（分析当時）所蔵及び阿部所蔵の現生標本を用いた。まず、綱より下位の同定が困難な部位は「同定対象外資料」として対象からはずした。なお、同定対象外資料には計数困難な細片も含まれており、表中では“○”、文中では“+a”と表記し、その上で計数はおこなわなかった。また、それ以外の「同定対象資料」の内、同定するための特徴的な部分が欠損しているために同定することのできなかった資料は「同定不可」と記載した。さらに、一致する現生標本が手許になく、調査期間との兼ね合いから、同定に到らなかった資料は「未同定」と記載した。以上の過程を経て綱より下位まで同定できたものを「同定資料」とした。組成は破片数で提示する。

なお、魚類の分析方法は樋泉（1999）に準拠する。具体的には、綱より下位まで同定可能な部位である主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・方骨・舌顎骨・擬鎖骨・前鰓蓋骨・主鰓蓋骨・椎骨を中心に抽出し「同定対象資料」としている。

②哺乳類のサイズ計測方法

各部位のサイズ計測定義は、Driesch (1976) に基づく。

(阿部)

1-3. 鳥類遺体

資料は現生骨標本との肉眼比較で同定した。現生標本として、北海道大学総合博物館の収蔵資料 (HoUMVC)、川上和人氏 (森林総合研究所; KP) および江田 (EP) の所蔵標本を利用した。骨の部位の名称は Baumel et al (1993) および日本獣医解剖学会 (1998) に、分類群名は基本的に日本鳥学会 (2012) に従い、同書で言及されていないカモ科の亜科や族の分類は American Ornithologist' Union (1998) に従った。同定は、上腕骨や尺骨、大腿骨や脛足根骨といったいわゆる主要な四肢骨のほか、方形骨や寛骨、関節骨など、解剖学的位置が明らかにできて、分類群間での形態の差が明瞭に認められるものを対象とした。中型のキジ科の下肢骨は江田・井上 (2011) の基準、カモ亜科の上腕骨は江田 (2005) の基準による同定を試みた。趾骨と椎骨については、同定の対象とした部位の骨でありながら現生標本の不足などから鳥綱以下の同定ができなかった資料とともに、種不明鳥類とした。資料の残存状態は、近位や遠位の関節が半分以上残っているものをそれぞれ近位端、遠位端とした。また、主要四肢骨では骨幹のほぼ中央にある栄養孔が残存している骨は骨体部として記載した。上記の近位端、遠位端、骨体部のすべてが残存している資料は完存とした。一方、資料の破損が著しいために鳥綱以下の同定ができなかった資料は同定不能とした。各資料について骨の表面の粗さと骨端の癒合状態に基づく成長段階、同定時に目に付いた解体痕と加工痕を記載した。骨の成長段階は、すべての部位について未癒合のものは幼鳥、癒合しているものの形成が不完全な資料と骨体表面が粗い資料は若鳥とした。また、破損して髓腔を観察できた資料では骨髓骨の有無を記載した。 (江田)

2. 調査地点全体の概要 (1表)

本調査地点から 111 群の動物遺体が出土している (1表)。貝類が 41 群 (水産 36 群、陸産 5 群)、魚類が 49 群、鳥類が 12 群、両生類が 1 目、哺乳類が 8 群出土している。以下、資料の採集方法、さらに水洗選別法採集資料は遺構ごと (SK110 と SK641・642・643) に詳細な報告をおこなう。 (阿部・江田)

3. 水洗選別資料

3-1. SK110

3-1-1. 動物遺体全体の出土状況

本遺構から 67 群の動物遺体が出土している。その内、貝類が 19 群、魚類が 40 群、鳥類が 4 群、両生類が 1 目、哺乳類が 3 群である。以上のカテゴリーごとに報告する。なお、貝類は本遺構から抽出されたすべての資料を報告の対象としたが、そのほかの脊椎動物遺体は覆土の東側のみを対象としている。 (阿部・江田)

3-1-2. 貝類遺体 (2～8表)

本遺構から 19 群の貝類遺体が出土している。その内、水産が 14 群、陸産が 5 群、さらに、水産で、食用とされる中・大形のは 10 群、他の生物 (特に貝類) に着生する小形及び微小なものは 4 群となっている。以下の記載は、阿部 (2006b) を報告用に再編集したものである。

①水産貝類遺体組成 (2表)

まず、食物残渣である中・大形水産貝類遺体 (以下「水産貝類遺体」は「中・大形」のものを指す) について分析をおこなう。すべての水産貝類遺体での組成は、2表を参照されたい。

遺構内において最も多く出土しているのが、ハマグリで 58.1% (454 個体)、次いでヤマトシジミで 24.9% (253 個体) である。この 2 種で全体の約 80% を占める。その他に 1% 以上出土しているものは、アカガイ (9.9%・74 個体)、アサリ (3.3%・30 個体)、アワビ類 (2.2%・10 個体) で、これら以外に 1% を超えるものはない。

水産貝類遺体は、1 層から 5 層にかけて多く出土し、それに対して 6 層より下層は、貝類が廃棄された状況をほとんど見ることができない。

以下に分類群ごとに各層の出土傾向および層位間のその傾向の比較をおこなう。

アワビ類： 東側は、1 層で 1 個体と破片多数、5 層で 4 個体が出土している。その他に 2 層と 4 層と 6 層で破片が出土している。それに対して、西側は、1 層と 5 層で破片、4 層で 2 個体がそれぞれ出土している。東側において、2 層のものは 1 層から、6 層のものは 5 層から混ざりこんだことが推測される。東側 4 層の破片は、西側 4 層に廃棄したものとの関連性が窺われる。同様に、西側 2 層と 5 層の破片は、東側のそれぞれ同層位より出土しているものとの関連性が窺われる。

アカガイ： 東側は、4 層で 13 個体、3 層で 11 個体が出土している。その他に 2 層と 5 層で各 5 個体、1 層と

6層で破片が出土している。3層と4層を中心に上下層それぞれに向かうにしたがって徐々に量が少なくなっている。

一方、西側は、2層と4層で1個体、3層で2個体、5層で3個体が出土している。東側の各同層位よりアカガイが出土していることから、東側よりそれぞれ出土しているものとの関連性が窺われる。

ヤマトシジミ： 東側は、5層から71個体と最も多く出土している。他に1層で9個体、2層で3個体、3層と4・5層間で各1個体、4層で7個体が出土している。1層は10個体に満たないものの、5層について多く出土している。それに対して2層から4層は、1層と5層よりもヤマトシジミの出土量が極めて少ないことを鑑みると、1層と5層のヤマトシジミは、廃棄された時期が全く異なるものであると考えられ、それに対して、2層のものは1層、4層と4・5層間のものは5層にそれぞれ廃棄されたものが混ざりこんだものと推測される。3層は、1層から2層と、5層から4層の2つの出土量の減少傾向のちょうど中間にあり、また、左殻1点しか出土していないことから、1層と5層、どちらの廃棄に関連する混ざり込みであるか、判断することは困難である。なお、本遺構出土資料のなかに、剥き身の際のものも推測される欠損が主に腹縁部分に確認できるものも含まれている。

一方、西側は4層と5層から、それぞれ3個体ずつしか出土していない。東側の各同層位より出土しているものとの関連性が窺われる。

ハマグリ： 東側は、2層から154個体と最も多く出土している。他に1層から3個体、3層から35個体、4層から15個体、4・5層間から2個体、5層から5個体が出土している。2層から5層へ、下層に向かうにつれて徐々に数量が少なくなる傾向にある。

しかし、1層から4層までのものは、殻長45mm未満の「中小型」のみもしくは主体であるのに対して、4・5層間と5層のものは、45mm以上の「大型」で、さらに「中小型」のものとは比べて明らかにサイズの差は大きい。ハマグリは、成長と共に沖の方に移動する生態的な特徴があり（鈴木1971・大分県1979・浦安市教育委員会1995など）、一方で、近世においてその生息域（水深）に応じて異なる採集具を用いていること（東京府1890）から、サイズによって同じ種であるとしても採集された場や時期が異なる可能性が高い（阿部2003）。また、「中小型」は吸い物や佃煮など多数個体で一品の料理に使われるのに対し、「大型」は焼き物など一個体もしくは少数個体で一品の料理に使われるなど、サイズによって料理にお

ける使い分けがおこなわれていた可能性も指摘されている（桜井・山口1986）。つまり、4・5層間と5層のものは、それより上層のものと廃棄されるまでの一連の過程そのものが異なるものであることが考えられる。4層は、「中小型」が主体であるものの、「大型」のものも含んでいる。しかし、4・5層間や5層のもののように、「中小型」のものとのサイズの違いは大きくなく比較的45mmに近いサイズである。

さらに、西側は、4層からのみ25個体出土している。その内、24個体が「中小型」で、1個体（右殻1点のみ）が「大型」である。1層から3層まで、西側からハマグリが全く出土していないことや、4層において東側よりも西側のほうが多いことを鑑みると、おなじ「中小型」ハマグリを主体としているものの、少なくとも4層のものは、1層から3層のものと廃棄された時期（日時のレベルで）が異なるものであることが推測される。また、「大型」の右殻1点も、50mm程であることから、「中小型」ハマグリを採集した際に、イレギュラーに含まれていたものと推測される。なお、本遺構出土資料のなかに、剥き身の際のものも推測される欠損が主に腹縁部分に確認できるものも含まれている。

アサリ： 本遺構からは20個体とあまり多く出土していない。まず、東側は、5層から9個体、4・5層間から3個体、4層から2個体、2層から1個体出土している。

もっとも多く出土している5層において、ハマグリは「中小型」のものが出土しておらず「大型」のみで、且つ他層と比べて少ない。ハマグリは、「内湾砂底域」生息種であるのに対して、アサリは「干潟生息種」であり（松島・前田1985）、より浜に近いところに生息している。また、ハマグリは、成長と共に沖のほうに移動する生態的特徴から、アサリと生息域がより重なるのは「中小型」のものであると考えられる。そのことから、「中小型」ハマグリを主体に出土している5層以外の層位よりも、「大型」ハマグリのみが出土している5層からアサリがより多く出土している傾向を鑑みると、9個体と少なめではあるが、これらのアサリが、ハマグリを採集した際に混獲されたものとは考えにくい。むしろ、「アサリ」として種を認識して料理に用いられたものが含まれていることが推測される。4・5層間および4層のものは、5層よりも極めて少ないことから、5層のものと廃棄の単位を同じくするものが含まれていることが推測される。2層は、3層において1個体も出土していないことや右殻1点のみであることなどから、5層に廃棄されたアサリが混ざり込んだものとも考えるよりは、生息域が同じ「中小型」ハマグリを採集した際に混獲されたもの

であると考えられる方が妥当であると思われる。

一方、西側は4層から1個体、5層から4個体出土するのみである。2つの層位共に、東側の同層位から出土していることから、東側のものとの関連性が窺われる。**サザエ**： 東側は、1層と2層から蓋の破片のみ出土している。西側は、4層から殻柱部分1点と5層から蓋1点出土している。ほとんど蓋のみが出土しており、唯一、殻が出土している西側4層のものも、殻柱のみで遺存状態も悪い。以上から、おそらく他の場所に廃棄されたものが何かしらの経緯で本遺構内にもたらされたものであると思われる。

マガキ： 東側の1層と2層から破片のみ、西側の3層から右殻が1点出土しただけである。サザエと同様に他の場所に廃棄されたものが何かしらの経緯で本遺構内にもたらされたものであるか、もしくは、ハマグリを採集した際に、殻のみの状態でその砂中にあったなどの理由から混獲され、そのまま共に屋敷内に持ち込まれたものであると推測される。

サルボウガイ： 東側の1層と2層から1個体ずつ出土している。本種は、近世において「アカガイの代用品」とされることがあったことが指摘されている(篠田1996)。しかし、本遺構出土のサルボウガイは、殻長50mm未満の小形のものであることからアカガイのように一個体もしくは少数個体で一品とするような料理に用いられたとは考えにくい。以上のことから、生息域をほぼ同じくするハマグリを採集した際に混獲され、そのまま共に屋敷内に持ち込まれたものであるか、もしくは、サザエの蓋やマガキと同様に他の場所に廃棄されたものが何かしらの経緯で本遺構内にもたらされたものであると推測される。

ミルクイ： 5層西側から1個体出土しているのみである。しかし、本種は、一個体もしくは少数個体で一品とするような料理に用いられるものであることや、左右殻1点ずつ出土していることなどから、生息域を同じくするハマグリやアサリなどを採集した際に混ざり込んだものとは断定しにくい。

小結： 以上から、種類を認識して料理に用いた後、廃棄したと考えられるものは、13群の水産貝類遺体の内、アワビ類、アカガイ、ヤマトシジミ、ハマグリ、アサリの5群、もしくはミルクイをくわえて6群であると推測される。

また、アサリは、5層のものは以上の分類に含まれるが、それ以外の層位のものにはハマグリを採集した際に混入したものであると推測される。

②ハマグリ及びアカガイのサイズ分析(3～8表)

個体数組成について層位間の出土量の比較や貝種間の生態的な関係性などから検討し、それらが廃棄に至るまでの経緯について考察を試みた。その結果、アサリの例からも分かるように、食すのを目的に種類を認識して屋敷内に持ち込まれたもの、他のものを採集した際に混獲されてそのまま共に廃棄の段階までに至ったものなど、層位によって同じ分類群であっても廃棄されるまでの経緯が異なることがある。しかし、廃棄されるまでの経緯とともに、廃棄されるまでの一連の過程が同じ、もしくは時期的に近いものであるか否かを判断することは個体数組成分析だけでは難しい。また、1つの層位内の同じ分類群でもこの層位が複数の廃棄行為によって成り立っている可能性も考える必要がある。さて、以前、筆者は、1つの貝種において、同じ時期、同じ海域において採集されたものは、サイズの組成のバラつきが小さく、比較的サイズが揃うことを、東京湾三番瀬の実地調査の結果などを踏まえて指摘した(阿部2004)。つまり、層位間でサイズに差がなければそれらの層位が形成した時期が比較的近い可能性を指摘することができる。それに対して、1つの層位内において、サイズ組成にバラつきがある場合は、1つの層位が形成するなかで、同じ貝種であっても採集された時期などが異なるものも含んでいる可能性を指摘することもできる。

分析結果： アカガイの鉸歯長は、個体資料の出土している東側の2層から5層をサンプルとして分析に用いることができた(3表)。その結果、3層と、2層・4層・5層それぞれとの間に統計学的に差の有意性が認められた(5%有意)。つまり、3層のものは、2層・4層・5層のものに比べて平均値が統計学的に有意に大きいことが示された。実際に、3層のものは、全て鉸歯長が70mm台であるのに対して、他の層位のもの、70mm台のものも含まれるが少なく、ほとんどのものが60mm台である。

ハマグリは、1層を除いて、それぞれの層位の出土量に見合う程度のサンプルを用いて分析を行うことができた(7・8表)。その結果、5層東側のみ、分析に用いた各層位との間に統計学的に差の有意性が認められた。また、4・5層間は、サンプルが1点であったため分析できなかったが、殻長64.5mmと「大型」である。先にも触れたように、4層までは、殻長45mm未満の「中小型」が主体であるのに対し、5層と4・5層間において殻長45mm以上の「大型」のみの組成となっている。実際に分析を用いたデータをもみても、殻長45mm以上の資料が、4層東側において1点、西側において2点含まれる他は、1層東側と3層東側はいずれも45mm未満のものしか含まれていないのに対して、4・5層間と5層東側は、分析に用い

た資料が、いずれも殻長45mm以上である。また、4層東側と西側において殻長45mm以上であった資料も、いずれも55mm未満であるのに対して、4・5層間が64.5mm、5層東側が2点とも70mm台と、極めて大形である。つまり、4・5層間と5層東側のハマグリは明らかに、4層より上層のものとはサイズにおいて異なるものである。

一方、2層から4層までの平均値において統計学的に有意な差が認められなかったことから、ほぼ同じサイズのものが含まれていることが指摘される。それは、ヒストグラムを概観しても4つのサンプル共に、殻長30mm以上35mm未満のサイズのものが多い上、単峰型を示していることから指摘しうる。また、変動係数が10%から20%で、東京湾三番瀬の調査の際に同じ日、同じ場所で採集したアサリの殻長に関する変動係数が12%であること(阿部2004)からも極めて値が低いことが分かる。つまり、本遺構出土のハマグリは殻長のサイズ組成のバラエティーがあまりないことが指摘される。以上のことから、2層から4層に含まれているハマグリは、少なくとも採集時期や場所を同じ、もしくは極めて近いものである可能性が高い。なお、4層の45mm以上の資料も東側が45.7mm、西側が47.3mmと53.9mmであり、5層や4・5層間より出土している資料のサイズよりも、より45mmに近い値である。つまり、5層や4・5層間のものと同様の契機を同じと考えるよりも、2層を中心に出土している「中小型」ハマグリを採集した際に、イレギュラーに大きいものが含まれていたと考えるほうが妥当であると考えられる。

③海産微小貝類遺体

海産微小貝類遺体は、4群が出土している。最も多いのはキクスズメで、22点出土している。その他の3群は、1点ずつしか出土していない。キクスズメは、1層、2層、5層より出土している。本種は、「潮間帯から潮下帯の腹足類の殻上に着生」する(奥谷編著2000)。3つの層において、共通して出土している「潮間帯から潮下帯の腹足類」はアワビ類であることから、アワビ類に伴って本遺構内にもたらされたものと考えられる。

ウメノハナガイ、ウネナシトマヤガイ、タマエガイ類の3群は、ともに1層から出土している。ウメノハナガイは、潮間帯から水深30mの砂泥底域に生息している(奥谷編著2000)。ウネナシトマヤガイは、カキ礁に着生している。タマエガイ類は、主に岩礁、礫底、泥底域に生息しているものが多い(奥谷編著2000)。共に、比較的、マガキの生息域に近い。1層と2層の東側から、マガキの破片、3層西側から右殻が1点出土している。マガキは、数量的に極めて少ないことからハマグリを採

集した際に混獲されたものであると推測される。その上で、ハマグリ採集場の近辺にカキ礁が存在したと仮定すると、これらの微小貝類は、マガキの殻と共に潮汐などによって、そこからもたらされたものであることも想起される。

④陸産貝類遺体

陸産貝類遺体は、1層より5点、2層より3点、3層より1点出土し、4層より下層からは1点も出土していない。また、出土量も全体で9点と極めて少ない。内訳は、キセルガイ類とオカチョウジガイが2点ずつ、ヒメベッコウ属類似種が3点、不明が2点である。なお、オカチョウジガイやヒメベッコウは「林縁生息種」である(黒住1994)。

⑤まとめ—貝殻の廃棄過程についての復元—

以上の分析結果を元に、水産貝類遺体の廃棄過程について考察をおこなう。まず、種類を認識して料理に使用したと推測されるものだけに限定し、さらに上下層からの混ざり込みの可能性が低いものだけに限定して各層位の貝種組成を概観すると以下ようになる。

1層：アワビ類、ヤマトシジミ

2層：「中小型」ハマグリ、アカガイ

3層：「中小型」ハマグリ、アカガイ

4層：「中小型」ハマグリ、アカガイ、アワビ類

5層：アカガイ、アワビ類、「大型」ハマグリ、ヤマトシジミ、アサリ、ミルクイ

2層から4層は特に組成の類似性が高いといえる。さらに、主要貝種のサイズや出土状況について、特にこの3つの層位間の類似性や相違性を検討した。

まず、アカガイは、鉸歯長において、3層のものが2層・4層・5層のものに比べて平均値が統計学的に有意に大きいことが示された。このことから、3層と、2層・4層・5層では購入した時期などが異なるものを含んでいることが推測された。

一方、ハマグリは、2層から4層共に「中小型」ハマグリが主体であり、平均値の差の検定においても有意な差が認められなかった。つまり、ハマグリにおいて、サイズからこの3つの層位間の相違を見出すことはできない。しかし、出土状況を見ると、ハマグリは、3層より上層は東側からのみ出土しているのに対して、4層は西側からも出土しており、さらに東側より西側からのほうが多く出土していることから、少なくとも4層と3層では廃棄された時期が異なることが指摘される。

次に、層位内における貝種間の廃棄の順序の検討をお

こなう。

5層は、2つの出土パターンが抽出される。1つには、6層に同種が出土し、45層間において出土していないアワビ類とアカガイ、もう1つには、6層には同種が出土せず、45層間において出土している「大型」ハマグリ、アサリ、ヤマトシジミである。それぞれこれらの貝種は、出土量において、5層よりもその上下層のほうが少ないことから、5層に廃棄されたものが何かしらの原因で混ざり込んだものと解釈した。その解釈を前提に考えると、以下のような廃棄過程によって5層が形成されたことが推測される。まず、5層形成の際に、アワビ類とアカガイが廃棄され、その際に、6層へ一部混ざり込んだ。その後、「大型」ハマグリ、アサリ、ヤマトシジミが廃棄され、その3種は45層間及び4層にまで継続して廃棄された。

4層は、西側を中心に廃棄されたアワビ類と「中小型」ハマグリ、東側を中心に廃棄されたアカガイに分かれる。3層でアワビ類が全く出土していないのに対して、アカガイが多く出土していることや、3層より上層では、西側を中心とした廃棄がみられないことから、まず、西側を中心にアワビ類と「中小型」ハマグリの廃棄があり、その後、東側を中心にアカガイの廃棄が行なわれたと考えられる。また、「中小型」ハマグリは、西側に多く含まれているものの東側も15個体と比較的多く出土していること、また、サイズ分析において、3層のものと統計学的に有意な差が認められなかったことから、一部、アカガイと共に東側を中心に廃棄されたものも含まれることも想起される。

3層から2層は共に「中小型」ハマグリとアカガイの廃棄が行なわれている。3層の「中小型」ハマグリは、2層と4層のものとサイズに統計学的に有意な差が認められなかったのに対して、アカガイは、3層のものが2層と4層のものよりもサイズが統計学的に有意に大きいことが示された。このことから、「中小型」ハマグリは、採集された時期や場所が同じ、もしくはあまり離れていないものが食されたのに対して、アカガイは、採集された場所の異なるものが食された可能性も考えられる。つまり、1つの解釈として、ハマグリは、比較的、継続的に購入していたのに対して、アカガイは、断続的に購入し使用していたことが想起される。さらに、想像の域を出ないが、ハマグリを大量に購入したことを前提にして、その量が、2層において、3・4層の約4倍と極端に多い理由を考えると、3・4層への廃棄時は汁物などあまり保存の利かない料理に利用していたのに対して、2層廃棄時は、最終的に食べきれずに廃棄したか、もしくは、

同様の理由から佃煮など保存の効く料理に利用したことも想像される。

そして、最後に1層において、ヤマトシジミとアワビ類の廃棄が行なわれる。

これらの廃棄は、特に2層から4層間の組成や、遺構内全体のハマグリのサイズの分析結果から比較的短期的且つ継続的に行なわれたものと考えられる。それは、陸産貝類遺体の出土が微量であったことから、指摘することができる。

以上の考察から導き出された廃棄過程は以下とおりである。

- 1) アワビ類、アカガイが廃棄される。
(6層から5層下部)
- 2) 「大型」ハマグリ、アサリ、ヤマトシジミが廃棄される。
(5層上部から4層下部)
- 3) 遺構の西側からアワビ類、「中小型」ハマグリが廃棄される。
(4層西側)
- 4) 遺構の東側からアカガイが廃棄される。また「中小型」ハマグリも3)に引き続き、東側から廃棄されていた可能性もある。
(4層東側)
- 5) 「中小型」ハマグリ、アカガイが廃棄される。
(3層から2層)
- 6) アワビ類、ヤマトシジミが廃棄される。
(1層)
(阿部)

3-1-3. 魚類遺体 (9～11表)

①遺構全体の様相

本遺構からは、40群5044点の同定標本が抽出された。最小個体数で206尾である。タイ科・型が27.2% (1370点/50尾)で最も多く、次いでキス属が27.0% (1360点/62尾)、サヨリ科が13.7% (689点/12尾)含まれている。この3群以外に10%を超えるものはなく、また、この3群で全体のほぼ70%を占める。さらに、ヒラメが9.0% (454点/17尾)、カレイ科が4.6% (231点/7尾)で突出しているほかは、2%に満たない。しかし、母数が大きいために比率が低くなるものの、0.3%以上のものは10点以上含まれている。

タイ科において科より下位まで同定できるもので、マダイ亜科(マダイ・チダイ)、クロダイ属、キダイ属が含まれている。なお、マダイ以外がすべて5層から出土している。

カレイ科は、厳密な種分類にまでは至らなかったが、マガレイ、イシガレイ、クロガシラガレイ、ムシガレイ、アカガレイのそれぞれの現生標本との比較から他のカレイ

イ科標本より近似するものに分類された。

そのほかに、それぞれの分類群より下位まで同定できたものは、コイ科がコイ、ホウボウ科がカナガシラ属、スズキ属がスズキ、ブリ属がカンパチ、アジ亜科がマアジであった。

②層別の様相

1層： 18群 119点で、遺構全体の24%が含まれている。タイ科・型が30.3% (36点)で最も多く、次いでキス属が22.7% (27点)含まれている。この2群以外に10%を超えるものはなく、また、この2群で全体の53%を占める。次いで、ヒラメが7.6% (9点)、サヨリ科とアイナメ科が各6.7% (8点)、ニシン科が4.2% (5点)含まれている。その他の分類群の点数は、5点以下である。なお、タイ科で亜科以下が判別できるものは、マダイ・マダイ亜科である。

2層： 32群 1598点で、遺構全体の31.7%が含まれている。キス属が34.0% (543点)で最も多く、次いでタイ科・型が23.5% (375点)、ヒラメが10.5% (168点)含まれている。この3群以外に10%を超えるものはなく、また、この3群で全体の68%を占める。次いで、サヨリ科が4.7% (75点)、カレイ科が4.2% (67点)、アイナメ科が3.4% (55点)、コチ科が3.0% (48点)、アユが2.7% (43点)、スズキ属が2.1% (33点)、ドジョウ科が1.9% (30点)、板鰓亜綱(エイ類)が1.6% (25点)、ボラ科が1.3% (20点)、アジ亜科が1.2% (19点)、カツオが1.1% (17点)含まれている。その他の分類群は1%を超えない。しかし、0.6%以上のものは10点以上含まれている。なお、タイ科で亜科以下が判別できるものは、マダイ・マダイ亜科とクロダイ属である。

3層： 20群 636点で、遺構全体の12.6%が含まれている。タイ科・型が36.2% (230点)で最も多く、次いでキス属が28.8% (183点)、ヒラメが11.0% (70点)含まれている。この3群以外に10%を超えるものはなく、また、この3群で全体の76%を占める。次いで、カレイ科が5.2% (33点)、カツオが3.6% (23点)、コチ科が2.5% (16点)、ブリ属が2.4% (15点)、アジ亜科が2.2% (14点)、スズキ属が2.0% (13点)、アイナメ属が1.4% (9点)、アユとサヨリ科が各0.9% (6点)含まれている。その他の分類群の点数は、5点以下である。なお、タイ科で亜科以下が判別できるものは、マダイ・マダイ亜科である。

4層： 22群 212点で、遺構全体の4.2%が含まれている。タイ科・型が27.4% (58点)で最も多く、次いでキス属が23.1% (49点)、ヒラメが13.2% (28点)含まれている。この3群以外に10%を超えるものはなく、また、

この3群で全体の66%を占める。次いで、ウナギが9.4% (20点)、サヨリ科が8.5% (18点)、アジ亜科が4.2% (9点)含まれている。その他の分類群の点数は、5点以下である。なお、タイ科で亜科以下が判別できるものは、マダイ・マダイ亜科である。

4・5層間： 14群 130点で、遺構全体の2.6%が含まれている。キス属が53.1% (69点)で最も多く、次いでサヨリ科が14.6% (19点)含まれている。この2群以外に10%を超えるものはなく、また、この2群で全体の68%を占める。次いで、タイ科・型が9.2% (12点)、ヒラメが8.5% (11点)含まれている。その他の分類群の点数は、5点以下である。なお、タイ科で亜科以下が判別できるものは、マダイ亜科である。

5層： 33群 2247点で、遺構全体の44.6%が含まれている。タイ科・型が28.3% (635点)で最も多く、次いでサヨリ科が24.8% (557点)、キス属が21.1% (474点)含まれている。この3群以外に10%を超えるものはなく、また、この3群で全体の74%を占める。次いで、ヒラメが6.9% (154点)、カレイ科が4.9% (109点)、アイナメ科が2.9% (65点)、タラ科が1.6% (35点)、ニシン科が1.5% (34点)、アユが1.2% (28点)、ホウボウ科が1.1% (25点)、コイ科が1.0% (23点)含まれている。その他の分類群は、1%を超えない。しかし、0.5%以上のものは10点以上含まれている。なお、タイ科で亜科以下が判別できるものは、マダイ・マダイ亜科、チダイ、クロダイ属、キダイ属である。また、ホウボウ科はカナガシラの第1椎骨が1点含まれている。

6層： 11群 90点で、遺構全体の1.8%が含まれている。タイ科・型が23.1% (21点)で最も多く、次いでキス属が16.7% (15点)、ヒラメとカレイ科が各14.4% (13点)含まれている。この4群以外に10%を超えるものはなく、また、この4群で全体の69%を占める。次いで、タラ科が8.9% (8点)、ウナギとサヨリ科が6.7% (6点)含まれている。その他の分類群の点数は、5点以下である。なお、タイ科で亜科以下が判別できるものは、マダイ亜科である。

7層： 4群 6点で、遺構全体の0.1%が含まれている。タイ科・型が50.0% (3点)で最も多く、その他に、コイ科、ボラ科、ヒラメが各16.7% (1点)含まれている。なお、タイ科で亜科以下が判別できるものはない。

③小結

傾向として、魚類は2層と5層を中心に出土している。主体となる魚種は、どの層位においてもタイ科とキス属が主体である。但し、5層においては2群に加えてサヨリ科も主体となる。キス属が多い傾向は、本遺構だけで

なく、同様に溶姫御殿にあたる情報学環・福武ホール地点SK10でもみられた(阿部・畑山2017)。キス属(鱧)は「喜ぶ」という字が含まれていることで大変縁起の良いものとされ、将軍の朝食には必ず供された魚種とされている。溶姫は第11代将軍徳川家斉の21女にあたる。将軍家の姫君がお輿入れする際は、御供付きであり(関口2005)、お輿入れ後の暮らしは、大輿でのものを反映している可能性が高く、食の慣習においても同様のことが推測される。魚類遺体の組成において、キス属が主体となるのはその表れであろう。その他の魚種に目を向けても、マダイをはじめ上魚が主体を占め、特に淡水魚の最上級に位置づけられるコイが含まれている。野々村は、同じ本遺跡、加賀藩本郷邸跡の理学部7号館地点63号遺構(以下理学部63号と略す)や尾張藩上屋敷跡との比較からも、本遺構の組成は特に上魚が多く占めていることを指摘している(野々村2006)。一方で、タラ科について、理学部63号では17.5%を占めるのに対して、本遺構では1%程度で特別多くない(野々村2006)。理学部63号においてタラ科の比率が大きい点を、秋元は「加賀での食生活を反映している」(秋元1992)、つまり国元の食文化が反映しているものとしていることから、野々村は加賀藩出身者ではない溶姫とその女中の間では特別にタラを多く食さなかった可能性を指摘している(野々村2006)。(阿部)

3-1-5. 両生類遺体 (12表)

本遺構からは、1群2点が抽出された。カエル類の指骨が1層から1点、カエル類の大腿骨と推定されるものが5層から1点出土している。遺構周辺に棲息、死亡したものが遺構内に混入したものと推測される。(阿部)

3-1-4. 鳥類遺体 (13表)

分析した522点中180点で目以下の同定ができた。確認された分類群はカモ亜科、ウズラ、クイナ科、チドリ目、スズメ目であった。各分類群の出土破片数は、チドリ目が118点でもっとも多く、クイナ科が44点、カモ亜科が11点、スズメ目が4点、ウズラが3点であった。また、種不明鳥類としたものは計200点に上ったが、橈骨の近位端破片1点を除くと、186点は趾骨、13点は椎骨であった。チドリ目はカモメ科やウミスズメ科以外の同目のものである。現生標本のタシギ(KP245-1)程度の大きさの資料が約90%で、それよりかなり大きい資料や、かなり小さくシロチドリ(KP233-2)程度の大きさの資料も含まれた。複数種に由来すると考えられる。クイナ科はすべてバン(EP-12)とほぼ同じ大きさの資料であっ

た。また、カモ亜科には現生標本のコガモ(EP-7)程度、オナガガモ(EP-4)程度、カルガモ(EP-84)程度の大きさの資料が認められた。複数種に由来すると考えられる。幼鳥や若鳥の骨は認められなかった一方、クイナ科の上腕骨と大腿骨で各1例骨髄骨を内包するものが認められた。

層位別にみると、鳥類遺体の出土は2層と5層に多かった。5層ではチドリ目が同定破片数の88.3%を占めて最も多く、カモ亜科が9.0%でこれに続いた。一方、2層ではクイナ科が同定破片数の48.9%で最も多く、チドリ目が35.6%でこれに続いた。クイナ科は3層でも同定破片数の90.0%を占めていた。5層の堆積時にはチドリ目を中心に、2層と3層の堆積時にはクイナ科を中心に利用されたことが窺えた。解体痕はチドリ目で2例、カモ亜科とクイナ科で各1例認められた。チドリ目では橈骨の腹側面の解体痕、および手根中手骨近位端の切断が各1例みられた。またカモ亜科の上腕骨では腹側顆が切断されており、クイナ科の上腕骨では腹側上結節に解体痕が認められた。

江田(2006)は、SK110から出土したチドリ目、クイナ科、カモ亜科の部位別出現頻度について、他の遺跡の遺構から同様に一括出土した鳥類と主成分分析を用いた比較検討をおこなっている。チドリ目とクイナ科の部位別出現頻度は、体幹部の骨が少なく、後肢の肉のない部分が多いことが特徴であり、『古今料理集』などにみられる「記」を廃棄したものであった可能性を指摘している(江田2006)。「記」は料理に利用された肉がまさにその鳥から得られたことを示すために料理に添えるもので、実際、『古今料理集』によればクイナ科の鳥種を指すと考えられる鶴(バン)では「あしのふしを中にこめて長さ1寸計りに切りて」利用するとされる(吉井1978)。一方、カモ亜科の部位別出現頻度は全体的に残存率が低くかつ上肢の骨が体幹部の骨に優先し、後肢の肉のない部分がほとんど残存しない反面、手根中手骨の残存率が高い。これは、主に上腕骨の遠位端から上肢の指骨を含む翼の部分を遺跡に持ち込み、調理後に廃棄した結果の可能性が考えられる(江田2006)。(江田)

3-1-6. 哺乳類遺体 (14表)

本遺構からは、3群23点が抽出された。その内、11点が同定することのできない破片資料である。これら破片資料を除くとネズミ類が10点で最も多く、その他に、ヒトの右下顎第二切歯とイノシシの右脛骨近位骨端部分が各1点出土しているのみである。つまり、食物残渣などを直接、本遺構に廃棄したようなものはないと考えら

れる。これらの遺体が、1層と2層の最上部の層位でのみ出土していることからその可能性が高いであろう。また、ネズミ類は、1層、2層、5層から出土している。これらの層位は、食物残渣と推測される貝類、魚類、鳥類の各遺体が多くに出土していることから、食物残渣を食しに遺構内に潜り込みそのまま自然死したものか、調理場などで駆除されたものであると推測される。(阿部)

3-2. SK641・642・643

3-2-1. 動物遺体全体の出土状況

本遺構から66群の動物遺体が出土している。その内、貝類が35群、魚類が23群、鳥類が6群、哺乳類が2群である。以上のカテゴリーごとに報告する。なお、本遺構は、元々、SK641、SK642、SK643の3基の遺構としてそれぞれ資料の抽出が行われた。本報告では、遺構内のブロック間の比較に際して、便宜的に以上の遺構名を用いる。(阿部・江田)

3-2-2. 貝類遺体 (15～25表)

本遺構から35群の貝類遺体が出土している。その内、水産が33群、陸産が2群であった。さらに、水産で、5mm目篩上に残留したものが23群6388個体、3mm及び1mm目篩上に残留したものが18群174個体であった。その内、5mm目篩上では採取できなかったものは10群で、いずれも一般的に海産微小貝類として分類されるものである。なお、陸産貝類は7個体出土しており、いずれも、1mm目篩上ではじめて検出した。

①水産貝類遺体組成 (15表)

以下、水産貝類を5mm目篩上に残留したものとそれ以下の目の篩上に残留したものに分けて報告する。

・篩5mm目上

篩目5mm以上より採取された貝類遺体で最も多く出土しているのが、ヤマトシジミで76.0% (4852個体)を占める。次いでハマグリが12.1% (771個体)出土している。その他に1%以上出土しているのは、サザエ8.0% (511個体)、キクスズメ2.3% (148個体)の2種のみである。さらに、0.1%以上出土しているのは、アワビ類(0.6%:35個体)、バイ(0.4%:28個体)、アサリ(0.2%:10個体)、ミルクイ(0.1%:9個体)である。以下、ブロックごとに組成を概観する。

SK641: 本ブロックからは15群2607個体が出土している。最も多く出土しているのが、ヤマトシジミで85.3% (2223個体)を占めている。次いでハマグリが7.2% (188個体)出土している。その他に1%以上出土しているのは、サザエ4.0% (105個体)、キクスズメ2.4% (63

個体)の2種のみである。さらに、0.1%以上出土しているのは、アサリ(0.3%:8個体)、ミルクイ(0.2%:6個体)である。なお、他の2つのブロックで15個体以上出土しているアワビ類は、種不明が1個体出土しているのみである。

SK642: 本ブロックからは15群3024個体が出土している。最も多く出土しているのが、ヤマトシジミで72.8% (2201個体)を占めている。次いでハマグリが14.1% (427個体)、サザエが8.7% (268個体)出土し、5%以上を占めるのは以上の3群のみである。その他に、キクスズメ(2.4%:73個体)、バイ(0.8%:24個体)、アワビ類(0.6%:18個体)、ミルクイ(0.1%:3個体)などが出土している。なお、アワビ類の内訳は、メカイ5個体、マダカ7個体、種不明5個体である。

SK643: 本ブロックからは12群794個体が出土している。最も多く出土しているのが、ヤマトシジミで55.9% (444個体)を占めている。次いでハマグリが21.3% (169個体)、サザエが18.0% (143個体)出土し、10%以上を占めるのは以上の3群のみである。さらに、1%以上出土しているのは、アワビ類2.0% (16個体)、キクスズメ1.5% (12個体)の2種のみである。その他に、バイ(0.4%:3個体)、ミルクイ、アサリ(各0.3%:2個体)、タイラギ、オオヘビガイ(共に0.1%:破片)が出土している。なお、アワビ類の内訳は、メカイ5個体、クロ2個体、マダカ5個体、種不明4個体である。

小結: 組成に関して、ヤマトシジミを主体とする大まかな傾向は、3つのブロック共にほぼ同じである。しかし、SK641に関して、他の2つで15個体程出土しているアワビ類が1個体しか出土していない一方、他の2つで2・3個体しか出土していないミルクイが6個体出土しているなど、やや異なる傾向を示している。ほぼ同じ傾向を示すSK642とSK643の間で異なるのは、バイがSK642で24個体も出土しているのに対して、SK643では3個体しか出土していない点である。さらに、SK641でもバイは1個体しか出土していない。

なお、本遺構出土のハマグリ、ヤマトシジミ、アサリのなかには、剥き身の際のものと同推測される欠損が主に腹縁部分に確認できるものも含まれている。

・篩目5mm未満

5mm目未満の篩上で採取された貝類遺体で最も多く出土しているのが、キクスズメで55.5% (96点)を占める。次いでウネナシトマヤガイが24.9% (43点)出土している。その他にヤマトシジミが10個体で5.8%出土している他は、1・2個体出土しているのみである。SK642では5mm未満の貝類遺体が8個体しか出土していない

め、やや傾向が異なるように見えるが、3つのブロックともに同じような傾向を示している。まず、キクスズメは、「潮間帯から潮下帯の腹足類の殻上」に着生していること（奥谷編著 2000）から、アワビ類やサザエに伴って運び込まれたものであることが推測される。ウネナシトマヤガイは、「汽水域潮間帯の礫などに足糸で付着」している（奥谷編著 2000）とされている。一般的に、カキ礁に着生しているものも多く、東京湾岸の縄文時代から近世にかけての遺跡・遺構で、ウネナシトマヤガイが多く出土している場合、相対的にマガキが多く出土する。しかし、本遺構からは、マガキが1点も出土していない。可能性として、マガキは殻の付いた状態で供されたことにより、料理段階での殻を洗浄した際のゴミ（ウネナシトマヤガイ）と食後の残滓（マガキ）が別の場所に廃棄されたことが推測される。もしくは、これらのウネナシトマヤガイは、採集された際に生きていたものではなく、すでに死んでいたもので、その死殻がハマグリやヤマトシジミの生息域に漂着し、それらを採集した際に混入したものである可能性も推測される。しかし、報告者の管見の限りでは、近世江戸遺跡のハマグリやヤマトシジミを主体とした廃棄貝殻群で、ウネナシトマヤガイが相当量出土した例はないため、その可能性は低い。

アワブネガイがアワビ類、カワザンショウガイがヤマトシジミと共にそれぞれもたらされたものである他は、ハマグリを採集した際に混入したものである可能性が推測される。

②サイズ組成（16～25表）

本遺跡において比較的、多く出土しているサザエの殻の殻高と蓋の長径、ヤマトシジミ及びハマグリを殻長のサイズ組成についてブロック間で比較をする。

・サザエ（16～19表）

殻（18・19表）： 殻の高さ（殻高）に関するヒストグラムの形状は、3基共に多峰型を示す。まず、SK642とSK643の分布型は、ほぼ近似している。具体的に、殻高65mm未満と70mm以上に2つのまとまりがみられる。その2つのまとまりの間の65mm以上70mm未満のサイズは1点もない。また、65mm未満のまとまりでは2つの、70mm以上のまとまりでは1つのピークを有している点で2つのブロックは共通している。一方、SK641は、70mm未満からは、16.9mmのものが1点出土しているのみである。また、100mm以上にもう1つのまとまりが見られる。具体的には、1点もそのサイズのものがなく95mm以上100mm未満を挟んで、70mm以上95mm未満と100mm以上120mm未満の2つのまとまりが見られる。ピークに関しては目立ったものは

みられない。なお、計測したすべての殻高の平均値の差において、SK641と他の2つのブロックとの間に統計学上の有意性が認められた。つまり、他の2つのブロックよりもSK641の平均値が有意に大きい。それは、SK641において、殻高65mm未満のものが1点しかないことに起因していることが推測される。そこで、殻高65mm以上のみの平均値で、改めて同様の分析をおこなった。その結果、3つのブロックいずれの間においても平均値の差の有意性が認められなかった。ヒストグラムの形状において、SK641では、他の2つのブロックと異なり、100mm以上にもう1つまとまりがある。それにもかかわらず、差の有意性が認められなかった要因として、SK641の分析資料が他の2基に比べてやや少なかったことや、SK642とSK643において、サイズにまとまりが見られるのに対して、SK641はまとまりがなく、70mm～115mmの間に1～2点ずつ分散していることに起因しているものと推測される。

蓋（16・17表）： 蓋の長径に関するヒストグラムは、SK641が単峰型、SK642とSK643が双峰型を示した。まず、SK642とSK643は共に、20mm以上25mm未満と35mm以上40mm未満にピークがある。そして、SK642は25mm以上30mm未満、SK643は30mm以上35mm未満のほぼ同じところに谷間を有する。分布の範囲もSK642が15mm以上50mm未満、SK643が10mm以上50mm未満でありほぼ一致する。一方、SK641は、35mm以上40mm未満にのみピークを持つ単峰型を示す。範囲も20mm以上50mm未満でややサイズの大きい方に有する。なお、SK641と他の2つのブロックとの間にそれぞれ平均値の差に統計学的な有意性が認められた。つまり、他の2つのブロックよりもSK641の平均値が統計学的に有意に大きい。それは、SK641には30mm未満のものがほとんどないことに起因していることが推測される。そこで、30mm以上の資料のみで、改めて分析をおこなった。その結果、先と同様の結果が示された。つまり、長径30mm以上のもののみでも、SK641は他の2つのブロックよりも平均値が統計学的に有意に大きいことが示された。

小結： 殻の高さ（殻高）と蓋の長径の分析の結果は、ほぼ同様であった。つまり、殻と蓋はセットの関係にあることが推測される。まず、SK642とSK643の間には、殻と蓋ともにサイズにおいて統計学的に差が認められなかった。また、この2つのブロックには、サイズの異なる2つの群が包含している。これらは、供された時期の異なるものが含まれている可能性や、ハマグリ「中小型」と「大型」の違いと同様に、同じ場に供されたもの

であるが、異なる料理に利用された場合や提供する対象の身分でサイズを違えた場合などの可能性も想定する必要がある。

SK641は、SK642とSK643における「大型」のサイズのもののみが含まれている。殻においては100mm以上、蓋においては45mm以上の他の2基のブロックではみられない大型のものも含まれる。殻においては認められなかったが、蓋の長径30mm以上を対象にした平均値の差に関する統計学的分析においても、他の2つのブロックよりも有意に大きいことが示されている。なお、ヒストグラムの分布型から、SK641の殻の高さでは、95mm以上100mm未満を境にそれ以上とそれ以下で2つのまとまりが認められる双峰型を示す。つまり、95mm未満の群と100mm以上の群の2つの異なる背景を有する廃棄単位が含まれていることも想起される。しかし、実際に5mm単位で1.2点ずつと少ないことや、蓋の長径では35mm以上40mm未満にピークを持つ単峰型であることから積極的に2つの廃棄単位によって構成されているとはいえない。

・ヤマトシジミ (20・21表)

ヤマトシジミは、殻長と殻高を計測した。分析には殻長を用いる。

分析の結果、ヒストグラムの形状は3つのブロック共に歪ながら単峰型を示した。平均値は、SK641が23.1mm、SK642が23.6mm、SK643が23.7mmでほぼ近い値を示している。しかし、平均値の差の統計学的な検定の結果、SK641が他の2つのブロックよりも有意に小さいことが示された。

・ハマグリ (22～24表)

分析の結果、3つのブロックともにヒストグラムの分布型が単峰型を示した。平均値は、SK641が57.9mmであるのに対して、SK642が74.8mm、SK643が74.5mmと大きい。平均値の差の統計学的な検定においても、SK641のものは、他の2基よりも有意に小さいことが示された。一般的に、近世江戸遺跡において、殻長50mmを境にそれ未満と以下で、料理やその出される場が異なっていたことが指摘されているが、この3基のものは、すべて50mm以上であることからそれとは異なる。少なくとも、SK641は、他の2つのブロックとは異なる時期に廃棄されたものであると推定される。

なお、詳細は後述するが、本遺構以外のピックアップ法で抽出されたハマグリも17世紀のものは全て殻長50mm以上のもので構成されている。関東地方の中世の城跡などで出土するハマグリのはほとんどは殻長50mm以上の大型のもので構成されている。本遺構で殻長50mm以上

のもののみで構成されているのは、17世紀段階の食材の選択において中世的な伝統が残っていた可能性も想起される。報告者は、千代田区一橋徳川家屋敷跡の17世紀前半の2基の遺構から出土したハマグリも殻長50mm以上のもので構成していたことから同様の可能性を指摘をしている(阿部2018)。

④まとめ

個体数組成及び主要貝種のサイズ分析の結果、遺構のなかで、SK641のみやや異なる傾向を示した。以下、SK641と他の2つのブロック(SK642とSK643)との違いについて列挙する。

- 1) 他の2つのブロックでは、アワビ類が15個体以上出土しているのに対して、SK641は1個体しか出土していない。
- 2) 他の2つのブロックでは、ミルクイが2・3個体しか出土していないのに対して、SK641は6個体も出土している。
- 3) ハマグリは殻長の平均値が、他の2つブロック間ではほとんど差がないのに対して、他の2つのものよりもSK641のものは統計学的に有意に小さい。
- 4) サザエの蓋の長径に関して、他の2つのブロックでは、20mm以上25mm未満のサイズを中心とするものと35mmから40mmを中心とする2つのサイズのものを含んでいるが、SK641は、35mm以上40mm未満を中心とするサイズのみで、さらに30mm未満はほとんど含まれない。殻の高さにおいても他の2つは、65mmを境にそれ65mm未満とそれ以上に2つのピークを有するのに対して、SK641は、未満は1点のみですべて65mm以上に分布する。

さらに、SK641とSK642の間では、ヤマトシジミの殻長の平均値に関して統計学的に有意な差が認められる。個体数組成においても、遺構群全体で0.5%未満である貝種の中でも、アサリは、SK641では9個体出土しているのに対して、SK643で右殻3点、SK642では1点も出土しておらず、シオフキガイは、SK641でしか出土していない。つまり、主要貝種の内、キクスズメを除く3種(ヤマトシジミ、ハマグリ、サザエ)に関しては、個体数組成上は、3ブロックともに近似した組成を示すものの、サイズ組成においてはSK641のみ異なる傾向を示す。そして、以上の主要3種以外の貝種の出土傾向のほとんどで、SK641と他の2つのブロックでは異なっている。つまり、SK641のみ全く異なる時期、もしくは異なる場で供されたものが廃棄されたものである可能

性も想起される。3つのブロックはそれぞれ独立したものはなく、切りあい関係にあることや、節目5mm以上の個体数が、SK641とSK642が2000個体以上であるのに対して、SK643は778個体と極端に少ないことから、SK643はSK642に主体的に廃棄されたものの一部である可能性も推測される。(阿部)

3-2-3. 魚類遺体 (26～28表)

23群4223点出土している。アジ亜科が最も多く1111点出土し、26.3%を占める。次いでカレイ科が多く674点出土し、16.0%を占める。さらに、ハモ属(635点・15.0%)、タイ科(610点・14.4%)、タラ科(388点・9.2%)、キス属(266点・6.3%)、サバ属(133点・3.1%)、スズキ属(108点・2.6%)が比較的多く出土している。その他に、ホウボウ科(40点・0.95%)、カマス属(34点・0.81%)、ボラ科(32点・0.76%)、ブリ属(30点・0.71%)、アユ、イボダイ(各19点・0.45%)、ニシン科(18点・0.43%)、コイ科(11点・0.26%)、サワラ(10点・0.24点)、コチ科(5点・0.12%)、フサカサゴ科(3点・0.07%)、サケ属、フグ科(各2点・0.05%)出土している。

ニシン科で科より下位まで同定できたものは、SK641より出土した右主鰓蓋骨1点でコノシロである。

コイ科で科より下位まで同定できたのは、SK643より出土した咽頭骨1点でコイである。

スズキ属でスズキ(種)まで同定できる主鰓蓋骨が出土しているのは、SK641とSK642で各1点である。

アジ亜科で亜科より下位まで同定できる椎骨部分は、3つのブロック共にマアジのみである。

タイ科で科より下位まで同定できる部位は、すべてマダイ亜科でさらにマダイのみである。

SK641・642・643間での出土傾向として、23群中18群がSK641で最も多く出土している。さらにSK642、SK643の順で少なくなる魚種がほとんどである。なお、出土率が1%(43点)以上のもので、SK641以外のブロックで最も多く出土している魚種は、カレイ科(総点数674点)のみである。しかし、SK642が311点(46.1%)で最も多いものの、次いで多いのはSK641で298点(44.2%)であり、その差は大きくない。それ以外では、イボダイ(総点数19点)がSK642で全体の78.9%(15点)が出土し、他の2つのブロックでは3点以下(SK643:3点・15.8%, SK641:1点・5.3%)と極めて少ない。1つのブロックのみで出土している魚種は3群で、3点以下と少ない。具体的に、SK642がフサカサゴ科(3点)とフグ科(2点)、SK643がサケ属(2点)である。

本遺構には、ハモ属、イボダイなど他の遺跡ではあま

りみられない魚種が含まれている。特に、ハモ属は、近世江戸遺跡ではあまり出土しない一方で上方の遺跡で多く出土する魚種である(丸山2013)。そのハモ属に関して本調査地点の所在する加賀藩本郷邸跡では17世紀に限定して多く出土している(阿部2020・2022)。特に本遺構と同じくハモ属を主体とする医学部教育研究棟地点SK2472[17世紀後半](以下、医研SK2472)ではキス属も多く出土し、さらに、コイやアユも出土しているなど共通点も多い(阿部2020)。医研ではカワラケが共伴しており、さらにそれらは京のものを意識したとされる白色系であることから、饗宴の料理やその食材も上方を意識したのもであると推測された。具体的な饗宴として、「大草流や四条流などで將軍家にご覧に入れる御前料理でコイに限られた」とされていること(吉川1996)や、SK110でも指摘したようにキス属が將軍家と結びつきの強い魚種であることから、特に17世紀の大御所徳川秀忠や將軍徳川家光の御成によるものであった可能性が高いものと推測される(阿部2022)。(阿部)

3-2-4. 鳥類 (29表)

分析した424点中129点(30.4%)で目以下の同定ができた。確認された分類群はニワトリ、ウズラ、マガモ属、ガン族、カモ亜科、チドリ目であった。各分類群の出土破片数は、マガモ属3点を含むカモ亜科が65点で最も多く、チドリ目が42点、ウズラが19点でこれに続いた。ガン族は2点、ニワトリは1点のみの出土であった。種不明鳥類としたもののうち196点は趾骨、15点は椎骨であった。鳥類遺体の数はSK641とSK642で多かった。このうちSK641ではカモ亜科とマガモ属が同定破片数の66.7%を占めて主体的で、これにチドリ目が19.4%で続いた。一方、SK642ではチドリ目が57.4%を占めて最も多く、これにカモ亜科が27.7%で続いた。

カモ亜科には現生標本のヒドリガモ(EP-6)程度、オナガガモ(EP-4)程度、カルガモ(EP-84)程度の大きさの資料が認められ、複数種に由来すると考えられる。オナガガモ(EP-4)程度の資料がもっとも多く、マガモ属と同定できた資料も2点は同標本とほぼ同大、1点は同標本より少し大きい資料であった。チドリ目はカモメ科やウミスズメ科以外の同目のもので、現生標本のタンギ(KP245-1)より大きい資料が約半数を占め、同標本より大きい資料と小さい資料も認められた。複数種に由来すると考えられる。ウズラは現生標本のウズラ(EP-29)より小さい資料がほとんどであった。また、ガン族はともにマガン(EP-25)とほぼ同大の資料、ニワトリはキジ(EP-143)よりやや小さい、距突起のない資料

であった。これらの資料中には骨髄骨を含む資料や幼鳥・若鳥の骨は認められなかった。

解体痕はマガモ属を含むカモ亜科で21例、チドリ目で4例、ガン族で1例認められた。カモ亜科の解体痕・切断痕は下肢骨の大腿骨と脛足根骨に集中していた。股関節の解体にかかわると考えられるものが4例、膝関節の解体にかかわると考えられるものが11例、足首関節の解体にかかわると考えられるものが6例であった（重複あり）。また上腕骨頭付近が切断されているものも3例認められた。ガン族の大腿骨は遠位端が切断されており、チドリ目では上腕骨の近位端の切断が2例、烏口骨の胸端の切断が1例、足根中足骨の近位端よりの切断が1例認められた。

SK110と同様、SK641やSK642から出土したチドリ目の部位別出現頻度は、体幹部の骨が少なく、後肢の肉のない部分が多いことが指摘できる。一方、カモ亜科についてはSK110と異なり、下肢の骨が卓越する傾向が認められる。カモ亜科で下肢が卓越するパターンは江田(2006)の集成では確認されておらず、類例の探索が必要である。(江田)

3-2-5. 哺乳類遺体 (30表)

本遺構からは、2群5点が抽出された。ネズミ類が4点とヒトの左上顎第三大臼歯が1点出土している。ネズミ類は、食物残渣を食して遺構内に潜り込んだものか、調理場などで駆除されたものであると推測される。

(阿部)

4. ピックアップ法による採集資料

4-1. 動物遺体全体の概要 (31～45表)

ピックアップ法によって採集された動物遺体は50群である。その内、貝類が17群、魚類が20群、鳥類が7群、両生類が1目、哺乳類が5群である。以上のカテゴリーごとに報告する。(阿部・江田)

4-2. 貝類 (31～37表)

4-2-1. 貝種組成 (31表)

①調査地点全体の傾向

ピックアップ法によって採集された貝類遺体は17種585個体である。マガキが最も多く209個体出土しており、全体の35.7%を占める。次いで、ハマグリが多く143個体出土しており、24.4%を占める。さらに、サザエが110個体で18.8%を占め、比較的多い。その他に、アワビ類(43個体・7.4%)、ヤマトシジミ(27個体・4.6%)、

アカガイ(21個体・3.6%)、アカニシ(8個体・1.4%)、キクスズメ(6個体・1.0%)、タイラギ(4個体・0.7%)、バイ、サルボウガイ、シオフキガイ(各3個体・0.5%)、オキシジミ(2個体・0.3%)、ミルクイ(1個体・0.2%)、オオノガイ(破片・0.2%)が出土している。

以下、遺構内で10個体以上出土しているものについて詳細を述べる。

②遺構別

SU107 (時期不明)：本遺構では7種49個体が出土している。ハマグリが最も多く16個体出土しており、32.7%を占める。次いで、ヤマトシジミが多いが、ハマグリとは1個体差の15個体(30.6%)である。さらにマガキが10個体(20.4%)で比較的多い。その他に、サザエ(5個体・10.2%)、メガイアワビ、アカガイ、アカガイ類種不明(各1個体・20.0%)が出土している。

SK398 (17世紀後葉)：本遺構ではサザエ(72個体・92.3%)とキクスズメ(6個体・7.7%)の2種78個体が出土している。なお、キクスズメはサザエに着生していたものであると推測される。

SK425 (17世紀?)：本遺構では8種243個体が出土している。マガキが最も多く151個体出土しており、62.1%を占める。次いで、ハマグリが多く86個体出土しており、32.7%を占める。その他に、サザエ、サルボウガイ、シオフキガイ、ヤマトシジミ、オキシジミ、オオノガイが各1個体(サザエとオオノガイは破片資料、0.4%)出土している。

SK499 (19世紀中葉)：本遺構では5種11個体が出土している。具体的に、マガキ(7個体・63.6%)、サザエの蓋、ミルクイ、ハマグリ(1個体・9.1%)、アワビ類種不明(破片資料・9.1%)が出土している。

SP604 (17世紀中葉)：本遺構では6種52個体が出土している。マガキが最も多く29個体出土しており、55.8%を占める。次いで、ハマグリが多く19個体が出土しており、36.5%を占める。その他にバイ、サルボウガイ、シオフキ、オキシジミ(各1個体・1.9%)が出土している。

SK622 (近代)：本遺構では7種12個体が出土している。具体的に、マダカアワビ、ハマグリ(3個体・25.0%)、サザエ、アカガイ(2個体・16.7%)、バイ(1個体・8.3%)、タイラギ(破片資料・8.3%)が出土している。

SK640 (17世紀前葉)：本遺構では3種15個体が出土している。サザエが最も多く12個体出土しており、80.0%を占める。その他に、ハマグリ(2個体・13.3%)とバイ(1個体・6.7%)が出土している。

4-2-2. ハマグリノ殻長組成 (35・36表)

それぞれの貝種の計測結果は32～37表に示した。その内、ハマグリノ殻長〔推定値〕で10個体以上計測のできた遺構についてのみ、詳細を述べる。

①分析結果

SU107 (時期不明)： 左殻11点を対象としている。平均値は61.8mm、中央値は63.7mmであった。ヒストグラムの形状は、対象資料が少ないため多峰型を示すが、60mm以上65mm未満をピークとし、分布は55mm以上70mm未満に比較的集中している。

SK425 (17世紀?)： 左殻94点を対象としている。平均値は58.3mm、中央値は55.9mmであった。ヒストグラムの形状は、55mm以上60mm未満をピークとする単峰型を示す。35mm以上45mm未満に2点含まれるものの、そのほかの92点は45mm以上の大型のもので構成されている。

SP604 (17世紀中葉?)： 左殻10点を対象としている。平均値は61.5mm、中央値は62.6mmであった。ヒストグラムでは50mm以上70mm未満にすべての資料が含まれている。つまり、所謂「大型」(殻長50mm以上)のもののみで構成されている。

②17世紀代のハマグリノサイズ

分析の結果、17世紀代のものと推測される遺構から出土しているハマグリは殻長45mm以上で構成されていた。その結果は、同じく17世紀代のSK641・642・643と同様の結果であった(詳細は、前章参照のこと)。

(阿部)

4-3. 魚類 (38表)

①調査地点全体の傾向

ピックアップ法で採集された魚類遺体は535点+ α であった。その内、同定対象外とした資料は341点+ α (63.7%)で、194点(36.3%)が同定対象資料として抽出された。同定対象資料の内、同定不可であった資料が7点(1.3%)で、187点(35.0%)が網より下位まで同定することができた。さらに、本稿の提出期限までに一致する標本を見つけることができなくなったため未同定とした資料は6点(1.1%)であった。以上の網より下位まで同定できなかった資料を除く、181点(33.8%)を同定資料とし、そのなかでの組成を述べる。

調査地点全体では20群の魚種が含まれていた。タイ科が最も多く113点出土し、62.4%を占める。その他に、ヒラメ(13点・7.2%)、ズズキ属〔ズズキ〕(9点・5.0%)、フサカサゴ科(8点・4.4%)、コチ科、マグロ属(各6点・3.3%)、ホウボウ科、ブリ属(各5点・2.8%)、ボラ科(3

点・1.7%)、キス属、アジ亜科、カレイ科(各2点・1.1%)、サメ類、ニシン科、アマダイ属、ニベ科、カツオ、フグ科、アンコウ科(各1点・0.6%)が出土している。タイ科の内訳は、113点中マダイ亜科が50点でその内マダイまで同定できた部位は33点であるのに対し、クロダイ属は東区表土で採集された右歯骨1点のみである。

以下、遺構内で10点以上出土しているものについて詳細を述べる。

②遺構別

SU286 (18世紀後葉)： 本遺構では4群17点出土している。内訳は、タイ科(7点・41.2%)、マグロ属(5点・29.4%)、ズズキ属(4点・23.5%)、ヒラメ(1点・5.9%)である。タイ科はマダイ及びマダイ亜科まで同定できた資料が各2点であった。

SK622 付近 (SK622：近代)： 本遺構では9群38点が出土している。タイ科が最も多く28点出土し、73.7%を占める。その他に、コチ科、ヒラメ(2点・5.3%)、ホウボウ科、ブリ属、ニベ科、カレイ科、フグ科、アンコウ科(各1点・2.6%)が出土している。タイ科はマダイ及びマダイ亜科まで同定できた資料が各5点であった。

SK624 (近代)： 本遺構では8群28点が出土している。タイ科が最も多く19点出土し、67.9%を占める。その他に、キス属、アジ亜科(各2点・7.1%)、ニシン科、フサカサゴ科、コチ科、ブリ属、ボラ科(各1点・3.6%)が出土している。タイ科の内、マダイ亜科(マダイ含む)まで同定できたものが9点、さらにマダイまで同定できたものが7点であった。

(阿部)

4-4. 両生類 (39表)

ピックアップ法によって採集された両生類遺体はSK624からカエル類の脛腓骨左右1点ずつ計2点のみである。

(阿部)

4-5. 鳥類 (40表)

①調査地点全体の傾向

分析した193点中154点(79.8%)で目以下の同定ができた。確認された分類群はニワトリ、キジ科、ハクチョウ属、マガモ属、ガン族、カモ亜科、サギ科、ツル科、クイナ科、スズメ目であった。

各分類群の出土破片数は、マガモ属11点を含むカモ亜科が70点で最も多く、サギ科が62点でこれに続いた。クイナ科が9点、キジ/ヤマドリおよびニワトリを含むキジ科が8点、ツル科が2点、ガン族、ハクチョウ属およびスズメ目が各1点出土した。カモ亜科には現生標本

のコガモ (EP-2) 程度、ヒドリガモ (EP-6) 程度、オナガガモ (EP-4) 程度、カルガモ (EP-84) 程度の大きさの資料が含まれ、複数種に由来すると考えられた。資料の 54.2% はコガモ程度の小型の資料であり、これにオナガガモ (EP-4) 程度の大きさの資料が 27.1% で続いた。マガモ属と同定できた資料でもコガモ程度の大きさが 8 点で主体をなし、オナガガモ程度が 2 点、コガモ (EP-7) より大きくハシビロガモ (EP-30) より小さい資料も 1 点認められた。サギ科はゴイサギ (EP-20) 程度の大きさの資料が主体で、これにコサギ程度の大きさの資料が続いた。チュウサギ (EP-23) 程度の大きさの資料やダイサギ (EP-26) より大きくアオサギ (EP-174) より小さい大型の資料も若干見られた。クイナ科はクイナ (KP170-3) より大きく、バン (EP-12) より小さい資料が主体で、バン (EP-12) より大きな資料もわずかに認められた。キジ科の資料のうち 1 点は内側足底稜のあるキジもしくはヤマドリ足根中足骨であり、キジ (EP-143) より少し大きい距突起のある資料であった。また 2 点は後腓骨頭靭帯の付着部が線状をなすニワトリの脛足根骨で、1 点はキジ (EP-143) とほぼ同大、もう 1 点は同標本よりかなり大きかった。他のキジ科資料もキジ (EP-143) より大きな資料が主体的ながら、ヤマドリ (EP-144) と同大で同資料より太い資料も認められた。2 点が確認されたツル科の資料のうち、1 点はナベヅル (EP-99) 程度の大きさの大腿骨、もう 1 点はマナヅル (EP-100) 程度の大きさの橈骨であった。複数種に由来する可能性がある。ガン族の上腕骨はマガン (EP-25) 程度、ハクチョウ属の肩甲骨はコハクチョウ (EP-200) 程度、スズメ目の上腕骨はツグミ (KP-1) 程度の大きさであった。サギ科の資料のうち 14 点は骨幹の粗い若鳥のものであった。またカモ亜科でも 1 点橋の形成が不完全な若鳥の脛足根骨が認められた。骨髄骨を内包する骨はキジ科で 2 例確認され、ともにキジ (EP-143) よりかなり大きい肩甲骨と脛足根骨であった。

解体痕はマガモ属を含むカモ亜科で 3 例、キジ科とツル科で各 1 例認められた。マガモ属の上腕骨では上腕骨頭前面に解体痕が認められた。またカモ亜科の上腕骨では遠位端よりが、尺骨では肘頭が切断されていた。ツル科の大腿骨の解体痕は大腿骨頭およびその直下内側の骨幹に認められた。

以下、10 点以上が同定された遺構について詳細を述べる。

②遺構別

SK622 (近代)： 本遺構では 5 群 44 点が同定できた。

マガモ属を含むカモ亜科が 20 点 (45.5%) で最も多く、サギ科が 19 点出土 (43.2%) でこれに続いた。カモ亜科のうち 5 点はマガモ属と同定された。サギ科の資料のうち 4 点は骨幹の粗い若鳥のものであった。その他に、キジ科が 3 点、クイナ科が 2 点検出された。キジ科のうち足根中足骨は内側足底稜があり、キジもしくはヤマドリのものであった。

SK622 付近： 6 群 31 点が同定できた。SK622 と同様マガモ属を含むカモ亜科が 24 点 (77.4%) で最も多かった。カモ亜科のうち 2 点はマガモ属と同定された。他にキジ科、サギ科、クイナ科が各 2 点、スズメ目が 1 点出土した。SK622 とはサギ科の出現頻度で大きな違いが認められた。

SK624 (近代)： 本遺構では 3 群 16 点が同定できた。サギ科が最も多く 10 点出土し、同定破片数の 63.0% を占めた。すべてゴイサギ (EP-20) 程度の大きさの資料であり、うち 3 点は骨幹の粗い若鳥のものであった。その他にカモ亜科が 4 点、クイナ科が 2 点検出された。

(江田)

4-6. 哺乳類 (41 ~ 45 表)

ピックアップ法によって採集された哺乳類遺体は 5 群 44 点である。出土状況から同一個体と認識されるものをまとめて、最小個体数で換算すると 12 体で、イヌ、ネコ、ニホンジカが 2 体分ずつ、ウマ、ウサギ類、ネズミ類は 1 体分ずつ出土している。

イヌとネコは、複数の部位がまとめて出土してものの全身に近い状態ではなく身体の一部のみである。具体的に、イヌは SE225 より左前肢部分が、SU286 より左右下顎骨が出土している。ネコは SK622 より左肩甲骨以外は後半身部分が、SK624 より頭部 (頭蓋骨・左右下顎骨) がそれぞれ出土している。おそらく、最初に廃棄もしくは埋葬された場所から動いている可能性が想起される。これらのイヌやネコは、屋敷内で飼育されていたもしくは、生息していたものであることが推測される。しかし、SK622 のネコは大腿骨近位に刀傷が認められることから、人によって何かしらの形 (食料、鷹の餌、三味線の皮など) で利用されたため解体され、その後、廃棄されたものであることが推測される。

イヌとネコ以外の哺乳類は、以下のような来歴が推測される。ニホンジカ、ウサギ類、大型哺乳類は食物残渣として廃棄されたものと推測される。ウマの切歯は、飼育していたものもしくは死体から遊離したものと推測される。ネズミ類は、駆除後廃棄されたか、生息していたものが自然死したものと推測される。以下、ネコとイヌ

に関して詳述する。

ネコ (42～43表)： 2体分出土している。いずれも近代の遺構から出土している。1体は、SK622 から左肩甲骨、腰椎、仙骨、左右寛骨、左右大腿骨、左脛骨、左右腓骨、左右第2～5中足骨、右踵骨が出土している。右大腿骨において、近位正面外側と骨幹中央正面に、内側上部から外側下部の横位方向で付されている刃物によるものと推定される傷が数条と、一部擦痕も見られる。不明瞭ではあるが、左大腿骨の近位にも右とほぼ同じ場所に同様の傷が見られる。他の部位には、一切、傷が認められない。なお、肋骨が1点出土しており、大きさからネコのものとして推測される。

もう1体は、SK624 から頭蓋骨と左右下顎骨が解剖学的な位置を保った状態で出土している。後頭顆など環椎と連結するような部分、もしくはその周辺に刀傷などの人為的な加工痕は認められない。上・下顎ともに歯槽において歯周症による退縮が認められることから、比較的、高齢であったことが推測される。

イヌ (44～45表)： 2体分が出土している。1体は、SU286 (18世紀後葉) から左右下顎骨のみが出土している。歯はすべて乳歯であり、萌出状況から、生後2週間～5週間のものと推定される。下顎全長(1)を用いて山内(1958)のⅢ式で導き出した推定体高は、15cm程である。

もう1体は、SE225 (17世紀後葉/19世紀前葉) から左上腕骨、橈骨、尺骨、第2～5中手骨、第3～5基節骨の左前肢部分が出土している。橈骨の全長を用いて山内(1958)のⅡ式で導き出した推定体高は、41.5cmである。長谷部(1952)のサイズ分類では、中級にあたり、現生の日本犬種では、柴(35～40cm)の体高に比較的近い小型犬に相当する。

参考文献

- 秋元智也子 1992「加賀藩上屋敷「御貸小屋」における食生活の一端」『江戸の食文化』江戸遺跡研究会
- 阿部常樹 2003「近世遺跡出土の貝類遺体とその採集方法について—東京都新宿区市谷砂土原町三丁目遺跡を例に一」『奈和』第41号 奈和同人会
- 2004「東京湾三番瀬における大巻による貝類採集の実地調査—近世遺跡出土の貝類遺体に関する《採集》から《廃棄》までの過程とその実態の解明のために—」『史紋』第3号 『史紋』刊行会
- 2006a「貝類遺体のサイズに関する計測方法」『東京大学本郷構

内の遺跡 工学部14号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室

- 2006b「ごみの廃棄単位および過程復元への貝類遺体分析からの試み」『東京大学構内遺跡調査研究年報』5, 東京大学埋蔵文化財調査室
- 2018「第5章 動物遺体分析」『東京都千代田区一橋徳川家屋敷跡』株式会社CEL
- 2020「医学部教育研究棟地点出土の動物遺体」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部教育研究棟地点 研究編』東京大学埋蔵文化財調査室
- 2022「江戸屋敷における国元の魚食—江戸大名屋敷跡における魚食文化の独自性とその背景—」『季刊考古学』159号, 雄山閣
- 阿部常樹・畑山智史 2017「第八章 食生活」堀内秀樹・西秋良宏編『赤門—溶姫御殿から東京大学へ』, 東京大学出版会
- 江田真毅 2006「遺構一括出土遺体からみた江戸時代の鳥類の利用形態」『東京大学構内遺跡調査研究年報』5, 東京大学埋蔵文化財調査室
- 2005「生活復原資料としての鳥類遺体の研究—カモ亜科遺体の同定とその考古学的意義—」海交史研究会考古学論集刊行会 編『海と考古学』六一書房
- 江田真毅・井上貴央 2011「非計測形質によるキジ科遺存体の同定基準作成と弥生時代のニワトリの再評価の試み」『動物考古学』28号, 動物考古学会
- 浦安市教育委員会 1995『海とともに 浦安市漁撈習俗調査報告書』
- 大分県 1979『大規模増殖場開発事業調査報告(宇佐地区・ハマグリ)』
- 大垣内宏 1997『カタツムリの生活』築地書館
- 奥谷喬司編著 2000『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版会
- 黒住耐二 1994「柱状サンプルから得られた微小貝類遺存体」鈴木公雄監修, 佐藤孝雄・大内千年編『上高津貝塚A地点』慶應義塾大学文学部民族学・考古学研究室
- 桜井準也・山口徹 1986「貝類・魚類の大きさとその分布について」『麻布台一丁目郵政省飯倉分館構内遺跡』港区麻布台一丁目遺跡調査会
- 篠田 統 1996「かいるい 貝類」日本風俗史学会編『図説江戸時代食生活事典』雄山閣
- 鈴木 順 1971「東京都内湾漁業の実態」東京都内湾漁業興亡史編集委員会編『東京都内湾漁業興亡史』(p.173-268) 東京都内湾漁業興亡史刊行会
- 関口すみ子 2005『大江戸の姫さま ペットからお興入れまで』角川学芸出版
- 樋泉岳二 1999「魚類」西本豊弘・松井章編『考古学と動物学』

- 同成社東京府 1890『東京府管内水産圖説』
- 日本獣医解剖学会 1998『家禽解剖学用語』日本中央競馬会
- 日本鳥学会 2012『日本鳥類目録改訂 第7版』日本鳥学会
- 野々村海 2006「加賀藩江戸上屋敷御殿空間の食生活－東京大学本郷構内の遺跡・総合研究棟（文・経・社教）地点（仮称）110号遺構出土の魚類遺体から－」『東京大学構内遺跡調査研究年報』5, 東京大学埋蔵文化財調査室
- 長谷部言人 1952「犬骨」『吉胡貝塚』文化財保護委員会 (p.145-150)
- 松島義章・前田保夫 1985『先史時代の自然環境 縄文時代の自然史』東京美術
- 丸山真史 2013「近世、京都の魚食文化の特徴－近世三都の魚貝類の比較を通じて－」『動物考古学』第30号, 動物考古学研究会
- 吉井始子 1978-81『翻刻 江戸時代料理本集成』臨川書店
- 吉川誠次 1996「コイ 鯉」日本風俗史学会編『図説江戸時代食生活事典（新装版）』雄山閣
- 山内忠平 1958「犬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』第7号, 鹿児島大学農学部
- American Ornithologist' Union (1998) The AOU Checklist of North American Birds, 7th Edition. American Ornithologist' Union
- Baumel, J.J., King, A.S., Breazile, J.E., Evans, H.E., Berge, J.C.V. (1993) Handbook of Avian Anatomy: Nomina Anatomica Avium. Nuttall Ornithological Club.
- Driesch (1976) A GUIDE TO THE MEASUREMENT OF ANIMAL BONES FROM ARCHEOLOGICAL SITES, Peabody Museum of Archaeology and Ethnology

1 表 出土動物遺体種名表

軟体動物門 Phylum MOLLUSCA

腹足綱 Class Gastropoda

カサガイ目 Order Patellidae

ユキノカサガイ科 Family Lottiidae

シボリガイ? *Patelloida pygmaea* from *pygmaea*?

古腹足目 Order Vetigastropoda

ミミガイ科 Family Haliotidae

アワビ属 *Halitosis* (*Nordotis*) sp.

メガイアワビ *Halitosis* (*Nordotis*) *gigantea*

マダカアワビ *Haliotis* (*Nordotis*) *madaka*

クロアワビ *Haliotis* (*Nordotis*) *discus discus*

サザエ科 Family Turbinidae

サザエ *Turbo* (*Batillus*) *cornutus*

盤足目 Order Discopoda

カワザンショウ科 Family Assimineidae

カワザンショウガイ *Assimineia japonica*

タニシ科 Family Vivipariidae

オオタニシ *Cipangopaludina japonica*

ウキツボ科 Family Litopidae

シマハマツボ *Alaba picta*

ウミノナ科 Family Batillariidae

属種不明 gen. et sp. indet.

スズメガイ科 Family Hipponicidae

キクスズメ *Hipponix conica*

ムカデガイ科 Family Vermetidae

オオヘビガイ *Serpulorbis imbricatus*

カリバガザガイ科 Family Calyptraeidae

アワブネガイ *Crepidula* (*Bostrycapulus*) *gravispinosus*

新腹足目 Order Neogastropoda

アクキガイ科 Family Muricidae

アカニシ *Rapana venosa*

エゾバイ科 Family Buccinidae

バイ *Babyronia japonica*

柄眼目 Order Stylommatophora

キセルガイ科 Family Clausiliidae

属種不明 gen. et sp. indet.

オカチョウジガイ科 Family Subulinidae

オカチョウジガイ *Allopeas kyotoensis*

コハクガイ科 Family Zonitidae

ヒメコハクガイ *Hawaiiia minuscula*

ベッコウマイマイ科 Family Helicarionidae

ヒメベッコウマイマイ *Discoconulus sinapidium*

ヒメベッコウ属類似種 *Discoconulus?* sp.

オナジマイマイ科 Family Bradybaenidae

エンスイマイマイ? *Trishoplita conospira?*

二枚貝綱 Class Bivalvia

イガイ目 Order Mytiloidea

イガイ科 Family Mytilidae

タマエガイ属 *Musculus* sp.

ウグイスガイ目 Order Pterioidea

ハボウキガイ科 Family Pinnidae

タイラギ *Atrina* (*Servatrina*) *pectinata*

フネガイ目 Order Arcoidea

フネガイ科 Family Arcidae

アカガイ *Anadara* (*Scapharca*) *broughtonii*

サルボウガイ *Scapharca kagoshimensis*

イタヤガイ目 Order Pectinoidea

イタヤガイ科 Family Pectinidae

イタヤガイ *Pecten albicans*

カキ目 Order Ostreoida

ウミギク科 Family Spondylidae

属種不明 gen. et sp. indet.

ナミマガシワ科 Family Anomiidae

ナミマガシワ *Anomia chinensis*

イタボガキ科 Family Ostreidae

イタボガキ *Ostrea denselamellosa*

マガキ *Crassostrea gigas*

ウロコガイ科? Family Galecommatidae?

属種不明 gen. et sp. indet.

トマヤガイ科 Family Carditidae

属種不明 gen. et sp. indet.

マルスダレガイ目 Order Veneroidea

ツキガイ科 Family Lucinidae

ウメノハナガイ *Pillucina pisidium*

バカガイ科 Family Mactridae

シオフキガイ *Mactra veneriformis*

ミルクイ *Tresus keenae*

フナガタガイ科 Family Trapezidae

ウネナシトマヤガイ *Trapezium liratum*

シジミ科 Family Cobicalidae

ヤマトシジミ *Corbicula japonica*

マルスダレガイ科 Family Veneridae

アサリ *Ruditapes philippinarum*

オキナマツカゼ *Irus ishibashianus*

ハマグリ *Meretrix lusoria*

オキシジミ *Cyclina sinensis*

オオノガイ目 Order Myoidea

オオノガイ科 Family Myodae

オオノガイ *Mya* (*Arenomya*) *arenaria oonogai*

節足動物門 Phylum ARTHROPODA

顎脚綱 Class Maxillopoda

無柄目 Order Sessilia

フジツボ亜目 Suborder Balanomorpha

科属種不明 fam, gen., et sp. indet.

脊椎動物門 Phylum VERTEBRATA

軟骨魚綱 Class Chondrichthyes

板鰓亜綱 Subclass Elasmobranchii

エイ目 Order Rajiforms

アカエイ科 Family Dasyatidae

属種不明 gen. et sp. indet.

目科属種不明 (サメ類) ordo indet

硬骨魚綱 Class Osteichthyes

ウナギ目 Order Anguilliformes

ウナギ科 Family Anguillidae

- ウナギ *Anguilla japonica*
 ハモ科 Family Muraenesocidae
 ハモ属 *Muraenesox* sp.
 ニシン目 Order Clupeiformes
 ニシン科 Family Clupeidae
 コノシロ *Konosirus punctatus*
 属種不明 gen. et sp. indet.
 カタクチイワシ科 Family Engraulididae
 カタクチイワシ *Engraulis japonica*
 ウルメイワシ科 Family Dussumeriidae
 ウルメイワシ *Etrumeus micropus*
 コイ目 Order Cypriniformes
 コイ科 Family Cyprinidae
 コイ *Cyprinus carpio Linnaeus*
 ドジョウ科 Family Cobitidae
 属種不明 gen. et sp. indet.
 サケ目 Order Salmoniformes
 アユ科 Family Plecoglossidae
 アユ *Plecoglossus altivelis altivelis*
 サケ科 Family Salmonidae
 サケ属 *Oncorhynchus* sp.
 属種不明 gen. et sp. indet.
 タラ目 Order Gadiformes
 タラ科 Family Gadidae
 属種不明 gen. et sp. indet.
 ダツ目 Order Beloniformes
 サンマ科 Family Scomberesocidae
 サンマ *Cololabis saira*
 メダカ目 Order Cyprinodontiformes
 サヨリ科 Family Hemiramphidae
 属種不明 gen. et sp. indet.
 カサゴ目 Order Scorpaeniformes
 フサカサゴ科 Family Scorpaenidae
 属種不明 gen. et sp. indet.
 ホウボウ科 Family Triglidae
 カナガシラ属 *Lepidotrigla* sp.
 属種不明 gen. et sp. indet.
 コチ科 Family Platycephalidae
 属種不明 gen. et sp. indet.
 アイナメ科 Family Hexagramidae
 アイナメ属 *Hexagrammos* sp.
 スズキ目 Order Perciformes
 ハタ科 Family Serranidae
 属種不明 gen. et sp. indet.
 スズキ科 Family Serranidae
 スズキ属 *Lateolabrax* sp.
 スズキ *Lateolabrax japonicus*.
 キス科 Family Sillaginidae
 キス属 *Sillago* sp.
 キツネアマダイ科 Family Malacanthidae
 アマダイ属 *Branchiostegus* sp.
 アジ科 Family Carangidae
 ブリモドキ亜科 Subfamily Naucratinae
 ブリ属 *Seriola* sp.
 属種不明 gen. et sp. indet.
- カンパチ *Seriola dumerili*
 アジ亜科 Subfamily Carangidae
 マアジ *Trachurus japonicus*
 イサキ科 Family Haemulidae
 イサキ *Parapristipoma trilineatum*
 タイ科 Family Sparidae
 ヘダイ亜科 Subfamily Sparinae
 クロダイ属 *Acanthopagrus* sp.
 マダイ亜科 Subfamily Pagrinae
 マダイ *Pagrus major*
 チダイ *Eyynniss tumifrons*
 キダイ亜科 Subfamily Denticinae
 キダイ属 *Dentex* sp.
 ニベ科 Family Sciaenidae
 属種不明 gen. et sp. indet.
 ボラ科 Family Mugilida
 属種不明 gen. et sp. indet.
 ウミタナゴ科 Family Embiotocidae
 ウミタナゴ属 *Ditrema* sp.
 ハゼ科 Family Gobiidae
 属種不明 gen. et sp. indet.
 カマス科 Family Sphyracnoidae
 カマス属 *Sphyracna* sp.
 タチウオ科 Family Trichiuridae
 属種不明 gen. et sp. indet.
 サバ科 Family Scombridae
 カツオ *Katsuwonus pelamis*
 サバ属 *Scomber* sp.
 サワラ *Scomberomorus niphonius*
 マグロ属 *Thunnus* sp.
 イボダイ科 Family Centrolophidae
 イボダイ *Psenopsis anomala*
 カレイ目 Order Pleuronectiformes
 ヒラメ科 Family Paralichthyidae
 ヒラメ *Paralichthys olivaceus*
 カレイ科 Family Pleuronectidae
 属種不明 gen. et sp. indet.
 ウシノシタ科 Family Cynoglossidae
 属種不明 gen. et sp. indet.
 フグ目 Order Tetraodontiformes
 フグ科 Family Tetraodonidae
 属種不明 gen. et sp. indet.
 アンコウ目 Lophiiformes
 アンコウ科 Lophiidae
 属種不明 gen. et sp. indet.
- 両生綱 Class Amphibia
 無尾(カエル)目 Order Anura
 科属種不明 fam., gen., et sp. indet.
- 鳥綱 Class Aves
 キジ目 Order Galliformes
 キジ科 Family Phasianidae
 ウズラ *Coturnix japonica*
 ニワトリ *Gallus gallus domesticus*

- 属種不明 *gen. et sp. indet.*
 カモ目 Order Anseriformes
 カモ科 Family Anatidae
 ハクチョウ属 *Cygnus* sp.
 ガン族 Tribe Anserini
 属種不明 *gen. et sp. indet.*
 カモ亜科 Subfamily Anatinae
 マガモ属 *Anas* sp.
 属種不明 *gen. et sp. indet.*
 ペリカン目 Order Pelecaniformes
 サギ科 Family Ardeidae
 属種不明 *gen. et sp. indet.*
 ツル目 Order Gruiformes
 ツル科 Family Gruidae
 属種不明 *gen. et sp. indet.*
 クイナ科 Family Rallidae
 属種不明 *gen. et sp. indet.*
 チドリ目 Order Charadriiformes
 科属種不明 *fam. gen. et sp. indet.*
 スズメ目 Order Passeriformes
 科属種不明 *fam. gen. et sp. indet.*
 哺乳綱 Class Mammalia
- 霊長目 Order Primate
 ヒト科 Family Hominidae
 ヒト *Homo sapiens*
 齧歯目 Order Rodentia
 ネズミ科 Family Muridae
 属種不明 *gen. et sp. indet.*
 ウサギ目 Order Lagomorpha
 ウサギ科 Family Leporidae
 属種不明 *gen. et sp. indet.*
 食肉目 Order Carnivora
 ネコ科 Family Felidae
 イエネコ *Felis silvestris catus*
 イヌ科 Family Canidae
 イヌ *Canis familiaris*
 偶蹄目 Order Artiodactyla
 イノシシ科 Family Suidae
 イノシシ *Sus scrofa*
 シカ科 Family Cervidae
 ニホンジカ *Cervus nippon*
 奇蹄目 Order Perissodactyla
 ウマ科 Family Equidae
 ウマ *Equus caballus*

3表 アカガイのサイズに関する記述統計量[SK110]

層位	全体			2層			3層			4層			5層		
左/右殻	左殻									右殻					
部位	殻長	殻高	鉸歯長	殻長	殻高	鉸歯長	殻長	殻高	鉸歯長	殻長	殻高	鉸歯長	殻長	殻高	鉸歯長
サンプル数	7	7	17	2	1	3	3	2	4	1	2	7	4	3	4
平均値	103.24	85.19	69.21	105.65	86.16	67.34	103.77	84.79	73.57	100.32	84.78	67.75	104.02	84.17	68.01
標準偏差	2.95	1.20	3.91			1.85	1.31		1.92			3.19	2.42	2.48	3.61
分散	8.72	1.44	15.33			3.43	1.72		3.69			10.17	5.87	6.14	13.02
範囲	8.62	3.06	12.36			3.99	2.98		4.69			8.48	6.84	4.64	8.26
最小値	99.32	83.93	63.62	103.35		65.97	102.63	84.09	71.29		83.93	63.62	100.62	82.35	64.14
最大値	107.94	86.99	75.98	107.94		69.96	105.61	85.49	75.98		85.62	72.10	107.46	86.99	72.40
中央値	103.08	85.49	69.96			66.10	103.08		73.51			69.35	104.01	83.16	67.75
尖度	-0.31	-1.49	-1.08						-4.16			-2.02	1.38		-5.10
歪度	0.29	0.27	-0.07			1.73	1.58		0.08			-0.20	0.04	1.53	0.12
標準誤差	1.12	0.45	0.95			1.31	0.93		1.11			1.30	1.40	1.43	2.08
変動係数	2.9%	1.4%	5.7%			3.4%	1.5%		3.0%			5.1%	2.7%	2.9%	6.1%

値単位:mm

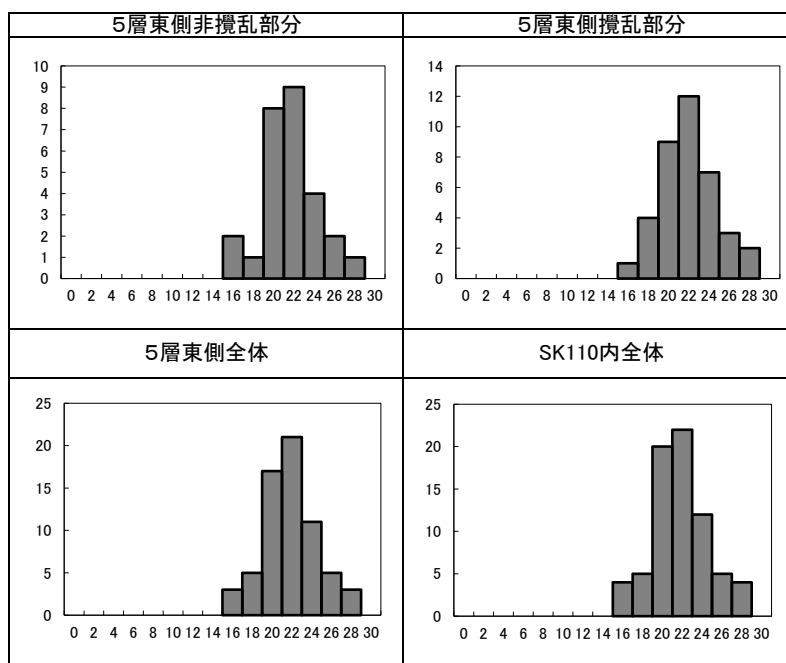
4表 ヤマトシジミの殻長に関する記述統計量[SK110]

左/右殻	1層	2層	3層	4層
	右	左	左	右
サンプル数	2	1	1	3
平均値	25.87	20.51	20.53	20.88
標準偏差				2.71
分散				7.36
範囲				6.62
最小値	22.35			17.41
最大値	29.38			24.03
中央値		20.51	20.53	21.21
尖度				
歪度				-0.44
標準誤差				1.92
変動係数				0.16

左/右殻	5層			全体
	非攪乱	攪乱	全体	
サンプル数	27	38	65	72
平均値	22.68	23.08	22.91	22.84
標準偏差	2.90	2.56	2.71	2.80
分散	8.40	6.55	7.36	7.86
範囲	13.51	11.16	13.51	13.51
最小値	16.10	17.41	16.10	16.10
最大値	29.61	28.57	29.61	29.61
中央値	22.53	23.34	22.85	22.53
尖度	0.59	-0.28	0.09	0.09
歪度	0.15	0.06	0.08	0.19
標準誤差	0.57	0.42	0.34	0.33
変動係数	0.13	0.11	0.12	0.12

値単位:mm

5表 ヤマトシジミの殻長に関するヒストグラム[SK110]



縦軸:資料数, 横軸:殻長(mm以上)

6表 ハマグリの殻長と外靱帯溝長に関する回帰分析の結果[SK110]

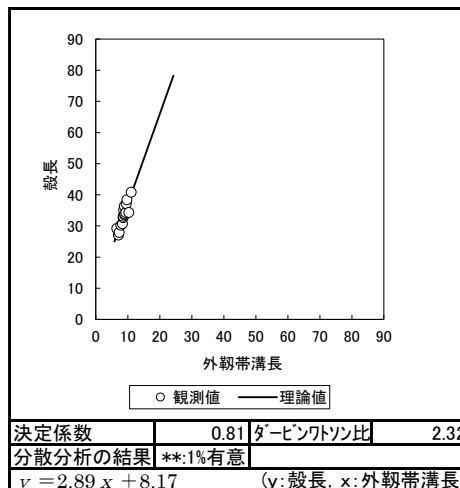


表6 ハマグリのサイズに関する一次回帰分析の結果

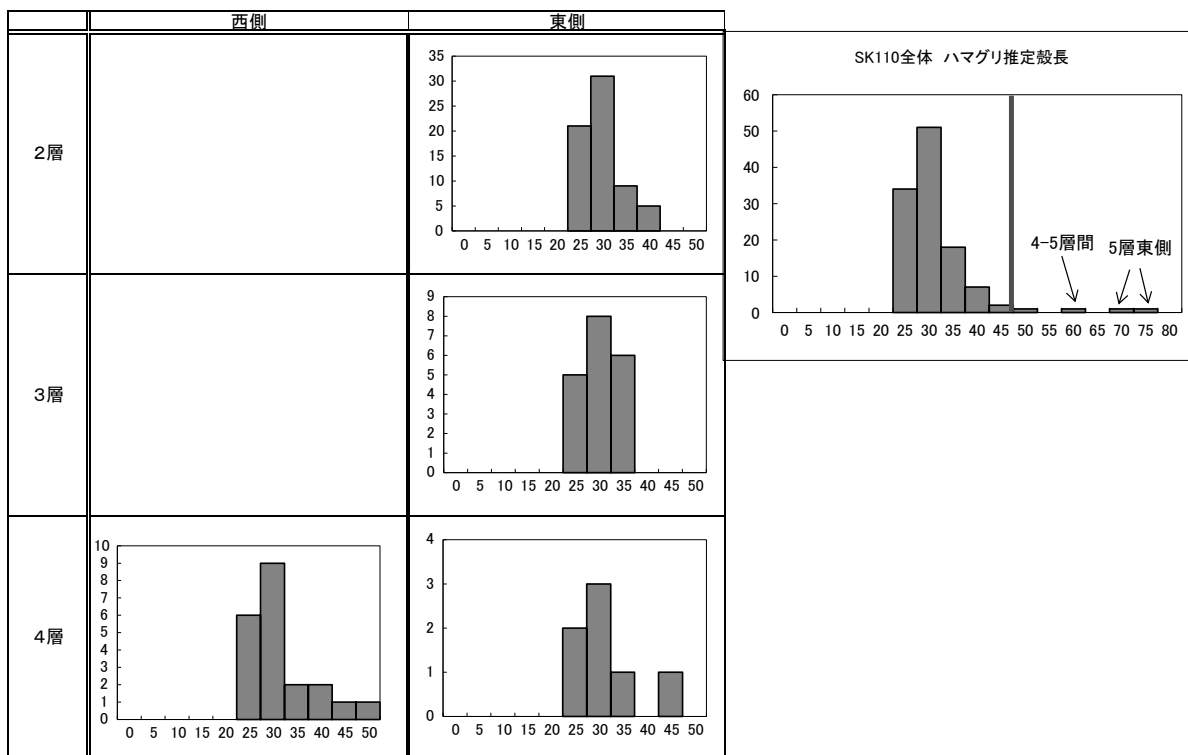
7表 ハマグリサイズのに関する記述統計量 [SK110]

層位等	2層				3層				4層				5層			
	殻長		殻高	外靱帯溝長	殻長		殻高	外靱帯溝長	殻長		殻高	外靱帯溝長	殻長		殻高	外靱帯溝長
計測部位	計測値	推定値			計測値	推定値			計測値	推定値			計測値	推定値		
計測点数	16	66	25	66	2	19	5	19	1	7	3	7	0	3	1	3
平均	33.33	32.39	27.76	8.39	34.22	32.93	30.32	8.57	34.38	32.62	26.61	8.47	73.06	51.39	22.47	3.67
不偏分散	15.09	16.34	8.16	1.96	16.99	11.13	5.39	1.33	42.57	11.25	5.10	30.59				
標準偏差	3.88	4.04	2.86	1.40	4.12	3.34	2.32	1.15	6.52	3.35	2.26	5.53				1.91
標準誤差	0.97	0.50	0.57	0.17	2.92	0.77	1.04	0.26	2.47	1.94	0.85	3.19				1.11
範囲	13.82	15.97	11.65	5.53	5.83	11.73	5.66	4.06	20.45	6.55	7.08	11.01				3.81
最小値	27.06	25.07	22.79	5.85	31.30	27.06	27.14	6.54	25.01	22.92	5.83	67.24				20.45
最大値	40.88	41.04	34.44	11.38	37.13	38.79	32.80	10.60	45.46	29.47	12.91	78.24				24.26
中央値	33.37	32.26	27.75	8.34	34.22	32.75	31.12	8.51	31.33	27.45	8.02	73.71				22.69
第1四分位数	30.60	29.59	25.86	7.42	32.76	30.22	28.75	7.64	29.30	25.19	7.32	70.47				21.57
第3四分位数	35.45	34.25	29.17	9.03	35.67	35.09	31.80	9.32	33.98	28.46	8.94	75.98				23.48
四分位範囲	4.85	4.66	3.31	1.61	2.92	4.87	3.05	1.69	4.68	3.28	1.62	5.50				1.91
変動係数	0.12	0.12	0.10	0.17	0.12	0.10	0.08	0.13	0.20	0.13	0.27	0.08				0.09
尖度	-0.46	-0.43	0.20	-0.43		-0.72	-1.48	-0.72	2.57		2.57					
歪度	0.24	0.41	0.45	0.41		-0.16	-0.57	-0.16	1.34	-1.05	1.34					-0.52

層位等	4層-5層間				4層西側				05層攪乱				全体			
	殻長		殻高	外靱帯溝長	殻長		殻高	外靱帯溝長	殻長		殻高	外靱帯溝長	殻長		殻高	外靱帯溝長
計測部位	計測値	推定値			計測値	推定値			計測値	推定値			計測値	推定値		
計測点数	0	1	0	1	9	21	15	21	2	2	2	2	30	119	51	119
平均		64.55		19.52	32.31	34.35	28.48	9.06	70.18	69.68	57.32	21.30	35.57	34.76	29.78	9.21
不偏分散					21.59	45.41	10.01	5.44	10.22	0.30	9.37	0.04	103.57	90.55	50.63	10.85
標準偏差					4.65	6.74	3.16	2.33	3.20	0.55	3.06	0.19	10.18	9.52	7.12	3.29
標準誤差					1.55	1.47	0.82	0.51	2.26	0.39	2.17	0.14	1.86	0.87	1.00	0.30
範囲					15.55	27.41	10.97	9.49	4.52	0.78	4.33	0.27	45.38	53.24	36.69	18.43
最小値					27.41	26.48	23.99	6.34	67.92	69.29	55.15	21.16	27.06	25.01	22.79	5.83
最大値					42.96	53.89	34.96	15.83	72.44	70.07	59.48	21.43	72.44	78.24	59.48	24.26
中央値					30.75	33.04	28.20	8.61	70.18	69.68	57.32	21.30	33.37	32.75	28.08	8.51
第1四分位数					29.17	29.69	25.89	7.45	69.05	69.48	56.23	21.23	30.66	29.76	26.24	7.48
第3四分位数					34.05	35.32	29.74	9.40	71.31	69.87	58.40	21.36	36.06	35.41	30.10	9.43
四分位範囲					4.88	5.63	3.85	1.95	2.26	0.39	2.16	0.14	5.40	5.65	3.87	1.96
変動係数					14.4%	19.6%	11.1%	25.7%	4.6%	0.8%	5.3%	0.9%	28.6%	27.4%	23.9%	35.8%
尖度					3.32	2.59	0.50	2.59					8.40	8.91	9.34	8.91
歪度					1.66	1.59	0.85	1.59					2.85	2.87	2.94	2.87

値単位:mm

8表 ハマグリ殻長の推定値に関するヒストグラム [SK110]



縦軸/資料数 横軸/殻長(推定値:mm以上)

分類群	部位	層位 節目	層位															不明									
			1層			2層			3層			4層			4・5層間				5層			6層			7層		
			5	3	1	5	3	1	5	3	1	5	3	1	5	3	1		5	3	1	5	3	1	5	3	1
マダイ	前頭骨	左				11				2	1	4					9										○
	右	1			12				4	1	5					15											
チダイ	上後頭骨		1			10				4	1	1				14											
	前頭骨	左														1											
マダイ亜科	主上顎骨	左				1				5	2	1				12			1								
		右				2				4		1				10	2										
	前上顎骨	左				3	1			3	1	1		1		15	1			1							
		右			1	8				5	2	1				10	2			2							
	歯骨	左				3				7		1				20											
		右	1			8				2			3	1		12											
	角骨	左				3				4						18	1			1							
		右				5				2	1	2	1			12	1										
	方骨	左	1			8	1			5	2					11	2										
		右				2	3			2	1	1				14	2			1							
	口蓋骨	左				4				6					2	7											
		右				1				2					2	7											
	キダイ属	前上顎骨	右																1								
	タイ科	主上顎骨	左				1											3									
			右				2	2			1						1	1									
前鰓蓋骨		左	1			5				3	1	1				8											
		右	1			5	1			3	1		1			7											
主鰓蓋骨		左				2				1			1			11	1										
		右	1				3			3	1	1				6				1							
舌顎骨	左				3				3			2			10												
	右	1			2				4						6												
タイ型	第一椎骨				12	12			3	2					15	3	1	2									
	腹椎		7	2	47	22			31	8		5	2	2	74	14	2	2	1					1			
	尾椎		12	6	137	32			63	31	1	18	6	3	2	248	18	1	6	3		1	1				
ニベ科	尾椎				1											1	1										
ボラ科	前鰓蓋骨	右									1																
	主鰓蓋骨	右													1												
	腹椎					2						1			1												
	尾椎		2			7	8				2					9	6					1					
	椎骨					2	1																				
ウミタナゴ属	尾椎															1											
ハゼ科	腹椎						1																				
カマス属(?)	腹椎						1																				
タチウオ科	尾椎			1																							
カツオ	主上顎骨	左								1																	
	前上顎骨	左								1																	
	角骨	左								1																	
	方骨	左				1																					
		右				1																					
	前鰓蓋骨	右				2																					
	第一椎骨									1																	
	腹椎						3			4							2										
	尾椎		2			10				14	1																
	椎骨																										
サバ属	前上顎骨	右					2																				
	主上顎骨	左															1										
	角骨	右				1																					
	腹椎					2	1								1	1											
	尾椎						2							1	2	2									6		
サワラ属	歯骨	右														1											
	腹椎															2											
	尾椎																										
	椎骨													3													
	椎骨														2												
ヒラメ	主上顎骨	左														1			1								
		右				1							1			1											
	前上顎骨	左									2		1				2										
		右						3			1					3											
	歯骨	左				2										1											
		右				2										2											
	角骨	左									1					3											
		右					1				2				1	3	1										
	方骨	左				1	1				1		3		1	5	2			3							
		右				1	1							1		2	1			1							
	前鰓蓋骨	左				1										1											
	主鰓蓋骨	右				1					1					1											
	第一椎骨					4	1			1	1					3				1							
	腹椎				1		21	8		1	9		2	2	2	15	1										
尾椎		4	4		90	27			22	28		17	1	2	95	11			6	1		1					
椎骨						1								1													
ヒラメ?	尾椎														2												
	椎骨														2												

分類群	部位	層位																									
		層位	1層			2層			3層			4層			4・5層間			5層			6層			7層			不明
		篩目	5	3	1	5	3	1	5	3	1	5	3	1	5	3	1	5	3	1	5	3	1	5	3	1	5
カレイ科(マガレイ型)	第一椎骨						1																				
	尾椎																		1								
カレイ科(イシガレイ型)	前上顎骨	左					1																				
		右					1																				
	主鰓蓋骨	右																									
	第一椎骨						1																				
	腹椎						1																				
カレイ科(クロガシラカレイ型)	尾椎																										
	主上顎骨	右					1																				
カレイ科(ムシガレイ型)	前上顎骨	左																									
	方骨	左																									
	前鰓蓋骨	左																									
		右																									
	第一椎骨																										
	腹椎																										
	尾椎																										
カレイ科(アカガレイ型)	前上顎骨	右					1																				
	歯骨	右																									
	腹椎																										
	尾椎																										
ウシノシタ科	尾椎																										
アンコウ科	前上顎骨	左																									
		右																									
	歯骨	左																									
未同定	方骨	左																									
	第一椎骨																										
	腹椎																										
同定不可	尾椎																										
	前上顎骨	左																									
	歯骨	左																									
	主鰓蓋骨	右																									
	尾椎																										

10表 魚類遺体同定破片数組成[SK110]

	1層		2層		3層		4層		4・5層間		5層		6層		7層		層位不明		総計 破片数	総計 %	
	破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%			
板鰓亜綱	4	3.4%	25	1.6%	1	0.2%	1	0.5%	1	0.8%	1	0.04%							33	0.65%	
ウナギ属	3	2.5%	6	0.4%			20	9.4%	2	1.5%	6	0.3%	6	6.7%					43	0.85%	
ニシン科	5	4.2%	15	0.9%	2	0.3%	2	0.9%			34	1.5%	2	2.2%					60	1.19%	
カタクチイワシ	1	0.1%	1	0.1%							3	0.1%							4	0.08%	
ウルメイワシ			1	0.1%															1	0.02%	
コイ科	3	2.5%	9	0.6%	5	0.8%	1	0.5%			23	1.0%			1	16.7%			42	0.83%	
ドジョウ科			30	1.9%	2	0.3%	3	1.4%			1	0.04%							36	0.71%	
アユ			43	2.7%	6	0.9%	2	0.9%			28	1.2%							79	1.57%	
サケ科			2	0.1%							1	0.04%							3	0.06%	
タラ科			10	0.6%	3	0.5%	2	0.9%	1	0.8%	35	1.6%	8	8.9%					59	1.17%	
サンマ			1	0.1%							1	0.04%							2	0.04%	
サヨリ科	8	6.7%	75	4.7%	6	0.9%	18	8.5%	19	14.6%	557	24.8%	6	6.7%					689	13.66%	
ホウボウ科	4	3.4%	5	0.3%			2	0.9%	1	0.8%	25	1.1%							37	0.73%	
コナ科			48	3.0%	16	2.5%	1	0.5%			10	0.4%							75	1.49%	
アイナメ科	8	6.7%	55	3.4%	9	1.4%	2	0.9%	3	2.3%	65	2.9%	3	3.3%					145	2.87%	
ハタ科	1	0.8%	6	0.4%	1	0.2%	1	0.5%			3	0.1%	2	2.2%					14	0.28%	
スズキ属	1	0.8%	33	2.1%	13	2.0%	3	1.4%			5	0.2%							55	1.09%	
キヌ属	27	22.7%	543	34.0%	183	28.8%	49	23.1%	69	53.1%	474	21.1%	15	16.7%					1360	26.96%	
アマダイ属			3	0.2%	2	0.3%	1	0.5%			8	0.4%							14	0.28%	
ブリ属			8	0.5%	15	2.4%	2	0.9%	1	0.8%	17	0.8%							43	0.85%	
カンバチ			1	0.1%															1	0.02%	
アンビ科	1	0.8%	19	1.2%	14	2.2%	9	4.2%	1	0.8%	18	0.8%					#REF!		62	1.23%	
イサキ			1	0.1%															1	0.02%	
タイ科	36	30.3%	375	23.5%	230	36.2%	58	27.4%	12	9.2%	635	28.3%	21	23.3%	3	50.0%			1370	27.16%	
ニベ科			1	0.1%							2	0.1%							3	0.06%	
ボラ科	2	1.7%	20	1.3%	2	0.3%	2	0.9%			17	0.8%			1	16.7%			44	0.87%	
ウミタナゴ科											1	0.04%							1	0.02%	
ハゼ科			1	0.1%															1	0.02%	
カマス属(?)			1	0.1%															1	0.02%	
タチウオ科	1	0.8%																	1	0.02%	
カツオ	2	1.7%	17	1.1%	23	3.6%					2	0.1%							44	0.87%	
サバ属			8	0.5%						3	2.3%	5	0.2%					6	100.0%	22	0.44%
サワラ属										5	3.8%	3	0.1%						8	0.16%	
ヒラメ	9	7.6%	168	10.5%	70	11.0%	28	13.2%	11	8.5%	154	6.9%	13	14.4%	1	16.7%			454	9.00%	
カレイ科	4	3.4%	67	4.2%	33	5.2%	4	1.9%	1	0.8%	109	4.9%	13	14.4%					231	4.58%	
ウシノシタ科							1	0.5%					1	1.1%					2	0.04%	
アンコウ科											4	0.2%							4	0.08%	
合計	119		1598		636		212		130		2247		90		6		6		5044		

11表 魚類遺体最小個体数組成[SK110]

	1層		2層		3層		4層		4・5層間		5層		6層		7層		全体	
	MNI	%	MNI	%	MNI	%	MNI	%	MNI	%	MNI	%	MNI	%	MNI	%	MNI	%
板鰓亜綱	1	5.0%	1	1.1%	1	2.4%	1	3.4%	1	6.7%	1	1.1%					1	0.5%
ウナギ属	1	5.0%	1	1.1%			1	3.4%	1	6.7%	1	1.1%	1	5.9%			1	0.5%
ニシン科	1	5.0%	2	2.2%	1	2.4%	1	3.4%			1	1.1%	1	5.9%			1	0.5%
カタクチイワシ			1	1.1%							1	1.1%					1	0.5%
ウルメイワシ			1	1.1%													1	0.5%
コイ科	1	5.0%	2	2.2%	2	4.9%	1	3.4%			6	6.7%			1	25.0%	11	5.3%
ドジョウ科			1	1.1%	1	2.4%	1	3.4%			1	1.1%					1	0.5%
アユ			1	1.1%	1	2.4%	1	3.4%			1	1.1%					2	1.0%
サケ科			1	1.1%							1	1.1%					1	0.5%
タラ科			1	1.1%	1	2.4%	1	3.4%	1	6.7%	1	1.1%	1	5.9%			1	0.5%
サンマ			1	1.1%							1	1.1%					1	0.5%
サヨリ科	2	10.0%	3	3.4%	1	2.4%	1	3.4%	1	6.7%	7	7.8%	1	5.9%			12	5.8%
ホウボウ科	1	5.0%	1	1.1%			1	3.4%	1	6.7%	2	2.2%					2	1.0%
コチ科			2	2.2%	2	4.9%	1	3.4%			2	2.2%					3	1.5%
アイナメ科	1	5.0%	1	1.1%	1	2.4%	1	3.4%	1	6.7%	1	1.1%	1	5.9%			1	0.5%
ハタ科	1	5.0%	2	2.2%	1	2.4%	1	3.4%			1	1.1%	1	5.9%			5	2.4%
スズキ属	1	5.0%	2	2.2%	2	4.9%	1	3.4%			1	1.1%					4	1.9%
キス属	1	5.0%	30	33.7%	9	22.0%	2	6.9%	1	6.7%	16	17.8%	3	17.6%			62	30.1%
アマダイ属			1	1.1%	1	2.4%	1	3.4%			1	1.1%					1	0.5%
ブリ属			2	2.2%	1	2.4%	1	3.4%	1	6.7%	2	2.2%					3	1.5%
アジ亜科	1	5.0%	1	1.1%	2	4.9%	1	3.4%	1	6.7%	1	1.1%					3	1.5%
イサキ			1	1.1%													1	0.5%
タイ科	1	5.0%	13	14.6%	7	17.1%	5	17.2%	2	13.3%	21	23.3%	2	11.8%	1	25.0%	50	24.3%
ニベ科			1	1.1%							1	1.1%					1	0.5%
ボラ科	1	5.0%	1	1.1%	1	2.4%	1	3.4%			1	1.1%			1	25.0%	1	0.5%
ウミタナゴ科											1	1.1%					1	0.5%
ハゼ科			1	1.1%													1	0.5%
カマス属(?)			1	1.1%													1	0.5%
タチウオ科	1	5.0%															1	0.5%
カツオ	1	5.0%	1	1.1%	1	2.4%					1	1.1%					2	1.0%
サバ属			2	2.2%					1	6.7%	1	1.1%					2	1.0%
サワラ属									1	6.7%	1	1.1%					1	0.5%
ヒラメ	1	5.0%	5	5.6%	2	4.9%	3	10.3%	1	6.7%	7	7.8%	3	17.6%	1	25.0%	17	8.3%
カレイ科	3	15.0%	5	5.6%	3	7.3%	1	3.4%	1	6.7%	6	6.7%	2	11.8%			7	3.4%
ウシノシタ科							1	3.4%					1	5.9%			1	0.5%
アンコウ科											1	1.1%					1	0.5%
合計	20		89		41		29		15		90		17		4		206	

12表 両生類遺体一覧[SK110]

層	篩目	分類群	部位	左右	残存状況	数
1層	1mm	カエル類	指骨又は足指骨	不明	完存	1
5層	3mm	不明	大腿骨?	不明	完存	1
合計						2

13表 鳥類遺体一覧[SK110]

層位	節目	種名	部位	左右	残存部	数量	
1	5	チドリ目	尺骨	左	s	1	
		同定不能鳥類	脛足根骨	左	s	1	
	3	種不明鳥類	趾骨			1	
2	5	ウズラ	脛足根骨	左	d	1	
			足根中足骨	右	d	1	
	クイナ科	肩甲骨	左		1		
		上腕骨	右	d	2		
		尺骨	右	w	1		
				p-s	2		
		手根中手骨	右	p	1		
				p-s	1		
				d	1		
		大指基節骨	左		1		
		大腿骨	右	d	1		
			左	d	1		
		脛足根骨	右	d	1		
		足根中足骨	右	p	1		
				d	1		
		左	p-s	1			
	チドリ目	尺骨	右	d	1		
			左	d	1		
		手根中手骨	右	s-d	1		
			左	d	1		
		足根中足骨	左	p	1		
				d	1		
	種不明鳥類	趾骨			4		
		椎骨			3		
	同定不能鳥類	大腿骨	左	s	1		
		足根中足骨		sfr	1		
	3	5	ウズラ	足根中足骨	左	p	1
				手根中手骨	右	d	2
		クイナ科	腕骨	右	p	1	
					d	1	
			小翼節骨	右		1	
			足根中足骨	左	d	1	
			チドリ目	尺骨	右	d	3
					左	d	1
				上腕骨	左	d	1
				大指末節骨	右		1
				腕骨	左	d	1
				脛足根骨	右	d	1
				左	d	2	
スズメ目			上腕骨	左	p	1	
					d	1	
種不明鳥類		尺骨	左	p-s	1		
		腕骨	右	p	1		
同定不能鳥類		椎骨			4		
		趾骨			16		
同定不能鳥類		上腕骨	右	pf	1		
		脛足根骨	右	sfr	1		
同定不能鳥類		足根中足骨	右	dfr	1		
		四肢骨			28		
1		カモ亜科	小指節骨	右		1	
		種不明鳥類	趾骨			10	
同定不能鳥類		椎骨		sfr	2		
		四肢骨		sfr	70		
3		5	クイナ科	小翼節骨	右	sfr	1
				上腕骨	左	d	1
						s-d	1
				尺骨	左	d	1
				腕骨	左	p-s	1
				手根中手骨	右	p-s	1
					左	p-s	1
				脛足根骨	右	d	1
					左	d	2
				足根中足骨	右	w	1
					左	w	2
				種不明鳥類	椎骨		
	趾骨						2
	同定不能鳥類	四肢骨		sfr	1		
		四肢骨		sfr	1		
	3	クイナ科	上腕骨	左	s	1	
			尺骨	左	p	1	
					s	1	
			腕骨	右	d	1	
				左	d	1	
			手根中手骨	右	p	1	
		チドリ目	大指基節骨	右		1	
		種不明鳥類	趾骨			10	
		同定不能鳥類	四肢骨		sfr	4	
			脛足根骨	右	sfr	1	
		同定不能鳥類	四肢骨	左	sfr	1	
			尺骨	右	d	1	
		1	スズメ目	尺骨	右	d	1
	種不明鳥類		趾骨			4	

層位	節目	種名	部位	左右	残存部	数量	
4	5	クイナ科	大指基節骨	右		1	
			種不明鳥類	趾骨		4	
			同定不能鳥類	手根中手骨	右	sfr	1
	3	種不明鳥類	趾骨			20	
			椎骨			2	
					fr	1	
			同定不能鳥類	手根中手骨	右	sfr	1
				足根中足骨		dfr	1
				四肢骨		sfr	1
	1	種不明鳥類				6	
	4~5	5	種不明鳥類	趾骨			1
				種不明鳥類	脛足根骨	右	d
		3	チドリ目	足根中足骨	右	w	1
	5	5	カモ亜科	趾骨			2
				同定不能鳥類	四肢骨		sfr
		クイナ科	上腕骨	右	s-d	1	
			尺骨	右	d	1	
			手根中手骨	右	w	2	
					d	2	
				左	d	1	
大指基節骨			右		1		
尾端骨					1		
チドリ目			足根中足骨	左	p	1	
				s-d	1		
チドリ目			肩甲骨	右		1	
			上腕骨	右	d	1	
			尺骨	右	p-s	1	
			手根中手骨	右	w	3	
				s-d	2		
			左	w	1		
				p	1		
				s-d	1		
				d	1		
	大指基節骨	右		1			
		左		1			
	脛足根骨	右	d	3			
		左	d	4			
足根中足骨	右	w	1				
		p	1				
		p-s	2				
		d	1				
	左	w	2				
		p	1				
		s	1				
		s-d	1				
種不明鳥類	趾骨			3			
同定不能鳥類	手根中手骨	左	sfr	1			
	四肢骨		sfr	2			
3	カモ亜科	大指基節骨	右		1		
		クイナ科	小翼節骨	右		1	
	チドリ目	尺骨	左	d	4		
		腕骨	右	d	1		
			左	d	1		
		手根中手骨	右	p	3		
				d	5		
			左	s-d	1		
				d	3		
		大指基節骨	右		7		
			左		8		
		大指末節骨	左		1		
		足根中足骨	右	p	1		
		p-s	2				
		d	2				
	左	p	3				
		s-d	2				
		d	4				
脛足根骨	右	d	6				
	左	d	6				
種不明鳥類	趾骨			18			
同定不能鳥類	手根中手骨	右	pf	1			
	四肢骨		sfr	6			
1	チドリ目	腕骨	左	p	1		
			右	d	1		
		小翼節骨	右		3		
			左		1		
		大指末節骨	右		1		
種不明鳥類	趾骨			78			
同定不能鳥類	四肢骨		sfr	2			
	四肢骨		sfr	2			
6	5	種不明鳥類	趾骨			1	
			同定不能鳥類	頭骨		sfr	1
	1	種不明鳥類	趾骨			3	
総計						522	

w: 完存、p: 近位端、d: 遠位端(鳥口骨では肩端)、s: 骨体部、fr: 破片

14表 哺乳類遺体一覧 [SK110]

層	節目	分類群	部位	左右	残存状況	数
1層	粗	中型哺乳類	不明骨片	-	-	3
	中	ネズミ類	尾椎	-	完存	1
	細	ネズミ類	臼歯	左	完存	1
2層	粗	イノシシ	脛骨	右	近位骨端	1
	中	ヒト	下顎第二切歯	右	完存	1
	細	ネズミ類	切歯	右	-	1
	中	中型哺乳類	不明骨片	-	-	8
5層	粗	ネズミ類	臼歯と下顎骨の一部	左	-	1
	中	ネズミ類	切歯	左	-	1
	細	ネズミ類	切歯	不明	-	1
	粗	ネズミ類	切歯	右	-	1
5層	粗	ネズミ類	尾椎	-	完存	1
	中	ネズミ類	臼歯	右	完存	1
	細	ネズミ類	尾椎	-	完存	1
合計						23

15表 貝類遺体組成表 [SK641・642・643]

5mm 以上

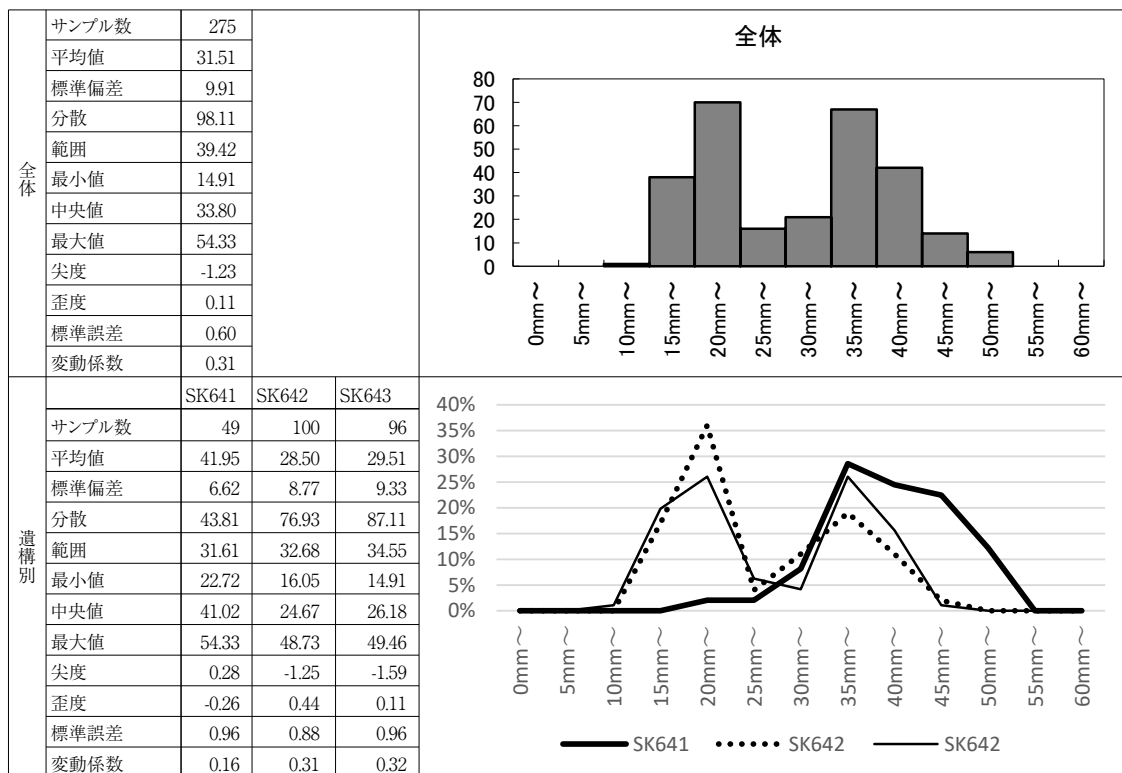
遺構番号	遺構内位置	節目	アノミ類		アノミ類	タイラギ	アカイ	サルホウ	イタヤカイ	ウミギク科	ナミガシロ	イタボガキ	マキ	シオフキ	ミルカイ	ウネナシト	ヤトシ		アサリ	ハケリ		備考					
			カ	ノ													左	右		左	右		左	右			
641	トレンチ	5																4	2		1	1	ウミギク科・ナミガシロ・ボタン?幼貝				
641		5	1		1	2	2	2		1							1	80	5		183	174	オオヘビガイ・アノミ類殻表面に付着。				
641		-																6									
642	西・覆土サンプル	5																6									
642	東	5																34									
642	東・覆土	5	1															21									
642	覆土一括	-	1	1	3	29	8											29									
642		5	1	1	2	117	146											117									
642		-	3	4	3	55												3									
643	トレンチ	5	1	3	3	45	34											40									
643	覆土	5	1	1	40	22	5											40									
643		5			21	22												21									
643		-	4	2	1	1	37	60										1									
		641			1	80	105	1	63	1	1	1						84	2096	7	8	188	175				
		642	5	7	6	204	268	73	124	1	2	1	2	1	2	3	3	2194	7	2191	385	427					
		643	5	2	5	143	138	12	1	3	0							428	444	2	167	169					
		合計	10	2	12	11	427	511	1	148	2	2	2	2	3	3	1	9	7	1	4761	91	4731	7	10	740	771
		最小個体数		35		511		2	1	28	2	2	2	3	3	3	9				4852	10	771				
			最小個体数合計																			6388					

5mm 未満

遺構	遺構内位置	篩目(単位mm)	水産																				陸産													
			シボリガイ?	アワビ類	サザエ	カワザンシヨウガイ	シマハマツボ	ウミニナ類	キクスズメ	アワフネガイ	不明	タマエガイ類		マカキ幼貝?		ウロコガイ科?		トマヤガイ科		ウメノハナガイ	ウネナントマヤガイ		ヤマトシジミ	アサリ		オキナマツカセ	ハマグリ	未同定微小二枚貝類		不明二枚貝類	水産貝類遺体合計(ΣZ1)	ヒメコハクガイ	オカチヨウジガイ	陸産貝類遺体合計		
												左	右	左	右	左	右	左	右		左	右		左	右			左	右						左	右
641	トレンチ	1	1			1	1	1	25			2	1	1			18	19															52			
		3		1					25									7	8	7	6	1	1	1	1							44				
642	東覆土サンプル	1		△	○			2		○						2	1															4	1	1		
		3						2									1	1	2												8					
643	トレンチ	1				1		5		△						1	2														9	2	2			
		1						11		○		2		1		9	9													25	3	3				
	1						1																							1	1	1				
	3			○			10	1						1		2		1												2	19					
	土壌サンプル	3			△			13								1	1	1													16					
641			1		1		1	1	1	52			2	1	1		27	27	8	6	1	1	1	1							99					
642				△		○			4		○					3	2	1	2												8		1	1		
643					○		1		40	1	○	2		1	1	11	14	1	1			1									66	2	4	6		
合計			1	1	1	2	1	96	1	2	2	2	1	1	1	1	41	43	10	9	1	2	1	1	1	1	2			2	173	2	5	7		
最小個体数			1	1	2	1	2	1	96	1	2	2	1	1	1	1	43	10	9	2	2	1	1	1	1	2				173	2	5	7			

遺構	篩目	備考	
641	1mm	タマエガイ類:タマエガイ幼貝?,ウロコガイ科?:ツヤマメアゲマキ?	
	3mm	サザエ蓋:中心部分,アサリ右:稚貝	
642	1mm	オカチヨウジガイ:未成貝	
	3mm	不明:破片資料、中型二枚貝類のものが含まれる。	
643	1mm	不明:破片資料、ごく微量。	
	トレンチ	1mm	トマヤガイ科:幼貝、トマヤガイ?、タマエガイ類:タマエガイ幼貝?、オカチヨウジガイ:未成貝
	覆土	1mm	オカチヨウジガイ:未成貝
	3mm	アサリ:稚貝	
土壌サンプル	3mm	サザエ蓋:殻頂部分破片	

16表 サザエ・蓋の長径に関する記述統計量[SK641・642・643]



値単位:mm

17表 3遺構間のサザエ・蓋の長径に関する平均値の差の検定結果[SK641・642・643]

すべて

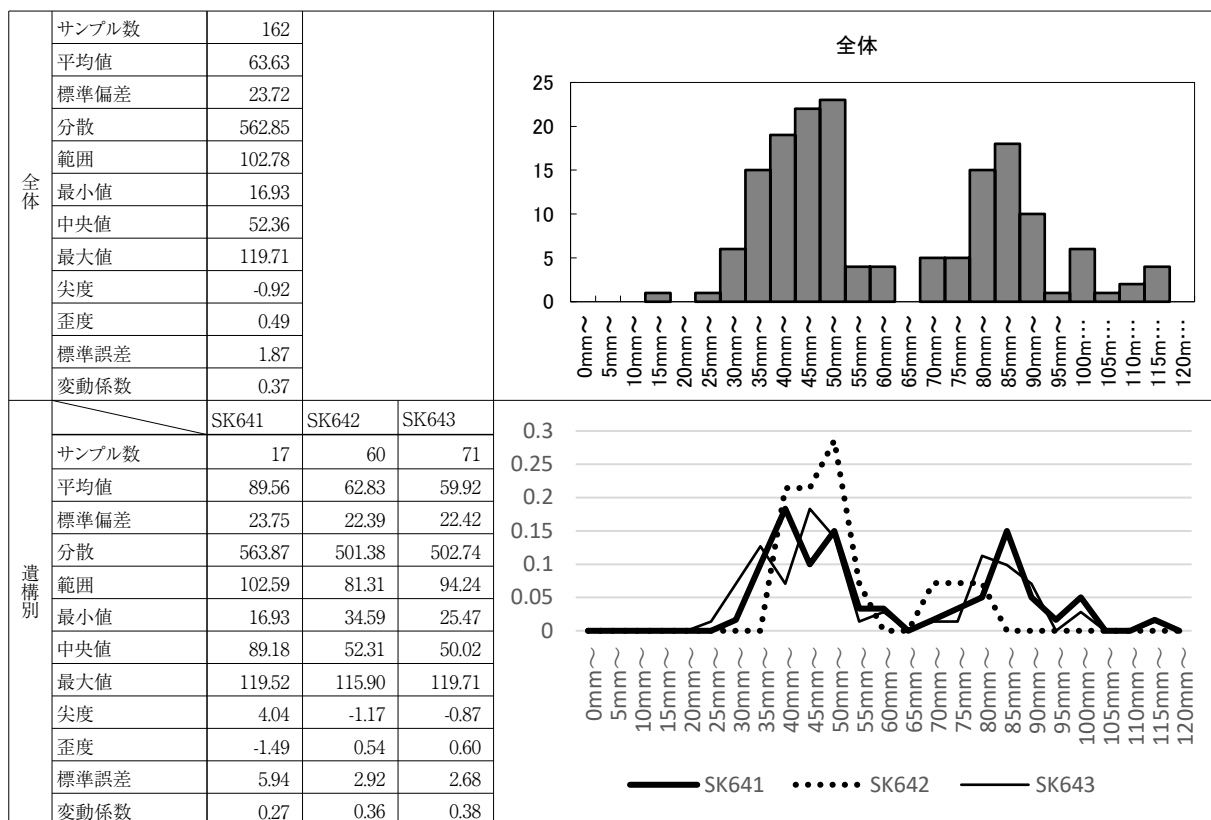
遺構	数	平均値	SK641	SK642	SK643
SK641	49	41.95		**	**
SK642	100	28.50	**		n.s.
SK643	96	29.51	**	n.s.	

長径30mm以上のみ

遺構	数	平均値	SK641	SK642	SK643
SK641	47	42.66		**	**
SK642	43	37.79	**		n.s.
SK643	45	38.93	**	n.s.	

平均値単位:mm

18表 サザエ(殻)・殻高に関する記述統計量[SK641・642・643]



値単位:mm

19表 3遺構間のサザエの殻高に関する平均値の差の検定結果[SK641・642・643]

すべて

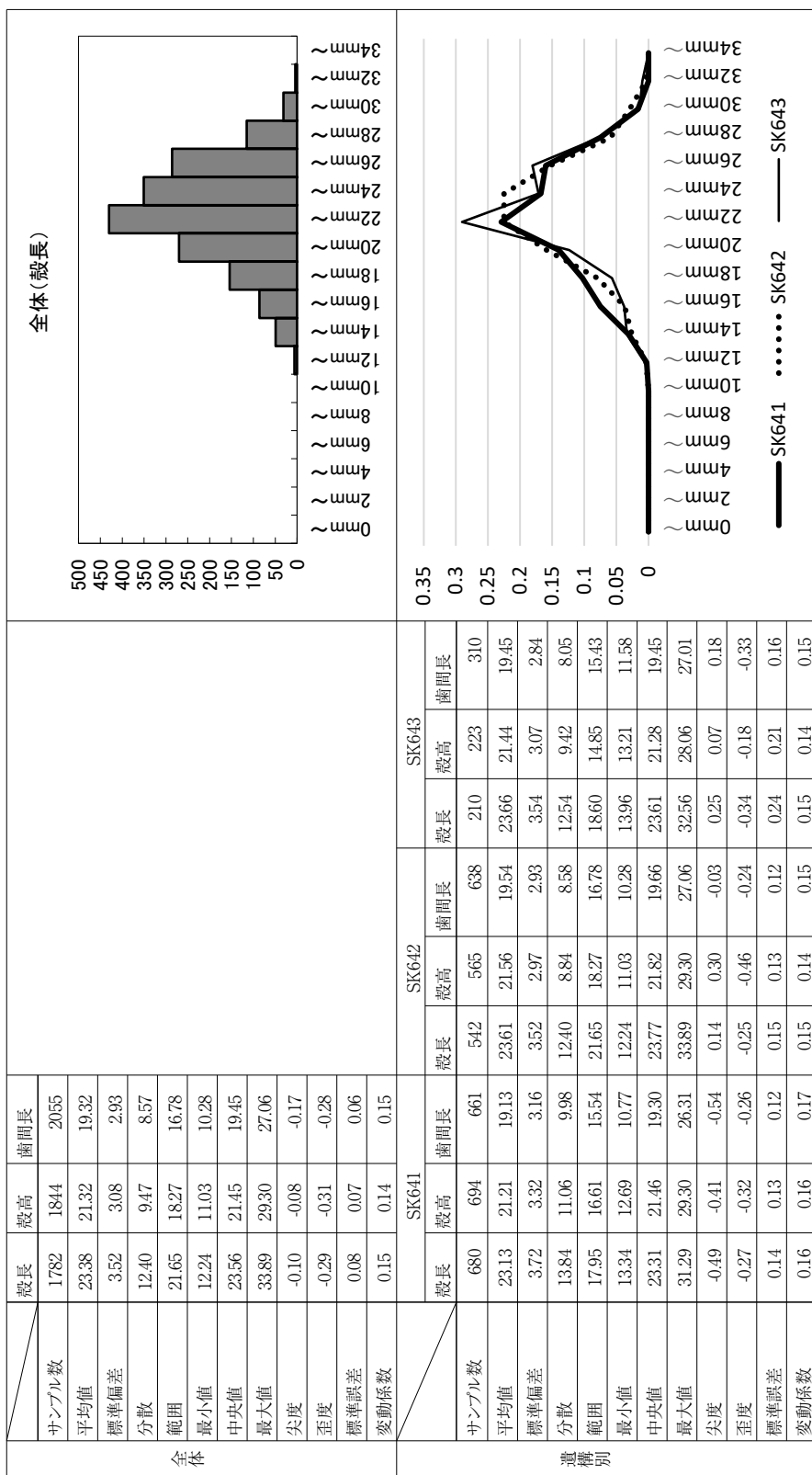
遺構	数	平均値	SK641	SK642	SK643
SK641	17	89.56		**	**
SK642	60	62.83	**		n.s.
SK643	71	59.92	**	n.s.	

殻高65mm以上のみ

遺構	数	平均値	SK641	SK642	SK643
SK641	16	94.10		n.s.	n.s.
SK642	23	89.47	n.s.		n.s.
SK643	25	88.16	n.s.	n.s.	

平均値単位:mm

20表 ヤマトジミのサイズに関する記述統計量 [SK641・642・643]

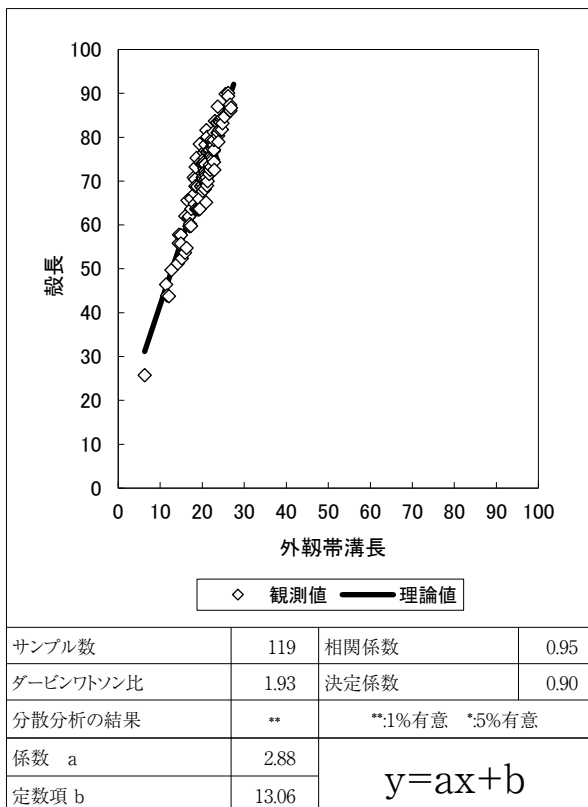


21表 3遺構間のヤマトジミの殻長に関する平均値の差の検定結果 [SK641・642・643]

遺構	平均値	SK641	SK642	SK643
SK641	23.13		*	n.s.
SK642	23.61	*		n.s.
SK643	23.66	n.s.	n.s.	

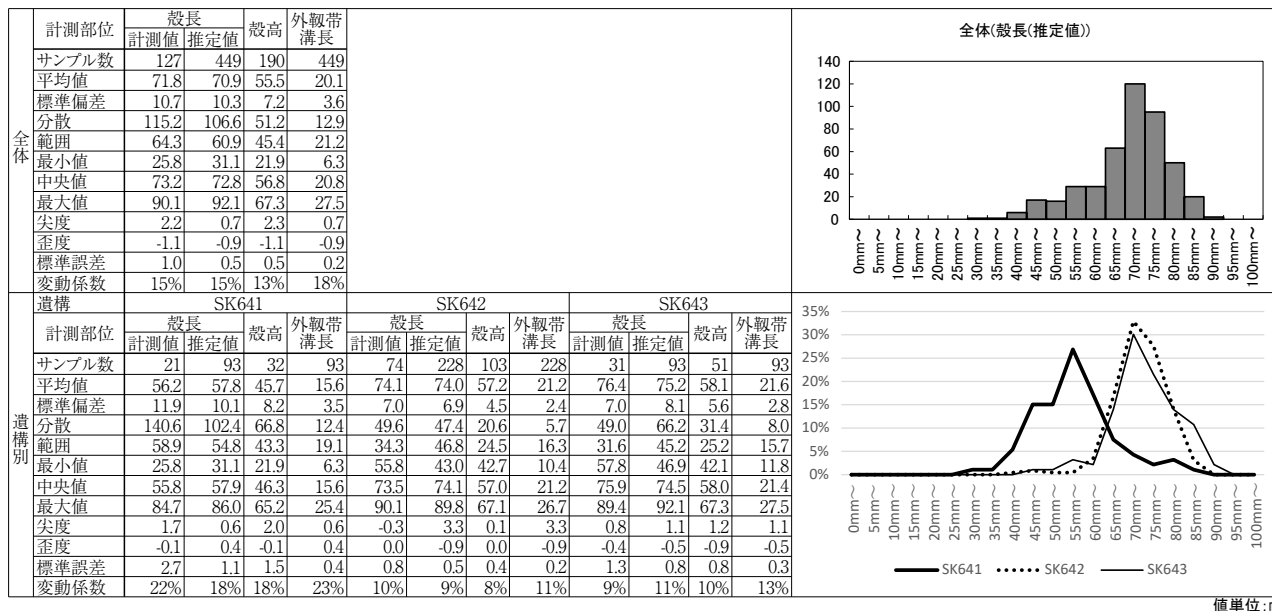
平均値単位:mm

22表 ハマグリの殻長と外靱帯溝長に関する回帰分析の結果[SK641・642・643]



SK600番台遺構出土ハマグリ の殻長と外靱帯溝長に関する回帰・相関分析の結果

23表 ハマグリのサイズに関する記述統計量[SK641・642・643]



24表 3遺構間のハマグリ の殻長(推定値)に関する平均値の差の検定結果[SK641・642・643]

遺構	数	平均値	SK641	SK642	SK643
SK641	93	57.84		**	**
SK642	228	74.02	**		n.s.
SK643	93	75.22	**	n.s.	

平均値単位:mm

25表 その他の貝種のサイズに関する計測値一覧 [SK641・642・643]

アワビ類

遺構	節目	種	殻長	殻径
SK642	—	メガイ	156.20	
			115.82	127.10
		マダカ	154.07	122.76
			148.07	119.09
			145.36	
SK643	—	メガイ		145.08
			163.46	143.12

マガキ

遺構	節目	殻高	殻長	蝶番高
SK642	5mm 右	37.54	25.28	2.99

アカガイ

遺構	節目	殻長	殻高	絞歯長
SK641	5mm 右	87.09	75.02	56.08
SK642	西 右	92.06	75.97	62.10

バイ

遺構	節目	殻高	
SK642	5mm	62.96	
		61.60	
		60.58	
		50.67	
		67.04	
	—	59.91	
		57.53	
		53.44	
		60.64	
	東 5mm	59.26	
	東・覆土 5mm	57.46	
	SK643	トレンチ 5mm	59.82

サルボウガイ

遺構	節目	殻長	殻高	絞歯長
SK641	5mm 右	41.31	36.16	25.19
		30.73	25.21	19.40

シオフキガイ

遺構	節目	殻長	殻高	歯間長	
SK641	5mm	左	38.09	33.82	26.17
			38.28	33.37	26.16
		右	46.48	40.58	33.44

アカニシ

遺構	節目	殻高	殻径
SK642	—	92.64	76.79

アサリ

遺構	節目	殻長	殻高	備考
SK641	5mm 左	46.68	33.51	
		45.43	34.95	
	— 右	43.92	34.62	
	3mm 右	4.97	3.31	稚貝
	トレンチ 5mm 右		27.86	
SK643	覆土 5mm 右	46.63	34.1	
		3mm 右	6.03	4.01

計測値単位:mm

分類群	部位	左右	SK641						SK642						SK643						合計
			トレンチ			トレンチ			東		東・覆土		西覆土		覆土			トレンチ			
			粗	中	細	粗	中	細	粗	中	粗	中	粗	中	粗	中	細	粗	中	細	
イボダイ	第1椎骨																				1
	腹椎																				5
	尾椎																				13
ヒラメ	主上顎骨	左	1																		1
		右	1																		1
	角骨	左	2	1																	3
		右	3																		4
	方骨	左	1	2																	6
		右	1																		1
	舌顎骨	左																			5
腹椎		5																		5	
カレイ科	尾椎		49																		50
	主上顎骨	左	1	5																	13
		右	1	5																	9
	前上顎骨	左	3	4																	10
		右	2	3																	12
	歯骨	左	3	2																	11
		右	2																		5
	主鰓蓋骨	左																			1
		右																			1
	前鰓蓋骨	左	1																		2
		右	5	1																	8
	角骨	左	6	1																	13
		右	3	3																	9
	方骨	左	6	3																	13
		右	3																		1
	舌顎骨	左	1																		5
		右	3																		4
	第1血管間棘		1	4																	12
	第1椎骨		35	5	2	4															122
	腹椎		89	75	5	2	10														423
	尾椎																				2
	フグ科	腹椎																			2
	総計																			4224	

27 表 魚類遺体同定破片数組成 [SK641・642・643]

	SK641		SK642		SK643		全体	
	破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%
ハモ属	588	21.6%	27	2.3%	20	6.0%	635	15.0%
ニシン科	14	0.5%	3	0.3%	1	0.3%	18	0.4%
コイ科	6	0.2%	2	0.2%	3	0.9%	11	0.3%
アユ	13	0.5%	4	0.3%	2	0.6%	19	0.4%
サケ属	0	0.0%	0	0.0%	2	0.6%	2	0.0%
タラ科	304	11.2%	55	4.7%	29	8.7%	388	9.2%
サヨリ科	1	0.0%	0	0.0%	1	0.3%	2	0.0%
フサカサゴ科	0	0.0%	3	0.3%	0	0.0%	3	0.1%
ホウボウ科	18	0.7%	4	0.3%	18	5.4%	40	0.9%
コチ科	4	0.1%	0	0.0%	1	0.3%	5	0.1%
スズキ属	55	2.0%	49	4.2%	4	1.2%	108	2.6%
キス属	209	7.7%	46	3.9%	11	3.3%	266	6.3%
ブリ属	29	1.1%	1	0.1%	0	0.0%	30	0.7%
アジ亜科	580	21.3%	441	37.7%	90	27.1%	1111	26.3%
タイ科	385	14.1%	154	13.2%	71	21.4%	610	14.4%
ボラ科	23	0.8%	7	0.6%	2	0.6%	32	0.8%
カマス属	17	0.6%	13	1.1%	4	1.2%	34	0.8%
サバ属	102	3.7%	27	2.3%	4	1.2%	133	3.1%
サワラ	9	0.3%	0	0.0%	1	0.3%	10	0.2%
イボダイ	1	0.0%	15	1.3%	3	0.9%	19	0.4%
ヒラメ	65	2.4%	6	0.5%	0	0.0%	71	1.7%
カレイ科	298	11.0%	311	26.6%	65	19.6%	674	16.0%
フグ科	0	0.0%	2	0.2%	0	0.0%	2	0.0%
合計	2721		1170		332		4223	

28 表 魚類遺体最小個体数組成 [SK641・642・643]

	SK641		SK642		SK643		全体	
	MNI	%	MNI	%	MNI	%	MNI	%
ハモ属	5	6.0%	2	4.2%	1	3.3%	6	4.8%
ニシン科	1	1.2%	1	2.1%	1	3.3%	1	0.8%
コイ科	1	1.2%	1	2.1%	1	3.3%	1	0.8%
アユ	1	1.2%	1	2.1%	1	3.3%	1	0.8%
サケ属	0	0.0%	0	0.0%	1	3.3%	1	0.8%
タラ科	5	6.0%	2	4.2%	2	6.7%	7	5.6%
サヨリ科	1	1.2%	0	0.0%	1	3.3%	1	0.8%
フサカサゴ科	0	0.0%	2	4.2%	0	0.0%	2	1.6%
ホウボウ科	2	2.4%	1	2.1%	1	3.3%	2	1.6%
コチ科	1	1.2%	0	0.0%	1	3.3%	1	0.8%
スズキ属	3	3.6%	2	4.2%	1	3.3%	5	4.0%
キス属	11	13.1%	1	2.1%	1	3.3%	12	9.7%
ブリ属	1	1.2%	1	2.1%	0	0.0%	1	0.8%
アジ亜科	17	20.2%	11	22.9%	6	20.0%	28	22.6%
タイ科	10	11.9%	7	14.6%	4	13.3%	20	16.1%
ボラ科	1	1.2%	1	2.1%	1	3.3%	1	0.8%
カマス属	1	1.2%	1	2.1%	1	3.3%	1	0.8%
サバ属	9	10.7%	3	6.3%	2	6.7%	11	8.9%
サワラ	1	1.2%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.8%
イボダイ	1	1.2%	1	2.1%	1	3.3%	1	0.8%
ヒラメ	3	3.6%	3	6.3%	0	0.0%	6	4.8%
カレイ科	9	10.7%	6	12.5%	3	10.0%	13	10.5%
フグ科	0	0.0%	1	2.1%	0	0.0%	1	0.8%
合計	84		48		30		124	

30 表 哺乳類遺体一覧 [SK641・642・643]

遺構	節目	分類群	部位	左右	数	備考
SK642	5mm	ヒト	上顎第3大臼歯	左	1	
SK642	3mm	ネズミ類	上腕骨	左	1	遠位部分
SK642東	3mm	ネズミ類	上顎切歯	右	1	
SK642	1mm	ネズミ類	下顎第臼歯	右	1	
SK643	1mm	ネズミ類	下顎切歯	右	1	

29表 鳥類遺体一覧[SK641・642・643]

遺構名	フルイ目	種名	部位	左右	残存部	集計
SK641		ガン族	大腿骨	左	d	1
		マガモ属	上腕骨	右	p	1
		カモ亜科	上腕骨	右	d	1
			尺骨	右	w	1
			橈骨	右	w	1
	脛足根骨		左	w	1	
	5 ウズラ	上腕骨	左	d	1	
		尺骨	左	p-s	1	
		橈骨	右	w	1	
			左	w	1	
		手根中手骨	左	w	1	
		足根中足骨	右	w	1	
			左	w	1	
		ニワトリ	足根中足骨	左	w	1
		マガモ属	上腕骨	右	p-s	1
			左	p-s	1	
	カモ亜科	上腕骨	左	p	1	
				s	2	
		尺骨	右	p	1	
		橈腕骨	右	w	1	
		手根中手骨	右	d	1	
				w	1	
				p	1	
		小翼節骨	右	w	1	
		大指基節骨	右	w	1	
		大指末節骨	右	w	1	
		大腿骨	右	p	3	
			左	d	2	
				s	2	
				s	2	
		脛足根骨	右	d	5	
				s	1	
			左	d	3	
			p	2		
		p-s	1			
		sfr	1			
	腓骨	左	p	2		
	足根中足骨	右	w	2		
		左	w	5		
	チドリ目	上腕骨	右	p-s	1	
		左	p	2		
		脛足根骨	右	d	1	
		左	d	2		
	足根中足骨	右	w	2		
		p	1			
	種不明鳥類	趾骨		36		
	同定不能鳥類	肩甲骨		sfr	1	
		四肢骨		sfr	26	
	3 ウズラ	上腕骨	右	d	1	
		手根中手骨	右	w	1	
		p	1			
チドリ目	脛足根骨	右	s-d	1		
		左	d	1		
	足根中足骨	左	d	1		
	w	2				
種不明鳥類	趾骨		45			
同定不能鳥類	四肢骨		sfr	2		
1 種不明鳥類	趾骨			13		
	四肢骨		sfr	5		

遺構名	フルイ目	種名	部位	左右	残存部	集計
SK642	5 ウズラ		尺骨	左	d	1
				w	1	
			橈骨	左	p	1
			手根中手骨	左	w	1
			足根中足骨	右	s-d	1
			左	w	2	
		ガン族	尺骨	右	s-d	1
		カモ亜科	上腕骨	左	d	1
			手根中手骨	右	w	1
			大指基節骨	右	w	1
	大指末節骨		右	p	1	
	大腿骨		右	w	1	
			左	d	1	
			s-d	1		
	脛足根骨		右	w	1	
			p-s	1		
			sfr	1		
		左	w	1		
	腓骨	右	p	1		
	チドリ目	肩甲骨	右	p	1	
		上腕骨	右	p-s	1	
			左	p	3	
				p-s	1	
			s	1		
		脛足根骨	右	d	2	
			左	d	3	
		足根中足骨	右	d	1	
			左	p-s	1	
			d	1		
		w	1			
		p-s	2			
	種不明鳥類	趾骨		5		
	同定不能鳥類	大腿骨	左	sfr	1	
		四肢骨		sfr	5	
	3 チドリ目		鳥口骨	右	d	1
			脛足根骨	右	d	3
				左	d	1
			足根中足骨	右	d	1
				左	d	1
		関節骨	左		1	
		第一頸椎			1	
		種不明鳥類	椎骨		15	
			趾骨		43	
		同定不能鳥類	頭骨		sfr	1
		寛骨		sfr	1	
		大腿骨	右	s	1	
		足根中足骨	左	pfr	1	
		四肢骨		sfr	21	
	1 ウズラ	カモ亜科	橈骨	右	p	1
			小指末節骨	右	w	1
種不明鳥類		趾骨		36		
同定不能鳥類		四肢骨		sfr	7	
5 カモ亜科		橈骨	右	d	1	
		手根中手骨	左	p-s	1	
		第一頸椎			1	
		方骨	左		1	
		チドリ目	足根中足骨	右	p	1
	同定不能鳥類	頭骨		fr	2	
		上腕骨	左	sfr	1	
	3 ウズラ	足根中足骨	右	d	1	
		種不明鳥類	趾骨		4	
		同定不能鳥類	四肢骨		sfr	9
1 種不明鳥類	趾骨			14		
	四肢骨		sfr	9		
総計						424

w: 完存、p: 近位端、d: 遠位端(鳥口骨では肩端)、s: 骨体部、fr: 破片

31表 貝類遺体組成表 [ピックアップ法採集資料]

遺構	アワビ類			サザエ		キクスヌメ	アカシ	バイ	タイラギ	アマガイ類		マガキ	シオフキ	ミルキイ	ヤマトシジミ		ハナダリ		オキシジミ	オオノガイ	合計	陸貝マイマイ類
	ガイ	カ	不明	殻	蓋					左	右				不明	左	右	左				
SUI107			○	3	4					1	10	7			15	10	12	12			44	1
SUI107・33層																	1	2			2	
SUI107・34層																	1				1	
SUI107裏込め																2					2	
SUI107小部屋					1							1						1			3	
SUI107小部屋底部	1																				1	
SK110・5層			◎							○							○				3	
SK122				○	1						2										3	
SK156					1					○											5	
SU286				1		6							1								8	1
SK386	1										1										2	
SK398				72	9	6															78	1
SK425				○							128	151	1		1		86	68	1	○	243	
SD428溝内																					2	
SD449pit3					1																2	
西区A面			○		1						7	3		1	1						11	
西区								1			23	29	1			19	15	1			52	
西区								1	○							3	3				12	
西区		3		2					○		2	1			2		1				8	1
西区	2														2	2	1	1			6	
西区A面			○								1	2			2	2	1	1			6	
SK632・634・635				2			○														3	
SK640				12	1			1										2			15	
640				1	1										1	3					4	
A-B間			○	2						○											4	
A-B間(西側含む)	7	7	6	1	1					5	6										27	
A-B間西側								1			6	4					2	3			10	
表土	2	2								1								1			6	
遺構外			◎							○											2	
遺構外		1			2					1											4	
遺構外	2	1		1						1					1		4	4			11	
その他	1	1		2	2				○		2				1	1	1	1			12	
合計	14	12	11	6	110	6	8	3	4	21	209	3	1	1	27	143	24.4%	2	2	0.3%	1	585
比率	2.4%	2.1%	1.9%	1.0%	18.8%	1.0%	1.4%	0.5%	0.7%	3.6%	35.7%	0.5%	0.2%	0.2%	4.6%	24.4%		0.3%	0.2%			

(2)備考

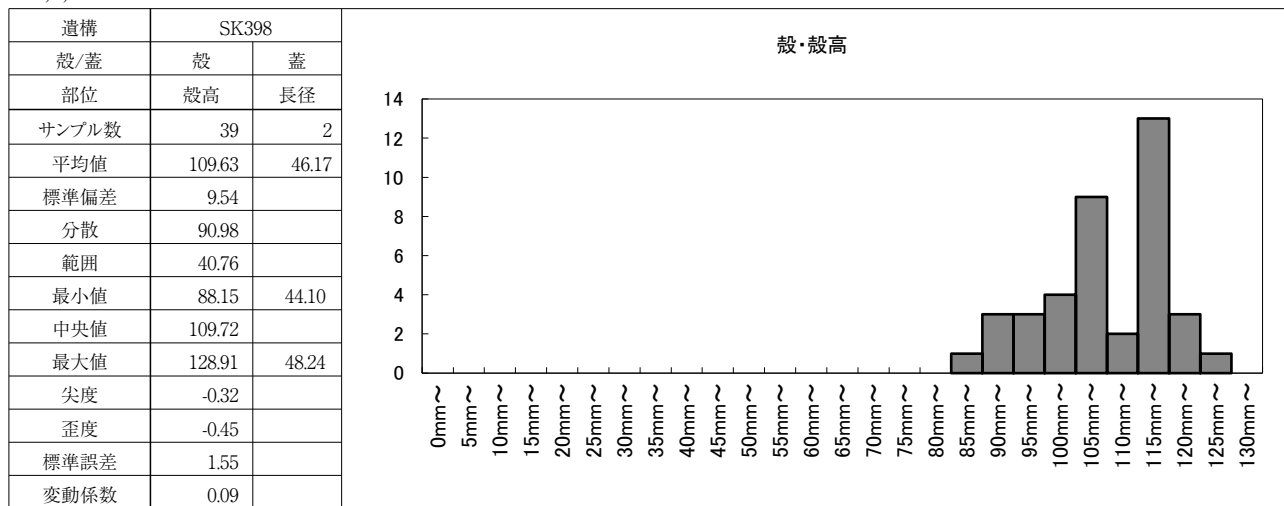
	遺構	備考
	SU107	サザエ:有棘, アカガイ類不明(右):サトウガイ?,ハマグリ:右1小型、他大型
	SU107・33層	ハマグリ:小型
	SU107裏込め	ハマグリ:大型
	SK110・5層	ハマグリ:大型
	SK156	ハマグリ:中小型
西区	SK398	サザエ:有棘
西区A面	499号	ハマグリ:中型
西区	SK622	ハマグリ:大型
西区	SK622付近	ハマグリ:大型
西区A面	SK624	ハマグリ:大型
西区	SK640	ハマグリ:大型
	A-B間(西側含む)	サザエ:有棘
東区	表土	ハマグリ:小型
	遺構外	サザエ:有棘,ハマグリ:大型、右殻1点中型

(3)「その他」の遺構の内訳

	遺構	分類群	数	備考
	SX103	クロアワビ	一	1
	SK121	ハマグリ	左	1 大型
	SK169	サザエ	蓋	1
	SP174	ハマグリ	右	1 中型
A-B間	SK179	ヤマトシジミ	左	1
	SK210	サザエ	蓋	1
	SK381	マガキ	左	2 1点アサリへの付着痕あり
A面	SK459	サザエ	殻	1 有棘
	SK478西側	サザエ	殻	1
	表土	メガイアワビ	一	1
	ガラス瓶投棄(ワインボトルと一緒の箱)	タイラギ	一	○

32表 サザエのサイズに関する記述統計量及び計測値一覧[ピックアップ法採集資料]

サザエ



	殻	蓋
遺構	殻高	長径
SU107	111.52	49.22
		49.23
		51.41
		52.97
		53.67
SK122		46.13
SK425		46.63
SK459	100.01	
No.499		45.11
遺構外	109.46	

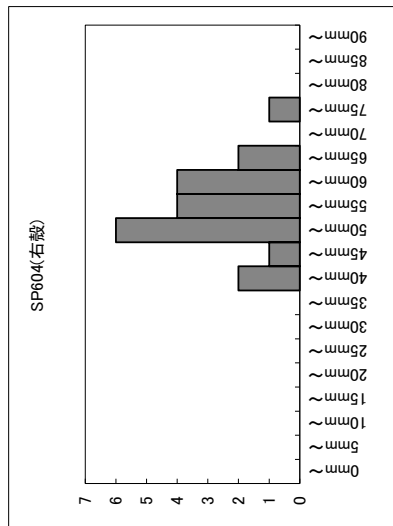
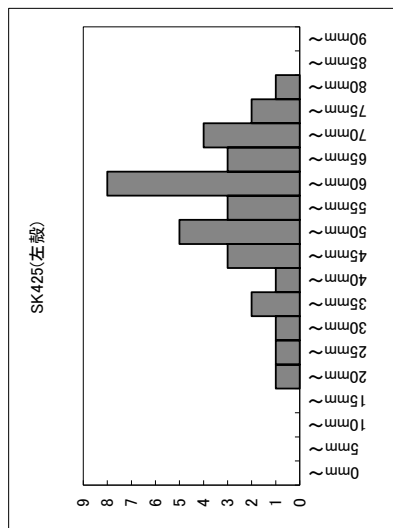
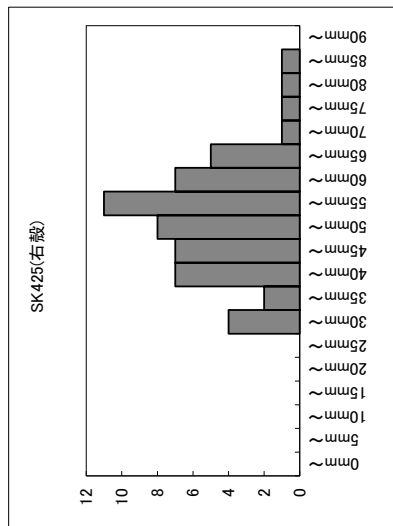
33表 マガキのサイズに関する記述統計量及び計測値一覧[ピックアップ法採集資料]

遺構	A-B間西側						SK425						SP604					
	右			左			右			左			右			左		
部位	殻高	殻長	殻番号	殻高	殻長	殻番号	殻高	殻長	殻番号	殻高	殻長	殻番号	殻高	殻長	殻番号	殻高	殻長	殻番号
サンプル数	1	1	4	4	4	6	55	69	128	35	24	109	20	21	26			
平均値	60.80	34.27	6.92	61.39	47.98	15.17	53.95	35.72	7.33	57.23	34.67	15.87	56.61	37.10	8.11			
標準偏差			1.07	11.62	9.97	3.77	12.05	8.27	2.37	14.33	10.41	4.38	8.08	5.81	2.27			
分散			1.14	135.13	99.31	14.20	145.13	68.34	5.63	205.31	108.47	19.20	65.27	33.78	5.16			
範囲			2.77	31.58	26.32	10.77	55.75	44.14	11.94	60.17	37.33	21.47	36.13	19.41	11.06			
最小値			5.63	42.37	35.23	12.55	30.82	16.41	2.54	24.82	14.10	4.58	40.69	25.87	3.85			
中央値			6.82	64.63	47.57	13.52	54.60	35.83	7.07	60.39	33.93	16.28	55.84	35.85	7.84			
最大値			8.40	73.95	61.55	23.32	86.57	60.55	14.48	84.99	51.43	26.05	76.82	45.28	14.91			
尖度			-2.21	2.52	-1.78	4.61	0.20	0.23	0.50	-0.10	-0.98	-0.27	0.87	-0.85	1.97			
歪度			0.33	-1.33	0.16	2.12	0.23	-0.03	0.60	-0.49	-0.11	-0.05	0.37	-0.12	0.69			
標準誤差			0.62	6.71	5.75	1.69	1.64	1.00	0.21	2.46	2.17	0.42	1.85	1.30	0.45			
変動係数			0.18	0.22	0.24	0.27	0.23	0.23	0.32	0.25	0.31	0.28	0.15	0.16	0.29			

遺構	SU107						SK499					
	右			左			右			左		
部位	殻高	殻長	殻番号	殻高	殻長	殻番号	殻高	殻長	殻番号	殻高	殻長	殻番号
サンプル数	5	4	7	7	6	9	1	1	1	4	4	3
平均値	65.86	39.79	9.00	67.73	37.77	18.74	89.92	39.22	8.65	80.05	47.53	13.70
標準偏差	13.91	2.22	2.71	9.01	2.54	2.83				13.39	1.93	1.34
分散	193.50	4.94	7.34	81.15	6.45	7.99				179.19	3.73	1.79
範囲	37.97	5.55	9.15	27.41	7.34	10.14				30.67	5.39	3.25
最小値	52.64	36.78	4.31	50.33	33.68	16.25				65.53	45.07	11.96
中央値	59.46	40.03	8.66	73.04	37.67	18.11				79.23	47.30	13.93
最大値	90.61	42.33	13.46	77.74	41.02	26.39				96.20	50.46	15.21
尖度	0.99	-3.22	0.45	0.22	-0.96	6.95				-5.14	1.38	
歪度	1.28	-0.31	-0.04	-1.00	-0.27	2.51				0.10	0.60	
標準誤差	6.96	1.28	1.11	3.68	1.14	1.00				7.73	1.11	0.95
変動係数	0.24	0.06	0.33	0.14	0.07	0.16				0.19	0.05	0.12

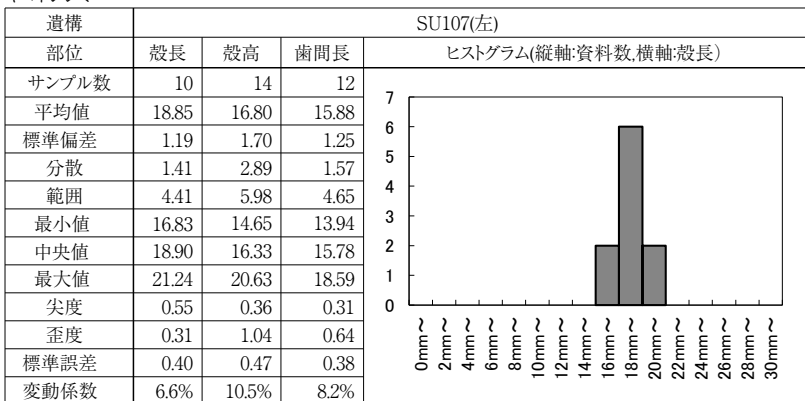
値単位:mm

・殻高に関するヒストグラム



34表 ヤマトシジミのサイズに関する記述統計量及び計測値一覧[ピックアップ法採集資料]

ヤマトシジミ

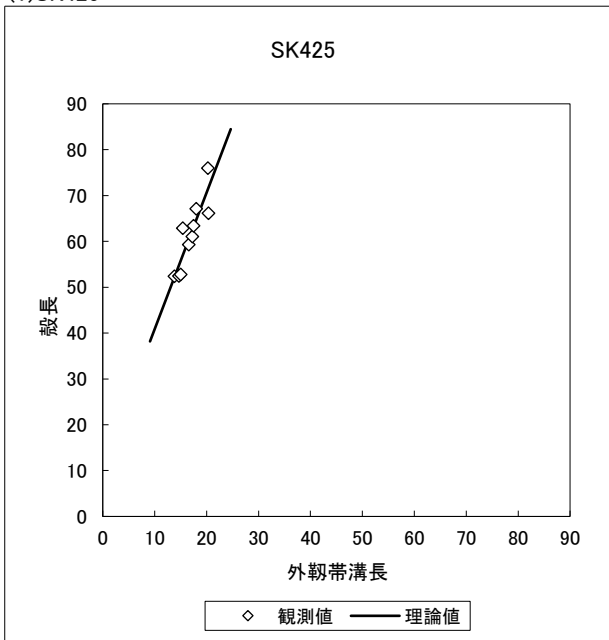


遺構	左/右	殻長	殻高	歯間長
SK425	左	33.8	28.68	27.79
SK622付近	左	29.23	27.34	23.95
		27.25	25.01	22.85
SK624	左	26.16	24.15	21.37
		26.54	24.2	21.5
		26.74	24.07	20.81
遺構外	右	29.04	25.86	22.61
		31.29	27.51	25.11

値単位:mm

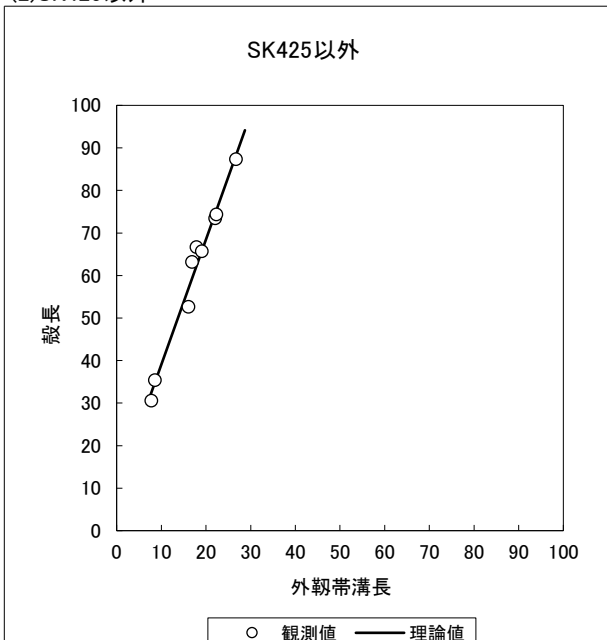
35表 ハマグリりの殻長と外靱帯溝長に関する回帰分析の結果 [ピックアップ法採集資料]

(1)SK425



サンプル数	10	相関係数	0.88
ダービンワトソン比	2.34	決定係数	0.78
分散分析の結果	**	**:1%有意 *5%有意	
係数 a	2.98	y=ax+b	
定数項 b	11.09		

(2)SK425以外



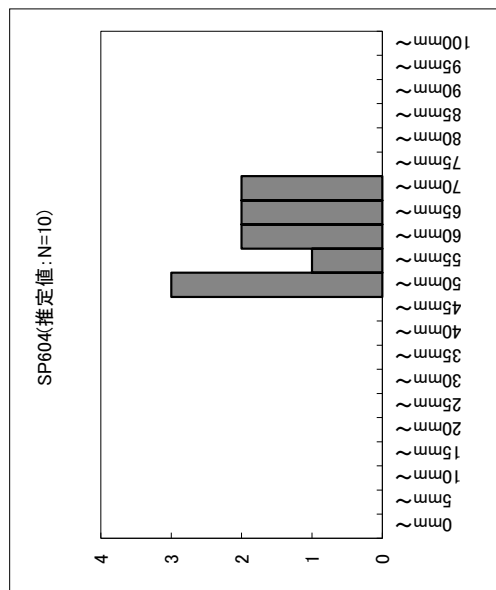
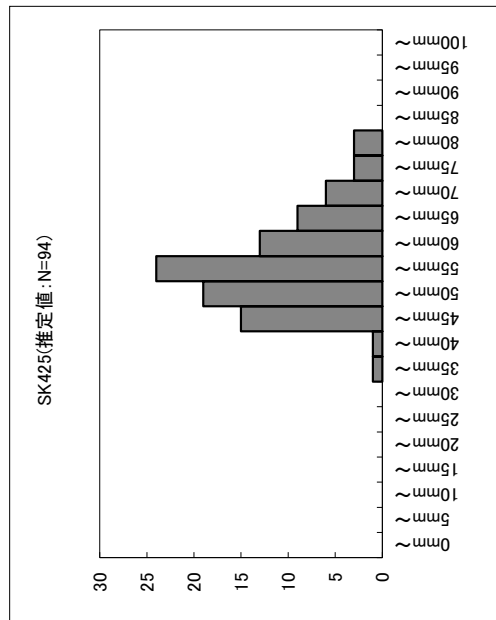
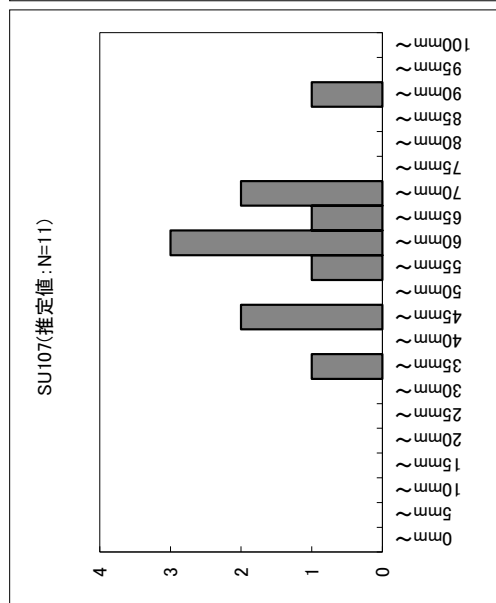
サンプル数	9	相関係数	0.99
ダービンワトソン比	2.06	決定係数	0.98
分散分析の結果	**	**:1%有意 *5%有意	
係数 a	2.94	y=ax+b	
定数項 b	9.62		

36表 ハマグリサイズのに関する記述統計量及び計測値一覧 [ピックアップ法採集資料]

遺構	SU107(左殻)			SK425(左殻)			SP604(左殻)			遺構	左右	殻長		殻高	外殻帯溝長	
	計測値	推定値	殻長	計測値	推定値	殻長	計測値	推定値	計測値			推定値				
サンプル数	11	11	11	94	94	94	1	10	10	3	10					
平均値	65.68	61.76	43.23	58.31	46.24	15.86	63.18	61.51	52.85	17.63			49.85	13.67		
標準偏差		14.84	5.78	9.08	6.91	3.05	7.89	7.09	2.68				32.75	7.86		
分散	220.27	48.73	33.45	82.49	47.81	9.31	62.22	50.23	7.18				39.05	10		
範囲	57.74	23.60	13.94	46.29	27.57	15.55	23.04	17.36	7.83				34.81	8.56		
最小値	36.40	52.36	38.18	34.74	9.10	11.71	50.53	44.14	13.90				80.54	24.1		
中央値	63.65	61.03	41.77	55.90	45.18	15.05	62.59	52.91	18.00				74.54	22.06		
最大値	94.14	75.96	50.93	84.47	62.31	24.65	73.57	61.50	21.73				66.62	19.37		
尖度	1.03	0.24	0.31	0.31	0.28	0.31	-1.30	-1.30	-1.30					59.19		
歪度	0.36	0.62	0.74	0.70	0.74	0.70	-0.11	-0.11	-0.11				61.21	17.53		
標準誤差	4.69	2.21	1.51	0.94	1.51	0.32	2.63	5.01	0.89				52.67	16.07		
変動係数	25.2%	12.0%	15.3%	15.7%	15.3%	19.3%	13.5%	16.4%	16.0%				67.89	53.76		
													87.37	67.59		
														88.26	26.72	

値単位:mm

・殻長(推定値)に関するヒストグラム



37表 その他の貝種のサイズに関する計測値一覧 [ピックアップ法採集資料]

アワビ類

遺構	種	殻長	殻径
A-B間 (西側含む)	クロ	101.93	72.64
		129.88	93.67
		148.85	110.52
			53.96
	マダカ	183.50	147.81
		183.88	154.01
	メカイ	145.33	117.45
		154.36	128.38
		157.51	129.91
		161.28	134.12
		161.91	133.70
		168.53	132.65
SU107	メカイ	158.48	135.02
SK386	メカイ	156.10	135.23

※殻長=長径,殻径=短径

バイ

遺構	殻高
SK622	62.50
SK640	55.86

アカニシ

遺構	殻高	殻径
A-B間西側	84.10	71.42
SU286	99.15	

アカガイ

遺構		殻長	殻高	絞歯長
SU107	左	104.21	78.12	69.03
	右		78.41	62.70
SK122	左	97.99		70.13
	右		83.1	67.52
SK425	右	91.04	71.2	58.80
		104.02		68.41
		106.18	89.51	72.50
		106.43	86.55	72.16
				70.24
SK622	右	86.03		57.84
SK624	左	94.57		64.67

サルボウガイ

遺構		殻長	殻高	絞歯長
SK425	左	44.89		28.31
SD428構内	左	47.01	37.9	29.88
SP604	左		38.33	

シオフキガイ

遺構		殻長	殻高	歯間長
SU286	右	41.28	36.23	29.09
SP604	右	46.63	39.93	34.71

ミルクイ

遺構		殻長
SK499	右	124.31

値単位:mm

38表 魚類遺体一覧 [ピックアップ法採集資料]

遺構	綱	綱未満	部位	左右	数	備考
SX103	硬骨魚	マダイ	前頭骨		1	上後頭骨と同一個体。
SX103	硬骨魚	マダイ	上後頭骨		1	前頭骨と同一個体。
SU107	硬骨魚	ボラ科	舌顎骨	左	1	
SU107	硬骨魚	ヒラメ	腹椎		1	
SU107	硬骨魚	マダイ	前頭骨		1	上後頭骨と同一個体。
SU107	硬骨魚	マダイ	上後頭骨		1	前頭骨と同一個体。
SU107	硬骨魚	マグロ属	尾椎		1	炭化している。
SU107	硬骨魚	同定対象外	—		2	鱗棘。
SU107-33層	硬骨魚	同定対象外	—		2	上後頭骨部分。
SK156	硬骨魚	ホウボウ科	頭骨		1	
SK156	硬骨魚	ヒラメ	腹椎		1	
SP174	硬骨魚	カツオ	椎骨		1	
SP174	硬骨魚	タイ型	腹椎		1	CM有り。
SP174	硬骨魚	タイ型	尾椎		1	
SP174	硬骨魚	タイ科	硬状鱗棘		1	
SE225	硬骨魚	同定不可	椎骨		2	破片資料。
SU286	硬骨魚	マグロ属	尾椎		5	内1点別個体
SU286	硬骨魚	スズキ属	主上顎骨	左	1	
SU286	硬骨魚	スズキ属	歯骨	右	1	
SU286	硬骨魚	スズキ属	角骨	左	1	右と同サイズ。
SU286	硬骨魚	スズキ属	角骨	右	1	左と同サイズ。
SU286	硬骨魚	ヒラメ	主上顎骨	左	1	
SU286	硬骨魚	マダイ	前頭骨		2	
SU286	硬骨魚	マダイ亜科	主上顎骨	右	1	
SU286	硬骨魚	マダイ亜科	前上顎骨	左	1	
SU286	硬骨魚	タイ型	腹椎		2	内1点にCM有り。
SU286	硬骨魚	タイ型	尾椎		1	CM有り。
SU286	硬骨魚	同定対象外	—		4	マダイ以外の頭骨部分、肋骨、鱗棘。
SK386	硬骨魚	ホウボウ科	頭骨		1	
SK386	硬骨魚	スズキ	主鰓蓋骨	左	1	
SK386	硬骨魚	スズキ属	前鰓蓋骨	右	1	
SK386	硬骨魚	フサカサゴ科	角骨	右	1	
SK386	硬骨魚	ヒラメ	歯骨	左	1	後端にCM有り。
SK386	硬骨魚	マダイ	上後頭骨		1	
SK386	硬骨魚	タイ科	前鰓蓋骨	右	1	
SK386	硬骨魚	未同定	腹椎		1	
SK386	硬骨魚	未同定	椎骨		1	
SK386	硬骨魚	同定対象外	—		2	肋骨など
SK622	硬骨魚	コチ科	前鰓蓋骨	左	1	右と同サイズ。
SK622	硬骨魚	コチ科	前鰓蓋骨	右	1	左と同サイズ。
SK622	硬骨魚	コチ科	角骨	左	1	
SK622	硬骨魚	タイ科	口蓋骨	右	1	後端に切断面有り。
SK622	硬骨魚	タイ科	角骨	右	1	
SK622	硬骨魚	タイ科	前鰓蓋骨	右	1	上端部と中位に切断面有り。
SK622	硬骨魚	同定対象外	—		31	頭骨、鰓蓋骨、擬鎖骨、肋骨など。 コチ科のものが多くと推測される。
SK622付近	硬骨魚	マダイ	前頭骨		3	内1点が矢状方向に切断されて左側のみ残存。1点は、ほぼ完存。 1点は残存状況が不良の為、詳細は不明。
SK622付近	硬骨魚	マダイ	上後頭骨		2	1点大型、1点小型。 なお、大型の方は、矢状方向に右側面が切断され、右側面欠損。 さらに、サイズから前頭骨3点共に本資料とは明らかに別個体。
SK622付近	硬骨魚	マダイ亜科	主上顎骨	左	1	小型。
SK622付近	硬骨魚	マダイ亜科	歯骨	左	2	
SK622付近	硬骨魚	マダイ亜科	歯骨	右	2	
SK622付近	硬骨魚	タイ科	角骨	左	2	
SK622付近	硬骨魚	タイ科	前鰓蓋骨	左	1	中位で切断。上半分が残存。
SK622付近	硬骨魚	タイ科	前鰓蓋骨	右	1	
SK622付近	硬骨魚	タイ科	主鰓蓋骨	左	1	関節部分が切断され、欠損。
SK622付近	硬骨魚	タイ型	尾椎		13	さまざまなサイズが混在。内、4点にCM有り。
SK622付近	硬骨魚	アンコウ科	椎骨		1	

研究 5 経済学研究科棟地点出土の動物遺体

遺構	綱	綱未満	部位	左右	数	備考
SK622付近	硬骨魚	カレイ科	尾椎		1	ムシガレイ標本近似。
SK622付近	硬骨魚	コチ科	肩帯	左	1	
SK622付近	硬骨魚	コチ科	歯骨	右	1	
SK622付近	硬骨魚	ニベ科	腹椎		1	シログチ標本近似。
SK622付近	硬骨魚	フグ科	前鰓蓋骨	左	1	
SK622付近	硬骨魚	ブリ属	舌顎骨	左	1	
SK622付近	硬骨魚	ホウボウ科	腹椎		1	
SK622付近	硬骨魚	ヒラメ	尾椎		2	ややサイズが異なる。
SK622付近	硬骨魚	未同定	腹椎		2	
SK622付近	硬骨魚	同定対象外	—		35	内臓骨、肋骨、鱗棘など様々。
SK622付近	硬骨魚	同定対象外	—		54	頭骨、内臓骨、肋骨、鱗棘など様々。
SK624	硬骨魚	フサカサゴ科	歯骨	左	1	
SK624	硬骨魚	マダイ	前頭骨		5	すべて、矢状方向に切断。 内、右側残存3点とともに大型で個体のものであるのに対し、左側残存2点とともに小型の個体のもので。
SK624	硬骨魚	マダイ	上後頭骨		2	内1点は直交方向に切断。後部が残存。 もう1点は残存状況が不良のため不明。
SK624	硬骨魚	マダイ亜科	前上顎骨	左	1	右とサイズが異なる。
SK624	硬骨魚	マダイ亜科	前上顎骨	右	1	左とサイズが異なる。
SK624	硬骨魚	タイ科	舌顎骨	左	1	
SK624	硬骨魚	タイ科	主鰓蓋骨	左	1	関節部分直上で切断。上半分が欠損。
SK624	硬骨魚	タイ科	主鰓蓋骨		2	ともに体部のみ。別個体。
SK624	硬骨魚	タイ型	腹椎		1	
SK624	硬骨魚	タイ型	尾椎		4	
SK624	硬骨魚	ブリ属	尾椎		1	
SK624	硬骨魚	アジ亜科	尾椎		1	マアジ型。
SK624	硬骨魚	ボラ科	尾椎		1	
SK624	硬骨魚	タイ型	腹椎		1	
SK624	硬骨魚	アジ亜科	稜鱗		1	ネコ遺体頭部の口の中の土より
SK624	硬骨魚	ニンシ科	尾椎		1	ネコ遺体頭部の口の中の土より
SK624	硬骨魚	キス属	前鰓蓋骨	左	1	
SK624	硬骨魚	キス属	前鰓蓋骨	右	1	
SK624	硬骨魚	コチ科	尾椎		1	CM有り。
SK624	硬骨魚	未同定	臼歯		1	ネコ遺体頭部の口の中の土より
SK624	硬骨魚	同定不可	椎骨		1	端部のみ残存。中型。
SK624	硬骨魚	同定対象外	尾椎		1	タイ型以外に近似。
SK624	硬骨魚	同定対象外	—		82	頭骨、内臓骨、肋骨、鱗棘など様々。
SK624	硬骨魚	同定対象外	鱗		○	ネコ遺体頭部の口の中の土より
SK624	硬骨魚	同定対象外	—		1	ネコ遺体頭部の口の中の土より
A-B間西側	硬骨魚	ヒラメ	前上顎骨	左	1	左右主上顎骨と同一個体。
A-B間西側	硬骨魚	ヒラメ	主上顎骨	左	1	右主上顎骨・左前上顎骨と同一個体。
A-B間西側	硬骨魚	ヒラメ	主上顎骨	右	1	左主上顎骨・左前上顎骨と同一個体。
A-B間西側	硬骨魚	ヒラメ	歯骨	左	1	右と同サイズ。
A-B間西側	硬骨魚	ヒラメ	歯骨	右	1	左と同サイズ。
A-B間西側	硬骨魚	同定対象外	—		6	破片資料。
東区表土	硬骨魚	クロダイ属	歯骨	右	1	
攪乱中	軟骨魚	サメ類(板鰓亜綱)	椎骨		1	
遺構外	硬骨魚	ホウボウ科	頭骨		2	
遺構外	硬骨魚	スズキ属	歯骨	左	1	右と同サイズ。
遺構外	硬骨魚	スズキ属	歯骨	右	1	左と同サイズ。
遺構外	硬骨魚	スズキ属	腹椎		1	
遺構外	硬骨魚	ブリ属	主鰓蓋骨	右	1	
遺構外	硬骨魚	ブリ属	舌顎骨	右	2	
遺構外	硬骨魚	ボラ科	主鰓蓋骨	右	1	
遺構外	硬骨魚	アマダイ属	尾椎	右	1	
遺構外	硬骨魚	マダイ	上後頭骨		1	前頭骨と同一個体。
遺構外	硬骨魚	マダイ	前頭骨		2	内1点が矢状方向に切断されて左側のみ残存。 もう1点は、ほぼ完形で、上後頭骨と同一個体。
遺構外	硬骨魚	マダイ	前頭骨		2	内1点、やや左寄り矢状方向に切断。右側残存。 もう1点は残存状況が不良のため不明。

遺構	綱	綱未満	部位	左右	数	備考
遺構外	硬骨魚	マダイ	前頭骨		5	すべて矢状方向に切断されている。 大型のもの2点は左側、中・小型のもの3点は右側がそれぞれ残存。
遺構外	硬骨魚	マダイ	上後頭骨		1	矢状方向に右側面を切断。右側面欠損。
遺構外	硬骨魚	マダイ	上後頭骨		3	大型3点、中型1点、小型1点。
遺構外	硬骨魚	マダイ亜科	主上顎骨	左	1	
遺構外	硬骨魚	マダイ亜科	主上顎骨	右	2	1点関節部分欠損。
遺構外	硬骨魚	マダイ亜科	前上顎骨	左	2	中型1点、小型1点。 なお、中型のほうは、右前上顎骨と同サイズ(同一個体?)
遺構外	硬骨魚	マダイ亜科	前上顎骨	右	1	中型1点。 左前上顎骨で中型のものと同サイズ(同一個体?)
遺構外	硬骨魚	マダイ亜科	歯骨	左	1	中型。右と同サイズ(同一個体?)
遺構外	硬骨魚	マダイ亜科	歯骨	右	1	中型。左と同サイズ(同一個体?)
遺構外	硬骨魚	タイ科	角骨	左	2	やや大型1点、中型1点。 なお、中型のほうは、右角骨と同サイズ(同一個体?)
遺構外	硬骨魚	タイ科	角骨	右	1	中型1点。後側関節部分が切断されている。 左角骨で中型のものと同サイズ(同一個体?)
遺構外	硬骨魚	タイ科	擬鎖骨	左	1	
遺構外	硬骨魚	タイ科	主鰓蓋骨	右	2	
遺構外	硬骨魚	タイ科	前鰓蓋骨	右	1	中位と上端に切断面を有する。上半分が残存。
遺構外	硬骨魚	タイ科	前鰓蓋骨	右	1	
遺構外	硬骨魚	タイ科	主鰓蓋骨	左	1	関節部分からやや後の箇所切断されている。 なお、前側(関節部分)が残存。
遺構外	硬骨魚	タイ科	主鰓蓋骨	右	2	ともに、関節部分からやや後の箇所切断されているが、 1点は前側(関節部分)、1点は後側は残存している。 なお、この2点は別個体である。
遺構外	硬骨魚	タイ型	腹椎		4	内2点は椎体径がほぼ同じことから同一個体の可能性有り。
遺構外	硬骨魚	タイ型	尾椎		9	1点、前端部に切断面を有するもの有り。 また、2点、椎体径がほぼ同じものがあり、同一個体である可能性あり。
遺構外	硬骨魚	フサカサゴ科	主上顎骨	右	1	
遺構外	硬骨魚	フサカサゴ科	歯骨	右	1	
遺構外	硬骨魚	フサカサゴ科	舌顎骨	左	1	
遺構外	硬骨魚	フサカサゴ科	角舌骨	右	1	
遺構外	硬骨魚	フサカサゴ科	主鰓蓋骨	右	1	
遺構外	硬骨魚	フサカサゴ科	前鰓蓋骨	右	1	
遺構外	硬骨魚	ヒラメ	前鰓蓋骨	左	1	
遺構外	硬骨魚	ヒラメ	尾椎		1	
遺構外	硬骨魚	カレイ科	第1血管間棘		1	
遺構外	硬骨魚	未同定	腹椎		1	
遺構外	硬骨魚	同定不可	角骨	左	1	スズキ属?
遺構外	硬骨魚	同定不可	前鰓蓋骨	—	1	
遺構外	硬骨魚	同定不可	腹椎		1	前左上方向から後側下方向へ切断されている。 前半部が残存。タイ型?
遺構外	硬骨魚	同定不可	椎骨		1	切断により、端部のみ残存。
遺構外	硬骨魚	同定対象外	鱗		1	
遺構外	硬骨魚	同定対象外	蝶形骨		1	ホウボウ科標本近似。
遺構外	硬骨魚	同定対象外	—		117	破片資料。主に肋骨、鱗棘など。
遺構外	硬骨魚	同定対象外	—		○	大型。破片資料。

39表 両生類遺体一覧[ピックアップ法採集資料]

遺構	分類群	部位	左右	数
SK622付近	カエル類	脛腓骨	左	1
SK622付近	カエル類	脛腓骨	右	1

40表 鳥類遺体一覧 [ピックアップ法採集資料]

遺構名	種名	部位	左右	残存部	数量
SX103	同定不能鳥類	四肢骨		sfr	1
SU107	カモ亜科	尺骨	左	d	1
SU286	カモ亜科	尺骨	右	w	1
SK469	ニワトリ	脛足根骨	右	p	1+
SK622	キジ/ヤマドリ	足根中足骨	左	w	1
カモ亜科	キジ科	大腿骨	右	p-s	1
		脛足根骨	左	s-d	1
		上腕骨	右	d	1
	カモ亜科	上腕骨	右	d	1
				s-d	1
				sfr	1
		尺骨	左	d	1
			右	s-d	2
		腕骨	右	w	1
			左	d	1
		腕骨	左	w	2
			右	s	1
		腕骨	左	d	1
		手根中手骨	右	w	3
		マガモ属	上腕骨	右	w
				p-s	1
	左		w	2	
	サギ科	頭骨			1
		上腕骨	右	sfr	1
			左	s-d	1
		腕骨	左	p	1
			左	sfr	1
		手根中手骨	右	d	1
			左	s-d	1
		腕骨	左	w	1
			左	s-d	1
		大腿骨	左	s-d	1
脛足根骨		右	d	1	
			p	2†	
	左	d	1		
足根中足骨	右	p	1		
	左	p	2†		
クイナ科	尺骨	左	w	1	
	脛足根骨	右	p-s	1	
同定不能鳥類	胸骨		sfr	1	
	椎骨		sfr	1	
	四肢骨		sfr	5	
SK624	カモ亜科	上腕骨	右	s	1
		腕骨	右	d	1
		手根中手骨	右	s	1
		大指基節骨	右	w	1
	サギ科	尺骨	右	d	1
			左	s	1
		腕骨	右	d	1
		手根中手骨	右	s-d	2
		大腿骨	右	p-s	1
		脛足根骨	右	d	1†
	クイナ科	腕骨	左	p	1†
			左	w	1
足根中足骨		左	d	1†	
		右	s-d	1	
同定不能鳥類	脛足根骨	右	w	1	
	四肢骨		sfr	1	
SK625	カモ亜科	上腕骨	右	s-d	1
遺構外	ニワトリ	脛足根骨	左	p-s	1
	キジ科	肩甲骨	左	p	1+
		上腕骨	左	p	1
		大腿骨	左	w	1
	ハクチョウ属	肩甲骨	右	p	1
	ガン族	上腕骨	右	s	1
	マガモ属	上腕骨	右	w	2
				p	1
		左	w	1	
	カモ亜科	胸骨			1
		鳥口骨	左	p	1

遺構名	種名	部位	左右	残存部	数量	
遺構外	カモ亜科	上腕骨	右	d	1	
				s-d	1	
				s	1	
				sfr	1	
			左	d	2	
				p	1	
				s	1	
				w	2	
			尺骨	右	d	2
					s-d	2
				左	w	2
					s	1
		腕骨		右	s-d	1
				左	d	1
		手根中手骨	右	w	4	
				s	1	
			左	w	2	
				p	1	
		大腿骨	左	w	1	
			脛足根骨	右	d	1†
		足根中足骨	右	s	1	
				w	1	
			左	sfr	1	
						1
		サギ科	下顎骨	左		1
			鳥口骨	右	s-d	1
				左	w	1†
			上腕骨	右	p-s	2
			尺骨	右	s-d	1
					p-s	1
			左	w	2	
				p-s	1	
			腕骨	左	s	1
					p	1
			腕骨	左	p-s	1
					s	4
		腕骨	左	sfr	1	
		手根中手骨	左	s-d	2	
		大腿骨	右	w	1	
			脛足根骨	右	d	1†
		足根中足骨	右	w	2	
p-s	1					
左	s		1			
	d		1			
足根中足骨	右	p-s	1†			
	左	d	1			
ツル科	腕骨	左	s	1		
	大腿骨	左	p	1		
クイナ科	尺骨	右	w	1		
	手根中手骨	右	w	1		
	脛足根骨	左	d	1		
	足根中足骨	左	w	2		
スズメ目	上腕骨	左	w	1		
種不明鳥類	頭骨			4		
同定不能鳥類	肋骨			1		
	趾骨			3		
	頭骨		sfr	1		
同定不能	胸骨		sfr	2		
	四肢骨		sfr	11		
同定不能	四肢骨		sfr	3†		
				5		
総計					193	

w: 完存、p: 近位端、d: 遠位端(鳥口骨では肩端)、s: 骨体部、fr: 破片、†: 若鳥、+: 骨髄骨あり。

41表 哺乳類遺体一覧 [ピックアップ法採集資料]

遺構	分類群	部位	左右	数		観察所見	同一性
				破片数	MNI		
SE225	イヌ	上腕骨	左	1	1	近位から骨幹中位までの一部が欠損。	A
SE225	イヌ	橈骨	左	1		ほぼ完存。	A
SE225	イヌ	尺骨	左	1		肘頭部分と遠位端部がそれぞれ欠損。	A
SE225	イヌ	手根骨	—	1			A
SE225	イヌ	中手骨	左	4		第2~5.すべて完存。	A
SE225	イヌ	基節骨	左	3		第3~5.すべて完存。	A
SU286	イヌ	下顎骨	左	1	1	下顎体のみ残存。右下顎骨と同一個体。幼。	B
SU286	イヌ	下顎骨	右	1		犬歯歯槽までの下顎体前部が欠損。左下顎骨と同一個体。幼。(生後2~5週)	B
SK386	ニホンジカ	中節骨		1	1		
SD449-pit3	同定対象外	—	—	1	1	長骨骨幹部分。中型哺乳類。焼骨。	
SD606-西側	同定対象外	歯	—	○	1	エナメル質部分の破片。1つ分?ニホンシカ?	
SK622	ネコ	肩甲骨	左	1	1		C
SK622	ネコ	腰椎		1			C
SK622	ネコ	仙骨		1		左側仙骨翼と椎頭部分の下半分のみ残存。	C
SK622	ネコ	寛骨	左	1		寛骨臼恥骨側と恥骨が欠損。	C
SK622	ネコ	寛骨	右	1		恥骨が欠損。	C
SK622	ネコ	大腿骨	左	1		骨幹近位の一部が欠損。	C
SK622	ネコ	大腿骨	右	1		遠位端欠損。近位正面外側と骨幹中央正面に刀傷が数条見られる。	C
SK622	ネコ	脛骨	左	1		完形。	C
SK622	ネコ	腓骨	左	1		遠位端及びその付近の骨幹のみ残存	C
SK622	ネコ	腓骨	右	1		完形	C
SK622	ネコ	中足骨	左	4		第2~5.すべて完存。	C
SK622	ネコ	中足骨	右	4		第2~5.すべて完存。	C
SK622	ネコ	踵骨	右	1		完形	C
SK622	同定対象外	肋骨	—	1		骨幹部分。中型哺乳類のもの。ネコ?	C?
SK624	ネコ	頭蓋骨		1	1	ほぼ完形。左右下顎骨は同一個体。	E
SK624	ネコ	下顎骨	左	1		完形。頭蓋骨と右下顎骨は同一個体。	E
SK624	ネコ	下顎骨	右	1		完形。頭蓋骨と左下顎骨は同一個体。	E
A-B間西側	ウマ	下顎第2後臼歯	右	1	1	遊離歯	
遺構外	ネズミ類	寛骨	右	1	1		
遺構外	ニホンジカ	軸椎	—	1	1		
A面攪乱	ウサギ類	大腿骨	右	1	1	骨頭及び遠位端部が欠損。	
東側攪乱	同定対象外	肋骨	—	1	1	大型家畜(ウシorウマ)。近位に鋸によるものと推定される切断面を有する。	
東側攪乱	同定対象外	—	—	1	1	破片資料。	
合計				44	12		

42表 ネコ頭蓋骨・下顎骨に関する歯式及びサイズ計測値 [SK624]

頭蓋骨

◎歯式及び歯冠計測表		◎頭蓋骨計測表											
	I	C			P				M	計測箇所		計測値 (mm)	
		1	2	3	2	3	4	7		8			
左	歯式	×	×	3	4	5	6	7	8	1	最大頭蓋長	pr-i	94.48
	近遠心径			2.3	4.9	2.1	6.5	11.1	3.7	2	基底全長	pr-	85.04
	頬舌径			2.0	3.6	1.4	3.3	5.6	2.2	3	頬骨弓幅	zy-zy	67.37
右	歯式	×	×	3	4	5	6	7	8	5	頭蓋幅(I)	eu-eu	43.73
	近遠心径			2.2	5.1	2.0	6.7	10.5	3.6	8	最小前頭幅	ft-ft	34.11
	頬舌径			2.0	3.4	1.4	3.4	5.8	2.1	9	前頭骨頬骨突起端幅	ect-ect	40+
備考	歯槽全体に歯周による退縮が認められる。左右ともに第4前臼歯と後臼歯の間が顕著。頭蓋骨は頬骨突起部分が僅かに欠損している他は、ほぼ完存。									14	吻幅(犬歯部)	canine	23.32
										17	硬口蓋長	pr-sta	35.81
										18	硬口蓋最大幅		37.5

下顎骨

◎歯式及び歯冠計測表		◎下顎骨計測表													
	I	C			P				M	左右	計測箇所		計測値 (mm)		
		1	2	3	3	4	7								
左	歯式	×	×	×	4	5	6	7		左	1	下顎骨全長(2)	id-mid	61.23	
	近遠心径				4.8	5.6	7.4	8.0			5	臼歯列長		19.87	
	頬舌心径				3.5	2.5	2.8	3.4			8	下顎枝高		26.80	
	備考	頬側の第1切歯から後臼歯後側までの歯槽部分に歯周症による退縮が認められる。特に、第4前臼歯と後臼歯の間が顕著で、後臼歯の歯根の露出が著しい。舌側にも同様の場所に歯周症による退縮が認められるが、顕著ではない。第4前臼歯の後端と後臼歯の前端重なっている。なお、第4前臼歯の後端が頬側に後臼歯の前端が舌側にそれぞれ歯列よりそれている。咬筋窩が極めて深い。									9	下顎体高(I:Mの後)		11.22	
											10	下顎体高(3:P3の前)		9.85	
											—	下顎体厚(Mの前)		5.66	
									—	咬筋窩深(下顎枝幅位)		4.15			
右	歯式	×	×	×	4	5	6	7		右	1	下顎骨全長(2)	id-mid	61.50	
	近遠心径				4.3	5.7	7.4	8.2			5	臼歯列長		19.89	
	頬舌心径				3.5	2.5	2.9	3.3			8	下顎枝高		27.96	
	備考	左側下顎骨とはほぼ同じ傾向である。									9	下顎体高(I:Mの後)		11.37	
											10	下顎体高(3:P3の前)		9.82	
											—	下顎体厚(Mの前)		5.74	
									—	咬筋窩深(下顎枝幅位)		4.38			

計測値:mm
 アラビア数字(例:4):永久歯あり,ローマ数字(小文字,例:iv):乳歯あり
 ×:歯脱落、歯槽は開放されたまま、●:歯脱落の上、歯槽が閉鎖、/:顎体自体が欠損
 △:歯はあるが、欠損し詳細不明、下線を付してある数字(例:4):歯槽内に埋伏しているもの

43表 ネコ四肢骨のサイズ計測値 [SK622]

部位	左右	計測箇所	計測値 (mm)
肩甲骨	左	近位端最大幅(関節窩幅)	GLP 13.6
	右	腸骨最小幅	10.9
寛骨	左	腸骨厚(最小幅位)	5.0
		寛骨臼最大径	LA 10.9
	右	腸骨最小幅	4.8
		腸骨厚(最小幅位)	11.1
大腿骨	左	全長	GL 110.1
		近位端最大幅	Bp 20.7
		遠位端最大幅	Bd 19.1
		中央横径	9.0
	右	中央矢状径	8.2
		近位端最大幅	Bp 20.9
		中央横径	9.0
		中央矢状径	8.2
脛骨	左	全長	GL 111.0
		近位端最大幅	Bp 19.7
		近位端最大矢状径	Dp 19.5
	右	遠位端最大幅	Bd 14.4
		遠位端最大矢状径	Dd 9.6
		中央横径	7.7
		中央矢状径	8.9

44表 イヌ下顎骨に関する歯式及びサイズ計測値 [SU286]

◎歯式及び歯冠計測表

左 右	計測項目等	乳歯			永久歯			DC	DM			計測箇所	計測値 (mm)	サイズ分類 (長谷部1952)		
		1	2	3	1	2	3		1	2	3					
左	歯式	×	×	×	×	×	iv	1	2	3	vi	vii	viii	24	下顎体高(2:DM3の中央)	12.5
左	近遠心径						4.32	1	2	3	5.1	6.6	11.0	25	下顎体高(3:DM2とDM3の間)	10.8
左	頬舌心径(M1:近)						2.73	1	2	3	2.3	2.9	4.5	26	下顎体厚(DM3の中央)	6.0
右	歯式	/	/	/	/	/	/	1	2	3	vi	vii	viii	19	下顎骨全長(1:ld-goc)	64±
右	近遠心径							1	2	3	5.1	6.6	10.9	20	下顎骨全長(2:ld-mid)	65±
右	頬舌心径(M1:近)							1	2	3	2.3	3.0	4.5	21	下顎枝高	22.1
右	備考	乳歯はすべて萌出が完了している。 また、第1後臼歯部分歯槽が開放しており、その歯槽内に形成途中の永久歯の一部が見られる。 以上の萌出状況から、本資料は生後2週以上5週未満のものと推定される。												22	下顎枝幅	16.3
														23	下顎体高(1:M1歯槽の後)	14.7
														24	下顎体高(2:DM3の中央)	12.4
														25	下顎体高(3:DM2とDM3の間)	10.5
														26	下顎体厚(DM3の中央)	6.2
														27	咬筋窩深(下顎枝幅位)	2.3

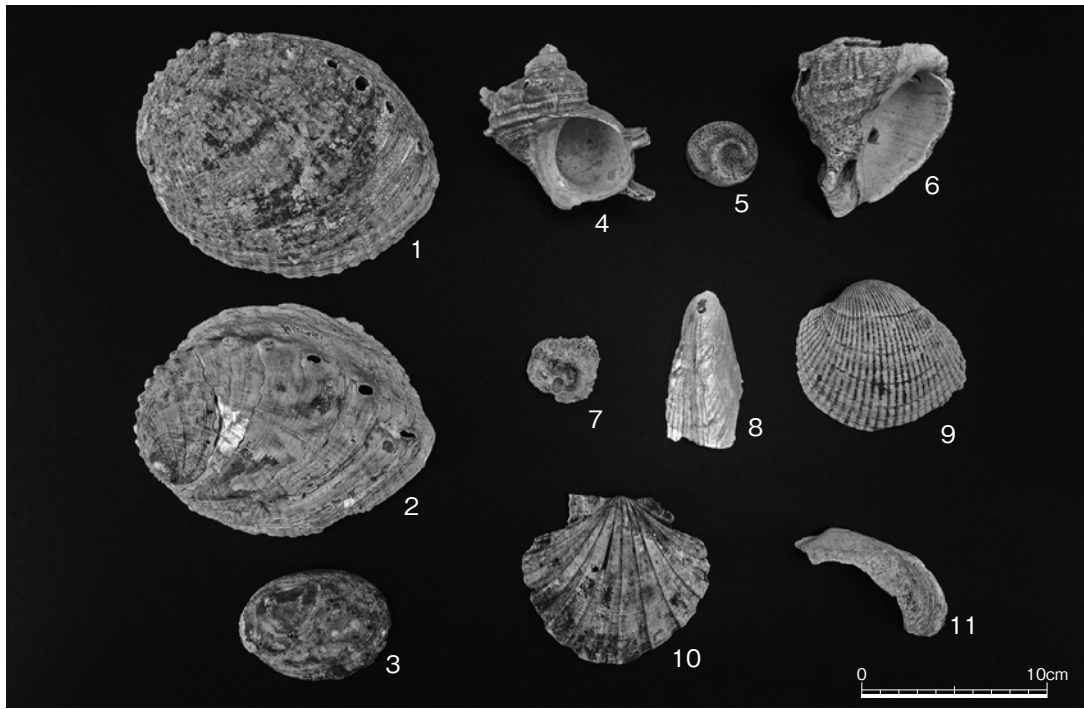
◎下顎骨計測表

左 右	計測箇所	計測値 (mm)	サイズ分類 (長谷部1952)
左	下顎体高(2:DM3の中央)	12.5	
左	下顎体高(3:DM2とDM3の間)	10.8	
左	下顎体厚(DM3の中央)	6.0	
右	下顎骨全長(1:ld-goc)	64±	15 小級
右	下顎骨全長(2:ld-mid)	65±	
右	下顎枝高	22.1	
右	下顎枝幅	16.3	
右	下顎体高(1:M1歯槽の後)	14.7	
右	下顎体高(2:DM3の中央)	12.4	
右	下顎体高(3:DM2とDM3の間)	10.5	
右	下顎体厚(DM3の中央)	6.2	
右	咬筋窩深(下顎枝幅位)	2.3	

アラビア数字(例:4)永久歯ありローマ数字(小文字:例:iv)乳歯あり
 ×歯脱落、歯槽は開放されたまま ●歯脱落の上、歯槽が閉鎖、/顎体自体が欠損
 △歯はあるが、欠損し詳細不明、下線を付してある数字(例:4):歯槽内に埋伏しているもの

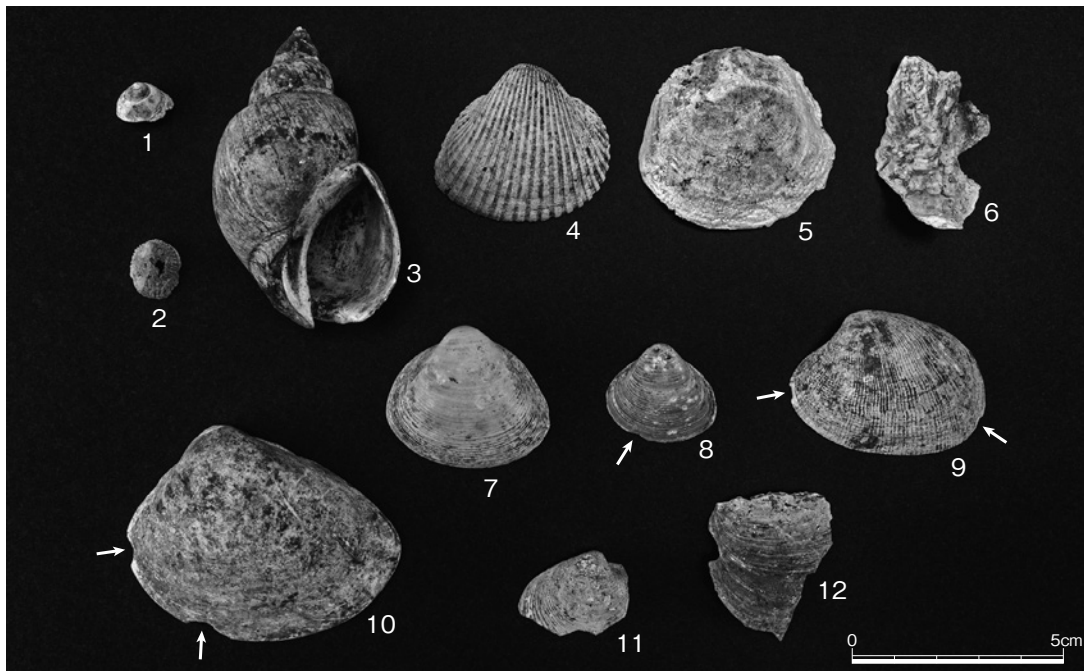
45表 イヌ四肢骨のサイズ計測値 [SE225]

部位	左 右	計測箇所	計測値 (mm)	推定体高 (cm)	サイズ分類 (長谷部1952)	現生
上腕骨	左	遠位端最大幅	Bd	27.0		
		全長	GL	131.2	41.49	中級
		近位端最大幅	Bp	15.7		小型
橈骨	左	近位端最大矢状径	Dp	11.5		現生日本犬種の体高 柴35cm~40cm(小型)
		遠位端最大幅	Bd	18.9		紀州46cm~52cm(中型)
		遠位端最大矢状径	Dd	11.4		北海道46cm~56cm(中型)
		中央幅径		10.6		甲斐46cm~58cm(中型)
		中央矢状径		7.5		
尺骨	左	切痕中央矢状径		11.4		



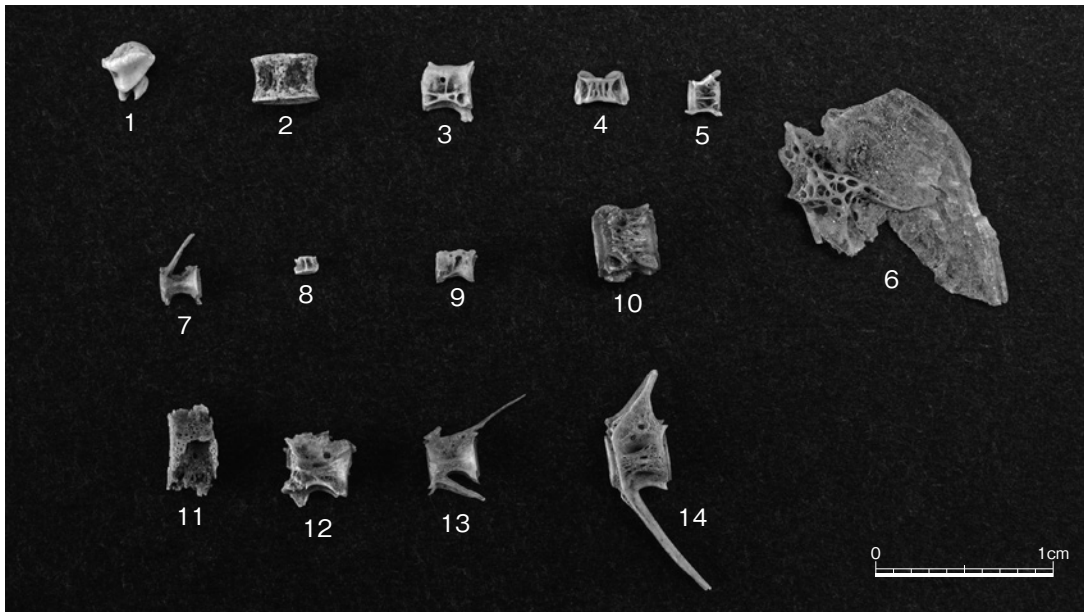
PL1 出土貝類遺体 (1)

1. メガイアワビ 2. マダカアワビ 3. クロアワビ 4・5. サザエ (4: 殻, 5: 蓋)
 6. アカニシ 7. オオヘビガイ 8. タイラギ(右) 9. アカガイ(左)
 10. イタヤガイ(右)※杓子 11. ミルクイ(左)
 1・2・4~6・8・10・11: SK642 3: SK643 7・9: SK641



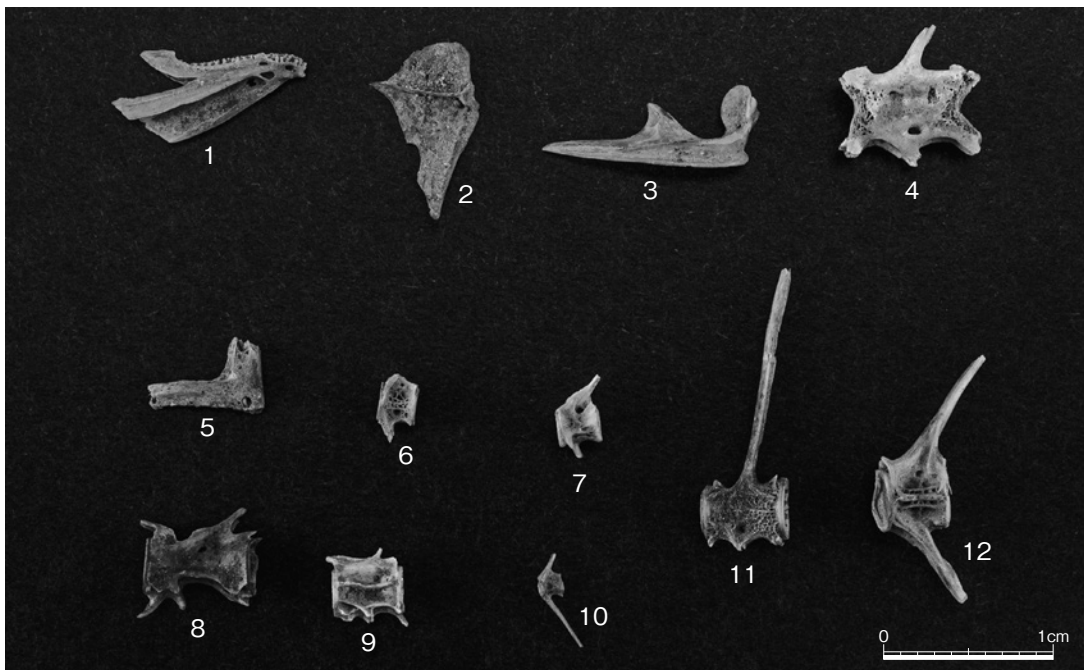
PL2 出土貝類遺体 (2)

1. オオタニシ 2. キクスズメ 3. バイ 4. サルボウガイ(右) 5. ナミマガシワ(左)
 6. マガキ(左) 7. シオフキガイ(左) 8. ヤマトシジミ(左) 9. アサリ(左)
 10. ハマグリ(左) 11. オキシジミ(右) 12. オオノガイ(破片)
 1・4・7・9: SK641 2・3・5・6・8・10: SK642 11・12: SK425
 →: 剥き身に伴う破損部分。



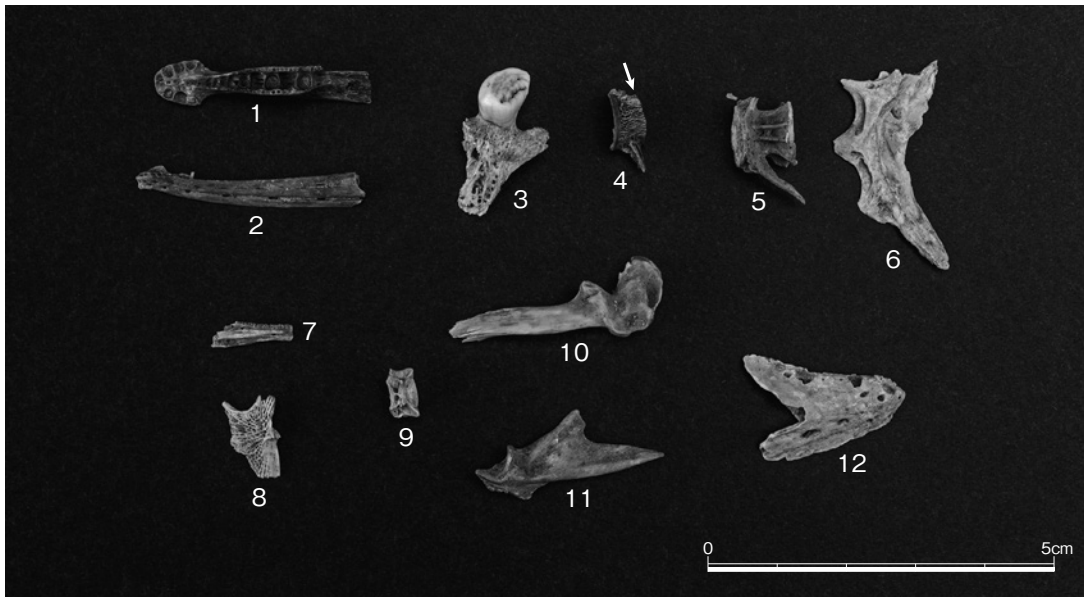
PL.3 出土魚類遺体(1)

- 1・2. アカエイ (1: 歯, 2: 椎骨) 3. ウナギ(尾椎) 4・5. ニシン科 (4: 第1椎骨, 5: 尾椎)
 6. コノシロ(主鰓蓋骨・右) 7. カタクチイワシ(尾椎) 8. ウルメイワシ(腹椎)
 9. ドジョウ科(腹椎) 10. アユ(尾椎) 11. サケ科(尾椎) 12. サンマ(腹椎)
 13. サヨリ科(尾椎) 14. アイナメ属(尾椎)
 1~5・7~14: SK110 6: SK641



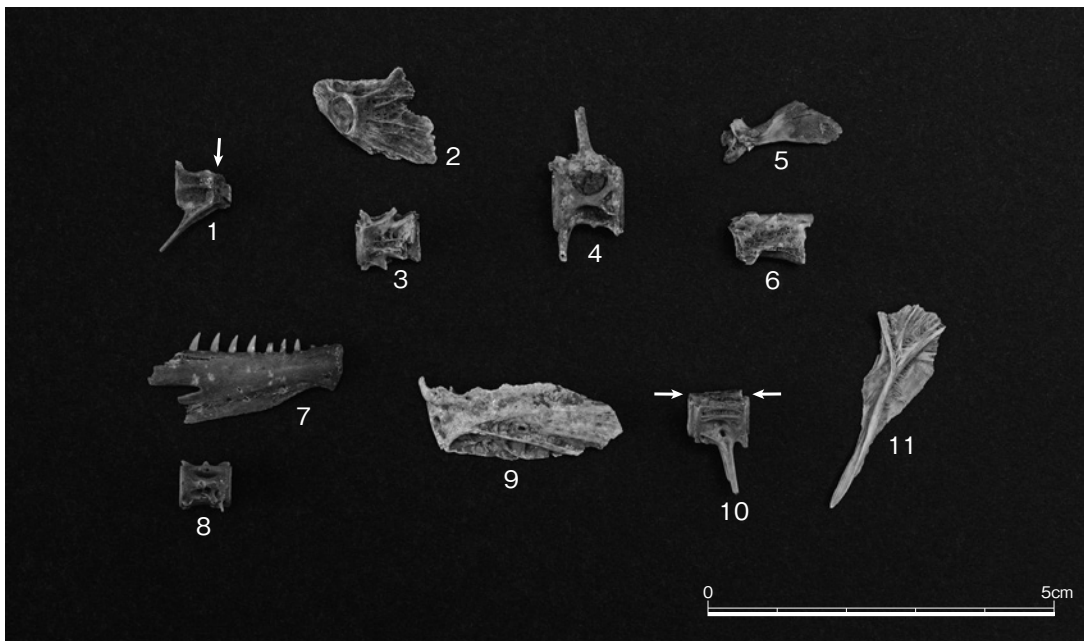
PL.4 出土魚類遺体(2)

- 1・2. キス属 (1: 歯骨・右, 2: 主鰓蓋骨・左)
 3・4. アジ亜科 (3: 前上顎骨・右, 4: 尾椎 [マアジ] ※椎体側面に切断面有)
 5. キダイ属(前上顎骨・右), 6. ウミタナゴ科(尾椎), 7. ハゼ科(腹椎), 8. カマス属(腹椎),
 9. タチウオ科(尾椎), 10. ウシノシタ科(尾椎), 11. イボダイ(尾椎),
 12. カレイ科(尾椎 [イシガレイ標本近似])
 1~7・9・10・12: SK110 8: SK641 11: SK642



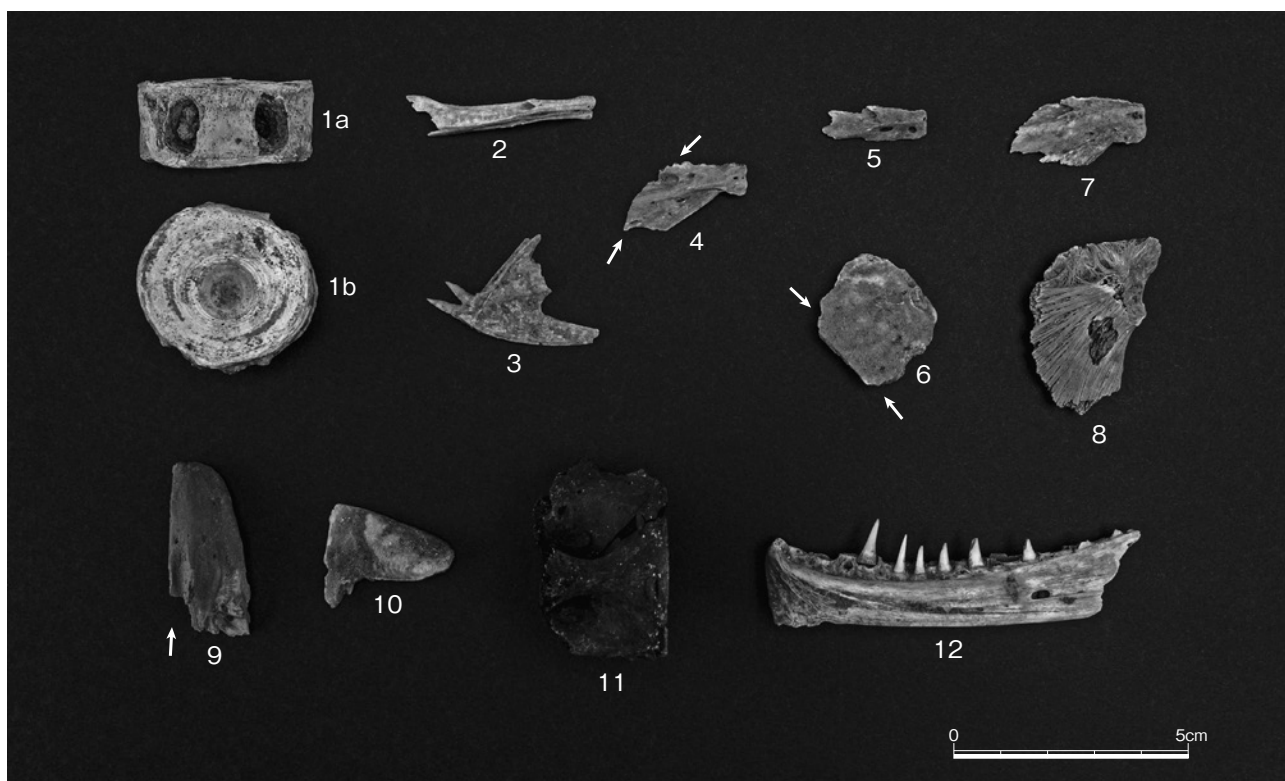
PL.5 出土魚類遺体 (3)

- 1・2. ハモ属 (1: 上顎骨, 2: 歯骨・左) 3. コイ (咽頭骨・左)
 4. サケ属 (腹椎※椎体に切断面あり) 5. タラ科 (尾椎) 6. フサカサゴ科 (前鰓蓋骨・右)
 7～9. ホウボウ科 (7: 歯骨・右, 8: 主鰓蓋骨・右, 9: 第1椎骨 [カナガシラ])
 10・11. アマダイ属 (10: 主上顎骨・右, 11: 角骨・右), 12. クロダイ属 (歯骨・右)
 1: SK641 2: SK642 3・5・7～11: SK110 6: 遺構外 12: 東区表土
 →: 切断箇所



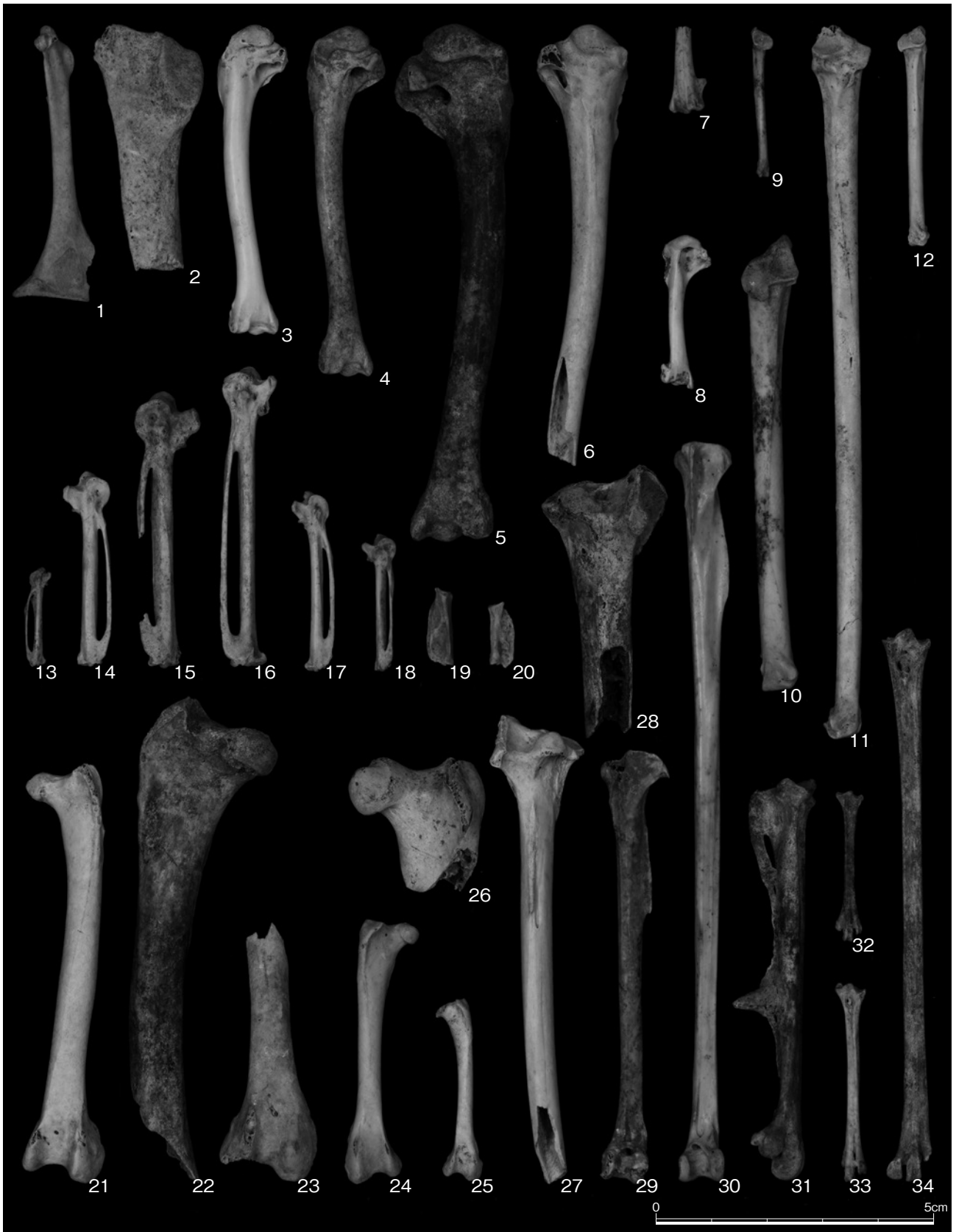
PL.6 出土魚類遺体 (4)

1. ニベ科 (尾椎※椎体に切断面有) 2・3. ボラ科 (2: 主鰓蓋骨・右, 3: 尾椎)
 4. カツオ (尾椎) 5・6. サバ属 (5: 主上顎骨・左, 6: 腹椎) 7・8. サワラ属 (7: 歯骨・右, 8: 尾椎)
 9・10. ヒラメ (9: 歯骨・左, 10: 尾椎※椎体に切断面あり) 11. フグ科 (前鰓蓋骨・左)
 1～10: SK110, 11: SK622 付近 →: 切断箇所



PL.7 出土魚類遺体 (5)

1. サメ類 (椎骨 a: 側面観, b: 正面観) 2・3. コチ科 (2: 歯骨・右, 3: 前鰓蓋骨・右)
 4. ハタ科 (歯骨・右) 5・6. スズキ属 (5: 歯骨・右, 6: 主鰓蓋骨・左 [スズキ])
 7・8. プリ属 (7: 歯骨・右, 8: 主鰓蓋骨・左) 9. マダイ (前頭骨) 10. チダイ (上後頭骨)
 11. マグロ属 (尾椎) 12. アンコウ科 (歯骨・左)
 1: 攪乱, 2~10・12:SK110, 11:SK107 →: 切断箇所

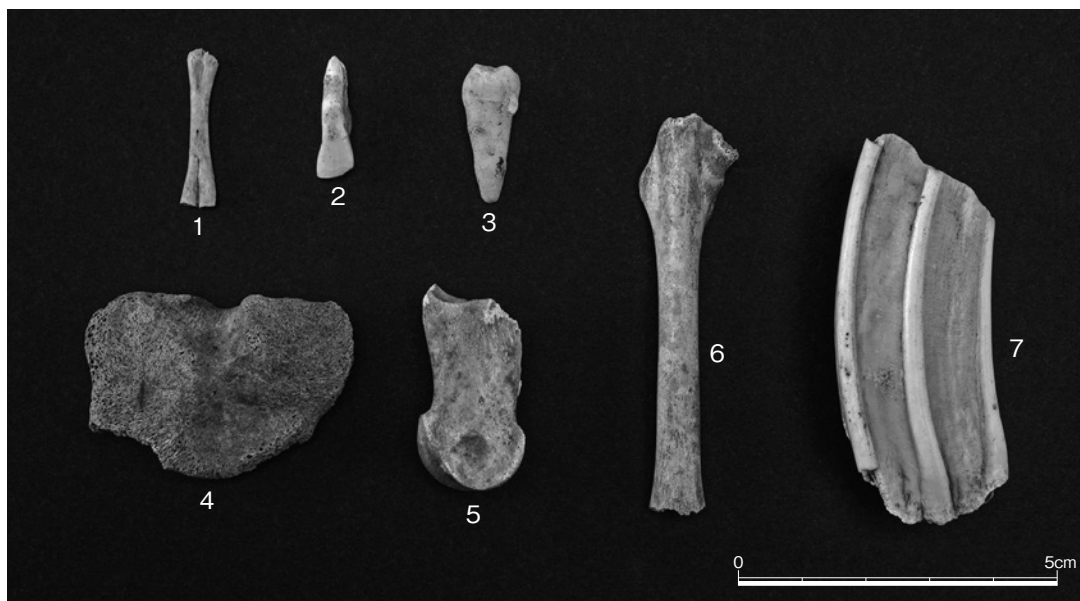


PL.8 出土鳥類遺体

1,6,11,16,30,34 サギ科、2 ハクチョウ属、3-5 マガモ属、7,18,20,33 チドリ目、8 スズメ目、9,13,32 ウズラ、10,14,15,19,24,25,29 カモ亜科、12,17 クイナ科、21,22 キジ科、23 ガン族、26 ツル科、27,28 ニワトリ、31 キジ/ヤマドリ。

1 鳥口骨、2 肩甲骨、3-8 上腕骨、9-12 尺骨、13-18 手根中手骨、19,20 大指基節骨、21-26 大腿骨、27-30 脛足根骨、31-34 足根中足骨。

2,5-7,10,12,14,17-19,22,24,28 は右。他は左。1,16,34 は若鳥。28 は骨髓骨あり。



PL.9 出土両生類・哺乳類遺体

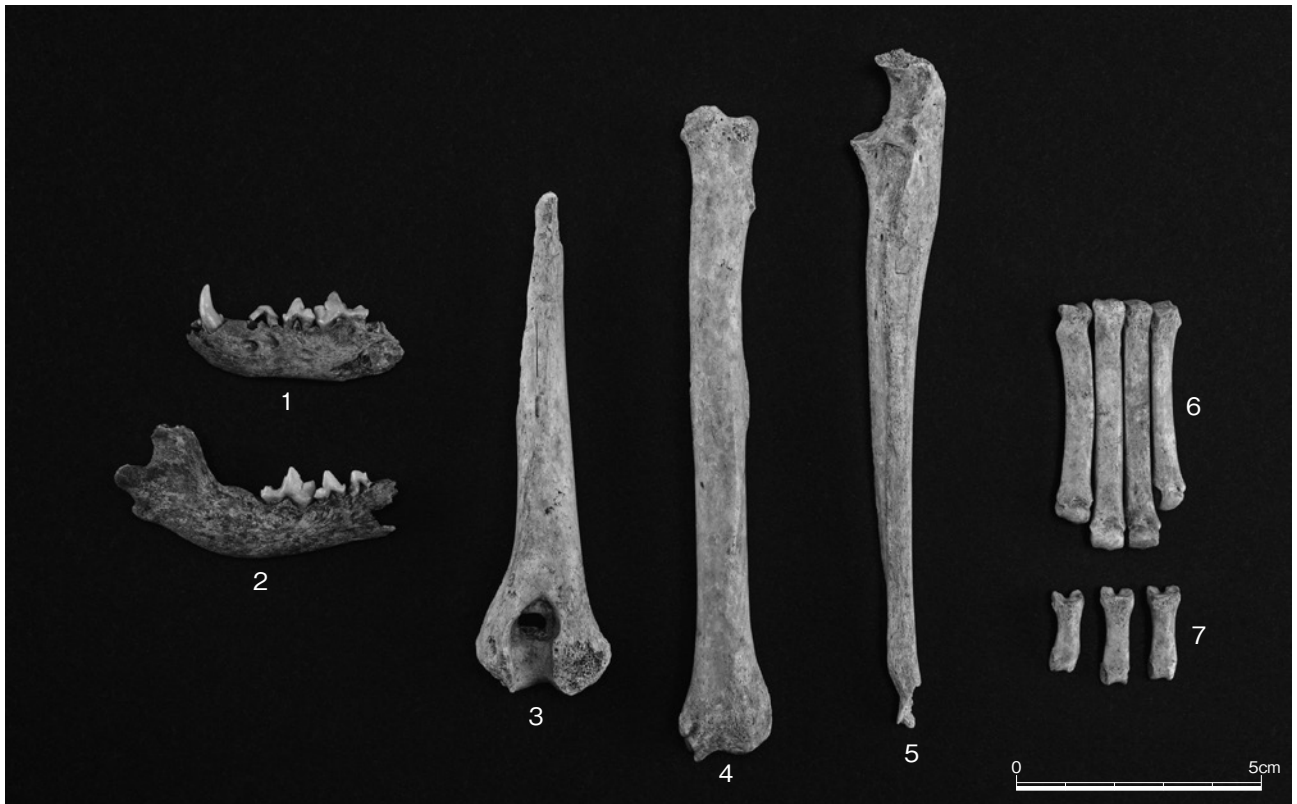
1. カエル目(脛腓骨) 2・3. ヒト(2:下顎第2切歯・右, 3:上顎第3大白歯・左)
 4. イノシシ(脛骨近位端部・右※未癒合) 5. シカ(中節骨) 6. ウサギ科(大腿骨・右)
 7. ウマ(下顎第2後臼歯・右)

1:SK622 付近, 2・4:SK110, 3:SK642, 5:SK386, 6:A 面攪乱, 7:A-B 西側



PL.10 出土ネコ遺体

1. 頭蓋骨 2・3. 下顎骨(2:左, 3:右) 4. 寛骨・右
 5. 大腿骨・右※近位及び中位骨幹に数条の刀傷がある。
 6. 腓骨・右 7. 踵骨・右 8. 中足骨(第2～5)・右
 1～3.SK624 4～8.SK622



PL.11 出土イヌ遺体
1・2. 下顎骨 (1:左・2:右※幼獣) 3.上腕骨・左 4. 橈骨・左 5. 尺骨・左
6. 中手骨 (第2～5)・左 7. 基節骨

報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくほんごうこうないのいせき けいざいがくけんきゅうかとうちてん
書名	東京大学本郷構内の遺跡 経済学研究科棟地点
副書名	
巻次	
シリーズ名	東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書
シリーズ番号	18
編著者名	堀内秀樹（編著）、追川吉生（編著）、小林照子（編）、大貫浩子、阿部常樹、石井龍太、パリノサーヴェイ株式会社
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室
所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 TEL：03-5452-5103
発行年月日	令和5年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	所在地	遺跡番号	° ' "	° ' "			
とうきょうだいがくほんごうこうないのいせき 東京大学本郷構内の遺跡 ほんごうだいいせきぐん (本郷台遺跡群) けいざいがくけんきゅうかとうちてん 経済学研究科棟地点	とうきょうと ぶんきょうく 東京都 文京区 ほんごう 本郷 7ちようめ 3ばん 1ごう 7丁目3番1号	13105	47	35° 42' 37"	139° 45' 41"	1999/5/24 ～ 1999/11/2	1,026㎡	経済学 研究科棟 新営に伴う 事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東京大学本郷 構内の遺跡 経済学研究科棟地点	包蔵地、 集落、 大名屋敷	近世 近代	近世～近代 建物址1基、塀列1基、 溝40基、井戸3基、 炉跡1基、土坑333基、 ピット60基、 地下室6基、 性格不明遺構5基	近世～近代 陶磁器、土器、瓦、 金属製品、石製品、 ガラス製品、木製 品、動物遺体 合計186箱	文政10年に入興した 徳川将軍の姫溶姫の 御守殿脇に建てられた 御膳所とそれに伴う 建築遺構が確認され た。

要 約	<p>近世加賀藩本郷邸の発掘調査。本郷邸開発当初（寛永初期）から近代初頭までの遺構、遺物が出土。江戸時代中期以降御殿空間内に位置している。前田家に入興した徳川綱吉の養女松姫御守殿の一部、徳川家斉の娘溶姫御殿の脇の御膳所が確認された。慶応4年の火災により被災。遺構の多くもこの火災で廃絶された。</p> <p>遺構は、17世紀後半から御殿周辺部の緑地域に位置していたことで多くの植栽痕が確認される。文政10年に造営された溶姫御殿に伴う御膳所が検出され、石段と間知石で構築された食物貯蔵庫と思われる地下室が確認される。</p> <p>遺物は、多数の金箔瓦、溶姫御殿膳所に伴う「御膳所」、「御末」、三葉葵の軒丸瓦などが出土する。動物遺体は、江戸城大奥に近似した魚種が出土する。</p>
-----	---

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 18

東京大学本郷構内の遺跡

経済学研究科棟地点

2023年3月31日発行

編集・発行 東京大学埋蔵文化財調査室
東京都目黒区駒場4-6-1
<http://www.aru.u-tokyo.ac.jp>

印刷 能登印刷株式会社
